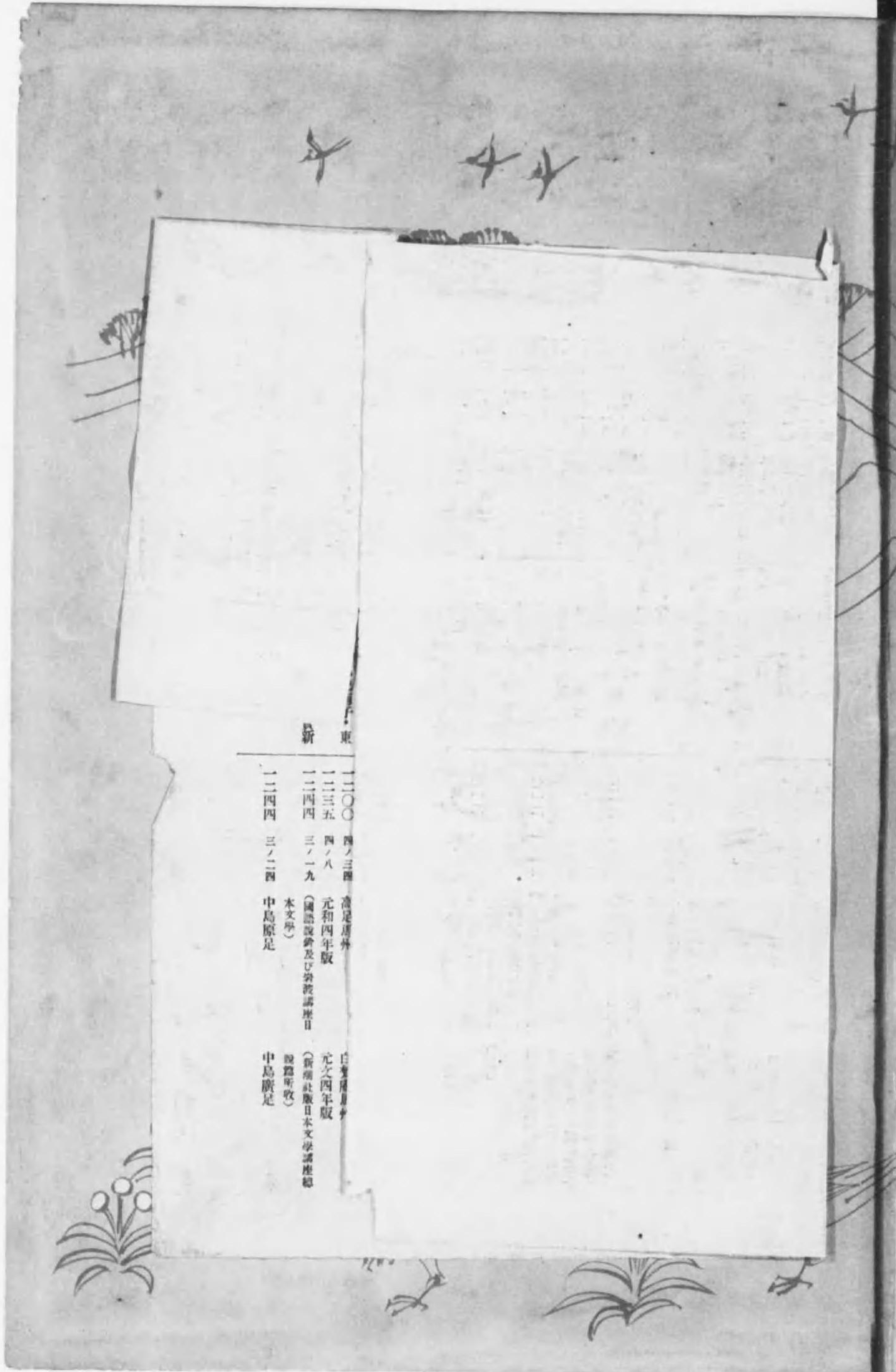
R910. 33-F63ウ
1200500767856
10.33
63

始

←



東

新

一二〇〇　四ノ三四　満足度外　白髪度外

一二三五　四ノ八　元和四年版　元文四年版

一二四四　三ノ一九　（國語説話及び學校講座II　（新潮社版日本文學講座總

本文學）　說篇所收）

一二四四　三ノ二四　中島廣足　中島廣足

第三巻増補訂正表追加

頁	段・行	誤	正
八	三ノ一〇	会津に生れ	會津に生れ
三一	一ノ一六	「大山道中栗毛後驥馬」	「大山道中栗毛後驥足」
七七	三ノ一一	「教育會」	「教育界」
九七	一ノ四	明治十七年十一月	明治十七年一月

頁	段・行	誤	正
九七	一ノ五	太政官布達	太政官達
九七	一ノ七	告示、	(削除)、
九七	一ノ一五	文庫課	圖書課
一〇三	二ノ八	「政理叢談」	「政理叢談」
一一八	三ノ九	大自在衛子寶貨	大自在衛子寶貨
一三三	一ノ一三	文明二年(二一三〇)	天明二年(二四四二)
一四八	三ノ一九	南洪	南谿
二五一	四ノ一八	讀史備考	讀史備要
二六二	一ノ一三	「春日流」	「春日流」
二七六	四ノ一	【號】芝蘭	【號】鈴屋・芝蘭
二七八	別冊歸轉下段左	[illegible]	[illegible]
二九五	三ノ八	の書店	の書名
二九五	四ノ四	洪澄集に	洪澄集の
三〇四	二ノ一七	八年に第六輯、安永二年に第七編	八年第十六輯、安永二年第十七編
三〇四	三ノ一	年に第八編	年第十八編
三一五	一ノ二九	拾子集	拾子集
三二五	二ノ二四	口番	警番
三四九	一ノ三	「元杢網」	「元の木網」
三五三	二ノ二〇	「今古栄雅抄」	「古今栄雅抄」
三五五	一ノ八	「明神不動北山櫻」	「鳴神不動北山櫻」
三六三	一ノ二二	増山金八	村岡幸次
四一三	四ノ八	永德元年	永應元年
四二一	四ノ一一	「香華」	「子音」
四二七	二ノ七	「和歌」	「短歌」
四四九	三ノ六	autonomie	Autonomie
四五三	一ノ二五	「藝術論」	「美的同感」
四五三	一ノ二七	Rausch	Rausch
五三〇	二ノ二四	「緑斎續百話」	「緑斎百餘話」
五三一	一ノ二七	世一谷人	卅一谷人
五三一	二ノ二三	新井白石	白石常人
五三五	三ノ一二	「装束會」	「装束色會」
五三七	二ノ三	「東日」の	「東日」に
五四九	一ノ三二	「今川忠臣蔵」	「今川忠臣傳」
五六八	註	ふつかよ	ふつかえ
五七〇	三ノ三二	源信・惠心	源信(惠心)
五七七	二ノ一一	武道鎌倉日記	武道眞砂日記
五八五	三ノ二九	【通稱】ノ前ニ増補	【姓】藤原
五九三	三ノ一三	縣右衛江戸紫清	縣右衛江戸紫清
六一二	一ノ二五	「小柳」	「古柳」
六四二	二ノ二二	「平家部」	「平家一部」
六四四	別冊歸轉(三)下段右	([illegible]大辞典)	([illegible]大辞典)
六五七	四ノ三〇	【號】東蒙	【別號】秩褁紀南子・東蒙
六五九	三ノ二二	二十六年十二月、「交齢倶樂部」	二十八年二月、「讀賣新聞」
七〇四	三ノ三二	「怪異談牡丹燈籠」	「怪談牡丹燈籠」
七〇四	歸轉說明	([illegible])	(削除)

頁	段・行	誤	正
七一二	一ノ二二	七。養子文六の鼓の師匠宮地源右衛門が稽古を終つて戻つた跡へ	(削除)
七一二	一ノ一六	約するを源右衛門に立ち聞きされる。	約するを折柄別室で酒肴の饗應を受けて居つた養子文六の鼓の師匠源右衛門に聞かれる。
七一三	一ノ二	安永七年(二四三八)二月十八日江戸にて歿す。享年五十八。	歿年は天明元年秋か。
七五〇	別冊歸轉上段右	千草庵木斎述	千草庵木因著
七七一	二ノ二八	松の落葉 歌謡「落葉集」を見よ。	(削除)
七七四	四ノ二二	「人柱」	「きよひめ」
七九六	別冊歸轉(二)下段左	米窓滿天	米窓滿元
八〇七	三ノ一一	「萬葉目安」	「萬葉見安」
八二八	三ノ一九	長和長年	名和長年
八四六	三ノ九	その朝妻子が	その妻領子が
八五五	二ノ一一	三のじ	三のし
八六九	二ノ二五	同二十五年	同二十四年
八七一	三ノ一七	現はれるのみ	俤はれるのみ
八八〇	三ノ八	天保十四年	天保十年
九三一	三ノ三五	有馬私南	有馬時雨
九六九	三ノ二五	安政十二年(二五二五)	文政十二年(二四八九)
九八九	二ノ一四	「夢幻境」	「夢現境」
一〇一八	二ノ六	「教観儀式」	「百観儀式」
一〇二二	三ノ一一	(後に中山竹十郎)	(後に山中竹十郎)
一〇三二	三ノ三〇	享年七十五。	享年七十九。
一〇三七	二ノ六	十六年一月	十六年四月
一〇三七	二ノ八	元祿元年	文祿元年
一〇四五	三ノ一一	上らんとした時	上らんした時
一〇五二	一ノ三一	熊野物語	逢屋物語
一〇五三	四ノ二九	「百合草若大臣」	「百合若大臣」
一〇八二	一ノ三	「制度總體手記」(新井白石全集六)等があるが、	「制度手記」(新井白石全集六)等があるが、總體
一一一四	三ノ三二	三諱	三緯
一一七四	四ノ六	連句連歌	聯句連歌
一一八五	二ノ一二	天保の末年に歿した。	天保十四年十一月十日に歿した。
一一八五	二ノ一三	享年不詳	享年七十四
一一八九	一ノ二九	左行文字	右行文字
一一九九	註	ろする	ろすい
一二〇〇	四ノ三四	高足馬州	白梵庵馬州
一二三五	四ノ八	元和四年版	元文四年版
一二四四	三ノ一九	(國語國文及び[illegible]講座目本文學)	(新潮社版日本文學講座[illegible]年版)
一二四四	三ノ二四	中島廣足	中島廣足

日本文學大辭典

第三卷

文學博士
藤村作編

新潮社版

R910.33
F63
(3)

R910.33
F63
(3)

顧問

早稻田大學名譽教授 文學博士 坪內逍遙

東京帝國大學名譽教授 文學博士 上田萬年

國立圖書館 昭 23. 9. 8 和 購入

挿畫圖版目次

圖書（一）……六八
圖書（二）……六八
馬琴自筆八犬傳稿本……一四四
日本畫（一）……二〇六
日本畫（二）……二〇六
日本畫（三）……二〇六
日本畫（四）……二〇六
日本書紀（一）……二一八
日本書紀（二）……二一八
人形芝居の各樣式……二三六
人形の頭……二三六
人形の構造及び遣ひ方……二三六
三人遣人形の機構……二三六
人情本……二四〇
能樂（一）……二五四
能樂（二）……二五四
能裝束……二六〇
能面……二六四
本居宣長肖像及び筆蹟……二七八
馬琴肖像及び筆蹟……三三六
芭蕉肖像及び筆蹟……三四四
平假名諸體及び字源表（一）……四九四
平假名諸體及び字源表（二）……四九四
平假名諸體及び字源表（三）……四九四
平假名諸體及び字源表（四）……四九四
舞樂面……五三六
舞樂裝束……五三六
蕪村肖像及び筆蹟……五五六
古河默阿彌肖像及び筆蹟……五九二
平家物語（一）……六四四
平家物語（二）……六四四
平家物語（三）……六四四
平治物語……六五二
方言（一）（大日本方言區劃圖）……六七二
方言（二）（が行鼻音ŋG分布圖）……六七二
方言（三）（「拂った」「拂うた」等の分布圖）……六七二
保元物語……六七四
梵字（一）……七二二
梵字（二）……七二二
梵字（三）……七二二
枕草子古寫本……七四〇

枕草紙繪卷……七五二
賀茂眞淵肖像及び筆蹟……七七八
萬葉假名表……七九四
桂本萬葉集……七九六
萬葉集（一）……七九六
萬葉集（二）……七九六
紫式部日記繪卷……九二〇
役者評判記……九八四
謠本……一〇五六
柳亭種彦肖像及び筆蹟……一一三八
ローマ字（一）……一一八八
ローマ字（二）……一一八八
ローマ字（三）……一一八八
ローマ字（四）……一一八八
和漢朗詠集……一二三四

——挿畫圖版目次了——

執筆者氏名追加（五十音順）

支那文學……東北帝國大學教授　青木正兒
明治大正時代文學……東京日日新聞編輯局　石川六郎
說話文學……東京帝國大學史料編纂所　後藤丹治
明治大正時代文學……小牧近江
歌謠……國民精神文化研究所　志田延義
淨瑠璃……東京帝國大學副手　鶴見誠
物語……千代田女子專門學校教授　永積安明

裝幀　吉村忠夫

日本文學大辭典　第三卷

……があり、長子手島和庵、次子上河淇水（各別項）また心學者として名がある。【閲歴】堵庵は商家の出で、その家柄がよく、父は養嶽先生と稱して學を好み、子堵庵の教育には大に力を注いだ。享保二十年十月、十八歳にして梅巖の門に入つて心學に志したが、三年を經た元文二年十一月には、心中大に得るところがあり、師より將來を囑望された。延享元年、二十九の年に梅巖は歿し、梅巖の創設した發會も輟滅に歸さうとしてゐたが、寶曆五年二月以降、堵庵は梅巖門下の人々の請によつて毎朝「中庸」を講じ、明和元年二月以後には、毎夜「中庸」と「徒然草」とを講じたが、この頃には堵庵の名聲は高く擧つて、聽講者も極めて多かつた。よつて同年四月には、講席を三條御幸町に設け、期日を定めて一定の書を講じ、更にその翌二年には、居を朝倉街に移して、そこを五樂舍と名づけ、爾後益々講說と著述とを以て民衆の教化に努めた。梅巖によつて創められた心學（別項）は、堵庵によつて社會を動かす大きな力となつた。【著書】石田梅巖先生事蹟一卷○前訓一卷（別項）○會計三卷○我律稿三卷（別項）○要草一卷○ありべかゝり二卷○爲學玉箒六卷（別項）○會友大旨一卷（別項）○目なし用心抄一卷○女前訓評種○日前一卷○商人夜話草一卷○知心辨疑一卷○眼ざまし一卷○座談隨筆一卷○町人身體直し一卷○新倉新話一卷○明德和讚一卷○女冥加訓一卷○新編要一卷○新實語教育書一卷○洙泗要旨一卷○答問雜話一卷○大極圖說解一卷○學庸解一卷○論孟解一卷○徒然草解一卷○至誠一貫圖一卷○新倉語錄一卷○東郭先生集一卷。【參考】石門心學の研究（白石正邦）○手島堵庵傳

手島堵庵

（白石・豊）

獨逸語 ドイツゴ 「インド・ヨーロッパ語族」を見よ。

ドイツ文學の影響【鷗外以前】ドイツ文學が始めて日本に紹介されたのは、佛のジュウル・ヴェルヌの「新說八十日世界一周」（川島忠之助譯）、英のバルリア・リットンの「歐洲奇事花柳春話」（丹羽純一郎譯）、蘭のジョス・コリデヌの「新未來記」（近藤眞琴譯）等の、いづれも明治十一年であるのに、後れること約四年、同十五年に、シルレルの「ウォルヘルム・テル」が、「哲烈自由譚」前篇の名で、松渭漁史なる譯者によつて發表されたのが始めてであらう。その以後、森鷗外が「國民之友」で、S・S・Sのサインの下に一黨を糾合し、更に「しがらみ草紙」を創刊した明治二十二年まで、出版界に現はれた獨逸文學を擧げると左の如くである。

獨逸新譯 狐の裁判 ゲーテ作 井上勤譯（明治十七年）
得保自由の一箭 シルレル作 中川霞城譯（明治十九年）
回天之弦聲 シルレル作（明治二十年）
妖怪船 ハウフ作（明治二十一年）
春季瑪利御殺後 シルレル作（明治二十一年）
旅路の空 ハウフ作（明治二十一年）
（「現代日本文學大年表」に據る）

この間に、グリムの御伽噺も、何人かによつて譯出されてゐるが、その中の何人が、原獨文から直接に譯述したかは解らない。しかして明治二十二年三月から讀賣新聞に掲げられた森鷗外・三木竹二譯のホフマンの「玉を懷いて罪あり」は、英・獨文學よりもやゝ後れてゐた。なほこの翻譯には、原作者ホフマンの名を擧げてゐなかつた。【森鷗外と獨文學】明治二十二年、「國民之友」誌上に、S・S・Sなる署名の下に現はれた「於母影」（別項）は、その韻調と清新さにおいて、當時の文壇の驚異であつた。十七篇中十四篇までが鷗外のゲーテ、ハウフ等の作詩の翻譯であつた。同二十二年十月、鷗外は弟三木竹二等と「しがらみ草紙」（別項）を創刊し、鷗外漁史・三木竹二共譯の名で、レッシングの Emilia Galotti の譯、脚本「折薔薇」を連載した。又明治二十三年には、クライストの「悪因縁」を「國民之友」に九回に分載、アドルフ・ステルンの「うきよの波」を「國民之友」に六回に分載、ハックレンデルの「ふた夜」を讀賣新聞に連載した。クライストの「地震」もこの年であらう。またオシップ・シュビンの「うもれ木」（別項）は、この年から「しがらみ草紙」に連載され、明治二十五年四月の第三十一號で完結してゐる。一方に、明治二十三年は、鷗外が處女作「舞姫」（別項）を「國民之友」に發表した年で、それが一月に、第二の創作「うたかたの記」（別項）がその八月に、第三作の「文づかひ」（明治二十

四年)(別項)と共に、いづれも彼のドイツ留學の記念である。この三作は、單にドイツの異國的な風調を、いみじく端正優婉な、磨き拔かれた古典的修辭で表現したのみでなく、ドイツ文學の精髓や、ケラーの氣品を思はせる最高度の傑作として、當時の文壇を驚かしたものであつた。この頃から鷗外以外の人々からも、ドイツ文學の詩歌小說の飜譯が諸方に現はれるやうになつた。內田遠湖(周平)のアルントの「雪中松柏愈青々」、中川霞城のシルレルの「自由之一箭」、綠堂野史・小金井きみ子共譯のハイゼの「新學士」、一鄕生のチョッケの「何のその」、大江小波(巖谷漣)のリュツケルトの「響へ草」等、霞城・遠湖・きみ子・小波等はいづれも漢文に譯つたもので、鷗外のドイツ文學の移植は、大體にドイツ文學の價値をわが國に認めしめるやうになつた。なほ當時の文壇で、原語から直接ドイツ文學を味はつたのは、中川霞城・巖谷漣、評論家石橋忍月程度であり、鷗外のためにみじめなほど叩きつけられた大阪の批評家山田芝廼園も、ドイツ文學に多少の知識があつたといはれる。鷗外は飜譯と創作の外に、美術論及び美學に觸手を伸べた。同二十四年七月の「讀戯論」は、當時の文壇批評家であつた石橋忍月(友吉)の、「醜論」に對する反駁で、國會新聞に載つた。また鷗外が美學(審美學)に殘した功績も忘られてはならない。印象のみを批判の唯一の手段としてゐた當時の混沌たる批評界に、鷗外はハルトマン、ショーペンハウエル等を中心にする美學の理論を武器として與へたのである。その一つの現象が、有名な逍遙との理想、沒理想の論爭である。逍遙は形而上學の上から沒理想を主張し、鷗外はこれに對して敢然アイデアリズムの立場を擁護して論駁し、ハルトマンの美學を根源として「パルメニデス」を論じ、レッシング、ショーペンハウエル、シェークスピアを祖述して、鋭鋒當るべからざるものがあつた。鷗外が飜譯したドイツの小說及び戯曲家は、コピッシュ、フレンツェル、リリエンクロオン、シュラアフ、デーメル、ヒッペル、カイザア、ハウプトマン、ズウデルマン、その他古今に亙るが、明治四十年前後からは、更に何人も敢て試みなかつたオーストリーの作家、戯曲家醫シュニッツレル、ホフマンシュタール、ウェデキント、モルナアに及んだ。この墺匈文學の新しい紹介は、雜誌「昴」に據る若い戯曲家達、吉井勇・木下杢太郎・長田秀雄・萬造寺齊等に、偉大な刺戟を與へた。殊にハウプトマンの「寂しき人々」等は、名譯として幾度か脚光を浴びた。一幕物は、多く三木竹二の「歌舞伎」及び「昴」に掲載され、後に「一幕物」「續一幕物」「新一幕物」として出版された。大正期は、一時、戯曲熱の高潮を見たが、鷗外のこれ等の譯述と指導にその功を歸すべきものが最も多いのである。なほ「妄人妄語」は、十九世紀末期の世界文學の新潮を報告風に書いてゐるが、やはりドイツ文學を中心とし、批判の精確と知識の豐富において、時代に敎へる暗示に富んでゐた。而して鷗外の最も高い功績は、その圓熟し切つた筆を以て、世界最大の詩人であるゲーテを飜譯紹介して、その巨匠としての最後の大作を完成したことである。第一部は大正二年一月、第二部は同年三月、富山房から出版せられた。殊に「ファウスト」は、原作の神韻を傳へたもので、その第一部は大正二年三月、上山草人等の近代劇協會によつて帝國劇場に上演せられた。次いで鷗外はクノー・フィシャー(Kuno Fischer)の「ファウスト」を研究して「ファウスト考」を書き、ビールショウスキー(Bielschowski)の「ゲーテ傳」を最も適宜なるものとして、これを中心に「ファウスト作者傳」を書いた。「ファウスト考」は同年十一月十七日、富山房から出版せられた。又ゲーテの初期の作品ゲェッツ(Götz)の飜譯は、大正三年「三田文學」に發表せられた。

【樗牛・竹風とニーチェ】次に、文學といふよりも、思想家としてのニーチェズムを日本に紹介し、その個人主義・本能主義を一代の文壇に氾濫せしめたものは、評論家高山樗牛(別項)である。「美的生活を論ず」(別項)を明治三十四年の「太陽」に、「文明批評家としての文學者」(別項)を同八月號に發表した彼は、或は詩的情熱を以てギリシャ的自然を謳歌し、形式文明の危機に對抗して個人主義・天才主義の解放を叫び、反自然的な形式道德を排擊して、美的生活の福音を主張する等、ニーチェの洗禮を受けてからの彼のポレミックは、最も華々しい活躍を示した。それだけ樗牛の美的本能生活と超人論の主張は、文壇のみならず、廣く敎育界・思想界の波瀾を呼び起した。まづ起つたのが坪內博士で、彼は讀賣新聞に「馬骨人言」(別項)なる諷刺的論文を掲げて、眞向から樗牛を攻擊し、樗牛もまたそれに應酬した。樗牛を支持する者は、姉崎嘲風・登張竹風(各別項)であり、殊に竹風は「帝國文學」に據つて早稻田派と健鬪したが、それ等の事情もあつて、同三十九年十月、高等師範の敎職を免ぜられた。竹風は、後、大正十年にニーチェの「ツアラッストラ」を「如是經」として發表したが、その外、鏡花と共譯の名でハウプトマンの「沈鐘」をやまと新聞に掲げた。樗牛・竹風によるニーチェの超道德論が當時の傳統道德に與へた刺戟は極めて大きく、それはその時代に勃興しつつあつた個人覺醒の意識に一大口火を點ずる結果になつた。與謝野晶子の詩歌や、小栗風葉の小說は、明かにその影響を受けたもので、殊に風葉の「天才」(別項)は、ニーチェズムを具象した男性を主人公としてゐる。なほ後に生田長江は、ニーチェ全集全十卷を譯出した。また樗牛は、チークラーの「十九世紀文明史」によつて、感化を獲たといはれるが、一方、「月夜の美感に就いて」(明治三十二年「太陽」)等も、ドイツの美學者から暗示されたものが多いやうに思ふ。樗牛はまた詩人ハイネに私淑してゐた。革命詩人としてではなく、病に臥して再び起てない感傷詩人としてのハイネに共鳴したもののやうに思はれる。さう言へば、ハイネの詩は、尾上柴舟その他に飜譯され、ニコラス・レナウと共に、多感な青年期の人々に廣く愛誦されたロマンチシズムの明治年代があつた。又後に生田春月にハイネ詩集・ゲーテ詩集の飜譯があり、かなり廣く讀まれた。

【獨逸文學移植の種々相】なほ、シャミッソの「影の無い人」が雜誌「青年文」かに飜譯され、一部の注意をひいたことがあるが、その以前に、饗庭篁村の小說集「むら竹」(別項)の一篇「影法子」は、この作物の飜案であつた。明治の作家としてドイツ文學の影響を受けた一人は田山花袋である。花袋は英譯を通じて殊にズウデルマンの「猫橋」を愛讀し、「重右衞門の最後」その他には、ズウデルマンが大きく影を投げてゐる。その外、戯曲家山本有三には、ヘッベルから影響されるものが多いと云はれ、

木下杢太郎等は、オースタリーの戯曲を追蹤してゐた。また阿部次郎の「三太郎日記」を中心として、殊にアカデミックな集團に於けるゲーテの感化力は、最も博大であるらしい。鷗外について、ドイツ文學の移植の高い業績は、小山內薰に寄せられるであらう。彼が明治末期から大正末期に亙り、演劇熱の向上に寄與した熱情は涙ぐましいものがあり、ドイツの古典的な戯曲と共に、表現派の新作も、彼によつて逸早く移植され、上演された。島村抱月・楠山正雄・島村民藏等の早稻田派は、ヘッベル、ズウデルマン等の戯曲を紹介し、松井須磨子が演出の魁だつたズウデルマンの「マグダ」が、我が國の良風美俗を破壞する反抗劇だとして、警視廳から一時その上演を禁止された如きも、我が國思想界及び劇界の一轉機を示すものといはれよう。島村民藏は、ヘッベル式の戯曲を作つた。明治四十四・五年頃、齋藤南江堂からドラマのセリーズ出版が企てられた。「フラウ・ゾルゲ」の飜譯者小池秋草・林久男等は、シラー、ゲーテ、レッシング等の戯曲を多く紹介した。ヘッベルもまた、この頃から旺んに研究され出した。文學博士青木昌吉等は、シャミッソの「ペーター・シュレミール」を飜譯し、大正十二年には、「ゲーテとクライスト」なる純學的研究を發表した。この頃から學界にドイツ文學の篤學な研究が次第に旺盛となり、「現代ドイツ戯曲」「ゲーテ研究」(山岸光宣)、「ズウデルマン研究」(小牧健夫)、「ドイツ文學研究」「ヘッベル」(吹田順助)、「ゲーテ」(茅野蕭々)、「ファウスト研究」(木村謹治)、「ドイツ文學研究」等相次いで現はれた。明治期以後今日まで通じて、ドイツ文學の記述・紹介・飜譯に努めた學徒としては、藤代素人・成瀨無極・山岸光宣・青木昌吉・新關良三・櫻井天壇・小牧健夫・茅野蕭々・片山孤村・小池堅治・三浦吉兵衞・橋本青雨・舟木重信・小宮豐隆・林久男・川口浩・植田保之助等があり、近代文學の紹介もしくは飜譯には秦豐吉がある。秦のルマルクの「西部戰線異狀無し」の飜譯は、その發行部數に於て出版界の奇蹟であつた。秦はドイツ文學と共に、オースタリー文學にも造詣が深い。

【現代のドイツ文學の影響】世界大戰期の表現主義から、新即物主義へ、昨今はそれも早い頃に崩壞して、ヒットラー的ファシズム文學の胎生すら、滿更有り得ない事實でないと考へられつつある。表現主義から戰爭物の氾濫、それの後の新即物主義の作物も、大抵、型通りにわが國に移植された。小池秋草(堅治)の「表現主義文學の研究」、北村喜八の「表現主義の戯曲」は、いづれも表現主義の展開及び作物、思想傾向の大様を知るに便宜な著述であり、ゲーリンク、ウンルー、カイゼル、トルレル、ハーゼンクレーフェル、ブロンネン、ヘッベル等の戯曲は、多くか少くか、わが國に飜譯され、殊に小山內薰の手を經て、築地小劇場に上場された。カイゼル、トルレルは、當時わが國で最も多く飜譯され、讀まれた戯曲家であり、戯曲であつた。次に戰爭文學の颶風的な復活を見た一九二九年からは、ルードウィヒ・レンの「戰爭」、エルンスト・グレーザーの「一九〇二年組」が、ルマルクの「西部戰線異狀無し」と共に飜譯された。外にトマス・マンなどの飜譯もあり、一部の新しい作家に若干の影響を與へてゐる。

【日本文學の紹介者】日本文學を紹介したドイツ人としては、ハンブルグ大學教授フローレンツ(Florenz)の名を忘れてはならない。彼は帝國大學に教鞭を執る傍ら、わが神話(古事記)・萬葉・俳句・戯曲(寺小屋)等を飜譯した。青木昌吉・登張竹風等は、その學生であつたし、謠曲を飜譯したグンデルト(Gundert)も、その門下生である。ドイツ本國では、クラブント(Klabund)があり、日本文學を熱心に紹介してゐる。

【結語】以上は、日本文學におけるドイツ文學の交涉である。ドイツ文學の精神・傾向・樣式が、どれほど深く、また廣く、近代日本文學の臨床たり得たかは、少くともロシヤや、フランスのそれが殘した足跡のやうに、明確に判別され得ないのは殘念である。文學も、國民性としての條件を飛び越し得ない限り、一國民の他國文學の愛好は、國民性同士の近似性の程度と比例するであらう。自然、そこに日本の國民性と、ドイツのそれとの、文化及び國民性の本質の差等比較が課題にもなるわけであるが、ドイツ文學の創作が、佛蘭のそれよりも、わが國における飜譯率において少く、またドイツ文壇の趨勢も、佛蘭のそれより、より少く注意されるといふ思想的偏向はあるもののやうに見える。〔千葉〕

侗庵筆記（とうあんひつき）

隨筆　二卷【著者】古賀煜【刊行】嘉永五年【解說】漢文の隨筆で、上卷に熊稱調虎豹稱駒以下五十四則、下卷に飛龍志以下五十五則を收めてあつて、和漢の故事及び見聞の逸話等を集めたもの。嘉永五年古賀增(著者の男)、同年齋藤謙(拙堂)の兩序、同年櫛田駿の跋がある。

【著者小傳】古賀煜、字は季曄、通稱小太郎、精里の季子で、その後を承け、幕府の儒員であり、昌平黌の教授であつた。弘化四年(二五〇七)歿、享年六十。〔和田〕

宕陰（たういん）

儒者【姓名】鹽谷世弘、字は毅侯、甲藏と稱した。【別號】九里香園【生歿】文化六年四月十七日、江戶愛宕山下に生れ、慶應三年八月二十八日歿した。享年五十九。【閱歷】幼き時父桃蹊より句讀を受け、十六の時昌平黌に入つて松崎慊堂に師事し、二十一歲の時關西に遊び、當時の碩學と交遊し、歸つて濱松侯水野越前守に仕へて顧問に備はり、後幕府の儒官となつた。大正四年十一月正五位を贈られた。【著書】丙丁炯戒錄二卷○籌海私議一卷○隔鞾論一卷○大統歌一卷○鞭駘錄二卷○昭代記十卷○宕陰存稿六卷(別項)。【批評】宕陰は少年のころ、賴山陽の門にゐたことがあるので、その感化に由るのであらうか、史學と文章とに長じてゐた。當時我が國の歐陽修なりとの評があつたくらゐで、安井息軒(別項)と相並んで、山陽・一齋以後の名家である。〔佐久〕

唐音（たういん）「漢字」を見よ。

唐韻（たういん）「韻」「韻學」を見よ。

道因（だういん）

歌人【姓名】藤原敦賴。出家して道因と稱す。阿因とも書く。【閱歷・人物】閱歷は明かでないが官位は右馬助、從五位上まで上つた。「長明無名抄」によると、道に志が深く、七八十に及ぶまで、秀歌をよませ給へと徒步にて住吉神社に月詣でをした。又或る歌合に淸輔が判者で道因の歌を負としたが、わざと判者の方に向ひ、淚を流して歎いたので、人々はかほどの熱心家は見たことがない

高藤―定方―朝賴―爲輔―┬―惟孝―惟經
　　　　　　　　　　　　└―宣孝―大貳三位
―惟經―敦輔―清孝―敦賴

とて驚いた。九十ばかりになつて耳も遠くなつたので、歌合の座では特に講師の傍近く座を占めて耳を傾けて聞いた。「千載集」が撰せられた時は殁後であつたが、志にめでて俊成は十八首まで加へたので、俊成の夢に現はれ、涙を流して喜びをいつたので、更に二首を加へて二十首としたといふ。嘗て俊頼の歌が流行歌となつたので、永縁(別項)は琵琶法師に賂して我が歌を歌はせた。道因はこれを聞いて羨しく思ひ、盲人を集め、何物をも與へないで歌へ〳〵と責めたが、時の人はこれを聞いて笑つたなどとある。その歌は主觀が強く詠歎的な所がある。【作品】勅撰集に入る歌は千載二十首、新古今四、新勅撰三、以下凡そ十四首、合計凡そ四十一首。月詣集二首がある。永曆元年(一一六〇)の清輔朝臣家歌合より、治承三年(一一七九)の右大臣家歌合に至るまで數度の歌合の作者で、「顯昭陳狀」によれば「萬葉集」の訓釋を試みたこと、顯昭の「萬葉集時代難事」によれば、勝命と共に「萬葉集」成立年代に就いて、顯昭の所說に反對したことがわかる。

【參考】長明無名抄○百人一首一夕話○尊卑分脈 (西下)

宕陰存稿

たういんそんかう　漢文集　十三卷【著者】鹽谷宕陰【刊行】明治三年、禮樂射御書數の六冊として版行した。【解說】收むる所凡て百二十一篇。諸體の文を列擧し、更に補遺數篇を添へてある。宕陰の文章は直ちに胸臆を寫して虛構粉飾に陷らず、叙事議論並び長じ、文辭暢達で、措屈聱牙の弊がない。昭和六年、內田周平氏が存稿に載せてない所の文章八十八篇、詩賦七十四首を輯錄し、「宕陰賸稿」と名づけ、三卷として刊行した。(佐久)

棠陰比事物語

たういんひじものがたり　假名草子　五卷【作者】未詳【名稱】「棠陰比事物語」、又「棠陰比事」。棠陰は、周の大保召公が、文王の政を布くために、鄉邑を巡行した時、棠樹の下で公事訴訟を裁判したが、極めて公平無私であるといふので、人民が歎んでその德を頌し、甘棠の詩を作つて謳つたといふ故事に因んだ語である。比事とは原著者四明桂が、これを著はすに當り、和氏の「疑獄集」、鄭氏の「折獄龜鑑」等を參照した意味で、公平な裁判錄といふ義。【諸本】本書の假名文は、慶安二年安田十兵衞板の「棠陰比事物語」の外、寬文初年頃の輸入本、元祿五年刊の挿畫のない「たういんひし」及び延寶頃の江戶版に「異國公事物語」と改題した輸入本がある。【解說】本書は、宋の四明桂の「棠陰比事」の翻譯である。周末より唐宋時代に於ける公事訴訟の明斷錄で、卷之一から四まで每卷三十題、卷之五に二十四題、通計百四十四題を集錄されてをる。大體事實に準據したものであることは言ふまでもないが、古代の事例には小說的のものも少くない。例へば、黃覇叱姒(卷之二)は、前漢穎川の大守黃覇が、婦人兄弟の女房が一人の孩兒を互に我が子であると爭奪する公事を裁決する事件で、ソロモンの話と同じであり、佐史誹裴(卷之二)は、唐の則天武后の時、江琛といふ者が、裴光を陷れんとしてそのかいた書物の文字を切り拔いて謀叛の回文を僞造したのを、張楚金といふ人が、一鉢の水にこれを浮べて、僞書たることを看破する話は、草子洗の傳說に似てゐる。なほ單なる殺人・横領・盜賊・杜騙等の訟のうちにも、假作物語のあること勿論で、その中にも、無名破家は、これも則天武后が、大平公主に與へた細器金寶を、何者か竊んだのを怒つて犯人捕縛の嚴命が下り、吏卒共はこれを捕へかね、官命の急を遁れんとして蘇武名といふ者を捕へ、盜人の名を負はせたが、この武名は、別駕といふ國守の下に勤務する官人であつたから、無實を辯じ、剩へ則天武后より盜賊逮捕の命を請ひ、吏卒を率ゐて東北門を偵察するうちに、喪服を着た一群の故人が、北邙の一の新家に行つて、祭典を行ふを認め、その擧動を窺ふに、哀慼の狀態もなく、何やらん家に繞めて顏見合せ、いづれも喜色あるを疑ひ、彼等を捕へ、且つ家を發掘して見ると、金銀財寶盜物の隱匿所であつたことを知る話。又崇龜認刀は、唐の劉崇龜が南海の鎭たりし時、富家の息子で美男子の某、或る日舟遊びをして岸邊に漕ぎ行くと、偶然談話の家に美しい娘がゐて、その夜密會を約し、娘は戶を細目に開けて置いたところ、某が未だ來ないうちに、一人の賊が來て、天の與へと戶口から忍び入る。娘は待人と思つて抱き付くと、賊は喫驚りして、捕へられたと思つて携へた刀で斬殺し、その場を遁れ出た後へ、某が忍んで戶口から入るや、血糊に滑つて轉倒し、剩へ娘が殺されてゐるのに仰天し、これ又舟を飛ばして逃げ去つた。夜明けて家人が知つて大騷ぎとなり、官府に訴へ出で、血の足跡から、息子は忽ち捕へられ、法廷に引き出されて嚴しい取調べを受ける。因つて前日來の事情を審かに陳述し、決して娘を殺した覺えはないと强く否認した。そこで劉崇龜は犯人の別にあることを悟り、且つ現場に遺失してあつた刀を見るに、牛斬庖丁であるから、先づ屠者を召集し、銘々の庖丁を吟味し、その日は庖丁を留め置いて悉く歸らしめ、翌日屠者を呼び出し、彼の兇器に用ひた庖丁をその中に入れて、各自所有の庖丁を持ち去らしたが、終りに一人の屠者が殘り、自分の庖丁は何人かが持ち去り、こゝに殘つてゐるのは、自分のでないと云ふ。而もそれが兇器に用ひた庖丁であるから、漸く端緒が開け、段々捜索を進めて、眞犯人を逮捕するに至る話の如き、簡單ながら探偵小說としても取扱へる題材である。この書は、元來爲政家の參考に書いたものかも知れぬが、著作の性質、探偵的興味の豐富な點から、數版を重ねて廣く世に行はれ、一般には寧ろ一種の小說として歡迎された。【影響】個々の話題が、部分的に改作もしくは潤色されて、假名草子殊に浮世草子の傳奇小說中に、新話題の如く織り込まれたものも少くない。又直接の影響としては西鶴作「本朝櫻陰比事」(元祿二年)(別項)あり、作者未詳「日本桃陰比事」(寶永六年)及びこれを多少訂正改題した「本朝藤陰比事」(別項)があり、又月尋堂作「鎌倉比事」(別項)等がある。(水谷)

江戸版「棠陰比事」(插畫)

【參考】新撰列傳體小說史(水谷不倒)○棠陰比事 神戸其次郎(國語と國文學昭和七ノ八棠陰號)

藤永

とうえい　「最明寺物の謠曲」を見よ。

東瀛詩選

とうえいしせん　漢詩集　四十卷　補遺四卷十六冊【編著者】兪樾。字は蔭甫、曲園と號し、清末の大儒である。【解說】元和・寬永より明治に至るまでの著名な漢詩人の集に就き、四千餘首を選んで四十卷となし、又諸家の選集の中から五百餘首を選んで補遺四卷となし、各人につきその小傳と批評とを添へてある。我が國の漢詩の沿革を研究するには缺くべからざる參考書である。(佐久)

桃縁齋貞佐

たうえんさいていさ　狂歌師【本名】芥河久五兵衞【別名】又生庵【生歿】元祿十二年備中に生れ、安永八年(一七七九)正月二十一日歿す。享年八十一。【辭世】死んで行く處はをかし佛護寺の犬の小便する垣のもと。【經歷】備中笠岡の商丸山久右衞門の長子で、幼名を河吉と云つた。弱冠にして漢籍を京師の伊藤東涯に學び、又蹴鞠・茶道・香道・亂舞・三絃・尺八等の諸藝に通じ、狂歌は油煙齋貞柳(別項)の門に入つて出藍の譽を得た。性甚だ遊蕩に身を入れて家事を顧みなかつたので、父は貳百兩の金を與へて勘當した。貞佐は家を出て播磨より京攝の間を、或は別莊番となり、或は飯焚き男となつて漂泊し、二年の後許されて家に歸つた時、嘗に受けた貳百兩は一錢も手を附けず封の儘父に返したと云ふ。それより貞佐のために別に家を建てて酒造業を營ませたが、利慾の念なき故損失のみ打續き、終に廢業して本家へ歸つた。折柄廣島塚本町の町役を勤める芥河孫右衞門から養子の相談があつたので、直に同家の婿養子となり、初め久右衞門と名乘り、後に久五兵衞と改めた。晩年實家の舊業を養子として家督を讓り、明和の初め剃髮していよ〳〵狂歌の道に遊んでゐたが、これより先、師の貞柳より贈られた長柄橋板の文臺、勝負の柿子を大阪の門人玉雲齋貞右(別項)に讓り渡して判者とし、八十一歲を以て同地に歿した。【著書】狂歌千代の棧三冊(寶曆十年刊)(野崎)

陶淵明集

たうえんめいしふ　詩文別集【著者】陶潛【諸本】北齊の陽休之の序錄に據れば、本書は古來三本あり。一本は八卷で序がなく、一本は六卷で序はあるが、編次が錯亂して居り、共に撰者は明かでない。一本は梁の蕭統(昭明太子)の撰した八卷本である。休之はこの三本を校合して十卷とし、四八目を補入した。四八目は即ち「聖賢群輔錄」である。この二篇は蕭統本にはない。八卷本、六卷本の二本は今傳はつてゐないので、その面目を知る由もないが、後に行はれてゐるのは、統・休之の二本のみである。「隋書」經籍志には九卷、「新唐書」藝文志には五卷を著錄してゐるが、その何れであるかは詳かでない。「崇文總目」「宋史」藝文志等には十卷とある。恐らくは休之本であらう。宋の宋庠が諸々の異本中の書本を擇んで校定するに當り、江左に得た所謂江左本を取り、ただその「聖賢群輔錄」中の八儒・三墨の二條を後人の附益として除いたが、實は休之本に過ぎない。宋代以後は殆ど休之本のみが行はれ、後、李公煥・何孟春・焦竑・毛晉・張溥の諸家の校訂本が出て、互に出入はあるが、概ね休之本に據り、清朝に至つて乾隆帝が四庫の館員に命じて、蕭統本に據つて八卷とし、二卷を刪らしめた。これが即ち四庫本である。今の通行本八卷は、首に四庫提要の文を載せ、次に蕭統の撰した序傳を揭げ、次に總論がある。【傳來】我が國には、平安朝の頃既に渡來して「現在書目」には十卷本を載せてゐる。恐らく休之本であらう。降つて江戶時代、寬文年中に菊池東勻の校點本が刻せられたが、これ亦同本である。又天保年中に松崎明復の刊行した本も、毛晉本によつて「聖賢群輔錄」を削つたのみで、他は休之本と同じである。【解說】彼の詩は、ともすれば質に乏しく華に流れんとする六朝の詩壇に在つて、儒家の思想を本として、深く物情を陶冶し、當時の通弊を脫して淵深樸實の趣を具へ、質にして能く華を離れず、卓然として詩品・人品共に一代に高かつたと稱せられる。後世蘇東坡が、「吾れ詩人に於て好む所無し、獨り淵明が詩を好む、淵明詩を作ること多からず、然れども質にして實は綺に、癯せて實は腴えたり、曹植・劉楨・鮑照・謝靈運・李白・杜甫の諸人より、皆及ぶ莫し」と評してゐるのを見ても、その地位は推測される。唐代に於ける王維・孟浩然・韋應物・柳宗元等の一派は、淵明に負ふ所が尠くない。【註釋書】箋注陶淵明集十卷(明李公煥)○靖節先生集十卷・卷首一卷・卷末二卷(清陶澍集注)。【著者小傳】陶潛、字は淵明(晉書隱逸傳)、或は名は潛、字は元亮(宋書隱逸傳)と云ひ、又名は淵明、字は元亮(蕭統陶淵明傳)とも云ひ、定かでなく、その生涯も前記の諸書及び「南史隱逸傳」「蓮社高賢傳」「顏延之」「徵士誄」「五柳先生傳」(自敍傳の如きもの)、陶澍(淵明の後)の「靖節先生年譜考異」等に散見しても、詳しいことは分らない。晉の哀帝の興寧三年、潯陽の柴桑に生れ、宋の文帝の元嘉四年(皇紀一〇八七)六十三歲を以て歿した。蕭統の傳に據れば、「穎脫にして羣せず、任眞自得す」とある。壯年の頃官に就いて、彭澤の令となつたが、偶々郡から督郵を遣して縣に到らしめた時、吏が淵明に「束帶してこれに見ゆべし」と云つたのに、淵明は、「我豈能く五斗米のために腰を折りて鄉里の小兒に向はんや」と云つて、即日綬を解いて職を去り、在職僅かに八十五日であつた。かの「歸去來辭」はこの時に賦したものだと云ふ。その性は恬澹無欲、貧困の中に一張の無絃の琴を携へ、唯々酒を友として、從適の生活を送り、俗塵を離れた田園に處し、貧賤に煩はされず、富貴を求めず、菊の隱逸なるを愛して風月と俱に世を去つた。世に周續之と劉遺民とを合せて、潯陽の三隱と云ふ。(宇野・本多)

東音譜

とうおんぷ　語學書　一卷一冊【著者】新井白石【成立・刊行】享保四年十二月の自序あり。新井白石全集卷一所收。【內容】片假名を用ひて、外國語を示す方法を立案したものである。先づ五十音の各々の音を支那の杭州・泉州・漳州・福州等の字音と比較對照し、次に五十音には無い外國の音の寫し方を立案してゐる。即ち二合音(ワ、イ等二字で一音を表はす)、發聲(子音)、送聲(アー等とす。今のアー、イーに當る)。餘聲(カア、キイ、クウ等)。收聲(これに五種あり。(1)脣收之開ーアン、カン、イン等。(2)脣收之合ーアム、カム、イム等。(3)舌收之合ーアヌ、カヌ、イヌ等。(4)喉收之開ーアイ、カイ、イイ等。(5)喉收之合ーアウ、カウ、イウ等)。入聲(四種あり。(1)脣收之合ーアフ、カフ、イフ等。(2)舌收之合ーアツ、カツ、イツ等。(3)牙收之開ーアキ、カキ、イキ等。(4)牙收之合ーアク、カク、イク等)。清濁(清音と濁音)、輕重(半濁音を重聲、その以外のものを輕聲と

稱す」。【價値】本書の序に、西洋語の發音をうつすに、支那人が漢字で寫したのを採用してゐたが、これでは曖昧であるとし、日本の假名を用ひたのは卓見であるとしなければならない。日本に普通無い音は新しい方法によらなければならないが、白石は琴譜に倣つて考へ出したと記してゐるけれども、羅馬字の綴り方からも暗示を得た事と思はれる。但し白石の考案は、基礎に於て大なる二つの缺點がある。一つは五十音圖のアヤワの三行を、アイウエヲ・ヤヰユヱヨ・ワイウヱオと誤つてゐる事。一つは杭・泉・漳・福各州の音に十分通じてゐない事である。故に東音譜を立案した識見は頗る尊敬すべきものであるが、その結果は遺憾ながら信賴し得ざるものである。【備考】江戸時代に片假名に依つて一種の綴字法を考案した者は、白石の外に僧文雄がある。(和字大觀抄參照)
【參考】新井白石全集(第一卷例言)　(龜田)

踏歌(たふか)　歌舞　【名稱】足で地を踏んで拍子を取りながら歌ふ意で、支那には唐初よりこの歌舞があり、それを我が國に取り入れたもの。男子のみの行ふ踏歌を男踏歌と云ひ、女子のみの行ふ踏歌を女踏歌と云ふ。「日本書紀」では踏歌を阿良禮走と訓じ、平安時代でもかく稱した。「釋日本紀」所引の「日本紀私記」宴會詩に、阿良禮末之利とあるのもアラレバシリと訓ずべきで、「公事根源」にアラレマジリと訓じたのは誤りであらう。【沿革】踏歌の輸入せられたのは、何時頃か明かでない。天武天皇三年正月朔日に、闇夜に男女の別なく踏歌を行つたのが最初であると云ふ(伊呂波字類抄所引日本事始)。「日本書紀」によれば、持統天皇七年正月十六日に漢人が踏歌を奏し、翌八年正月十七日にも漢人が踏歌を奏した。十九日には唐人が踏歌を奏した。これ等が古き所見である。而して我が國に古くよりあつた歌舞歌垣(別項)は、踏歌と並び行はれてゐたが、元來踏歌と性質の同じものゆゑ、兩者は混和して、平安朝以後には、踏歌のみひとり宮廷貴紳の間に行はれて、歌垣は已んでしまつた。併し踏歌の技は、歌垣のそれを襲うた所があると思はれる。
【男踏歌】男踏歌の初めは、聖武天皇の天平二年正月十六日に宮中で百官の行つた踏歌である(續日本紀)。その後、純然たる男踏歌の所見は國史上にはないが、女踏歌と並び行はれた事と思はれる。平安時代となつては、正月十六日を踏歌の節會として女踏歌が行はれ、その前二日、十四日を男踏歌として殆ど毎年行はれた(源氏物語の註釋書「細流抄」に、男踏歌が隔年に行はれたと記してゐるのは疑はしい)。一說に、宇多天皇の寬平元年正月十四日に男踏歌は創始せられたと云ふ。然るに圓融天皇天元六年正月十四日の男踏歌を最後とし、翌永觀二年に廢止せられて、以後永く絕えた。醍醐天皇の后藤原穩子の忌日に當る故である(今昔物語)。男踏歌に奉仕する官人は、高巾子の冠を授けられ、これを着するのが儀式となつてゐた(「西宮記」「源氏物語」初音の卷にも見ゆ)。
【女踏歌】天武天皇天平十四年正月十六日に、少年童女の踏歌の行はれたのがその最初である(續日本紀)。爾後國史上に見ゆるもの多く、內教坊の妓女に踏歌を奏せしめ、且つ屢々蕃客の觀覽に供した。平安時代では、正月十六日を踏歌の節會として女踏歌が毎年行はれ、內教坊の舞妓の外、中宮・春宮の女官や女藏人がこれに奉仕した。爾後、數度の改廢はあつたけれども、女踏歌は室町時代まで行はれ、江戸時代にもその面影だけは存してゐた。平安時代では、踏歌後、二月三月の間に、賭弓のまけわざが行はれた。これを踏歌の後宴と云ふ。
【雜踏歌】奈良時代には、宮廷のみならず畿內諸村にも踏歌が行はれて、猥りがはしきものがあつたので、天平神護二年正月十四日の太政官符で、これを禁止した(類聚三代格)。「延喜式」の彈正式にも、京都で一切の踏歌を行ふことを禁斷した。これ等は特に歌垣(別項)に近いものであつたと思はれる。また諸神社でもこれがあつた。「司中公文抄」(伊勢太神宮司の記錄。長曆・永享・嘉吉頃の年號見ゆ)には、氏神離宮院で正月十五日に行はれた踏歌神事の歌詞を載せ、近世では、尾張の熱田神宮でも正月十一日に宮人が卯杖舞を奏して、尾張氏が踏歌の頌を唱へ、高巾子の神人が鈴を振つたと云ふ(張州府志)。鹿島神宮でも正月十四日に踏歌祭があり、梅花の枝を持ち、太鼓を打ち、笛を吹き、笏拍子を打つて、御殿を三度繞り、神拜する式があつた(鹿島志)。これ等は、何れも古昔の踏歌の名殘であらう。
【歌詞】最も古き歌詞は、「類聚國史」に出てゐる延曆十四年正月十六日の踏歌の歌である。

山城顯樂舊來傳　帝宅新成最耐憐
郊野道平千里望　山河擅美四周連
新京樂、平安樂土、萬年春

の如き、新京讚美の漢詩に囃詞を附したものの都合四章を載せてゐる。これは當時新作の踏歌の歌詞であらう。「釋日本紀」に引ける「日本紀私記」には、この各段の終りの囃詞を「萬年阿良禮」と歌つたが故に、踏歌の事を阿良禮走と稱するのだと云つてゐる。阿良禮走とは、初め春雪を踏んで舞ふ樣が霰の降つて飛ぶが如くであるから名づけたと云ふ說があるが、「侵雨案」に、あられは可ゝ有と云ふ意味であらうと說いた。走とは、舞小手を云ふのであらう。更に「日本紀私記」には、萬年阿良禮を、當時では改めて萬歲樂と云つたとある。これ等が平安朝初めの踏歌の歌である。平安朝後期に普通行はれた歌詞は「朝野群載」に載せてゐる。踏歌章曲として男踏歌の歌詞を出した。

萬春樂萬春樂萬春樂　我皇延祚億千齡(萬春樂)
元正慶序年光麗(萬春樂)　延曜休期帝化昌(萬春樂)
百辟陪筵華幄內(天人感呼)　千般作樂紫宸場(萬春樂)

の如く、一章五句づつより成るもの二章十句を載せてゐる。次に女踏歌章曲七首として、

明々聖主億千齡(千春樂)　無事無爲嘗聖德(千春樂)
鐘鼓鏗鏘任踊歡(千春樂)　羽旄飛揚延千秋(天人感呼)
治定功成太平年(千春樂)

の如く一章五句づつのもの、序四章、破三章、急一章、計七章を載せた。但し急の歌は、

早年愛先樂(千春樂)　春遊不知歇　暮春殘雪飄
儀祿留光祀　俳徊不窮極(萬千春樂)

とある。「源氏物語」(初音)に、男踏歌の事を述べて、「萬春樂御口ずさびに宣ひ」と見え、且つ「言どものみだりがはしき」とあるのも、踏歌の各句の終りに附する囃詞の事であり、「河海抄」や「花鳥餘情」等に記せる如く、踏歌の歌はすべて漢音で棒讀に歌つたものである。「西宮記」にも、男踏歌の儀式を記して萬春樂を奏する由を述べてゐるが、この句は萬歲樂の變化したものであらう。「樂道類集」に「西宮記」の文を載せて說明して曰く、「今案、萬春樂ヘスベテ八句ノ詩ナリ、ソレヲ漢音ニウタヒテ、句ゴトノアヒニ萬春樂ト唱フル也、踏歌ノ舞人ノ立サマヲ云事ナリ」とある如くである。

踏歌の曲調は、雙調を以て歌つた。「李部王記」によれば、男踏歌には、「一十百千萬億」等と云ふ詞もあつたらしい。「司中公文抄」所載の踏歌神事の歌は、「萬春樂千秋樂、平安ニ少シヅツ宮ヲシテ、小夜ヲ經ルマデ」と三度申す詞に始り、「一ツ二ツ三ツ七ツ十ヲ百千萬阿僧祇御寶物數へ奉ル」と云ふ語で終つてゐるのは、古昔の歌詞を傳へたものであらう。且つ男踏歌の際には、此殿・竹河・我家のやうな催馬樂の曲をも用ひた。故に「司中公文抄」所載の踏歌神事の歌詞は、終りに竹河の歌詞の訛つたものを載せ、「鹽尻」所載の尾張國熱田神宮踏歌祭の歌詞では、「萬しやう樂(萬春樂の訛)〳〵で始り、竹河・此殿・淺綠等の催馬樂の歌詞の變形せるものを連ね用ひたのである。催馬樂の一寫本には、呂歌の終りに、踏歌詠として「朝野群載」所載の男踏歌の歌詞を揭げ、次に「なにそもそ、なにそもそ、綿か錦かも、せにかも、布かも、何そもそ」と云ふ歌詞を載せて、「右詠以雙調爲音、故加呂歌末、參入音聲及在座之間唱竹河曲、退出音聲唱我家曲、此殿三曲」と註せるによれば、男踏歌の際に、これ等の曲の行はれた事は明かであり、また踏歌曲をも催馬樂曲の一として取扱つてゐた事が分る。かく踏歌と催馬樂とは密接な關係があつた。また平安朝の踏歌節會の際には、外國樂をも管絃で奏するのが例であつた。蕃客を招いたのもその故であつて、踏歌が常に時世遲れと思はれる固苦しい漢詩を音で歌ふのも、外交上の理由があつたのである。「江談抄」によれば、朗詠として最も名高き「佳辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央」の歌詞は、もと踏歌に歌はれたものであると云ふ。かくて踏歌の歌詞がすべて漢詩より成るのは、平安朝初めの漢詩文全盛時代の遺風と思はれる。而して千秋萬歲(別項)は踏歌より出たものであらう。なほ正月十六日の踏歌節會の際には大歌立歌が奏せられたが、この大歌には、「琴歌譜」所載の酒坐歌の如き大歌が歌はれたと思はれる(酒樂歌參照)。
【參考】古事類苑(樂舞部・歲時部)○岷江入楚○萬葉緯○國史大辭典○日本歌謠史○中古雜唱集○比古婆衣○踏歌考○あらればしり　(藤田)

東雅(とうが)　語學書　二十卷　【著者】新井白石【成立】享保二年に成る。同四年の室直清の序、同十年の安積覺の序がある。【諸本】白石の自筆本が內閣文庫に在る。最初の刊本は明治三十六年、大槻如電が諸寫本を校合したもの(目次一冊、本文四冊)。新井白石全集卷四に收む。全集本は自筆本を以て校訂した。【內容】本書は「爾雅」に倣つて、特に國語の名詞に就いて語源的研究をなしたもので、東雅は日東爾雅の意である。第一卷は總論、第二卷以下は次の如く部門を分つてゐる。(一)天文 附歲時、(二)地輿 附方位、(三)神祇 祭器具、(四)人倫、(五)宮室、(六)器用、(七)飮食、(八)穀蔬、(九)果蓏、(十)草卉、(十一)樹竹、(十二)禽鳥、(十三)畜獸、(十四)鱗介、(十五)蟲豸。以上十五種に分ち、類に從つて單語を漢字で標出し、これに片假名で訓を附し、次に多くの古書を引用して語源を考證してゐる。總論の中に語源研究について次の如き意見を述べてゐる。曰く言語は時間的には昔と今との相違があり、空間的には地方に依つて同じくない。故に千載の下に生れて千載の上に通じ、一方の內にあつて四方の外に達する事は困難な事であるが、幸に「舊事紀」「古事記」「日本紀」「姓氏錄」「古語拾遺」「風土記」の如きに古語を錄いて居り、又「萬葉集」を初め代々の歌集の註釋は頗る參考になる。が、これ等の古書にも見えない語は、類例に依つて語義を求むべきである。併し解釋し難いものは強ひて說くべきではない。次に古今の語に通ずるには、先づそれぞれの時代を知らねばならぬ。朝鮮が我が國に服屬して後は、朝鮮・支那の語が入つて來、我が古語は或は廢れ、或は意義が變化して國語に大變動があつた。次いで佛教が渡來して梵語が輸入せられ、それから禪宗が渡來して宋・元の語が入つて來、近世に西洋と交際するに及んで蕃語が入つて來てゐる。かくして我が國語は屢々變遷してゐるから、それぞれの時代を知らねばならぬ。後世の語義を以て古を推す事は危險である。次に日本・支那・印度の聲音の事、言と詞の區別(言は語根の類を推し、その上中下に加はる接辭の類を詞と云つてゐる)、國語と漢字の關係等について記してゐる。又「和語を解くには謎語を解くが如し」と云ふ說(貝原益軒の「日本釋名」)を評して、古を師とせずに語源を說くのは自分の取らざる所であるとし、又或る人は言語に上略・中略・下略と云ふことを說いてゐるが、上古の言は、或る語の音を省略して出來たのではなく、本來簡單だつたのである。又轉語・反語等の說も首肯し難いものがあると記してゐる。【價値】本書は、著者が不遇の地位にある時代に、參考の書にも不便を感じつつ著はしたもので、誤謬や不備は必ずしも少くない。が、その語源研究に對する意見は、大體から觀て甚だ卓拔で、國語研究史上の名著として推賞すべきものである。即ち著者は「和句解」「日本釋名」(各別項)等に於ける常識的判斷を廢して、歷史考察が大切なる事を說き、又國語を解くのに飽くまで國語を主とし、本來の國語と外來語を區別してゐる。これを要するに語源研究の方法は益軒が初めて組織したが(勿論、それは白石の方法とは異る點が多いが)、白石は言語の本質に基づく一層高い學問的見地からこれを批評し修正したものである。
【參考】言語學者としての新井白石(上田萬年「國語のため」)　(龜田)

伊藤東涯筆蹟（先哲遺墨帖）

東涯(とうがい)　儒者　【姓名】伊藤長胤。通稱原藏【別號】慥慥齋。私諡して紹述先生といふ。【生歿】寬文十年四月二十八日京都に生

れ、元文元年(二三九六)七月十七日歿す。享年六十七【閲歴】仁齋(別項)の長子である。經術に深く家學を繼承し、荻生徂徠と東西に相對峙して門戶を張つてゐた。但しその本領は經學に在つて詩文はその緒餘であるから、詩文の點から觀れば、堀河派(漢學參照)は到底蘐園派の敵ではなかつた。【著書】用字格四卷○操觚字訣十卷○紹述先生文集十二卷○紹述先生詩集十卷。

【批評】その文章は、仁齋に比すれば疵は少いけれど氣焔が乏しい。「損堂文話」にその文を評して、「仁齋の文多くは語を成さず。然れども氣魄充溢あり。讀者をして倦まざらしむ。然れども東涯の文は疵少し。然れども氣燄及ばず。これを讀めば臥せんことを思ふ。」とある。詩も誦するに足るものは少い。〔佐久〕

東海一漚集 とうかいいちおうしふ　詩文集　五卷

【著者】中巖圓月【名義】著者自ら命名したもので、一代の作業は、畢竟東海の一浮漚であるといふ意であらう。【成立・刊行】本書は著者の寂後、三百餘年の間、京都金地院・妙喜庵及び嵯峨の直指庵等に散在してゐたのである。著者の法孫播磨明石大藏院主大舸宗殿はその散佚を恐れ、約三十年を費してこの集を編成した。著者一代製作の全部ではないが、詩文集として略ど完備したものである。こゝに初めてその版行を企て、廣く世に流布せんとしたが、そのこと未だ全く成らずして、宗殿は俄かに寂した。遺言に依つて臨川寺住持桂洲道倫が、この集の校訂に任じたもので、卷末に明和元年道倫の跋がある。【解說】第一卷は古詩・五言律詩・七言律詩・五言絕句・六言絕句・七言絕句・贊等を收め、第二卷は疏・說・上梁文・銘等。第三卷は表・書・記・論・雜文・祭文等を收め、第四卷は中正子十篇、自跋を收め、偈竺仙偈一篇を附收し、第五卷は自歷譜を收め、輝東陽偈・宗廉偈・玄理偈等を附收してある。中正子十篇は、自歷譜によれば、建武元年の作で、自跋はそれより十年の後、曆應三年春、著者これを再讀して附したものである。「予生亂世、無有所以、偈以論屬遊戲、餘波及二三子請明」と云つてゐる。即ち亂世にあつて、文筆を弄する者が弟子のためにその所懷を披瀝したものだと云ふのである。先づ外篇と內篇とに分れ、外篇は、敍篇・仁義篇・方圓篇・經權篇・革解篇・治曆篇に分れ、內篇は、性情篇、死生篇・戒定慧篇・問禪篇に分れてゐる。自跋には、「此書之作、以田手一時之感激而」と云つてゐるが、實は著者の議見を發表してゐるものである。中正子とは、自ら中正叟と號したのに依つたのであらう。竺仙梵僊の「讀中正子」にも、その思想の廣大なるを讚嘆してゐる。次に自歷譜は、圓月自ら經歷を記述したものであるが、貞治六年二月に至つて筆を擱いてゐる。それより以後、示寂に至るまでの歷譜は弟子建輔の筆に成る。なほこの集の末に、「東海一漚別集」一卷、「東海一漚餘滴」一卷を附收してゐる。蒼溟元方は、その序に於て本集を評して「其體製氣象、高古源遠」と云つてゐる。〔鷲尾〕

東海瑞華集 とうかいずいけしふ　詩文集　七冊

【著者】惟肖得巖【名義】日本の瓊華の義である。元の月江印の「月江錄」に、明極楚俊を悼む詩句に、耕岡東海瑞華とある。【解說】一二等の順次の標目なく、法語二冊、拈香・小佛事一冊、贊及び表一冊、序一冊、記及び道號頌一冊、說及び銘一冊である。法語は栖賢寺・眞如寺・萬壽寺・天龍寺・南禪寺の住山法語及び年忌の垂語等三十餘篇。拈香は、年忌・逆修・入牌等の語六十餘篇。小佛事は、掩土・奠湯・奠茶・鎖龕・起骨・舉火等の語十餘篇。贊は佛祖・道賢・三敎合一面圓及び自贊等百餘篇。祭文は四篇。表は奉大明皇帝表一篇。序は詩序等五十餘篇。記は片岡達磨寺記等十餘篇。道號頌は六十餘首。說は字說三十餘篇。銘は鐘銘等十餘篇である。〔鷲尾〕

東海散士 とうかいさんし　小說家・政治家【本名】柴四朗【生歿】嘉永五年、會津に生れ、大正十一年九月二十五日歿す。享年七十一。【閲歷】初め上京して大學南校に入り、英語を修めた後、アメリカに留學、費府商業學校で經濟學を專攻した。歸朝するに及び、明治十八年十月、「佳人之奇遇」(別項)を公にし、一代に喧傳された。翌年、時の農商務大臣谷干城に從つて歐洲に遊んだ。同二十年歸朝、次いで條約改正問題紛擾の際に日本倶樂部と稱する非政社團體を組織し、條約改正中止運動に從事した。後、衆議院議員となり、大隈內閣の時には、參政官の一椅子を占めた。【著書】有名な「佳人之奇遇」の外に、「東洋之佳人」「埃及史」などがある。〔高須〕

東海散士

東海談 とうかいだん　隨筆　二卷【著者】篠崎維章【刊行】寬政元年【解說】博覽多識を以て聞えた著者の隨筆で、字義・調法・古語・古史・制度等に關する考說が多い。上編に北條時宗の書翰、紀有常の在世、としだま、蘇武屋敷、神祇官の所在地、支國、肴、金史別本、な…その用法、及第の禮、かなぎ、吉野、水星、一筆啓上候、好の字、あか(水)、なれ(川)、文祿公の詩等。下編に二位尼、朱舜水、云々の字の用法、日本心、善人、かたをなみの歌、赤石、たふさぎ、なよし、法皇號、論語の註本、稱唯、大扶桑、源氏物語の號、昔の千葉子、上下賀茂社、なるべしと云ふ事、納采に書く文字、かずのこの正字、本田善光、足利學校、角田川等、各數十項を收む。「南畝叢書」に入れて上木されてゐる。本書に大田覃の序がある。

【著者小傳】篠崎維章は平氏。字は子文、號は東海、通稱金吾と云ひ、江戶の人で、儒學を林祭酒・伊藤東涯等に學んだ。初め上野國小幡侯に師となり、後退いて府下に帷を垂れて敎授した。漢學の外に國學にも通じた。元文五年(二四〇〇)七月一日歿。享年五十四。「和學辨」「滄溟尺牘」等の著がある。〔和田〕

東海道名所記 とうかいだうめいしよき　名所記　六卷六冊【作者】淺井了意【成立】卷五、坂の下より土山までの條に、「九年以前庚寅のとし」と云ふ詞がある。庚寅は慶安三年の干支であるから、萬治元年に成つたものと推定される。【諸本】流布本は一版だけで、初版の刊年は不明であるが、恐らく著作と同時、萬治初年の刊行と思はれる。同版で貞享五年堺町通服部九兵衞梓行の奧附あるものは、二版或は三版であらう。溫知叢書第一・日本古典全集・滑稽全集第一所收。

【內容】樂阿彌といふ道心者が、四國遍路から伊勢熊野を巡覽して、熊野より海路を經て江戶に來り、鐵砲洲に上陸し、それより大略江戶の名所を見物して京に上り、黑谷に住まんと志して芝口まで來た時に、一人の青年に出

會した。これを伴侶として、二人が東海道の道々狂歌俳句を口吟みつつ、諧謔に打興じて上京する紀行に趣向を借りた名所記である。卷一は江戶より大磯まで、卷二は小田原より江尻まで、卷三は府中より吉田まで、卷四は御油より庄野まで、卷五は龜山より山科まで、卷六は山科より京を廻り、宇治に到つて止む。この間五十三驛の一驛ごとに、次の驛間の里數を舉げ、橋あればその長短を記し、また神社・佛閣・名所・舊蹟・驛路の狀況、風俗・人情・產物に至るまで洩すところなく記載してある。【批評】構想は烏丸光廣の「竹齋」(別項)に出たものと思はれる。文章は流暢であつて輕快、社寺の緣起、故事由來を說くに博引旁證して作者の學識を示し、芝居・遊女町等盛り場の狀景を寫す筆致に生氣の溌剌を見せてゐる。而も滑稽の間に淡い敎訓の意を寓するなど、用意の周到、非凡な才の現はれがある。

小田原より箱根へ四里
右の方宿の入口に、小田原陣の時の戰場あり、町の內に筋違橋あり、町はづれに地藏堂あり。
かさまつり、左に松山ありその上に杉山あり、石垣山といふ、兵直をせむる時、太閤秀吉むかひぢんをとり給ひし所なり、名物には、小田原石、水道のために江戶に出しあきなふ、小田原足駄、けやきのまる木履なり、夢想弦、又宿の右の方に外郎あり、東國海道第一の名物也。
湯本の橋より右の方川邊をゆけば、早雲あまりに、湯の澤といふ在所あり、温泉あり、人おほくあつまれり、湯本の地藏は海道の右にあり、總早雲寺といふ寺有、すぐ權現茶屋あり、大澤畑、樂阿彌申すやう、畑村はぼこねたうげの登口なり、峠までは一里なれども、難所なれば草臥る也、茶やに立より、ゆるゆるとくつろぎて、上るべしといふて家につれて立よる、茶屋に女あり、茶をうしろむきてたて侍り、おすがたをみれば、如意輪觀音ほどうつくしうおはしますが、うしろむき給ふこそ心得ねといへば、樂阿彌がいふやう、これもいはれあり、三十三身の外に、むかしより尻くらひ觀音とて、これ有といふ。

東海道名所記（挿畫）

槪ねこの類で、趣味の紀行文として、また風俗史料として重んぜられてゐる。【影響】「京童」(別項)と類した所もあるが、「京童」の刊行は明曆四年で、この書の成つた萬治元年と同年であるから、兩者の間に直接の影響はない筈である。本書及び「江戶名所記」等の名著が出たのは、自らかゝる名所記の出づべき機運があつたのであらう。更に一九の「道中膝栗毛」(別項)は、構想を本書に得て、滑稽化したものである。(名所記參照)〔水谷〕

【參考】古版地誌解題　和田萬吉

東海道四谷怪談 とうかいだうよつやくわいだん　脚本　五幕十一場　世話物【作者】四代鶴屋南北【名稱】四谷のお岩稻荷に擱む怪談といふ意味の名題だが、一番目が忠臣藏である所から、東海道の四ツ谷宿に託した。「いろは假名四谷怪談」は、書卸名題でない。【通稱】「お岩稻荷」「四谷怪談」【別名題】「於岩稻荷驗玉櫛」「形見草四谷怪談」「當三升四谷聞書」。三代菊五郎が大阪へ行つて上演した時には、全篇京阪向きに改竄された。これが「いろは假名四谷怪談」である。【興行】文政八年七月二十七日初日、江戶中村座。初日・後日の二日に分けて上演。

【役割】民谷伊右衞門(七代市川團十郎)、小汐田又之丞(三枡源之助)、伊東喜兵衞・伊右衞門母お熊(市川宗三郎)、按摩宅悅・近藤源四郎(大谷門藏)、奧田庄三郎(尾上松助)、お弓娘お梅(岩井粂次)、佛孫兵衞(澤村しやばく)、小平女房お花(尾上菊次郎)、喜兵衞娘お梅(吾妻藤藏)、乳母お槇(市川おの江)、直助權兵衞(五代松本幸四郎)、與茂七女房お袖(岩井粂三郎)、伊右衞門女房お岩・中間小佛小平・佐藤與茂七(三代尾上菊五郎)。

【諸本】書卸臺本は所在未詳。大南北全集第十二卷・歌舞伎脚本集(日本名著全集)・日本戲曲全集第十一卷等所收。【題材】寬文の頃、四谷左門町のお先手組下同心田宮又左衞門の娘お岩が、嫉妬のために身を果し、その怨靈が夫に仇をしたといふ巷說が、當時喧傳されたのを潤色したもの。その時の一番目に因んで世界を忠臣藏に借り、その綠から直助權兵衞を繼ぎ合せ、小幡小平次の筋を取込んで、結構は大體を自作の「謎帶一寸德兵衞」(別項)に據つた。その他、「法懸松成田利劍」「戀紅葉汗顏見勢」等、自作の怪談劇の一部も應用してある。

【梗概】(序幕)(淺草觀音額堂)高の家臣伊東喜兵衞は孫娘お梅、乳母お槇を連れて參詣。お梅は民谷伊右衞門へ戀慕。非人となつて楊子を商ふ義士の奧田庄三郎が、絹文狀を喜兵衞に見出されるのを同志の佐藤與茂七が取返す。伊右衞門は舅四谷左門に女房お岩を返すやう賴むが左門は諾かぬ。楊賣り直助は楊枝店のお袖を口說く。(奧山按摩宿)按摩宅悅は灸點と見せて地獄宿をして居り、お袖は愛に賤しい勤めをしてゐる。與茂七は遊びに來て女房お袖に奇遇、反對に直助は戀も叶はず突き出され、與茂七に恨みを含む。(淺草田圃)庄三郎・與茂七は衣類を着替へて別れる。伊右衞門は左門が我が惡事を覺つたので斬りつける。(裏手)直助は庄三郎を與茂七と誤つて殺し、伊右衞門は左門を殺す。お岩・お袖の姉妹が來かゝつて嘆く。二人の惡漢は仇討を餌にお岩を伊右衞門の許へ歸らせ、お袖を直助と表ばかりの夫婦にする。(二幕)(雜司ケ谷四谷町)お岩は子を產んだが、伊右衞門は冷酷。小者小平は舊主小汐田へ貢がうと民谷の奇藥ソウキセイを盜んだが、秋山長兵衞・關口官藏に捕へられ、散々苛なまれて戶棚へ打込まれる。お槇は產婦の見舞に、伊右衞門は朋友兩人と伊東へ禮に行く。お岩は伊東から貰った

藥を服むと急に發熱、手傳ひの宅悅が狼狽。(伊東屋敷) 喜兵衛と娘お弓は、お梅の戀を語つて伊右衛門に頼む。伊右衛門は高家へ有りつく條件で承諾。(伊右衛門浪宅) お岩は毒藥のために相好變る。伊右衛門は歸つて驚いたが、わざと虐待して出る。宅悅にお岩を逃れ出させんとした事から、お岩は伊東の惡事、夫の不實を聞いて憤死する。伊右衛門は小平を斬つて二人を不義の體になし、戸板へ括りつけて川へ流す。お梅が嫁入つて來たがお岩・小平の怨靈のため、伊右衛門はお梅・喜兵衛を殺す。(三幕)(砂村隠亡堀) 伊右衛門は非人と零落したお弓を川へ突き落す。鰻搔き權兵衛となつた直助と伊右衛門の再會。母お熊は伊右衛門に高の墨附を渡したが秋山長兵衛に取られる。お岩小平を打ちつけた戸板が流れ寄つて伊右衛門への恨み。與茂七・權兵衛と三人のだんまり。(四幕)(深川三角屋敷) お袖は假の女房であつたが、宅悅からお岩の死んだ事を聞き、どうでも助太刀してもらひたさから權兵衛に肌をゆるす。跡へ與茂七が來て權兵衛との諍引。お袖は身の因果を諦めて双方へ相手を討たす事を約す。(寺町孫兵衛内) 小汐田又之丞は、豐の病に惱み、小平の靈がいろいろと貢ぐ。繼母お熊が小平女房お花と一子次郎吉を苛なむ。又之丞が盗人の汚名に朋友赤垣傳藏の怒り。小平の靈が獻じたソウキセイで、又之丞の痼疾は癒る。(三角屋敷) 與茂七・權兵衛は互に相手を斬らうとしてお袖を斬る。お袖が遺言に權兵衛は實兄と判り、改悟して切腹。與茂七は廻文狀を取戻す。(大詰)(夢) 美しい賤女姿のお岩と殿樣風の伊右衛門が濡事。犬を曳いて供する長兵衛。お岩は亡靈となり伊右衛門を惱ます。(蛇山庵室) 伊右衛門は夢覺めて狂ふ。お岩の亡靈流れ、灌頂より出て伊右衛門に仇する。實父近藤源四郎も母お熊も亡靈のために最期。小林平内を通じて高家に有りつかんとし、長兵衛から取戻した墨附も亡靈のために破られ、長兵衛も縊り殺される。與茂七來つて伊右衛門を討つ。

東海道四谷怪談(錦繪)

【解說】筋は「謎帶一寸德兵衛」から借りたのであるが、戸板返しや蛇山の亡靈の趣向に技巧を盡してゐる。直助・お袖の因果譚は怪談を離れて南北の長所が見られる。世人に歡迎されたのは亡靈の怪奇とその怪路の慘酷さであるが、戲曲としては直助・お袖・與茂七の三角關係、三角屋敷の筋は優れた幕である。怪談劇として最高位に置かれてゐるのは、決して亡靈の技巧からばかりではあるまい。【附記】伊右衛門夢の場は、最初は長唄の獨吟であつたが、後には淸元節「菊薊圖睦言」、富本節「二世の緣顯色糸」、常磐津節「萌思螢僉言」等を使つて作舞踊劇を見せるやうになつた。蛇山庵室の場は、初演は義士討入へ連絡のため雪降りの場面であつたが、三度目から夏の世界にして、幽靈は盆提灯から出す事にした。【參考】大南北全集第十二卷解說 渥美淸太郎 ○歌舞伎脚本集解說 守隨憲治 ○尾上菊五郎自傳 五代尾上菊五郎 (渥美)

東涯漫筆 とうがいまんぴつ　隨筆　二卷　【著者】伊藤長胤　【解說】伊藤東涯の漢文の隨筆で、四書・六經・子史・雜錄中の語句について私見を註し、主として宋儒の所說を辨ずるところが多い。上卷には八十餘項、下卷には六十餘項を收む。著者の儒學史上の位地を見るに足る。寬政十二年男善韶(東所)の序がある。板倉勝明(安中侯)は、これを「甘雨亭叢書」の中に收めて上梓した。 (和田)

東海遊子吟 とうかいいうしぎん　詩集　【著者】土井晩翠　【刊行】明治三十九年六月、大日本圖書會社　【解說】第三詩集で二十九篇、外に附錄「日本海々戰歌」の一節「光榮の追想」を收む。この集に於て晩翠は、第一集に仄めき第二集に表はれた缺陷全部を詩篇の全容に漲らせて詩的自殺を遂げてゐる。その用語は表面壯大と豪快を裝つてゐるが、内部は何等の感激を伴はぬ。少くとも實感に卽した必然性を失し去つてゐる。(土井晩翠參照) (日夏)

唐樂 たうがく　雅樂　【解說】雅樂の一部門。元來唐から傳へられた樂の意であるが、これに二樣の意義がある。一は唐から傳へられた樂を指すもの、二は平安朝初めの樂制改革後、右方の樂に相對して、別種の樂舞を作り、これを總稱して唐樂といつたもので、又これを左方の樂ともいふ。その中には支那から傳來した曲、印度から傳來した曲、西域から傳はつた曲、及び我が國で新作した曲を含んでゐる。(雅樂參照) (田邊)

東華集 とうくわしふ　俳諧集　三冊　【編者】各務支考　【名義】支考が京より東に在る時は號を東華坊と云つたのに因んでの名稱(西華集參照)。【刊行】元祿十三年九月　【諸本】支考全集(俳諧文庫)所收　【內容】上卷には表合の式六ケ條、山城・近江・西美濃・尾張・東美濃・伊勢の諸俳人と附けた表合(八句)四十二、發句百句を揭げ、それぞれ發句・脇・第三の意味附方を說き、中卷には洛陽・膳所・彥根・大垣・竹が鼻・高須・神海・黑野・山縣・洲原・上有知・關・加治田・伊源・深田各地の發句四百九十二を揭げ、下卷には名古屋・鳴海・犬山・雲井・山田各地の發句二百七十五を收め、なほ餘興として發句十三を註してゐる。【價値】東國に於ける美濃派(別項)の勢力を見るにも便利である。又表合の式・實例を知るにも調法である。 (荻原)

東花集 とうくわしふ　河東節詞曲集　袖珍本五冊　【名稱】千種庵諸持の序に、「東花集と名づけられしは、この道のすき人何がしぬしの思ひはかりなりけり、蒲田葛飾の梅にもおくれず、上野隅田川の櫻にもおとらで、大江戸の花とめではやさんもの、げに此一ふしをおきてまた何かあらん」とある。【刊行】天保四年　【解說】河東節百種を祝詞・飾聲・思懷・追悼・記行・物語の六部に分類して集成した携帶用に便利な小本で、時代が新しいだけに曲數も多い。全部細字七行に新刻したものである。〔一之卷目錄〕(祝詞之部) 三番叟・京わらべ・四季の籬菜・ほうらい・貝づくし・鶴おどり・小唄掲鼓・しかた松・源氏十二段・松の內・松の後・羌高・酒中花・千とせの枝・竹馬の鞭・いの字扇・あら世帶・雛の出遣ひ・四季の辞・御田・ひなの礎・花のしおり・七くさ・汐くみ・住吉踊・四季の揆頭・傀儡師・蟬翔子・紳燭翔子下の卷(二之卷目錄)(飾聲之部) 光源五郎・糾城闘訣・矢島伍び・おせん物狂ひ・とらが文・良すえ・里綿擬・木上轉・帶引・鶏ぶとん・かし小袖・鶴八景・ぬれゆかた・相の山・夜のあみ笠・家ずくら・郭の花道・江戸ざくら・緑閨反魂香・花ある里・常陸帶・まがきの錦・總拼聲・分家踊り(三之卷目錄)(思懷之部) きぬた・かな輪・口舌の餅・黒かみ・常盤の聲・涼縁扇・翼のだん・謀師坊說法・三輪の山・閏下の卷・目蓮山人(追福之部) 花がたみ・ひとせ川・水調子・夜のにしき・ぬれあふぎ・廿日の月・うかむ瀨・ますみ鏡・霞の二葉・秋のぬるで(四之卷目錄)(記行之部) 濱費道行・放下僧道行序・放下僧道行・わにの段・しのだ妻・鈎狐の段・江口の道行・伊達樂道行・はしら鏡・草まくら・角田川・黒小袖・大和弁・虎少將・鳴神・景淸(五之卷目錄)(物語之部) 跡成相撲・名劒編・淸見八景・小袖模樣・盥身鑄・江のしま・幕鼓曲・道成寺・金山物語・傳教祈。 (藤井)

桃華蘂葉 たうくわずいえふ　有職　一卷　【著者】一條兼良　【成立・由來】奥書に、「文明十二年卯月上旬、爲二左大將(冬良)一勝計、任二筆所一注置一也、不レ可レ出二閫外一、深可レ藏二櫃底一、莫レ言之、後成恩寺殿沙彌御判(七十九歳)」とある。【諸本】群書類從卷四百七十一雜部二十六に收めてある。又一本この抄の後に「胡曹抄」(別項)を附け加へたものがある。【解說】一條家の故實・作法・領地等のことを主として書いたもので、當家着用裝束以下事と題し、束帶色目、直衣之事、布袴之事、狩衣直衣事、狩衣事、水干事、衞府具足事、鞍具足事、狩裝束、魚袋・劒色々事、平緒色々事、玉帶色々事、車事、隨身人數事、同裝束事、衞府長事、小隨身事、小舍人色事、通二禁裏仙洞一書狀并諸文事(當家口傳)、私書札禮節事、當家相傳十二合文書事、家門管領寺院事、家領并敷地等之事等を記し、別に本朝本書事と題し、國史・律令等の書名を掲げ、可レ覺悟二條々一と題し、諸種の故實を記し、又讀樣の事と題し、讀み難き文字を抽出し假名を附けてある。 (石村)

燈火說話 たうくわせつわ　「人文神話」を見よ。

東金茂右衛門 とうがねもゑもん　「全盛虎女石」を見よ。

桃花流水 たうくわりうすゐ　讀本　五卷　【作者】山東京山　【畫工】歌川豐廣　【角書】(繁談傳奇)　【刊行】文化六年　【諸本】京山全集(帝國文庫)所收。

【梗概】松江の國主藤原秋年の賀筵に、星合梶之助の讀の歌の不祥なるを難じた山中左衞門は寶刀鳩丸を賜はり、梶之助は不興を蒙つたが、その刀を帶びた伜三之助を鷲に攫はれ、計らずも鳩丸を得た梶之助の奸策によつて、左衞門は寬罪に切腹し、妻柏木、娘小君は追放の憂目を見、屢々危難に遭ふが、摩利支天の冥助によつて救はれる。一方三之助は、伊吹山で忠臣春瀨由良之進の義兄粂六に助けられ、梶之助に知られて遂に粂六はその毒矢に斃れる。三之助は粂六の血を飲んで剛力無双の精を受け、粂六の妻尾峯と共に三河の宮路山に移り、熱田に出でて、こゝに柏木と小君の行方を尋ねてゐた由良之進に會し、偶々尾峯は小君を救ひ、なほ柏木の漁師に救はれてその家に來り、主從相會するを得たのであつた。かくて主家に對する謀叛が露はれて遂電し、當國岩巻山の盗賊に投じてゐた梶之助を討つて仇を報い、三之助は目出たく歸參し、忠臣として恩賞された。

【解說】三好松洛と竹田小出雲との合作の「花衣いろは緣起」を飜案したもので、題名に桃花流水とあるやうに、文武兼備の山中左衞門の風流が後の禍となるに始まり、角書に示されてゐるやうに、伜三之助が鷲に攫はれて木曾に入る。卽ち三之助は嘗て左衞門が助命した粂六に救はれ、娘小君は粂六の妻尾峯に救はれ、而も粂六夫婦が山中家の忠臣春瀨由良之進の一族であるといふ不思議な因緣、敵梶之助の舊惡が露顯し、三之助主從の相會した地に來て討たれるといふ因果の道を取る。勸善懲惡の作意に外ならない。 (笹野)

道灌 だうくわん　歌人　【姓名】源姓。太田持資。幼名資長(資永とも)、字は源六郎。小字を鶴千代。剃髮後資灌(道觀とも)、備中入道とも號す。【生歿】永享四年に生れ、文明十八年(一四八六)歿す。享年五十五。【法名】靜勝院春苑香月、別に洞昌院香月道灌　【墓所】相模國糟屋洞昌院にあると傳へらる。【閱歷】道灌の傳

源頼政―仲綱―廣綱―隆綱―國綱―
―資國―資治―資房―資淸―
持資(道灌)―資康
資常―資忠―資宗

記は諸書に記載のもの比較的多い方であらうが、確實の資料は乏しい。武人で詞事に優れてゐたと云ふ史實が後世憧憬の的となり、口碑を生む理由となつた所も多いやうである。しかも後世傳記者の多く賴りとする「慕景集」「平安紀行」「わが宿草」等の盡くが假託らしいので、所傳中、確實のものとして信を置き得る點が甚だ尠い。父道眞(資淸)は和歌連歌の才を有してゐた。「新撰菟玖波集」にも二首選入されてゐる。長子持資九歳の年、これを學校に登り十一歳まで歸家せしめなかつたと云ふ(永享記)。持資は關東に於て上杉の一執事程度の武臣の家に生れながら、早く文事的教養を受け、歌は飛鳥井雅世の添削をうけたといふ。而も天性豪放、屢々父の敎誡を被つたとも傳へられる。當時、父子は持朝の子顯房に仕へてゐたが、足利成氏の雙臣が横暴を極め、その形勢甚だよからざるものがあつた。持資享德二年從五位上に敍せらる。同三年成氏が上杉憲忠を殺すに及び、上杉持朝の軍勢と協力して成氏の軍を破つた。併し主顯房が翌年戰死するに及び、資淸も剃髮して道眞(道眞とも)と號し、持朝の命を奉じて河越に移り、岩槻城を築く。こゝに持資は、二十四歳で父の家督を繼ぎ得た譯で、正五位下備中守となり、左衞門大夫を號したと云ふ。時に主家たる扇谷家は、持朝四子定正(定政とも)が立つてゐたのであるが、上杉四老臣のうち、殊に道眞・持資の執政宜しきを得、衆望を一家に蒐め、山内家を壓迫するかの觀すらあつた。例へば康正二年、持資が千代田の地をトして江戸城を築くにあたり、河越岩槻の土民、工を援けて翌四月早くも竣工を見たと云ふ。また城中の館を靜勝軒と稱し、緇衣の徒を招いて詩宴を催したと云ふ(梵尾長柄等)。なほ城中に文庫を設け、菅公廟を建立したとも云ふ。持資は長祿二年剃髮して道灌と號した。その後文明時代に亙り十數年間は、關東の地、比較的靜穩なる事を得た。道灌上洛して後土御門帝に謁し、將軍義政に見え、種々逸話を遺したのも、その間、卽ち寬正五年(一四六四年)春のことであつた(三十三歳)。叡覽に御答へ申した歌と傳へられるものに、次の如き詠歎がある。「露おかぬ方もありけり夕立の空より廣き武藏野の原」「わが庵は松原つゞき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る」。又宗祇の關東下向も應仁の初頭であつた。應仁三年正月、父道眞の館自得軒で催された所謂「河越千句」には、宗祇のみならず心敬も同座してゐる。文明六年江戸

城に歌合會の催された際には、心敬は招かれてその判者となつてゐる。「靜勝軒記」及び「江亭記」の成つたのは、文明八年道灌四十五歳の年である。而も同五年、駿河出征の役、再び武事多端に向つた。かくて同十八年七月、道灌は定正の糟屋第に招かれ、入浴中をその臣の手により刺殺されたといふ。これは定正が山内顯定の術策に陷り、かく陰謀を廻らしたものだといひ、また道灌の勢力に對する主としての嫉みに依るものだともいふ。父道眞は當時、越生の館下寺に隱栖してゐたのであるが、明應二年(一說元年)、八十三歳で世を終へた。道灌の木像と稱するもの武藏稻付の靜勝寺に傳はつてゐるが、壯年の姿である。その他、芝の青松寺、小日向金剛寺にも傳へられてゐるが、これ等は老年の像であるといふ。

【著書】道灌の著と稱されてゐる諸作の多くが假託であることに渡邊世祐博士の考證がある(史學雜誌、昭和六年一月)。○平安紀行一卷(類從本にある。「太田道灌紀行」と外題されたもの神宮文庫藏。假託)○太田道灌自筆一卷(別名太田道灌自記)○わが宿草(別項)○つれ〳〵草(靜嘉堂文庫、內閣文庫に寫本存する外、「一家說林」に收載。警哉の「徒然草」に擬して隨筆を認めたゞ云ふ序文があるけれど、後人の假託らしい)○慕景集二種(別項)○太田道灌詠草一卷(靜嘉文庫本。「慕景集」に「花月百首」「太田道灌集」の端部を加へ集成を計つたもの。「道灌集」の奥書には松井幸隆が道灌自筆本を謄寫した旨を述べてゐる)○花月百首一卷(續類從第三九四題名の下に、道灌院入道道灌號太田持資との加註があり、更に卷頭に權大納言雅親卿とあつて、評點及び評語が入つてゐる。御點四十五點とその計數が最後に出てゐる。奥書は天正十二年日附の聖護院のもの外、寛政二年のものと享和三年のものの二種が錄へてある。この一書が、まづ道灌の歌集と目し得べき唯一のものであらうか)○華歌百首一卷(兼載百首・衣川百首とも)(戰闘を主題に詠んだ百首歌。續群文庫本には、宗祇奥未の序があつて、寄河駿介の家臣よりの解註がある。偽書か)。

【人物・歌風】諸書齊しく道灌を容貌魁偉、穎悟聰大と許してゐる。木像の相姿はさほどにも見えないが、武人らしい風采を有して居り、膽大であつたことは臆測出來る。而も執事として公平、博愛を以て下民に臨んだことは彼をしてかく有名ならしめ、かゝる情操が韜事と通ひ、或は諸葛孔明の再生と仰がしめ、金澤山に狩して急雨にあひ、笠を借らんとして村女から山吹の花を差出された逸話の如きも、これに因る捏造であらう。歌風は一般時流に添ひ、特に秀逸佳作と見るべきものがない。題材の着眼の妙なるものよりは調子の高い作に、却つてその個性の表出を求め得る。

見るまゝに夕ゐる雲も色々の花にぞ匂ふかつらぎの山

もみぢ葉にいま一入をましそへて時雨にはるゝ山の端の月

【參考】太田家譜○梅花無盡藏○禿尾長柄帚○村巷稿○大草紙○永享記○野史○續本朝通鑑○太田道灌 櫻井一義 ○太田道灌の紀行文歌集隨筆等に就て 渡邊世祐(史學雜誌四二ノ一)　（齋藤(清)）

東關紀行 とうくわんきかう　紀行文　【作者】未詳。古來作者について諸說がある。岡西惟中は「消閑雜記」に、「賀茂の長明が海道の記、世に擧りて長明が作なりとおもふは、いぶかしき事なり。夫木抄のうち、不二の白雲の詠、かれ是數首皆源光行が東行の詠とす。後の歌人考へ見るべし」と言つてゐる(その不二の詠といふのは、「東關紀行」中の歌である)。「扶桑拾葉集」に至つて、「東關紀行」に源光行の子親行の作と明記し、群書類從は大體それに從つて、「海道記」の作者に親行を擬した。併しこの推定も信憑すべきものではない。先づ兩者とも鴨長明の著にあらざる理由は、長明東下りの年代が「海道記」に見えた貞應二年より十二年前、「東關紀行」に見えた仁治三年より三十一年前で、兩者の一致せざる上に、文章の風格が彼の作と思はれないからである。次に「海道記」を光行の作となす說も同樣に、東國下向の年代の矛盾から肯定することが出來ない(光行・親行の項參照)。それで「海道記」は、無名の侘士の筆のすさびであつて、書中、承久の事變に非業の死を遂げた搢紳に對する同情の筆意の存するところから推すと、作者はかゝる緣邊の人であらうと考へ及ぼされる。次に「東關紀行」についても、「夫木抄」を見ると、紀行中の和歌數首が、何れも「路次記」の文句を左註として出してある。それが悉く光行作となつてゐる。「夫木抄」を信ずれば、これを親行の作とは定め難い。その上親行は承久三年の頃既に關東に在つたから、仁治の初旅といふ記事と一致しない。又光行の作とすると、仁治三年の東下を初旅と云へる記事に合はない。かくて遂に作者は誰だか分らないといふことになる。強ひて言へば、光行の「路次記」は確かに存したが、現存の「東關紀行」は後人の潤色したものではなからうか。一體現存の「東關紀行」は古色のまゝでない。「夫木抄」に抽出してゐるもので、類從本と對比すれば相違あるによつても想像される。【名稱】東關は關東の意に用ひられてゐる。例へば、守覺法親王の「左記」に、東關之雲外と西海之波上とが對句としてあり、又後伏見院御製石淸水御願書に、「すでにつかひをとうくわんにつかはして、おもふところ

長明道之記（初頁・挿畫）

をのべんとす」とあり、なほ文延慶三年の國牛十圖に、「馬は東關をもちてさきとし、牛は西國を以てもとゝす」とあるが如きである。

【諸本】「扶桑拾葉集」卷十一及び群書類從紀行部に收められてゐる。而して國文大觀・有朋堂文庫以下の後の叢書にも採られてゐる。古刊本には、正保五年版や寛政元年版(稀入小本ノ)があつて、「長明道之記」と題せられてゐる。これ等の諸本の間にはたゞ少々語句の相違があるに過ぎない。【內容】冒頭述懷の言をなして、齡は百とせの中に近づき、なす事もなくあかしくらし、いづこに住み果てようとも思ひ定めず、身は朝市にあつて、心は隱遁にある。かくて仁治三年の秋八月中旬、初めて鎌倉に下つたといふ意を表して一篇の序段となす。それから紀行に入り、鎌倉に下着するまでのことを詳細に記し、鎌倉逗留中、和賀江の築島、三浦岬などを遊覽し、鎌倉の地の繁昌を謳歌し、鶴岡の若宮を讚嘆し、二階堂の莊嚴に驚嘆し、大佛の造營、その功三が二に及んだ由を記し、末段十月二十三日鎌倉出立で筆を擱いてゐる。

【批評】この紀行の文體は、「海道記」(別項)と同樣で、對句が文飾上の唯一の生命となつてゐるが、これには漢土の事に對比する場合が多い。文中和歌も所々に引用してあるが、「千載集」中の東三條院の歌や、西行・後京極攝政良經の歌の如き、比較的時代の新しいものもある。なほ注意すべきは、本書にのせた故事の中に、往々事實を誤つたもののあることである。また記事が枝葉に亙り、文辭の整はない點もあつて、その文は必ずしも暢達を以て許し難い。文品は「海道記」に一籌を輸してゐる。【影響】「源平盛衰記」卷十二、大臣以下流罪の條に、太政大臣師長の尾張井戶田へ流罪の事がある。その道行の文は、「東關紀行」に據つたものであることは、殆ど疑ふことは出來ぬ。長門本「平家物語」も、根來本「平家物語」も、右の所はほゞ同樣である。「東關紀行」の作者は、前述の如く未詳ではあるが、紀行そのものは夙に存して、「平家物語」一類の書に攝取せらるゝに至つたものと思はれる。

【註釋書】東關紀行評解 島野奈次 ○新譯東關紀行精解 吉川秀雄 ○東關紀行註釋 畠中・辻緒 ○標註東關紀行 大町桂月

【參考】鎌倉時代の日記文學 佐佐木信綱(日本文學講座)○東關紀行の作者に就いて 島野奈次(國學院雜誌七ノ一〇)○東關紀行私見 後藤丹治(藝文一六ノ二以下)　（野村）

東巢居士 とうさうこじ　「喝食物の謠曲」を見よ。

東歸集 とうきしふ　詩偈　一卷　【著者】天岸慧廣【解說】この書は、佛乘禪師天岸慧廣の詩偈を編錄したものである。元應元年遂に元の天目山中峯明本禪師の禪風を慕ひて西航の途に上り、海上禪師の遷化を知りて痛悼し、一詩偈を賦したもので、道友の唱和あり、編して「巨海一滴」と云ふ。元の諸禪僧を歷訪して、正中元年に東歸す。この書は、元に歷遊中の諸作及び東歸後の諸作を收め、末に拈香法語及び序引を載す。夙に上版したれども傳はらず。元祿十四年、鎌倉報國寺主嵯峨直指菴道澄、紫野大德寺宗章の序跋を求めて再び開版した。この本赤極めて稀である。今は五山文學全集に收むるものに依る。　（鷲尾）

東儀鐵笛 とうぎてつてき　音樂家・俳優【本名】季治【生歿】明治二年七月に生れ、大正十四年二月四日歿す。享年五十七。【閱歷】家は代々雅樂を以て宮廷に仕へてゐた。年少の時より雅樂並びに西洋音樂を學んだ。坪內逍遙に師事して演劇の實際的研究に志し、明治三十九年、第一次の文藝協會創立に參與して、逍遙作「桐一葉」の片桐且元、「ヴェニスの商人」のシャイロック等に扮した。續いて、逍遙作「常闇」を樂劇に作曲上演した。第二次の文藝協會には、研究所講師となり、第一回公演「ハムレット」のポローニヤス及び墓掘男甲に扮して好評を收め、同協會の公演、試演每に主役に扮した。大正二年協會解散の後は、土肥春曙・池田大伍等と計つて「演劇無名會」を創設したが、土肥春曙の死に遭ひ、やがて同劇團は解散した。以來新派劇に加入して、逍遙作「實驗」の盲男に扮して好評があつた外、幾多の脚本の主要人物に扮した。

【藝術】彼の藝風は、洒脫とユーモアをもつて聞え、新劇界の一指導者として立つてゐた時代もあつた。なほ大正六七年の交より、學生の研究として日本音樂史の大成を志したが、未完成に終つた。晚年は多く振はず、志を得ずに病歿した。　（武藤）

東京新誌 とうきやうしんし　雜誌　【角書】[illegible]【刊行】明治九年三月創刊。同十六年一月、三百三十四號を以て禁止された。東京京橋九春社發行。【解說】撫松服部誠一主宰。編輯者中有名な人々には初めに松村春輔、後に桑野鋭がある。寄稿者として最も有力なのは、石井南橋・桑野鋭・三木愛花等。桑野は寄稿が緣で後に編輯長となつた。角書の示す如く、當時の泰平社會で見聞した珍事異聞を新奇な文章で書いて公にしたものであつた。論說・諷刺・風俗・雜記・情話・小說・詩歌・傳記等を收め、文體は漢文及び漢文直譯體、その大半は誇張の多い戲文調を用ひた。小說も漢文と和文とあるが、和文は人情本の體を眞似てゐる。特色として每卷の大半は、低級猥雜な諷刺戲文と情話をもつて埋められ、その對象の大半は、華族・官人・富豪の花柳情事である。筆端偶々政治に及び、新文化生活の批評に及んでも、多くは正面から論ぜず、男女の交情に假りて說くのを常とする。この諷刺文學も初めは風敎を正すといふ微意がこもつてゐたものらしいが、後にはたゞ露骨な猥褻に失し、遂に禁止された。これ等戲文の代表的なものは「內幕寫眞寶盧戲說」「柳街廓話」「長春園繁昌記」(紳士春遊記)「東京官員鏡」「東京寫眞一夕話」「第二世夢想兵衞蝴蝶物語」「入海浮世之鈎」等である。本誌は明治初期の諸雜誌中「花月新誌」と並んで、最も讀書人間に人氣と勢力のある雜誌であつた。而して「花月新誌」に於ける柳北の場合と同じく、これは主宰者の文壇的盛名による所もあつたが、一面この雜誌の思ひ切つて戲謔的な調子が時人の心を廣く捉へた點もあらう。ともあれ、かゝる漢文式戲文なるものは幕末から明治初期へかけての特殊な變態的文學形式で、當時敎養ある風流人士は必ずこれを弄するものとなつてゐたが、全く文學史的に特異な存在と見なしてよい。本誌は「花月新誌」と共に、かゝる漢文式戲文を代表するもので、殊にこの雜誌は、いはば集大成したかの觀があり、時代を知る好材料であると共に雜誌に小說的讀物を揭げた嚆矢であること(明治十年四月第四四號以下「八重山吹譚」)、民權運動乃至國會に關する戲作が政治小說の先驅となること、一般に當時の青年の創作欲を刺戟した點など特筆すべきであらう。　（神田(豐)）

藤渠漫筆 とうきよまんぴつ　隨筆　三卷　寫【著者】江馬春齡【解說】著者は美濃國大垣の醫

師、蘭方の名家である所から、治療・藥餌・本草等に關する談が多いが、又居住地大垣の藩風、市中の人情・習俗等を述べ、更に科學者の見地から俗尼の妄說、無智者の迷信などを排擊し、その他日常衆人の心得となるべき事項を多方面について論じてゐる。所說新奇で聽くべきことが少くない。卷末に大垣藩老小原忠寬(鐵心)の跋があつて、中に「征開黌の論高遠空理に走り、可言不可爲之事多く、此漫筆に至而は眼前之當事を述て、其論却而人之意表に出づ。語淺而意深く事實而論切也。當藩弊政之事に至而は、我黨頭上之一針砭を得る事多し。實に國手之卓見に感伏す」と言つてゐる。

【著者小傳】江馬春齡。名は椿、號は蘭齋、美濃國大垣の蘭方名醫元恭(蘭齋)の孫で、その通稱春齡を襲いでまた令聲があつた。（和田）

頭句 とうく 「短歌」を見よ。

春宮左近 とうぐうのさこん 「小大君」を見よ。

東宮女藏人左近 とうぐうのによくらうどさこん 「小大君」を見よ。

道具淨瑠璃 だうぐじやうるり 淨瑠璃【解說】素語の一形式。人形淨瑠璃座の組織は太夫の內から「櫓下」或は「紋下」といつて一座の責任者を出し、三味線は女房役、人形遣は雇人といつた關係を保つて來たのが、その業者の慣例であつた。併し三味線彈が獨立の位置を占めんとし、且つ豐澤團平(別項)によつて明治十六年四月三味線紋下が創設されて、三味線彈の位置が確保された。この機運の未だ達せられざる醞釀期、即ち文化・文政度以降、明治初年にかけて三味線彈の技藝は著しく、三味線の冴えたる彈手、一挺の三味線を中心にしての興行が試みられ、且つこの計畫がまた世人の嗜好にも投じた。この企てに選ばるゝ曲目は「阿古屋琴責」「堀川猿廻し」「千兩幟」などで、三味線の音色に聽衆を集めようといふ企てである。この興行が漸次地方に流行するに至つたが、この場合、常に一座の責任者、即ち座頭は、大阪における本格興行と異り、三味線彈がこれに當り、この下に美音・美聲の若い太夫が常に選ばれて旅へ廻つた。即ち「太夫」は「道具」に使はるゝといふ意味で、この三味線彈を座頭とする素語り一座の淨瑠璃を「道具淨瑠璃」と呼び、美音の若い太夫は、又道具に使はれながら咽喉の練磨、淨瑠璃の工夫に修業を積むことが出來た。また「なぐさみ」淨瑠璃といはるゝは本職の太夫でなく、素人がなぐさみに淨瑠璃を語り或は稽古するをいふ。即ち今日いふ「素人淨瑠璃」の意であるが、素人淨瑠璃と稱した事、筑後段物集の「竹本秘傳丸」に、なぐさみ淨瑠璃の達名の所載を證とすべきである。また「さかな淨瑠璃」といふは、宴席などにて語る一くさり淨瑠璃をいふ。語り手は、玄人・素人たるを問はない。併し即興風の淨瑠璃・文句を替へて、或る本曲らしく擬して語るは、別に略淨瑠璃と云ふ。（石割）

道具屋節 だうぐやぶし 「井上播磨掾」を見よ。

東見記 とうけんき 隨筆 二卷【編者】人見壹【刊行】貞享三年【解說】著者が林道春に師事した時、その談話を仔細に記し留めたもので、片々數百則、前後の聯絡もない。羅山の說の說明から始まつて、その經史・詩文についての所見、本朝の和歌・古典にかゝる所感、漢語の字義、和漢事物の稱謂、和漢の史談、雜書の解題、醫術の逸話、その他甚だ雜駁であつて取纏まつた事はなく、ただ羅山の博洽を窺ふに足るまでである。貞享三年編者の甥鶴山野節の序の外に、無年紀著者の自序、貞享三年春野傳の跋がある。

【著者小傳】人見壹。字は道生、卜幽軒・白賁園等の號があつた。丹波から京都に出て菅得庵に學び、後更に江戸に來て林羅山に從ひ、業成つて水戸侯德川賴房の侍講となつた。寬文十年(二三三〇)七月八日歿。享年七十二。著述に「五經童子問」「莊子口義棧航」「林塘集」等がある。（和田）

陶犬新書 たうけんしんしよ 隨筆 三卷【著者】おほ家かね延(中洲漁叟)。傳未詳。【名稱】自序中に「陶ものの犬夜を守る務しめなく、瓦の鷄晨をつかさどる益無しといふ古ことに違はす」と謙抑の意を以て題したもの。【刊行】天保三年【解說】通俗百般の事について自家の所感を述べてゐる。卷一に酒を人にすゝむる詞以下二十四則、卷二に水の價以下四十六則、卷三に刀劍以下五十一則を收めてゐる。天保二年の自序がある。（和田）

桃源瑞仙 とうげんずゐせん 「瑞仙」を見よ。

刀劍物の謠曲 たうけんもののえうきよく【曲目】武士にとつて最も大切な刀劍の奇瑞靈異を描いたものに「草薙」と「小鍛冶」がある。【謠本】五流新古謠本。謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集(日本古典全集)等所收。【草薙】四番目【作者】未詳【內容】慧心僧都(ワキ)が熱田宮に參籠してゐると、花賣の男女(前シテ、前ツレ)が來て、自分達は草薙の神劍を守る夫婦である。七日結願の夜眞の姿を見せようといつて消え失せる。やがて御殿が鳴動して、日本武尊(後ジテ)と橘姫(後ツレ)が現はれ、草薙の神劍を以て東夷を平らげ給うたことを語られる。神事物(別項)の「源太夫」と近似した曲である。大體正史に基づいてゐるが、「平家物語」劍卷を參照したらしい。複式夢幻能。寶生現行。

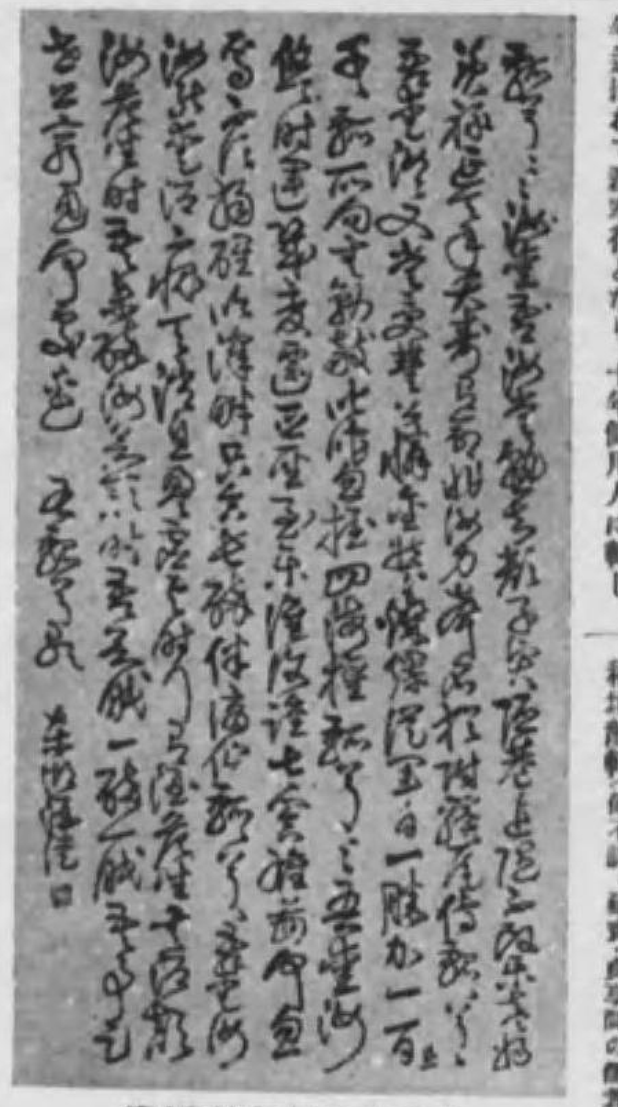
【小鍛冶】五番目【作者】未詳【內容】橘道成(ワキ・ヅレ)が一條帝の勅使として三條小鍛冶宗近(ワキ)の私宅に行き、御靈夢により御劍を打たせ給ふ旨の勅諚を傳へる。宗近は辭み畏んで、氏神稻荷明神へ祈願に參らうとすると、その途に童子(前ジテ)が出て、劍の威德を語り、御劍を打つべき壇を飾つて、われを待ち給へといつて、稻荷山の方に消え去つた。宗近は宅に歸り、潔齋して壇に上り、祝詞をあげた。すると稻荷明神(後ジテ)が小狐となつて現はれ、宗近の相槌を打ち、寶刀を鍛へあげてこれを勅使に捧げ、叢雲に乘つて稻荷山に歸つたといふ曲。小鍛冶の事は「尺素往來」に、小狐丸の事は「保元物語」卷一に出てゐるが、大體謠曲作者の構想したものらしい。二段劍能。五流現行。

【參考】謠曲評釋六輯 大和田建樹〇謠曲大觀 佐成謙太郎（佐成）

刀劍問答 たうけんもんだふ 故實 一卷【著者】伊勢貞丈【刊行】天保十四年十二月【成立】卷尾に、「この一帖或人の問によりて學悟のほど書記しておくる者也。寶曆十二年壬午八月四日」とある。刊本には貞丈玄孫の貞友、門人千賀春城・岡田光大の三人の名を連ねて、下に「同校」としてある。【諸本】寫本の中には刀劍圖の添うてゐるものがある。その刀劍圖は、初めに「前に刀劍問答を著す。されどもいまだ詳ならざる所あり。これによりて今更その要ましを繪圖にあらはすものなり。前の問答とひきあはせ見るべし」とあつて、蒔繪螺鈿野太刀、糸卷太刀、鞘袋かけたる糸卷太

刀、白太刀、黑太刀、兵庫鎖太刀、嚴物作太刀、打刀・鞘卷・跡絆脇差、太刀の名所等の圖を記し、各圖とも彩色を施してある。卷尾に「寶曆癸未年十月十八日平貞丈記」とあつて、本書の成つた翌年に更にこの圖を作製し、本書の後に附錄して參照の便に供したものであることが分る。【解說】刀劍の故實に就いて問答體に記してあるもので、御劍、鞘卷の太刀、糸卷の太刀、黑太刀、白太刀、銀劍、平鞘の太刀、衞府の太刀、陽の太刀、陰の太刀、つかひ太刀、はき太刀、さけ太刀、野太刀、兵庫鎖の太刀、いか物作の太刀、脇差の太刀、小太刀、中半太刀、御はかし、太刀の鞘袋、かんたうの帶取、雪の下の帶取、布の帶取、たくほくの帶取、尻鞘、太刀に袋かける事、太刀佩き樣、太刀に帶取結付る事、鞘卷の刀、白鞘卷、ゑほしかたの鞘卷、ゑひ鞘卷、さうまき、腰刀、腰の物、刀、ちいさ刀、鞘卷搦樣、鞘卷柄卷くこと、鞘卷束陣にても柄卷かぬこと、小刀、かうかい、下緒結ひ樣、ひきめ下緒、下緒の圖、刀に火打袋下る、打刀、鍔刀、上臈忠光が太刀、小打刀、脇差、脇差の小尻丸くすること、脇差下緒結樣、脇差の刀、大小の名目、守刀、守脇差といはぬこと、刀脇差飾の名、刄引、鎌倉下緒、中下、素鍔、鍊鍔等の六十四條。追加として、かんたうの帶取、園子純子の帶取、帶取寸法、下緒の寸法、刀さすこと、太刀の柄に卷く糸の色、まち鞘卷、太刀に袋付る事、聚柄の刀、革包の太刀、長伏輪の太刀、丸鞘の太刀、錦包の太刀、下鞘、見せ鞘、下緒岬に不納事、葬送ノ供廻刀柄鞘袋に入る事、二重下緒等十八條。都合八十二條が記されてゐる。（石村）

東湖 とうこ 勤王家・儒者【姓名】藤田彪。字は斌卿。通稱虎之介、後誠之進と改む。【生歿】文化三年三月水戸に生れ、安政二年(一五一五)十月二日大震災に遭ひ江戸に歿す。享年五十。【墓所】水戸市外常磐原に葬る。【閲歷】その先は參議小野篁より出づ。父幽谷は水戸藩に仕へて彰考館總裁であつた。文政二年父に從つて江戸に往き、龜田鵬齋・太田錦城の門に入つて學び、又岡田十松に就いて擊劍を學ぶ。九年幽谷の歿するに及んで家を繼ぎ、彰考館編修となり、總裁の事を攝した。天保元年選ばれて郡奉行となり、十年側用人に轉じ、藩主德川齊昭(烈公)の眷遇を蒙り機密に參した。齊昭が改革の政を布き、弘道館を建て、兵器・軍艦を造り、文教・武備を盛んにしたのは、皆東湖獻替の功に由る。齊昭が幕府の忌諱に觸れ、致仕謹愼を命ぜらるゝに及び、東湖もこれに坐して蟄居を命ぜられたが、嘉永六年再び側用人となり、學校奉行を兼ねた。この時米艦が浦賀に來て通商を請ひ、天下騷然たるものがあつた。幕府は齊昭を起して海防の議に與らしめたので、東湖も齊昭を輔けて計畫するところ多かつたが、その主唱するところは攘夷に在つたので、議論やゝもすれば閣老と合はなかつた。併し諸藩の俊才の來つて國事を論じ教を請ふ者が、常にその門に滿つるといふ有樣であつた。明治二十三年正三位を贈らる。【著書】回天詩史二卷〇常陸帶二卷〇弘道館記述義二卷〇東湖遺稿二卷〇藤田東湖全集一冊〇東湖隨筆二卷(別項)（佐久）



（藤田東湖筆蹟（書畫大觀））

東湖隨筆 とうこずゐひつ 隨筆 五卷【著者】稻垣鹿軒(傳不詳。延寶・貞享間の儒者と思はる)。【刊行】貞享元年【解說】「史記」「漢書」、その他、種々の漢籍から支那歷代の人の嘉言善行を集錄した假名交りの書で、隨筆と云ふ名は少々當らぬ。自序中に兒童の話柄を供給しようとしたものとの意がある。卷一に沈約觀學以下六十則、卷二に漢人簀竹ヲ煮ルニ熟セズ以下四十七則、卷三に宿瘤閔王ノ皐后ニ入ル以下三十五則、卷四に法善道術以下三十七則、卷五に牛黃傳以下二十七則を收め、各條標目の下に所據書名が出してある。天和三年著者の東湖陞直稻垣鹿軒の序がある。（和田）

東湖隨筆 とうこずゐひつ 隨筆 二卷【著者】藤田彪【刊行】明治三年【解說】東湖門人等所輯。著者が天保十年頃から同十二年迄に記したもので、主として幕末の關東諸藩の名士等と交際した時の感想や談論の大要を述べ、また尾藩・柳川藩・宇和島藩・佐賀藩等の治務上の事などもしてゐる。名士には川路三左衞門聖謨・新見伊賀守正路・矢部駿河守・杉浦出雲守・岡本花亭・林鶴梁・渡邊華山等が許されて居り、就中矢部駿河守との談論の樣が奕々としてゐる。序跋はない。（和田）

濤骨 たうこつ 俳人【姓名】西村彌須美【閲歷】明治十八年五月十三日鳥取縣日野郡八鄕村丸山に生る。曹洞宗大學林を半途退學、宇野玄機に三年間參禪した。島根縣女子師範その他の職を經て、現に東京府立第六高等女學校に奉職してゐる。俳句は初め坂本四方太に教を乞うたことがある。「石楠」創刊當時から亞浪に參じて名を成すに至つたが、大正十三年、去つて雜誌「伯勞」を創刊し、半歳にして「短唱」と改題し、形式・內容共に俳句の規制を排して自由表現に倣ひ、「宏大な椅ではや松などを立て金利で食つてるとは」「門燈消しに出ては樂む一本のたばこ日車の花の金」の如き作をなして今日に及んでゐる。【著書】第一日本短唱集。（臼田）

東西庵南北 とうざいあんなんぼく 草雙紙作者・狂歌師【本名】朝倉力藏、又藤八【別號】葛飾偶人・六樹園・梅山人南北・阡陌園【生歿】生年未詳。文政十年(二四八七)七月歿す。享年六十餘。【閲歷】本所竹町に住み、後、芝金杉町に轉住、板木彫刻師で狂歌を好み、五側の判者となつた。「復讐源五郎鮒魚」(文化五年)を處女作とし、文化七年以後、毎年四五部づつの草雙紙を發表し、それが文化十四年まで續き、文

政年度に至り、や、發表數を減じ、同五年の五部が多く、歿年まで一二部づつ發表してゐる。その作は、敵討物と戲曲中の人物を點綴せる實錄物とが多く、要するに草雙紙の類型から一歩も出てゐない。【著作】復讐角兵衛獅子（文化六年）○於千代半兵衛初夢噺（同年）○鏡山後日㑹（同七年）○三度笠江島遊（同八年）○花曇笠尾連環（同年）○丁子車引手妻（同九年）○女合法輪修行（同年）○梅若丸花一ツ番（同十年）○美濃根拵合宿（同年）○家（同十年）等。

【附記】東西陸南北と鶴屋南北（別項）とを混同し、兩者の草雙紙を併せ論じた書もあるが、後者は文政五年初めて作を發表し、遙かに特色ある作品を成してゐる。（山崎）

東齋隨筆 とうさいずゐひつ　隨筆　二卷一冊【著者】一條兼良【諸本】元祿六年刊本の外二三の刊本があるが、群書類從雜部に收められてゐるものが最も佳いやうである。【解說】主として本朝中古の雜事を抄錄したもので、一種の說話文學たる形を成してゐる。隨つて主觀的な漫筆ではない。日本に於ける隨筆と冠したものの最初とされてゐる。音樂類・草木類・鳥獸類・人事類・詩歌類・政道類・佛法類・神道類・禮儀類・好色類・興遊類の部を立てて種々な說話を列載してゐるが、多くは諸書の提要である。卽ち例へば、この書の草木類の所に、南殿の櫻の事が記してあるが、これは殆ど全く「古事談」第六に出てゐるのを採つたのであり、又人事類の鴨長明の事は、「十訓抄」第九に出てゐる文を節略して、聊か追補した位のものと認められ、かつ詩歌類の都良香の竹生島に於ける詩作の逸話の如きも、大體「古今著聞集」卷四から得て來たものと想はれる。全體を通觀して、條數もさほど多くなく、編制の上に別に新味があるでもなく、至つて平凡な撰述であつて、兼良の名を重からしめる程のものではない。（和田・野村）

道齋隨筆 だうさいずゐひつ　隨筆　三卷【著者】金田宏（通稱文平、號道齋。元文・寶曆間の京都の儒者。詳傳未詳）。【刊行】寶曆七年【解說】尋常の隨筆と異なり、漢學を修める者のために讀書・作文上の用意を述べたもの。上卷に讀法正誤、句讀點法、書法鉤法、四聲點發、直音如字、反切正訛、二合字。中卷に助字本義廣說。下卷に古今字通、同訓字、省文、偏旁通用、重語、五正字、五俗字、倒句例、反語例、誤字、唐詩選序跋故事を載せてゐる。讀法正誤、古今字通の諸條の如きは操觚者の必ず參見すべきものである。寶曆五年釋義龍、同年海西宮奇、同年中和の三序、同年桃何德の跋がある。卷末に「中文平著」とある。（和田）

陶齋先生隨筆 たうさいせんせいずゐひつ　隨筆　一卷【著者】趙陶齋【刊行】文化九年【解說】書家として聞えた趙陶齋が古稀の年に書いた隨筆で、自序の次に「息心古稀寓言」と題し、次に相撲・將相無種・學問・茶道・茶會・烏絲欄・蘭亭帖・科舉・雪舟の諸目について感想を錄し、その文は俳文的の滑稽味を帶びてゐて、著者の曠達磊落の胸中を窺ひ知られる。本書は門人村上默齋が、その師の遺稿數卷中から摘抄し、陶齋の手筆通り摸刻したものである。文化七年村上恒菴（卽ち默齋）の跋を添へてゐる。【著者小傳】趙陶齋。字は仲頤、號は陶齋、又息心居・枸杞園・淸暉閣なども號した。淸人の後で、長崎に生れ、後、上國に出て書を以て鳴つた。天明六年（二四四六）四月歿す。享年七十餘。（和田）

東西南北 とうざいなんぼく　詩歌集【作者】與謝野寬【刊行】明治二十九年七月、明治書院【解說】作者の第一集であると同時に、その短歌は、新派和歌の第一集であり、明治以降の詩歌運動に記念さるべき著である。またその詩は、序に於て井上哲次郎氏が「假令ひ其成功の如何は未だ豫知すべからざるも」と述べてゐるやうに、極めて初期の摸索時代にあつて、勇敢に踏み出した第一步である。更に落合直文は、同じく序に於て、「その歌に、一種の特色を備へ、雄々しき調を以てまさるものか」といつてゐる。直文は始唱者ではあつたが、その實行は鐵幹にはじまつてゐる。直文は寧ろその實行を怖れてゐたかも知れない。更に自序では、「小生の詩、幼年より、聊かの草稿をも、とどめ來らず候」といひ、「世の專門詩人の諸君とは、大に反對の意見を抱き居る者に御座候」といつてゐる。これに對して當時謙遜か傲慢かとの批評を蒙つた。實は明治以降の新體の詩歌の創造者は、始唱者の外に作者自身があるといふくらゐの自負があつたものに違ひない。詩歌何れに於ても、磨かれたものは稀れである。併し露骨といひ、生硬蕪雜といひ、また「新體詩の新體詩らしきもの、我れ初めて、鐵幹に於て之を認む」といつた當時の詩評には、ひそかに砂金のやうに光るものの幾つかを見落されたのも事實である。これは、その運動が主になつて眺められたからであらう。（北原・內藤）

東西夜話 とうざいやわ　俳話　三冊【著者】各務支考【成立】元祿十四年【刊行】元祿十五年【由來】上中二冊は元祿十四年十月十二日に近江彥根の五老井に於て松井汶村の亭森川許六の校を經たもので、中冊末にその旨を斷つた汶村・許六の識語がある。序跋はない。【解說】元祿十四年夏四月初めに著者が京都を立つて越中に遊び、十月初め越前敦賀に歸着するまでの旅中の紀行文・發句、各所の俳席で遺した夜話、各地の俳士の發句等を輯錄し、これに許六・浪化の發句をそれぞれ立句とする百韻二篇を併せたものである。著者が旅中經過した地は、大津・彥根・敦賀・山中・大聖寺・金澤・石動・安居・井波・城ケ端・魚津・富山・高岡・有磯・放生津・三國・鳥居・府中等で、紀行の文章・發句・夜話・諸家の發句等は、これ等の各地で遺され、又輯められたものであるが、夜話はこれ等の中の十六箇所で遺され、これが本書の內容上の中心をなすものである。而してこの夜話は、或は發句・附句の批評があり、風雅の本質論があり、附方論があり、種々樣々であるが、要するに俳諧上の諸問題を後學に敎示しようとしたものである。なほ百韻二卷は、兩者共に旅中の各所で、その地の連中によつて次第に卷かれて行き、前者は彥根に始まつて城ケ端で滿尾し、後者は井波に始まつて彥根で滿尾してゐる。（各務）

東西遊記 とうざいいうき　「東遊記」「西遊記」を見よ。

動作態 どうさたい　文法【獨】die Aktionsart, die Aspekt【英】aspect【佛】l'aspect【解說】インドヨーロッパ語族（別項）比較文法中、動詞の變化に關する事項の一。この語族中の一派なるバルトスラブ派諸國語には、今日動詞の諸變化のうち、「態」（英 aspect 露 Вид）と稱するものがある。卽ち（一）不完成態（英 imperfective aspect 露 Несовершенный вид）、（二）完成態（英 perfective aspect 露 Совершенный вид）、（三）頻回態（英 iterative aspect 露 Многократный вид）（四）一回態（英 semelfactive aspect 露

Однократный вид）と名づけらる。インドヨーロッパ語族の古代にあつては、動詞の變化に於て、今日のバルトスラブ派に於ける區別と同種の區別をなすのが主であつて、所謂「時」（tense, tempus）（別項）の區別はこれより派生したものと考へられる。隨つてこの語族古代のこの變化にも、「態」（Aspekt）なる名稱を推し及ぼして與へ、或は Aktionsart（直譯的には「動作の種類」）といふ別名を與へる。ブルークマンの分類に從へば（一）Punktuelle (momentane, perfektive, aoristische) Aktion 一回動作。例、「發見する」。（二）Kursive (durative, imperfektive) Aktion 繼續動作。例「昇る」。（三）Perfektivische Aktion 完成動作。例「氣が附いてゐる」。（四）Iterative Aktion 繼返動作。「彼はよくかう言ひく〜した」の如き。（五）Terminative (durativ-perfektive) Aktion（繼續後）終結動作。例、「今成し上げた」等。すべて「動詞に含まれる動作が如何に行はれるかの種類・有樣を表はす」（ブルークマン）ものであつて、「法」（mood）（別項）が主觀的態度を含むに對し、「態」は客觀的事實の種類を示すといはれる。【參考】Brugmann: *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen.* 1922. S. 493f. ‖ Noreen-Pollak: *Wissenschaftliche Betrachtung der Sprache.* 1923. S. 415f. ‖ Jespersen: *Philosophy of Grammar.* 1924. p. 286f.（壽岳）

陶山 たうざん　「鬼貫」を見よ。

動詞 どうし　文法【名稱】舊時代には多く作用言・作用の詞等の字面を用ひたが、明治になつて中金正衡の「大倭語學手引草」に創めた動詞といふ名が、田中義廉の「小學日本文典」、中根淑の「日本文典」等に採用され、大槻博士また「語法指南」や「廣日本文典」にこの稱呼を用ひてから、今日一般に廣く行はれることになつた。但し中根淑の動詞は普通の所謂形容詞をも含む。今日もこの用法をなす人に、松下大三郎・高橋龍雄氏等がある。【解說】用言（別項）の一種で、動作・作用若しくは狀態を現はす品詞。論理的に云へば、狀態概念を現はす語。例へば「讀む」「立つ」「降る」「見ゆ」「あり」など。或は動作を現はす品詞といひ、作用を現はす品詞と定義する人もあるが、動作若しくは作用を現はすものの外に、「見ゆ」の如き狀態を現はす語もあり、「あり」の如き存在を現はす語もある。「あり」の如きもののためには存在詞といふ特別の名目を設けた人もある。併し存在も一の狀態であり、動作・作用は狀態の推移である。これを論理的範疇から云へば、動作・作用・狀態・存在、皆或る對象につきての狀態概念である。【特徵】〔性〕動詞は意義より分けて自動詞と他動詞とすることがある。普通の說明によれば、自動は動詞の動作の獨り自らするもの、他動は他の事物を處分する性質のものと云ふ。動詞の自他と云ふことは、既に本居春庭が「詞の通路」にこれを論じ、黑川春村の「活語四等辨」などの說もあるが、その說くところは、おのづから然る、みづから然する等の自と、他に然する、他に然せらるゝ等の他との自他であつて、今日說かれる自他は Intransitive verb を自動詞、Transitive verb を他動詞と云ふ自他の區別である。卽ち專ら西洋文典から學んだもので、もし西洋の國語に於ける如く、それが文法的範疇として存するものならば、自動・他動の區別も明瞭であるが、わが國語に於ては單に論理的範疇の外に出ない。他動詞には目的の語を要すると云はれる。しかしこれと所謂、自動の標準との區別が困難である。「本を讀む」の「本」は目的、「空を飛ぶ」の「空」は標準と云ふ。西洋の文法に於ける自動と他動との區別は、又その動詞が受身の形を取り得るものと、取り得ざるものとの區別と一致してゐる。わが國語に於ては、自動詞でも「親に死なれる」「子に泣かれる」など云ふことができる。それ故に、わが動詞の自他は單に意義上の論にとどまり、從つてその區別も曖昧であると云ふことは、諸家の說の一致してゐる所である。〔形〕動詞は叙述をなすに當つて、語形の變化を成す。例へば、「鳴く」「起きる」と云ふ動詞は、「鳥が鳴かない」「鳥が鳴きました」「鳥が鳴く」「早く鳴け」、「まだ起きない」「私も起きました」「早く起きれば」など、「なか、なき、なく、なけ」「おき、おき、おきる、おきれ」と變る。この語形變化を活用（別項）と云ひ、變らぬ部分を語幹（別項）、變る部分を語尾といふ。四段活用・一段活用など云ふのは、この語形變化の種類である。又未然形・連用形・終止形等、いはゆる活用形（別項）は、その變化する語形を、用法より類別したものである。〔法・相・時・態〕いづれの國語に於ても、動詞の形態上に現はれる變化は複雜である。それは動詞の現はす概念に結びつく論理的範疇が多樣であるからである。これが文法的形式として現はれるものに、人稱あり、數あり、法あり、相あり、時あり、態あり、或は動詞そのものの上に現はれ、動詞を助くる助動詞の上に現はれる。印歐語に於ては古代語は前者に富み、近代語は後者に富む。人稱や數は、我が國語には問題でない。次の法、卽ち叙述の樣式、言ひ換へれば事實を事實として述べるか、假定とか推量とか願望とかの形で述べるかの區別・相、言ひ換へれば動作を自分がするか、人からされるか、人にさせるかと云ふ主語と動作との關係・時、言ひ換へれば動作が何時行はれるかの時間的差別・態、卽ち繼續とか完了とか云ふ動作の態樣、これ等のものは何れも我が國語では主として助動詞で現はされる。受動の「取らる」「敎へらる」に對する時、初めて「取る」「敎ふ」が能動となり、「取りき」「取らむ」の過去・未來に對する時、「取る」は卽ち現在となるもので、「取る」「敎ふ」そのものは、一の動詞が、一の狀態概念を現はしてゐると言ひ得るのみである。「取るべし」が推量、「行きたし」が願望を現はすに相違ないが、これ等のものは動詞の法を現はすと云ふよりは、むしろ助動詞の意義の論である。もし我が國動詞に於て法を論ずるならば、活用形に現はるゝ叙述の形式でなければならぬ。この意味で大槻博士は、（一）第一終止法・第二終止法・第三終止法（二）連體法（三）不定法（四）中止法（五）連用法（六）名詞法（七）命令法を立て、三矢博士は直說法・命令法・前提法、それに直說法を細別した終止法・連用法・連體法を立てられた。但し法の立て方には、なほ議論の餘地がある。（小林）

唐詩解頤 たうしかいい　七卷【著者】釋大典【解說】「唐詩選」を漢文で解釋したもの。自序に、「さきに余唐詩集註を著す。既にして又その粹を摭りその腴を味ひ、その要捷を取り、まゝ或は一二前註の罅漏を補ひ、因つて解頤七卷となし、以て學者に便す」とある。解頤とは「漢書」匡衡傳に、「衡說詩、解人頤」とあ

る故事に基づく。「唐詩選」の註釋書中の錚々たるものである。〔佐久〕

滕氏家傳 とうしかでん 「家傳」を見よ。

童子敎 どうじけう 「實語敎」を見よ。

唐詩集註 たうししふちゆう 七卷【著者】釋大典【刊行】安永三年【解說】明の蔣一葵（字は仲舒）の「箋釋唐詩選」に基き、淸の唐汝詢（字は仲言）の「唐詩解」その他、博く諸家の說を採り、更に宇野明霞兄弟の說と、自己の說とを加へたものである。〔佐久〕

唐詩選 たうしせん 詩總集 七卷【編者】不明。通常これを李攀龍（于鱗）の編纂と稱してゐるが疑はしい。【成立】明代末期【由來】初め李攀龍が「古今詩刪」を選しようとして、「唐詩刪」が先づ成り、自ら選唐詩序（滄溟集中に收む）を作つたが、漢魏及び明代は選序共に未完成のまゝ歿したので、王世貞がこれを遺憾とし、續輯して刊行した。即ち今の「古今詩刪」三十四卷である。而してその體例を一にするために、故らに唐詩の序を省いて載せなかつた。然るに「古今詩刪」は卷帙が尨大で、初學に不便であるため、狡猾なる商賈が攀龍の盛名を奇貨とし、主として「詩刪」中の選唐詩を抄錄し、且つ「唐詩品彙」「同拾遺」等の選本を以て補ひ、又「滄溟集」中の選唐詩序を取つて卷首に冠し、撰者を攀龍に託して世人の耳目を欺瞞したものである。その新に補入したものの中には、攀龍の平生の持論と齟齬するものが多く、自然にその破綻を暴露し、又次序を顚倒し、文字の異同の考訂が不十分である等、選者の眼識の闕如せることは、一見瞭然たるものがある。この書が坊賈若しくは村學究の手に成つた僞書であるにも拘らず、頗る世人に歡迎せられたのは、その編者の名を聲望ある文人に託したのと、これを利用する書估の商略とにも依るであらうが、又一には入手に便であつた爲めである。支那の文學史上、漢文・唐詩・宋詞・元曲と稱する中にも、唐詩は支那文學の精華と云はれ、作者が蔚然として輩出し、淸朝の康熙四十二年、彭定求等が聖祖の敕を奉じて編纂した「御定全唐詩」九百卷目錄十二卷には、二千二百有餘人の作者の詩四萬八千九百餘首の多きを收める程の盛觀を呈し、苟も詩學に志す者は、先づ唐詩から入るのを至當とするが、「全唐詩」の如き浩瀚な書は、購入繙讀共に至難であるために選集本を必要とするに至り、この要求によつて作られたものも少くないが、古來著名なものに、「三體詩」「唐詩鼓吹」「驪珠詩格」「唐詩品彙」「唐詩正聲」「唐詩歸」「唐詩選」「唐詩紀」「唐詩所」「唐詩解」「全唐詩錄」「唐賢三昧集」「唐詩別裁集」「唐詩三百首」等があり、各々長短がある中に、「唐詩選」は、大體に於て各時代の代表的作家の各種の體制の詩を、比較的廣汎な範圍に亙つて網羅し、唐代詩壇を一瞥するに、簡にして要を盡した觀あると云ひ得るものであつたことが、その流行を來す有力な所因であつた。故にこの書が一度世に出ると、先を爭つて刊行せられ、或は二三首の增減をして分別し、從つて異本が少くない。而してその多くは當時の名家の評註と稱し、中には袁宏道・鍾惺・譚元春・錢謙益等、攀龍と反對の意見を有する者の名を冒するものすら現はれるに至つた。「四庫全書總目提要」には、「(唐)汝詢も亦唐詩あり、これは乃ちその註を剿取す。皆坊賈の爲す所、蔣一葵の直解亦名を託せしならむ」と云つてゐる。【傳來】明・淸の間、「唐詩選」の註解の作られたものは頗る多く、乾隆頃迄は盛んに行はれたが、近世に至つては支那に於て行はれず、却つて我が國に於て廣く普及した。その我が國に傳來したのは、恐らく德川初期、慶長・元和の頃であらう。次いで正德・享保の頃、荻生徂徠が李攀龍・王世貞を祖述して、古文辭の學を提唱して以來、蘐園門下の諸生は皆これを奉じ、就中服部南郭が家塾の教科書とし、これを校刊して公にし、又「國字解」を作る等、頗るこれを尊重したので、弘く上下に流布せられ、中に山本北山・釋六如・大窪詩佛・菊池五山・頼山陽等これを排擊する者もあつたが、近く明治に至るまで長く士人の愛誦する所となつた。【內容】全七卷に收錄してゐるところは、作家百二十八人の詩四百六十五首である（南郭校定本に據る）。これを詩體に據つて分類すれば、（卷一）五言古詩十四首。（卷二）七言古詩三十二首（以上古體四十六首）。（卷三）五言律詩六十七首。（卷四）五言排律四十首。（卷五）七言律詩七十三首。（卷六）五言絕句七十四首。（卷七）七言絕句百六十五首（以上近體四百十九首）。即ち主として近體の詩を採り、就中絕句が全數の半以上を占めてゐる。これを時代別に觀れば、初唐二十九人八十五首。盛唐四十二人二百七十四首。中唐三十六人八十一首。晚唐十七人十九首。逸名氏四人六首。計百二十八人四百六十五首。即ち盛唐の詩が最も多く、その數に於て全體の約五分の三を占め、個人としても岑參は二十五首、王維は三十四首、李白は三十三首、杜甫に至つては五十一首を數へてゐる。【價値】本書は前述の如く攀龍の名に託した僞撰の書ではあるが、何等の基づく所なく妄に選んで名を冠した僞書贋作とは類を異にし、本書の詩四百六十餘首の中、「詩刪」中に見えないのは僅に二三十首に過ぎず、餘は皆同一であるから、これを攀龍の選と看做すことも必ずしも不可ではなく、加之假令選擇の失當があるとしても、その所載の詩はまた唐詩であり、選者の如何は唐詩そのものの眞價値と關するものではなく、且つその書は初學に取つて、唐一代の詩壇を管見して、その一般的知識と趣味とを得るに、最も簡便にして要を盡した所謂手頃の書である。その書が坊賈村學究の手に成つた故を以て、一概に唾棄すべきものではない。【註釋書・參考書】箋釋唐詩選七卷 明蔣一葵箋註・唐汝詢直解 ○唐詩選彙解七卷 明徐震 ○吳注唐詩選七卷 明吳吳山 ○唐詩選白七卷 明李攀龍註・陳繼儒評 ○評註增補唐詩選七卷 淸錢謙益 ○唐詩選國字解七卷 服部元喬 ○唐詩選附言 服部元喬 ○唐詩選掌故七卷 千葉玄之 ○唐詩選講釋七卷（滿文堂書本）千葉玄之 ○唐詩選箋注八卷・餘言二卷 戶崎允明 ○唐詩解頤七卷 釋顯常 ○讀唐詩選 市川世寧 ○唐詩選評釋 森泰次郎 ○唐詩選新釋 佐久節 ○唐詩選詳說 簡野道明 〔宇野・木多〕

藤樹 とうじゆ 儒者【姓名】中江原。字は惟命。通稱與右衞門【別號】西江・默軒・頤軒・天君等。世に近江聖人と稱す。【生歿】慶長十三年三月七日、近江國高島郡小川村に生れ、慶安元年（二三〇八）八月二十五日歿す。享年四十一。【墓所】小川村玉林寺に葬る。鄕人祠廟を作りてこれを祭り、今に至るまで衰へないといふ。【學說】初め程朱學を修めたが、後、王陽明の說を信奉し、「存養本心」を以て務めとなし、「孝經」を以て標言となし、愛敬の二字を揭出して人に訓へた。我が國の學者の陽明學を唱へるのは實に藤樹に始まる。【閱歷】幼より祖父吉長に養はれた。吉長は伯耆國米子藩主加藤貞泰に仕へたが、元和三年貞泰が封を伊豫國大洲に移さるゝに及び、吉長に從つて大洲に往つた。年十一の時、「大學」を讀み「自天子以至於庶人一是皆以修身爲本」といふに至り、深く感ずる所があり、初めて聖賢の學に志した。年十五にして祖父を喪ひ、その家を嗣ぎ、十七の時、禪僧の京都より來たのに就いて「論語」を學んだ。後、「四書大全」を得て能くその義に通じた。寛永二年、父吉次が歿したので近江に歸り、母北川氏を伴ひ來らうとしたが、母は海を踰えて他鄕に往くことを好まず、乃ち致仕して近江に歸り、孝養を怠らなかつた。又藤樹書院を興し、徒を聚めて書を講じた。明治四十年十月二十三日正四位を贈られた。【人物】人と爲り溫厚で疾言遽色する事がなかつた。鄕に里民を引いて訓へ諭した。故に人は賢愚となく皆その德に化し、惡を去り善に就く者が多かつた。【著作】大學解一卷○中庸解一卷○論語解一卷○翁問答八卷○藤樹規一卷○心學文集一卷○江西文集二卷○詠草一卷○藤樹先生遺稿四卷。（陽明學參照）〔佐久〕

中江藤樹筆蹟（井上通泰氏藏）

中江藤樹（藤樹書院藏）

洞簫 どうせう 樂器【異稱】通簫・簫管【名義】管樂器の一。支那では今なほ盛んに行はれ、我が國では中世初期に行はれた。簫管に似た竹管であるが、簫管は下底が蠟で塞いであるのに反して、この器は底なく上下相通じてゐるからこの名がある。【性質】長さ二尺內外の長い竹管の前面に五指孔を穿ち、背面に一指孔を穿ち、上端の切口の前方にU字形の凹所（歌口又は吹口）を作つたもので、これを尺八の如く縱に持ち、上端の歌口を脣に當て、左手の拇指で裏孔を、食指で表の最上孔を、無名指でその下の孔を按じ、右手の食指・中指・無名指で下方の三孔を按じて吹奏する。その調律は、近世のものは筒音より順に下方の孔から上方の孔を開く時は、支那近世音階なる上・尺・工・凡・合（六）・四（五）・乙となる。「雅樂漫錄」に、裏孔へは竹紙を張るやうに記してあるのは誤りである。又近世朝鮮李王家の雅樂隊に於て用ひるところの洞簫に、表孔五、裏孔一の外に、別に上部に淸孔と稱する一孔を作り、其處に葦內の薄膜を張るやうにしてあるが、これは朝鮮に於ける洞簫に限り、支那の古來の洞簫にはかゝる孔は存しない。【沿革】西亞細亞又は古代埃及にて用ひられた豎笛、即ち豎篴の縱笛が西域を通して支那に入り、西域に於て既に竹管と變じてゐた。その支那に入つた時代は大體に於て漢の武帝の頃か。漢に於てその指孔の數も增し、支那趣味に合ふやうに改造されて、唐代には殊に盛んに行はれ、玄宗皇帝亦これを善くされたといふ。支那では現在もなほ行はれてゐる。我が國では既に古く推古天皇の頃に行はれたので、その頃に支那から輸入されたものらしい。俗に聖德太子が尺八を吹き給うたと傳へられるが、これは所謂尺八でなくて、この洞簫であり、今も法隆寺の寶物として傳はつてゐる。奈良朝頃には我が國でも屢々行はれたが、平安朝に入つて衰へ、仁明天皇の時の樂制改革には、この樂器を雅樂器の中に入れなかつたので、遂に亡びてしまつたものらしい。朝鮮へは李朝の第四代世宗の時に、明から輸入されたといふ。今も李王家雅樂に於て用ひられてゐる。〔田邊〕

道成寺 だうじやうじ 「鬼女物の謠曲」を見よ。

道成寺物 だうじやうじもの 所作事【解說】能の「道成寺」から出てゐるが、また能の「三井寺」「櫻川」「望月」「石橋」等を取入れたものもあり、操淨瑠璃の「定家」（一名新道成寺）、「用明天皇職人鑑」（鐘入の段）、「道成寺現在蛇鱗」「鬢女房染分手綱」（第五道成寺の段）、「日高川入相花王」等によつたものも尠くない。【沿革】歌舞伎では寛文頃から既に現はれ、延寶年中、二代玉川千之丞が演じたものは古く有名であつた。爾來、水木辰之助等の鐘入の所作、坂東又太郎の「御能道成寺」（元祿八年、大阪岩井座）、「三世道成寺」（元祿十四年、江戶森田座）、竹島幸十郎の「緣鬢頭の男道成寺」（寶永三年春、京都早雲座）等の種々の型が現はれ、後の道成寺の推興といはれる瀨川菊之丞所演の「無間鐘新道成寺」（長唄杵屋彌十郎、作曲七代杵屋喜三郎）まで、既に十數種に達する。この菊之丞の道成寺は、享保十六年三月、江戶中村座「傾情鑑引名護屋」第三番目に演ぜられ、小夜の中山の無間鐘を撞いた傾城葛城が、死んで地獄の呵責に苦しむのを道成寺の鐘供養に持込んだ作である。俗に「傾城道成寺」とか「中山道成寺」とか稱した。こゝに舞踊としての形式が生れ、その後道行・舞・鐘入・祈り・口說・セメの六段から成る。これを菊之丞が改訂して寛保元年正月、大阪大西芝居「傾城今樣道成寺」（道行小夜のあかつき）となり、更に修補して延享元年三月、江戶中村座「百千鳥娘道成寺」（長唄吉住小三郎、作曲七代杵屋喜三郎）一名「さなきだ道成寺」、「石橋」と「道成寺」とを結びつけたもので傾城を娘に改めた。前奏的道行所作として、宮古路節「駒鳥戀の關札」が附き、內容は道行・舞・鞨鼓・手踊・石橋・鐘入・鐘のカタリ・祈り・蛇體等から成る。娘道成寺の初めで、後に幾派となく分れた。かくて寶曆三年三月、中村座中村富十郎所演の「京鹿子娘道成寺」に至つて集大成され、曲・振とも優れて道成寺物の代表作となつた。なほ多種多樣の道成寺物が生

れたが、その曲節の大部分は長唄が占め、我が所作事中の最大系統をなすに至つた。【種目】〔外記節〕家櫻道成寺（寛保元年正月市村座。八代市村宇左衛門・曾我十郎役で鐘入道成寺）〔一中節〕壯嶋花鐘入（明和五年三月中村座。太夫、二代都和中事冨士田護江）。〔常磐津節〕鐘入妹背傘（寶暦三年三月市村座。鉄所作の段は「花笠娘鳥形」）○鳴響鐘入櫻（寶曆九年三月市村座。鳴神全盛）○初花雪入相（安永六年三月森田座。中村仲藏の清玄亡魂の道成寺。富士田・鶴名賀の禰宜）○尾上の鐘恐夜話（文化七年六月市村座。双面を加味した水中鐘入の道成寺）。〔富本節〕花外太夫位（明和三年十一月森田座。鐘入、後に獅躍天）○田舍娘七面身延（天保元年六月中村座。日蓮記の道成寺。長唄との掛し物）等。〔清元節〕花浪現在道成寺（明治二年正月守田座。竹本との掛合。入利花王の演藝の所作）。〔長唄〕あやめ道成寺（寶曆六年五月中村座。二代芳澤あやめの染分手綱の傳授の鐘入）○百千鳥娘道成寺（通稱、今様道成寺。寶曆六年十一月市村座。前出「さなきだ道成寺」の補稿。花嵐の鐘見はこの時から）○花紫風流道成寺（寶曆八年五月中村座。紅和歌野の飯藁の道成寺）○山櫻姿鐘入（明和七年二月中村座。四代市川團十郎の男道成寺）○花籠風折烏帽子（安永三年三月市村座。今様道成寺の續編。鐘入の鬘が後世の基準）○鐘掛花振袖（安永六年二月中村座。「京鹿子」の續編。亂拍子は後世に傳はる）○京鹿子娘道成寺（天明三年八月市村座。通稱、えど鹿子。道行は常磐津「傾城千種錦」）○花街道成寺（文化七年七月中村座。道成寺の歌詞を廓噺に摸つたもの）○重帽子不器用娘（文化十二年七月河原崎座。通稱、かさね道成寺。清元との掛合）○紀州道成寺（明治三十二年三月新富座。文久元年三月、五代杵屋三郎助が作曲したものを上場。謠曲の道成寺を脚色。現演行曲）等。（双面參照）

京鹿子娘道成寺（別番附）

【京鹿子娘道成寺】長唄（角書）院からは閻頭へさかけ山櫻【通稱】「京鹿子」、又は「娘道成寺」。【別名題】「□□鐘鼎道成寺」「江戸櫻娘道成寺」「江戸紫娘道成寺」「結髮鹿子道成寺」「花笠鹿子道成寺」「容艷花娘道成寺」「深紫鹿子道成寺」「假紫鹿子道成寺」「櫻三升娘道成寺」「亂拍子鐘娘振袖」等。【初演】寶曆三年三月二十六日初日、江戸中村座「男伊達初買曾我」第三番目【作詞】藤本斗文【立唄】吉住小三郎【作曲】杵屋彌三郎【振附】中村富十郎・市川團五郎【傳來】曲・振とも添削されて傳存。義太夫節で上演された事もある。【道行】常磐津―「道行雨彩草」「道行櫻の霞」「道行丸い字」等。富本―「咲初花振袖」「道行風流花振袖」「道行瀨川帽」等。清元―「道行縁結袖」。竹本―「道行面影草」「道行梅袖香」等。【題材】中村富十郎の寶曆二年九月京嵐座所演「娘道成寺」を潤色したもの。【內容】鐘供養を窺みに來た白拍子、實は清姫（中村富十郎）が、番僧（中村傳九郎・市川八百藏）を騙して女人禁制の庭に入り込み、振り面白く踊つて隙を窺ひ、龍頭に手をかけたかと見る間に忽ちその中に消え失せる。諸僧鐘を圍んで祈ると、白拍子は蛇體となつて現はれる。初演當時は鞨（中啓）の踊・手踊・鞠唄・花笠踊・手拭踊・羯鼓・手踊・石橋・鐘入・祈り・蛇體等より成つてゐるが、寛政末頃現行の形式となり、最初に道行・亂拍子（蹈りきの舞）があり、石橋の代りに鈴太鼓の踊が入り、最後に押戻しがある。道成寺物中の代表作であり、所作事中の不朽の名篇といはれる。

【道成寺忠臣藏者】長唄・常磐津・富本の掛合【別名】忠文道成寺【通稱】奴道成寺【別名題】「東育奴娘道成寺」「道成寺眞似三面」「奴道成寺猿三面」等。【初演】文政十二年十一月二十三日初日、江戸中村座「金幣猿島郡」第二番目大切【作詞】松本幸夫【立唄】富士田新藏【太夫】常磐津小文字太夫（後の四代文字太夫）・三代富本豐前太夫【作曲】長唄、四代杵屋三郎助・常磐津、五代岸澤式佐。富本、三代名見崎德治【振附】藤間大助・松本五郎市【傳來】天保十四年十一月、河原崎座で修正し、更に先代中村芝翫が整理した。【內容】白拍子花子實は清姫・忠文双面蝦蟇（芝翫、後の四代歌右衛門）が中啓の舞まで踊り、烏帽子・鬘とも脫いで、奴姿から狂言師姿になるので、白雲・黒雲が怒つて責める處へ、白拍子櫻子（五代瀨川菊之丞）が出て自分の代りに踊つた由の口上を述べて入る。これから三面（子守參照）の踊等から鐘入となり、鐘を引上げると忠文の亡靈の公家惡となつて現はれ、山伏姿の八坂の淨藏が押戾す。

江戸踊兒男道成寺（正本）

【道成寺二人鐘入】長唄【通稱】二人道成寺【別名題】「江戸鹿子兩人道成寺」「色競二人道成寺」「京鹿子一對振袖」等。道行―「道行狹夜千鳥」（常磐津）「道行梅花笠」（富本）等。【初演】天保十一年十一月十一日初日、江戸市村座「鑽西八郎降魔鉾」第二番目大切【作詞】三代櫻田治助【立唄】二代富士田新藏【作曲】二代杵屋勝五郎【振附】四代西川扇藏・二代藤間勘十郎【道行】「道行兩花道振袖」（四代常磐津文字太夫。作曲、五代岸澤式佐）【傳來】曲・振とも傳存。但し修正されたもの。【內容】白拍子違理實は主馬の小金吾と同佛御前實は鑽西八郎とが、尼湖月尼實は眞鶴の精靈と同松月尼實は武藏左衛門鶴岡とを同宿狩りにして「京鹿子」を二人で分けて踊る。今日では三人・四人・五人道成寺等さへ行はれる。【臺本】各流正本。江戸長唄（俗曲評釋）・日本歌謠集成（卷九・十）・歌謠音曲集（日本名著全集）・日本音曲全集（第一・第十五卷）・名曲選（名著文庫）・舞踊劇集（日本戲曲全集）・大南北全集第十五卷・默阿彌全集第二十卷等所收。【參考】道成寺物の典據 高野辰之（日本演劇の研究第二）○道成寺考 屋代弘賢編（燕石十種三）○歌舞伎道成寺考 關根只誠（演劇雜話）○古今役者大全卷之五故實卷（寬延三年刊）○役者一口蔚（娘道成寺所作事傳承・演劇文庫卷六）○役者全書道成寺（歌舞伎叢書）○芝居と史實（三田村鳶魚）○歌舞伎圖說（守隨憲治・秋葉芳美共撰）○江戸時代音樂通解（町田博三）○江戸近世舞踊史（九重左近）○日本近世舞踊史（小寺融吉）（東洋藝術史講座第十二）○所作事類纂道成寺物（歌舞伎研究一二）○道成寺物の系統（秋葉芳美）（人間と舞臺三ノ四）○道成寺の研究（佐々・幽山・鈴木等）（演藝畫報合同三ノ四）○京鹿子娘道成寺の型（演劇女史）（歌舞伎叢八ノ一一九六）（秋葉）

道成寺緣起（どうじやうじえんぎ） 繪卷【解說】

この緣起はまた「日高川草紙」「賢學草紙」とも呼ばれ、異本別本の類も尠くないが、就中この緣起の當の舞臺たる紀伊國道成寺所藏の二卷本が一般に世に知られてゐる。道成寺本によれば、話は醍醐天皇の延長六年の事で、熊野詣での若僧は奧州の人、女は室の郡眞砂の寡婦である。この繪卷は應永年間の作で詞は後小松院宸筆、繪は土佐光重の筆と傳へてゐるが、詞にも時に誤字や無理な當て字があり、繪としても土佐派の筆致が殆ど見られない。奥書に足利義昭の花押があつて天正以前の製作たることは明かながら、これを應永まで上せ得るか否かは疑はしい。話としては情緒纒綿、活動的であるべきに繪が存外のんきで卑俗の趣の多いのは蓋し御伽草子になり行くこの種繪卷の特色である。道成寺本以外には土佐廣周筆と傳ふる酒井忠正伯所藏の一卷本の如きも比較的世に知られてゐる。酒井家本に於ては若僧は清水寺の賢學、女は二八の姫君となり、肝心の道成寺といふ寺名さへ逸せられてゐる。物語としては道成寺よりも更に轉化したものであらうが、畫致から見れば、道成寺本とあまり製作の年代的懸隔があるほどでもない。近頃この緣起に於ける大蛇化成の直接な手本に就いて、これが「華嚴緣起」（別項）、殊に義湘とその後を追うて龍女となる善妙の說話であらうといふ說が出てをり、話の筋のみならず、龍蛇の形も高山寺の「華嚴緣起」に比較すれば彼此相近似してゐる。（田中（一））

道成寺緣起（紀伊國道成寺藏）

堂上派（だうじやうは） 和歌【解說】

近世宮廷歌人の間に傳承された歌道の流派であつて、地下派（別項）に對立する名稱である。中世後期東常緣によつて始められた所謂古今傳授は、二條家（別項）の歌學を祖述するものであるが、宗祇の後、二條家當流・堺傳授・奈良傳授の三流に分れた。この中、二條家當流と云ふのは宗祇より三條西實隆に傳へ、公條・實枝と相承けて實枝より細川幽齋に傳へた系統で、古今傳授の主流をなすものであるが、幽齋の後宮廷と民間と二方面に分れて傳承された。前者が堂上派で後者が即ち地下派である。かくて堂上派と云ひ、地下派と云ひ、その奉ずる歌學說の根本に於ては差異なく、ただ社會的位置の相異より來た差別に過ぎないのであつて、自由研究、傳統打破を基調として元祿頃より擡頭して來た歌壇の新機運に對しては、共に舊派の系統に屬するのである。今堂上派の系統と主なる歌人を擧ぐれば次の如くである。（一）中院通勝の系統。通勝は天正十六年、幽齋より古今傳授を受けた。通勝の子通村、孫通純、曾孫通茂、その子通躬、相ついで和歌の家となる。通茂の門に、松井幸隆・相馬昌胤等が出た。（二）八條宮智仁親王の系統。智仁親王は後陽成帝の皇弟。慶長五年幽齋より傳授、寛永二年後水尾院に授けた。後水尾院より中院通茂・飛鳥井雅章・日野弘資及び皇子後西院等に傳ふ。雅章の門に本多重世、重世の門に山名義豐がある。後西院は皇弟靈元院に、靈元院は武者小路實陰・中院通躬・烏丸光榮及び皇子有栖川宮職仁親王等に授けた。職仁親王より典仁親王に、典仁親王より正親町公明に傳ふ。谷川士清は職仁親王に學んだ人である。（三）烏丸光廣の系統。光廣、慶長八年幽齋より傳授。その系統には光廣の孫資慶、その子光雄、光雄の孫光榮、光榮の子に光胤及び日野家を嗣いだ資枝がある。資慶の門に岡西惟中、光雄の門に松井政豐・鈴木重知等が出た。（四）三條西實條の系統。實條は幽齋に傳授した實枝の孫であるが、夙く父を失ひ幽齋について歌學を受けた。その子に公勝及び公種（武者小路家祖）がある。公勝の子實教、公種の子實陰（別項）、實陰の子にして高松家を嗣ぎたる重季等名がある。實陰の門に、似雲・拓植知淸が出た。實陰の孫實岳の門に澄月、澄月の門に、桃澤夢宅・木下幸文等がある。夢宅の門に宮下正岑が出た。以上は幽齋の系統を引き二條派の歌學を傳へた人々であるが、その他に（五）準二條派と目すべきものがあり、姉小路家・淸水谷家・芝山家等がこれに屬す。姉小路家では實紀、淸水谷家では實業、芝山家では重豐・持豐父子等が、名ある歌人である。實業に學んだ香川宣阿は景樹の養父たりし景柄の曾祖父に當る。重豐の門よりは多田義俊、持豐の門よりは深田正韶等が出た。次に（六）冷泉家（別項）の系統がある。中世後期、上冷泉・下冷泉の二家に分れて父祖の學を傳へ、本來二條家と系統を異にするのであるが、近世に入りては上冷泉家の爲綱は、幼にして父を失つた爲め、中院通茂の教を乞ひ、また冷泉家中興の祖と云はれる爲綱、孫爲村も靈元院より古今の傳授を受け、烏丸光榮に和歌の添削

を受けなどして、格式上多少の差異を見るのみで、歌風に於ては、二條家と殆ど選りなきものとなつた。要するに如上の堂上派歌人達は、その據つて立つところは舊來の傳統的歌學說であり、その歌風に於て何等特筆すべきものもないのであるが、併し近世の新派に屬する人達のうち、直接間接にその教へを受けざる者は殆どなく、その點で近世新派歌壇の母胎として無視すべからざる存在である。（歌道傳授參照）

【參考】日本歌學史 佐佐木信綱 ○近世和歌史 同上 ○大日本歌學史 福井久藏 （中島）

同人（どうじん） 俳誌【主幹】青木月斗【創刊】大正九年四月、大阪で發行。【解說】日本派系統の地方俳誌で、主なる同人は、岡本圭岳・楊村月村・花木伏兎等である。（水原）

唐人殺し（とうじんごろし） 「漢人韓文手管始」を見よ。

同人社文學雜誌（どうじんしゃぶんがくざっし） 雜誌【刊行】明治九年七月創刊（初め月刊、後半月刊）。同十六年五月、第九十二號にて廢刊。東京小石川同人社。【解說】社長中村敬宇主宰。同人社には文學會社（後に文學會）といふものがあり、社長の司會の下に每月一二回會合して、「社友ヲシテ學問文藝ヲ上進セシメ言辭文章ヲ修メ善ク セシメ」る目的で、朗讀及び演說を試みた。その筆記の中、會の目的に最も叶ふものを集め、これに社長及び社長の交友の文章・詩歌を交へて出來たのが、この雜誌である。內容は歷史・傳記・學術・政治・宗教・哲理等、「凡ソ學問文藝ニ關スル古今中外一切ノ談論ヲ集錄シタル」ものの觀があるが、文藝的方面に限つて見れば、若干の譯詩・漢詩・和歌等がそれに屬するのみである。從つて主宰者中村敬宇の詩文が時の文壇の一方に影響してゐる外、雜誌全體としては何等交渉がないといつてよい。ただかゝる內容の雜誌に文學の二字を冠したところに、當時の文學觀の片鱗が見える。併し純文學的見地から離れると、後年發展した思想の萌芽めくものが聊か窺知される。例へば、言口一致論（即ち言文一致論）、無主權論、敎法論（宗教解釋論）の如きものである。（稻田(秀)）

東征繪傳（とうせいえでん） 繪卷【解說】大和唐招提寺所藏五卷。この寺の開祖鑑眞和尙が唐朝より日本に渡來して、戒律宗を弘める次第を敍いたものである。奧書によれば、永仁六年その末寺たる鎌倉極樂寺の忍性菩薩が、本寺に施入したものであつて、繪は六郎兵衛入道蓮行筆、詞書は美作前司宣方を初め四人の手に成つたことが知られる。繪は描寫の達者なもので、人物の目つきの鋭い點も特色であるが、殊に衣裳に好んで隈取りを施し、描線の當りの強い點の如きは宋畫の影響として注目される。作者蓮行に就いては本卷の奧書以外に、その經歷を明かにしないが、この繪を以てみれば、蓋し永仁當時の作家として相當に腕前の優れた人であつたことが窺はれる。當時は各宗とも祖師の繪傳が多く行はれた時代で遺品も少くないが、この繪卷の如きは、その製作の年代や由來や作家まで確かな點に、併せて逸傳の畫家蓮行の存在と作風をも知り得ることは、殊に興味ある點である。（唐大和上東征傳參照）（田中(一)）

東征繪傳（唐招提寺藏）

當世阿多福假面（たうせいおたふくめん） 滑稽本 一冊【作者】洒落得心（貝原篤信に擬した平秩東作の戲名）。【名稱】主人公阿多福の名をそのまゝ題名としてある。【成立】安永九年【諸本】滑稽本集（日本名著全集）・滑稽文學全集所收【解說】鞴吹の多喜兵衛の店先へ醜婦のお福が來、自分の身の上を話し、生國上總から出て江戸で女中奉公をしたが、そこの主婦が亡くなり、番頭の惡計から店も衰へ、やがて裏長屋に主從四人の生活をなすやうになつたが、もとの下男の久介に濱人形を賣らせたりして、主婦の十三回忌には主家を再興させたと語る。それにつけても今時の女は我がまゝで、亭主には働かせて自分は遊んでゐる。女たるものは矢張り節約をなし、夫・姑の機嫌をとり、誠の道を行かねばならぬと說く。貝原篤信の「大和俗訓」を下世話に砕いて滑稽化したものである。（小池）

當世乙女織（たうせいをとめおり） 浮世草子 七冊【作者】錦文流【名義】序に「當世乙女織とは何を以て名とす。……情の言の葉を糸で紡ぎて下心、戀と云ふ字を縦にして、萬の色を緯の糸、白紙の梭にかぞへ入れ、管城の管にまき、筬にまかせて織り顯はせば、全七の卷となりぬ。よつて當世乙女織と名付く」とある。【刊行】寶永三年正月、大阪萬屋彥太郎板。但し序には、「寶永第二の秋」とあるから、成立は同年か。【諸本】近世文藝叢書第四所收。【解說】（卷一）大阪下の關之傳、（卷二）諸國並大阪之傳、（卷三）津國難波之傳、（卷四）京伏見江戸之傳、（卷五）武藏山城之部、（卷六）武州攝州之部、（卷七）難波名代法師之部と分つて、卷一・二・四・六は各四章、卷三・五・七は各三章より成る。說話の筋をいへば、（卷一）大阪の富者徳織の律義な一子徳次郎、偶々惡友に誘はれて扇屋若紫に馴染んで遊蕩に耽る。父は彼を下の關の出店に追ふ。徳次郎は又呼子屋みさ山に親しみて持て囃され、程なく破產する。父母はこれを憂ひ、病を得て死んだ。徳次郎は大阪に歸つたが、家財等悉くなくなつてゐたので、又下の關に引返す。みさ山は長崎の客に身請けさるゝ記念とて、或る隠居より貰つた定家の色紙等貴重な品々をくれた。徳次郎はこれを携へて大阪に歸り、大名に賣つて千兩を得た上、その藏元を命ぜられ、又渦荷を買つて大利を得たので、再び遊蕩癖が出た。こゝに又富士屋伊左衛門は夕霧に馴染み、破產しかゝつた頃夕霧は死んだ。或る夜の夢に杉原の紬の殘した緒環を賴り、新町口の茶屋について主人の市と昔を語つた。（卷二）伊左衛門は、家業を手代に任せて諸國色修行に出で、江戸より北國・中國・長崎を經て大阪に歸る。かくて伊左衛門は剃髮して是空堂といふ隱宅に住む。徳次郎がこゝに訪ね來たので、親類より頻りに妻帶を勸むるが、およそ妻とするには地女と遊女と何れが勝るかと問ふ。伊左衛門は遊女を妻とするの非を說いて誡める。徳次郎は地女の不貞の例、遊女の意氣の尊ぶべき例を引いて數十條の話をなす。その例話は本書の中心を成すものである。その例話は手代に通じて不貞なりし相模屋津右衛門の妻の話、夫死して四人の子を殘されながら、重手代と通じて同棲した鎌田屋喜三右衛門の妻の話。（卷三）傳五郎といふ貧しい男と契つた妓よし川、小八といふ富有な客の誘惑を斷つて一筋に傳五郎に馴染み、年季明けて世帶持ちとなつて後、小八に金を惠まれても受けなかつたが、家主の好意で繁昌した話。飯炊女玉白人となつて名高くなつたのを、舊主それと知らずして呼んだ話。（卷四）岩戸といふ美少年、伏見の妓常磐に馴染み、勘當されて常磐と淀川に入水したのを、所の百姓等に救はれた。百姓等遊女屋にかへさず、岩戸の父に二人を與へたので、父は百兩を百姓等に贈り、百姓は五十兩を遊女屋に與へ、二人を夫婦にさせた話。京屋の妓式部、客の奈良九に馴染む。加州の客が彼女を身請けしようとするので、式部は奈良九に內通し、手附けを打たせて加州客の身請けを防いだ。奈良九は身請金に窮して江戸に走り、車善七に匿まはれ、後父の許に歸つたが、式部は彼を死んだものと思つて尼となつた。（卷五）江戸巴屋の妓玉川、浪と馴染んだ。浪はために家を追はれた。親方が二人を隔てるので、玉川は怒つて晉羽の茶屋大文字屋に身を賣つた。ところが玉川は病を得て腰が抜けた。親方は困じて欺いて彼女を棄てた。或る武士これを見て、大文字屋の不都合を責め、八百兩を出させた上、その家財を沒收せしめた。玉川は病癒えて家を持ち浪をその家に迎へた話。喜吉といふ男、牙儈に欺かれて、百兩の手形を取られた話。（卷六）奧州二本松の僧雪堂、十二年の學寮生活の後上京して綸旨を受けたが、吉原の遊女菊川に逢うた。菊川或る怨みから妓千代崎と間違へて禿を殺したことより僉議となり、同時に雪堂の破戒並に綸旨を粗末にしたことが露はれ、死刑に處せられた話。新町の妓大礒が參宮するので、客某、下男に身を窶して同伴した。工藤といふ客大礒を奪はうと二人の友と途に要して下人を買收した。客某三人に買收さるゝと見せて、三人を五條で會ふ約束して先に歸し、大礒と悠々參宮する話。（卷七）以上徳次郎の談話に對して、伊左衛門は次の談話をなした。木屋の出羽といふ妓、紙寄といふ客の同情に依つて身請けされたが、身の振り方について、紙寄を欺いて他に嫁し、尼となるといつて二百兩を詐取せんとした。又その不實より夫に追ひ出され、權兵衛といふ者と同棲したが、又心を他に移したので、權兵衛は彼女の顏に疵をつけて自殺した話をした。こゝに素仙老法師が來て、二人の論を仲裁した上、喩へ話をなす。或る日素仙が愛染明王に淫慾の束縛を脫せんことを祈つてゐるところに、四人の女來りて、堂を壞さうとすると、明王が現はれて人間の願望の得手勝手なことを告げて諭した。（藤村）

當世女容氣（たうせいをんなかたぎ） 「好色五人女」を見よ。

當世銀持氣質（たうせいかねもちかたぎ） 浮世草子 五冊【作者】永井堂龜友【角書】禍福糾持【刊行】明和七年【諸本】氣質全集（帝國文庫）所收。【梗概】（卷一）唐物商鯛長屋德介といふ銀持、吳服屋遊介に誘はれて祇園に遊んだ。遊介は香取といふ妓に含めて、德介に對して愛想づかしをさせる。それより德介はこの妓を喜三郎・常次郎といふ二人と張合ふ。ために二人は大金を失ひ、家屋敷まで德介に買取られてしまふ。遊介は巧みに德介に取入り、每日德介と島原通ひしてよい目を見る。（卷二）大阪の湧屋金右衛門といふ銀持、非常に犬好きであつた。一人娘に二度聟を迎へたが、犬の事から不緣となつた。これを知つた盜賊どもが謀つて、若い仲間を犬好きにして、まんまとその聟となり、娘も懷姙したが、一日犬が乞食を嚙み、その乞食がこの盜賊聟を見知つてゐた事から惡計露見して聟は逃亡した。（卷三）江戸の銀持氷藥屋定次郎、吉原の高雄を身請けして妾とした爲めに妻は病となつて死んだ。これに感じて定次郎は隱居し、妾を妻として京岡崎に引込んだ。所が又下女ゆきに手を附けて密に妾としたのを妻が知り、一夜妾宅に踏み込んだ。定次郎は漸く妻を宥めて家に歸れば、折しも丁度盜賊が家財を盜んで出ようとする所であつた。然るに豈計らんやこの盜賊は妻の父で、主人の浪人を救はんための盜みであり、又妾ゆきは意外にもその主人の娘であることが知れた。（卷四）若州小濱の者慾心深く惡事を働いて追放され、京に出て米商人俠左衛門に巧みに取入り、一廉の米屋となり、與九郎兵衛と稱したが、慾心より因業な事をして多くの人を苦しめた。或る年の大晦日に無慈な醫者の許で無理に催促をすると、そこに居合せた若狹人で、彼の素性をよく知る八兵衛といふ者に罵られて格鬪に及んだ末、怒つてその家を馳け出す拍子に、自分が先刻路地に置いた鍋に躓いて倒れ大怪我をした。翌くれば元日、その妻は夫を看護する間に偸んで食べた雜煮の餅を咽に詰らせて死に、與九郎兵衛も二日に死んだ。八兵衛は與九郎兵衛と格鬪の際、我が懷に落ち込んでゐた八兩入りの財布を得て、それを資本に繁昌した。（卷五）玉屋有右衛門といふ銀持、生來負け嫌ひであつた。天王寺の浮瀨や、道頓堀の川作にて、無理の飲食をして浮腫の病に罹り、重態であつた。が、幸に德安といふ凡醫の藥の效見えて全快し、同時に負け嫌ひの癖も癒つた。その祝に、德安は玉屋から家作まで買ひ與へられ、一生安樂の身となつた。【構想】角書にある通り、禍福は人生に於て、糾へる縄のやうなものであるといふことを表はすところに目標を置いて作られたやうであるが、判然とは見えてゐない。恐らく事件の興味本位に書かれたものであらう。每卷讀切り、都合五種の銀持に關する說話を綴つたものである。銀持氣質の名必ずしもよく當つてゐるとはいひ難い。（小池）

當世五人男（たうせいごにんをとこ） 小說 二編【作者】村上浪六【發表】前編明治二十九年八月二日より九月三十日迄、後編同年十一月一日より十二月二十七日迄、東京朝日新聞に連載。【刊行】明治二十九年十二月前編、同三十年四月後編、嵩山堂。【梗概】川上三吉・倉橋幸三・黑田健次・上田力・吉田雄藏といふ各々一癖ある五人の書生が、隅田川の岸、橋場と千住の間の汐入村で共同苦學生活をする。その苦學生活中の悲喜

種々の挿話を浪六流の人生哲學で捏ね並べたもの、後に續出する五人各自の列傳の發端と見てよい。何れが主人公といふでもなく、別に一貫した筋の發展もない。いはば挿話の連續である。十年都門の苦學を見切つて熊野の山奥の故郷に歸る川上三吉と、これも豐後の山奥生れの少年吉田雄藏が、函根山の道中で志を語り合ふ。川上は十年の經驗から苦學の無效を說いて思ひ止まらせようとするが、吉田は我が志は我のみ知るといふので聞き入れない。川上は吉田の前途に同情し、汐入村に殘つてゐる四人の仲間に紹介してやる。こゝから四人の共同苦學生活と、四人それ〴〵の性格の描寫に入る。無禮講の月見の宴に度を外して泥棒に入られ、貧書生の生活が一層の窮を極めるが、倉橋の一策で、上田力を恩人として敬愛してゐる紳士富田正夾を說いて吉田を書生にして貰ひ、且つ夜具その他の援助を得て一息つく。兄貴株の倉橋は、更に三人の衣食の道を工夫せんとし、苦鐵心夜叉手の名で「居家處世」といふ論文を草して新聞に投じたが、文名偶に揚り、その新聞社の客員となる。最初の月給を得た日、黑田・上田の二人に五圓づゝやつて、使ひ道を見る倉橋の腹の中も面白いが、見られる二人の性格の對照はなほ一層面白い。黑田はその全部を投じて松源樓上に一席を買ひ、上田は東海道を半ば汽車半ば鐵脚に踏み鳴らして、熊野の奥に川上を訪ひ、涙と共に川上の鐵石心を動かして再び都門の人とする。川上と殆ど入違ひに、黑田健次は川上の土產の猪皮幾枚を無斷我が有として浮世の紅塵萬丈に飛び出す。一方富田正夾は川上の人物に惚れ込み、一女芳子の婿に欲しい樣子、芳子も物に心あるらしく見える。芳子の名物女中お濤と上田力、これも無緣の衆生ではないらしい。

【批評】「五人男」は、浪六が現代物への轉換を劃する產物であり、且つその現代物の典型を示した點で重視すべきものであり、興味の上でも一二を下らない。だがその興味には、挿話的出來事に伴ふ道化的戲謔分子が多く、文藝作品として見れば、やゝ不純なもののあるを免れない。結構から云つても挿話の連續めくものであり、川上が出ないうちは中心人物が缺けてゐる氣味で、筋の運びがやゝ緊密を失してゐる。五人男の性格は何れもモデルがあるためか、個性特徵が多少描き分けられてゐるが、浪六式人生哲學の傀儡となり犠牲となつてゐるのは、歷史物と同じことである。ただそれが現代だけに、歷史物程の不自然な誇張がない。だが續編を合していへば、浪六の代表的作品の一として、今なほ一讀に値すべきものたるは勿論であらう。

【附記】この五人男には、それぞれモデルがあり、場所は大阪の高津附近源光寺裏で、時は明治二十年、作者浪六を中心にその友三人がここに「五人男」そつくりの苦學生活をしたものであるといふ。「當世五人男」は、前に述べたやうに、いはば五人男物の發端で、以下五人の生涯の浮沈を描いた列傳的物語と連絡して完結する。「黑田健次」三册(明治三十年)、「最後の黑田健次」二册(明治三十二年)、「上田力」三册(明治三十四年)、「倉橋幸三」三册(明治三十五年)、「川上三吉」三册(明治三十六年)、「吉田雄藏」二册(明治三十八年)がそれである。〔柳田(泉)〕

當世芝居氣質 たうせいしばゐかたぎ　浮世草子 四卷【作者】中井金陵【刊行】安永六年板。

【翻本】氣質全集(帝國文庫)所收。

【梗概】八說話より成り、凡て芝居・操・淨瑠璃等に關するもの。〔卷一〕(一)二條堀川邊の紙屋の二男文五郎は義太夫の三味線を稽古し、師匠の弟子中の立三味線となつたが、そのために勘當されて師匠の家の厄介になり、勸められて一座に加はり、旅興行に出で、下關で女郎を連れて駈落し、京に立ち歸り、四條の義太夫座に鶴澤蓮藏と名乘つて今では全くの玄人となつた。(二)大阪北濱に江戸積の酒屋藤右衞門の伜藤次郎は淨瑠璃に凝り固まり、晝夜稽古屋に入り浸り、留太夫の弟子となる。それより床に上つて語りたい心が募り、一座の芝居師に舁ぎあげられ、酒本砂太夫と名乘り、愈々有頂天となる。間もなく家を勘當されて芝居に雇はれたが、座中よりは邪魔物扱ひされた。〔卷二〕(一)芳田軍三郎といふ人形遣ひの上手が、料亭の仲居と二人の間に儲けた嬰兒を左に押しつけあふいきさつ。(二)三芳正樂といふ淨瑠璃作者の許に突然現はれた一人の幼子、この頃の作者の無氣力無努力を責め、作の心得を說く。そのいふ事が一々理にあたるも道理、この小兒こそ當時浪花にただ一人近松の姓を名乘る近松助次であつた。〔卷三〕(一)坂東岡右衞門といふ敵役、容貌は敵役風に憎らしく恐ろしけれど、根は正直者であつた。或る芝居に謀叛人の役を振られ、絕句して見物人相手に問答し、却つて人氣を得たが、そのために病氣になつた。すると醫者を相手に舞臺の敵役ばりの無理をいつて困らせた。寺に典醫の治療で恢復したが、その祝ひに、仲間を呼んで河豚料理をたらふく食はせた。又節季の勘定に困つて勘定取りに下剃を振舞うて追ひ拂つた實惡役者の滑稽味を帶びた敵役役者の話。(二)長村甚藏といふ役者の話。或る年江戸に下つたが、不評なのを胸に据ゑかね、芝居の手代を呼びつけて、江戸役者のこきおろしをした事。この役者年老いて頭禿してゐたが、或る時家に歸れば、女房は女中との間に關係ありと察して大喧嘩をなし、遂に兩人の喧嘩となつたのを甚藏は禿隱しの鬘を取つて新若衆門を引いて說き、二人が引留むるも聽かず、行きたい所へ出て行つた事。〔卷四〕(一)澤田治藏といふ者、狂言作者にならうと志し、淺木宗左に從つた。或る時新狂言工夫のため、宗左は道頓堀の空家を借り、治藏等の弟子達と共に籠つた。一夜宗左・治藏二人のみ寝てゐると四つの人魂が現はれた。そして治藏に對して、これは並木宗輔等故名人の魂なりと名のり、作の秘卷を落して消えた。この卷物には、「第一氣轉、第二大膽、第三上根、第四記憶、第五堪忍」とあつた。これを授かつて治藏は一派の作者となつた。この卷物の事は、實は治藏に教へる宗左の狂言であつた。(二)奧村彌左衞門といふ武士、芝居好きで、屋敷も芝居がかりにし、子供にも總て芝居の一藝を習はせた。ために一時は遊藝好きの殿の氣に入つたが、或る年殿の江戸上りの道中に、子供等を率ゐて、ちんち、つんつと奴の道中を囃し立てて先に立つたので、大に叱られ、追放された。それより浪人して子供等を芝居に出してゐた。或る夜、盜賊の入らうとするのを知つて、芝居がかりの名乘りを揚げて追拂つたのはよいが、狼狽して緋縮緬を鉢卷にし、盜賊を追うて街上に出でたので、人々の物笑ひとなつた。〔小泉〕

當世書生氣質 たうせいしよせいかたぎ　小說 十七卷【作者】春の屋おぼろ(坪内逍遙)【刊行】明治十八年四月起稿、六月パンフレットの形

で第一册出版、七月第二册といふ風に毎月一册宛刊行、十九年一月完成、後二册に合本した。逍遙選集第一卷・明治文學名著全集(東京堂)・明治大正文學全集所收。

【梗概】維新の際、王事に盡した小町田浩爾の子小町田粲爾なる青年と浩爾が養女としたお芳とは、幼馴染の間柄であつたが、お芳は浩爾の妾お常のもとで養はれ、お常が藝妓をしてゐる關係から雛妓となり、間もなく田の次と名乘る賣れつ妓となつた。粲爾は飛鳥山の花見にふと田の次に逢つてから、彼女も熱い思ひを寄するやうになる。その後の粲爾は、茶屋遊びをして學業をも忘れるやうになつたが、友人守山の友情に動かされ、忠告に從つて身を愼むやうになつた。ところが粲爾・守山の兩人と親しくする任那といふ學生の拜行送別會を、守山の父の發起で向島水神の八百松で開いた時、粲爾は吉原へ案内され、茶屋で圖らず田の次に逢つてから、燒木杭に火がついて、また學業がすさんで了ふ。粲爾の父が心配して、みつしり意見を加へる。學校の校長が彼の不身持を聞いて休學を命じたりしたので、彼も始めて恐縮し、田の次を忘れるともなく、いつしか遠ざかつて行つた。それで間もなく休學が許されて、眞面目に勉強する學生に復つたが、二人の交渉はやはり繋がつてゐて、田の次はいつまでも彼を忘れず、同棲する日の來るのをひたすら待つてゐるといふのである。なほ吉原の話の中に、娼妓の顔鳥は、實は粲爾の親友守山の妹と知れたといふロマンスが挾まつてゐる。

當世書生氣質(插畫)

同上表紙(初版)

【批評】本書は元來、當時の書生氣質を寫し出すのが主眼なので、書生と關係の深い下宿生活や、牛肉屋に於ける酒間の氣焔や、溫泉宿に於ける若い男女の密會や、遊廓に於ける遊びやうや、揚弓店に於ける矢取女との關係なども描き出されてゐる。官私學校が漸く旺んになるにつれて書生の數が加はり、それが東京名物の一つとなつて新時代の生活を反映するに當り、作者はこの好題目を捉へて寫實主義の新手法を以て、學生生活の雰圍氣を如實に現はし、モデルにされた高田早苗や天野爲之の俤が、見るやうに書かれてある。元來「小說神髓」(別項)の趣旨を具體化しようとしたもので、舊來の手法がまだ〳〵殘影を留めて居り、趣向に物語り風な古さが、時にないではないが、「全篇の趣向は、專ら傍觀の心得にて寫實を旨としてものした」と序文に書いてあるやうに、寫實主義の小說として第一聲をあげたところに深い意義がある。即ち從來の小說の主眼とした勸善懲惡の型から全く離れて、人情・風俗をあるがまゝに描寫すればよいといふ作者の主張に從ひ、そのまゝ嚴正な客觀的態度をとり、心理描寫も見るべきものがあつた。それに平易で、清新な用語や文章も、全く今までにない世界を見せた。この作品が、作者がやつと二十七歳、明治文壇がまだ黎明期にあつた際の發表であり、その頃社會に重んぜられてゐた文學士が、小說を書いたといふことが、當時の人々を驚かしたといふ挿話を殘してゐる。

【參考】東京堂版當世書生氣質解題〔高須〕

當世宗匠氣質 たうせいそうしやうかたぎ　浮世草子 五册【作者】其風【刊行】天明元年【翻本】氣質全集(帝國文庫)所收。

【梗概】〔卷一〕少將成益は、譯なくて配所の月を見んといつた[illegible]中納言を床しがり、友人安方を誘ひ、賢者宮庵を同伴し、流人舟にて須磨に着き、名主の庵を借りて風雅の[illegible]を得たと喜んだ。然るに住みついて見ると、聞きしには相違し、汐汲むものは男ばかりで、一向面白くないので失望し、成益・安方は京に歸り、宮庵のみは風邪が流行したので金儲けのために殘る。〔卷二〕(一)[illegible]で乘合船に乘合せ、自作の歌二首を自慢に披露さ[illegible]やうなく當惑する落語式の話。(二)金春流の能に凝つた此太郎といふ男、[illegible]して謠の師匠となり、多くの弟子が附いたが、觀世流の流行に、[illegible]聽かず、ために弟子を失つた話。〔卷三〕(一)京の宗綿といふ茶の宗匠、仲間の宗清から嵯峨に斯道の達人あると教へられ訪ねて見ると、乞食小屋樣の處に汚なき老人がゐた。話をすれば甚だ博大である。宗綿歸りて宗清を訪ね、この事を語れば、あれで若し下から出たら乞食でないかといつた。(二)大阪に田舍から出た下女、年季を勤めて、米ふみの久三と夫婦となり、夫は水汲み[illegible]この夫婦虛言のほらを吹くので、人々は陰ではそれを略して先生といひ、當人の前では名をいはずに、[illegible]當人は「時分々々の流行で、この頃は妙な俳名がはやる」といつた。〔卷四〕(一)[illegible]の身代となり、撒潰しようと思ひ、女房の縁新深きに弱り、永井津女といふ色道指南に相談し、嫡の療治にかこつけ、永井の家に毎日通はせ、諸遊藝等に[illegible]八郎は思ひのまゝに[illegible]〔卷五〕(一)夢中といふ[illegible]

籠に乘り、芭蕉の句を我が句とし、貫之の歌を我が歌として智能昇きに誇り、その追從を喜び酒を振舞うたが、向うから來る智能昇きがこちらの智能昇きへ「顏の色がよい」と挨拶したのに對して、こちらのが「オヽテヤ、芭蕉の貫之樣の御振舞」といつたので、供した弟子達はこの一言に恥ぢて逃げ去つた。(二)歌さへ詠まなければ、良い人だと蔭口言はるゝ人が、短册の餘題を讀みかねて困じてゐるのを、その息子が側から助けてやつた話。

【解說】和歌・俳諧・茶道などの風雅に關する說話を集めたもので、卷一・四は各々一話、卷二・三・五は各々二話から成つてゐる。宗匠氣質の名に相應しくない話もあり、落語式の滑稽話もあり、興味本位の話を集めたものと見える。（小峯）

當世導通記（たうせいだうつうき）　滑稽本　橫綴中本一册　【作者】天竺老人（萬象亭）【名稱】道中記の字音に擬して導通記とし、それに當世を冠したのである。【刊行】天明二年【題材】息子が通人になるまでの人生の過程を道中記に擬して記したものである。

【梗概】道中記風に、山川或は街道を描いてある。例へば最初に、「むすこ」と記し、こゝは息子部屋住村である。ふじゆうの山が聳え、いき杉の並木の向ふに牛可村があり、一里塚のつうの木の傍に似た山がある。山越えするが上滑りする徊漢の道である。これより「きんく」村、「髮の上びんさき」村などがあり、喜世留・酒席・當聊・辰巳・魂胸・南國・靑樓・やりくり・借金・なぐさみ・ばくなん・かぶり・勘當などいふ順序の宿場を經て、やがて息子が放蕩の結果、勘當されるまでの道中記である。各々の地名・宿驛などを巧みにもぢつてゐる。

【構想】人生の過程を紀圖や道中記に託する考案は、相當古くから行はれてゐて珍らしい趣向ではない。寶曆六年刊の「人間一生壽惡道中獨案內」は、既に先鞭をつけてゐる。併し寓意的であるため自然敎訓の色彩を持つてゐる。天竺老人はこれを敎訓的に見ようとはしてゐないで、これを滑稽化さうとしてゐる。その點は、確かに成功してゐる。酒落本・黃表紙の影響も可なりに見られる。【影響】敎訓的にも非敎訓的にも、本書の構想は後に影響してゐる所が多い。天明六年の滑稽本「無與妙子」（別項）は、この趣向を襲ひ、文政十二年の「浮世名所圖會」（別項）なども明かに本書の影響を受けたものである。（小峯）

當世虎の卷（たうせいとらのまき）「堪忍宵虎之卷」を見よ。

當世七癖上戸（たうせいななくせじやうご）　滑稽本　二卷三册　【作者】式亭三馬【名稱】劉伯倫に酒德頌あり。無くて七癖、酒客には樣々の酒癖がある。それを書いた意で、七癖上戸といふ。なほ別名「新水鳥記」は、地黃坊の「水鳥記」（別項）に倣つて新に作る意。【刊行】文化七年【諸本】三馬傑作集（帝國文庫）・滑稽文學全集所收。【解說】書名に七癖とあるが、實は腹立上戸・笑上戸・泣上戸・利屈上戸・けちけち上戸・ぐびく上戸・眞鍮上戸・默止上戸、通計八種を書いてある。彼は既に「酩酊氣質」（別項）を文化三年に出して、醉客の性癖の樣々を寫してゐる。本書はそれが好評に刺戟されて筆を執つたもので、一讀高座の落語を思ひ出させるものがある。作者も執筆の際、落語を考へてゐたに相違あるまい。（小峯）

當世下手談義（たうせいへただんぎ）　敎訓本・滑稽本　五册　【作者】靜觀坊好阿【名稱】正しくは、「いまやうへただんぎ」と訓む。【刊行】寶曆二年【題材】江戸文化の爛熟期たる當時の墮落の風潮を捉へ、これを批判して敎訓的の筆誅を加へんとしたものである。故に演劇や豐後節や、當時の開帳などの流行物を俎上に上げてゐる。

【梗概】一卷には、工藤祐經が猿芝居へ言傳せし事。二卷には、八王子の臍翁座敷談義の事。惣七安實の引札せし事。三卷には、娛足齋園茗小栗の亡魂に出逢ふ事。足屋乃道千賣卜に妙を得し事。四卷には、鵜殿退卜徒然草講談之事。五卷には、都路無字大夫江の島參詣の事の話で通計七話。一二の例をあげると、京都北野の地獄辻子に前句冠句の點者をしてゐた竹生堂馬牛も近年世間に上手が數多あり、生計も困難となり、以前芝居に勤めた關係上、緣故を賴つて江戸へ下る。途中富士の裾野で異樣の武士に呼び留められ、一通の書狀を託される。その武士は工藤祐經の亡靈で、近年の正月芝居は曾我狂言が人氣を博し、就中祐成・時致等に贔屓があり、自分は敵役として一向顧みられない。これは作者の手落ちであるばかりでなく、この頃の作者は心中物などを好んで書く傾向がある。これは社會の婦女子や子弟を毒する事が甚だしい。又俠客物を見ても武士に對して不遜の極みである。芝居が社會を墮落せしむるものであると滔々と論じ、遂に煙草の煙と共に消えてしまつた（卷二）。近年豐後節が流行し、武士も町人も口吟してゐる。誠に嘆かはしいことで、好色本に節附けした淫聲とも言ふべきである。こゝに都路無字大夫が、豐後節の上達を祈願するために江の島辨財天に參詣する。そこに一人の僧があり、大に豐後節を難じ、一般の墮落も豐後節に基因するものである。この際最も勇壯なる土佐節を勵めといふ。無字大夫もその言に從ひ、終に江戸に於て土佐節の名手として名をあげるに至つた（卷五）。

【構想】世間人心の頽廢を嘆いての敎訓書であるが、俗耳に入り易いやうに滑稽味を持たせて書いたもので、本書の序文を見てもその抱負の一端が知られる。即ち、「貝原先生の大和俗訓・家道訓は、むくく和々として極上々の能化談義、自笑其磧が娼形氣、息子形氣は表に風流の花をかざり、裏に異見の實を含、見るに倦まず、聞に飽かず、是を當世上手の所化談義に比すべし」として、自らを新米所化の稽古談義としてゐる。從つて好阿が、一方心學（別項）の影響と、「大和俗訓」などの敎訓本を一層通俗化するために執筆したといふことが肯定される。そしてそれがためには、特に談義風に書くのが適當であつた。從つて一人の敎化者が諄々として說くといふ態度であり、現世の事物を批判的に觀察し、勸善懲惡に結びつけてゐる。卷三に見える娛足齋園茗小栗の亡魂に出逢ふの事を見ても、小栗判官の亡靈が、嘗て回向院で小栗判官兼氏の像並に一刀三禮の照天姬の像の開帳のあつた如きは僞物で、當今の開帳は何れも山師的で信ずるに足らずとしてゐる。そして兎も角町人たるものは、町人の本分を守つて町人道に勵むべきが第一である。「商人の學問には史記も左傳も入り申さぬ。求林齋の町袋、關氏の冥加訓、藤井懶齋の和俗鏡意錄、商人夜話草、家內用心記杯を晝夜家業のひまに讀むがよし」（八王子の臍翁座敷談義の事）といふのが根本思想であつた。そして著者が自ら浩陽の沙彌といひ、且つ談義といふ點に佛敎的思想の多分に存してゐることも十分察し得られる。【影響】作

者自身が本書を寶曆二年の正月に開板して、續刊として「敎訓續下手談義」を同年の秋に刊行してゐる。この事實は、既に「當世下手談義」に擬作もしてゐて、豫定の事實でもあつたらうが、また「當世下手談義」の世評が、さまで惡くなかつたといふことも考へられる。寧ろ好評であつたればこそ、別な作者によつて寶曆三年には「當世花街談義」、同四年には「下手談義聽聞集」が出板せられたのであらう。この二書は反駁であり抗辯であつた。かくして敎訓書の俗化を中心にして正統を行くものと、反抗的氣持を加味した談義風で行かうとするものとに分れた。前者に屬するものとしては、伊藤單朴の「敎訓雜長持」（別項）などである。後者に屬するものは、風來山人の「風流志道軒傳」（別項）などである。兎も角、この「當世下手談義」は、滑稽本を生む母胎ともいふべき點で重要視される。（小峯）

唐船（たうせん）「唐事物の謠曲」を見よ。

唐宋八家文（たうそうはつかぶん）　文選集　三十卷　【編者】沈德潛【本名】「唐宋八大家文讀本」【成立】乾隆四年（皇紀二三九九）【由來】唐宋二代を通じて文人作家の數は決して少くないが、その間に於て八大家を選定することは、明初の朱右の「八先生文集」（今傳はらず）に始まり、唐荊川（順之）の「八大家文格」、茅坤（鹿門）の「八大家文鈔」、儲同人の「八大家類選」等が相繼いで現はれた。鹿門の「文鈔」は、韓文十六卷、柳文十二卷、歐文三十二卷、附五代史鈔二十卷、王文十六卷、曾文十卷、蘇洵文十卷、蘇軾文二十八卷、蘇轍文二十卷、都合一百六十四卷あり、儲同人の「類選」はこれに增補を加へ、沈德潛はこの書に基づいて、更に八家の全集に據り、我萃して二十四卷とし、後、雍正十三年增して三十二卷とし、乾隆四年更にこれを現今の三十卷に改めた。これが卽ち「唐宋八大家文讀本」である。德潛、字は確士、號を歸愚と云ひ、乾隆四年の進士で、同三十四年九十七歲を以て歿した。その選する所に、「古詩源」十四卷、「唐詩別裁集」二十卷、「明詩別裁集」十二卷、「國朝詩別裁集」三十二卷、「補遺」四卷等がある。また詩を善くし、全集がある。

【傳來】乾隆四年本書が完成するや、顧祿百といふ者が陸開亭と計り、貲を投じてこれを刊行した。その我が國に將來せられたのは、江戸期中葉以後で、文化十一年、官に於てこれを刊行して以來、忽ちにして學者の景仰する所となり、都鄙到る處に流行し、藩學・私塾共に必ずこれを敎科書とし、村瀨誨輔は「譯編」を作り、賴山陽は「增評」を著はし、川西潛は「文格」を撰し、野本齊は「考異」を作る等、その他學者の評釋するものは、擧げて數ふべからざるものがあり、爾來口に文を言ふ者は、必ず範をこれに取るに至つた。

【內容】韓愈文六卷、柳宗元文三卷、歐陽脩文五卷、蘇洵文三卷、蘇軾文七卷、蘇轍文二卷、曾鞏文二卷、王安石文二卷、都合三十卷。本書はもと初學の讀本たることを目的としたものであるから、每篇に段落・評點を附し、總評を加へ、前人の批評は、その議論の精當なものを擇んでこれを採錄し、また文中の記事の他に關係のあるものは、或はこれを史傳雜志に考證し、或は錄して總評とし、讀者をして兩々相證引するに便ならしめた。編纂の態度が懇切周到を極めたものであつた上に、その選擇も亦概して當を得たものであつたので、頗る世に行はれた。彼は凡例の中に八家を評して云ふ、「（韓）昌黎は孟子に出入し、司馬子長を陶鑄す。六朝の後にして、もと文字の中興なり。この時、雄深雅健にして、力之と角するものは、柳州（柳）なり。廬陵（歐）は、力を昌黎に得て、上孟子を窺ふ。老泉（蘇洵）のオは、橫嬌たること龍蛇の如く、東坡（大蘇）のオは、大にして一瀉千里、純ら氣を以て勝る。穎濱（小蘇）は、淳蓄淵涵、南豐（曾）は、絅衛に深淳し、又一變す。要するに皆正人君子の文運を維持するもの。半山（王）の文は、純粹縝戾、互に見ゆ。拔りて之を存す、人を以て言を廢することなくんば可なり云云」と、蓋し評し得て能くその要を得たものである。

【史的地位】春秋戰國の頃は、單に東洋の文學史上に於けるのみならず、世界の人文史上に就いても、實に偉大な燦爛たる時代で、九流百家の徒が相繼いで輩出して互にその精を競ひ、英華は一時に煥發し、曠世の鉅觀を呈したが、その後、幾ばくもなくして所謂八代の衰を招來した。その間は、唯々社會維持の觀念に於て活潑を缺いてゐたばかりでなく、文學も亦浮華纖弱に流れて、內容外形、兩つながら腐敗を極めたのであるが、爾後殆ど千年の歲月を經て、唐代の韓・柳二家に至り、復古の機運が漸く熟して、唐・宋二代の文運の盛榮を大成する基礎を造つた。所謂八代の文章の衰微は、全く四六文の盛行に在るとも云ひ得る。換言すれば奔放自在であるべき散文が、至大の拘束を受けて律語化しなければならなかつたことに存する。四六文とは、その語を四六にし、その辭を偶儷にし、その聲を諧協せしめようとするもので、或はこれを駢儷文又は駢儷體とも謂ふ。四六はもと支那に於ける言語の發展上、人性の自然に發して文章の粧飾に供せられたもので、その起原は遙かに古代に溯り、それ自身に於ては整齊秀美な形式であつて、必ずしもこれを一概に排斥すべきものでないことは云ふまでもないが、これが一步濫用過巧に近づく時には、浮柔輕弱の弊に流れて文氣を萎微せしめ、思索的能力を失つた形式的律語化に墮する事を免れない。この弊の極まる所は、終に先秦諸子の如き旺盛な氣力と骨格とを缺く四六の濁流が、數百年の長きに亙つて南北に瀰溢したのである。而も勢の窮まるところ氣風を一變して唐代の文運復興となり、古文復興の大事業の上に、更に一步を進めて、支那文學史上空前絕後の盛觀を呈するに至つたのであるが、その機運を鼓吹した先驅者は、殆ど同時に併び出た韓・柳の二大家であつて、歐陽脩・三蘇以下の諸子に至つて、愈々繁盛を極めたのである。本書は、唐・宋二代に於ける代表的文人八家の文を選錄したもので、中世に於ける復古文學の大觀と謂ひ得るであらう。

【價値】八家の選定に就いては、古來學者の間に異論が無いではない。宋の呂東萊の「古文關鍵」二卷に、唐宋の作家八人の文を載せてゐるが、彼の八家は韓・柳・歐・曾及び三蘇の外に、張耒を取つて王安石を取らなかつた。我が賴山陽の如きは曾鞏を八家の中に入るべからずとして、「余曾の文を喜ばず、況んや三蘇を讀んで此に至れば、快友と談じ罷めて、更に紗帽迂に逢ふが如く、安んぞ悶々たらざるを得んや」と云つてゐる。惟ふに、王安石を排するのは、安石の性行に慊焉たらざるものがあるからであつて、文章家としての王は、優に八家に比肩するに足るもので、決してその人を以てその言を廢すべきものではない。曾鞏に至つては、その文はもとより三蘇等の文と趣を異にして

ゐるけれども、而も彼には又彼獨自の、三蘇以外の特色があり、彼を採るのは必ずしも不當ではない。要するに、八家の選定は大體に於て穏當であり、且つその文の選擇も亦大過ないものと云ひ得るであらう。【註釋書】評唐宋八家文讀本三十卷（頼襄）○唐宋八家文讀本考異二冊（野本群）○點注唐宋八家文讀本三十卷（川上廣樹）○唐宋八家文讀本摘注二卷（粟山還成等）○唐宋八家文讀本摘解八卷附錄一卷（城那宮三郎）○唐宋八家文讀本（漢文大系本）（三島毅評）【參考】支那文學史（古城貞吉）（宇野・本多）

道中龜山噺（だうちゆうかめやまばなし） 淨瑠璃 時代物【作者】近松半二【初演】安永七年七月十七日初日、大阪北新地芝居、竹田萬治郎座【諸本】近松半二淨瑠璃集（續帝國文庫）所收【題材】石井兄弟の龜山の仇討を扱つてゐる。話の略筋は、

信州小諸の城主青山因幡守の家臣石井宇右衛門は主君に從つて大阪に在るうち、大津に住む縁類の浪人赤堀遊閑の頼みで、その一子源五右衛門を引取つて武藝等を仕込んでゐたが、源五右衛門は多少武術の心得があるのを誇り、弟子を取つたりなどしたので、宇右衛門はその生兵法を誡めた。源五右衛門は却つてこれを怒り、仕合を申込んだが宇右衛門に打負かされた上、再び意見を加へられたのを深く恨み、一夜その外出先から歸宅の所を槍で突き殺して逐電した。宇右衛門の長男兵右衛門は泊り番で居合せず、次男源藏、三男半藏は五歳と二歳に過ぎなかつた。兵右衛門は暇を乞うて仇を狙つたが中々知れず、止むなく仇を誘き寄せるため大津なるその父遊閑を討ち捨て、互に相狙ひとなつたが、美濃で仇のために闇し討にされた。源藏・半藏は成長の後さまざま辛苦を重ね、元祿十四年五月九日、伊勢龜山の城内三の丸の石垣御門の下で、城主板倉侯の家中となり、赤堀水之助と稱してゐる仇を討ち取つた。

この一件は、父が討たれてから二十九年目、兄が殺されてから二十一年目といふ長年月を要したものであり、又相狙ひといふ點もあり、當時評判の高かつたもので、翌十五年には浮世草子「元祿曾我物語」（別項）が刊行され、同年九月九日からの竹本座の「新一心五戒魂」（しんいつしんごかいだましひ）の切淨瑠璃として「道中評判敵討」（だうちゆうひやうばんかたきうち）が上場された。その略筋は、

赤松源次左衛門に討たれた石田宇左衛門の倅藤之丞・半之助は身をやつし、半之助は京屋取義助となつて、佐々木殿之丞と變名仕官する赤松方に奉公してゐたが、その姉と懇仲となる。赤松が倅に身の上を述懐するのを聞いた義助が駆け出すのを姉が留めて爭ふうち赤松に發見されたが、赤松は奉公人請狀を義助に返し與へる。藤之丞・半之助はめでたく仇討を遂げる。

といふので、その全文は藤井乙男氏によつて紹介された（江戸文學叢說・淨瑠璃稀本集所收）。なほ同氏の言の如く「歌曲頼鑒」に、「百日曾我」を龜山仇討の作としてゐるのが誤りなる事は、饗庭篁村が指摘したが、篁村がこの「道中評判敵討」を近松の作としてゐるのは採り難い。詞章・構想ともに、さしたる事なく、ただ際物として喜ばれたかと思はれる。「道中龜山噺」は淨瑠璃としてはこれに次ぐものであらう。【梗概】（第一）（天龍川の段）石井兵衛の妻お來は娘お時を伴ひ、天龍川に船遊山し、香川左市に逢ふ。赤堀水右衛門外二人が醉つて騒ぐので、お來は香箱を投げてその場を逃れる。

道中龜山噺（正本）

翌日見附の陣屋で水右衛門は、「昨日天龍川で主ある女と契つた」と言ひふらしたが、これを聞いた石井兵衛は、その殘した香箱を見て妻の所持品なるに驚く。（第二）（日待の段）兵衛は日待の催しに水右衛門と香川左市その他若侍達を招く。お來の配慮でお時と香川左市の忍び逢つたのを知つた水右衛門は、お來に不義を迫るのでお來はこれに應じた態に見せる。兵衛はお來の首を討つて水右衛門に迫り、更に公金を盗んだ科を責めるので、水右衛門はこれを斬つて逃げ去る。（第三）（龜山屋舗の段）龜山の家臣石井源藏は兵衛の長女岡野の聟で、水右衛門を探るためわざと御前での立合に負けて暇を乞ふ。源藏の無氣力を怒つた母妙因、妻岡野、妹お時と左市、若黨中野藤兵衛等はその本心を知つて喜ぶ。（第四）（刀屋の段）兵衛の伜兵助は、吉兵衛と稱して大阪の刀屋宇右衛門に奉公し、娘おみのに惚れられてゐる一方、傾城江川とも馴染である。おみのに惚れた番頭喜七が吉兵衛に盗人の汚名を着せ、迎ひに來た姉お島（岡野）の顏に燒鐵を當てる。宇右衛門は姉弟の素性を聞き、金を與へて出立さす。（第五）（大井川の段）水右衛門を追ふ藤兵衛が川越共を相手に立ち廻り、やうやく向岸に着いたが、水右衛門等に嬲り殺される。水右衛門はその所持の狀を見て、石井兵助を殺したのだと思ふ。（第六）（在所の段）百姓又四郎は、娘おくらと石井源藏とが契つて生んだ力松と共に住んでゐる。源藏が尋ねて來て、又四郎が故主として逗留させてゐる浪人を水右衛門と知り、又四郎は自害する。源藏は又四郎に義理を立て、水右衛門の面體を見屆けたのみで止まる。（第七）（追善の段）龜山の石井の宅で、母妙因が水右衛門を釣り寄せようと計つたが、その父濱田祐軒が代つて來る。兵助は仲間に扮して祐軒の歸宅を追ふ途上、これに斬りかゝり、斬り倒された風をして下から刺し殺す。（第八）（敵討の段）遠州からの使者で水右衛門の惡事分明し、兵助・岡野・お時・左市・力松等は源藏の檢使の下に水右衛門等と立ち合ひ、めでたく仇を討ち果す。【構想・影響】「道中評判敵討」の簡單なのを多くの人物・趣向によつて複雜化したが、全體の筋はかなり徹つてゐる。「天龍川の段」から「日待の段」へかけての香箱の間違ひの趣向は、講釋の「加賀騒動」の中にも採られてゐる形式の說話で、後に尾崎紅葉も「東西短慮の刄」の中に用ひてゐる。「龜山屋舗の段」の源藏の一件は別に珍しい趣向ではないが、半二の後作「伊賀越道中雙六」（別項）に複雜化して用ひられてゐる。「刀屋の段」は歌舞伎色の匂ひが濃い。「在所の段」は、今も素淨瑠璃として殘つてゐる。全曲として本作の影響を受けたものに「敵討優曇華龜山」（別項）があり、本作と綯ひ交ぜにされて「靈驗曾我籬」（別項）その他の歌舞伎脚本が生れた。本作を「敵討御未刻太鼓」（別項）の改

作といふ說もあるが、「道中評判敵討」の改作とすべきであらう。（菊田）

道中千貫樋（だうちゆうせんがんどひ） 脚本 五幕八場 お家物【作者】並木正三【名稱】道中は東海道中、千貫樋は伊豆三島の西に在つたもの。【興行】寶暦四年十二月十二日初日、翌年二月まで續く。二の替り。大阪中の芝居、座本嵐三右衛門。

【役割】駿河國守今川駿河之助・文平弟沼六（市川團四郎）、傾城宮瀬川・彈正女房松の江（吉田萬四郎）、伊豆守娘富士姫・文平妹お松（嵐三右衛門）、今川家お抱力士大井川文平（三枡大五郎）、桃井左衛門女房初音（三條淺江）、前將軍弟仁木彈正、組頭十郎、吉岡憲法（嵐川平九郎）。

【題材】從來の劇色にかゝる吉岡染の憲法は、憲法流の元祖といふ所に別な立場の或る凄味を持つてゐた。そこに實劍に就いての宗教的な解釋への接近も嗅かれ、同時に千貫樋の說話との間に好個の連絡が發見されたので、お家騒動物としては甚だ好都合な題材である。【梗概】（序幕）（伏見稻荷社前）駿河之助は宮瀬川を連れての花見。殿は來合せた初音の娘お松に見惚れる。この女が今まで自分が緣談を嫌つてゐた富士姫だと聞かされて、急に話が纏らうとする。宮瀬川は怒る。併しこれは初音が文平の妹を贋玉に使つたのであつた。が、お松も本氣になる。折よく文平が來合せ、妹を瞞して連れ去る。後へ浪人憲法が來て惡家老將監と馴合ひで宮瀬川の身請を言ひ立てたが、身請金を捲き上げると將監を斬り倒し、背に駿河之助が下手人だと記して姿を消す。（二幕）（室町御所）新將軍宣下の席へ、將監の死骸が運ばれ、駿河之助に疑ひはかゝつたが、彈正は下手人は兇賊だと見拔き、賊を探し出すまで駿河之助と姫とを追放にする。（返し、城下茂原）實劍峰龍丸が奪はれたとの注進。彈正の駕籠を取り圍み近侍を斬り伏せてゐる一味。憲法の徒黨である。（三幕）（文平住居）松の江が女房の格で扶持されてゐる。夫婦は計らず辿りついた姫と匿まつてある殿をこの櫓に契らせようと二階にあげる。お松は括られながら嫉妬に悶える。沼六とお松は、せめてお二人に代らうと言ひ出す。支度の中に親の訴人で捕手が寄せた。文平が裏をかいたと知らず、親は殿と姫とを我が子の積りで落して了ふ。（返し、松原）手下が憲法を呼び留めて、彈正はどう責めても賊の要害を明かさぬと告げる。傍で聞いた松の江は始めて分つた敵憲法に斬り掛けるが、忽ち返り討に逢ふ。文平も來たが短炮でやられた。左衛門がそれと知つて憲法の後を追ふ。（四幕）（桃井左衛門屋敷）殿と姫との首受取の上使が來る。彈正の家來が實檢役の憲法を狙つた。玉は外れ二階から殿と姫が轉げ落ちる。左衛門の討つた首を上使は持ち歸る。憲法が書いた實證の左文字で見賊と見顯はれる。首は沼六お松のだつた。姫と彈正の出る迄の命を預け憲法を歸らす。（五幕）（三島出來島屋）入聟万八は宮瀬川を現妻にし、更に殿を嬲り殺しにしたので、憲法は許して駿豆兩國横領の連判に万八を入れた。殺したのは願定に入つた万八の假の姿だつたと知れて、憲法等は万八を圍む。と遠貫の太鼓。（返し）谷底、山吹、瀧の音。左衛門等は底に辿り着くと、白髮の彈正が岩に坐してゐた。攻太鼓。憲法は捕まつた。峰龍丸が取出されると水は噴出した。[illegible]。【劇色】三幕目迄の憲法は、稀にしか現はれないが、現はれると必ず動搖を殘してゆく。相手方の主要人物は悉く獲はれてゆく。殿を殺す所まで詰める。かくて憲法は惡以外の無氣味さを漂はせて、當代の惡敵平九郎を十分使ひこなした作といひ得る。但し憲法以外の人物の配置には、全く「けいせい天羽衣」（別項）を追つた型が見える。改作の跡が多い。【批評】千貫樋の名題は傳奇的興味を混つたので、駿豆二國に關係させお家騒動の型をとる豫定とすれば、それに終始すべきであつた。然るに中途憲法の色彩が强くなり過ぎたやうに見え、或は全く反對の態度のやうにも見える。そこに破綻がある。更に改作の筆が餘り直接的であつた。この作者として珍らしく凄惨な作であるに拘らず、一時の好評に終つたのもそれ等に因るかと思はれる。（守隨）

道中膝栗毛（だうちゆうひざくりげ） 滑稽本 正續四十三冊【作者】十返舎一九。但し初編一冊は、京傳が草稿を一九に與へたものであるといふ說が「西澤文庫傳奇作書」にある。又「膝栗毛」は上野の人酒井伸郎ち俳歌堂廿葉の作で、一九に頼まれて與へたものであるといふ說が「上毛偉人傳」にある。この說は正續全部に就いていへるか、又その一部に就いていへるか、不明である。【名稱】初編及び後編の第一冊までは「浮世道中膝栗毛」と外題をつけ、同第二冊には「道中膝栗毛」とし、第三編から「東海道中」を角書にし、以下これに從つてゐる。「續道中膝栗毛」は、初編は「金毘羅參詣」と角書にし、二編は「宮島參詣」、三編以下七編までは「木曾街道」或は「岐曾街道」と宛て、八編は「從木曾路善光寺道」、九編は「善光寺道中」、十編は「上州草津温泉」と角書し、十一・十二編は、單に「續膝栗毛」の外題となつてゐる。【刊行】初編は享和二年、後編二冊は同三年、三編二冊は翌文化元年、四編二冊は同二年、五編二冊、追加一冊は文化三年、六編二冊は同四年、七編二冊は同五年、八編三冊は同六年、發端一冊は文化十一年である。「續膝栗毛初編」二冊は文化七年、二編二冊は同八年、三編二冊は同九年、四編二冊は同十年、五編二冊は同十一年、六編二冊は同十二年、七編二冊、八編二冊は共に同十三年、九編二冊は文政二年、十編二冊は同三年、十一編二冊は同四年、十二編三冊は文政五年で、初編より實に二十一年の長年月に亙つた。【素材】一九が本作を綴るに際して東海道等を旅行したのは事實であるから、本作中に彼の直接經驗を材としたもののある事は勿論である。その他彼の旅中の見聞により、又友人・知人等に依つて集めたものも少くないであらう。これ等の外には能狂言に得たものが多數ある。即ち「どぶかちり」「狐塚」「鱸庖丁」「附子」「つんぼ座頭」「物爭ひ」「三人片輪」「籤燈」「眼の袋」、その他を或はそつくり取り、或は多少變化して用ひてゐる。滑稽の笑話や噺本より得てゐるものもある。犬に吠えつかれて掌上に虎の字を書く話、ゐざりの川渡りを見て、深い川であると早合點して、裸で渡りかけて淺きに驚く話などの如き、出所の指摘し得べきものがある。【諸本】道中膝栗毛（帝國文庫）・東海道中膝栗毛（日本名著全集）・滑稽文學全集第一・膝栗毛（有朋堂文庫）・東海道中膝栗毛全集（文藝叢書）・東海道中膝栗毛（中央出版社）所收。【梗概】江戸神田八丁堀に栃面屋彌次郎兵衛といふ者がゐる。駿河府中の相應な商家に生れたが、放蕩して家産を失ひ、嘗て贔屓にした旅役者鼻之介（後、喜多八）を伴うて江戸に出で、喜多八を奉公に出して家を構へたが、貧

乏で思はしいこともないので、家財を賣つて旅費をつくり、喜多八を同伴して、順路東海道を上つて伊勢參宮をなし、京を見物して大阪に行くまでが發端と東海道中である。それから讃岐に入り、兩人は先づ四國に渡つて讃岐の金毘羅神社に參詣し、中國に渡つて宮島を見物しそれより引返して、順次木曾街道を東に下り、善光寺に參詣し、上州草津溫泉に行き、それより江戸に歸着する。この長途の旅に於て兩人のなした尋常の行動から、奇行・滑行・愚行のさまざまを寫すを主とし、併せて兩人の見聞に入つた種々の事件をも取扱つて滑稽を表はしてある。

【構想】 明和頃から流行した洒落本は、遊里の纖細な寫實となつたが、「道中膝栗毛」は、この洒落本に構想上の影響を受けてゐる。洒落本は、初め都市一流の遊里の寫實に起つて、次第にその世界を宿場の遊里、岡場所等の二流三流に移し、間には「變通輕井茶話」(別項)の如き、地方遊所の描寫に及んだものがある。「道中膝栗毛」の中には、これ等と同様な地方遊所の描寫をなした部分がある。ことに洒落本の影響を見ることが出來る。のみならず、洒落本には、野暮・中可通の滑稽を寫したところが多いが、「道中膝栗毛」は又同様に、この種の滑稽を取扱ふを旨としたものである。この點にも洒落本の影響を見る。殊にその文體の如きは明かに洒落本より出たものであつて、殆どそのまゝであるといふべきである。それから構想上の一大特徴である彌次郎兵衛・喜多八なる二人の旅人を設けて、その言行に滑稽を表はすのは、假名草子「竹齋」(別項)の竹齋と若い同伴者、「東海道名所記」(別項)の樂阿彌と一青年、「紫の一本」の陶々齋遺佚と同一であるから、全く一九の創意に出たものではあるまい。併しこれ等の人物は單に機械的に用ひられてゐるが、「道中膝栗毛」はこれを活かして用ひてゐる所に大なる相違がある。彌次郎兵衛・喜多八は、共に江戸人の

道中膝栗毛後編凡例

道中膝栗毛後編(序文・凡例)

代表的人物である。知情意何れの方面から見ても多血質なる江戸氣質の好代表である。感情的で、激し易く、さめ易く、又感情や情慾を自制する力が乏しい、智も才もよく磨かれてゐないから、廣く事理に通じ、人生を解しない淺薄な人物である。故に二人を江戸人の代表としても、所謂通なる高級江戸人を代表するものではなくして、未通なる下級江戸人を代表するものである。「道中膝栗毛」は、かかる下級江戸人を人物として、その性情の各方面を斷片的なる小說話に依つて繰返し繰返し寫實し、輕妙にこの種の人間を描出してゐる。さうして同時にその寫實の中に、江戸通の眼を標準として未通なる江戸人を揶揄し、愚弄してこれを滑稽化してゐる。その滑稽は辛辣な諷刺を伴はないもので、如何なる人をも破顔せしめずには措かない朗かさ明るさを持つものである。

【史的地位】 材を旅行に取つた文學は、早く紀行があつて續いて行はれた。「土佐日記」「十六夜日記」の如き、日記の名を持つてゐるけれども、紀行文學である。「海道記」「東關紀行」(各別項)の如きものより近世の紀行に至る迄その數少しとせぬ。これ等は自然の景を寫し、感懷を抒べることが少くなく、多くは感傷的であり、且つ歌を重んじたものである。然るに江戸時代に至つて、人事を主として滑稽の情緒を表はし、和歌も狂歌體に變る傾向を一部に生じた。これ前に擧げた「竹齋」の類である。かくて紀行文學は民衆化の傾向を示したが、「道中膝栗毛」に至つては、この傾向を推し進めて、全く民衆化させたものである。本書出でて空前の歡迎を社會に受けたのはこのためである。「江戸作者部類」には、「看客は只笑を催すをめでたしとして飽く事なかりしかば、板元は更なり貸本屋も利あるもの是にまされるはなしといひにき」とあり、また「げに二十餘年相似たる趣向の册子の斯くまでに流行せしは前代未聞のことなり」ともある。以てその盛況を察することが出來る。本作は實に紀行文學(別項)の展開史中に

道中膝栗毛挿畫(初編)

於て劃期的なる作である。轉じて洒落本との關係を見るに、本作は洒落本の轉向したものといふことが出來るが、既に行詰つた洒落本は、その狹い世界から何れかの方向に廣い世界を見出さうとしてゐた。而してその見出した轉向の一方面が、實に本作の開いた作風の滑稽本であつた。この點でも亦本作は近世小說史に重要な地位を占むるものといへる。而して本作以後、この作風に擬した滑稽本の續出した事實は、又本作の滑稽本史上の地位の最も重要なることを示してゐる。今その主なるものを擧ぐれば、文化四年に、錦丸作「爽國滑稽羽栗毛」、彥玉作「旅枕眞青海」が出で、六年には「身延道中滑稽睡臥毛」、九年には「成田道中黃金駒」、或は「王子土産」「樂屋道中記芝歐栗毛」、鯉丈の「大山道中栗毛後駿馬」(別項)等があり、一九自身も、「江之島土産」「六阿彌陀詣」「大師めぐり」「金草鞋」「俳諧與の内詣」「雜司ケ谷記行」(各別項)等を出した。一九の死後も「續々膝栗毛」を初めとし、明治に入りては魯文の「西洋道中膝栗毛」(別項)がある。

【參考】 東海道中膝栗毛輪講 三田村鳶魚編 ○評註東海道中膝栗毛 吉口米吉○鳶魚隨筆 三田村鳶魚(彌次喜多の大阪見物、東海道膝栗毛の趣向)○膝栗毛其他の解說 山口剛(日本名著全集)○江戸軟文學考異 尾崎久彌(膝栗毛物の研究)○十返舍の膝栗毛 飯島花月(書物往來五)○東海道中滑稽譚について 石田元季(藝苑一七)○一九研究 藤村作(日本文學講座)　(藤村・小澤)

道中膝栗毛　「道中膝栗毛」を見よ。

道聽塗說(だうちやうとせつ)　隨筆　正編二十五編・續編十編【著者】大郷良則【諸本】國書刊行會の「鼠璞十種」に編入されてゐる。【解說】麻布學究として知られた儒家大郷信齋が文化八年より同十三年(改元天保)に至る六年間、見聞した江戸の雜事を年別に錄したもので、漢學者の著作としては、極めて卑俗である。市井の瑣聞の外に、幕府武家の出來事をも含んでゐる。江戸期末造の世相を窺ふに便がないではない。著者はこれを越前鯖江に在國の藩主(間部侯)に獻覽したといふ。本書中に別紙別封を添呈と註してあるのは、その際のもので、傳寫にはない。

【著者小傳】 大郷良則。字は伯儀、通稱金藏。號を信齋と云つた。林衡(述齋)に學び、家塾を麻布古川端に開いて教授した。間部侯の士でその藩の儒員であつた。曲亭馬琴の友人の一人で兎園會に入會してゐた。馬琴の博覽を多として時々古事等の質疑をするのを恥としなかつた。その麻布の邸を城南讀書樓と號して一時高名であつた。弘化元年(二五〇四)十月十四日歿。享年七十一。著述には通俗的のものが多い。　(和田)

榻鴫曉筆　隨筆　二十卷　寫

【著者】 不詳。恐らくは室町時代の末頃の遁世者であらう。【解說】自序に據ると、六十餘年を何となく過したことを歎じて、「むかし今思ひつゞくる宵のまにはや明はてゝ秋の夜もなし、かばかりの事は誰か思ひはからざらん。よしや何事もさもあらばあれ、筆にまかせて思ひをのべん。かゝるつたなき事のしわざを誰かめたつべき、かいやりすつべき物ぞかしとおもふ心しかなり」と言つてゐる。その編述の樣は統一を缺き雜駁に流れてゐるが、約言すれば、佛教が天竺・震旦・日域と傳來した事蹟や教義の發展を縷述する間に、詩歌の起原、本朝諸歌仙等、又孔子・顏回・莊子・孫武・諸葛孔明等の評傳を交へ、最後に劍・玉・鏡・音樂の記事に及び、又調分の日下に和語・佛語を別ち、事物の同名・異名の說で終つてゐる。卷四より卷八までは相論及び論宗の二大項で、著者の最も力を入れた部分らしく、その佛教に造詣の深いことが窺はれる。序文に年號も署名もない。卷數も區々一定せぬ。　(和田)

登天樂(とうてんらく)　雅樂舞曲【異稱】登殿樂【性質】右方樂。新樂、小曲。高麗双調曲に屬する。舞があり、六人で舞ふ。舞者は特殊の袍[illegible]を着、細纓冠をかぶり、片肩を袒ぐ。童舞とすることもある。番舞は天常樂。起原未詳。併し我が國で作られたものであることは明かである。　(田邊)

登天樂

冬讀書餘(とうどくしよよ)　隨筆　二卷一册【著者】尾藤孝肇【刊行】天保頃「擷修齋叢書」中に編入、木活字版を以て刊行された。【成立】寛政十二年【解說】尾藤二洲の漢文の隨筆で、著者卷頭の小引に、「冬夜無事、前燈讀書、不能數行、眼既疲矣、乃更捉筆、記意所趣、昏眠益甚、不能自讀、每敎一紙、輒命子弟謄錄、累數夜頓成卷、名曰冬讀書餘」と記してゐる。卷一に國學新成以下百二則、卷二に支那南北朝以下九十六則、卷三に諸將先儒寺觀以下九十八則、拾遺三十二則を收む。概ね經史老莊に就いての感想を述べ、和漢政治の興廢、帝王・英雄・詩文家・儒家等の評にも及んでゐる。　(和田)

道得問答(だうとくもんだふ)　心學書　四卷【著者】慈音尼【刊行】安永三年【解說】慈音尼の江戸へ下つた後の述作である。自序に、その師石田梅巖の敎訓を憶記したもの、自分が人に答へたことの覺え書などを編めて、この書を編んだことを述べてゐる。最初に己の經歷を叙して、その心學に入つた徑路を明かにしてゐる。全卷を通じて梅巖の言をそのまゝ出してゐる條が多い。　(白石・森)

東都劇場沿革誌(とうとげきぢやうえんかくし)　演劇書　六卷【編者】關根只誠【成立】明治十七年か。【刊行】伊原青々園編「芝居双紙」中に、編者手稿本をそのまゝ收め、大正六年刊行。【解說】江戸の劇場の櫓を上げてより、明治に至る各座の座元の代々を記し、各々その項に、當時の劇場史料を集大成しようといふ企圖のものであつたと思はれ、中村座の分は三卷半に及び極めて詳細であるが、市村座の分は約一卷、森田座の分は僅かに附錄として「森田座志料」として半卷を占むるに過ぎない。本書が全部完成したならば、劇場建築、劇場に關する法令、劇場經濟、その他比較的知らるゝこと尠き諸項の資料は大成したであらう。併し現存のもののみでも、涉獵の豐富な點より後人を益すること少からず、もとより未定稿の事とて整理のやゝ完からぬ憾みはあるが、歌舞伎研究上の貴重資料といはなくてはならぬ。　(堀田)

道二(だうに)　心學者【姓名】中澤義道。通稱、龜屋久兵衛【生歿】享保十年八月十五日、京都上京新町一條に生れ、享和三年(二四六三)六月十一日、江戸下谷の參前舍に歿した。享年七十九。【法名】自得院法安道二居士【墓

所】東京市深川區猿江町妙壽寺で【系統】手島堵庵門。門弟に大島有隣・植松自謙(各別項)等がある。【閲歴】家は糯職を業としたが、日蓮宗の信徒であつたところから、道二も幼少の頃からその影響を受くるところが多かつた。二十五歳の時、中筋千本に移居した。家甚だ貧しく、常に書を讀むの餘裕がなかつたが、深く儒佛の教を信じ、暇を得ては所々の講釋法談の席に列し、又は諸儒高僧の許に至つて道を問ひ、長じて妙法の二字に疑念を抱き、その義を得ざるに苦しんだが、明和五年、四十歳にして東嶺禪師に師事するに及び、始めて疑問は氷解して悟道を得た。その後更に寛元禪師にも就いたが、天明三年(五十五歳)、手島堵庵の門に入り、剃髪して名も道二に改め、遂に心學者として立つに至つた。かくて道二は江戸に下り、所々に講話を試みて多くの門弟を得、寛政三年には、神田相生町に心學教育所參前舎を建て、ますます心學教の普及に盡瘁した。參前舎はその後も相續して現在に至つてゐる。(心學參照)

中澤道二

【參考】名家略傳 山崎美成○嬉遊笑覽卷九 喜多村信節○石門心學の研究 石川謙 (白石・森)

道二翁道話 だうにをうだうわ　心學書　六編十五卷【著者】中澤道二【編者】八宮齋【刊行】初編に寛政六年甲寅冬の序があり、第六編に文政七年甲申春の序がある。【解說】初編見返しには、中澤道二翁著「心道話」としてゐる。内容は道二の道話を大阪の八宮齋が筆記して輯錄したるもの。但しその最終の六編は編者歿後の刊行に係る。初編より第四編まで各編毎に上河正揚の序があり、第五編には道二の講釋の圖、正揚の「中澤道二翁像賛」、京都入江致身の序がある。第六編には、正揚の孫上河精が序してゐる。道二の道話は神儒佛の三道より、五倫五常の旨趣を懇切平明に說示して餘すところがない。當時の民衆に悅ばれたのも故あることと思はれる。(白石・森)

道念節 だうねんぶし　歌謠【名義】道念山三郎又は道念仁兵衛の始めた曲節なるが故、かく稱する。【沿革】「本朝世事談綺」に「京に道念山三郎といふ興樽の音頭あり。貞享の頃盆の踊口說といふを歌ひ出したり。この節躍の拍子によく合たる間なれば今以てこれをよしとす」と見えるので、これを始祖として初代の道念となし、道念仁兵衛はその二代目であると云はれてゐるが、既に「好色五人女」にも「京の音頭道念仁兵衛」と見え、「落葉集」にも、「道念咄」と題する道念仁兵衛作の滑稽な歌を掲げてゐて、山三郎と仁兵衛は同じ頃の人である。その關係については、未だ明かにし難いが、山三郎の明瞭な語り物として傳へられる歌は一つもない。これが盛んになつたのは寶永頃からで、もとは京の祇園の邊りで盆節として行はれてゐた都音頭、また祇園町踊と云ふものの一種であつたのが、他の人々の歌を壓して道念仁兵衛の歌だけが盛んとなり、遂には道念節とも云はれるやうになつたのである。寶永以後には、今道念と稱する聲も出たらしい。【歌詞】多く七五調で、「伊勢の松坂越えたえい」の如く、「え止め」となつてゐるところが特徴である。この特色は京音頭に共通のもので、大阪音頭が七七調であり、「さ止め」であるのと對立する。歌詞の古きものは、「好色五人女」に見える「山くどき」「松づくし」で、歌詞は何れも殘つてゐる。一枚刷として讀賣せられた外、寄本も出で、「今道念都踊くどき」「都新音頭」等の題名が記されてゐるが、内容は種々雜多で、可なり後のものまでも加へると、總計七十篇ぐらゐの歌詞が殘存してゐる。(鐵仙流)道念節は明和頃に至つて、鐵仙節と變化した。この頃の歌本を見ると、道念流・道念末流・鐵念流・鐵仙流と云ふやうに記され、鐵仙流に至つて固定した。これについて「眞々の川」(勝川子作、天明五年刊)には、「近頃はやる鐵仙流京音頭は、六藝の内にも見えず、商賣往來の藝づくしにも洩れたれども、門あれば好きあり、好きあれば上手ありて、上京の片邊りに名に負ふ音頭の名人、袋物屋の何某となん云へるあり。ふと愛護若の道行に物を付け初めてより、高名四方に響き、音頭は此歌句ならではと、門人も多く入り集ひて、先生と仰ぐ事ななめならず」と見える。その歌詞は、明和より文政頃まで、綺表紙附の稽古本として刊行せられ、四十篇ぐらゐ殘存してゐる。「鐵仙梅九疊直正本」と記した本もあつて、かう云ふ語り手があつた。現在ではこれを鐵扇節と記し、同じく道念節から分れたと思はれる紅葉節(紅葉音頭)と云ふものがあつて、これと一對をなし、鐵扇節は男性的で勇ましく、紅葉節は女性的で軟いものとして京都府下の松ケ崎、修學院等の盆踊に行はれてゐる。紅葉節の歌本は、「夜晉」(一名音頭集、京都府立圖書館所藏)を初め、寫本として數本殘存し、四十篇以上の歌詞が殘つてゐる。なほ京音頭の系統を記すと次の如くなる。

紅葉節(現存)
今道念—道念流—
友甫供—五兵衛—道念節
—道念末流—鐵念流—鐵仙流—鐵扇節(現存)

【參考】日本歌謠史 高野辰之○日本歌謠集成 同上○近代歌謠集 藤田德太郎○紅葉節踊音頭(龍谷大學國文學會未刊謠本出版叢書第八輯)○踊口說道念節の新資料 山村太郎(上方二〇)○鐵仙流踊口說雜考 同上(上方七ノ一)(藤田)

唐大和上東征傳 たうのだいわじやうとうせいでん　傳記【作者】眞人元開撰と記してある。即ち淡海三船(三船參照)。【名稱】略して「とうだいわじやうとうせいでん」とも讀む。又は「鑑眞大和尚傳」とも、「鑑眞東征傳」とも、「過海大師東征傳」とも稱す。或は「法務贈大僧正唐鑑眞過海大師東征傳」と題するもの、又は單に「鑑眞和尚傳」とするものもある。【成立】光仁帝の寶龜十年二月八日。卷末の詩もその頃附載したものであらう。【諸本】(一)群書類從本(六九)。(二)大日本佛教全書本(一一三)。諸本を校合して善本である。(三)唐招提寺版本。「過海大師東征傳」と題して肖像を揭げ、内題は「法務贈大僧正唐鑑眞過海大師東征傳」とある。又末に附錄として鑑眞關係の事項が抄出せられてゐる。(四)觀智院本、一軸。元永頃即ち院政時代の古寫である。類從本と對校すれば文字の異同もあり、誤を正すことも出來る。加ふるに訓讀の點に古體及び當時の讀法の參考となるものも少くない(古典保存會で複製)。なほ參考すべきものに、「唐鑑眞大和上傳」二卷(和文の傳記。大日本佛教全書一一三に收む)。「鑑眞和上東征傳」三卷或は六卷。鑑眞の高足たる思託の著なることは、「宋高僧傳」第十四に見えてゐるが今傳はらない。外に「東征繪傳」(別項)がある。

【内容】唐の鑑眞和上の日本へ渡つたことを主として、その傳記を書いたものである。鑑眞はカンシン又はカンジン或はガンジンと讀

まれてゐる。和上は通例和尚の字を用ひ、上の字を用ひるのは律宗に限つてゐる(鑑眞の開いた唐招提寺は律宗)。本書の内容は初めに鑑眞和上の出自を記し、後六度の大艱難を冒して渡來し、唐招提寺を創建することを述べてゐる。鑑眞の俗姓は淳于氏、唐の揚州江縣の人で十四歳の時、寺に入つて佛を見て感動し、出家して知滿禪師に就く。後、諸寺に配住し、東都・西京に遊學して三藏を極め、殊に戒律に詳しかつた。我が天平五年、榮叡・普照等が遣唐大使丹墀眞人廣成に從つて入唐し、十年の後、唐の天寶元年冬十月、即ち我が天平十四年歸朝の時、揚州の大明寺に到つて鑑眞に請ふところがあつた。請に從つて天寶二年十二月出帆したが、中途難船した。かくて五回の失敗に屈せず、第六回目の天寶十二年十月、藤原清河や吉備眞備等の歸朝と共に出帆した。越えて十二月、即ち我が天平勝寶五年十二月二十日頃に、四隻の船全部が薩摩に到着し、十二月二十六日に、僧延慶が鑑眞を太宰府に伴つて來た。翌年正月十一日、遣唐副使大伴胡麿が奏上したので、乃ち勅して東大寺に居らしめ、授戒と傳律の任務を委して傳燈大法師位を授けられた。四月に至つて戒壇を大佛殿の前に設けて、聖武上皇・孝謙帝以下四百餘人に戒を授けた。後、その戒壇は大佛殿の西に移して戒壇院と稱せられてゐる。また一品新田部親王の舊宅を賜はつて唐招提寺を創建し、天平寶字七年(一四二三)五月六日遷化した。享年七十七(類從本に七十六とある。今類聚國史による)。鑑眞は渡海の際、兩眼の明を失つたが、經文などはよく諳誦してゐたと云ふ。なほ稱德帝の天平神護元年過海大師と諡せられた。これは本朝に於ける大師號の權輿である。【價値】當時の日支交通と航海の狀況を知り得るのみならず、難航中に觀音や阿彌陀を念ずる點を見れば、信仰の方面の狀を見るにも參考となる點が少くない。又紀行の漢文として見るべき外、卷末附載の詩は「懷風藻」(別項)と等しく、漢文學史方面からも重要である。(東征繪傳參照)

【參考】本朝高僧傳卷二〇○宋高僧傳卷十四○水鏡下　(山岸)

多武峯少將物語 たふのみねせうしやうものがたり　物語　一卷【著者】未詳。その當時にあつて高光に親しく仕へた人の書き集めたものとも言はれる。【名稱】古寫本の題簽には、「多武峯少將」とのみあれば、單に「多武峯少將」と呼んだのかも知れない。又別に「高光日記」(仁和寺書目錄)ともいふ。【成立】未詳。著者を高光に近侍した者とする說に從へば、村上天皇の應和から康保年間へかけて書かれたものか。【諸本】傳本は極めて稀で、丸林孝之の「多武峯少將物語考證」によれば、二種の異本の本文を知ることが出來る。明治以前の刊本としては、群書類從本及び文政七年霜月二日の自序を附せる丸林孝之の「多武峯少將物語考證」があるのみである。また明治以後の刊本としては、群書類從・日本文學全書・國文大觀等の所收本及び國文註釋全書所收の前記丸林孝之の「多武峯少將物語考證」がある。

【梗概】高光の少將は、初めから出家したいといふ望を抱いてゐたが、父おとど師輔の生前はどうしてもその本意を許されなかつた。おとどの死後は妹君愛宮のことが特に心には懸りながらも、出家本願に心がせかれて女君に「我いらむ山のはになをかゝりなん思ひないれそ露も忘れじ」と歌を返し、又愛宮にはせはしない別れを告げて出家した。比叡山に登つた高光は弟の尋禪のゐる室に入り、自ら剃刀でもとどりを切つてしまつた。ぜんじの君から、少將の出家の由を聞かされた京の兄弟達は、あさましがりてのゝしり騒いだ。妹君や女房達は、「いさゝかなる物もまいらで泣き給ふ」ほどであつた。帝もこれを聞し召して、いみじく哀れがらせ給ひ、また宰相中將謙德公を初め多くの人々は、大に驚き夜中をも厭はず山へ訪ねて行つたが、高光の變り果てた有樣に、ただ哀れを催すのみであつた。少將遁世後の女君は、幼い姬君を抱いて淋しい生活を送りつつ、時々横河の高光又は姉君などとの悲しい歌の贈答に、僅かな慰めを求めてゐた。が、あまりに心許ない悲しさに、遂には「世の中うし、尼になりなん」と願ふほどであつた。愛宮も亦佛道修業の兄高光を思つて、精進の日を送つてゐた。この間に中納言師氏の北の方は、裝束・袈裟より始めてひとくだりを調製して山の少將に贈つたりした。その後女君と山の少將との間には、綿々として盡きざる哀れな長歌の贈答があつた。或る夜高光の夢枕に父君が出家した姿で現はれて、「なにをうしとてかくはなりにしか。たふときはいとたふとけれども、いと悲しくなむあはれに」と言はれ「君がすむ横河の水し濁らずば我とどしく袖ぞひぢぬる横河に君が影みば水も濁らじ」の返歌で目がさめる。さて入道高光の例の幼い姬君は、淋しさの餘り、出入する人を見て父君かと尋ね、母君を悲しさに泣かせてゐた。その中に、高光の弟、兵衞のすけ爲光が少將にのぼつたが、しほたれてゐた。その後、桃園の中納言師氏が、しろがねの花瓶を四つほど作り、季節の花を挿して山に贈つた。この話を聞いた君達は、みな山に登つてこれを見たりする。念佛堂では高光が、この瓶に花を立てて念佛修業に專念してゐるのであつた。中宮や、大納言の北の方や、きさいの宮からも贈り物があつた。愛宮も、きぬの御かたびら一重を仕立てて、「君が爲泣く〱ぬへば世の中になみだもかゝる衣たちけり」と歌を添へて山へ贈つた。少將は何人のよりもこの愛宮の文をば悲しく哀れがつて、いみじく泣かれた。その愛宮への返しには、「袂よりぬれ鈍袖もまだひぬにみにもしみぬるから衣哉」とあつた。そして女君には、愛宮の歌に答へると共に、「あふことのかたみにとこそみたてまつれ」と聞えた。それもこれも、すべて言ひ盡すべくもない。まことにいみじう憐れなることどもであつた。

【解說】この物語は、藤原高光が應和元年の暮に出家して比叡山に登り、翌二年八月多武峯に移つて草庵を營んだまでの事實を記したものである。藤原高光は幼名を「まちをさ君」と言つた。九條右大臣藤原師輔の八男で、母は醍醐天皇の皇女雅子內親王であつた。天德四年正月七日右近衞少將、應和元年從五位上に敍せられ、備後權介を兼ねるに至つた。然るに應和元年十二月五日遂にその妻と妹並に幼き女とを殘して比叡山に登り、横川の增賀上人について落髮し、法名を如覺と稱して佛道に入つた。同二年八月には多武峯に移り草庵を結んで練樂房といつた。よつて世の人は高光を目して多武峯少將とも呼んだのである。かくて三十有餘年、如覺は正曆五年三月十日入寂した。「榮華物語」月宴卷に、高光の入道した事を記して、「これは物語に作りて世にあ

るやうにさきこゆめる、哀なることにこの事をぞ世にはいふ」とあるも、この物語のことであるから、かなり古い物語の一つである。高光とその妻・妹、又はその妻・妹と大納言高明の北の方、中納言師氏の北の方等との和歌の贈答を記して、歌主文從を旨としたもので、物語の中の人物は皆三人稱で書かれて居り、高光には敬稱が用ひてある。これを物語的形態として見る時は、「大和物語」(別項)などと共に「伊勢物語」(別項)から「源氏物語」(別項)に移る過渡期を繫ぐ作品として、又日記的形態のものとして見る時は、「土佐日記」(別項)などと共に、後の宮廷女流日記文學への先蹤として、文學史上看過することが出來ない。

【參考】多武峯少將物語考證　丸林孝之　(德田)

東坡全集 とうばぜんしふ　詩文別集　百十五卷

【著者】蘇軾　【諸本】傳本は頗る多いけれども、その體例は大要二つある。その一は分集編訂をなすもの、即ち軾の原本原目に因つて後人がやゝこれを增益したもので、軾が在世時の杭本、明の江西刻本の如きはこれに屬する。その二は分類合編せるもので、居世英本に始まるらしく、宋朝の所謂大全集なるものは、概ねこの例を用ひてゐる。明代に入つては傳刻最も多く、「東坡先生全集」と稱する七十五卷本があり、文を載せて詩を載せず、漏略最も甚だしいものである。又「蘇文忠全集」と稱せらるゝ百十四卷本があり、版はやゝ工であるが、編輯は法度がない。淸の蔡士英の刊行した百十五卷本は、舊刻に據つて重訂を加へ、多く世に行はれてゐる(四庫全書總目提要卷一百五十四、集部別集類七に詳しい)。【傳來】仁平元年(皇紀一八一一)宋商劉文沖が「東坡先生指掌圖」等を上つたこと(宇槐記抄)を傳へて居るので、當時或は既に船載されてゐたかも知れぬ。足利の初世から漸く行はれ、中葉以後には夢も行はれ、抄釋を施す者も多く、江戶時代に入つても、なほ盛んに行はれた。

【內容】軾は嘗て自らその文を評して云つた「吾が文は萬斛の泉源の如く、地を擇ばず皆出づ可し、平地に在りては滔々汨々、一日に千里すと雖も難きこと無し。其の山石と曲折するに及んでは、物に隨つて形を賦して知るべからず。知る可き所のものは、常に當に行くべき所に行き、常に止らざる可からざるに止まる、是くの如きのみ。其の他工と雖も、吾亦知ること能はざるなり」と。泉源とは彼の學識才能であり、行止曲折とはその法度變化である。この學才を以て法度を變化の中に行るので、その文藻の圓轉自在に神妙を極めたのは亦當然である。その自ら許する事既にかくの如くであるから、彼の辭藻を許する者は、宋元以來數十家の多きに及び、何れも彼の才華の豐富雄麗、氣識の高深俊邁なることに歎惑しないものは少く、而もその許する所は遂に數語の自評に及ばない。誠に詩に於ては李杜以後、文に於ては韓愈以後の一大宗と云ふべきである。

【著者小傳】蘇軾、字は子瞻、東坡居士と號す。蜀の眉山の人。洵の長子、轍の兄、世稱して大蘇と云ふ。幼にして穎悟、博く經史に通じ、好んで莊子・賈誼等の書を讀んだ。嘉祐二年(皇紀一七一七)軾時に二十二歲、弟轍と同じく禮部に試みられ、主司歐陽脩が軾の刑賞忠厚論を得て、且つ驚き且つ喜び、これを第一に置かんとしたが、その客曾鞏の爲るなるかを疑つて第二席に置いた。弟轍も亦選に入り、仁宗は二人の對策を得て大に喜び、吾子孫のために二宰相を得たと云つたといふ。大理評事僉書等に歷任したが、神宗の朝に王安石と合はず、請うて地方官となつたが、彼の才名を忌む徒黨のために讒に遭ひ、遂に獄に投ぜられた。やがて赦されて黃州に赴き、室を東坡に築いて自ら東坡居士と號した。黃州時代の彼は日に困匱に苦しんだが、この時代こそ彼の窮迫時代であつた。哲宗立つに及んで、起居舍人に擢でられて中央に還り、爾後地方との間を往返すること數度、徽宗の建中靖國元年(皇紀一七六一)常州に於てその波瀾多き生涯を畢つた。享年六十六。高宗の時資政殿學士を贈り、又太師を贈り、文忠と諡した。

【註釋書】增刊校正王狀元集百家註分類東坡先生詩二十卷(宋王十朋註・劉辰翁評)○施註蘇詩四十二卷○東坡年譜一卷○王註正譌一卷○蘇詩續補遺二卷(以上宋施元之註)○補註東坡編年詩五十卷(淸查愼行)○蘇文忠公詩合注五十卷首一卷(淸馮應榴)　(宇野・本多)

銅鈸 どうばつ　「銅拍子」を見よ。

童馬漫語 どうばまんご　歌論集　【著者】齋藤茂吉　【刊行】大正八年八月、春陽堂。【解說】第一歌論集で、短き歌論百四十一項と、數項の論爭文を載せてゐる。本書は多く歌壇の環境に對つて論じた傾向がある。例へば現代語・口語の歌が流行せんとしたとき、和歌はやはり「けるかも」調であつてかまはぬと論じた。また破調の歌が興り、三十一音律を打破して內在律を强調しようといふ論があつた時も、三十一音の「形式」の特有な點を解明した。また萬葉調の有力な點、短歌の抒情詩なるべき點、寫生は實相觀入によつて成るの說、寫生印象徵の說等、茂吉の短歌に對する考の根本基調をなす幾つかの問題を本書で取扱つてゐるため、「アララギ」の歌風の盛んになると共に、本書も相當に讀まれて歌壇に影響するところがあつた。　(久松)

銅拍子 どうびやうし　樂器　【名稱】銅製で、これを打合せて拍子を取るから名づけたもの。銅鈸・銅鈸子・銅鉢子・銅鉢・鈸・土拍子の異稱がある。【性質】打樂器の一。圓形の銅板を椀の蓋の如き形となしたもの二個から成り、その中央に柄手又は柄紐を附けたものであつて大小種々あり、大なるものは徑一尺餘、小なるものは僅かに兩三寸に過ぎない。この柄手又は柄紐を兩手に持ち、これを打合せて拍子をとる。これを橫に打合せるのと、上下に打合せるのとある。舞樂「迦陵頻」に於て、舞者がこれを持つて打ちながら舞ひ、また伎樂・高麗樂・唐樂に於ても用ひられたやうである。但し今は「迦陵頻」の外には用ひない。「迦陵頻」の舞具として用ひるものは小形のものである。

銅拍子

【沿革】古代アッシリア、バビロン、ユダヤ、埃及に於て最も古く用ひられ、後に波斯から印度に入り、佛樂器として用ひられた。支那には西域を通じて南北朝の頃に入つて來たものらしい。「通典」には西戎及び南蠻より出づとあり、「文獻通考」には、戎・南蠻・扶南・高昌・疏勒の國に出づとあり、何れも西南方から支那に傳へられた事を示してゐる。なほ「文獻通考」に、南齊穆士素の造る所であると記してゐるのは、これが西域から傳はつて始めて唐樂で用ひられた事を示すものである。唐の「六典」には、大酺會に十部の伎樂を設けた中に、燕樂・西涼・天竺・龜玆・安國・康國等の伎の中にこの樂器を用ひてゐる事を記してある所から見れば、唐代に於ても主として散樂伎の中に用ひたものらしい。我が國へは奈良朝の頃傳へられたらしく、「西大寺資財帳」の中にはこの名目がある。即ち唐樂器及び高麗樂器としてこれを用ひてゐたやうである。又奈良の東大寺大佛殿前の八角燈籠の扉には、この樂器を奏してゐる彫刻がある。これ等は主として佛家の所用であつたらしい。又雅樂及び散樂の中にも用ひられ、雅樂では平安朝に至つて單に「迦陵頻」の舞童のみがこれを持つに過ぎなくなつたが、散樂に於ては平安朝の末及び鎌倉時代の初めにも行はれてゐたと見えて、文治二年四月に、鎌倉鶴ヶ岡八幡宮に於て靜が舞うた際に、畠山重忠はこれを打つたと傳へられてゐる。　(田邊)

唐琵琶 たうびは　「琵琶」を見よ。

同文通考 どうぶんつうかう　語學書　【著者】新井白石　【成立】正德年中將軍家宣の命に依つて作つた。【諸本】寫本で傳はつてゐるものには、三卷本・二卷本などあつて、「文字考」(三卷又一卷)、「奇品記」(二卷)、「書契文談」(二卷)と題したものもある。刊本は新井白蛾が增補して四卷四冊とし、寶曆十年九月刊行。新井白石全集(國書刊行會)第四所收。【內容】支那及び日本の文字に就いて記したものである。第一卷は、漢字に就いて、始製文字・六書・古文・大篆・奇字・小篆・隷書・八分・飛白・章草・行書・草書・百體書・俗字(說字・訛字)・押字の十五項に分つて說いてゐる。第二卷以下は日本に行はれた文字に就いて記したもので、神代文字・肥人書・薩人書・眞字・漢音吳音・篆書・八分・飛白・行書・草書・新字(以上第二卷)。片假名・以呂波・梵字・符字・押字・點圖・片假名釋文・以呂波釋文・晉韻假字釋文(以上第三卷)。國字・國訓・借用・譯用・訛字・省字(以上第四卷)の二十五項に就いて先人の說を擧げ、自說を記してゐる。【價值・影響】文字の研究として、漢字・國字の全般に亙つて考究したのは、實に本書が最初である。その研究の結果は今日から見れば不十分な點もあるが、その態度は飽くまでも學究的で、後世の國學者の如く、或る目的のために說を立てる如き事はない。本書の所說中、後世の國語學界に大きな影響を與へたのは、神代文字・片假名・以呂波に就いての說である。神代文字に就いては、忌部廣成の「古語拾遺」には上古に文字は無いと記してゐる。然るに卜部兼方の「釋日本紀」には神代から龜卜の事がある。龜の甲を火で灼くとその拆ける形に依つて一萬餘の文字が出來る。これが神代文字で、その數凡そ一萬五千三百六十字あると記してゐる。併し龜甲を灼いて出來る形は、所謂龜兆であつて文字ではない。龜兆が文字の起原であるとは云ひ得るが、龜兆を直に文字とは云ひ得ない。而して廣成は文字が無いと云つてゐるのであるから、兼方の說のみに依つて神代に文字が在つたとは斷定し難い。又出雲大社と熱田神宮に神代から傳はると云ふ書簡があるが、それが若し實際神代から傳はるものならば、神代から文字があつたと云へるであらうが、未だその眞僞を知らぬから斷定は出來ないと云つてゐる。この點は、後、平田篤胤の「古史本辭經」「神字日文傳」(各別項)等に大きな影響を與へてゐるものである。片假名及び以呂波に就いては、作者に關しては先人の說を集めたに過ぎないが、字體に就いての說は、注意すべきものがある。この方面の事は、後、伴信友が「假字本末」(別項)に於て研究を大成してゐる。これを要するに、本書は我が國に於て用ひられた文字及び用ひられたと傳へられる文字の全般に亙つて考察した最初のものであり、爾後この種の研究の母胎になつたものである。　(龜田)

洞房語園 どうばうごゑん　隨筆　二卷　【著者】庄司勝富　【名稱】山東京傳の補修本は「洞房語園」となつてゐる。【諸本】異本が數部あつて、內容に多少の出入がある。その最佳と思はれる本に、山東京傳が補修を加へたものが、隨筆文學選集第五卷中に收められてある。【解說】江戶吉原遊廓の創立以來の沿革、名妓譚、名物談等を錄したもの。著者は同所の創立者庄司甚右衞門から六代目に當る人だと云ふ。吉原の歷史を語る書籍は大抵この書を本據とする。

【著者小傳】庄司勝富。通稱西田屋又右衞門、號を道恕齋といつた。開闢以來の吉原町の里正で、文筆があり、俳句を好んだ。享保年間の人である。　(和田)

東方朔 とうばうさく　「仙人物の謠曲」を見よ。

東北 とうほく　「鬘能物の謠曲」を見よ。

東北院職人盡歌合繪卷　「職人盡繪」を見よ。

唐本類書目錄 たうほんるゐしよもくろく　書目　二冊　【著者】一色時棟　【別名】內題及び見返しに「二酉洞」とある。【成立・刊行】元祿十二年成、同年刊。【諸本】近藤正齋が校訂した「校正二酉洞」二冊と云ふのが、大阪の前川文榮堂藏版略目(「正齋書籍考」所載)に見えてゐる。【解說】支那に於ける古今の類書の目錄である。經・史・子・集・雜・續の六類に分つて、凡そ一千部を集めてゐるが、單に書名・著者名を記してゐるに過ぎない。卷頭に松崎祐の序及び自序がある。著者は松山侯に仕へた儒者で、字は子績、菊叢と號し、通稱雲溪、後に姓を前田と改めた。享保十年、年七十で歿してゐる。

【備考】本書の脫漏を補ひ、誤りを訂したものに、浪華醉墨子編の「續二酉洞」(寫本)、京都の書肆山田三郎兵衞の「唐本類書考」三冊(寬延四年刊)がある。又「增訂唐本類書考」六冊と云ふのが、前川文榮堂藏版略目に見えてゐる。

【參考】江戶時代之書目　杉浦丘園(雲泉莊山誌卷之二)　(植松・[illegible])

銅脈先生 どうみやくせんせい　狂詩作者　【姓名】畠中正盈、また頼。字は子允、通稱頼母、また政五郎【號】觀齋。狂詩に銅脈先生、また太平館主人【生歿】享和二年(二四六二)六月二日京都に歿す。享年不明。但し六十は越してゐたらうと思はれる。【法名】清譽觀齋正春居士【墓所】京都市外黑谷【閱歷】南北朝時代の京都粟田宮の神官畠中重連の子孫である。聖護院宮の諸大夫を勤め、聖護院の森に住した。一生を酒と狂詩とに隱れて、一般にはただ狂詩の作家としてのみ知られてゐるが、學殖深く、人物もまた立派であつたらしい。その交友には、蒲生君平・柴野栗山・藤貞幹などの人々があり、殊に君平は銅脈を目するに、山陵調査の同志を以てしてゐる。狂詩に於ては、東の寝惚先生大田南畝と並稱されるが、南畝は常に銅脈を重んじ、銅脈はまた南畝の才に服してゐた。その狂詩は、俗語を自在に驅使しながら、而も卑俗に陷らず、滑稽味の橫溢せるものがあり、その手腕には他の追隨し難きものがあつた。晩年風痺の症に罹つて

物言ふ事も出来なかつたが、なほ見舞に來る人に對して卽座に筆を執つて狂詩を作り、その挨拶に代へてゐたと云ふ。妙法院宮の法主より既に死んだものと思ひ誤まられ、追悼のこゝろで、「傷銅先生銅脈揚、定是閻魔破敗場、銅衛ニ赤嘘ニ欺ニ背鬼ニ、魂魄魍魎ニ神樂傍ニ」といふ狂詩を贈られたが、この時銅脈なほ存生中で、直ちにこれに和し、「愚蹟手籬商賣揚、死生素是任相場、生兮死兮宿雨倒、學仙長秋盡阿傍ニ」と答へたが、それより幾ほどもなく病歿した。

【著書】太平遺響一册（明和六年序）（狂詩集）○勢多唐巴詩一册（明和八年序）○太平遺響一册（安永七年序）○狂詩資譜一册（天明六年）○二大家風雅一册（寛政二年序）（大田南畝との贈答の狂詩その他を輯む）○太平遺響二册（享和二年頃か）（狂詩集小說その他）○太平樂府女行國字解一册（安永元年）○片假名世帶記一册（同年序）（孫を嚴笑した戯文）○吹寄蒙求一册（安永二年）（蒙求を摸した戯文）○針の供養五册（安永三年）（滑稽本）○當世心筋立一册（寛政二年）○唐土奇譚三册（同年）（支那戯曲の飜譯）○風俗三石士二册（弘化元年）○杜詩國字解三十册（未刊）。

【參考】京都を中心として見たる狂詩（銅脈先生と其の時代）青木正兒（藝文九ノ一二）○銅脈先生　森銑三（上方第四）　〔野崎・森〕

道命阿闍梨集 だうみやうあじやりしふ　私家集　一卷【作者】道命阿闍梨【傳本】圖書寮所藏。奥に建仁二年の奥書と永仁五年永空が書寫した旨の奥書とがある。【內容】部類がなく短歌・連歌三百二十五首を收めてゐるが、重複した歌が凡そ二十一首もある。終りの五首は本云として掲げながら抹殺し、「以他本書加畢館々校合了、建仁二年四月十六日」とあるが、五首の內には「古今集」の歌、中務の歌等があるから妥當でない。題材の上では、「身なげむとて高き岸に有りて女のながめたる」時、長恨歌の繪等をよんだものが注意される。又法輪に籠つてゐた時の歌、熊野に詣でた時の歌、花山院の歌合の歌、花山院御葬送（寛弘五年二月八日崩御）の又の日の歌、御國忌の日の歌等がある。【批評】道命の詠み口は無雜作で調子が低く、字餘りや句割れが多いが、特に俗調が目につく。例へば「世中のしら〳〵しくもなりまさるかな」「紅葉ばのはしたなきまでちりしきて」「はる〳〵と目のゆくばかりながむれど」「花薄まねくはさがとしりぬれど」「むしりかけたる綿かとぞみる」「蛛が頸をそれるなるらん」「香にきく高麗もろこしはひろくとも」の如きものがある。歌に物語の用語と思はれるものを用ひて散文化してゐる傾向は、當時の一般に認められるが、道命に於てはそれが著しい。

【作者小傳】道命は道綱の子、比叡山に登つて慈惠の弟子となり、特に法華經を受持した。讀誦の聲が微妙にして聞く人は拔群歎し、諸神・亡魂までもその聲を賞でたといふ（今昔物語等）。「宇治拾遺物語」には色好みの僧にて和泉式部のもとに通ひ、經をめでたく讀誦したとあるが、「古今著聞集」には和泉式部と同車したが、後ろ向きに坐して「よしやよし昔や昔いがぐりの笑みもあひなばおちもこそすれ」と詠んだとある。和泉式部との關係は恐らく後世の附會にて、式部と性空上人との間に有名な贈答歌のある事、道命が性空を書寫山に訪づれたといふ事（今昔物語）、道命と赤染衞門と贈答歌のある事（後拾遺集・赤染衞門集）などから誤つて聯想されたものであらう。〔西下〕

道明寺 だうみやうじ　「康事物の謠曲」を見よ。

道命法師集 だうみやうほふししふ　「道命阿闍梨集」を見よ。

答問遺章 たふもんゐしやう　隨筆　一卷【著者】賀茂縣居翁【刊行】文久三年【解說】賀茂縣居の翁が、その門人等の國學上の質問に答へた二十餘條を、後年山田常典が淸書し、江澤述明が上梓した小册である。中臣祓についての幽答を初めとし、餘は歌學に關する考說のみである。文久三年橫山由淸の序、安政四年山田常典、文久三年江澤述明の跋がある。〔和田〕

答問錄 たふもんろく　隨筆　一卷【著者】本居宣長【刊行】天保六年【解說】鈴屋翁が門人等の質問三十一條に應答した考說を集めたもので、古言・古史・神道に係ることが多い。中に神道に就いての意見を問はれたのに對して平生の主張を述べてゐる一段と、最後の「直毘靈」（別項）に係る疑ひを辨說した一段とは、頗る有力なものである。稿本には問者の名があつたのを校者が省いた趣が斷つてある。無年紀本居大平の序、同鈴木朖の跋が添つてゐる。千村仲雄の校訂に係る。〔和田〕

東野 とうや　儒者【姓名】安藤煥圖。字は東壁、通稱仁右衞門【歿年】享保四年（二三七九）四月。享年三十七。【閲歷】下野の人、父は羽黑侯の醫官。幼にして父を喪ふ。江戶に出で太宰春臺と共に中野撝謙の門に入る。寶永中、甲斐侯柳澤吉保に仕へ、二十九歲にして致仕し駒込白山に隱居す。荻生徂徠に從つて學ぶ。詩文に長じ兼ねて音律に通じてゐた。徂徠の古文辭を唱ふるや、世の學者舊聞に慣れて信ずる者なかつたが、獨り東野、山縣周南と率先してこれに歸した。徂徠の勢力が一世を風靡するに至つたのも東野の力に由つたのである。釋大典は、「藝園の徒中文章を事とする者は獨り東壁のみ」と稱してゐる。晚年本多忠統の賓師となつたが、勉勵度に過ぎ、血を吐いて歿した。【著書】東野遺稿三卷　〔佐久〕

東野州聞書 とうやしうききがき　歌論書　一卷【著者】東常緣【成立】未詳。但し書中に見える年月では康正二年が最も新しいからこの頃成るか。【諸本】寫本の外、群書類從卷二九八所收本がある。【解說】東常緣が招月庵正徹や飛鳥井雅親から聞いたものを記し、併せて自見をも加へたもの。組織的ではないが、斷片的の中に、歌論史上もしくは和歌史上注意すべき記載がある。たとへば正徹の所を尋ねて、「おもひかねいもがり行けば冬のよの河風寒み千鳥鳴く也」「ゆふされば鹽風こして陸奥の野田の玉川千鳥なく也」「濱千鳥つまとふ月のかげ寒し蘆の枯葉の雪の下かぜ」の三首の中で、何れをとるかと尋ねたところ、正徹の返事に「我は定家宗にてはつべきうへは、いづれも同體の事にては侍ども、濱千鳥つまとふに附侍べし」とある如きは、正徹の立場を見る重要な資料である。同じく正徹の言として、「源氏物語」の中で、浮舟の方へ匂兵部卿が通つていつて歸る時のさまは、餘情が殊にすぐれてゐるとした如きも、正徹の源氏物語論として注意せられる。また「源氏物語」の諸本を擧げ、「水原抄」「源中最秘抄」等の註釋を擧げた條の如きも注目せられる。定家の書と言はれる「三五記」を「非定家卿作」と言つたのは卓見であり、俊成の「長秋詠草」や定家の「拾遺愚草」を擧げてゐるのも注意せられる。【價値】要するに、東常緣は「古今傳授」を宗祇に傳へたと言はれるだけあつて、最も傳統的であり、從つて自說の見るべき點は尠いが、忠實に聞書を記してゐる點に歌學資料として注意せら

れる。〔久松〕

藤彌太物語 とうやたものがたり　「御所櫻堀河夜討」を見よ。

遠山櫻天保日記 とほやまざくらてんぽうにつき　脚本　四幕　世話物【作者】竹柴其水【初演】明治二十六年十一月、東京明治座。

（役割）遠山金四郎・按摩幸庵實は下總無宿生田角太夫（先代市川左團次）、成田山不動明王（九代市川團十郎）、藤村浦太實は佐島天學（市川權十郎）、回向院の祐天・祐天小僧小吉（市川小團次）、須之崎政五郎（先代市川猿之助）等。

【底本】日本戯曲全集第三十四卷所收。

【梗槪】〔序幕〕淺草花川戶で淸元の師匠をしてゐた延若と、尾花屋の小三郎とは戀仲になつたが、延若の親の須之崎政五郎や兩親の頼みによつて、一旦別れる事にしたが、二人は諜し合せてその夜隅田川へ身を投げた。そこへ通り合せた淨雲寺の僧天學は、盜賊生田角太夫のために金を奪はれんとしたが、立ち現はれた捕手を見て角太夫は短筒を擊つて身を隱し、却つて天學が捕縛される。〔返し〕遠山金四郎が河原崎座の囃子部屋へ出てゐて、仲間內で口論したのを取鎭める。〔二幕〕芝愛宕下の遠山邸では亡父三回忌の逮夜。そこへやうやく搜しあてた醉つ拂ひの金四郎が連込まれる。母・女房・弟等が諫めるので、金四郎は下民の情に通じる目的で腕に刺靑まで施し、芝居の樂屋に入り込んだのであるが、最早今日限りと言明したところへ、明日お召出しの御奉書が到來する。一方捕はれて佐倉の牢へはひつてゐた角太夫と天學とは、牢破りをして成田山の護摩木山へ駈け入り、これも盜人の祐天小僧小吉と會ひ、三人は兄弟の盟約をする。祐天小僧は、夢に祐天上人の覺行を見る。〔三幕〕花川戶の稽古所を出張り場所にした須之崎政五郎の處へ、小三郎實は祐天小僧小吉が來て、護摩木山で拾つた煙草入を種に金を貰ひに來るので、二十五兩包を與へる。その後へ按摩の風をして來た幸庵事生田角太夫に揉ませてゐる所へ、尾花屋の丁稚が使に來たのから思ひつき、その夜角太夫が盜みに入らうと計畫中、女房おもとに見咎められるので締め殺す。角太夫は遂に目明かしに捕へられる。牛込の自身番へ引かれて取調べ中、加役同心の藤村浦太といふは佐島天學であつたので、角太夫の告發によりこれも捕縛されて了ふ。〔四幕〕北町奉行の白洲に於て、佐島天學・小吉等の一件が遠山左衞門尉によつて調べられ、小三郎事小吉は結局罪狀を認められず、佐島天學も單に女犯の罪に問はれる事となり、小三郎と入水した延若も命助かつて吉原に若紫となつてゐる事が判明し、また角太夫の女房おもとも蘇生した事が判明するに終る。角太夫は牛込から繩拔けをして新潟へ行つた所を捕はれる。

【解說】下情に通じた遠山左衞門を經として、當時社會を騷がしたピストル强盜淸水定吉を暗に諷刺した生田角太夫、卽ち按摩幸庵を緯とし、短銃を屢々舞臺上にも現はした點などからも、相當世評を博した。師默阿彌の「鋳夜の鐘」を連想せしむるものもあるが、其水作中の人情劇としては見るに足るものである。〔河竹〕

【參考】續々歌舞伎年代記田村成義○河竹默阿彌　河竹繁俊

東遊記 とういうき　紀行・隨筆　前編・後編各五册【著者】橘春暉（南谿）【角書】諸國奇談【刊行】寛政七年より九年に至る。【解說】京都の醫者南谿が醫學修行のため、關東及び東山・北陸二道旅行中、見聞の奇事・珍物・勝景・畸人等を錄したもので、地理・歷史・本草・土俗、その他の事にも及んでゐる。文章は平明の裡に諧謔で、なか〳〵興味に富む。前編卷一に鎌倉以下九項、卷二に松前津渡以下七項、卷三に交武之餘風以下六項、卷四に親不知以下五項、卷五に秋田蕗以下十項を收め、後編卷一に壺の石ぶみ以下四項、卷二に能登以下十項、卷三に四五六谷以下九項、卷四に熊野御前以下八項、卷五に手取川風雪以下十項を收む。吉村蘭洲・長澤蘆雪・松村吳春・圓山應擧・吉村孝敬・村上東洲等諸名家の挿圖がある。卷一に、寛政七年松本愚山の序及び著者の凡例・總目次があり、每卷首に、その所收目次がある。別に姉妹卷として「西遊記」（別項）十册があり、併せて「東西遊記」ともいふ。共に紀行にして隨筆を兼ねた書である。〔和田〕

東牖子 とういうし　隨筆　五卷【著者】田宮仲宣【刊行】享和三年【解說】京阪その他諸方の風俗傳說、陰陽五行の論、調謔の言、文學談、博物談等何くれとなく書き集めたもので、戯作の漫錄である。卷一に地天泰以下、卷二に日本國風以下、卷三に日本人の潔白以下、卷四に厄年の事以下、卷五に蠶の解以下、各數十則を收む。但し標目はない。本書の特色は挿圖の佳且つ豐かなるに在つて、丹羽桃溪・森周峯等名家の筆もある。享和二年無名氏、同元年田中桐江、同年著者の三序及び享和元年木村孔恭（蒹葭堂）の跋で飾られてある。

【著者小傳】田宮仲宣は、大阪の儒家。通稱悠藏、東牖子、又橘菴はその號である。寛政・文化年間の人で歿年は不詳。「橘菴漫筆」「嗚呼矣草」「愚雜俎」等の隨筆を著はしてゐる。〔和田〕

東陽 とうやう　儒者【姓名】津阪孝綽。字は君裕【歿年】文政八年（二四八五）八月二十三日。享年七十。【閲歷】伊勢の津の人、初め醫を學び、後、經學に志し、京都に出て獨學研磨すること十餘年、古學を以て一家を成し、諸公卿と交遊し、賓師として待遇された。天明八年、鄕に歸り、儒官に擧げられ、伊賀上野に敎授し、尋いで直學士に補せられ、また侍讀學士となり、文政二年、學館を創建し、督學兼侍讀に任じ、執政大夫の次に列せられた。大正十四年、正五位を贈られた。【著書】夜航詩話○同餘話○聿修錄○古詩大觀○杜律詳解○絕句類選○葛原詩話糾謬。〔佐久〕

童謠 どうえう　少年文學【解說】童謠は童心童語の歌謠である。この本義に據る大正期に於ける藝術童謠の提供は、初めて日本の諸詩人たちによつて自覺され、協力された一つの大なる新運動であつた。この新運動の精神としたところは何か、祖國愛である。我が國童謠の傳統の開展である。而して非藝術的であり功利的である小學唱歌の排擊である。卽ち我が國兒童への童謠生活時代の復興であり、更に純粹なる藝術歌謠としての創作童謠の提供である。更に又童心を通じ、叡智を通じ、感覺を通じての、この日本の新時代の童謠體を開拓し、一には成人たる詩人自身の內なる思無邪境を開顯し、二にはその自らの愛と香氣と諧味とを以て、幼き兒童の世界と交感し、結果に於て、彼等兒童の世界をいよ〳〵豐滿ならしむるに至ることを歡びとするにある。無論その本義とするところは、純粹なる藝術の感興を感興とし、その價値を價値とするにある。寧ろ詩は先づ童謠に還れといふことであつた。なほ在來の童謠（小供歌）に就いては「歌謠」を見よ。（童謠詩人會參照）〔北原〕

東洋學藝雜誌（とうやうがくげいざつし） 雜誌 【刊行】明治十四年十月創刊（大正に入つて「學藝」と改題）、東洋學藝社。【沿革】文學士千頭清臣が友人理學士杉浦重剛と圖り、英國の通俗科學雜誌 Nature を手本にして發行したもの。最初の同人は、上記兩人の外、文學士福富孝季・文學士井上哲次郎・理學士磯野德三郎等であつた。後、次第に東京大學の教授達が響援し、加藤弘之・外山正一・菊池大麓・矢田部良吉などが寄稿した。この頃は科學知識の普及の外に、文藝上の文章や作品も掲げ、無味乾燥に失するを避けた。だが、十七・八年以後、帝國大學の機關雜誌的性質を帶びてからは、文藝的趣味は殆ど失はれ、綜合學術雜誌としてのみ存在するに至つた。【文壇的影響】本誌は上述の如き性質なるに拘はらず、初期の雜錄に、外山・矢田部等の新體詩の試譯乃至試作が掲げられてゐて、明治新體詩の勃興を遡る際の好資料である。その有名なものに、第六號「ハムレット」（矢田部尚今譯）、第七號「キングスレー作悲歌」（外山正一譯）、第八號「拔刀隊の詩」（外山正一作）、第九號「鎌倉の大佛に詣でて感あり」（矢田部尚今作）、第十號「カムプベル氏英國海軍の詩」（矢田部尚今譯）等があるが、これ等は何れも、明治十五年七月刊「新體詩抄」（別項）中に收載されてゐる。なほこの集に收載されない作物で注目すべきものに、第九號「西詩和譯」（坪井正五郎）、第十四號「思ひやつれし君」（[illegible]の新體詩）等がある。因にいふ、落合直文の「孝女白菊」の長詩は、往々本誌に掲載されたかに記してゐる文學史もあるが、これは東洋學會雜誌の間違ひであつて本誌ではない。なほ二十四・五年頃から日清役前後にかけて、外山正一・中村秋香等が、度々新體詩を本誌に發表してゐる。即ち外山は「迷へる母」（一一七號）、「忘れがたみ」（一一九號）等、中村は「稲妹」（一一八號）、「福島中佐」（一三九號）等で、これ等は何れも明治二十八年九月刊の「新體詩歌集」（別項）中に收めてある。なほその後の方の事實は注意する人が少いが、新體詩史の研究に於ては重視すべきものであらう。（柳田〔泉〕）

童謠劇（どうえうげき） 「童謠劇」を見よ。

童謠詩人會（どうえうしじんくわい） 【解說】大正十四年六月「日本童謠集」（一九二五年版）の出版を以て、この會が初めて世に認められた。會員組織であるが、會費を徵收せず同會編纂の出版物の印稅を以て事業費及び會員扶助の費となし、審査編纂委員は、川路柳虹・北原白秋・西條八十・白鳥省吾・竹久夢二・野口雨情・三木露風の七名であつた。童謠の普及を計るため主要會員の自選作品及び新人の作品を審査選拔し、併せて每年一回年鑑「日本童謠集」に收錄して刊行する事を主要目的としたが、同集は一九二五年版及び一九二六年版を刊行した後、自然消滅の形にある。（北原・內藤）

東洋文庫（とうやうぶんこ） 文庫 【解說】元中華民國總統府顧問アーネスト・モリソン（Dr. George Earnest Morrison）が、明治三十年ロンドン・タイムス通信員として北京に着任以來、約二十年の間に苦心して蒐集した圖書約二萬四千冊、地圖・版畫等約一千枚を、大正六年、井上準之助・小田切萬壽之助・上田萬年三氏の盡力によつて岩崎男爵に購はれ、同年九月舶載、その後一二保管場所を變へたが、丸の內仲通の三菱第二十六號館內にモリソン文庫假事務所を開き、こゝに圖書を移して整理した。岩崎男爵はモ氏の意圖を繼承して新刊の圖書を購入すると共に、モ氏の未だ蒐集に及ばざりし方面の圖書をも備へ、モリソン文庫を核心として一種の亞細亞圖書館の設立を企圖し、これを東洋文庫と名付けた。大正十二年十二月、東京市本鄉區駒込上富士前町に新築移轉、翌十三年十一月、岩崎男爵は一切の設備を舉げてこれを寄附し、こゝに財團法人東洋文庫の設立を見た。【藏書】モリソン文庫本は、現在では、Dr. G. Morrison Library として保管されてゐるが、支那を中心とせる極東諸邦に關する歐文文獻で、その內容もあらゆる部門に亙つてゐる。これ等の中には稀覯に屬するものもあるが、その特質は、普通の圖書と雖も、苟も事極東に關するものは、新古を通じ組織的にこれを蒐集したと云ふ點にある。藏書中注意すべきは、一四八五年アントワープ刊本を最古とするマルコ・ポーロの東方紀行四十餘種、明末清初に於ける耶蘇會教師の手に成れる支那文物の研究及び時事の報告、歐米に於ける支那學の源流をなす古書、殊に典禮問題に關する記錄、支那語辭書約五百冊、日露戰爭に關する圖書約五百冊、動植物特に支那の鳥類に關する書、近代地理學上並に考古學上の探檢報告類等である。その他百十餘種の定期刊行物及び約六千冊の小冊子も得難い文獻である。モリソン文庫の外、新に加へられたるものは、日本に關するものその大半を占め、滿蒙・中亞・印度・南洋等に關するもの約二萬五千冊、漢籍約二萬冊、その他英のスタイン、佛のペリオが西域で發見した古文書、古書籍類及び歐洲各地圖書館に存する日本耶蘇會刊行の稀書のロートグラフ等は注意に値する。【備考】附帶事業として東洋學講座を開設し、大正十五年より每年三・四回、專門家を聘して東洋學に關する講演を行ひ、また「東洋文庫論叢」「歐文東洋文庫論叢」「東洋文庫叢刊」等を刊行し、貴重な研究を世に紹介してゐる。【參考】財團法人東洋文庫沿革略 ; *Catalogue of the Asiatic Library of Dr. G. E. Morrison.*（植松・岩井）

藤葉和歌集（とうえふわかしふ） 私撰歌集 六卷（二卷闕く）【編者】藤原實敎と傳へるが確實でない。桑俊の「藝鑄綸詞」に、「ちかころ藤葉とて小倉入道前亞相實敎卿撰する云々」とある。實敎は、藤原公雄の子で歌道の家柄、「新後撰」以下の勅撰集の作者であり、權大納言まで昇り、後出家して空覺といひ、貞和五年薨じた。【成立】詞書のみによれば、集中、永仁元年（一九五三）より古い歌として指示されたものはない。「藝鑄綸詞」は、觀應二年（二〇一一）の作とされてゐるから、それ以前の撰述であらう。【諸本】群書類從卷一五七所收。異本は別に見當らぬ。圖書寮や內閣文庫にも寫本が一本づつあるが、類從本と同一。【內容】「群書一覽」には、「よのつねの撰集のさまに歌をあつめて四季の部のみ傳はれり。已下は闕卷か卒業ならざるものか覺束なし」とあるが、類從本には、四季四卷の外に、既に戀部上下二卷が添つてゐる。原本に雜部のあつた事は、「藝鑄綸詞」や、前田家藏「兼好法師家集」の書入によつて證することが出來る（佐藤丹治氏の考證による）。類從本の全歌數六百三十三首。なほ歌を南北の別なくひろく蒐輯してゐるところ、「新葉集」「風葉集」（各別項）「藤葉集」の三集を、南朝三葉集と限定する藤葉集一本の奧書は勿論不當である。但し南北何れとも歸屬の鮮明しない公家もあつたので、かく編された集が、北朝に行はれると共に南朝にも弄ばれたのを

否定することは出來ない。詞書によれば、文保百首（文保三年）から拔かれたもの最も多く、嘉元百首（嘉元元年）、龜山殿七百首（元亨三年）、建武二年內裏千首歌などより採られたものも目立つてゐる。【批評】南北兩朝分立に際して、兩朝中心に歌會の屢々行はれてゐることは奇特のことであるが、而も依然として二條派の歌調の優勢である點も、不可解と言へば言へるであらう。この「藤葉集」も二條派隆盛の一產物と言つてよい。[illegible]死して程なくこの新集の編まれたことも一種の皮肉である。永福門院も御側界の後に屬するかと思ふ。別に特色のある撰集と言ふべきほどのものでなく、格調隸して低く、「時しもあれ峯の霞はたなびけど猶山寒し雪の村消」（永福門院）と云ふ類のものは、寧ろ例外である。（齋藤〔淸〕）

唐來參和（たうらいさんな） 狂歌師・洒落本黃表紙作者【姓名】加藤氏。通稱和泉屋源藏【別號】伊豆亭・三和・唐來山人・唐來參人・松下井三和・傾城恒齋、狂號は質草少々。【生歿】寬延二年に生れ、文化七年（二四七〇）正月二十五日歿す。享年六十七。【法名】春好院要秀居士（辭世）かりの世の地水火風をもどすなり是で五輪もさし引はなし【墓所】深川淨心寺【閱歷】もと武家出身、唐書に達者な點から見て、長崎奉行の配下として彼地にゐたことがあつたらうと推測される。性放逸で家を捨て流浪した。通油町書肆蔦屋重三郎の義弟となり、本所松井町の娼家和泉屋に入婿となつて和泉屋源藏と云つた。松下井三和の號がこの時用ひられたものである。「狂歌人物誌」に、後その娼家をも出で落魄の中に世を終つたとあるが、文化五六年の合卷本に松下井三和の號があるから、晩年は娼家で平和に暮したと見てよからう。狂歌は四方赤良の門、彼の狂歌は「故混馬鹿集」「後萬載集」等の狂歌集に見えてゐる。創作の處女作は、洒落本「三教色」（天明三年）（別項）であるが、特に洒落本「和唐珍解」（天明五年）（別項）は唐音をそのまゝ入れ、長崎丸山を背景とした異色あるものと見られる。洒落本は僅かに上述のもののみであるが、若し「通言東至船」（文化三年刊）の署名東來山人を彼の別號であるとすれば、更に一部を加へる。黃表紙は洒落本よりは多く、「大千世界牆乃外」（重政畫、天明四年刊）が處女作らしく、翌年には「莫切自根金生木」（別項）を出した。しかし早く名作を發表した割に寡作であり、後が振はず、「去程探其後」（政美畫、天明六年刊）、「氣散次參物語」（行麿畫、天明五年刊）の如きは、「[illegible]」を眞似て、その後篇に擬してゐる。山東京傳の

唐來參和筆蹟
（高野辰之氏藏）

「江戸生艶氣樺燒」（別項）に倣つて洒落本的色彩を多く附與し、京傳を題材にした「通町御江戸鼻筋」（政演畫、天明六年刊）をはじめ、「書集芥の川々」（政美畫、同七年刊）、「正札附息質」（政美畫、同年刊）などには艶次郎風の人物を活躍させる。滑稽や淨瑠璃の筋に黃表紙的色彩を附ける方法は屢々繰返され、「物草太郎月」（重政畫、寬政四年刊）の如きはそれであり、また忠臣藏物は、「心學早染草」（別項）の影響によつて、後には教訓味を濃厚にし、屢々類似の作品を出してゐる。漢學の素養が文中に現はれ、支那小說や「雨月物語」（別項）などに據るところも見える。洒落本の作は別として、作者としての力量は中位で、趣向が單調で働きがない割に世間からは認められてゐる。「天下一面鏡梅鉢」（別項）などは、諷刺の辛辣さが特に人氣を呼んだ。なほ外に、「賴光邪魔入」（政美畫、天明五年刊）、「莫交貴今怪談」（榮之畫、天明八年刊）、「冠言葉七目十二支記」（歌麿畫、寬政元年刊）、「人唯一心命」（子興畫、寬政十年刊）（以上黃表紙）、「家內手本用心藏」（[illegible]畫、寬政五年刊）、「敵討根蛇柳」（北齋畫、文化五年刊）、「敵討裏見瀧」（豐廣畫、文化六年刊）（以上合卷本）等がある。（山崎・小池）【參考】江戸作者部類（赤本作者部・洒落本作者部）○戲作者小傳（燕石十種第一）○江戸時代戲作小說通志雙木園主人○狂歌人名辭書狩野快庵編

東里山人（とうりさんじん） 「鼻山人」を見よ。

東里新談（とうりしんだん） 隨筆 二卷 【著者】中根若思【刊行】寶曆十一年【解說】著者博覽の資を以て、本朝の古俗行事の起原、事物の稱謂、內外國の珍奇な物產等を解說したものである。漢籍を引いて和漢の類似を述べてある所が多いが、往々彼に拘泥して妥當を失つたやうな點もある。蓋し當時の漢學者の通弊であらう。卷一に、行合ノ餅ノ事、競馬ノヲコリノ事、ムコウチノ事、トチメンボウヲフルト云事等三十四項を收め、卷二に、英雄誤字多キ事、月番ノ事、ナゲシノ事等三十二項を收めてゐる。物產については、インデンノ事、ヲランダ刀ノ事、カランテウノ事、ウミタケ（海茸）ノ事、ギヤマンノ事、タケブンカニノ事の諸條がある。寶曆十一年木村貞貫の序に、著者の學問の深博なことを宣揚してゐる。その中に、「近世義閩以命世稱之、談者翕言、博物顧讓福川、以余觀之、先生之業、幾過於福川、不亦偉乎」とある。【著者小傳】中根若思。字は敬夫、通稱貞右衞門、東里と號した。伊豆の人で、江戸に出て徂徠及び鳩巢に學び、後に陽明學に入つた。明和二年二月七日歿。享年七十二。（和田）

東籬亭（とうりてい） 讀本作者【姓名】池田政韶。字は鳳卿。【別號】東籬亭菊人・尙古館・尙古老人【生歿】安政四年（二五一七）歿す。享年七十。【閱歷】京都の人で、文政の末年から凡そ十篇ばかりの讀本を作つてゐるが、その傳記は詳しく知られてゐない。「通俗三國志」「通俗吳越軍談」（各別項）等を粉本としたものや鎌倉時代の史實に據つた「北條時賴記圖會」（別項）等を作つてゐるが、多く言ふに足るほどのものではない。【著作】靈驗奇談繪本双忠錄十卷（細川東信畫、文政八年刊）〇三國奇談繪本忠孝美談錄十卷（春曉齋畫、同十一年刊）〇繪本檀風物語五卷（森川保之畫、同十二年刊）等。（笹野）

道立（だうりふ） 俳人・儒者【姓名】樋口彥倫。別名敬義、字は道卿、通稱源左衞門。阮道立ともいつたが、阮は源を支那風に書いたものである。【別號】柴庵・自在庵・芥亭【生歿】元文三年十月十八日生れ、文化九年（二四七二）十二月七日歿。享年七十五（文化七年刊「四月十三日」に自ら七十九歲と署してゐるのに從へば八十一歲になる。姑く疑を存しておく）。【墓所】京都岡崎極樂寺【閱歷】京都の漢學者伊藤坦庵の孫江村北海の第二子で、後、出でて樋口氏を嗣いだ。

彼も亦儒學を修め、明和五年の「平安人物志」には、既に學者の部にその名を列せられてゐる。養父清太夫は、川越侯松平大和守の留守居役を勤めてゐたので、道立も亦その職を繼いだ。彼はその叔父清絢清田儋叟が「雖而不」苛」人而能聞」諸技藝」、其於」謡歌」蓋亦有」師受」因源云」と言つてゐる通り、儒學のみならず又俳諧を善くし、特に蕪村が洛に居を定めるやうになつてからは、その一派の人々と風交を重ね、蕪村とは二十餘年交りを續けた。その蕪村と相識るに至つた因緣は詳かでないが、恐らく蕪村は漢學に就いてその敎へを乞ひ、道立は又蕪村に依つて俳諧を學んだものであらう。だから蕪村や几董の社中に在つても常に客分の待遇を受けてゐた。彼は勿論餘技として俳諧に遊んだので、その作品の傳はるものも餘り多くなく、又技倆に於ても固より几董・召波・大魯等と同日に論ずる事は出來ない。のみならず、百池・春坡等の徒にもなほ及ばないであらう。併し彼の漢學的素養は、夙く麥水の新虚栗調に和して、「蓼の穗の色つくもあるを紫蘇の秋」の如き清新な格調を見せ、「髑髏骨にて人をつくる夜に」「佛燈てさらに痩を盡る夜哉」「梅散て誰そや祇園の畑を打つ」等の如き、蕪村の風骨を奪ふものもある。「夕立の露の間またで照る日かな」の含蓄深い句によつて、几董・大魯を感嘆せしめて止まなかつた事は「新雑談集」に見えて居り、又寫經社の幹事として金福寺句會の斡旋をやつた事もあるから、とにかく彼が蕪村等の間に重視されてゐた事は明かである。且つ實際その作品は、必ずしも構想の奇、格調の新を以て勝つてはゐないかも知れぬが、流石に自ら句品の高い事は爭はれぬ所で、蕪村一派の人々に與へた影響も決して少くはなかつたらう。ただ餘技であつたが故に、蕪村や几董の歿後、自ら先に立つて人々を導き、斯道に精進するといふ風がなかつたのは遺憾と言はねばならぬ。【著書】「道立句集」一册が稿本の儘京都寺村家に傳へられてゐる。

【參考】自在庵道立 穎原退藏（書誌學雜誌大正一三ノ一）　（潁原）

當流小栗判官 たうりうをぐりはんぐわん 「小栗判官」を見よ。

當流雲のかけはし たうりうくものかけはし 浮世草子　五卷【作者】不詳【刊行】刊年未詳【諸本】江戸時代文藝資料第四所收。【解說】さる藏人頭があつた。五節の舞の日に沓を失うて困惑してゐる某の三位の姬君に履物を貸したのが緣となつて、文の贈答から契りかはす。姬君は交情未だ盡きざるに煩惱御菩提と觀じて尼となる。藏人頭は、「呆れはて胸つぶれ、月夜に釜をぬかれ、雷に臍を摑まれた」る心地となり、我も道に入るべしとて髻を切つたと思うて、眼覺めてみれば、五節の舞は今しがた過ぎたとおぼえ、禁中の南殿に宿直しながら、眠りしうちの夢であつた（卷一）。卷二以下卷五までは瀧川八右衞門及びその子八之丞（卷に八左衞門）の親子二代の好色生活を描いてゐる。八右衞門は實直の性質で、家業第一と勤めてゐたが、同業の仲間なにはやの娘おそなを見染める。妙貞といふ尼に仲介を賴んで文を贈り、遂にわりなき契をかはし、夫婦となつて年月ふる程に、男女二人の子供を設ける（卷二）。上の子は、八之丞とて早くも十三歲、瀧川の家の世嗣としてこの春より八右衞門の父常伯の手に養はれる。十五歲の時、おさがといふ三十四歲の物縫ひの女と馴染む。乳姉弟の腰元も八之丞に思ひをかけて歌の贈答をする。二人はやがて契をこめる。この事兩親に知れたので見張の役として妙貞をつかはす。妙貞はふと腰元の歌を見つけてあはれに思ひ、二人を元の如く逢はせる。八之丞はこの年、元服して八左衞門と改めた（卷三）。八左衞門は店の手代定右衞門といふ四十男と衆道の交りを結び、遊びの金を定右衞門から引出す。それを知らぬ祖父の常伯は、死料二千兩の內、千兩を八左衞門に恵み金として與へる。八左衞門はその內百兩をつかひ、あとの九百兩を殘して遊びをやめる（卷四）。八之丞の學問の師匠に兒島丹トといふ人があつた。なにはやの內儀おそなに思ひをかけて文を遣はす。折しも西國の大名に三百石にて召抱へられることになり、そのまゝに西國へ下つたが、戀文を殿の女中に拾はれてお暇となる。ぜひなく再び都に戾つてみると、八右衞門は四十六歲を一期としてこの世を去つてゐたので、一周忌の過ぎた頃を見計らつてまたおそなに文を遣はす。そこへ西國より使が來て、いつぞやの戀書の罪は無實であつたことが判明して歸參が許された。一方八之丞の八左衞門も誰諫むるともなく改心して家榮え、四代の長者となつた（卷五）。本書は所謂書簡文學の一つには相違ないが、篇中贈答の消息文及び歌と地の文とを比較すると、地の文の方がやゝ多い。それだけ戀書手引草といふよりも、小說としての構成要素が多い。「好色文傳授」（別項）などと同系統に立つ作といへる。なほ本書中引用の歌には、それぞれ出典を載せてある。（小泉）

桃隣 たうりん 俳人【姓】天野氏【通稱】藤太夫【別號】太白堂・呉竹軒・桃翁堂・五無庵。後に桃翁といふ。【生歿】寛永十六年に生れ、享保四年（二三七九）十二月九日歿す。享年八十一。【墓所】東京淺草新寺町光明寺【俳系】芭蕉門【閱歷】伊賀上野の人。後、江戸に出で淺草に住んだやうである。芭蕉の從弟であると云ふ（本朝文鑑）。芭蕉の最後の行脚の際に

天野桃隣（芭蕉堂歌仙圖）

は、深川の芭蕉庵の留守の面倒を見、芭蕉の歿した時は、嵐雪と共に義仲寺に赴いて墓を展し、江戸へ歸つても追善に懇ろであつた。かくて元祿九年三月には、師の足跡を慕つて奧羽行脚をし、「陸奧衛」（別項）を著はした。許六の「同門評判」に、「この人常に貧賤にして勞せらるゝ」とあるが、そんな生活であつたのであらう。【俳風】優れた作家でもないが、元祿七年頃には、その技倆の上達を同門から認められたやうである（芭蕉書簡）。許六は「同門評判」に、「花實いまだしかとせず」と云ひ、併し

「白桃や雫もおちず水の色と言へる句侍れば、強ひて修行の功を積まばあらはるべし」と云つてゐる。【著作】陸奧衛五册（別項）（元祿十年刊）○粟津が原一册（芭蕉十七回忌追善集）（寶永七年刊）○古太白堂句選一册（四世桃隣・無石共編）（文化元年刊）。

【業績・人物】東都俳壇に太白堂といふ一派を開いた。卽ち太白堂二世切部桃隣、その門下に石河積翠・村田桃隣（三世）を出し、積翠は「野ざらし紀行翠園抄」や「芭蕉句選年考」の著によつて殊に名高く、加藤桃隣が三世の門から出でて太白堂四世を繼ぎ、その門の山口桃隣が五世となり、江口孤月（六世）・高橋四夕（七世）を經て、松平吳仙（八世）・日比野桃年（九世）と承け、日比野桃月（十世）に至るまで連綿として今日に及んでゐる。一日芭蕉と共に江の島に遊び、藤澤の驛に泊つたところ、旅店の妻の出產に會ひ、畫に「とく出てまた乙みせよ花の兄」といふ狩の一句を書いて與へた處、安產の悅びがあつたといふ逸話もある（續俳家奇人談）。許六は「この人には色々おかしき話多し」（同門評判）と云つて、其角の「饅頭で人を尋ねよ山櫻」といふ句を餞別吟と勘違ひして、奧羽行脚に赴いたのはをかしいと云つてゐるが、果してどうか。併し逸話に富む洒脫飄逸な人であつたのであらう。

【參考】俳諧問答 森川許六 ○桃三代 切部桃隣 ○蕉門諸生全傳 遠藤曰人 ○續俳家奇人談 竹內玄々一 ○俳林小傳 中村先久 ○俳人百家撰 水谷鋒亭 ○俳諧人物便覽 三浦若海　（荻原）

遠輪廻 とほりんね 連歌「輪廻」を見よ。

融 とほる 「古傳說物の謠曲」を見よ。

等連 とうれん 畫僧【俗姓】井伊氏。等連は諱、字は竺雲。【號】自强又は小朶子といふ。【生歿】永德三年遠江に生れ、文明三年（二一三一）正月七日、伊勢金剛寶寺に於て寂す。享年八十九【閱歷】幼時出家して大岳周崇に就いて學び、天龍寺・萬壽寺に歷住し、永享七年八月、相國寺に入り住持となつた。寶德三年、南禪寺の住持となり、後、嵯峨の妙智院に引退した。等連は周崇より「漢書」を受けて通達し、漢書樞と呼ばれた。又易學に精しく、詩も巧みであつた。【著作】「聚雲集」「狂藤」の二部あつたが、今は世に傳はつてゐない。前後漢書七十册に訓點を施した。

【參考】妙智院過去帳 ○翰林葫蘆集 ○日本名僧傳 ○鷲峰林學文集 ○右文故事 ○幻雲文集 ○蔗涼軒日錄 ○綿谷疏譯師行狀 ○碧山日錄　（鷲尾）

童話 どうわ 【名義】童心を基調とする一種の文藝形式で、通俗には兒童に聞かせる說話の意味である。童話といふ文字の成語は、曲亭馬琴の「燕石雜誌」の中に用ひられたのが古く、馬琴はこれに、「わらべのものがたり」と振假名してゐる。同時代に山東京傳もその著「骨董集」の中に童話の文字を用ひ、「どうわ」といふ音讀みも用ひたが、又「むかしばなし」といふ振假名を施した。一面に於ては、つれづれを慰むることを意味する「お伽」といふ言葉に則り、江戶時代に版本となつたお伽草子などから、「お伽ばなし」といふ名稱も用ひられた。明治に至り巖谷小波は、古典及び口碑傳說等によるものを「昔噺」と呼ぶに對し、主として創作及び再話として新に編述するものを「お伽噺」と稱した。その意は第一に兒童に親しみ易き語であり、且つ童話といふ廣汎なる範圍から、文藝作品としてのそれを區別するにあつて、「お伽文學」などの如く、長く通稱となつてゐたが、敎育家・學者等の間には總括的に「童話」の名稱を使用する者多く、大正年代に至り、所謂新興童話の勃興を見、一般文藝家が盛んに創作を試みた頃から、古典・傳說・創作の如何を問はず、「童話」といふ總稱を一般に用ひるやうになつた。英語の Fairy Tale 獨逸語の Märchen は、共に日本語の童話に相當するものに用ひられてゐるが、語源から云ふと、前者は小神仙（妖精）の物語といふ意であり、後者は傳說・小話、又は不思議な物語といふ意味をもつもので、いづれもその國の童話の起原を現はしてゐるに對し、日本語の「童話」は兒童にきかせる話といふ文字通りの意味を適切に現はしてゐる。【性質】名義の變遷が示す如く、その性質もかなり複雜してゐる。先づその成立ちによつて大別すると、（一）古典童話。古典の中に散見するものをいふので、例へば「古事記」「日本書紀」「風土記」その他古代に創作された物語類等、外國ではギリシヤ神話、印度の佛典、アラビヤンナイトの如き。（二）口碑童話。口傳へによつて民間に傳承されたもので、例へば、桃太郞・猿蟹合戰等をはじめ各地の鄉土傳說等極めて多い。西洋では北歐の民話などが好適例で、獨逸語で Sage といふ。グリムの童話の如きは、このザーゲの集大成である。（三）文藝童話。文藝家の創作した作品をいふので、西洋の例でいへば、アンデルゼンの童話の如き。以上の三つに大別することができる。又その內容に就いては、（イ）神仙譚。前記のフェアリーテール、メールヘンがこれで、我が國では浦島太郞・羽衣など、昔噺の類は多くこれである。（ロ）英雄譚・奇人傳。牛若丸・一寸法師などの如き。（ハ）寓話。英語で Fable といふ。動物や植物等に假託して一種の敎訓を傳へ或は眞理を暗示するもので、イソップ物語の如き好適例である。以上の三つは類別の項目であると同時に、又童話構成の要素でもあつて、一篇の童話の中にこの三要素が含まれてゐる場合が甚だ多い。文藝作品としての童話は、童心を基調として眞理を暗示し、人生を象徵する藝術である。「一切の詩的なるものはお伽噺的でなくてはならぬ」と云つたケーベル博士の一語は、極めて簡潔に童話の本質を語つてゐる。敍述の形態よりいへば、神話傳說の形式を傳承した表現樣式によるものであるが、その文體は童語（兒童に理解し得る言葉の意）によつて綴られる事を必要とする。

【沿革】神話や傳說が、何れの國に於ても童話の重要な一部門をなしてゐる點に於て、勢ひ神話學や傳說研究にまで立ち入らねばならぬわけで、日本の童話も、平安朝以前の神話期、平安朝から室町時代の初期にかけての印度及び支那童話移入期、室町時代から江戶時代にかけての普及發達期、明治時代の歐洲童話輸入期、大正時代の創作期といふやうに分けられてゐる。併し童話が兒童文學として認識され、その組織が統制されたのは、近く明治時代に屬する事であるから、本書ではその時代を基點として記述する。勿論それとて偶然の發生ではなく、前述の如く江戶時代に於て既に「童話」といふ成語が出來あがり、馬琴・京傳等によつて先づ編著の筆が執られ、その他草雙紙・繪本類等の版行によつて、一般に流布された情勢が、明治時代に及んでは更に兒童雜誌（別項）の出現を見、出版物の刊行旺盛を加へた必然の勢ひとして、近世文學の黎明期たる明治中葉の文運興隆時代に至り、ここに

愈々兒童文學として存在が確立したわけである。創作童話として第一に出現したものは、明治二十四年に出版された巖谷小波の「黄金丸」(別項)だと云はれてゐる。これは「少年文學」(別項)と稱する叢書の第一編として發行されたもので、小波はその後、「少年世界」(二十八年)を主宰するに及び、毎號卷頭に創作お伽噺を發表すると共に、「日本昔噺」「日本お伽噺」(各別項)を著はし、更に「世界お伽噺」(別項)を編述して、大規模に外國童話の移入を企て、兒童文學の領野を開拓した。また川上音二郎一派によつて、日本に於ける最初の童話劇(別項)が上演された事及び、小波の門より出た久留島武彥がお伽倶樂部を創立して童話口演の口火を切つた事等は、何れも明治三十六年の出來事で、共に小波の後援によるものであつた。これ等各方面に亙る小波の著作は「小波お伽全集」(別項)全十二卷に集成されてゐる。かくて兒童文學の領域が擴まるにつれ、著作刊行年を逐うて夥しき中にも、明治三十五年以降春陽堂出版の叢書「少年世界文學」、同四十年以降富山房出版の叢書「家庭お伽話」(全五十冊)等は出色のものであつた。前者は稻門出身の少壯文藝家たる正宗白鳥・中島孤島・西村酔夢・高須梅溪・佐野天聲等の執筆に係り、後者は高野斑山・吉岡向陽等の編んだもので、共に材料を日本及び外國に求め、清新な讀物として兒童達の歡迎を受けた。かくの如く兒童文學の地歩が確立さるゝに及び、次いで來るものは內容の充實、價値の向上でなければならない。玆に新興童話の鬨聲が揚げらるゝに至つたが、小川未明の處女作童話集「赤い船」(明治四十三年版)は、その先登を切つたものだと云はれてゐる。越えて大正二年「愛子叢書」として島崎藤村の「眼鏡」、徳田秋聲の「めぐりあひ」、田山花袋の「小さき鳩」、與謝野晶子の「八つの夜」、野上彌生の「人形の望」等が實業之日本社から發刊された。この頃より一般文藝家にして童話の創作を試みる者いよ〳〵多く、「世界童話集」によつて童話革新の第一聲を擧げた鈴木三重吉が、大正七年、純粋の童話雜誌「赤い鳥」(別項)を發刊して文壇知名の士の作を紹介するに及び、類似の雜誌も多く出で、殊に婦人雜誌・日刊新聞等に至るまで競つて童話を揭ぐる風潮を呈し、遂に童話は單に兒童のものであるのみならず、大人のための文藝であるとまで鼓揚さるゝに至つた。なほ大正時代に於て特記すべきは、傳說研究から出發した鄕土童話の蒐集及び童話學の成立である。明治四十五年、東京朝日新聞社は鄕土傳說を募集したが、その整理の任に當つたのは高木敏雄で、これを材料として「日本傳說集」を編んだのを切ッ掛けとして、「日本傳說童話集」その他數種の書を著はして童話界に步を進めた。續いて日本傳說學會の創立者藤澤衛彥、神話學の方面から來た松村武雄博士、童話協會の創立者蘆谷蘆村等が出で、學術的立場から童話の研究に努め、その發達を促進した。創作の昂揚、外國童話の移入、傳說の研究——かゝる雰圍氣の中から、松村武雄・小山內薫監修の「世界童話大系」(別項)、楠山正雄の「日本童話寶玉集」(別項)、小川未明の「未明童話集」等が生れた。その他創作に、飜譯に、童話時代を現出し、前記の人々の外、有島武郎・芥川龍之介・菊池寛・久米正雄など、當時の文壇の中堅がこれに參加した。中にも秋田雨雀・沖野岩三郎・宇野浩二・豐島與志雄・久保田万太郞・濱田廣介・宮原晃一郎・吉田絃二郎などは、作品の多い方で、顯著な足跡を印した。こゝに於て自ら童話作家といふ識別が生じ、大正十五年に、童話作家協會が創立され、會員の作品を集めた「日本童話選集」なるものが、同年から毎年一册づつ年刊されることとなつた。要するに明治は創造期であり、大正は興隆期である。創造期はそれ自身としての完成も見られるが、また發芽時代でもあつて、大正に至つてそれが結實したわけである。從つて大正時代は、興隆期自體としての新生面が展開されたと同時に、明治以來の大整理時代、精算期であつたと云へる。(少年文學・童話劇參照)

【參考】日本童話史 藤澤衛彥(日本童話選集第一輯附錄)○明治大正の童話界 山內秋生(同書第二輯附錄)○大正昭和の童話界 濱田廣介(同書第三輯附錄)○童話及び兒童研究 松村武雄○兒童教育と兒童文藝 同上○童話學講話 蘆谷蘆村○世界童話研究 同上○童話十講 同上○日本童話の新研究 中田千畝○日本童話集(日本兒童文庫十五・六・七編)○日本文藝童話集(小學生全集十四・五・六編)○少年文學集(現代日本文學全集三十三編) (巖谷・山內)

道話 だうわ 心學 【名義】心學の社會教化運動の主要な一部分として用ひらるゝ教訓諭・寓話の類をいふ。【性質】その說く所極めて日常卑近な倫理であつたが、その目指す所は、知心・見性の修行へまでの機緣を結ぶにある。若し本心發明の便りなく、知心・見性の渡りがつかないやうな話であるならば、假令勸善懲惡の意を寓したものであつても、また三敎の經典に語を藉りた講釋であつても、雜話と稱してこれを斥けた(手島堵庵の社中須知心得書)。【心學に於ける道話の地位】心學の事功事業としては、國民健康增進のための無料巡回醫療・調藥施行があり、生產增進のための農作改良指導あり、社會風俗改善としては「間引」矯正に努力せるが如き、又救濟事業として天保・嘉永の大飢饉に於ける活動は顯著なものであるが、これ等諸運動の外に、心學運動の應用的事業的方面の中樞をなし、大規模で且つ繼續的であつたものは教化運動であり、その常用手段として用ひられたものが、即ち道話であつた。【規模】橘南谿の「北窓瑣談」(第四卷)にも、その規模の大掛りであつたことを說いてゐるが、寬政三年十月、江戸參前舍の新築會開きの道話の時などには、千人からの聽衆があつたものゝやうである(中澤道二が時習舍の都講吉田甚兵衞への書狀)。關西に於ても同樣、寬政十二年の冬に、泉州堺に於て道話があつた際には、聽衆實に二三千人に達したと記されてゐる(上河淇水の書狀)。寬政六年正月から二月へかけて、中澤道二が丹波地方へ出掛けた時の狀況も、主催者から時習舍都講へ報告した書狀によると、聽講延人員六千六百七十二人に達し、毎席平均五百十三人の出席者があつた。そしてこの聽講者の中から五十四人の心學初入者を見出すことが出來た。續いて篠山城下の開講も、延人員五千百七十六人、毎席平均八百六十二人の聽講者があつた。大島有隣・柴田鳩翁・中村德水・奧田賴杖などの道話席が、これに劣らぬ聽衆を持つたことは、記錄の徵すべきものが存してゐる。

【沿革】梅巖は、道話といふ言葉を用ひてゐない。堵庵は既にこの言葉を用ひてゐるが、なほより多く講釋並に座談といふ言葉で呼んだのである。中澤道二以後になると、道話なる稱呼が一般に普及して、心學者自身も、世間

も、盛んに道話々々と呼ぶやうになつた。寬政六年に八宮齋の手によつて輯められた中澤道二の「道話聞書」が、道話なる語を書名の中に編み込んだ最初の心學書類であつた。翌七年六月には、同じ人の編輯にかゝる「道二翁道話」初篇が出板され、續いて同八年に第二篇、十二年に第三篇が出板されて、書名としての道話の文字が愈々ポピユラーなものとなつた。梅巖の講釋は、經典の語句を題材にとつたものであつたが、併し語句の考證穿鑿などに囚はれずに、一意本心の提撕に役立てようと努めたものであつた。即ち初めから文字にたよる學究を重んじないで、知性の體驗にまで進む一つの補助手段として講釋を用ひたに過ぎない。殊に寬保元年、武藏國府中領に於て孝子新木實長五郞が褒賞せられ、その言行が板行に附して宣傳せられるに及んで、梅巖の運動に甚深の衝動を與へた。「齊家論」によれば、「門弟中にも是までは、文字なくては學問の甲斐なきなどゝおもひし者も、長五郞が事を聞き、いよ〳〵吾言ふところに同心するこそ有がたき」と記されてゐる。實際この長五郞の事蹟は、文字によらざる修養の可能を主張した梅巖の旨を、沁々とその門弟に感得せしめた。かくてこの年から經書の講釋の外に、孝子傳を讀み聞かすといふことが始まつた。これ道話へ第一步を踏み出したものである。堵庵の代になつて道話が非常に盛んになつた。堵庵自身が四方に周遊して道話をしたことは言ふまでもない。堵庵の心學に關する著書は甚だ多かつたが、心學運動の組織に關するものが主で、道話に關するものは少かつた。僅かに「あるべかゝり」「我津衞」(別項)外一二の道話と稱すれば稱し得るものがあつたに過ぎない。併し彼の時代には道話に關する著書が澤山に表はれた。

五體和合續鳩居 岡田賢先(明和二年晩秋)○西岡孝子行狀聞書 布施松翁(明和七年五月)○我津衞 手島堵庵(安永四年五月)○町人身體なをし 手島堵庵(安永六年六月)○見濟卜筆實卜先生辯佞 盧白齋(安永六年六月)○實卜先生辯佞後篇 盧白齋(安永七年正月)○鬼は外 野之(安永十年春)○本心早合點 是道子(天明元年五月)○心學一助波奈志之種 恒亭主人守株子(天明二年春)○童蒙入教訓春日和 (天明二年三月)○孝子留松傳 鎌田一窓(天明四年春)○やしなひ草 脇坂義堂(天明四年三月)○我が守 高田東実(天明四年)○勸孝見勢ばや 自餘居士鶴鷹(天明五年正月)○雨のはれ間 盧白齋(天明六年春)○父子問答 小柴長雄(天明六年)。

など、何れも堵庵在世の時代に出版された道話の例である。このうち道話の面目を最もよく備へたものの最も早い著者は盧白齋であつた。盧白齋の傳記は全く分つてゐないが、その著書で最も世に知られてゐるものは、「實卜先生辯佞」(別項)「同後篇二雨やどり」「目のあたり」等である。この著者は輕妙な筆を驅つて、心學の本旨を卑近な倫理の間に寓して說くのが得意であつた。「金持の金が金持の金にあらざることは、鍋持の鍋が鍋持の鍋にあらざるにて知りぬ」と說いて、私案なしの本意を說けるが如きはその一例である。併しその道話の體裁は、「實卜先生辯佞」に代表せられてゐるやうに、斷片的なものの集まりといつた形式を成してゐる。道二以後のもののやうに一篇一つの物語りで一貫してゐる講談風のものではなかつた。丁度これと同じ類型に屬するものに布施矩道の「松翁道話」(別項)、寺井方信の「案山子草」があつて、何れも心學質問の一つ一つを具案的な事例の袖に包んで提供した姿勢をとつてゐる。從つて噛めば味ひがあり、就いて考へれば考へる程深味があつて、心學修行への好個の手引草である。併し一場の道話として聞くには、あまりに深遠であり斷片的であつて、解し難く惱み易きものであつた。道話の雛と見るべき天明・寬政期の心學者に、中澤道二・脇坂義堂があつた。義堂の道話に關する著述は頗る多いが、その編纂體裁の上から見て、これを二つの類型に別けることが出來る。その一は盧白齋や松翁のものと同じく箴問的・斷片的のものであつて、「御代の恩澤」「民の繁栄」などはこれに屬する。他の一つは日常卑近の道德を旨として、必ずしも心學の眞諦に觸れることを努めるのでない。從つて一篇が一つの物語になつてゐる教育講談風のもので、「孝行になるの傳授」「銀のなる木の傳授」「開運出世傳授」「福相になるの傳授」「和合長久の傳授」「長命になる傳授」などの類である。第一類に屬するものは寬政初期頃までの著作に屬し、その第二類に配すべきものは、寬政後期から、文化年代へかけての著述が多い。彼が人足寄場で說いた稿本「心學教諭錄」の如きは、その代表的なものである。義堂に於けるこの變遷は、やがて道話史上に於ける變遷でもあつた。義堂を機軸として教育講談風の道話形式が展開し來つて、民衆通俗向のものとして、一層洗練せられたと見るべきであらう。大衆の興味を呼び掛けるのに、從つて又心學を普及させるのに、極めて有力な展開であつたと見ることが出來る。中澤道二も亦一席讀み切りの講席向きの道話をしたこと、その引喩が輕妙で、卑近で、興味深きものであつたことなどの點で、全く義堂と軌を同じうしてゐた。この方面から言へば、道二・義堂の時代に至つて、後年に亙る道話の形式が確立したと言ふべきであらう。「道二翁道話」(別項)には、少くとも二つの重要な特徴があつた。その一は最初に經典の一輪を揭げて論旨の大要を明かにして、それに因んで諄々と說き去り說き來つたことである。道話のこの形式は、その後奧田賴杖・柴田鳩翁・平野橘翁などに襲用せられて、今日に至るまで變らぬ鑄型となつた。その二は道話の目指すところが本心修行への手引草たるにあつたことは、心學者の誰もに共通したところであるが、道二の道話に於ては、その譬喩・引例の一つ一つが、直ちに本心體認への極めて大切な手繰りたるやうに仕組まれてゐたことである。言はば道話の心學的本領が如何にも判然とあらはれてゐた點である。義堂が福相だとか和合長久だとか出世開運だとか、世俗的幸福を題名にかゝげて、これに因んで心學的心境を說いたのに反して、道二は飽くまで正面から驀地に本心に觸れて行つたのである。こゝに「道二道話」の面目が躍如としてゐる。奧田賴杖の「心學道の話」(別項)、柴田鳩翁の「鳩翁道話」(別項)は、道話の典型として古來人口に膾炙されてゐるが、その形式は既に早く道二・義堂の手によつて作られたと見るべきであつた。

【影響】寬政元年の頃と思はれる中澤道二の書狀の一節に、

當地も段々繁昌仕候て、月次定日外にも人數七百四五十人づゝも御座候。心學修行日百人斗も修行人御座候。其外御屋敷方町方共御信心之御方多く御座候。晝は御屋敷方、夜は町方にて相勤申候。最早九月三十日迄一日も明き日なく御約束仕置き

候。今下拙愛人や貳人五人七人御座候ても行屆不申候。誠に先生の道も時節到來仕、難有仕合存候。只今にては心學者と申、道の噂少々にても仕候へは、一統に聟入か婚のやうに思ひ詰け宜敷御座候。此間より當湊兩綱と申所に、錢とりの軍書講釋師御座候處、軍書之切に都鄙問答講釋仕候とかんはん出し申候而、いかやうに講釋可仕哉と噂仕候。

かうした偉大な社會的勢力は、その教旨と相俟つて、心學道話の感化力をいよ／＼大ならしめた。「道二翁道話」「關口家文書」「心學初入手引草」「心學道の話」「鳩翁道話」などに散見してゐる心學感化の實例は、その感化力の偉大さを物語るものである。横井小楠も曾て心學の感化力に言及して、「京師にて豪家抔此社中に入申候へば、直樣人物も宜敷相成候位にて、第一に被推信候事に御座候」と叙した程であつた。

【參考】日本道話全集(加藤咄堂監修)○心學叢書(赤堀又次郎編)○鳩翁道話(柴田謙堂編)○石門心學の研究(石川謙)○日本近世教育史(横山健堂)○日本敎育史(高橋俊乘)　〔石川(謙)〕

童話劇(どうわげき)【名義・性質】童話(別項)の性質・内容を、劇の形式によつて表現したものである。童話をお伽噺と稱したと同樣に、當初は「お伽芝居」と云つた。又兒童自らに演ぜしむる事を目的とする兒童劇、學校に於て課外敎化用として生徒に演ぜしむるための學校劇、歌劇の形式を童謠で現はす童謠劇(當初は「お伽歌劇」と云つた)など、その名稱の異なる如く内容に多少の相異はあるが、何れも童話劇の分派と見ることができる。【沿革】明治三十六年、雜誌「少年世界」の春季增刊として發表された巖谷小波作の「春若丸」と題するお伽芝居の脚本が、恐らく童話劇として日本に於ける最初の作品であつたらう。かくて小波は盛んにお伽芝居の必要を唱道したので、遂に同年十月、東京座に於て川上音二郎一座の旗擧げを見るに至つた。出し物は世界お伽噺の中の「狐の裁判」と「浮かれ胡弓」とを小波が脚色したもので、これが初めて日本の舞臺に上演された童話劇であつた。玆に機運は促成され、お伽倶樂部を主宰して專ら口演に努めてゐた久留島武彥は、東京お伽劇協會を組織し、天野雉彥・石川木舟等を專屬俳優として、明治四十年、本鄕座に於て小波脚色「羊の天下」、青年會館に於て小波作「牛若丸」等を演じたのを手初めに、各所で興行を續けた。同四十二年、伯爵柳澤保惠等によつて日本に於ける最初の洋式演藝場有樂座が竣成さるゝに及び、日曜の晝を子供日と稱してお伽芝居を公演する事とした。俳優には前記お伽劇協會が解散して、天野・石川等も加入し、栗島狹衣一派と共演した。後年映畫女優となつた栗島澄子・梅村蓉子・夏川靜江等は當時子役として活躍した。上演脚本は、巖谷小波のお伽芝居・お伽歌劇・對話などを主とし、生田葵・井田絃聲・伊藤松雄・額田六福・長尾豐等の作品も多く上演された。子供日は、爾來大正五・六年頃まで繼續し、時々規模を大にして「家庭劇」なる名稱の下に特別興行を行つたが、この間に特記すべきは明治四十二年の「小公子」の上演である。脚本は巖谷小波が米國滯遊中、彼地の俳優學校で用ひたのを持ち歸つたもので、小公子に扮したのは坂東かつみ(後の坂東勝太郞)であつた。「小公子」は、その後大正三年頃、東儀鐵笛一派によつて帝劇に上演された事がある。大正時代は、お伽芝居運動の當初の如く、專門の劇團等には目ぼしいものがなかつたが、一般文藝家にして童話劇の製作をなす者多く、同時に泰西の名作も續々飜譯移植された。その代表的作者としては、小山內薰・久保田万太郞・長田秀雄・秋田雨雀・楠山正雄の諸氏を擧げる事ができる。上演の主なるものは、小山內薰の「人形」が有樂座の家庭劇に、秋田雨雀の諸作が澤田正二郞一派に、楠山正雄譯「青い鳥」が水谷八重子・夏川靜江の主演で水谷竹紫の藝術座に、久保田・長田の諸作は、歌舞伎の年少俳優より成る芽生座等によつて上演又はラヂオ放送等が屢々行はれた。坪內逍遙博士の「家庭用兒童劇」は、大正十一年の出版に係り、同年十一月、帝劇技藝學校生徒によつて有樂座で公演したのを手初めに、各方面で演出されたが、その主旨は題名の示す如く、必ずしも劇場及び職業俳優によらず、家庭又は學校に於て兒童自らが演ずるといふ所に新生面があつた。(兒童劇參照)　〔巖谷・山內〕

【參考】小波お伽全集第四卷芝居篇(千里閣版)○少年文學集(現代日本文學全集)○兒童劇集(小學生全集)○兒童劇集(兒童文庫)○童話劇集(世界童話大系)○明治大正の童話界(山內秋生記)(日本童話選集第二輯附錄)

兎園會(とゑんくわい)　「兎園小說」を見よ。

兎園小說(とゑんせうせつ)　隨筆　十二卷【編者】瀧澤解等【成立】文政八年の初め、瀧澤解・山崎美成等の發起で、屋代弘賢(輪池)・關思亮(海棠庵)・西原好和(松羅館)・大鄕良則(信齋)・桑山修理([illegible])・荻生維則(與園)・淸水赤城・中井豐民(乾齋)・瀧澤興繼(琴嶺)・龜屋文寶堂と合せて十二人、外に客員二人の好事家を以て組織した兎園會に、每月一回集合して各員持寄りの異聞奇事の文稿を披露し合つた事がある。その每會の文篇を纂輯して十二卷一部としたのがこの兎園小說である。第一集は文政八年正月關海棠庵での發會、第十二集は同年十二月瀧澤著作堂での終會である。【諸本】

鴉園小說稿本(笹野堅氏藏)

二十卷の全本は瀧澤氏に在つたのを、天保十四年伊勢松坂の友人小津氏に讓つたと云ふことである。今、世間稀見の本は本編だけである。而も略本が多くて評本は殆どない。明治二十四年、百家說林出版に當つて、大槻如電翁が所藏の全本を提供して、爰に本書の全豹を該叢書に於て見ることが出來た。翁の藏本

は著作堂の友人石川疊翠の藏印あるもの。察するに馬琴の持本を借りて謄寫した本であらうとのことである。この顚末は、百家說林正編「兎園小說」の部分に如電翁の前書に出てゐる。【解說】一集一卷の割であるが、それは本編であつてその上に外集・別集・餘錄を併せてもと二十卷存したと云ふ。通計十二集百四十九篇。まゝ寄圖を加へてある。必ずしも異常の談ばかりではなく、忠臣・孝子・烈女・節婦の記事もあり、殊に第十二集の掉尾の一篇「蒲の花かゝみの上」(著作堂)の如きは、志士蒲生君平の詳傳で、藤田幽谷撰文の墓表まで引き出しての大作であるが、槪しては興味本位の珍話が多い。馬琴の寄稿したものには、後に明治二十一年以來渥美正幹氏編の「曲亭雜記」に收載されたものもある。總じて馬琴には記事詳細を極めずんば已まざる癖があるが、本書中にも同じ傾向が窺はれる。　〔和田〕

兎園小說外集・別集・餘錄・拾遺(とゑんせうせつ)　九卷【著者】瀧澤解【諸本】帝國圖書館所藏大槻如電翁校訂本を以て大正二年國書刊行會が印行した「新燕石十種」第四册に編入のものが本書に印本ある初めである。但し別集中卷のみは同本に省いてある。同卷中の「けんどう考」及び「元吉原記」は、「新燕石十種」第一册に出てゐるからである。【解說】兎園小說本編の後を承け、兎園會廢絕の後、瀧澤解(馬琴)が獨力で編輯したもので、外集二卷を除いた以下七卷は門外不出の秘であつた。外集二卷は皆會友との共同編纂で、その卷一に年の和名幷に月の異名考餘以下十條、卷二に唐船漂着の記以下十八條を收め、別集上卷にひやうし考以下十一條、中卷にけんどん考以下二條、下卷に帶掛考以下十二條を收め、餘錄卷一に佐渡の州民孝行并奇特御褒美錄以下十一條、卷二に小泉兄弟四人并一姪褒賞略記以下二十一條を收め、拾遺卷一に平井兄弟が復讐の犧牲をいひおこせし讃岐の高松人の消息の寫し以下八條、追加三條、卷二にイギリス船圖說以下十六條、追錄一條を收めてあり、所々に小圖を挿んである。　〔和田〕

都會の憂鬱(とくわいのいううつ)　「田園の憂鬱」を見よ。

富樫(とがし)　幸若舞曲(三十六番の一)　二卷【作者】不詳【別名】安宅【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板(十行本)、明曆四年板(山田市郎兵衛開板)。上田萬年博士校訂「舞の本」、同再刻名著文庫本「舞の本」(富山房)、新群書類從第八舞曲部所收。【解說】判官物(義經傳說)。安宅傳說。謠曲「安宅」と同材。山伏姿の義經主從加賀國安宅の松の邊で兒童に道を問ふ事、辨慶一人羽黑山伏と號して富樫介の館に到り、見破られて捕へられんとし、陳辯の末望まれて勸進帳を讀み上げる事を作る。即ち「笈さがし」(別項)の前段をなす曲。勸進帳は謠曲のそれより詳しく、辨慶が單身乘り込むのは「義經記」(卷七)と一致する。打擲はこれにはない。【影響】近世戲曲演劇には能の「安宅」の流を引く一類とこの舞曲の系統を承ける一類とがあり、兩者の混合もある。特に近松の「[illegible]靜胎內捃」(別項)の四段目、それから出た榎本虎彥脚色の「安宅關」はこの曲の後身。又、長唄の「隈取安宅松」(別項)はこの曲の前段から出てゐる。

【參考】羅生門の鬼(安宅の辨慶)(島津久基)○近古小說選解說 同上　〔島津〕

富樫廣蔭(とがしひろかげ)　國語學者【姓】井手・本居・富樫・鬼島【名】廣蔭・彰友・操・倭【號】言幸舍、晩年には塊老翁。【生歿】寛政五年紀伊國和歌山に生れ、明治六年八月二十四日伊勢の桑名で病歿。享年八十一【閱歷】廣蔭は本姓井手氏で、家は和歌山の木綿問屋であつたが、學問に志し、文政三年の秋(二十八歲)、和歌山にゐた本居大平の門に入つた。文政五年春(三十歲)、大平の嗣子となり、名を本居彰友と改めた。同年夏更に深く研學しようとして伊勢國松坂の本居春庭の門に入りて刻苦勉勵し、學業大に進んだ。文政六年夏(三十一歲)、故あつて本居彰友の姓名を返し、こゝに富樫廣蔭と改め、なほ春庭の下にあつて研究してゐた。文政十・十一年頃は、春庭の「詞通路」の校正に從事した。この頃には廣蔭を師と仰ぐ人も相當の數に上つてゐた。早く文政七年(三十二歲)夏には美濃で文法の講義をしてゐた。文政十一年の冬、春庭が歿した。春庭の嫡子有鄕はまだ幼かつたので、その後見人となつて、本居家の學を繼ぐやうに一時本居家から希望せられてゐたが、故あつて辭し、翌年春桑名へ移つて寓居し、爾後この地に在つて益々研究を積み、又後進を導いた。十數年の後、この地の三崎春日社の神官鬼島氏を繼ぐ事になり、鬼島倭と改め、別に長女に婿を取つて富樫氏を繼がしめた。安政二年夏(六十三歲)、從五位下土佐守に叙任せられた。同五年(六十五歲)、神職を子廣昨に讓り、自分は富樫の家に歸り、女婿廣厚と共に住んだ。この頃駿河國庵原郡柏尾の和田宣和の家及び伊豆の熱海に遊んで約一年を送つた。女婿廣厚は廣蔭の學を繼いで造詣頗る深かつたと云ふが、明治六年四月、四十八歲を以て歿した。而して廣蔭もその後間もなく歿した。

【著書】(一、國語・文法に關するもの)詞玉緒解續三册(別項「詞の玉緒」の條參照)○詞玉橋二册(別項)明治二十四年刊○詞玉襷一舖(文政十二年刊。刊行年次の記されてゐないのもある。別項「詞の玉緒」の條參照)○五十連音圖・詞辭結辭譯辭・活用解略標圖(この三圖、文政十二年刊の「詞玉襷」の裏面に印刷した簡單な圖表である)○詞八衢踏分一卷○詞通路奧栞三卷○玉綴さめてのすさび二卷○字音假字用格追考一卷○五十音分生順次圖一舖(刊本)○五十音義二卷○言靈闡顯論五卷○神國音韻考二卷○韻鏡皇國用法五卷○韻鏡捷見一卷○韻鏡案字要訣一卷○三帖和讃活用解二卷○百人一首活用解二卷。(二、古典の註釋)○古事記正傳五卷○古事記音義二十卷○日本書紀私考五卷○記紀歌類辭解二卷○古語拾遺往存鈔二卷○祝詞式撮要解三卷○大祓詞音義解二卷○萬葉集類辭解二十卷○萬葉集類句六卷○藏原鈔

富樫廣蔭自賛(上田萬年氏藏)

歌語要解五卷○類詞詳解三卷○類詞詳解五卷○古今集遠鏡補三卷○古今集正々義二卷○古今集紀氏直傳解三十卷○八代集類辭解五卷○土佐日記譯解二卷○源氏物語大意鈔五卷○源氏物語類語詳解十卷○伊勢物語譯註三卷。(三、歌集及び雜)言靈合歌集初編三卷○桂若葉初編二卷・二編三卷 ○境老翁隨筆初編三卷○康頼百官職掌圖解一卷○神家至要祝詞案二卷○氏家祭神要略一卷○詞解衣五卷等。

【業績】 廣蔭は本居父子の學を繼承して頗る精勵した人で、著述も多いが、流布する事極めて少く、學界に直接大きな影響を與へるに至らなかつたのは遺憾である。但し國語學の方面では「詞玉欅」「詞の玉橋」等は比較的流布してゐる。これ等の書に於て注意すべき事は品詞の分類である。即ち廣蔭は品詞を言(名詞)・詞(動詞・形容詞)・辭(助動詞・手爾乎波)の三種に大別し、これを更に數個に分類してゐる。この分類法は部分的には不備誤謬必ずしも少くないが、大綱に於ては卓見と稱すべきものであつて、殊に辭を動辭(助動詞)と靜辭(手爾波)とし、助動詞を動詞形容詞から分離した事は偉とすべきである。明治・大正の時代に、品詞を體言・用言・助辭の三に大別してゐる學者が多いが、それは直接或は間接に廣蔭の影響を受けたものである。

【參考】 詞玉欅(吉田冨美與書)○鬼島廣蔭(三浦藝堂 國學院雜誌六・七・八)○富樫廣蔭の傳(森繁夏太郎 國文學三) 〔福田〕

戸川殘花 とがはざんくわ 詩人 【本名】 安宅 【生歿】 安政三年江戸牛込に生れ、大正十三年七月病歿した。享年六十九。【閲歷】 幕臣で、彰義隊に加はつた事もある。大學南校・慶應義塾・英地學校等に學び、「文學界」客員となつて明治二十年代の詩壇に在り、「弔歌桂川」「朝の歌」その他の佳篇を公にした。 美妙は「綺麗の殘花子云々」と短評を加へてゐる。「朝の歌」は明治二十五年の「日本評論」誌上に掲げられ、「弔歌」は「文學界」を飾り、 透谷はこれを許して「巢林子以後、圖らずも情死は友人を法界の人に得たりけり」と言つた。 蓋し殘花は基督教徒となつて傳道生活を送つてゐたからである。 敦樸ある江戸士人の博大趣味と、 拘泥せざる拓落の放膽性とを備へた洒脫にして風雅を帶ぶ特色ある性格で、 二十年代の詩界に於ける殘花の地位は、 嶄然群小を抜いてゐる。「褪紅府」を主宰して攻學を事としたのも同じ時代である。 著しき性格者の割に詩風が大成しなかつたのは時勢にもよるのである。 每日新聞客員・南葵文庫主任等の職に在つた。【著作】 月かげ(文學界二八ノ八)○たのむ木蔭(文藝倶樂部二八ノ九)○新田勢(每日新聞二八ノ一〇)○劍影鬼(文藝倶樂部二九ノ九)等。 詩作は明治大正詩選(新潮社)・詩人全集(初期詩人集)・現代日本文學全集等に收められてゐる。 〔日夏〕

戸川秋骨 とがはしうこつ 翻譯家・隨筆家 【本名】 明三 【閲歷】 明治三年十二月熊本縣玉名郡岩崎村に生る。上京して明治學院に入學、同校にて島崎藤村・馬場孤蝶等と交り、明治二十四年三月卒業。 同二十六年「文學界」(別項)の發刊に際し、同人となつた。 一方、東京帝國大學英文學科に學び、ラフカディオ・ヘルン及びラファエル・ケーベル等の薫陶を受けた。 同校卒業後、 久しく地方の高等學校に敎鞭を取り、 一時歐米に遊んだ。 後、 轉じて慶應義塾大學敎授として今日に及ぶ。 早くから英文學の翻譯によつて世に現はれ、 就中、「エマーソン論文集」、ヴィクトル・ユーゴー原著「哀史」(レ・ミゼラブル)及び「十日物語」(デカメロン)等の翻譯は廣く讀まれた。 專門とする英文學に於て一方の權威である外、 隨筆に於ては異色あるユーモアと諷刺をもつて聞えてゐる。 隨筆集「文鳥」及びその大部分を改編したところの「樂天地獄」(昭和四年四月)は、 その代表作を集めてゐる。 〔武藤〕

時 とき 文法 【名稱】〔英〕tense 〔獨・ラテン〕Tempus (複 tempora) 〔佛〕le temps 【解說】 文法範疇の一つ。 概念範疇としての「時間」は、哲學的・論理學的・心理學的に精細な研究を行ふべき興味ある問題であるが、 その精しい議論は文法に關係が薄い。 文法範疇としては、時間に關する概念の或るものが、一定の語形に結びついて表はされる慣習を問題とするに止まる。 かゝる慣習は、 各國語毎に異なることがあるから、 一般的の記述をすることが困難である。 のみならず、 多くは單純に時間の概念だけが表はされることは少く、 所謂「法」(mood)(別項)に屬する概念が混入してゐる上に、或る一種の語形が種々の時間概念・「法」概念を表はすことがあり、 一つの時間概念が、 多様の語形によつて表はされることがあるから、 事實は甚だ複雜である。 文法上の「時」の區別は、 多く動詞と名づけられる種類の語に於て、その語形變化により示される(或は逆に時間概念・「法」概念を表はす一定の語形變化を有する語に、 動詞といふ名稱を附けると言つた方が適切であらう)。「時」の研究及び記述は二樣の方面に分れる。(一)語形を中心とすること、 一つの語形が如何なる時間概念(及びその他の意義)を表はすかを見る。 例へば日本語の「行つた」に於ける「た」の如き、語形としては一種であるが、 その表はす意義は「昨日行つた」(過去)、「行つた方がよい」(未來假定)、「早く行つた」(命令)など種々ある。(二)意義を中心とすること。 即ち時間に關する概念は、 如何なる語又は語形によつて表はされるかを見ること。 これは所謂動詞のみならず副詞・名詞・助詞等にも亙つて考へるべきである。 我が日本語文法の從來の研究に於ては、 この二樣の見方の區別が明かでなかつた爲め、 なほ十分の研究結果を得てゐない。 又インドヨーロッパ語族の「時」の範疇を、 その儘日本語に當てて、 日本語の言語現象を律することは、 比較研究の目的以外には無意味である。

【參考】〔「時」の一般論について〕 Jespersen : *Philosophy of Grammar.* 1924. Chaps. XIX, XX. ‖ Noreen-Pollak : *Wissenschaftliche Betrachtung der Sprache.* 1923. S. 425f. ‖ Wundt : *Völkerpsychologie—Sprache.* II. 1922. S. 189f. 〔インドヨーロッパ語族の「時」について〕 Brugmann : *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen.* 1922. S. 559f. ‖ Delbrück : *Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen.* 1919. S. 229f. 〔藤岡〕

時秋物語 ときあきものがたり 物語 一卷 【作者】 未詳 【成立】「古今著聞集」卷六に所載のものと同じく、 且つ文章も殆ど同じであるから、 これを抜いて一卷にしたものと見える。 故にその成立は、 鎌倉初期と見るべきであらう。 【諸本】 群書類從卷四八三所收。 【解說】 新羅三郎義光が、 後三年の役に出羽へ赴かうとした時、 豐原時秋がこれを追つて行き、 足

柄山で大食調入調の秘曲を受けて都に還つたことを記す。 この內容につき、 時秋はこの時未だ生れない時であるから、 この人物はその父時元であると云ふ說、 伯父時忠であると云ふ說等がある。

【參考】 考古畫譜○足柄山笙曲傳授の話に就きて(松本愛重)(國史論纂) 〔小木〕

辰方 ときかた 有職家 【姓名】 松岡氏。字は子綽、通稱平治郎・清助 【號】 雙松軒・梅軒 【生歿】 明和四年に生れ、天保十四年(二五〇三)五月一日歿。享年七十七 【墓所】 東京府下目黑祐天寺 【閲歷】 筑前久留米藩士、江戶に於て塙保己一の門に學び、その子行義(別項)、孫明義に至るまで、父子相承けて有職故實に精通するを以て世に知られた。【著書】 裝束織文圖會一卷(別項)(享和元年刊)○裝束織文圖會附錄一卷(別項)○女官裝束織文圖會一卷(別項)(享和元年刊)○冠帽圖會一帖(別項)(文化三年成、天保十一年刊)○武家當時裝束抄一卷(別項)(文化九年成)○裝束着用圖一卷(別項)○螺斗目考一卷(寛政六年十二月五日成)○服忌便覽○松竹問答等。 〔石村〕

土岐善麿 ときぜんまろ 歌人・新聞記者 【別號】 初め湖友、後、哀果と改めたが、大正八年以來號を使用しない。【閲歷】 明治十八年六月八日、東京市淺草區松清町に生れた。 父善靜は眞宗の學僧、 御懷途歌僧の最後の宗匠であり、 國典にも通じ、 俳號も寂羅坊湖月と稱して家林の風を慕ひ、 風流の諸藝にも長じてゐた。 善麿は東京府立第一中學校に在つた頃から父に就いて連歌を學び、後、金子薰園の白菊會に加はつたが、 自然主義運動の起るに及んで、 短歌の生活化を提唱し、第一歌集 NAKIWARAI (全部ローマ字で誌してある) を明治四十三年四月に出版。後、石川啄木と交遊深く、いはゆる「三行歌」の創始者でもある。大正二年九月、雜誌「生活と藝術」(別項)を創刊主宰した。早稻田大學を卒業後、直に讀賣新聞記者となつたが、大正七年東京朝日新聞社に入つて、社會部長・學藝部長・調査部長等に歷任。大正三年、朝鮮・滿洲を視察して歌集「佇みて」を公にし、昭和二年歐米に特派されてエッセイ集「外遊心境」を著はした。作者別の「萬葉全集」及び「萬葉以後」を編纂し、また多年ローマ字日本語の宣傳普及運動につとめ、その方面の著述も多い。【著作】〔歌集〕黃昏に○不平なく○街上不平○雜音の中○土岐哀果集○綠の地平○綠の斜面○空を仰ぐ○初夏作品○鶯の卵(漢詩ローマ字譯)。〔エッセイ集〕朝の散歩○春歸る○柚子の種等。 〔金子〕

時太郎可候 ときたろうかこう 浮世繪師・草雙紙作者 【姓名】 中島鐵一。又葛飾・川村氏。葛飾氏と稱したのは葛飾在本所に生れた故と云ふ。幼名鐵藏、時太郎・八右衛門・仁三郎とも云つた。【別號】 勝川春朗・勝春朗・叢春朗・菱川宗理・群馬亭魚佛・辰齋・辰政・雷斗・雷震・雷信・錦斗・錦袋舍・畫狂老人・卍翁・卍老人・不染居・九々・蜃白山人・北齋・前北齋爲一等の畫號。白山人可候・是和齋の戲作號がある。【生歿】 寶曆十年九月本所割下水に生れ、嘉永二年(二五〇九)四月十八日本鄕丸山にて歿す。享年九十。【法名】 南總院奇譽北齋信士【墓所】 淺草榮久町(舊名八軒寺町)誓敎寺 【閲歷】 父は中島伊勢と云ひ幕府用達鏡師、母は赤穗浪士義擧の際吉良家附人たりし小林平八郎の孫女であると云ふ(浮世畫人傳・いろは文庫)。 幼時より畫を好み、安永三年(十五歲)木版師某に弟子入りして彫刻を學んだ。これが後版畫を描く上に多大の稗益を與へた。間もなく勝川春章の門に入り春朗と名のつた。併し一流派のみに滿足せず、狩野融川の門に入り北畫をも研究した。これが問題となつて春章から破門され、後又師の畫を批評し、寬政年間狩野家からも破門された(一說、狩野家への弟子入りが先であるとの說もある)。安永九年、春朗の號で初めて「驪山比翼塚」の挿繪を描き、爾來黃表紙にその挿繪を描いた。天明五年、春朗を改めて群馬亭と號し、「親讓鼻高名」の挿繪を描いた。天明七年、俵屋宗理の畫風を慕ひて宗理と改名、貧窮その極に達し、七色番椒、或は柱曆を

時太郎可候(英泉畫)

賣り步き、淺草諏訪で先師春章夫婦に逢ひ、面目を失つたといふ話はこの頃である。寬政八年の頃、住吉廣行に就き土佐派を學び、司馬江漢に洋畫を學んだ。寬政以後、狂歌繪本が流行して歌麿・重政等も執筆し、彼も亦十數種を描いたが、その中で「東都勝景一覽」「繪本東都遊」「繪本隅田川兩岸一覽」などはその代表作であつた。爾來文化時代まで多くの讀本に挿繪を畫き、文政・天保時代には、一枚摺錦繪に最も力を盡した。繪畫に關しては一家の識見を持して人に下らず、種々の奇行逸話がある。曲亭馬琴作「三七全傳南柯夢」の挿繪に就いて作者の指定に從はず、一時兩人不和になり、又「繪本水滸傳」で再度衝突したと云ふ。彼の名聲は、長崎の外人に聞え、その繪を求むる者多かつたが後官禁せられた。妻をことと云ふ。文政十一年六月五日歿。一男三女あり。一男は幕士加瀨氏の養子となり崎十郎と云ふ。長女は柳川重信に嫁し、後離緣して早世。次女は夭死。三女榮は南澤等明に嫁したが、離緣後、父北齋の老後を看た閨秀畫家である。【人物】 彼は名人肌で同時に奇人であつた。平生は素朴謙遜であつたが、一度不滿な事があれば徹然意を枉げない。馬琴との衝突もこのためであるし、三代尾上菊五郎が彼を訪問し、家內の不潔さに氈を敷いたのに憤り、一語も交へなかつたのもその表はれである。彼の奇癖は轉宅であつて、生涯八十七度に及んだと云ふ。又室內の掃除を忌み、不潔裡に平然としてゐたといふ。一面に於ては江戶ッ子らしき任俠と、強きに對する意地張りとを有してゐた。名聲が高くなつても清貧であつたのは、やはりこの氣風のためと、理財に無頓着であつた故であらう。要するにあらゆる精力がただ繪畫の方面にのみ向けられた名人氣質を示してゐるのである。

【著作】〔黃表紙〕有難通一字(天明元年)○四天王大通仕達(同二年)○我家樂之鎌倉山(同六年)○大佛左捻(同年)○鷹将軍勸略卷(寛政十二年)○兒童文殊稚敎調(享和元年)○新板臨劫記(享和二年)○不斷庵卽席料理(同三年)○胸中算用嘘店卸(同年)等。〔繪畫に關するもの〕畫本彩色通○北齋漫畫○略畫早指南○傳心畫鏡○秀畫一覽○繪本浄瑠璃絕句○三體畫譜○北齋畫筆○北齋畫譜○北齋義畫○北齋畫式○蜃斗畫

評等。

【作風】寛門が浮世畫家だけ、黄表紙は單に流行に追随し得ると云ふ程度で、彼の特徴を有しない。「有雜通一字」「四天王大通仕達」共に當時の通人洒行に取材し、いきちょんの如き通語を振り廻して喜ぶやうな態度である(當時二十二三歳)。「臨丼軍略巻」は、異類の軍記物に擬した作品で、構想も別に新しくない。「兒童文殊稚教訓」に、當時の手習師匠の拙い事を諷した點などに、やゝ個性が現はれてゐると言へば言へぬ事もない。要するに文筆は畫家としての道樂と見るべきで、この點は彼の畫風と共に雅號を襲用した一筆庵可候(別項)即ち渓斎英泉の方が遙かにすぐれてゐる。ただその狂歌は、狂歌本と共に青年時代の畫風を見る資料として尊ばれてゐる。

【參考】燕石十種○浮世畫類考○扶桑畫人傳○浮世畫人傳○葛飾北斎傳(飯島半十郎)○江戸藝術論(永井荷風)○北斎(織田一磨)(アルス美術叢書)　(山崎)

言繼卿記 ときつぐきやうき　日記　四巻【著者】大納言山科言繼【諸本】著者自筆本は、もと山科家にあつたが、後、東京帝國大學の所藏に歸した。國書刊行會本はその書を底本としたもの。但し巻三十五の別記だけは、京都市濱邊孫右衛門氏の所藏で、親王御方御元服御裝束目録・若宮御方御元服御服目録・諒闇丼御錫紵御服之事等を記したもので、日記中にいふ別記とは違つたものである。【解說】大永七年正月から天正四年十二月に至る日記で、三十五巻を四巻に合せたもの。この日記に依つて、戰國時代に於ける皇室式微の御模様、言繼卿等の公卿が東奔西走して諸國豪族に依頼し、皇室費維持に盡した苦衷、窮迫した公卿の地方豪族の許に走つた形勢、諸國豪族の皇室の供御以下獻納の次第等を詳かにするを得る有力な資料である。　(石村)

時縄 ときつな　神道學者【姓】藤波、又は菅野【生歿】元祿十六年(一六四五)歿す。享年未詳【閲歴】伊勢の人で、尾張津島の神官である。初め菅原直勝に就いて學び、次いで卜部兼魚に就き、最後に度會延佳の門に入つた。造詣極めて深い。【著書】古今神學類聚鈔一百巻(題名の如く、國史家譜、諸社の傳説などに就き、神國・神道・神階等に就き研究せるもの)○神家常談○中臣祓滅問○異域同日談等。　(田中(義))

時文 ときぶみ　歌人【姓】紀氏【閲歴】貫之の子。梨壺五人の一人。紀氏系圖に内藏介從五位上、作者部類に大膳大夫とある。「後撰集」は天暦五年詔を奉じ、昭陽舎(梨壺)に設けられた撰和歌所の寄人として、他の撰者順・能宣・望城・元輔と共に、「萬葉集」を訓釋する傍ら撰したのである。曾て兼盛の歌を非難して却つて反駁されたことが傳へられてゐる。「八雲御抄」に「ただ父が子といふばかり」と仰せられてゐる。【作品】勅撰集に入る歌は「後拾遺集」その他凡そ五首。

【參考】大日本史二一九(貫之の條)　(西下)

伽婢子 とぎぼうこ　「御伽婢子」を見よ。

時桔梗出世請狀 ときもきやうしゆつせのうけじやう　脚本　五幕十二場　時代物【作者】四代鶴屋南北【通稱】「馬盥の光秀」【名稱】秋狂言を光秀の紋に利かせて時桔梗とし、久吉が喜平次に奉公した請狀の意を添へた。【別名題】「時今撫擬虎」「連歌月光秀」「湖擬愛宕組」「時桔梗小田雪作」「小田雪賞陽」「時皐月桔梗旗揚」「連歌花二見文臺」。【興行】文化五年七月二十五日初日、江戸市村座。

【役割】松下嘉平次行綱(澤村四郎五郎)、小田上總之助春永(澤村源之助)、遊女高松後に園生の局(山下萬作)、武智十次郎光義(助高屋金五郎)、光秀妹桔梗・松下下女小篠(中山富次郎)、波多野但馬之助後に中尾彌太郎俊國(花井才三郎)、光秀妻皐月・嘉平次娘千里(市川團之助)、加藤虎之助正清・安田作兵衛知綱(七代市川團十郎)、森蘭丸・下男勁作實は小西彌十郎行長(尾上榮三郎)、髪結ひお八重後に久吉妻八重機(五代岩井半四郎)、眞柴大領久吉(三代坂東三津五郎)、武智十兵衛光秀・判人源五郎實は水尾正兵衛茂輔(五代松本幸四郎)。

【讀本】大南北全集第四巻所收。【題材】光秀を描いた院本「本朝三國志」「祇園祭禮信仰記」「三日太平記」「三國無双奴請狀」「絵本大功記」等を取捨按排して、歌舞伎式に組み立てたものである。

【梗概】(序幕)(祇園社拜殿)大澤九郎太郎、桔梗に戀慕。春永に降參せし波多野但馬之助の參府。(眞手輪の口)顯馬平馬、赤旗を奪つて出るのを皐月支へる。(社前)宅間信盛、赤旗紛失につき桔梗を詰問。皐月の言ひ開き。(假家木戸)光秀、蜘蛛の振舞を見て怪しむ。(假御殿)但馬之助、降參の儀を光秀へ依頼。小田世尊寺中納言來著につき饗應係は光秀。小田春永は狩獵より歸り、光秀が專横の行ひを責め、森蘭丸に鐵扇にて打擲せしめる。(二幕)(山崎陣中)久吉、因幡責めの滯陣中、陣中へ切見世長屋を搆へた趣向。曾呂利は落語をやり、加藤虎之助は蛇の目館を賣る。波多野の妹高松は切見世女郎の娑。判人源五郎實は水尾正兵衛は光秀の幕下に附いて間者に入り込む。髪結ひお八重は、刺身を作つてゐる矢久吉に對面。高松は久吉に斬りつけたが、論識を聞いて春永に宮仕へする。久吉は正兵衛を怪しむ。(三幕)(本能寺)春永は、側室園生の前となつた高松、但馬之助改め中尾彌太郎初め、諸侍を連れて入り來る。蘭丸の推擧で謹愼中の光秀が召出される。春永は馬盥で光秀に酒を與へ、光秀の領地を蘭丸に讓らせ、光秀が望む日吉丸の名劍は彌太郎に遣はし、光秀には浪浪中、皐月が切つた黒髪を與へて散々に侮辱する。光秀、叛逆の企て。(愛宕山旅館)皐月、一子十次郎・饗浦・作兵衛等連歌の催し。光秀歸つて黒髪を見せ、皐月と昔語り。紹巴頻りに謀叛を勸むるを斬る。彌太郎多三、春永の上使に來る。光秀は切腹の用意して迎へ、「時は今天が下知る皐月かな」を詠ず。貝鐘の音。光秀、上使を斬つて謀叛の門出。安兵衛は二條城の落ちしを注進。(本能寺塀外)園生・倭助、防ぎ戰ふ。(奥殿)光秀の軍勢押寄せ、春永・蘭丸の奮闘。蘭丸・作兵衛の立廻り。光秀詰め寄せ、春永の切腹。(四幕)(小栗栖村)嘉平次娘千里に腰元小蓉が附いて來るのを、百姓たぬ蔵戯れかゝる。下男勁作助ける。光秀の一子十次郎匿まるゝ所を作兵衛救ふ。正兵衛出づるをお八重の八重機、竹槍にて突く。(大詰)(松下嘉平次住家)嘉平次、光秀を匿まふ。正兵衛、十次郎を連れて一宿を頼む。八重機は嘉平次の娘、虎之助を伴ひ落人の詮議に來る。久吉は昔の奴婆にて嘉平次へ草履を直す。嘉平次、久吉を面罵する。正兵衛、光秀と名乘つて死す。十次郎、父に代つて切腹。十次郎實は久吉・八重機の實子なのを光秀が養つたのである。勁作實は久吉の臣小西彌十郎、光秀を見出す。實の光秀出て久吉へ日月の旗を渡し、戰場に再會を約して別れる。

【解說】南北の最も不得意な時代物なので、構想は大部分院本に仰いだが、山崎陣中の如きは、流石南北式の奇抜な趣向である。馬盥・愛宕・本能寺の四幕は、今日まで舞臺に上演を絶たぬだけ、單純な太い線で押して行く形式が面白い。春永を絶對的の暴君に描いたのも一見識である。　(渥美)

常磐會 ときはくわい　和歌【解說】山縣有朋の意を受け、森林太郎・賀古鶴所の二人が肝煎となつて起した和歌の團體である。はじめ小出粲・大口鯛二・井上通泰・佐佐木信綱の四人を選者とし、これを日本橋濱町常磐に招待して和談をしたので、常磐會の名が生れた。明治三十九年六月の創立で、毎月山縣公の古稀庵・新々亭・椿山荘・新椿山荘等にて歌會を開き、各選者並にその門人の歌を選評した。その詠草は常磐會詠草として、明治四十二年に第一編、四十三年に第二編、大正三年に第三編、大正六年に第四・五の兩編を發行し、大正六年七月第百三十一回以後は未刊である。選者は、その後物故した人の補缺として鎌田正夫・須川信行・池邊義象・金子元臣が相次いで加はつたが、多き時も五人を超えなかつた。大正十一年二月、その主唱者たる山縣公の薨去後、百八十五回を以て終に解散した。その歌風は、當時の御歌所風よりもやゝ自由で、且つ多少清新な所があつたが、その期する所は、明治歌調を創めんとするにあつたらしい。併しその歌は、御歌所の風調を多く出ないものであつた。　(尾上)

常磐津節 ときはづぶし　淨瑠璃【名稱】流祖常磐津文字太夫の稱に據る。【沿革】劇場では、初め主に義太夫節風の世話物(道行物)を語る時に用ひられたが、元來劇場音樂として頗る適した素地を有つてゐた上に、漸次江戸節(別項)に於ける短所、弱點をも補正し、且つ狂言作者壕越菜陽・金井三笑等が、好んでこれを連續的に用ひたので、自然と江戸歌舞伎に融合し、遂に所作事の地、殊に狂言淨瑠璃として缺くべからざる位置を占めるに至つた。次いで二代文字太夫によつて大成され、三代兼太夫によつて在來の曲節附に改訂がなされて今日に及んだ。この間、四代文字太夫は、三絃方の名手四代岸澤古式部との勢力爭ひから、常磐津派と岸澤派とに分裂するに至つたが、明治年代の名人常磐津林中(別項)によつて一時和解が成り、後、その歿するや、再び家元派(舊派)と岸澤派(新派)との對立となり、昭和二年春、常磐津協會の成立と同時に和合するに至つた。

初代常磐津文字太夫

【傳系】(初代)通稱、駿河屋文右衛門。俳名、尹翅。法名、常光院通寂了玄居士。寶永五年京都寺町(一説に近江)に生れ、安永十年二月一日江戸に歿す。享年七十三(一説に六十七)。墓所、麻布廣尾祥雲寺。初め位牌商を業としたが、初代豐後掾に入門して宮古路文字太夫といひ、師と共に享保十九年江戸に下つた。タテを語つた最初は、元文元年二月市村座の「傾城小夜の中山」である。然るに急激な流行を見た結果、風俗を紊す恐れありとして同四年九月の禁令にあひ、一時一中節の千中社中に加はつて、常太夫豐中と改めて隱れた。寛保二年に至つて許可せられ、次いで延享四年十月宮古路を關東に改めたが、官の忌む所となり、更に十一月中村座で常磐津と改姓した。かくて三絃佐々木市八(後の吉藏)と協力して斯流の發展に努めた。晩年は兼太夫を後嗣者となし、小松川村に隱退して松壽齋文中と號した。門下から別派を立てた桝名賀志妻太夫・同造酒太夫・富士岡若太夫等の名手を出した。(二代)通稱、藤兵衛。法名、常照院釋文中德叢。寶暦六年に生れ、寛政十一年七月八日に歿す。享年四十四。墓所、淺草稱念寺。初代の門下、後に養子。初名は鐘太夫。後、兼太夫と改め、天明七年二月一日二代を襲名した。斯流を大成すると共に、基礎を固めた。「粟餅」「古忠信」「善知鳥」「關の扉」「古山姥」「戻駕」「葛の葉」「古お半」「高尾」等は彼によつて語られた。二代兼太夫は實弟大和太夫が繼いだが兄と不和を生じて、後、吾妻國太夫と稱した。(三代)通稱、林之助。法名、常樂院釋文德光德信士。寛政四年に生れ、文政二年十一月一日歿。享年二十八。墓所、淺草新堀正覺寺地中願心寺。二代の實子。寛政十二年六月、小文字太夫となり、文政二年七月三代を襲名し、中村座で「大和文字戀の歌」(淺妻)を語つた。(四代)幼名、市川男熊。家號、濃野屋。法名、興德院稍顯良詳。文化元年に生れ、文久三年閏八月八日に歿す。享年五十九。墓所、麻布廣尾祥雲寺。初代市川男女藏二男。常磐津家元(祖母の實家)の養子となり、小文字太夫と改め、文政三年十一月河原崎座で「老松」を語つたのが初舞臺。天保八年正月中村座で四代を襲ぎ、嘉永三年十二月受領して常磐津豐後大掾藤原視光と名乘る。中興の名人で、「釣狐」「宗清」「お三輪」「將門」「靭猿」「乘合船」「三五郎」「三人生酔」「新山姥」「勢獅子」等の名曲がある。萬延元年三絃方の四代岸澤古式部が分離して岸澤派を興した。

(五代)常磐津林中を見よ。

(六代)本名、常岡丑五郎。嘉永五年に生れ、昭和五年三月十五日に歿す。享年八十。初め三絃方であつたが、明治二十一年宗家に入り、七代小文字太夫と改め、同三十五年六代を襲名。大正十五年文字太夫をその養子に讓り、二代豐後大掾を襲名した。彼の藝は枯淡ともいふべく、その巧味に至つては林中と雖も一歩を讓つたと評判された。現宗家は十五代と稱してゐるが、これは「常磐津淨瑠璃系圖」により初代伊藤出羽掾・二代岡本文彌・三代都萬太夫事都越後掾・四代須賀千卜事都太夫一中・五代都半中事宮古路豐後掾の五代を加へ、これに小文字太夫に終つた三人を數へての代數である。

【詞章】大部分が所作事地として用ひられた爲めに、道行物・狂言淨瑠璃物、又は踊物が多

く、祝言物や段物は極めて少い。流行物は「お夏清十郎」「お房徳兵衛」「お花半七」「お千代半兵衛」「お染久松」「梅川忠兵衛」「お半長右衛門」等の世話物が多く、「忠信」「薄雪」「お三輪」「忠臣蔵」等の時代物は比較的少い。これ等は概ね義太夫物の改作である。狂言浄瑠璃は常磐津の本領ともいふべく、「關の扉」「戻駕」「双面」(怨霊)「山姥」「宗清」「将門」(各別項)等の名曲を初め頗る多く、これには寧ろ時代物が多い。「ちよぼくれ」「大工」「田舎どせ」「船頭」「冷水賣」「大和獅子」「太神樂」「角兵衛」「乗合船」「どんつく」「とてつる拳」等の浮世風俗物の踊物があり、歌舞伎に上演された段物としては、唯一の「三世相」(本名題六三)がある。又座敷浄瑠璃としては「老松」「子寶三番」「式三番」「高砂」「鶴亀」(これは歌舞伎にも上演)、「三人生酔」「甲子松」「常磐直」「常磐の若緑」「緑の寿」「松島」「三保の松」「七福神」等の祝儀物や錠且物があり、段物には「忠臣蔵」「廿四孝」「千両幟」「伊賀越」(各別項)等の義太夫物の轉用したものが主である。同作者は義太夫から轉用したものは別として、それ以外の大部分は、狂言作者の手になつたもので、その主な作者は壕越菜陽・金井三笑・櫻田治助(初代・二代・三代)・劔神仙・奈河本助・寶田壽助等である。

【曲風】豊後節(別項)の最も正系と見るべきであるが、所作事の伴奏音樂として缺くべからざる樞要な地位を占むるに至つて、自然に豊後節よりも多少その内容を上品に改めると共に、所作事に融合するやう洗練彫琢を經た爲めに、音樂的形式を一層江戸化せしめて、常磐津節としての特色を備へるやうになつた。同じ流れでも、宮本や清元(各別項)の如く、派手でも意氣でもなく、野暮なものであるが、それだけにいづれにも向くといふ長所がある。從つて聲調も徒らに技巧にも走らぬ。ただ拍子が明快なために、所作事には最も適する妙所があるのである。而して江戸時代から一般民衆に最も勢力を有し、今なほ江戸の代表的音樂として勢力を保持してゐる。

常磐津節正本(芥川紅葉藏)

【參考】聲曲類纂(卷三・齋藤月岑)○近世邦樂年表(豊後節之部)○江戸時代音樂通解(町田博三)○常磐津節の歴史(中内蝶二・田村西男)(日本音曲全集第八卷)○歌舞伎調説解説篇○日本歌謡史(高野辰之)○日本歌謡集成卷十　(秋葉)

常磐津文字太夫 ときはづもじたゆう 「常磐津節」を見よ。

常磐津林中 ときはづりんちゆう 常磐津節の太夫【本名】山蔭忠助【生歿】天保十三年十二月二十八日生れ、明治三十九年五月六日曾橋にて歿す。享年六十五【墓所】東京四谷谷町妙行寺【閲歴】實父は南部盛岡藩士石川清藏。生後舊三浦藩士當時愛精職の山蔭定次郎の養子となる。幼にして常磐津和登太夫の門に入り、十三歳の時小和登太夫の名を得、次いで豊後大掾の門に轉じて技を研き、嘉永六年十一月中村座の「關の扉」に出勤したのが初舞臺である。更に初代松尾太夫の門に移り、二十一歳の時二代松尾太夫を襲ぎ、次第に非凡の技倆を認められ、十二代守田勘彌の親許、河竹新七(黙阿彌)の媒妁で、明治十二年二月家元の養子となり、六代小文字太夫と改名し、その七月猿若座で「(此改名に色かへぬ關にもとづく等の常磐)妹命讃關守」を語つた。同十九年隠居して林中と改め、同二十三年家元文中(佐六文中の未亡人常子)と絶ち、宮古路國太夫半中と名乗り、京阪に赴き、更に祭春故郷盛岡に歸つた。留まること六年、同三十年二月に至り、九代市川團十郎より呼び戻され、歌舞伎座で團十郎と五代菊五郎所演の「關の扉」を語つて大喝采を博し、名聲いよいよ高まつた。爾來斯道近代の名人と持て囃されて世を終つた。【藝風】彼は天性美音で巧味に富み、時代・世話、ゆく所として可ならざるはなく、中にも狂言浄瑠璃に妙を得、團・菊は彼の地にて語するを好み、殊に團十郎は稱揚して已まなかつた。彼の前半生は數奇を極め、その落魄沈淪に際しても斯道の修養を怠らなかつたといふ。彼が得意の語物は「關の扉」をはじめ、「双面」「山姥」「宗清」「乗合船」「靱猿」「釣女」等であつた。(常磐津節參照)

【參考】藝人出世譚(文藝倶樂部一二ノ二)　(秋葉)

常磐日記 ときはにつき 隨筆 一卷【著者】土師熊文(寶暦・安永頃の國學者。傳未詳)【成立】庚子の年(安永九年か)【解説】著者常陸國茨城郡に旅行の折、見聞の事を書いたもので、有職故實に係る考説が多い。植田正淳が「封戸考」の評、九月十三夜月の宴の始、風の名稱、手己等點、古今傳授の道統、内臣に上れる人々、尿筒、さやの中山、布の幅額、大伴氏の靱、敗醬に女郎花の字を用ひる事、阿波安房等の諸項を收む。本書は大田南畝所輯の「續三十輻」に編入されてゐる。奥に、「右常磐日記一卷借抄大久保西川翁忠寄家　寛政四年壬子はつきいざよひ　杏花園」とある。　(和田)

常盤嫗物語 ときはのうばものがたり 御伽草子 一卷【別名】「常盤の嫗」。又「書圖品類」及び「本朝書圖品目」に「常盤物語」とあるも、本書の事かと黒川眞賴は言つてゐるが、確證はない(訂正增補考古畫譜卷八)。【成立】室町初世か。「近古小說解題」には、「猿樂・田樂が物ぐるひのやうにと云ひて」の詞句があるに因つて、「福富草子」(別項)と同じ頃の作かと推測してある。【諸本】群書類從卷五〇四・新編御伽草子上卷所收【題材】短篇の滑稽諷刺物。長谷川福平氏は「堤中納言物語」の「よしなしごと」から脱化したものとの意見である(古代小說史)。【内容】大和國に常盤の嫗と云ふ人があつた。富貴を樂しんで暮したが、夫に後れた後九十餘まで生きたけれど、數多の子供達からは、だんだん疎まれて笑はれるし、凡ての事心に任せず、老の末になりゆくを歎き、ただ西方彌

陀如來を頼んで念佛の外はない中に、老人の癖として山海の珍味のないものねだりをしたり、子供等の不孝を罵り喚いたりする事があり、終に臨終正念して來迎を受ける物語で、滑稽な筆致で老女の性癖を生き生きと寫してあるのが面白い。　(島津)

常盤友 ときはのとも 歌謡書【編者】不詳。【名義】江戸長唄を集めた書で、序文に「此卷を開て清冷たる聲を發する時は颯々たる松風こゝにあり、因て常盤の友と題するものならし」と見える。【諸本・内容】「(唱歌新撰)常盤友」は、明和三年五月の松島庄五郎の序文があり、奥に明和三年五月十五日の刊記がある。書肆竹勝堂冊我、彫工小川氏勘助と記す。江戸の書肆吉文字屋治郎兵衛、和泉屋庄次郎の刊行。八十七番を收めてゐる。明和四年刊行のものには、新撰增補二十九番を附け加へた。「(新撰增補)常盤友」には、明和七年六月吉日の刊記があり、新に新歌七十三番を舊版に附け加へた。この書も亦明和八年以後の、新歌五十六番を增補して別册となし、安永三年正月に刊行せられた。以上の四版が存する。これ等の書は、何れも目錄に、長唄の題の上に冒頭の歌詞を一句づつ冠らせてゐるのが特色である。例へば「(ちはや)呼出し三番叟」「(君が代は)さらし三番叟」の如き例である。以上を通じて全部が、徳川文藝類聚第十卷に「常盤友前集」と題して收められてゐる。又同書には、この前集に洩れた歌及び前集以後の歌二百三十五番を集め、「常盤友後集」と題して收めてゐる。【價値】江戸長唄の書では、代表的の書として知られ、年代的に、可及的に歌詞を網羅蒐集してゐるのは、價値大なる所以であるが、節附を全然除いてゐるのは、その大なる短所である。

【附記】松島庄五郎の序文には、「書林東郭堂のぬし」とあるのに、發行所が東郭堂でないのは不審である。なほ「常盤友」と同じ江戸長唄集に無節附本の體裁で刊行せられた枕本は次の如き書がある。享和三年の序文を持つ「唄のしらべ」二册。この「唄のしらべ」は改刷埋木本であつて、それ以前の原刷本が存するが刊年未詳。内容は互に出入がある。次に文化年中に刊行された「三つの友」二册がある。文化三年の式亭三馬の序文を持つ「東風流」初編、また文化五年の同じ三馬の序文がある「東風流」二編、「東風流」初編の改題再刷本である文化十三年版の「東すがた」等は、横本ではなく、縦開きであるが、本の型や無節附である點等、全く「常盤友」と同種類の書で、その系統を引くものである。以上は江戸版であるが、これと同様の書が幕末には上方でも多く出た。「江戸歌大寄大全東の一節」(文政二年刊、三册)、「長歌寄本をさなぐさ」「同京の若くさ」「同四季のさくら」「同おしゑすがた」(以上、天保十四年刊、七册)、「(江戸歌稽古本)大會東一風」(弘化四年刊、七册)、「(江戸歌稽古本)大會吾妻風」(嘉永四年刊、七册)、「新增吾妻の調」(文久元年刊、一秋堂中本編)、「新增吾妻の花」(刊年不詳、五册)、「東都糸のしらべ」(同、五册)等がそれである。

【參考】徳川文藝類聚第十卷○日本歌謡集成卷九　(藤田)

常盤問答 ときはもんだふ 幸若舞曲(三十六番の一つ)一卷【作者】不詳【別名】「鞍馬常盤」【成立】室町期【諸本】古板本は寛永木活字本、寛永十二年板(十行本)。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを、日本歌謡集成卷五近古篇に載せてある。【解説】判官物(義經傳說)。法談物。「伏見常盤」(別項)に引續く曲。捕へられて遂に清盛に見えた常盤は、三子をそれぞれ寺に上せる事とし、末子牛若も七歳になつた後、人の勸めに從ひ鞍馬に預ける事に定めようと、先づ自ら寺に詣で内陣で念誦してゐると、女人なるの故に別當東光房の怒りを買ひ、逐はれようとするのを肯かずして、東光房と互に問答論辯する事を作る。　(島津)

常盤屋之句合 ときはやのくあはせ 俳諧集 一册【編者】杉山杉風【名義】青物を題にした句合であるから、須田町邊の青物問屋と洒落れて、かく題したものであらう。跋に「これに名けて常盤屋といふは、時を祝し世をほめての名なるべし」とある。天下が泰平で、諸國の物產が集まつて來る江戸の繁昌をたたへる意味も含まれてゐると見える。【刊行】延寶八年【諸本】「江戸俳諧合」といふ古版本もあるけれど、現存は稀である。芭蕉翁七部除錄・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔・芭蕉全集(俳諧文庫)・芭蕉全集(沼波瓊音編)・芭蕉全集(日本名著全集)等所收。【解説】青物を題材にした二十五番の句合で、判は芭蕉である。勝句十八、持七である。杉風子序、延寶八年季秋華桃園跋。芭蕉の跋によれば、「句々たをやかに、作新しく、見るに幽なり、思ふに玄也、是を今の風體といはんか」とあつて、芭蕉は當時これを自派の新調としたやうに思はれるけれど、大體が緣語と比喩の駄洒落である。例へば蕣木の破れをほろほろあへに掛けたり、薯が山を奪つたから金輪際に自然生だと云つたり、僧の妻を梅干の髪に喩へたり、橙と蜜柑・金柑の論に莊子の寓言を眞似たりして、所謂幽玄の感は少しもない。要するに蕉風過渡の調を示すに過ぎぬもので、當時の芭蕉及び蕉門がまだこれ程の所にゐたことを知り得るものである。　(荻原)

得庵 とくあん 儒者【姓名】菅原玄同。自ら修して菅得庵ともいふ。字は子德。【生歿】播磨國姫路に生れ、寛永五年(二二八八)六月十四日歿す。享年四十八【閲歴】醫術に長じ、儒を藤原惺窩に受け、林羅山・那波活所・堀杏庵と併せて四天王と稱せられ、京都に住し、家塾を開いて生徒に教授し、京都所司代板倉氏の顧問に應じた。　(佐久)

獨學綱 どくがくかう 歌論書 殘一卷【著者】黒澤翁滿【成立】年代不明【諸本】歌學富數卷あつたうち風體の卷一卷のみが寫本として帝國圖書館に殘つてゐる。【内容】中世・近世の歌學書に、歌體について論じてあることは何れも根據のない事とし、「新撰髄腦」以下近世の歌學書の所說を引いて、その說の互に齟齬のあることを示し、自說として、長歌・短歌・旋頭歌・混本歌・連歌・片歌・俳諧歌・物の名・折句・廻文の十種を擧げ、別に修辭上からは、直言歌・譬へ歌の二種に分類してゐる。次に古來、萬葉風・古今風・新古今風等諸歌風の別を立てる者のあることを非難し、歌の道には古來一貫の大綱があつて、優れた歌は悉くこの大綱の中にありと主張し、又歌は活氣があつて初めて面白いので、活氣を離れては感通なく、感通なければ死物に等しいとし、「源氏物語」玉かづらの卷なる源氏の詞を引いて論じてゐる。而して「二十一代集」から、彼の所謂活氣ある歌數百首を拔いて小註を加へてゐる。【價値】本書の所說には、所々首肯し難い點もあるが、それだけに獨創の見解も見られ、又本書によつて著者の造詣の淺からざるを知り得るなど、歌學史上亦逸することの出來ぬも

のである。

徳川文學（とくがはぶんがく）「江戸時代文學」を見よ。〔相馬〕

徳川文藝類聚（とくがはぶんげいるゐじゆ）　叢書　十二册【刊行】大正三・四年、國書刊行會第四期【解說】第一卷「事實小說」は、浮世草子の中、當時の腕利き作者が波瀾曲折あり、興味ある市井の出來事を潤飾したる類を云ひ、「稻妻物語」以下十二篇を含む。第二卷「敎訓小說」は、小說にあらず寧ろ小話とも云ふべきで、敎訓を主とした俗文學を指し、「可笑記」以下五篇を收む。第三卷「通俗小說」は、又浮世草子の中、通俗體の形式を借りて一種の寓意又は諷刺を含ませた類で、「西鶴笑談物語」以下十二篇あり、第四卷「怪談小說」は、江戸式怪談の傑作集で「百物語評判」以下十篇を含む。第五卷「洒落本」は、四十篇の代表的作品で、以て洒落本の大觀を得る事が出來る。第六・七卷「脚本」は、十九篇の原本を、第八卷「淨瑠璃」は、古淨瑠璃中最も珍とすべきものを集め、第九・十卷は「俗曲」でこれ亦本書の特色をなすもの、第十一卷「雜俳」は「俳諧武玉川」以下十三篇の雜俳集、第十二卷「評判記」は稗史・小說・狂歌の評判より淨瑠璃・能樂・藝娼妓、さては諸國の名物、魚蟲の評判に至るまでの二十五篇を收め、最も特色をなすもの、江戸時代風俗資料としての重要性を認めざるを得ないものである。本書は結局、曩に刊行された「近世文藝叢書」（別項）の補遺であり、本刊行會が近世文藝研究に多大なる寄與をなしてゐる一叢書である事は疑ひない。第一卷卷頭に坪內逍遙の序あり、各卷に簡略ながら專門家の解說を附してゐる。本書は初版發賣以後、再刊を重ね、刊行會本の中、最も流布されてゐるものである。〔土井〕

得巖（とくがん）　禪僧【諱】得巖。【字】惟肯。【閲歷】得巖は永享頃の人で、備前に生れ、十六歲の時京都に上りて得度した。後、將軍足利義持の請を受けて相國寺西堂となつた。攝津の棲賢寺、京都の眞如寺・萬壽寺・天龍寺等を歷住し、南禪寺に昇住す。尋いで南禪寺に雙桂院を構へて退休した。【著作】莊子鬳齋口義鈔○東海璚華集（別項）。〔鷲尾〕【參考】本朝高僧傳○延寶傳燈錄○漢學起源

得閑齋繁雅（とくかんさいはんが）　狂歌師【本名】山田太右衛門【生歿】寬延元年に生れ、文化十年（二四七三）七月二十九日歿。享年六十六。【葬所】京都下寺町淨信寺【閲歷】京都堺町四條上ル處の商賈で、家號を鍵屋と云ふ。九如館鈍永（別項）の高弟で一家をなし、天明・寬政頃は大阪の玉雲齋貞右（別項）と共に、關西の二明星と呼ばれてゐた。歿後得閑齋の號は、門人文廼屋茂喬が二世を繼ぎ、茂喬の門人鶯山軒砂長が三世を繼いだ。【著書】狂歌野中の水一册（寬政四年刊）○狂歌かひこの鳥一册（享和元年刊）○狂歌選の若葉一册（文化四年刊）○狂歌みちづれ集一册（文化六年刊）○狂歌紅葉集二册（文化八年刊）○六々狂歌撰一册（文化十年刊）。〔野崎〕

獨吟（どくぎん）　連歌・俳諧【解說】連歌の會衆は幾人と限定されてはないが、「筑波問答」に、「人數少ければ句つまりて惡く、又人多くなりぬれば物急になりて一座の思ふやうならざるなり」とあつて、早くから人數の程合ひを嗜んだ。併し實際には單獨で賦するもの、兩人で賦するもの等さまざまであつた。單獨で賦するものを獨吟、兩人で賦するものを兩吟、三人で賦するものを三吟、以下四吟・五吟等々と稱する。現存する連歌のうち、獨吟の最も古いものは、後小松天皇の應永十二年の「御獨吟和漢聯句」、二條良基の「慶純百韻」などであらうが、併し定家の法名と同じい明靜の「獨吟百韻」が若し定家であるならば、これが最も古いものになる。高山宗砌の「何船百韻」等があり、飯尾宗祇の七十九歲の時の「獨吟百韻」などは有名なものである。俳諧の獨吟では、荒木田守武の享祿三年の「獨吟百韻」が現存する中の最も古いもので、なほ守武は天文九年に「獨吟千句」を賦した。兩吟の連歌では、文明六年正月五日に、宗祇と元盛とで賦した「何木百韻」が最も古かるべく、三吟の連歌では、宗祇・宗元・元用の文明五年八月十九日に賦した「何路百韻」が最も古かるべく、宗祇・肖柏・宗長の水無瀨三吟及び湯山三吟等は有名なものである。〔福井〕

獨吟千句（どくぎんせんく）「守武千句」を見よ。

特磬（とくけい）「磬」を見よ。

徳元（とくげん）　俳人【姓名】齋藤利起。通稱齋宮【號】帆亭、薙髮後德元と云ふ。【生歿】永祿二年に生れ、正保四年（二三〇七）八月二十八日丹後に歿す。享年八十九。【法名】清岩院殿前端尹陽山德元大居士（辭世）「今まではいきたはことを月夜かな」但し「犬子集」及び「懷子」に上五を、「しぬまでは」として休甫の句としてある。【葬所】天橋立五臺山智恩寺【俳系】松永貞德門とされてゐるが、寧ろ客分格であつた。年齡も貞德よりは十二歲の年長である。【閲歷】江戸五誹哲（別項）の一人である。美濃國岐阜の人。織田秀信に仕へ三千石を領した。關ケ原の役に秀信は石田三成に屬して岐阜を守つたが、德元は主君の前途を見屆けずして、長良川を越えて脫走したので、臆病者の名を流したと傳へられる。寬永五年江戸に下り、馬喰町二丁目に住したとも、又江戸町に住したとも云ふが、重頼の「懷子」の序には、「淺草の入道」とある。歌學を業としたと云ふ。重頼が「犬子集」を編んだ時、德元の「春立つやにほんめでたき門の松」といふ句を卷頭に置いたので、一代の作者と稱せられた。寬永十八年、或る君より需められて「誹諧初學抄」（別項）を著はした。これが江戸に於ける俳書出版の嚆矢である。【著作】獨吟千句（寬永五年）○誹諧初學抄（別項）。【參考】貞德永代記中島隨流○滑稽太平記北陸浮生○誹諧家譜拾遺集靑木千ロ○俳家奇人談竹內玄々一○誹家大系圖佐川春明〔荻原〕

徳元筆蹟

獨絃哀歌（どくげんあいか）　詩集【著者】蒲原有明【刊行】明治三十六年五月、白鳩社。【解說】著者の第二集である。全二十七篇、外に譯詩ロゼッティ、ブレエク、キイツ、ランダア等の四篇がある。「あだならまし」「[illegible]菜園」等、獨絃哀歌の章十五篇と「さいかし」「佐太大神」等をその代表詩とする。この集に於て有明は、漸くその獨自の詩風を見出し、用語を磨きて、高く頭角を群小詩人の間からあらはした。〔日夏〕

獨語（どくご）「春葉獨語」を見よ。

木賊（とくさ）「男物狂の謠曲」を見よ。

讀師（どくし）「歌合」を見よ。

特質美（とくしつび）【獨】Das charakteristische Schöne【解說】この語の意味は一定してゐない。シャスレル（Schasler）は、崇高美と優美（各別項）との統一したものであるとし、また理想美とも云ふ。フォルケルトは狹義の美と對立せしめてゐる。（美的態度參照）〔村田〕

特徵（とくちよう）「徵」を見よ。

讀書餘適（どくしよよてき）　紀行　二卷【著者】安井息軒【解說】天保十三年、著者四十四歲の時、江戸から陸前の松島に遊んだ漢文の紀行である。〔佐久〕

獨創性（どくさうせい）【英】Originality【解說】藝術家の制作が個性的であるといふこと、卽ち藝術の表現過程及びその結果に於て、獨自な新しさが見出される場合に獨創的といふ。天才に要求される條件であり、藝術樣式發展の重要な一つの契機として考へられるものである。多く個性的といふのと同意義に用ひられ、類型的といふのと對立する。〔村田〕

德田秋江（とくだしうかう）「近松秋江」を見よ。

德田秋聲（とくだしうせい）　小說家【本名】末雄【閲歷】明治四年十二月二十三日金澤市橫山町に生る。同十二年春、養成小學校に入り、十六年卒業、更に金澤中學校に入學した。生來神經質虛弱で醫藥に親しむことが多く、憂鬱な少年時代を送つたが、この頃からやゝ健康に向つた。同十九年石川縣專門學校に入學、後幾許もなく學令改まり、第四高等學校となるに及び、同校豫科に入學した。又別に漢學塾へも通つた。この頃より歷史や人物評に興味を持つやうになつた。同二十二年十月、父を喪ふや、それを機會に、家庭の都合もあつて學校を退き、文學に志すに至つた。同二十四年四月、一たび上京したが、間もなく輕微の天然痘にかゝり、大阪の長兄の許に身を寄せた。翌二十五年再び學業を繼續するつもりで歸郷したが、間もなく越後長岡に去つた。同地で新に發刊された新聞社に入つて再起を計る考であつたといふ。翌年一月、再び上京、長岡で知つた小金井代議士の紹介で博文館に入つた。博文館入社前、某學校で英語を敎へたこともあつた。二十七八年頃、尾崎紅葉の門に入ると共に專ら創作に志し、二十九年八月、はじめて「文藝倶樂部」に「藪柑子」（別項）を發表した。同年冬、博文館を退き、神田の下宿に籠り、地方新聞の小說を書く傍ら、芳賀博士の仕事を手傳ひなどした。翌三十年十二月、文壇的に擡頭して來た小栗風葉が、紅葉の玄關を出て塾を創めるに當り、柳川春葉等と共にこれに加はつた。

德田秋聲

中山白峰・田中凉葉・泉鏡花・藤井紫明なども當時の同輩である。三十三年二月、塾を解散、再び筑土前の下宿に移り、三月美文雜報記者として讀賣新聞に入社、神田錦町に移つた。その夏、胃擴張に罹り苦しんだが、醫療の傍ら發奮して長篇「雲のゆくへ」（別項）を讀賣新聞に掲げた。好評を得て文名漸く擧る。かくて彼は鏡花・風葉・春葉と共に、所謂紅葉門下の四天王として、次第に認められるやうになつた。翌三十四年讀賣新聞を退いた。なほ當時「怠けもの」「桎梏」「前夫人」などの個人主義的な傾向を持つ作品を「新小說」に發表した。すでに彼は、これ等の作品の中に、後年の人生派的自然派的傾向を示した。なほ當時、生活のために飜譯・飜案などの仕事にも從つた。三十五年春、大阪の長兄を訪ね、翌年二月、更に病を養ふため、兄をたよつて別府温泉に遊び、翌三十六年歸京、四月、下宿を引拂つて、はじめて小石川表町に一戸を構へた。その夏、小澤濱子と結婚した。冬、紅葉山人逝く（この間の消息は、小說「黴」の中に詳しく書かれてゐる）。三十七年秋、長男が生れた。時恰も日露戰爭に際し、彼も亦戰爭小說を書かなければならなかつた。同年十二月、讀賣新聞に「少華族」を發表した。翌年冬本郷森川町に移る。十二月、短篇集「花束」を春陽堂より刊行。三十九年十月、萬朝報に「おのが縛」を掲げた。この作は、翌年五月春陽堂から刊行された。四十年四月、長篇「焰」を國民新聞に、十月「凋落」を讀賣新聞に掲げた。四十一年八月「中央公論」に、短篇「出產」（別項）を發表。九月易風社より「秋聲集」を刊行。續いて十月、當時國民新聞の文藝擔當者であつた高濱虛子の懇請によつて、新しき中篇小說の試みとして「新世帶」（別項）を同紙上に發表した。翌年九月新潮社より刊行。その自然主義的人生派的傾向によつて注目され、世評甚だ高かつた。なほこの年、短篇集「出產」を左久良書房から刊行（四月）。四十三年八月讀賣新聞に「足迹」（別項）を發表。翌年八月、夏目漱石の推薦によつて朝日新聞に「黴」（別項）を掲げ、甚だ好評であつた。「黴」が四十五年一月新潮社より刊行せらるゝや、世評益々高く、傑作を以て推奬された。同四年「足迹」を刊行。大正二年三月、國民新聞に「爛」（別項）を發表。愛慾描寫の技巧の練熟を示すものとして好評であつた。同四年二月讀賣新聞に「あらくれ」（別項）を、十月東京朝日に「奔流」を發表。後者は後の通俗小說への橋渡しとなつた作である。同六年二月、東京日日新聞に「誘惑」を、四月「婦人公論」に「秘めたる戀」を掲げた。秋、「犧牲」を發表。同九年、「蒼白き月」などの好短篇あり、又中外商業新報に「灰燼」を執筆。この年田山花袋と共に誕生五十年祝賀會が全文壇によつて催された。同十年、時事新報に「何處まで」（一月）、大阪朝日に「斷崖」を執筆。「婦人公論」に「呪咀」、「婦人之友」に「闇の花」を掲げたのもこの年である。同十一年、東京日日に「二つの道」、外に「或賣笑婦の話」以下の短篇を多く發表した。同十二年六月、自傳的中篇「無駄道」を報知新聞に掲げた。十三年「中央公論」に「不安のなかに」（一月）、「車掌夫婦の死」（四月）、「改造」に「花が咲く」（四・五月）、「風呂桶」（八月）等の短篇を發表、好評であつた。一月以來「婦人之友」に「草は萎る」を執筆。十四年、「挿話」、「未解決のまゝに」、「蒲の小島」などの短篇多く、東京日日に「蘇生」を掲ぐ。十五年一月夫人を喪ふ。「折鞄」（改造四月）、「過ぎゆく日」（中央公論四月）、「逃げた小鳥」（同七月）、「元の枝へ」（改造九月）、「暑さに喘ぐ」（中央公論九月）等の作がある。山田順子との戀愛事件を傳へられたのはこの頃である。昭和期に入つてからも短篇多く、心境の深さと技巧の圓熟を示すものがある。「齒痛」（昭和三年一月、中央公論）、「芭蕉と芋蟲」（昭和三年十月、中央公論）、「和解」（昭和八年八月、新潮）は特に注目すべき作である。

【著作】〔選集〕秋聲叢書（博文館）○現代小說全集（德田秋聲集）○明治大正文學全集（德田秋聲集）○現代日本文學全集（德田秋聲篇）○新撰德田秋聲集（改造社）。〔短篇集〕花束（明治三十二・三年頃より七・八年までの作を集めたもの）○秋聲集（四十年前後の作を集めたもの）○出產（秋

響集以後、即ち四十一・二年の作を集めてある)○媾曳(大正二年一月、春陽堂)○絶縁(同年、春陽堂)○過ぎゆく日(大正十四・五年の作を集めてある)等。

【代表作】雲のゆくへ○出産(短篇)○新世帶○足迹○黴○爛○あらくれ(以上各別項)○未解決のまゝに等。

【作風】 紅葉門下として硯友社の流れを汲んでゐるに拘らず、その作風には最初から硯友社のそれとは自ら相異るものがあつた。處女作「藪柑子」などに於てすら、すでにそれが多少ほの見えてゐる。それは彼の作家としての個性の成長と共に益々明瞭となつて行つた。彼の出世作となつた「雲のゆくへ」などに於ては、なほロマンチツクな要素が多分に含まれてゐたが、作者自身すでにこの作に不滿であつたことを告白してゐる(單行本「雲のゆくへ」序文)。早くから比較的多く外國文學に接してゐた彼には、期せずして自然派が目指してゐたと同様な人生探究的な欲求が萠えてゐた。その當然の結果として一歩一歩とその硯友社的俗流的傾向から脱却していつた。明治三十八年刊の短篇集「花束」の序文や、長篇「少華族」の序文中に、彼が人生派的意向を漏らしてゐることは、すでに彼の研究家によつて指摘されてゐる。「少華族」の序文中に於て、作者はすでに「眞摯なる人生の描寫」を云々してゐるのであるが、これこそかの自然派たち、藤村や花袋の熱心に追ひ求めてゐた同じ目標に外ならなかつた。而してそれは必ずしも彼が花袋等のそれに迎合したとのみは考へられない。その素質的なものと、その素養とが、自らこの展開へと導いたと考へ得る理由がある。この間の消息を最も雄辯に語るものは、短篇集「秋聲集」中に收められた諸作である。かくて彼の一作一作と築き上げて來た精進は、遂に四十一年の「新世帶」となつて現はれた。この作を一たび發表した後の彼は、もはや押しも押されもしない自然派作家の一人であつた。而も「新世帶」の一篇は、彼の自然派作家としての登場であつたばかりでなく、作者自身の一つの完成でもあつた。謂はばこれ以前の諸作はすべて習作であつたと言つても必ずしも過言ではない。このことは單に作の傾向内容に就いてのみならず、その技巧に就いても言ひ得る。その作風の最も特徴的なものは冷徹嚴なその客觀的態度と、所謂無技巧の技巧と稱せられた質實なうまみとであるが、その二つながら、この作に於て完成されたかの感がある。硯友社的な派手な、そして作意的な手法を見事に克服した後の、所謂鍍消しにされた簡潔ではあるが鋭い技巧が、隨所に閃いてゐる。そしてこの作に於ける人生派的な傾向は「足迹」「黴」に於て一層深められ、その技巧は「爛」に於て一段と洗練され、又「あらくれ」に於て、この作全體がその極限にまで高められ、彫琢鍛錬を經た完成味を示した。「新世帶」と「あらくれ」とは所詮は同系統の作であるが、後者は一層完成された姿を示してゐる。これには「足迹」や「黴」に見られるやうな人生派的否定的な暗さもなく、瑣末的な煩雜さも拭ひ去られて、一脈の明るさと精力的なものが感ぜられ、その後の作風の一つの傾向を示してゐる。一方彼は「新世帶」と殆ど同時に「出産」の如き傑れた短篇を書いてゐる。これは「秋聲集」中の諸作の完成した一つの姿である。又「出産」は「黴」と共に最も完成した私小說としても記憶さるべき作である。大正期に入つてからは、自然主義そのものが行きづまり、彼も亦「爛」「あらくれ」を書いて後、一時沈滯に陷つたが、すでに「あらくれ」の中に示された肯定的な傾向の上に、益々圓熟した技巧を併せて作者自身の道を開拓して行つた。而して「奔流」以後の彼の傾向は、凡そ三つに分けて見ることが出來る。(一)婦人雜誌・新聞向の通俗小說、例へば「縮めたる戀」「誘惑」「二つの道」など、(二)身邊雜事を淡々と描いた心境小說、(三)作者の社會的苦惱を盛つた、例へば「元の枝へ」「逃げた小鳥」「未解決のまゝに」「犠牲」などの諸作の如きがそれである。その心境小說の中にも「蒼白い月」「籠の小鳥」などの老熟した心境の澄徹を示した作もあるが、やはり社會苦惱を盛つた作に、より傑れた作がある。「未解決のまゝに」「元の枝へ」などが即ちそれである。極く最近の作風は心境の深まると共に、現實を在るがまゝに諦視するといつたやうな、より肯定的な方向へ進んで來てゐる。

【史的地位】 日本の自然主義文學運動は田山花袋(別項)によつて指導されたが、實際に自然主義文學を確立完成した者は、花袋でも藤村でもなく、無論白鳥でもなく、實に秋聲であつた。「新世帶」「黴」「爛」「あらくれ」の諸作は、ただに秋聲の傑作であつたばかりでなく、自然主義的作品の最高水準を示したものである。自然主義文學の完成者が、紅葉門下として發足したこの作家であつたといふことは、甚だ興味ある事實であるが、その最も大きな理由は、飽くまで冷徹な客觀的作風に由來するものであらう。どこまでも突放し切るその態度は、明治・大正の文壇を通じても全く比類のない特異的な存在であつて、この素質こそ彼をして自然主義文學を完成せしめたのである。併し彼は必ずしも農民からの自然派作家ではなかつた。「爛」「あらくれ」などにも、すでにその片鱗を示してゐるやうに、次第に餘裕ある態度を見せ、文學の技術家としての技巧を示すやうになつて行つた。舟橋聖一氏は早くこの點を指摘して、「日本の生んだ最も偉大なる職業的小說家」だといつてゐる。そのいつまでたつても涸渇しない藝術眼の閃めきにも、その天成的な作家としての秋聲の風格が窺はれる。

【參考】 最近の小說家 生田長江 ○人及び藝術家としての秋聲 近松秋江(人間大正九ノ一) ○現代文學諸相の概觀 片岡良一(國語と國文學昭和四ノ四) ○德田秋聲と正宗白鳥 舟橋聖一(國語と國文學昭和七ノ四) ○現代日本文學大年表(現代日本文學全集別卷) (加藤)

とく〳〵の句合 とく〳〵のくあはせ 俳諧集

一冊 【著者】 山口素堂 【名義】 卷頭の素堂の句、「とく〳〵の水まねかば來ませ初茶の湯」から附けたのであらう。「とく〳〵の水」とは西行の作と傳へられる「とく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほす程もなき住ひかな」といふ和歌の言葉を取つたのである。【刊行】 正德元年 【諸本】 享保十二丁未春帽堂百里の跋のあるものがある。素堂鬼貫全集(俳諧文庫)所收。【內容】 本書は素堂七十に近き秋、痾を煩ひ、漸くにして癒えた病間に、昔言ひ捨てた發句を左右に分ち、西行の「御裳濯川歌合」に倣つて三十六番の句合とし、今の世に俊成卿と頼む人もないからと云ふので自分が判者となり、優劣を定めたものである。句は多くは三十歳前後の時の作である。有名な「目には青葉山時鳥初鰹」の句も、その中に入つてゐる。又「御裳濯川歌合」には「宮川歌合」が附いてゐるといふ所から、狂歌十番の句合を添へてゐる。素堂の序・跋がある。【價値】 素堂の時流に超然たる態度や、彼が晩年の句作上に於ける意見風尚なども窺はれて參考になる。併しそれだけ又彼が俳壇の進歩に追隨し得ない傾きを見せるものでもある。 (荻原)

徳富蘇峰 とくとみそほう 新聞記者・評論家

【本名】猪一郎 【家系】 肥後の豪士であり大庄屋であつた。父一敬は横井小楠の門人で且つ義兄に當る。一敬に當子・光子・音羽・初子・猪一郎・友喜・健次郎(蘆花)の四女三男があつた。母久子は教育家竹崎順子の妹、横井小楠の妻つせ子、東京女子學院長たりし矢島楫子等の姉。【閲歷】 文久三年正月二十五日、熊本縣上益城郡津守村字杉堂の矢島家(母の里方)で生れた。幼年時代を水俣に送つたが、明治三年、父が一家を擧げて熊本に移るに及び、

徳富蘇峰

爾來熊本の東郊大江村に居住した。その世に知られる前に、大江逸又は大江逸郎と稱したのは、そのためである。當時彼は元田塾に入り、次いで竹崎茶堂の塾に移り、更に兼坂止水の塾に轉じ、主として漢學を修めた。同六年(十一歳)父母の命によつて、熊本洋學校に入り、アメリカ風の教育を受け、英語を學んだ。同窓には浮田和民・小崎弘道等があつた。教師中、異彩を放つたのは、クリスト教の篤信者ゼンスで、彼から宗教上の感化を相應に受けた。當時熊本には、熱烈極端なる保守黨(神風連)があつて、クリスト教に反對したので、同九年八月洋學校も遂に閉鎖された。依つて直ちに上京して英語學校(一高の前身)に入學。その冬、翻然で新島襄の主宰する京都の同志社に奔つた。そこで英語その他を學び、傍ら東京日日新聞その他當時の新聞を讀み、論說を筆記したりして研究することを樂しみとした。以上、幼少年時代に受けた敎育について、自ら「同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎を體得したる心持がした。一は兼坂先生に負ふ所あり、他は新島先生に負ふ所がある」と述べてゐる。かくして彼は普通科を卒業したが、「クリスト敎辯說論」を讀んで同敎に對する疑ひを抱き、同志社を去つて上京した。時に明治十三年五月。東京では諸名士を訪問して半年を送つた末、郷里大江村に歸り、明治十四年の半ば頃、東肥新報の編輯を助け、マコオレエのエッセイを譯し、或はクロンウエルの傳記を書いて同紙上に載せた。當時彼は敎育に興味を持つたので、明治十五年三月、大江義塾を創立し、現代に必要な學問・知識を塾生に授けた。蘇峰の學力は、主としてこの間にその根柢を築いたのである。且つ彼は別に文章を研修し、共立學舍の行儀文師といふ詩文に長じた人に斧正を請ひ、得るところが少くなかつた。彼は大江義塾時代に一度上京して、田口卯吉・中江篤介等と交りを結び、或は土佐に赴いて板垣退助の敎を請うた。その他、種々讀書に力め、同志社敎授ラアネッドが勸めた雜誌「ネエション」「ライブラリイ・マガジン」などを米國から取り寄せて繙き、識見を養つた。「明治二十三年後の政治家の資格を論ず」及び「自由・道德及び儒敎主義」などを草したのはこの頃で、何れも明治十七年中に成つた。この年倉園又三の女つる子と結婚した。次いで同十八年六月、「第十九世紀日本の青年及其敎育」と題する單行本を書いたが、それは後に「新日本の青年」(別項)と改題して、彼の出世作の一つともなつた雄篇である。時に彼は、右の論文を三百部印刷して先輩知己に頒つたが、田口卯吉の認むる所となり、當時有力だつた「東京經濟雜誌」に轉載された。のみならず、同鄕の先輩、井上毅もその價値を認め、これを推奬した。蘇峰はこれより著述を以て世に起たうと決意し、「將來の日本」(別項)と題する長論文を纏めて、田口卯吉に示し、その推奬を得て經濟雜誌社から出版した。これが非常の好評で、蘇峰の文名は忽ち天下に知られた。明治十九年の暮、一家を擧げて上京したが、爾來湯淺次郎等と計つて、雜誌「國民之友」(別項)を發行するに決し、同二十年二月十五日、第一號を創刊した。當時、雜誌の發行部數は、大抵千部內外であつたが、同誌は一萬部以上の賣行を見た。次いで嚮に刊行した「十九世紀日本の青年及其敎育」を「新日本の青年」と改題して、神田集成社から出版。これ又非常の賣行を見た。彼は平民的急進主義の立場にをり、清新な文體を以て、天下の青年に呼びかけ、豫期以上に時代の風潮に投じたのであつた。かくして彼の第二計畫——國民新聞創刊のことも、左程の困難もなく、實現することが出來た。その呱々の聲を揚げたのは、明治二十三年二月一日である。當時記者として名を列ねた者には、竹越三叉・矢崎嵯峨の舍・宮崎湖處子・高橋五郎・人見一太郎・上野岩太郎・福田和五郎・內田不知庵・德富蘆花等があり、客員として森田思軒・元良勇次郎が加はつた。論壇主任は久保田米僊だつた。國民新聞は「國民之友」ほどの勢はなかつたが、なほ七千以上の購讀者を得てこれ又成功した。爾來、蘇峰は平民主義を標榜して、所謂藩閥政府と戰ひ、且つ常に新思想・新文藝の味方として頗る盡すところがあつた。明治二十七年、日清戰爭起るや、彼は率先して從軍記者を諸方に派した。當時、國木田獨歩が千代田艦に搭乘して、弟收二に寄せた「愛弟通信」と、久保田米僊の繪畫通信とは、國民新聞を飾つた。後、彼も亦大本營が廣島に移つた際、同地に赴き、異色ある通信を以て紙上を賑はした。次いで、旅順・營口・海城・蓋平等を視察した。歸京後、戰後經營のことに意を注ぎ、親しく歐洲視察の途に上つた。歸來、父一敬と親善の間柄であつた松方正義に獻策するところがあり、その關係から明治二十九年九月、松隈內閣成るや、內務省參事官となつた。ところが、世上これを以て、彼が在來攻撃を續け來つた藩閥に降伏したものと思惟し、頻りに非難の聲を浴びせた。それは彼に取つて少からぬ打撃であり、一時失意の境地に陷つた。彼の第一の牙城とも云ふべき「國民之友」は次第に讀者を減じ、明治三十一年八月、廢刊するの餘儀なきに至つた。爾後、彼は主力を國民新聞に注ぎ、國家主義の思想に立脚して、世論の指導に當つた。次いで彼は時の有力なる政治家桂太郎と接近し、實際上の經綸について、考慮し研究した所を紙上に披瀝し、次第に頽勢を盛り返した。殊に日露戰爭前後、新人材を網羅して著しい發展を爲し、彼の「東京だより」は山路愛山の「書齋獨語」と相俟つて、紙上の重要な讀物となつた。かうして國民新聞は、彼が昭和四年、その社を退くに至るまで、彼の統轄の下に持續し來つたのである。この間彼は明治三十九年八月、支那に遊んで「七十八

日遊記」を草し、次いで大正六年秋には、支那滿洲に再遊して「支那漫遊記」を公刊し、また明治四十三・四年及び大正二年より四年に亙つて、數回朝鮮を訪ひ、その見聞するところを錄して「兩京去留誌」を著いた。昭和四年一月國民新聞を去り、翌月臺灣全土を巡遊したが、これには「臺灣遊記」の著がある。同年三月、大阪每日新聞・東京日日新聞の社賓となり、「日々だより」を草し、「近世日本國民史」の稿篇を連載しつつ今日に至つた。【著書】彼の著書は、量に於ても頗る多く、正に等身に近い。その代表的著作「近世日本國民史」(別項)の外、「靜思餘錄」「吉田松陰」「將來の日本」「新日本之青年」(以上各別項)「天然と人」「文學斷片」「人物管見」「近時政局史論」「時務一家言」「日本帝國の一轉機」「支那漫遊記」等は、その代表作と云ふべきである。殊に國民叢書三十餘冊中には見るべきものが多く、蘇峰の文學的生涯の一半以上は、それ等の文篇に結晶せられてゐる。

【批評】蘇峰は見やうによつては、學者でもあり、教育家・政治家でもあるが、その本領はジャーナリストたる所と、その文章家たる所にある。彼は天成の新聞雜誌記者である。殊に人物批評家として最もすぐれた天分を有する。勿論彼が今日の大成を見たのは、その健康と勤勉と精力とに負ふ點が最も多い。彼は能く書き、能く旅行すると共に又能く讀む。その讀書は頗る多方面に亙り、今日と雖も、史書のみに限られてゐない。博く讀んで、その得た所を現代に活用するところに彼の長技がある。彼は廣い趣味を持ち、政治のみならず、文學・美術・教育・宗教等その何れにも相當の見解を有する。彼が比較的に疎遠なのは經濟の方面だけだと云つてよい。彼は最初、思想上に於て、平民的急進主義に立ち、多分の歐化趣味を帶びたが、決して日本の立場を忘れなかつた。否、初めから彼は國家主義的な傾向を多く持つた。日清戰後に及び、彼は國家主義を唱へたが、それは必ずしも思想的豹變ではない。矢張り國家主義の立場から世界の形勢を見て、國家主義鼓吹の必要を切實に感じたるによる。今日の彼は皇室中心主義者で、日本主義的傾向を多分に帶びてゐるが、これ又彼の立場からすると當然の歸結である。彼が「近世日本國民史」を草した意も、一つは彼の愛國的至情に基づくことで、必ずしも彼が學者たるためではない。それ故に彼はジャーナリストの立場から國史を書き、そこに彼の個性を示さうとしてゐる。彼の思想は必ずしも深遠でなく、常識的範圍を出でない。晩年には、やゝ保守的になり、思想の柔軟性を失つた形がある。彼の文章は、暢達自在にして千言たちどころに成るの概があり、殊に前半期の文章は、當時としては頗る淸新なものであつた。而して彼が日本の文章道に與へた革命は、何人も及び得ないほど偉大な足跡を止めてゐる。

【參考】德富蘇峰集(年譜)田中幸二郎　(高須)

德富蘆花 とくとみろくわ　小說家【本名】健次郎【別號】白水生・實香生・秋山生・驚倒生・秋水生・敬亭生・楓葉・ＡＢ子【生歿】明治元年十月二十五日、熊本縣葦北郡水俣に生れ、昭和二年九月十八日、群馬縣伊香保町千明仁泉亭に歿す。享年六十【閲歷】十一歲の時兄猪一郎(蘇峰)に伴はれて京都同志社に入學したが十三歲で半途退學し、十八歲熊本にて受洗、熱心なるクリスト教徒となり、横井時雄氏に隨つて、愛媛縣今治に於て傳道に努めた。明治十九年同志社に再入學、翌二十年失戀の結果熊本に歸り、熊本英學校に教鞭を執つたが、二十二年春上京して兄蘇峰の經營せる民友社に入り、國民新聞の飜譯係として外國電報の飜譯、海外事情の紹介等の傍ら、飜案小說、短篇小說の筆を執り、頗る世の好評を博し、蘆花生の名漸く世に知らるゝに至つた。その處女出版は英國の政治家を評傳せる「如溫武雷士」(二十二年)「理査士格武電」(二十三年)の二篇である。二十七年五月、原田あい子と結婚、その頃まだ月給十一圓の貧書生に過ぎなかつた。三十三年から四年にかけて、出世作たる「不如歸」「自然と人生」「思出の記」が出版され、一躍讀書界の

德富蘆花

寵兒となり、いはゆる洛陽の紙價を高からしめた。民友社在籍十三年、「自然と人生」の姉妹篇ともいふべき「青山白雲」「青蘆集」、その他多くの著述があつたが、寡言にして而も不羈、裡に火山の熱を藏し、編輯局內に調和して家兄の庇護に意圖を感じつつあつた彼は、三十五年十二月、斷然民友社を退き、翌三十六年二月、小說「黑潮」を自費出版した。かくて生活の一轉機が劃され、三十九年四月には單身エルサレムに赴き、更にヤスナヤ・ポリヤナにトルストイを訪ねた。同年十二月に出版された「順禮紀行」はその旅行記である。越えて四十年二月、東京の郊外千歲村粕谷に隱棲し、專ら土に親しみ、晴耕雨讀、ひたすら思索に耽つた。この生活と思想の轉機から、蘆花のペンネームを棄て、爾來專らその實名を署するに至つた。大正二年に出版された「みみずのたはこと」はこの土の生活の記錄で、第二の「自然と人生」ともいふべきものである。大正二年、憲政擁護運動のために兄蘇峰の經營せる國民新聞社が燒打の厄に遭ふや、義憤禁ぜず、自ら交を絶ちし兄を訪ひ、社運の更生を助くべく、小說「十年」を國民新聞に揭載し始めたが、自己の創作態度意に滿たずとして、僅か十一回にして稿を絶つた。大正三年五月二十六日、父一敬の死に會つたが、彼はその死床にも葬儀にも參せず、その隱棲の門を閉ぢて三年間父の喪に服した。大正八年一月、夫妻相携へて世界周遊の途に上り、翌九年三月歸朝、その紀行が大正十年出版の「日本から日本へ」である。粕谷の村莊に隱棲後、その深き思索の結果、或は憂愁禁ぜずして、夫妻手を携へて、死處を尋ねて西日本を旅し(紀行「死の蔭に」)、或は全篇、生の歡喜を謳へる「新春」の著述となり、思索に思索を重ねて、最後に到達したのは夫婦愛の偽らざる記錄、丸裸にて銀座街頭を行くの覺悟を以て、赤裸々に半生を懺悔すべく、アダムとイブの地上の復活を信じて、妻愛子との共著の下に、長篇「富士」の筆を起したのであつたが、大正十五年十二月千葉縣勝浦の轉地先に於て腎臟を患ひ、越えて昭和二年一月粕谷の自宅に歸り、病勢一進一退のうちに、思出多き伊香保の地を戀ひ、同年七月重態の身を自動車で運んだが、九月十八日「富士」三卷を世に殘して永眠した。遺骸は二十三日粕谷邸前の雜木林に葬られた。遺稿「富士」第四卷は後に夫人の手によつて完成された。その將に死せんとするや、

親りに家兄を憾ひ、骨肉固く手を握つて逝つたのは、劇的至情の場面として當時世に喧傳された。

【著作】蘆花全集二十卷(新潮社版)がある。彼の著作は史傳・前期小說・隨筆・紀行・後期小說の五に分類される。またその執筆の時期によりて、蘆花時代(前期)・健次郎時代(後期)に大別し得る。【史傳】如溫武雷士(明治二十二年)○理査士格武電(二十三年)○グラッドストン傳(二十五年)○トルストイ(三十年)○世界古今名婦鑑(三十一年)○外交奇譚(三十一年)○探偵異聞(三十三年)○ゴルドン將軍傳(三十四年)○竹崎順子(別項)(大正十二年)等。【前期小說】不如歸(三十三年)○思出の記(三十四年)○黑潮(三十六年)○寄生木(各別項)(四十二年)等。【隨筆】青

德富蘆花筆蹟

山白雲(三十一年)○自然と人生(三十三年)○青蘆集(三十五年)○みみずのたはこと(大正二年)○新春(各別項)(同七年)等。【紀行】順禮紀行(三十九年)○死の蔭に(別項)(大正六年)○日本から日本へ(別項)(同十年)等。【後期小說】黑い眼と茶色の目(別項)(大正三年)○富士(別項)。その外、歿後全集を編むに方りて編錄せられたものに「偶感偶想」があり、「書簡集」がある。

【業績・人物】明治大正の文壇に於ける德富蘆花の地位は全くユニークのものである。彼には師もなく弟子もなく、系統もなければ集團もない。ただ獨自の力で築かれた孤立せる一つの高峰である。その文章も、その思想も、前行もしくは同時代の小說家の何人とも型を同じくしない。環境としての兄蘇峰の影響は少くないが、併し思想の傾向は、寧ろ互に背馳する所が多い。小說家としては一言にして自傳作家といふことが出來る。「不如歸」「黑潮」「寄生木」の三篇を除けば、彼の創作は悉く皆自己のヒューマン・ドキュメントである。ただ初期の「思出の記」は自傳としては多くの作意を加へ、後年頗る己れの意に滿たなかつたが、而も他の初期作品を悉く抹殺することを希つたに拘はらず、「思出の記」のみには多分の愛情を感じ、後年の赤裸々の告白に至る道程として、その存在を肯定した。「黑い眼と茶色の目」は、同志社時代の初戀の蔽ふ所なき記錄であり、「富士」に至つては悉く變名を用ひたけれども、純乎たる自傳である。その赤裸々なる暴露は、單に蘆花夫妻の生活そのもののみでなく、時代・周圍・親類縁者、悉く有るがまゝにその筆端に踊ることを免れない。多情多感、愛憎の最も烈しい性格の持主であつた彼の一生を通じての努力は、大なる眞と大なる愛の追求であつた。自然詩人としての彼、田園詩人としての彼、トルストイに最も深く傾倒した彼、教會を離れてクリストに熱信を捧げた彼、早く客觀小說の筆を抛つて、自己內省、自己告白に光明を見出したのもそれがためである。大正二年小說「十年」を中止するにあたつて、「實は最初着筆の際は、外から內へと即かず離れず書いてのけようと思つたのでした。悍然者に復つて己が態度の不眞面目に氣がつくと、最早いやになつた。此れではいけぬ。全然態度を一變し、改めて內から外へ書くのでなければいけぬ」といへるも、其間の消息を窺ふに足る。彼が傳記作家として多くの業績を殘したのも、この眞と愛の追求の一側面と見ることが出來る。彼は中ごろ自ら社會主義者と稱した。併しそれはクリスト教的人道主義の立場からであつた。彼は虛飾街耀を極端に忌み嫌つたことは勿論であるが、平生沈默そのものの如き彼が、一たび演壇に立つや、雄辯人を驚かすものがあつた。而もそれは一生を通じて數回の記錄に過ぎなかつたが、要するに全幅の眞我の發露が人を捉ふるのであつた。彼が漸く名を成したのは、恰も硯友社派の爛熟期であり、その一家を成せるは自然主義の全盛期であつたが、彼は飽くまで文壇のすべての潮流に超然としてその孤壘を守つた。彼が他の同時代の作家と歸趣を異にした現はれの一つは、常に時代の流れに着眼し、社會的の觀察を怠らなかつたことである。彼の長篇には、例外なしに時代の動きが描かれ、一篇の人間史が同時に社會史でもあつた。彼が博愛平等のクリスト教徒であると共に、醇乎たる皇室中心の日本主義者であつたことも看過されてはならぬ。絕筆「富士」四卷は彼の最も心血を注いだ作品であり、人間蘆花の生命をそのまゝ傳へたものであると共に、古くはマーカス・オーレリウスの「瞑想錄」、近くはルーソー、トルストイの「懺悔錄」と共に、告白文學の最高峰に立つものとして、後世に仰がるゝであらう。　(石川(六))

禿尾長柄帚 とくびちやうへいさう　詩文集　一卷【著者】正宗龍統【由來】龍統の著書三部ありと云ふ。「禿尾長柄帚」「禿尾鐵苕帚」及び「蒲牙」である。今、「禿尾長柄帚」一卷のみが寫傳されてゐる。この書の首に揭ぐる明の賀菴・儒時用の文に依れば、九淵龍琛・南叟龍朔が、寶德三年に明に入るに際し、正宗の詩文を携へて、賀菴等に示し、推賞を得たものである。二人東歸の後、正宗の詩文が、五山叢林の間に喧傳せられたので、この書が推重されたのである。【解說】首に明の賀菴の文がある。九淵龍琛・南叟龍朔が正宗の詩文を示して、一文を求めたることを記し、後に七言絕句一首を書し、末に「大明景泰五年歲次甲戌仲春旣望日大興隆南堂金陵賀菴寄奉」とあり、大興隆は大興隆寺である。次に儒時用の文がある。九淵龍琛が、茶話の次に、正宗の詩文を示したことを記し、後に七言律詩一首を書し、末に「四明西山小隱儒時用謹奉」とある。儒時用は金陵の人で、學問文章を以て聞えたと云ふ。次に九淵龍琛の文があり、國信使に從つて明に入るに方り、正宗の詩文を携へ、南叟龍朔と共に賀菴等を訪問して、一閱を求めたことを記してゐる。この一文は長祿三年七月、建仁寺知足院に於て記したものである。次に總目次があり、次に文を收めてゐる。文は、記・序・跋・說・贊・銘・祭文があるが、編次の體はない。百二十篇ありて、蘭南禪瑞湯龍伯行道記、雙鶴明照禪希世靈彥道行記、一菴天祥一麟行狀、故金吾兼野州太守平公壙記、寄題江戶城靜勝軒詩序等は最も長文である。次に古詩十五篇、聯句二篇を收めてゐる。　(鷲尾)

禿筆餘興 とくひつよきよう　隨筆　三卷【著者】松平定信【諸本】隨筆文學選集第二卷所收。【解說】四時の變移につけ、花鳥月夕にふれて、著者の心に浮んだことを雅文體で述べたもので、章段の終りに自詠の和歌を置いてある。最末に「夢道の記」一篇がある。同じ著者の「花月草紙」(別項)に似た書で、それよりは

聯か不熟である。卷一の尾に、安永四年七月中旬とあるのは記述の年代であらう。序跋はない。（和田）

毒鈴頭　『濟正誠忠錄』を見よ。

毒薬を飲む女　『放浪』を見よ。

獨樂新話（どくらくしんわ）　噺本　一册【作者】虎溪山人【刊行】天明八年【諸本】落語全集（續帝國文庫）所收【解說】二十八話より成り、新味はない。落語本としては小さなものである。殊に多くは前代のものを入れて、獨創的な色彩は極めて少い。『豆腐』『木刀賣』『井戸鍋』『まじなひ』『十種香』の如きは、既に先人の發表したものである。併し古いものでも見違へる位形が整ひ、表現にも技巧の洗練が加はつてゐる。『豆腐』の如きも、『醒睡笑』（別項）に於ては、素樸な百姓の話であつたが、本書に於ては大名の話となり、用人を種々弄んで誘ひ出すといふ複雜な趣向となつてゐる。それだけ小噺を洗練化して效果を舉げてゐる。落語本としては、先行の書に比して體裁が具備してゐる。作者の趣味からか駄洒落を得意としてゐるのが聊か不快を抱かせる。（小池）

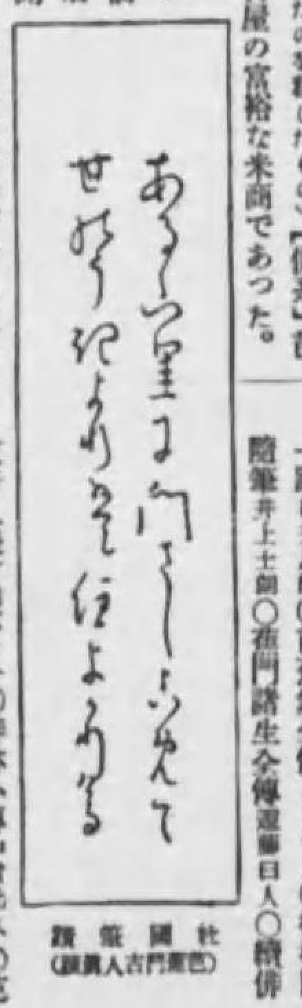
讀老庵日札（どくらうあんにつさつ）　隨筆　一卷　寫本【著者】岡田老樗軒【解說】書肆の好事家で聞えた老樗軒の漫筆で、江戸時代の和漢學者・俳人・狂歌師・戯作者・書畫家等、凡て文藝に名ある人々の小傳・墓所を舉げ、また書畫等の見聞談を記してある。三十六歌仙以下八十二則を收めてゐる。案ずるに同じ人の名著『墓所一覽』と關係の深い著作と言ふべきか。文政七年大草公弼の識語がある。【著者小傳】老樗軒。名は平次、通稱伊勢屋三右衛門、讀老庵と號し、書肆を業とした。文政七年（二四八四）歿。享年四十六。『江戸名家墓所一覽』『擬苑遺香集』『擬操偏筆』の著作がある。（和田）

德和歌後萬載集（とくわかごまんざいしふ）　狂歌集　二册【編者】四方赤良【刊行】天明五年【解說】天明三年刊の『萬載狂歌集』（別項）の姉妹篇で、山手白人の序、朱樂菅江の跋がある。歌數凡そ七百首、その分類また『萬載集』に同じい。菅江の跋文に、『赤良が選びを閲するに後の選びは殆どさきの選びよりもくはし』と記してゐる如く、この篇には天明以前の古狂歌を載する事少く、當時現在せる人々の作歌を網羅したもので、『萬載集』よりは天明振歌調のやゝ整うた秀吟が滿載されてゐる。（野崎）

兎月（とげつ）　讀本作者【姓】手塚氏【別號】梯生堂・北溪・北溪合舖【閲歷】京都の人で、文化頃に多くの讀本を作つてゐるといふ以外には、傳記が知られてゐない。その讀本には馬琴の序などを附したものもあるが、平凡な構想であり、平板な筆致であつて、取り立てて言ふに足るほどのものはない。【著作】敵討朝妻舟六卷（文化三・四年刊）○奇談古志路の章十二卷（同三・五年刊）○三國復讐稚の網六卷（同五年刊）○小說奇談夢禪往事四卷（同五年刊）○繪本長曾我部物語六卷（同七年刊）○非除稗史夕霧傳記五卷（同八年刊）○敵討孝列傳（以下刊年未詳）○繪本胡蝶夢○甲賀三郎總窟話○繪本鎌倉新話。（笹野）

杜工部集（とこうぶしふ）　詩文別集　二十卷【著者】唐の杜甫【傳來】彼の歿後、潤州の刺史樊晃が、その遺稿を蒐めて六十卷とし、又小集六卷とした（唐書藝文志）。宋に至つて王洙が中外の書九十九卷を衰め、重複を除いて、古詩三百九十九、近體一千有六を定取して十八卷、また別錄雜著二卷を合せて都合二十卷とし、嘉祐中王琪が姑蘇に刻し、元稹作の墓銘を附刻した。又別に遺文九篇を、治平中、太守裴集が集外に刊附した。又黃伯思の編輯せるものは、一千四百十七首を收めて二十卷とし、別に雜著二十九首を二卷として都合二十二卷、李伯紀の序がある。以上二本は、共に詩文合集であるが（直齋書錄解題）、詩のみの集には宋の郭知達編の『九家集註杜詩』三十六卷があり、王洙・宋祁・王安石・黃庭堅・薛夢符・杜田・鮑彪・師尹・趙彥材の九家の註を集め、最も簡要と稱せられた。その他、黃希の『黃氏補註杜詩』三十六卷、『分門集註杜工部詩』二十五卷・首一卷、『集千家註分類杜工部詩』（宋徐居仁編）、『集千家註杜工部詩集』（元高崇蘭編）等がある。我が國に渡來した時代は詳かではないが、南北朝の頃既に傳はつてゐたことは、當時の緇流の記錄等に據つて知ることが出來る。足利時代に入つて漸く行はれ、釋心華はこれを抄錄した。江戸時代には、釋顯常・津坂東陽等が律詩を拔いてこれに註し、翻本も亦少くない。【解說】各本卷數體例を異にし、一々列舉し難いが、清劉の五家評本によれば古詩―八卷、近體詩―十卷、表・賦・記・說・讃・述共一卷、策問・文・狀・表・碑誌共一卷となつてゐる。上下四千載の詩壇、幾萬の詩人の中に於て、巍然として最高峰的地位を占める者は彼杜甫である。貞觀の美政に基礎を固めた唐朝文化の絕盛に達した玄宗の時代、詩運の天下と稱せられる唐代三百年間の頂點は、玄宗の開元・天寶の際から代宗の大曆の初めに至る凡そ五十餘年間に在る。而してこの所謂盛唐五十餘年の間に、詩壇に最も聲名を馳せた者は、李白と共に杜甫であつて、古來詩は杜甫に至つて集大成せられたと云はれる。元稹は云ふ、「上は風雅に薄り、下は沈宋に該り、言は蘇李を奪ひ、氣は曹劉を呑み、顏謝の孤高を掩ひ、徐庾の流麗を雜へ、盡く古今の體勢を得て、人々の獨專する所を兼ねたり」と。彼の詩は、全く經營慘澹を經て成つたもので、句法・辭法に於て、變化を極め、妙趣を盡し、抑揚縱橫、施して可ならざるものなく、平淡簡易なるものあり、綿麗精確なるものあり、奮迅馳驟するものあり、而も能く前人を掩ひ、後人をして繼ぐことなからしめた。故に元稹は、「詩人以來第一人」と云ひ、宋の楊萬里は「詩中の聖」と云ひ、羅大經は「詩中の經」となし、明の王世貞は「詩中の神」と贊したが、これ等の評は決して溢美の言ではない。彼はその一生を窮厄不遇の逆境の裡に送つたが、實はこれが彼の詩を珠玉たらしめた所以であつた。而してその出處勞佚、喜怒悲憤は、一にこれを詩に現はしたが、それを一線貫通するものは熱烈な儒教的の忠君愛國の至誠であつた。彼の詩的生涯は凡そ三期に大分することが出來る。第一は少年時代、第二は壯年時代、第三は晚年時代である。その少年時代は太平の恩光に浴して、燃えさかる青春の客氣を裹んで吳越の地に過した時代で、當時の詩には豪爽なるものが多い。安史の亂後玄宗は身を以て蜀に遁れ、長安昔日の榮華は忽ちにして壞敗した。時に彼は長安の賊中に陷つて、亂離の感に堪へざるものがあり、君國の憂情を微言の間に洩した。人口に膾炙する「春望」「月夜」「哀江頭」「哀王孫」の諸作は、この時に成つたものである。肅宗の至德二年（杜甫四十六歲）國難は漸く定まり、彼は鳳翔の行在に天子に謁した。麻鞋見天子、衣袖露兩肘とは當時の光景である。喜びの餘「喜達行在所三首」を賦した。同年八月、鳳翔から鄜州の妻子を省した。「徒步歸行」「行次昭陵」「彭衙行」等の諸吟と共に、彼の心血の文字「北征」の雄篇も亦實にこの時に成つたもの。彼の晚年はその周圍に多くの親友を失ひ、孤獨寂寥の境遇に在つて悲涼の生活を續け、その詩は往年の氣魄を失つたとは云へ、漸く圓熟精緻の風格を具へるに至つた。「白帝城最高樓」「秋興八首」「岳麓山道林二寺行」の如きは、その代表作である。彼は一生を通じて窮乏困頓の行程を辿つたが、彼の多感性は、終に彼をして世間との連繫を斷たしめなかつた。故に彼の詩は自らその時勢を反映し、杜集は一に「詩史」の稱がある。杜甫と李白、全く相異つた性格と生活とを有つたこの二大詩人が、殆ど時を同じうして互に芳蘭の交を結び、千紫萬紅の盛唐詩壇に輝く雙星として錦上に花を添へたのは、寔に千古の偉觀であつた。李白は生殁、共にやゝ杜甫に先んじ、兩者が交を結んだのは、天寶三年（李白四十四歲、杜甫三十三歲）、李白が翰林院を放たれた後のことで、後年杜甫は追懷の情に禁へず、「昔遊」「遣懷」の二詩を賦した。その他杜集を繙けば、二人の濃かであつた交情を想はせるものが少くない。又李白の集を見るに、杜甫に關したものが二首ある。「沙邱城下寄杜甫」及び「魯郡東石門送杜二甫」がこれである。李白の思想は出世間的、理想的、超俗的であり、杜甫に至つては世間的、實際的である。彼は遺脊の人であり、これは悲憤慷慨する。彼は隱逸放浪を喜び、これは儒風がある。彼は仙氣の人であり、これは情の人である。同じく開元・天寶の際に生を享けて、同じくその變に遭ひながら、一は風月烟霞を詠じたものが多く、一は人事を詠じたものが多い。而もこれは、やがて支那に於ける二大思潮を、この二人が著明に代表したものと云ひ得る。然らば二家の優劣如何。元稹が杜甫の墓誌銘を作つて、「是の時山東の人李白、亦奇文を以て稱を取る。時人之を李杜と謂ふ。余其の壯浪縱恣、拘束を擺去し、物象を摸寫す、其の樂府歌詩を觀るに、誠に亦肩を子美に差す。終始を鋪陳し、聲韻を排比し、大は或は千言、次は猶數百、辭氣豪邁にして、風調清深、屬對律切にして、凡近を脫棄する若きに至つては、則ち李なほ其の藩籬を歷ること能はず、況んや堂奧をや」と許して以來、杜、李に優るの說が多い。要するに李白は天才を縱橫に馳せて、奇想天馬空を行くの概があり、杜甫は終に地上のものであるが、その格體は變に通じてゐる。白の詩は一氣呵成に成り、甫の詩は苦心經營を經る。彼は標渺空靈の趣を恣にし、これは沈鬱頓挫の致を極め、李は仙の如く、杜は聖に似、相竝んで支那詩界の偉觀たるもので、その間遽かに優劣を附することは不可能である。【註釋書】九家集注杜詩三十六卷（宋郭知達編）○集千家注分類杜工部詩二十五卷・首二卷（宋徐居仁編・黃鶴補注）○杜工部草堂詩箋四十卷・詩話二卷・年譜一卷・補遺十卷・外集一卷（宋魯訔編・蔡夢弼會箋）○集千家注杜工部詩集二十卷（元高崇蘭編・劉辰翁評點）○集千家注批點杜工部集二十卷（元劉會孟評）○刻杜少陵先生杜詩分類集註二十三卷（明邵寶集註）○杜工部詩通十六卷（明張綖）○杜律選注六卷（明趙統）○杜律集解六卷（明邵傅）○杜工部集箋注二十卷（清錢謙益）○杜工部集輯注二十卷（清朱鶴齡）○杜詩詳註二十五卷・附二卷・首一卷（清仇兆鰲）○杜詩闡三十三卷（清盧元昌）○讀杜心解六卷・首二卷（清浦起龍）○杜詩鏡銓二十卷・首一卷・附杜工部文集註解二卷・附一卷（清楊倫）○杜詩偶評四卷（官版）（清沈德潛）○杜律發揮三卷（清大典）○杜詩論文五十六卷・目一卷（清吳見思）○杜律詳解三卷（津阪孝綽）。【著者小傳】杜甫字は子美、少陵と號した。睿宗の太極元年（皇紀一三七二）襄陽に生れ、後、河南の鞏縣に遷つた。開元二十三年（二十四歲）進士の試に應じたが、及第しなかつた。安祿山の亂後棄官して廣德二年（五十三歲）節度參謀・檢校工部員外郎と爲り、緋魚袋を賜はつた。代宗の大曆五年（皇紀一四三〇）荊楚の一旅寓に歿した（唐書文藝傳）。彼は博く群籍を究め、最も詩に秀で、詩聖の稱がある。元稹は、「詩人ありて以來未だ子美の如き者あらざるなり」と讚へてゐる。又殆ど時を同じうせる李白と竝稱して李杜と云ひ、或は杜牧を少杜と云ふに對して老杜とも云ふ。（宇野・木倉）

杜國（とこく）　俳人【姓】坪井氏【通稱】平兵衞【生歿】生年未詳。元祿三年（二三五〇）二月二十一日歿（潮音寺墓碑に據る）。【法名】釋寂退【墓所】三河國福江町潮音寺（但しもと潮音寺よりやゝ南方にあつたのを移したもの）【俳系】芭蕉門【閲歷】名古屋の富裕な米商であつた。芭蕉の愛弟子で、貞享元年の「冬の日」（別項）の五歌仙にも加はつて居り、尾張蕉風の開拓者の一人であつた。貞享二年頃、事に坐して三河伊良古崎の保美に蟄居した（空米相場のためとも、密貿易のためとも、蠱道のためとも云はれる）。初め畠村に來り、後に保美に移つたのであると云ふ（潮碑の記文に據る）。かくて姓名を變じて南彥左衞門と云ひ、野仁（野人とも、の人とも）と號した。芭蕉は貞享四年冬、越人を伴つて保美に杜國を尋ね、その不幸を慰めて吉野行脚を約し、翌元祿元年春、杜國の來り會したのを伴ひ、檜笠の裏に、共に「乾坤無住同行二人」と書し、杜國は戯れに萬菊丸（萬菊丸とも僞ふ）と稱し、吉野・高野の花に遊び、須磨・明石までへも供をした。この行脚中、芭蕉が「萬菊殿の圖」を畫いて戯れたりした。かくて杜國は保美へ歸り、元祿三年に歿したが、芭蕉はその翌年の「嵯峨日記」（別項）に、「夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺む」と云ひ、「覺めて又袂をしぼる」と云つてゐるほど、杜國の死を惜しんでゐる。支考は「葛の松原」に、「杜國は心ざしのおのこなるよし、阿叟も忌日おぼえ申されし」と云つてゐる。杜國の世話になつた越人は、「鵲尾冠」に「其角・杜國は一双の作者」と云つてゐるが、蕉風の圓熟期に入らずに歿したのであるから、輕率に評價は下し難い。



杜國短册
（芭蕉門人眞蹟）

【參考】笈之小文 松尾芭蕉○嵯峨日記 松尾芭蕉○葛の松原 各務支考○鵲尾冠 越智越人○冬扇一路 白井鳥醉○芭蕉翁全傳 川口竹人○枇杷園隨筆 井上士朗○蕉門諸生全傳 遠藤曰人○續俳家奇人談 竹内玄々一○俳林小傳 中村先久○芭蕉庵春秋 中島秋擧○俳諧人物便覽 三浦若海○杜國を中心として 藤岡賢風（ホトトギス大正一一ノ九）○流人杜國のこと 河本正義（ひむろ昭和三ノ五）（北田）

常夏草紙（とこなつさうし）　讀本　五卷【作者】曲亭馬琴【挿畫】勝川春亭【名稱】篇中人物

の名に因み、古歌より思ひついて人の一期盛衰の物語を作り、「常夏草紙」と名付けたとある。【刊行】文化七年【諸本】この版、文化の火に燒けて烏有となつた。明治九年獨逸人ピッツマイエルにより獨譯（Der Nelke der Kirgis）されてゐる。【題材】お夏清十郎の情話を緯にして綴つたものであるが、初めの三卷は「萬葉集」「古今集」「夫木和歌集」等の古歌に見える石竹の由來談を材とし、後の二卷は有名なお夏清十郎の情話に材を取り、因果關係を以て全體を結びつけてゐる。

【梗概】享祿の頃、武州多摩川の里に調布の長者と呼ばれる島田時主は、嘗て萩窪の野に横死してゐた稻城治部平の懐から三百兩を盗んだ報いで、妻瓦井、娘撫子が非業な死を遂げるので冥空と名を改めて出家する。然るに治部平を殺した藤坂春澄は親の仇を報いたのであるが、後誤まつて治部平の子補二郎を殺した。その後春澄は、主家再興のため亡命中の若君興稚丸を尋ねてゐる中、浪花にて偶然父治部平、兄補二郎の敵を尋ぬる修行者井島清十郎實は稻城瀬二郎と師弟の約をなし、娘お夏がその妻となつてゐることを知る。又冥空は瀬二郎を尋ねて旅に出で、計らずも天滿社頭で瀬二郎殺害の惡計を聞き、瀬二郎の刄に斃れて命を告げ、その罪を救ふ。お夏は父春澄のために救はれ、瀬二郎は扇谷家の舊臣で義理の伯父戸塚井下に救はれて主君の身代りになり、興稚丸は本領安堵の教書を賜はり、扇谷の管領職を相續する。

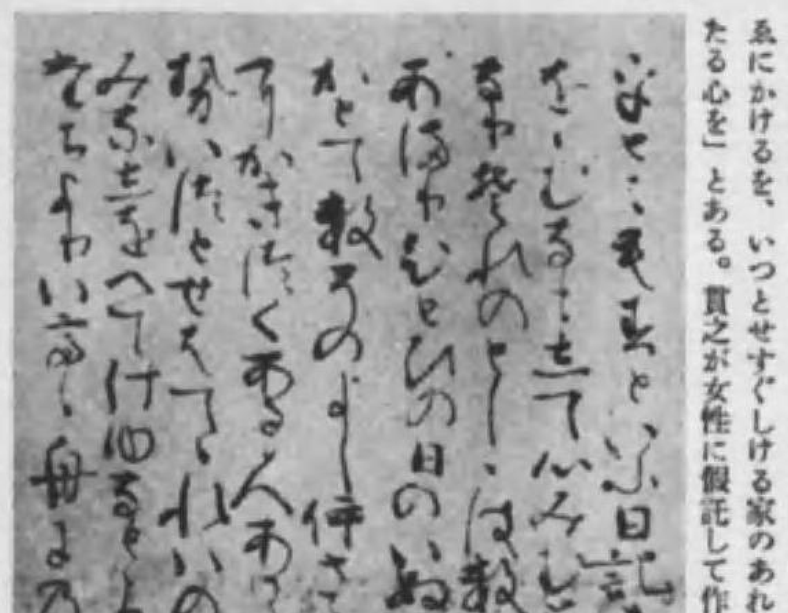
【解說】島田時主・藤坂春澄親子二代に亙つての因緣を語り、それを作者の文學上の要件である勸善懲惡に導き、或は惡徳惡漢を配して非佛教的精神を表はし、武士道的精神を代表する春澄・井下によつて、大團圓を遂げしめてゐる。もと淨瑠璃・歌舞伎で人口に膾炙してゐるお夏清十郎を主題にしたが、その情話が輕く取扱はれて、餘りに運命小說に偏した缺陷が見られる。併し事件が稻城治部平の横死に端を發してゐる筆法は、從來の敵討小說の型を破つてゐる。これは注目すべきもので、作者も本書中の自評に力說してゐる。（笹野）

常世國（とこよのくに）　神話　【名義】本居宣長は、常世に三義がある。常夜の義、恆久不變の義、常世國の義がこれである。常世國は底依國の意で、ただ絕遠き國を指すと解した（古事記傳）。飯田武鄕は底依說を否定して、常世は底世を意味し、而して底世は即ち放世の義で、放き隔りたる國土を指すとなしたが、共に首肯し難い。「とこ」が常恆・不變等の意であることは動かし難い。ただ「よ」の意味が時代の推移、文化の進展につれて幾變遷をした爲めに、常世國によつて象徵せらるゝ表象が、甚だ複雜多樣になつたのである。かくて古代日本民族の心に潛む常世國の觀念は、（一）常闇の國、（二）死の島、（三）異郷意識に滿ちた漠然たる遠國、（四）富と長壽との靈の國などに分化し展開してゐる。

【神話梗概】少彥名神が大國主命を輔けて國土の經營をなした後、熊野之御碕から、若しくは淡島に到つて粟の莖に彈かれて、常世郷に渡つた物語（日本書紀・伯耆國風土記）、御毛沼命が波の穗を踏んで、常世國に渡つた物語（古事記）、雄略天皇の二十二年春正月、丹波國餘社郡管川の人水江浦島子が舟に乘つて釣し、大龜の女に化したのに導かれて蓬萊山に行つた物語（日本書紀・萬葉集）、垂仁天皇の九十年春二月、田道間守が天皇の命を受けて常世國に非時香菓を採りに赴いた物語（古事記・日本書紀）などがある。

【參考】紕が國へ、常世へ　折口信夫（古代研究第一部）○古代生活の研究（常世の國）同上（「民俗學篇」の中）（松村）

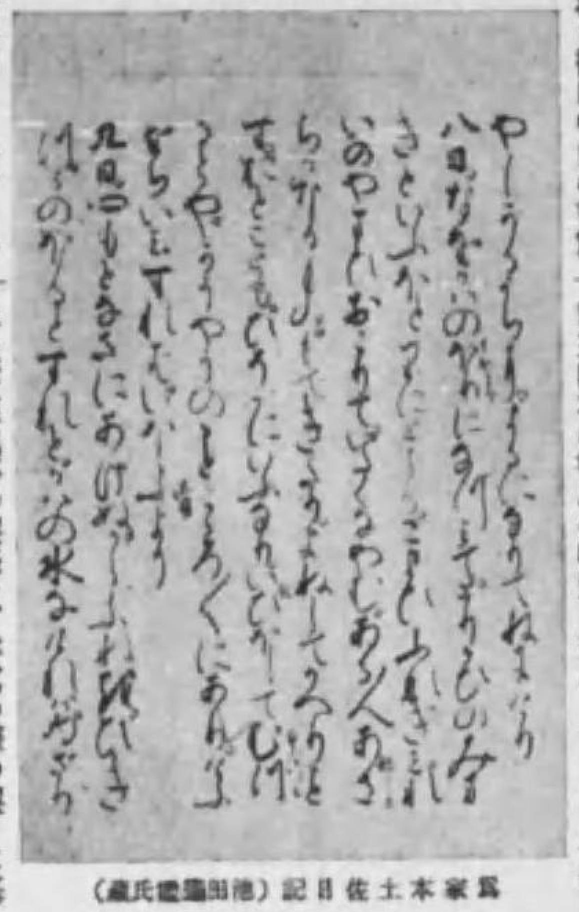
土佐日記（とさにつき）　日記　一卷　【作者】紀貫之。天曆五年撰の「後撰和歌集」には、明かに貫之の名をあげ、歌と共に詞書きへこの日記から取つたかの如くに見える。又前田家藏「惠慶集」中には、「つらゆきがときの日記をゑにかけるを、いつとせすぐしける家のあれたる心を」とある。貫之が女性に假託して作つたものと見て差支ないであらう。【名稱】古くは「とさのにき」と「の」の字を附してよんだものであらう。「土佐」の字は、「土左」ともあてられる（定家自筆本）。蓮華王院舊藏の紀氏の自筆本は、帖子本で、外題に「土左日記」とあつたらしい。土佐の國より、京に歸りのぼり來るまでの路次の記といふ意味であらう。



定家本土佐日記（前田家藏）

【成立】「紀貫之家集」に「延長八年土佐の國に下りて、承平五年京にのぼりて、左のおとどのしら川におはします御ともに云々」とある。承平五年とは歸京の年である。定家自筆本の奧に、「紀氏、延長八年任土左守、在國數五年六年之由、承平四甲午五乙未年事歟云々」とある。「袋草紙」にも「延喜八年正月任土佐守、即赴任、承平五年上洛之時云々」とある。但し延喜となすは誤りである。これ等によつて考ふれば、承平四年十二月二十一日土佐を發出し、翌五年二月十六日、京に至るまでの間の事を書いたのが「土佐日記」である。日記中に、「五とせ六とせのうちに千とせやすぎにけん」といふのは、赴任より歸京まで前後六年であるからである。この日記は、旅のつれづれに筆を執つた草稿を歸京後更に修正し、清書したものであらう。【諸本】前田侯爵家藏の定家自筆本の奧書によると、貫之自筆本はもと蓮華王院にをさめられてゐたらしい。併し今は傳はらない。前田家の定家自筆本は、六半本胡蝶裝の古雅な料紙に、一面九行或は十行に書かれてゐて、奧に、「文曆二年乙未五月十三日乙巳　老病中雖眼如盲不慮之外見紀氏自筆本（蓮華王院寶藏、料紙白紙不打、無界、高一尺一寸三分許、廣一尺七寸二分許紙也、二十六枚、無軸）、表紙續白紙一枚（端聊折返、不立竹、無紐）、有外題、土左日記貫之筆、其書樣和歌非別行、定行に書之、聊有闕字哥下無闕字、而書後詞、不堪感興自書寫之、所今二ケ日終功、桑門明靜」とあり、かつ貫之の筆蹟を人に知らしめんがた

めに、末尾數行を臨摹して「爲令知其手跡之體如形寫留之謀詐之輩以他手跡多稱其筆可謂奇怪」と云ひ、紀氏の略譜をかゝげ、「今年乙未歷三百一年紙不朽損其字又鮮明也、不讀得所々多只任本書也」とある。北村季吟の「土左日記抄」の本文は、この本によつたのである。定家自筆本を最も忠實に摸した本は德川中世以後多く傳へられ、由豆流の「考證」、御杖の「燈」にも參考せられてゐる。現存せる本では、天龍寺所藏本・彰考館藏本・高野辰之氏所藏本、その他數種あつて、いづれも德川中葉の書寫にかゝるものである。次に定家自筆本に對して、最も主なる異本の地位に立つものに群書類從所收本がある。この本は奧書に「本云、土佐日記以貫之自筆本（爲家卿御物累代之重寶也今度臨時給小河物所申出云々）依或人數寄深切所望書之、古代假名猶科蚪、末奥臨字有養偸哉、後見整察之而已、明應壬子仲秋候、亞槐藤原判」とある。亞槐藤原とは三條西實隆のことで、この本は奧書にも記せし如く、貫之自筆本によつたのである。この系統の本には寬永二十年刊本、萬治三年刊本の外に數種の寫本が存在し、就中天文年間の書寫本は、原本の面影を最も忠實に傳へるものらしい。次に妙壽院本は傳本きはめて稀れであるが、御杖が片假名書古寫本といふものをあげ、「この本季吟翁が注本に妙壽院本とあるにその奧書同じければ同本なるべし（中略）寬永五己巳神無月十五日武藏國江戶田安において書之とあり」と云ひ、季吟が「妙壽院貞名をもくはへ給ひし本侍云々」と云つたものである。現存せる妙壽院本中主なるものは狩谷圖書館所藏本・淺野圖書館所藏本・池田龜鑑藏本、その他二三存する。妙壽院本は前記亞槐本の系統であるが、亞槐本と定家本とは等しく貫之自筆本を書寫したと云はれるに拘はらず、內容に相違する所が少くない。何故にかゝる相違が生じたかにつき、橋純一氏は、定家が貫之の筆蹟を臨摹した部分の草假名百十五字を五十音圖に配當分類して、蓮華王院本の書風の特質を究め、そこから定家本及び亞槐本の親疏を、書寫の際の誤りに基づくのであると推定されたが、これは最近發見された天文本・宗綱自筆本等の異本研究の結論からも正しいことと思はれる。次に以上の三種の傳本の外に、爲家本がある。これは「考證」に引かれてゐるが、由豆流が「爲家卿の本は、おほかたは附注に同じ。されどいささかたがへる所見ゆるをば、みなもらさずかたへにあげつ」と云つてゐるやうに、人見卜幽の「土佐日記附注」の本文と大同小異のものであつたらしい。然るに「附注」の本文は、同



寫家本土佐日記（池田龜鑑氏藏）

書の凡例に「其間傳寫者惟多、故諸本字異矣、余適々見藤爲相卿手筆之本、以此爲據」とあつて、爲相筆本によつたのである。この爲相本と爲家本とは、ほぼ同樣のものと見てよからう。この二本は、共に定家自筆本とは少々本文を異にする。御杖は、爲相卿手書本の餘に、「その御すゑにして此本またそれと異る所あるは異本をえたまひて寫し給へりしにや」と云つてゐる。「燈」には、その外に中院也足軒手書本とて、慶長十二年の奧書ある本、長谷川菅牘所藏本とて、本居宣長所藏の古本その他の諸本によつて校合した本を用ひ、「考證」には、烏丸資慶卿自筆本、古寫本三本を用ひて校合してある。

【內容】「土佐日記」は、承平四年十二月二十一日土佐國を舟出し、海路の辛苦をなめ、翌五年二月十六日京にかへり着くまでの事を書いてある。由豆流は、「この日記のはじめに、をとこもすなる日記といふものを、女もして見んとてするなりとあるよりして、ことをうらへにいひて、ことばのあやをなせるをもて、もはら興としてはかゝれぬ」とて、作者の藝術的技巧をいたくほめてゐる。御杖は、貫之が女性に假託したる理由を、土佐守に任ぜられたるを深く恥ぢたるがためであるとなし、秋成は、「このぬしか此日記かける起本は京師より携へゆきし愛兒の任國にて死去せしをこたひふり捨かへるをいたくかなしむより也」と、妻子を悲しむが如きは丈夫たるもののあるまじき行爲と思ふから、特に女子に假託したのであると云つてゐる。御杖は秋成の說を難じて種々辨じてゐるが、要するに女性への假託といふことは、さして深い理由はなく、戲れて書いたものと見てよからう。由豆流は、「家々の記錄といへるものは、みな男のしるすわざにして、しかも漢字もてしるせれば、女のわざならず。されば男もすなる日記といふものを、女もして見んとて、とはことわれるなり。そをいま假名もてしるせるは、めゝしきわざなれば、わざと女のかけるさまにいひなしてかゝれつるにこそ」と云つてゐる。要するに、この日記著述の動機は、旅の苦しみと珍らしさ、亡兒を思ふ悲しみ、京にかへるうれしさといふやうな情趣が主になり、その情趣を包む輕いユーモアが從となつてゐるやうに思はれる。一說に唐の李翺の「來南錄」などを見て書いたものではないかとも云はれるが、必ずしもさうではあるまい。

【史的地位】「土佐日記」は、假名文をもつて書かれた日記の最初のものである。新國字たる假名をもつて表現された文章が、如何に自由便利であるかが、この日記によつて證據だてられた。その意味に於て、この日記は、平安時代の假名文による文學作品のさきがけをなしたものである。「土佐日記」の文學としての特質は、第一に漢文學の影響の非常に多いといふことである。これは惡い方には、觀照の態度を曇らせ、表現の上に類型的な濁りを著しくさせたが、良い方には、文章を簡潔ならしめ、含蓄を多からしめた。「土佐日記」の文章は、他の女流日記に比して記事の深刻味には劣る所があるが、修辭上の洗練には群を拔いてゐる。そこに作者貫之の文章家としての人格が反映してゐる。「土佐日記」は文學上の作品として重要なるのみならず、當時の交通・海賊・海神・民間土俗・民謠等、風俗史に關する資料でもあり、又文法・語法等にも、他に類書がないだけに、國語學上の參考ともなる。

【研究史】この日記の研究は、元和・寛永の頃から盛んになつたやうである。由豆流が諸抄論に於てあげた「土佐日記聞書」は、その最初のものである。小野山陸士榮榮と云へる人の「土佐日記見聞抄」は、年月がないから成立の時は不明である。人見卜幽の「土佐日記附註」は萬治四年の跋があるから、北村季吟の「土佐日記抄」と同年に成つたものであるらしい。そして「抄」は、「附註」の影響をいくらか受けてゐるやうに本居宣長は云つてゐるが、由豆流は、兩書に引用された和漢の古書の相違せざる點を指摘して、その然らざる由を辨じてゐる。寛永四年五月に刊行された「土佐日記首書」は、殆ど「抄」のまゝのものである。加藤宇萬伎は、契沖と眞淵との説をあはせ記した「土佐日記註」を書いた。又別に眞淵の説をしるした本に、上田秋成が序文を加へ、自らの説をあはせたのもある。又眞淵の説は、楫取魚彦によつて、別に書きしるされ、「土佐日記打聞」又は「聞書」となつた。「註」と「打聞」とに説の相違あるについて、由豆流は、「魚彦がしるせるは縣居翁のはやくの説、宇萬伎がしるせるは、後の説なるべし」と云つてゐる。次に岸本由豆流は「土左日記考證」(別項)をあらはして、諸抄を取捨選擇し、綿密な考證を試み、富士谷御杖は「土佐日記燈」(別項)を著はして、詳細な大研究を完成した。又香川景樹は、「土左日記創見」(別項)を著はして、綿密なる考説を試みた。「考證」「燈」「創見」は、「土佐日記」研究としては、後世に類のない大研究である。次に橘守部は「舟の直路」をものし、佐佐木弘綱は「土佐日記俚言解」を著はした。

【參考】土佐日記附註人見卜幽○土左日記抄北村季吟○土佐日記首書○土佐日記燈富士谷御杖○土佐日記註加藤宇萬伎○土左日記考證岸本由豆流○土佐日記打聞楫取魚彦○土佐日記舟の直路橘守部○土左日記創見香川景樹○土佐日記俚言解佐佐木弘綱○土佐日記註釋富田鐵一郎○參考譯註土佐日記讀本鈴木弘恭○標註校訂土佐日記増田于信○土佐日記講義三木五百枝○纂註土佐日記齋藤普春○定本土佐日記林榮臣○土佐日記講義石田道三郎○考異釋註土佐日記讀本井上頼文○土佐日記讀本落合直文○土佐日記地理考鶴島成行 (徳田)

土左日記考證 (とさにつきかうしよう) 註釋書 二卷

【著者】岸本由豆流【成立】著者の生前に校合したものを、その子が遺言により文化六年葉月より更に別本等を參照して校合したもの(卷首提要)。提要最後の日附は、文化十二年十一月七日となつてゐる。卷首に文政二年春二月、林饒の序と、同年四月、山本明清の序とをそへて版になつた。【内容】上卷の初めに、「提要」と題して、この日記に關する總説並びに、著述上の注意などを説明してゐる。即ち「土佐日記」は、貫之が土佐國の任はてて京に歸り上りし時の旅日記なること、日記は家々の記錄にて、男子が漢文をもつて記するものなれば、わざと女子に假託して假名をもつて記したりと云ひ、貫之が唐の李翺の「來南錄」の影響を受けしやも知れずと疑ひ、次いで諸本のことに及び、定家自筆本、季吟の「抄」「附註」等の本文は、寛永二十年風月宗智の刊行せし本の本文に劣ると思はるゝが故に、寛永刊本を底本とし、みだりに古寫本によつて本文を改むることをつゝしみ、「附註」「抄」「扶桑拾葉集」「群書類從」等の印本を先きにして校合せし由を述べ、眞名をば本文の左に附し、註は右に附して區別せしことを記し、次にこの日記を推稱して、文かゝん本にすべきはこの日記にしくはあらじと云ひ、同じ作者の「古今集」の序、大井河行幸和歌の序等に比して、日記は「伊勢物語」等と共に優秀なる作品なることを説き、女性に假託されたることを「もはら興として書かれぬ」といつてゐる。次に校合に用ひたる諸本、當時世に行はれたる諸抄について、「土佐日記聞書」「土佐日記見聞抄」「土佐日記附註」「土左日記抄」「土佐日記首書」「土佐日記註」「土佐日記打聞」等について、一々詳細に解説を加へた。そして本傳の條下に、貫之の傳記・系圖を示してゐる。さて本文は、先づ日記の文章を小節に切り、これを前にかゝげ、眞名を左に、註を右に記し、諸本をもつて詳細に校合し、註釋はその後に附してある。註は巧みに先人の説を集成折衷し、自らの新考を加へ、頭には標註を施し、出典故事について、和漢の書に亙つてすこぶる博引旁證を試みてゐる。標註には、宣長・眞淵・季吟・春海・秋成・土満・魚彦・契沖・昌夏等の説をあげてあるが、就中眞淵の説が最も多い。【價値】異本研究に於ても、本文批評に於ても、從來の研究に一歩を進めたものである。「土佐日記」註釋書中、最も注目すべき研究の一つである。併しながら故事出典の考證に急で、やゝ附會の説もない事はない。なほ「訂正增補土佐日記考證」(鈴木弘恭編、明治三十一年刊)は、「土左日記考證」の本文を、異本によつて訂正增補したものである。從つて日記の本文は「考證」所載の本文と著しく異るが、註釋は原本のまゝをあげ、所々增補してある。(徳田)

土左日記抄 (とさにつきせう) 註釋書 二卷

【著者】北村季吟【成立】下卷の卷末に「萬治四年二月十六日、拾穗軒季吟」とあり。寛文元年八月刊。出雲寺和泉掾藏版。この書と人見卜幽の「土佐日記附註」は同年に成立したるため、いづれか一方の影響を受けたであらうといふ推定につき、本居宣長は「附註」を先とし、岸本由豆流は、季吟が「附註」によらなかつたことを辨じてゐる。然るに新玉津島神社藏季吟自筆の日記に曰く、「寛文元年九月十一日、夜由敬、慈仙來て閑話、夜更けぬ。由敬いふ云々」の書出しで、由敬が季吟の子湖春の師なるによりて、「源松」「源語秘訣」等を見せたるに、卜幽は由敬の師であつたので、季吟の説を由敬より聞き知ることを得、已に板行後、誤りを正すこと七八十日を經て、改版後世に出でたのが「附註」なる由を詳細に記述してゐる。【解説】上卷の初めに、作者紀貫之の傳をのべ、「土佐日記」が貫之土佐國より歸り上りし旅日記であることを考證し、任國の事につきて説明し、題號のことに及び、最後に、底本としたのは定家自筆本を寫せる本であつて、これに妙壽院の眞名を加へ給ひし本を以て校合したことを附言してゐる。次に京極黄門奧書と題して、定家自筆本にあつた奧書と、妙壽院本奧書と題して妙壽院の本の奧書とをならべて記し、その次に、紀氏の系圖をかゝげ、紀氏に關する傳説をも附記してゐる。本文は、先づ日記の文章を小節にきり、これを最初に示し、二字下げて註を記してゐる。本文には妙壽院本を以て、可なり綿密な校合が加へてある。考證の不備な點もあるが大體は穩健な説であつて、「土佐日記」研究者の必ず一見すべき書である。因みに本書は、令首座南可和尚の盡力により、永谷三位を經て、後水尾院の叡覽に供した。寛文元年九月八日の日記に、「此本自筆にて上下卷あさぎの

表紙、外題土左日記之抄上下と友閑筆にて定家様にかけり。砂子の外題紙なり。桐の箱に入る」とある。(徳田)

土左日記創見 (とさにつきさうけん) 註釋書 五卷

【著者】香川景樹【成立】下之末の卷の終りに、「文政六年二月十六日住吉の浦勝間の里なる光明寺にありてしるし畢ぬ。景樹」とあり。一本の奧に「東塢晁識」とあり、「天保三年壬辰春發行」とある。又明治二十四年九月、大阪東區の圖書出版會社にて、「中空日記」とあはせ、活字本一冊として刊行された。【内容】この書は、上(本末)・下(本末)の四冊と、別に附錄一冊とから成る。上之本の卷首に、漢文の序と、平正毅の假名の序があり、次いで「小引」と題して、この日記の要領を概説してゐる。即ち「土佐日記は紀氏彼國の任解て、承平四年の冬歸洛の時に臨みて、鍾愛の女子を失れたる其歎きに堪かねて、ひそかに思ひをやり給へる書也」とて、單なる旅日記にあらず、愛見を思ふ憂愁のあまりて、この日記となれる事情をのべ、「よに奇しきまで、戲れ給へる更に外の故ならず、只これが爲にふんでを立かへて悲哀の情を盡されし物也」とて、貫之が諧謔を交へたる故は、ことさらに胸中の悲痛を慰めんためなりとなし、かくては女々しく、穉き所業と見ゆれば、女の書きたるやうに假託したのであると云つてゐる。次に、この日記が、文章簡雅、意味の玄微、はるかに古今序の上に出づる傑作であること、及びこの日記に、三つの要點のあることを説き、「此書の大むね、亡兒の悲みを主とし、下に海賊の恐りをふみ、是をかすむるに全文俳諧をもてす。此三つの大事を遺して、古來此日記を説來れるは、是を擯ひて冊を闕也。竟に其説たつ事なけん」と云つてゐる。次に、紀氏の年紀を考へ、彼の亡兒は六十八九歳の時の子なりとの奇説を出し、次に、諸本の事に及び、「此日記妙壽院本、附注本の抄本を本文注解ともに優れたりとす。譬へば諸本の訛謬五分ならんには、抄本は二分なるべし。此本故に是を本書とす」とて、季吟法印の「抄」を推稱し、「抄」が貫之自筆本の系統のものであると稱せらるゝも、古體の假名でなく、衍字脱文もあれば、原本紀氏自筆なりと云ふも、また疑ひを殘すべきであると云つてゐる。次に本文は、他の諸註の如く、日記本文を小節に分けて示し、次に校勘を試み、註釋を加へてゐる。校勘は、諸本の本文を比較し、文意・語調等によりて、主觀的に斷案を下す場合が多い。註釋は、語句・文法等に亙りて、他の諸説の及ばない新説が多く、創見の名にそむかないものである。附錄一卷は、諸家の説を批判し、自家の説をのべたもので、由豆流・純貞・季吟・宣長・眞淵・秋成等の説を檢討批判してゐる。【價値】近世の「土佐日記」研究として最後に出でたものである。諸註を集成批判し、新説を加へてゐるが、他の諸註が、語句の註解、故事の考證には詳細なれど、文意の批評・鑑賞といふ方面を等閑に附する傾向があつた。然るに景樹は、日記成立の内面的動機、日記を貫流する内面的精神に思ひを潜め、この見地に立つて、校勘・語句解釋・語法・文法に資する考説を試みた。從つてこの書は、客觀的なる考證學的研究に於ては、他の諸註に及ばない點が多いが、主觀的なる批判的研究に於ては、古今獨歩のものである。これは作家としての彼の個性の然らしめた所であらう。

【參考】國文學研究史野村八良 (徳田)

土佐日記燈 (とさにつきとう) 註釋書 八卷

【著者】富士谷御杖【成立】首卷の初め、大旨の條に、「文化十三年丙子三月廿一日、御杖識」とあり、卷尾に、「文化十四年丁丑五月二十日」とある。前者は起稿の年月であり、後者は脱稿の年月であらう。【諸本】自筆本所在不明。帝國圖書館に寫本を藏す。東京國光社出版の印本の奧に、御杖の男富士谷元廣の跋がある。それによれば、御杖の自筆本は、栗田の宮に奉り、弘化年間、宮の御本を拜借して書寫したれど、安政年間に失ひ、再び宮に乞ひ奉りしに、原本なし。やうやく城南の離宮に、日記のともしびを寫し持てる鳥羽なにがしと云へる人より借り受けて白川勝文の寫せる本を借りて書寫し、これを活字に印して發行したる由來を明かにしてある。【内容】卷頭に大旨を載せて「紀貫之家集」及び「袋草紙」の記事を引き、貫之が延長八年土佐國に下り、承平五年歸京せしことを論じ、日記制作の動機を、諧謔にあらずして憤りに在りとなし、「まことにはづとならば、かかざらむにまする事あらじかし。かれ思ふにこれ必ずふかきいきどほりありて、かゝれたる物なりとは明かなるなり」と云ひ、「續日本紀」「三代實錄」「日本後紀」等を引いて、土佐國が配流の地なること、「續日本紀」を引いて、土佐が伊豫國守管内の國なること、「拾芥抄」を引いて土佐が中遠の地なることを考證し、貫之ともあらん者が、かかる下級の國に任ぜられたることを深く恥ぢ、よりて、「この記女の所爲とし、年紀も記せられず、土佐といふことをもあらはにいはず、すべて女のしどけなきに書まぎらはし(中略)しかれどもいさゝかもあらはなる時はおほやけに憚あれば、たゞ心にこめてやみなんとおもはれつらめど、しのびがたさに此日記はなりぬるにこそ」と云つたのであるとなし、秋成が、著作の動機を、亡兒に對する愛情の情にありとなし、女々しき外聞を恥ぢて女子に假託せりと云ふ説を駁し、内憤激の情の燃ゆるあれども、外に憚りて女性に假託せりと斷じ、季吟が諧謔して女に託したりと云へる説をも極力反對した。そして例の直言・倒言の持論を引用し來り、この日記が倒言即ち比喩的暗示的表現によれることを稱揚し、かくてこそ公の御とがめもなかりしなりと云ひ、同じ作者の大井川行幸の時の序も「古今集」中の歌も、この日記に比しては雲泥死活の違ひありと云ひ、上代の祝詞宣命は文章の模範とすべきものなるに、この日記はこれ等に比して劣らずとて「おほかた言すくなにて、いさゝかかざりたるけなく、すくよかにて、句々語々つふつふとはなれたらむやうにて、一言一句も詞を直につけられざりける」と云つて、倒語の妙にかなへることを稱讚してゐる。次に校合せし諸本(定家卿手書傳寫本・片假名古寫本・中院也足軒手書本・古寫本・爲相卿手書本・長谷川菅應所藏本)の解説を附してゐる。そしてこれ等の諸本の校合にあたりては、然るべきを取り、私に然るべしと定むることをせず、諸本の異同を註記した。而して日記を釋するにあたつては、表と裏とを區別し、「裏とは、詞となりてのうへのくさぐさの理をとき、表とは、その詞のなりいでたる所以の義を説けるなり。おほかた歌も文もかく表裏をわきて釋せざれば、其義をつくすことあたはざるものなればなり」と云つた。これは彼が後年に著はした「萬葉集燈」に「言」と「靈」との二

部の註を立てたのと同じ見解に基く。本文は先づ日記の小節を前に示し、次に表裏に分ちて、詳密なる解釋を加へてゐる。併し時に表裏の觀念の混同から、牽强附會の見方をした所も少くない。廣く諸家の説を集成批判し、よきをとり、惡しきを捨て、別に一家言を加へるなど、用意周到である。諸家の説とは、季吟・眞淵・宣長・秋成・宇萬伎・菅榊・伴蒿蹊・横洲等の説で、父成章の志をついで、「挿頭抄」「脚結抄」等を引いて家學を紹述した。【價値】この書は、「土佐日記」研究書中最も大部のもので、詳密を極め、諸説をあまねく渉獵し、批判し、表面上の語義、裏面の含蓄を釋し、言外の寓義、餘韻又は語感を直觀せんと努めたるが如き、最近の文學研究法に近似したものがある。併し餘りに詮索にすぎ、獨斷に陷り、附會の見解多く、奇説も亦少くない。（徳田）

土佐少掾正勝 とさのせうじようまさかつ 「土佐節」を見よ。

土佐派 とさは

畫派【解説】平安朝以來の大和繪の傳統を繼承する一家系を中心とするもので、平安朝後期に在世した藤原基光に始まると傳へられ、以後その家系は連綿と江戸時代まで續いてゐるが、實は足利時代土佐派中興の祖と仰がるゝ光信より前は、甚だ漠然としてその家系を正確に摑ることが困難である。その土佐と稱するは、鎌倉初頭の經隆が土佐權守となつた爲めと云はれてゐるが、抑も經隆が土佐家の人であるか否かも實は明かでない。かくこの派の名稱や家系の由來は、足利以前は詳かでないが、この派の名によつて呼ばるゝ描寫樣式に至つては、要するに平安朝以來の大和繪樣式に外ならない。平安朝の大和繪は、元來唐畫に則つたもので、更にこれを日本風俗の描寫に適用し、從つて描法も著しく倭化せらるゝに至つて、その名に適はしき一樣式を釀成した。而してこれが平安朝末から鎌倉時代に亙つて流行した繪卷物の中に最も榮え、佛寺の間に流行した佛畫專門の繪佛師と相對して、宮廷貴族の間に勢力を得、宮廷の繪所預の職を世襲するに至つた。かくして家系の上にも樣式の上にもこの一派が確立されたのであつて、この機運は鎌倉末期以來のことと思はれる。光信の出現以後、一時繪所預は光信の婿狩野元信に移つて土佐派は衰頽に傾いたが、德川の初葉土佐光起出でてこれを再興して以來、江戸時代を通じてこの家系が存續したのである。（田中（一））

土佐節 とさぶし

淨瑠璃【名稱】流祖土佐少掾橘正勝の受領號による。【沿革】江戸の淨瑠璃として、最も有名な流派の一たるに拘らず、傳系に關しては、殆ど正確な所傳がない。土佐掾の本姓は「江戸節根元記」によると、片岡氏と傳へるが、內匠を稱し、虎之助をも稱した。名稱から見ると、寛永年中禰宜町に於て能を催した土佐とも交渉がないでもなからうが、寧ろ同時の「さつまたくみ」と直接關係があるかと想像される。普通、二代薩摩次郎右衞門の門人といはれるが、杉山丹後掾門説、薩摩外記系説その他もある。土佐節の盛時は寛文延寶の交であるが、元祿から享保度まで相當に歡迎された。葺屋町堺町に櫓を上げてゐたが、貞享年中は薩摩三郎兵衞座に現はれてゐる。貞享・元祿年代は、ワキ太夫として小太夫・庄太夫等が有名であつた。男を虎之助といひ、二代土佐掾を繼いだ。三代まで續いたが、寶曆頃には乞食の業となつたといふ。【曲節】傳系の不明なため、史的の解説は不可能であるが、現存する正本によると、謠曲や幸若や（各別項）放下僧節等を容れた外、薩摩節を本流としたらしい上に、當時の江戸に流行した諸淨瑠璃をも參酌した集成的の新淨瑠璃である。而も「俗を離れ風をたて聲は梁の塵をたゝしめ節は利休の茶杓よりもしをらしく」と謂はれて、薩摩流から出たとしても、かなり杉山流に接してゐたかと察せられる。風雅

土佐節正本「高尾さんげ」

は婉曲であるが、而も艶弱ならず、近松に見るやうな美文ではないが、當代の江戸の淨瑠璃中、最も異色のものである。正本には、寛文・延寶年代の刊本は、繪入細字本で幼童の讀み物であつたが、寶永年代に入つて節章を附けた稽古本が盛んに行はれた。享保度には又繪入細字の小本が現はれた。寶永年度の刊本に載せられた目錄によると、次の五十四曲が見られる。

酒顚童子・風流和田酒盛・名護屋山三・賢屋文正・現在松風・大職冠二代玉取・新撰紅葉狩・御濯川・艶色隅小町・光源氏袖鏡・禰綾物語・源氏十二段・當世源雪・隅大臣・頼朝遊覽物・定家・土佐日記・一の谷八島・和國女屋間尺・中綿頭・三世二河白道・大塔宮熊野落・小野道風記・遊女源平全盛頼・蟬丸・周防内侍美人鏡・源氏花鳥大全・京四條おくに歌舞妓・殿鶴髪被鏡・艶色高安頼政・博多露左衞門色傳授・寛潮高陽春・逢坂源氏・源氏六條通・補源氏・柏木右衞門・恭平歸・芳野内裏・繁月十二段・相生源氏・對面源氏・牧狩曾我・東海道兵庫・發光・通俗傾城三國志・續三國志・平假名大全・鈴鹿山大嶽丸・今川かづら・花月十二段・末廣草源氏・關小町・一心二河白道・世繼曾我。

但し以上の組合せには多少の出入がある。これ等は江戸小傳馬町の木下甚右衞門が斯流を好む所から謠曲をも傳へ、版行させたものと見える。當時の流行曲であるが、この他にも「をぐりの判官」や「壽光寺」等、現存する數曲がある。各曲の初演年代は更に知る由もないが、「源氏十二段」の如き古曲や「賢屋文正」や「和田酒盛」の如き、お伽草子・舞の本から題材の士がよくこの流を愛したと傳へるのも、この故であらう。それ等の人のために、道行・景事等が稽古本として幾多版行されたが、又これを集めたものも出た。「色竹蘭曲集」などもある。なほ人形は一人遣で足はなく、遣ひ手は手摺の下から人形ばかりを見せた。淨瑠璃の間々には間の狂言を見せてゐた。【詞章】すべて六段組の形式に組まれて、文章

を仰ぎ、幼稚な翻案によつて脚色したと見られる類は、初期の興行に屬するであらうが、それ等の中にも、「中將姫」や「大職冠」に至つては多少なりとも戲曲的自覺を發見する事ができる。「八幡太郎」はこれ等の方面での名作に屬する。抒情的要素を以て成功した作に、「現在松風」があり、失敗の作に「土佐日記」がある。別に斯流として特殊な展開の認められるのは、時勢相を取材した點にある。「名護屋山三」や「京四條おくに歌舞妓」の類がこれである。その綺麗な題材としては、「通俗傾城三國志」と「博多露左衞門色傳授」が見られるが、これ等は戲曲的構想によらずして、寧ろ遊里の實相を記したもので、讀物として浮世草子に接近してゐる。併しかくの如く、時代に世話に、廣く大膽に脚色の範圍を活用した態度は、淨瑠璃界に嘗て發見されなかつた所である。而して「花鳥大全」の如きは時代世話の脚色に成功した傑作と思はれる。調章作者については全く所傳がない。【價値】江戸時代に入つてからは、淨瑠璃は先づ江戸に興隆したが、始祖的地位を占めた薩摩淨雲（別項）の名聲に次いでは、金平淨瑠璃（別項）の櫻井丹波掾が剛勇の曲節を以て一時期を劃した外、幾多の流派が並び行はれたが、消長絶えぬ中に、最後的奮鬪を試みて江戸淨瑠璃のために有終の美を濟したのが、土佐節であつた。當時から以後に亙つては、淨瑠璃は上方に於て流行したので、事實上、江戸の最後の淨瑠璃であつた。このために、曲節に調章に大成者としての功も多く、新淨瑠璃としての意義も深い。それ等の價値は、直ちに當代の江戸歌舞伎へ多くの脚色を指示し、又上方淨瑠璃へ題材の提供も尠くないのである。近松の作にも本流からの敎示が、相當にあると思はれる。

【參考】解曲類纂 音曲叢書 月卷 ○繪入淨瑠璃史 水谷不倒 ○あづま物がたり○色音論○本朝古雅志 細川如草 ○野郎三座詫○江戸鹿子○江戸（守隨）

戸澤姑射 とざはこや

飜譯家【本名】正保【閲歴】明治六年六月六日、水戸市上市長町に生る。父は菊池庸、母は筆子、兄は菊池幽芳、姑射は二男であるが、十四歳で親戚戸澤正之の養子となつた。水戸中學・第一高等學校を經、明治三十二年、東京帝大文科（英文科）卒業。同窓には彼の仕事の協力者たる淺野馮虛（別項）がゐた。卒業後、更に大學院に入つて英文學を專攻したが、三十四年、舊山口高等學校教授に任命、教職にあること五年。三十八年、辭して東京に歸つた。この間、馮虛と協力して「沙翁全集」の飜譯を企て、沙翁の名篇十卷まで譯刊した。その譯出の苦心、語學的忠實、譯文の暢達の點で、今日なほ推賞に値するものがあらう。四十年再び教壇の人となり、第五高等學校教授に任ぜられてからは、專ら教育界の人となり、後、再び山口高等學校教授に轉じ、昭和四年弘前高等學校長となり、現在は東京外國語學校長である。【譯著】「愛と心」。沙翁全集中の「ハムレット」「オセロ」「リヤ王」「ロメオ」「シーザア」「から騷ぎ」「行違ひ物語」。小泉八雲全集中の「東の國から」「心」などがある。彼は又美文をよくし、大學在學中から帝國文學その他に寄稿家として有名であつた。その尤なるもの數篇は、「白露集」（馮虛・天風との合著、新聲社刊）に收められてゐる。（勝田（泉））

新年祭 としごひのまつり

神道【名義】「きねんさい」とも讀む。毎年二月に於て、年穀の豐熟を祈る祭儀である。「令義解」に「祈と謂ふは猶禱の如し。歲災作らず、時令順度ならしめんと欲す。卽ち神祇官に於て之れを祭る。故に祈年と曰ふ」とある。蓋し農業立國の我が國に於ては、神嘗・新嘗などと共に重要なる祭祀の一である。【起原】新年祭の起原は、いづれの頃なるかは明確でない。或は天武天皇四年二月に起つたと云ふも明かでない。或は支那の文物と共に傳來したのだと云ふも、事實とは云へない。勿論祭の儀式などには、學んだ所があるのは認められる。【儀式】この祭には、祭日より前に、所要の調度を備へ、祭日には早朝神祇官の齋院に、これ等のものを案上案下に置き、關係の諸員定めの位置に就いた時に、中臣は新年祭の祝詞を宣り、忌部は神祇伯の命によつて幣帛を頒ち、以てその儀を終るのである。【奉幣】この頒ちたる幣帛は、伊勢神宮へは勅使をして奉らしめられるのであるが、その他へは「集はれる祝」どもに持ち歸らしめられるので、延喜の時代にても已に不參のものが生じ、或は幣物を受けても、これを私したりして、その弊甚だしきものがあつたが、後世皇室の式微と共に、この祭儀も益々衰へ、應仁亂後全く行はれなくなつた。明治二年に至りて復興せられ、爾後種々の變遷を經て、今日では、官國幣社は勿論その他の神社にありても、嚴に行はるゝこととなつた。【參考】貞觀儀式○延喜式○祝詞考○祝詞講義○祝詞新講○神祇辭典（田中（義））

年並草 としなみぐさ

歌文集 二十卷十九冊【作者】似雲【成立】作者三十八歲（寶永七年）より七十六歲（寛延元年）に及ぶ約四十年間の年序的歌文。【諸本】寛延二年作者自ら全卷を整理し、これを西行の菩提寺和泉の弘川寺に奉納した。その原本は、元文四年似雲の在世中、火災のため一部燒けたから、更に補寫して再納したとある。なほ別の一本を、その殁後、同國鷲尾の北村家に遺した。その行方は不詳。今、北村家本の轉寫（文政五年）が、內閣文庫に傳はつてゐる。刊本は未見。【內容】全二十卷ほぼ年序に依つてゐるが、卷十より卷十四までの五卷、及び卷十七・二十の二卷、併せて七卷だけ別編されてゐる。〔卷十・十一〕十百首集で、作者が享保十五年石山寺に奉納したもの。武者小路實陰の「和歌の浦のなみにもあらぬかず〳〵に磨ける玉の光をぞ見る」と云ふ讚がついてゐる。〔卷十二・十三〕特に「窓の曙」と題簽がついて、今獨立した傳本も別に存してゐる。享保十五年十月その草庵を出發し、東海道を下り三島に越年の上、二月江戸に着し、更に奧羽に旅立つて、仙臺・松島と巡錫、江戸に三月二十六日に歸着、暫く滯在の上歸庵した折の紀行である。〔卷十四〕享保十八年十月上旬、實陰の跋を貰つて例の石山寺に奉納した寄歌述懷歌。石山寺は似雲の信仰厚かつた寺で、晩年は毎年のやうに參籠してゐる。〔卷十七〕元文四年の百首兩度、寛保元年の百首及び延享元年七月葛城に參籠して詠んだ葛城山居百首、都合四百首を編んだもの。〔卷二十〕には「思出草」といふ別題がついてゐる。全卷の結びとして書かれたものらしく、懷舊及び思出歌約四十首等を主眼として、人事感想が澤山記述されてゐる。次に特錄外の年序を列記して見ると、卷一（寶永七年二月―享保七年十二月。但し享保七年に屬する歌は僅か二十七首に過

ぎや、巻四の補入かと思はれる)、巻二(享保六年九月―同十月)、巻三(享保七年春―七月)、巻四(享保七年七月―同十月)、巻五(享保八年三月―同十月)、巻六(享保九年春―同十年八月)、巻七(享保十一年三月―九月)、巻八(享保十二年春―同十四年九月)、巻九(享保十五年正月―同十八年九月)、巻十五(享保十九年二月―元文元年十一月)、巻十六(元文二年正月―同四年十二月)、巻十八(元文五年四月―延享元年九月)、巻十九(延享二年二月―寛延元年九月)。この間、郷里廣島に享保四年、同十年、延享三年の三度歸つたその時の紀行、享保七年の富士見紀行、享保六年、同十一年その他數回に亙つた伊勢參宮紀行が、紀行中主なるものとして目立つてゐるが、「盆石記」(巻九)「種花記」(巻十八)「三寶院記」「鬮林拾葉跋」等の獨立した特殊の章句も混じてゐる。一般に歌日記と見るよりも紀行隨筆感想集と云ふべき性質のもの。巻八・十五・十六の如き歌集の體裁を具へてゐるのは寧ろその中で異例である。例へば巻三を繙くと、愛慾の道の畏るべきことを說いた後に虻の說が出て來る。更に客幽接の心得を述べると云ふ風で、一種の道學者的風味は、漸次後に至るほど濃厚の度を增してゐる。ともあれ、近畿を四十年間と云ふもの殆ど足跡餘すなく歩いてゐるところ、全巻の内容に、大きい變化を與へてゐると言つてよい。石山・須磨・高野の外、晩年は多く河内・大和の間を往來した。西行の足跡を逐うて止錫した點も明瞭で、吉野にも庵居してゐたことがある。一乘院宮の殊遇をうけ、その歌會などに招かれたことも、巻十六以後に出てゐる。【價値】紀行文として見る時、その文辭、芭蕉のものに比して遙に劣り、表現に高い格調と浅麗の抒情味が缺けてゐる。併し西行憧憬者の僞はりなき單純無技巧の自己表現として、そこに却つて素樸な妙趣が感ぜられる。亡母の幼友達であつた松貞尼の跡を訪ひ、その二人の弟子と母に關する懷舊にくれる一條(巻二)、高野籠りして煩惱の影拂へども拂ひかね、「佛前に向ひ禮拜するほどだに散亂やむ時なし。いかにせば寂靜ならむ」と、自己苛責に泣く一條(巻五)、「我は是本、隱者にあらず、遁心にあらず、疎懶第一の放逸人」と、道士的態度に嘯く一條(巻三)、又亡父の忌日には、父出家の時の詠三十一文字を頭にして三十一首詠をなすなど、孝養厚い志を示す條々等(巻六その他)、いかにも讀み來り讀み去ると、釋似雲の僞の影響として厭びあがるのを否めない。そしてその中には、西行あり芭蕉あつて、まことに國文學の主流を思はせるに足るものが尠くない。彼も弱々しい人間の一人であつたらしい。「振りすてぬ心なりけりすゞか山うき世をよその身のたぐひにて」それは僞りのない赤裸の表現であつたであらう。「跡とひて今年もこゝにきさらぎや文袖ぬらす望月の頃」とは、弘川寺に西行の古墳を發見した翌年詠んだ歌である。これまで本書の傳本乏しく、世の顧るもの少いのは遺憾と言はねばならぬ。　(齋藤(清))

俊成 としなり　「俊成」を見よ。

都氏文集 としぶんしふ　文集　六巻(現存三巻)

【著者】都良香【成立】明かでない。「三代實錄」巻三十五、元慶三年二月二十五日乙酉の條に、「都氏文集六巻云々」と見えるが、その中、巻一・二・六は散佚してしまつた。文中、巻四の狀五に、請以所帶内記職讓與踈才二者狀の末に、元慶三年二月一日と記してゐる。然るに良香は同年二月二十五日四十六歳で歿した。思ふに「都氏文集」六巻は良香の歿後、門弟等の類聚して編したものと思はれる。恐らく元慶三・四年の頃の成立であらう。【諸本】群書類從本(一二九)以外に異本と見るべきものはない。彰考館本は「都氏文集補遺跋」と合綴してゐるが、類從本と異同は殆どない。同系の本で文字に二三の出入があるに過ぎない。又補遺は、次の目次だけがある。論奏(停三多朝島、大極奏)、序(早春侍宴賦陽春詩序・賀藤原良子初學周易詩序・賀四皇子始受[illegible]詩序)、記(富士山記)、傳(道場法師傳)、對策(神仙・春澄朝臣善繩・[illegible])、[illegible]、雜著(早春・雪・晴霜・山家・田家・[illegible]・早春・春興・冰・餞別・[illegible])。右のうち、論奏は、「類聚三代格」巻五太政官奏にも「朝野群載」巻六太政官の論奏にも見えてゐる。小野朝臣岑守の名になつてゐるが、「朝野群載」には作者都良香と記して、良香の作たることは明かである。序は、「本朝文粹」所載の第四皇子云云は「扶桑集」にも見える。また早春云云は「本朝文粹」巻八詩序の時節の部に、聽源皇子云云、第四皇子云云は共に巻九詩序の論文の部に載せてある。記は群書類從一三五及び「本朝文粹」巻十二に、傳は「本朝文粹」巻十二に見えてゐる。【內容】巻三は賦・論・序・銘・讚・表とあるが、本文中には序が載つてゐない。賦三のうち、一橋賦は諸本共に缺けてゐるから現存するものは二、論一、銘六、讚七、表十である。巻四は詔書・勅書・勅符・牒・狀であり、詔書五、勅書九、勅符五、牒一、狀九。巻五は對策・策問・策判・省試詩判で、對策二、策問八、策判(評定)四、省試詩判(文章生の詩の評定)二であるが、缺漏を有する殘巻であらう。【價値】當時の文體を見ると共に、策判や省試詩判の事情を知る點は興味がある。(良香參照)

【參考】扶桑集○朝野群載○本朝文粹　(山岸)

利保 としやす　歌人・歌學者【姓】前田氏【號】清濂・在樹・辨物舍・萬香亭【生歿】寛政十二年に生れ、安政六年(二五一九)に歿す。享年六十。【家】龍澤【閲歷】天保六年(三十六歳)家督を相續し、越中國富山の城主となつた。人材を登用し、文武を振興し、殖産興業に努め、明君として知られた。和漢の學を初め、禿齋・蘭學にも通じ、本草學は筑前の城主黑田樂善と共に名高く、領國の千歳園には、雜多な藥草を植ゑて研究に資し、「本草通串」の大著述の編纂をした。歌人としては幼時冷泉家の歌風を學び、長ずるに及んで富士谷家の門に入り、次いで海野幸典を師とし、のち一家を成した。【著書】和歌の德○和歌の本義○贈答新式○歌道天地辨○時運の差異○近○むかひごと道行編○題詠のこと○山彥傳○活用雅俗風調の辨○古今集大論○古今和歌集夜話○國のすて草○歌判記聽○詞の大綱○綱の綱手○手綵の絲まき○國頌專門○國頌專門言葉々○玩辭象○龍澤公歌道隨筆○清濂集。【業績】利保は歌學を廣く學び、多くの歌學書を著はしてゐる。それ等は概して、師說を素直に受け繼いでゐるものである。例へば、初期の著述と思はれる「和歌の德」の中では、堂上家の說を傳へ、安政四年、死去に先立つこと二年前に成つた「時運の差異」の中では、富士谷家・鷹庵・幸典等の師家の論を繼承してゐる。が、利保の歌論の中で、とりわけ重きをなしてゐるのは、幸典を通して學んだ「ただごと派」の歌論のやうである。しかし利保の歌論の獨自性は、ただごと派の歌論の眞髓と易の原理とを結びつけるに至つたところにある。「國頌專門」「國頌專門言葉々」「玩辭象」は、さうした歌論のあらはれである。他に利保は幸典の文法學をも承け繼いで、この方面の著述をもしてゐる。彼は又、藩士の歌の添削をしたり、歌學の講義をしたりして、歌のつどひの名を鳳凰莛と稱してゐた。詠草十一巻は弘化三年(四十六歳)より死に至るまで、十五年間に成つた作品である。明治二十八年、二巻に纏められ、「清濂集」と題された。　(福田)

敏行 としゆき　歌人(三十六歌仙の一)【姓】藤原【歿年】「古今集目錄」に「延喜七年卒、家傳云昌泰四年(延喜元年)卒」とあるが「古今集」巻十六に、友則がその死を悼む歌があり、友則は延喜五年に歿してゐるから、昌泰四年(一五六一)をとるべきか。【家系】富士麿の子にして伊衡の父。母は紀名虎女(隆年分脈による)。【閲歷】貞觀八年少内記に任じ、十五年從五位下に叙し、官は大内記・藏人・出羽介・中務少輔・太宰大貳・圖書頭・右兵衞佐・左近衞少將・備前權介(後に介)・權中將・春宮大進(後に權亮・亮)・藏人頭を歷任し、從四位下に進んだが、寬平八年、病によつて藏人頭を辭し、九年近江權守・右兵衞督に任じて從四位上に陞つた(以上古今集目錄)。「後撰集」巻十六に、病んで近江の關寺に籠つたとあるのは、藏人頭を辭した時か。「古今集」巻五の古註に、未だ殿上を許されてゐなかつたが、歌人たるの故を以て召上げられたとあり、同巻二十に、寬平元年賀茂の臨時の祭に作つた歌があり、その他寬平御時后宮歌合、惟貞親王家の歌合の作者であることも分る。書道にも通じてゐた如く、「江談抄」三に、村上天皇が道風を召して古の上手をお尋ねになつたとき、空海・敏行とお答へしたとあり、「宇治拾遺物語」八に、人に賴まれて法華經を二百部も書寫したが、身を愼しまなかつた爲め、冥府の功德によつて極樂に行けるものが地獄に行つたので、その恨によつて敏行をとり殺して地獄に陷れた。敏行は未だ四巻經を寫してゐないとの理由で赦され蘇生したが、なほ身を愼しまず、四巻經も書寫しなかつたので死し、友則の夢に現はれて四巻經書寫の事を賴んだとあつて傳說化されてゐる。「古今集」巻十三に業平の家にゐる女に逢つた歌、巻十四に業平が女に代つて詠んだ歌があり、「後撰集」巻一に、二條后宮にて白い大桂を賜はつたとある。【作品】勅撰集に入る歌は古今集十八首、後撰集四首、その他見そ六首あり、大部分は家集「敏行朝臣集」(別項)に收められてゐる。【批評】主觀を力強く詠む點に特色があるが、貫之の理想に適するには餘りに實が多かつたかも知れない。公任は歌仙のうちに入れてはゐるが、「金玉集」「十五番歌合」には入れてゐない。

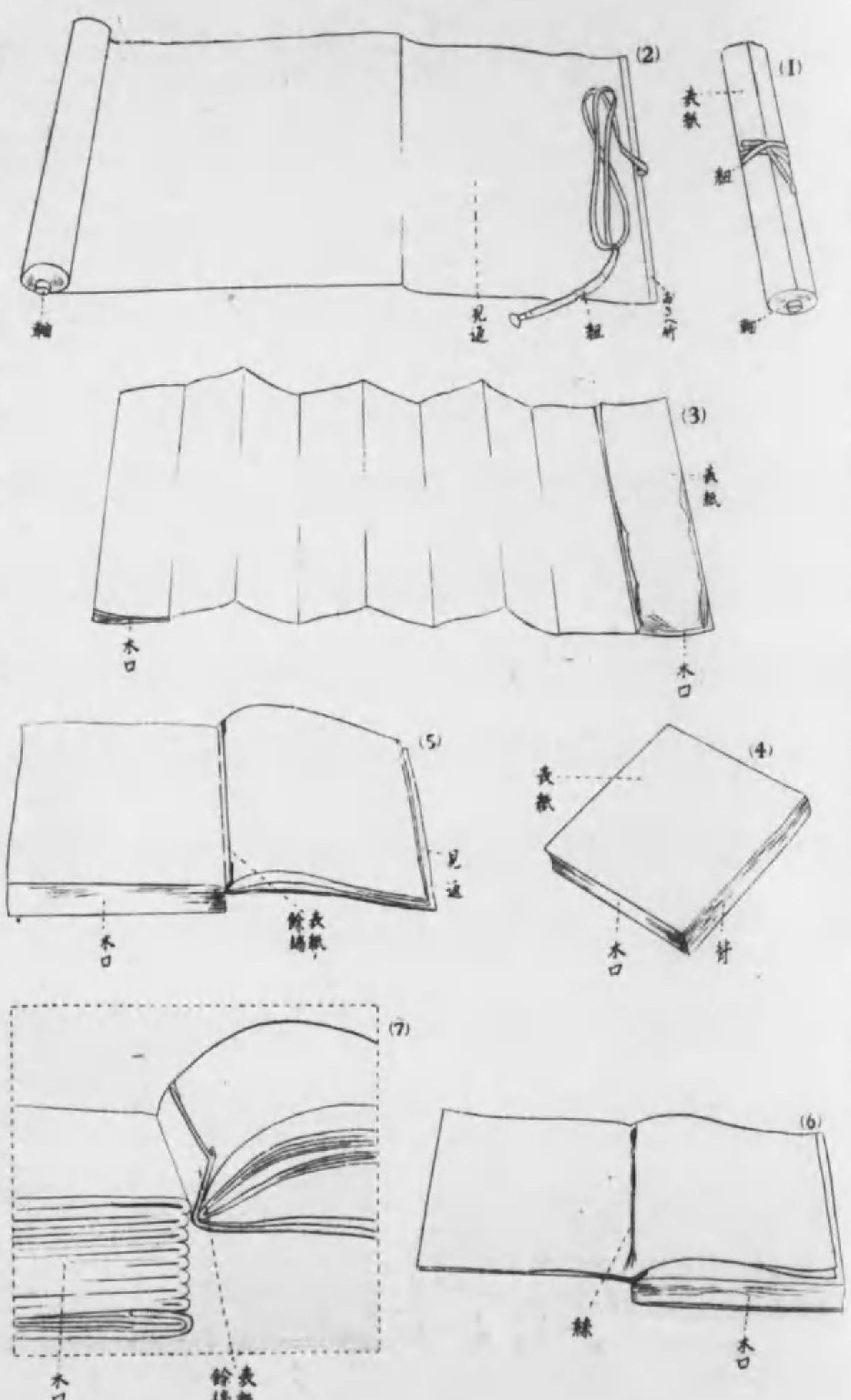
【參考】古今集目錄○歌仙傳○大日本史巻一四〇○宇治拾遺物語○江談抄　(西下)

敏行朝臣集 としゆきあそんしふ　歌集　一巻

【作者】藤原敏行【別名】「敏行集」【解說】群書類從二四八所載本は、歌の數が二十四首あり、歌仙歌集本は二十首ある。後者に缺けてゐるもの五首は、その内二首は他人の歌であることがわかり、前者に缺けてゐるもの一首は返しにて他人の歌であるから、敏行の歌としては二十二首となる。この内「古今集」に見える歌十八首はその内十七首が本集に見えるが、「住のえの岸による波」は見えない。これは「古今集」に於て同じく敏行の歌「經ひわびて云々」の次にあるので、見落されたものか。「後撰集」に見える歌四首はすべて含まれてゐる。「古今」「後撰」合せて二十一首は、本集の大部分であるから、本集も兩集その他から拾ひ集めたものであらう。　(西下)

圖書 としよ　書誌學【異名】ふみ・本・書・書籍・書冊・冊子・典籍・竹帛・方冊・書冊・書帙・書典・書志・書竹・書史・方策・書策【名義】「圖書」は河圖洛書の略。易繫辭傳「河出圖洛出書」から出た。「ふみ」は漢語ブン又はフン(文)の轉訛であらう。竹帛は、古への圖書の材料となつたもの。冊・策は簡(竹のふだ)を編んだもので、古の圖書がさうであつたからいふ。【解說】紙又はその類似品に、文字又は繪畫等を書寫又は印刷したものを、或る形に綴つたものを稱し、稀には綴らざるものもこれを稱すると定義し得る。卽ち普通の綴つた書物以外、圖表の如き綴らざるもの又古くは卷物の如きものも右の定義の中に含ませ得る。文字があつても、金石に刻したものは、この內に入らない。【種類】(甲)形態による分類と、(乙)內容による分類とがある。前者は圖書の物質的要素に基づくもの、後者は圖書に記載せる事柄によるものである。(甲)には、また二種の別がある。(一)裝本(裝幀)の形式から分類するもの、(二)文字又は圖畫をどんな方法で圖書の中にあらはしたかといふ點から分類するものである。今、(甲の一)裝本の形式から分類すれば、日本及び支那の普通の圖書は、圖表の如き綴らないものを除けば、(1)卷子本(別項)(紙を横に繼いで卷いたもの。讀む時は披ゆる)、(2)折本(別項)又は摺本(紙を横に繼いで、適宜の大きさに折り重ねたもの。讀む時は、一折ずつ開いて行く。旋風葉(別項)はこの變種と見るべきである)、(3)册子本(別項)又は葉子本(紙を重ねて、その一方を糊又は絲で綴合したもの。讀む時は一枚づつ開いて行く。この中に、粘葉・胡蝶裝・袋綴(各別項)等の種類がある)の三つになる。(甲の二)文字又は繪や圖をあらはす方法の相違によつて分てば、(1)寫本(別項)(筆を以て書いたもの)、(2)刊本(別項)又は版本(印刷したもの。その印刷方法の相違によつて、整版本・活字本・銅版本・石印本等の區別を生ずる)となる。(乙)內容によつて分類すれば、天文・地理・歷史・文學・語學以下多くの種類に分ち、その下に更にいくつかの部にわかつことが出來る。以上の外、その圖書の成立・筆寫又は刊行の年代や場所により、又刊行者により、繪畫の有無により、著者の自筆本又は原刻本であるか或は傳寫本又は複刻本であるかにより、又稀覯であつて、容易に得難いものであるか否かにより、その他種々の見方からいろいろに分類することが出來る。以上は、理論上あり得べき種々の分類法であるが、實地の上から、日本に存する古書を取扱ふに、便利な分類法の一として私案を擧げれば、

第一類　古文書(一)原本、(二)摹本及び寫眞製。
第二類　古經類(一)寫經、(二)版經。
第三類　古寫本(佛經以外のもの)(一)日本古寫本(朝鮮を含む)、(二)支那古寫本。
第四類　稀覯新寫本(新しい寫本で、原本が滅びて、價値が生じたもの)(一)日本(朝鮮)、(二)支那。
第五類　名家手澤本(名家の手を經た本)(一)名家自筆本、(二)名家抄寫本、(三)名家書入本、(四)名家舊藏本。
第六類　古版本(一)日本版本(1、古活字版本、2、整版本、3、朝鮮版本、4、[illegible])(二)支那版本(時代別)。
第七類　繪畫本(一)冊子本(草子)、(二)畫子及



(1) 卷子本　卷いた所
(2) 卷子本　初めの部分を開いた所
(3) 折本　開いた所
(4) 胡蝶裝　全形
(5) 胡蝶裝　第一折と第二折との間を開いた所
(6) 胡蝶裝　最後の折を中央から開いた所
(7) 胡蝶裝　(5)の綴目の部分の擴大圖

び帖子本（冩・刊）、（三）摺物本（冩・刊）。
第八類　名家筆蹟（一）手鑑（名家の筆蹟を集めたもの）、（二）色紙・短册・懐紙・詠草等（但しそのまゝでなく帖又は卷に装幀せられたもの）、（三）書簡（同前）、（四）臨本（名家の筆蹟を臨写したもの）、（五）摹冩本（名家の筆蹟を摹冩したもの）、（六）集刻本。
第九類　拓本（一）金石文拓本、（二）法帖、（三）印譜、（四）[illegible]譜。
第十類　札子類、寫眞帖類。

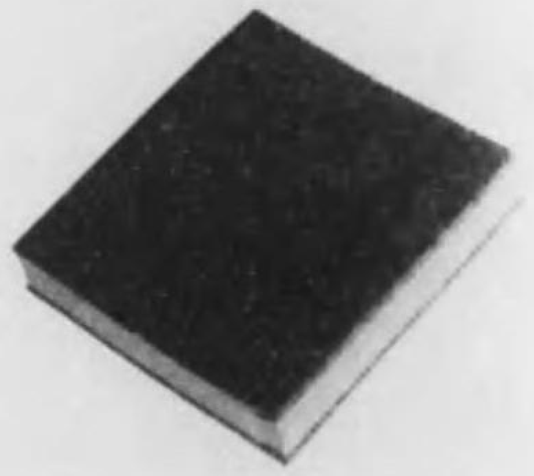
以上十類に分つ時は、現存の本邦古書は殆ど網羅し得る。古文書を圖書の中に加へる事については異議もあらうが、姑く加へておく。

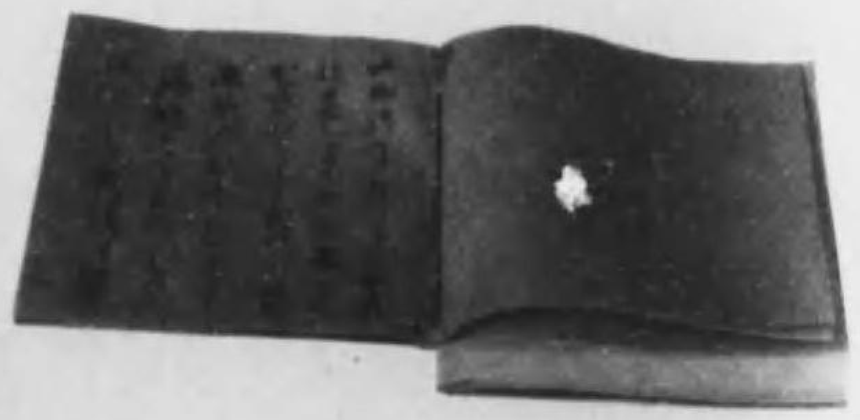
以上の外、圖書の形狀や目的から名づけた特殊の名目がある。冊子本は、縱が長く横が短いのを常とする故、縱に比して横が長いのを「横本」と云ひ、縱横が大體同じほどであるものを「枡形本」と云ふ。攜帶に便ずるために、特別に小形にしたものを袖珍本・豆本といふ。支那でこれを巾箱本又は馬上本などいふ。雛飾りに使用する非常に小形のものを雛本と云ひ、婚嫁する婦女の携へ行く美装本（國文學書が多い）を嫁入本といふ。美濃紙半截ほどの大きさで、紙數の非常に多い横本を枕本といふのは、枕として使用するに適當な形であるからである。なほ圖書の性質の上から名づけた特殊の名目としては、師匠その他權威者の校閲を經た、典據とするに足るべきものを證本と云ひ（後にはこれを正本とも書いた。淨瑠璃の正本もこれである）、漢文に、その訓讀を示す返點や假名を附したものを加點本・附點本・訓點本又は點本と云ひ、これに對して、かやうなものを附せざるものを無點本といふ（刊本・寫本參照）。

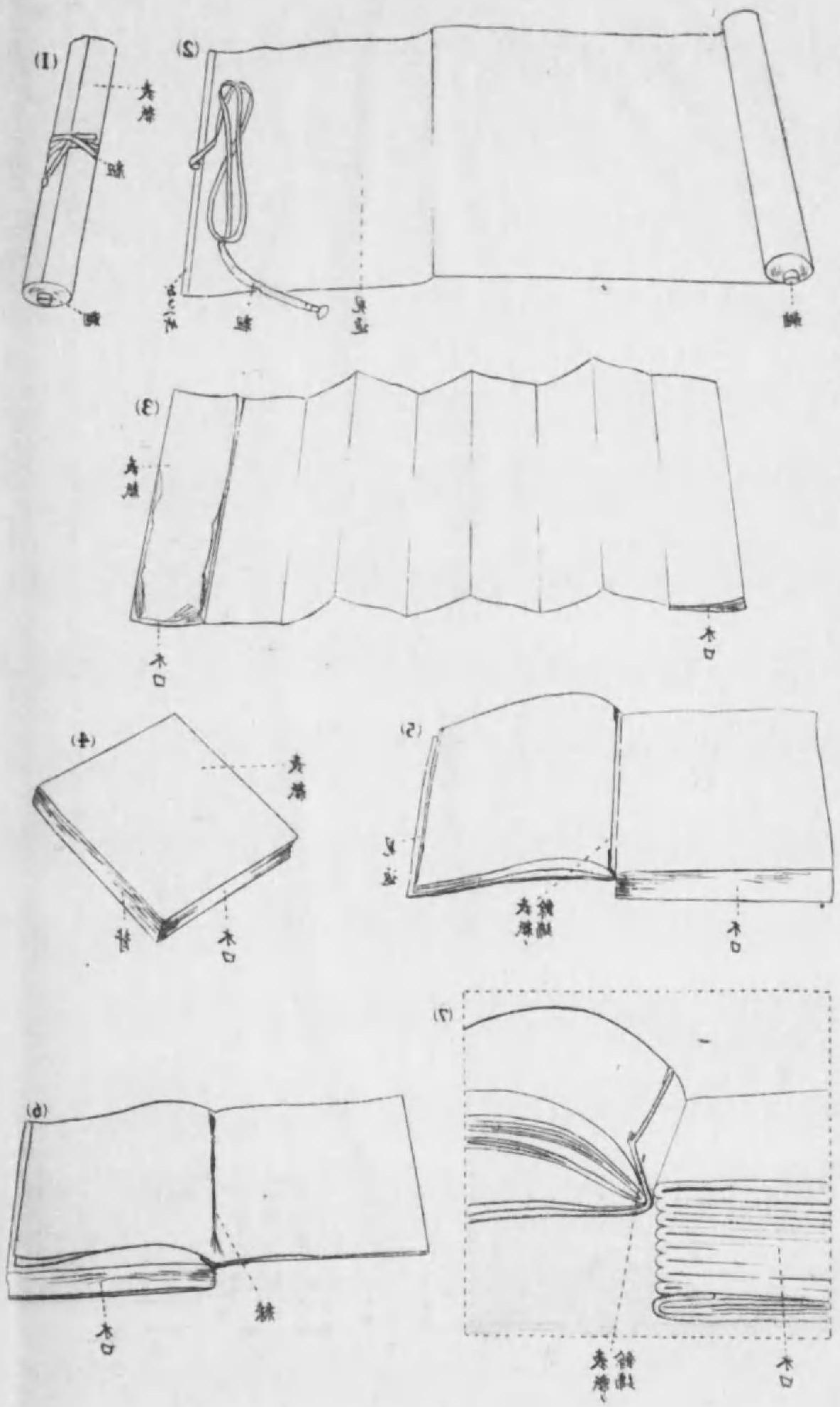
【圖書の構成と各部分の名目】　外面には表紙（標紙とも）（別項）を附けて、內部を保護する。表紙は卷子本では最初に、その他の本では最初と最後とにあるを常とする。洋裝本では前後の表紙は、紙を綴ぢた側の側面を越えて連續してゐるのが常である。この側面の部分を背といふ。表紙の裏を見返しといふ。卷子本は最後に軸をつけて、卷く時の心棒とする。書の題目（書名）の表紙の上にあるものを表題又は外題と云ひ、これに對して、內部の初めにあるものを內題と云ひ、本文の最後にあるものを尾題といふ。書によつては、外題・內題・尾題の互に一致しないものがあり、又その一又は二を缺くものがあり、又は全くこれを缺くものもある。洋裝本では、背に表題を出すのが普通である。書名は、又圖書の內部の第一丁にあることも少くない。この書名（時には、著者名・發行者名・發行年月なども）を載せた一丁を扉といふ。袋綴の刊本では、最初の表紙の見返しを以て扉にかへてこれに書名等を載せたものもある。本文の前には、題字・序・緒言・例言・凡例・目次（目錄）・圖畫（口繪）などある場合がある。これを總稱して前附といふ事がある。本文の後には、後序・跋などがある事がある。書寫の年月氏名、來由などを記した所謂奥書（別項）がある事もある。かやうな記載は、多くは本文の後にあるけれども、又他の場所にある事もある故、これを識語と名づける事もある。又刊本に存するその本刊行の年月・人名・由來等に關する記載は、これを刊記といふ。現代の刊行圖書には、その書の名・著者・發行者・印刷者等の名を記した一丁、又は一頁を最後に附する事となつてゐるが、それを奥附といふ。又圖書には、紙面に於ける文字（又は圖畫）の外圍を劃し、又は文字を整齊ならしめんために、紙面に線を引くことがある。これを界又は格といふ。今普通には罫といふ。横線は行の高さをそろへ、縱線は行の幅を均一ならしめんために劃するが、時に縱線のみで横線を缺くことがある。卷子本又は折本では、行はどこまでも同じ間隔を以て進むが、冊子本では一枚毎に紙面が截斷せられて、一紙毎に一段をなすため、紙面の四方に界を劃して、文字ある部分の外郭となすやうになる。これが匡郭である。匡郭の內には毎行線のあるものとないものとあるが、袋綴のものには、文字ある面の中央、即ち一紙の折目のところは、特に行間をひろげて、書名・卷名・丁附などを記す。こゝを版心又は柱といふ。界は寫本の卷子本には墨（多くは淡墨）を以て引き、稀には金銀泥を用ひることもある。寫本の粘葉本には、箆の如きもので押して跡をつけただけで、何等の色を用ひないのが常である。これを白界又は白格といふ。丁附は丁の順序をあやまらざらしめんためにつけるもので、卷子本・折本・胡蝶裝にはないのが常であるが、粘葉本には糊を以てした綴目の內に、袋綴本には折目に（刊本では柱に）、稀には右又は左の面の、綴目の方の側の下方欄外にある。圖書には本文の外に、行間・欄外などに、朱や墨などを以て、見出し、釋義、他本との校合、その他の事項を書き加へる事がある。これを書入といふ。又本文を低くしてその上方に、本文の註釋・補記、その他多少關係ある事項を載せたものがある。この本文の上の部分を鼇頭と云ひ、そこに註釋がある場合には、これを頭註といふ。又其處に挿畫のあるものもある。近來稀に本文の下方に註を置くものもある。これを脚註と稱する。本文の間に挿入した繪畫を挿繪（別項）と稱する。粘葉と胡蝶裝は、共に一紙の兩面に文字を書くのが普通であるから、紙の裏面に他のものを容れる餘地はないが、卷子本・折本・袋綴本には裏面に文字又は繪畫のある事がある。これには二種ある。一は文書又は他の圖書の裏をかへして、新に圖書を寫し、又は印刷する用紙に宛てたもので、その圖書とは內容上全く關係のないものであり、一はその圖書の書寫又は印刷が出來て後に、表面の文の註、見出し、參考資料、稀には奥書などを裏面に加へたものである。後者は、これを裏書・背記・背書など呼ぶ。圖書には、表紙・卷頭・卷尾などに所藏者の名を署し、又印を捺したものがある。卷子本には、裏面（稀には表面）の繼目のところに、前後の兩紙にかけて所有者の署名、又は捺印のあるものがある。

【圖書の用紙】　その主なるもののみを擧げる。古く奈良朝から用ひられたのは、麻紙・斐紙及び穀紙であつて、麻紙は麻の故布、又は麻皮を以て作つたもの、斐紙は、もと「かにひ」と稱へた植物、即ち雁皮の纖維から作つた雁皮紙であり、穀紙は楮紙とも云ひ、楮の皮で作つた楮紙である。麻紙は黃蘗の皮の煎汁で染めて黃麻紙として、佛經その他の書寫料紙として盛んに用ひられ、又紫・紅・藍その他種々の色紙とし、これを混へ繼ぎ合せて書卷としたものもある。又色紙に金や銀の砂子を置いたものもあつた。麻紙は後世遂に絶滅したが、斐紙（雁皮紙）と穀紙（楮紙）とは永く傳はり、平安朝以後の粘葉・胡蝶裝の冊子にも亦これを用ひた。平安朝から盛んに用ひられた鳥の子紙は、紙の色が雞卵のやうであるところから名を得たもので、厚薄種々の類があり（その薄

圖書二







(1) 卷子本 巻いた所

(2) 卷子本 初めの部分を開いた所

(3) 折本 開いた所

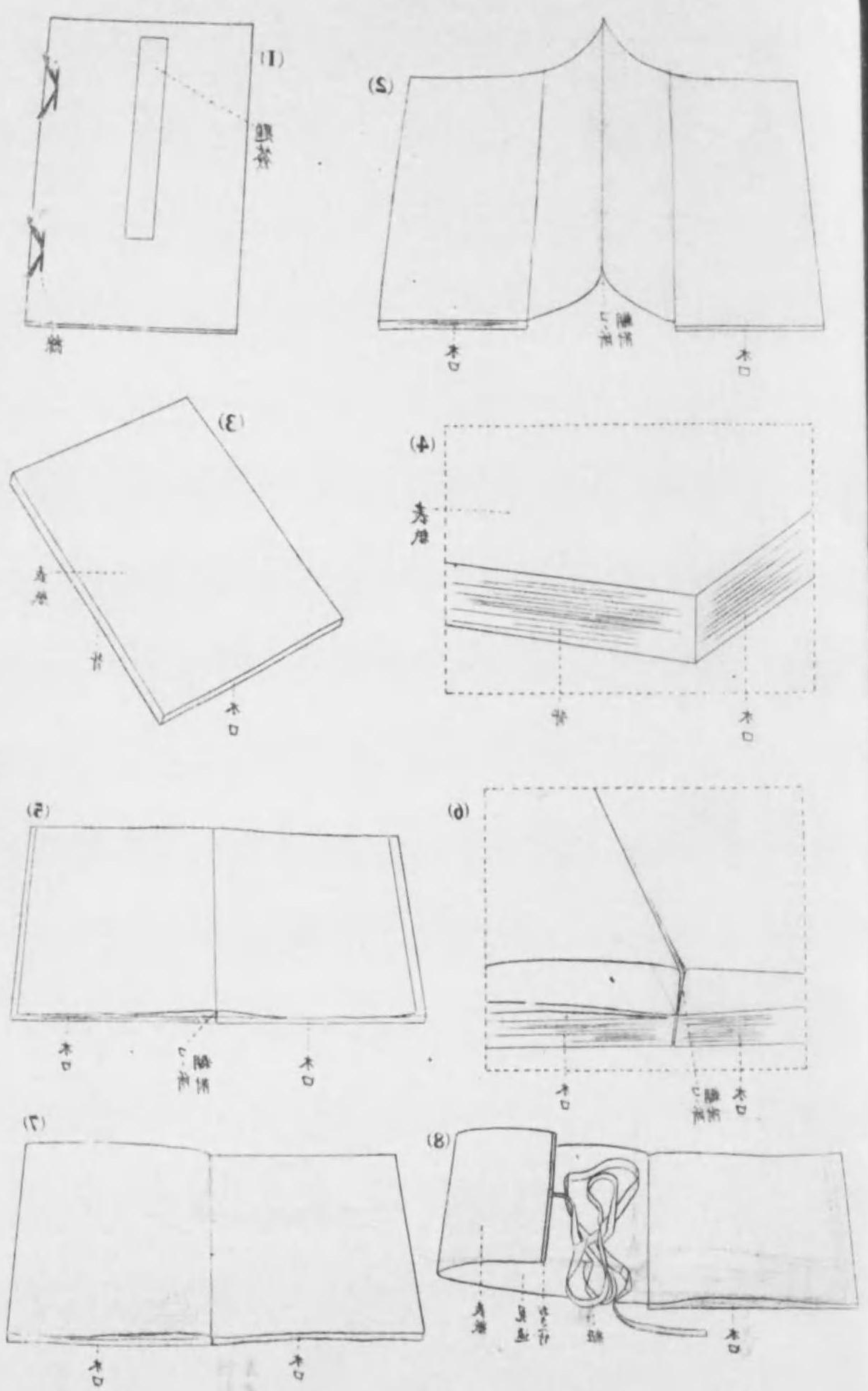
(4) 胡蝶裝 全形

(5) 胡蝶裝 第一折と第二折との間を開いた所

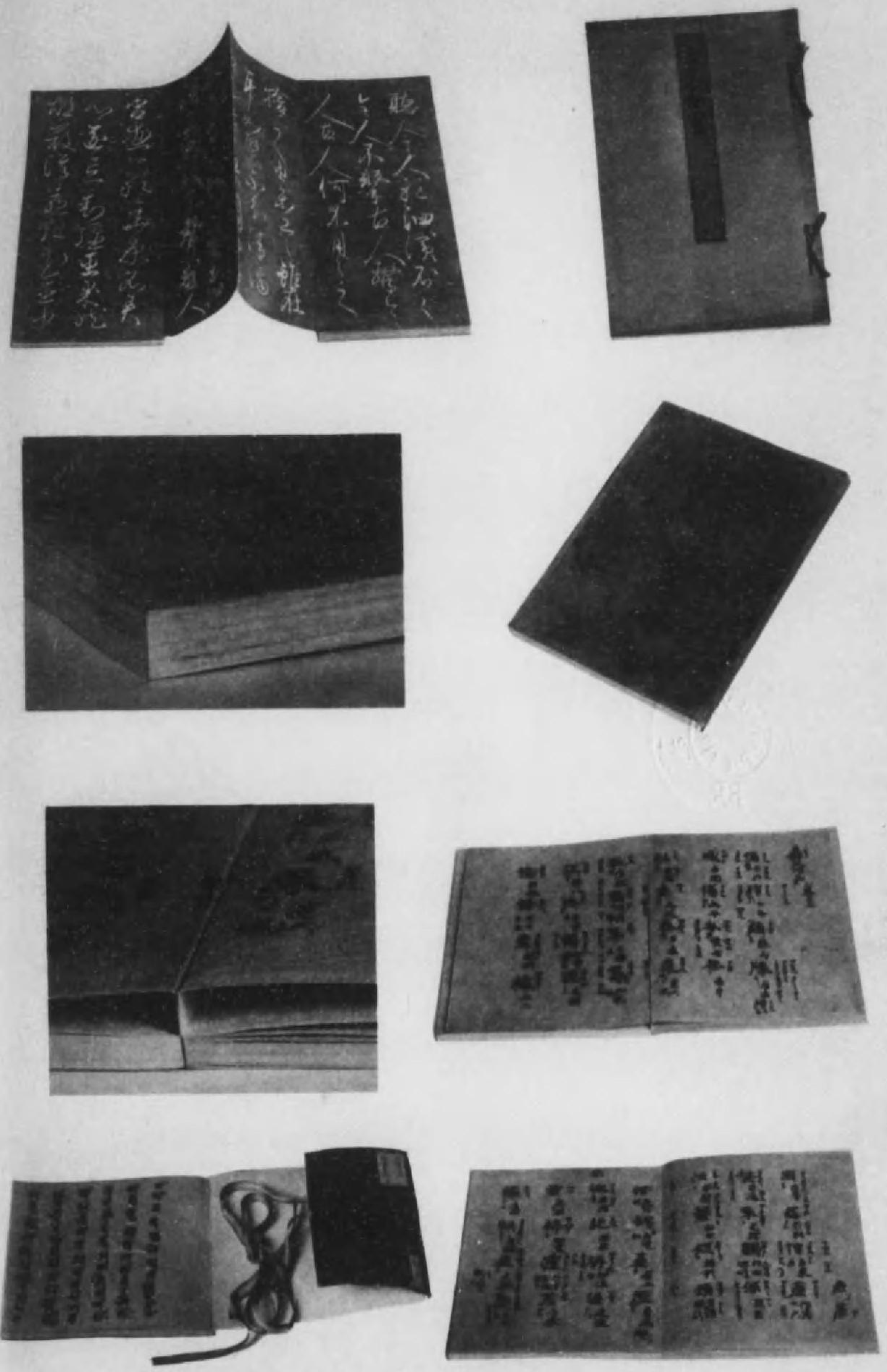
(6) 胡蝶裝 最後の折を中央から開いた所

(7) 胡蝶裝 (5)の綴目の部分の擴大圖

(1)大和綴 全図
(2)粘葉仕立 開いた所
(3)粘葉 全図
(4)粘葉 背及び天の木口の擴大圖
(5)粘葉 開いた所、綴目の部分をマクリ上げて開く状を示す
(6)粘葉 (5)の綴目の部分の擴大圖
(7)粘葉 開いた所、背糊をマクリ上げて開く状を示す
(8)粘葉 背手木の綴を擴大し図を附けたもの



圖書 二

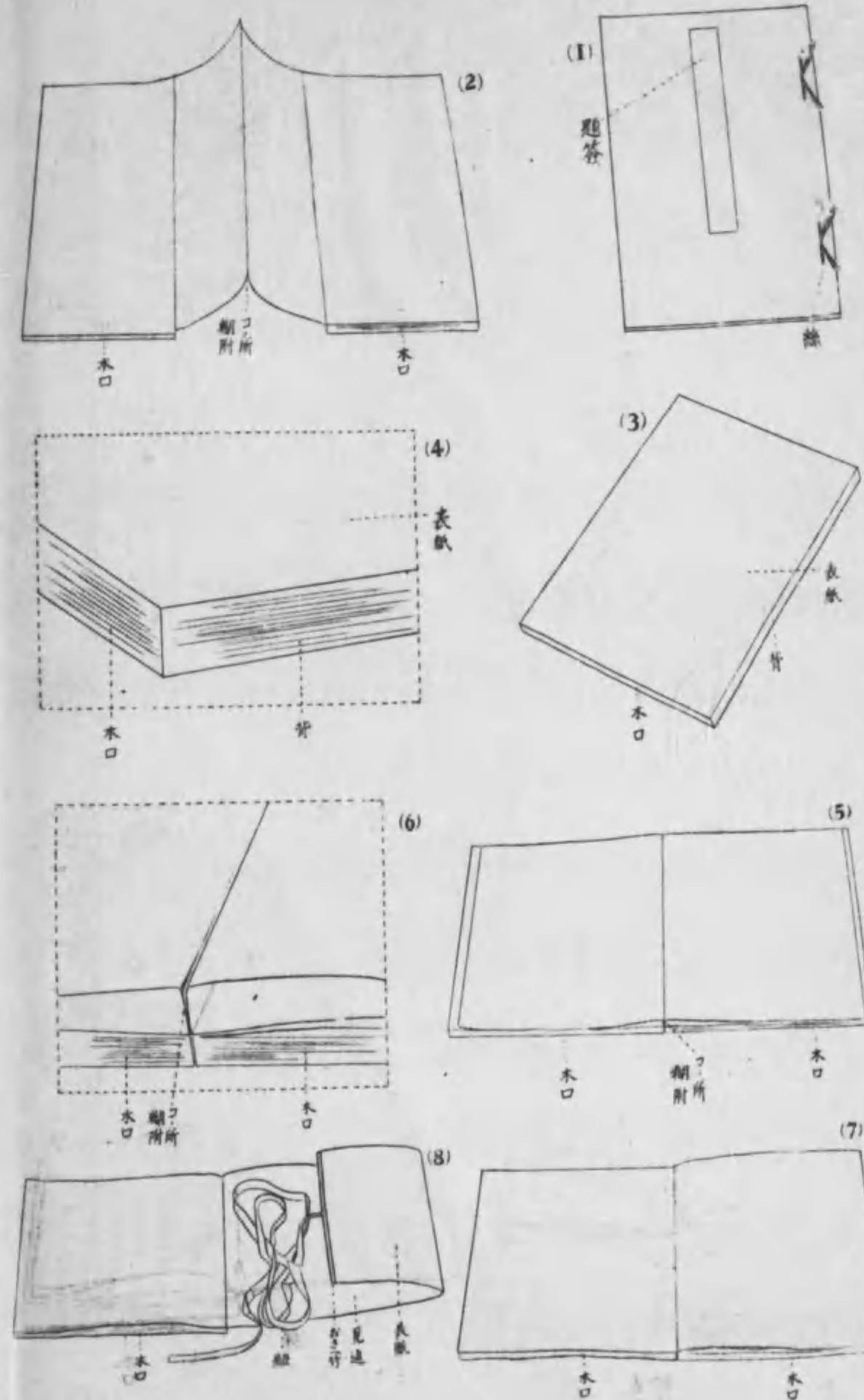


いものを薄様といつた。これで作つた色紙もあつた。平安朝には、唐紙が用ひられたが、これは雁皮紙の上に胡粉をぬり、その上に雲母で模様を置いたもので、もと支那から輸入し、後、我が國で模造したもので、いろ〳〵の色彩のものがある。平安朝には、これを料紙として作つた帖子本や冊子本があつて、時にはその上に金銀泥を以て模様を畫いたものに箔を置いたり、又種々の色紙を破つて物の形に擬し、或は單重の如く、色紙を重ねてその上に貼附するなど、技巧を凝らしたものもある（西本願寺本「三十六人家集」の如き）。唐紙を圖書の料紙とすることは後久しく絶えたが、江戸初期に刊行せられた光悦本・嵯峨本には、これを模したものを用ひた。奉書紙は檀紙の系統に類するもので、檀紙は「まゆみ」の木から作り、皺文のある紙であるが、奉書紙は肌理の美なるものである。これは御家本などに用ひた。宿紙は故紙を原料とした所謂漉返しで、淡墨色を帶びたものであるが、これも古く書冊に用ひられたことがある。江戸時代の黄表紙も赤漉返しで作つたものである。又古くは死者の冥福を祈るため、その生前に自ら書いた消息や圖畫の類を漉きかへして、これに經文を書寫する事もあつた。不用に歸した文書・消息などの裏をかへし、或はつぎ合せて帖子とし、或は折り重ねて袋綴として書冊とすることがあつた。反故といふのは、元來かやうに用ひられた故紙をいつたのである。これも古くは故人の筆になるものを集めて、その裏に經を書寫し、又は印刷してその冥福を祈る事もあつた。支那の圖書に多く用ひられるのは唐紙で、黄褐色を帶び質の脆いものである。日本でもこれを模造した。これを和唐紙といふ。淺縹の書にはこれを用ひたものがある。

【圖書の沿革】形態の變遷を主として述べる。我が國の圖書は、支那から輸入したものから始まる。それ故、勢ひ支那に於ける圖書の起原發達を顧みなければならない。今日文獻に徴し得る範圍に於て、圖書の發生及び發達に就いては、東洋・西洋互に聯絡がないと見るのが普通である。

〔支那〕支那の圖書で、今日までに發見された最古の形式は、細長く薄い木の札に字を書いた所謂木簡であつて、その實物は、近來西域地方から發掘せられた（羅振玉の「流沙墜簡」やシャバンヌ（Édouard Chavannes）の Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkistan Oriental. Oxford 1913 を見よ）。「名を竹帛に垂る」の竹帛は、現今の圖書に當り、竹又は帛に文字を記したものが、古代支那の圖書であつたに違ひないが、竹は竹簡、即ち竹を以て作つた簡（ふだ）であらうし、帛は一種の布である。共に古代の實物は現存せぬが、帛は漢朝が將軍に下した命令書などに用ひた例があり、竹簡は木簡から推して存在を肯定し得る。竹と帛と何れが古いかは明かでないが、竹の方が一層簡單であるから、更に原始的のものと思はれる。この竹簡・木簡は、長い文章を記するには一簡では足りない故、數個又は數十個をも用ひたであらうが、これ等を誤りなく連續せしめねばならぬ必要上から、遂に絲又は細革の類を以て一二個所を連結する事になつた。「冊」といふ文字が、もとその簡を編んだ形を摸したものである事は、古來の定說である。我々は、これによつて最古の圖書形態を推察し、圖書發生の過程を推測し得る。尤も帛を用ひたものも、同時に存在したかも知れない（石に文字を刻する事も、勿論早い時代から行はれたに相違ないが、今それは圖書の範圍外とする）。この簡と帛とが何時頃發明され、使用され、何時頃まで續いたかは未だ決定し得ぬが、ただ紙の發明使用以前に使用せられ、紙が代つて用ひられると共に衰へ、遂に廢滅したことは疑ひない。紙は東漢の和帝の時（西暦九〇―一〇五）、蔡倫が樹皮・故帛・魚網・麻頭などを以て初めて作つたと歷史に傳へられてゐる。思ふに紙は必ずしも蔡倫一人の工夫考案で出來たのではなく、當時支那の各地方に於て、既に紙に近いものの發明があり、蔡倫はそれを大成して多分白紙の製造に成功し、その功を後世に認められたのであらう。紙の發明は圖書の發達に非常な影響を及ぼした。その後は、圖書には特別の場合を除く外、殆ど全く紙が使用され、隨つて圖書の形態も全く一變した。紙を用ひた圖書の最初の形式は、勿論卷物、即ち卷子に相違ない。前時代の圖書、即ち竹簡を横に並べて編んだものは、使用せぬ時は當然卷いて置いたものであらうから、その方法を紙の場合に襲用して、紙を横に繼ぎ合せ、これを卷くやうにしたであらう。これ即ち我々が今日卷子本と稱する圖書の形式の起原である。この卷子本はこれを讀むには卷いたり舒べたりしなければならぬ故、非常に長い場合に任意の處を閲讀せんとするには頗る不便である。この不便を除くため、卷物を卷首又は卷末から一定の長さに折り疊んで折本となし、卷中何處を閲讀するにも便利な形式を案出した。それから進んで紙を卷子本の如く繼ぎ合せる事を廢して、一葉一葉を重ね、これを何等かの方法で綴るといふ方法が案出せられて、冊子本が出來、卷子本とは全く趣を異にする形式となつたのである。冊子本にはこれを綴る方法に、糊を用ひるものと、絲を用ひるものと二種あるが、糊を用ひるものは、紙を一枚づつ縦に二つ折として幾枚も重ね、一紙毎に次の紙と相對する面の何處かに糊をつけて接合せしめるのであるが、その糊をつける場所が折目の傍である場合には、所謂粘葉（でつちよう）（別項）となり、折目と反對の側の紙端である場合は、法帖式の本となる。絲を以てするものは、現今普通に見る和裝本の袋綴といふ綴法である。この三種の形式の初めの時代はまだ明かでないが、粘葉は唐代から現はれたものとも思はれ、法帖式及び袋綴は宋代には既にあつたもののやうである。さうしてその後、袋綴が次第に勢力を得て、遂に圖書に普通の形式となつた。

〔日本〕日本で初めて支那から輸入した當時の圖書の形態は、紙の卷子本であつたらう事は殆ど疑ひない。當時は恐らく他の形態のものは、未だ支那にも發達してゐなかつたかと思はれる。奈良朝に於ても、圖書は佛經も漢籍も圖畫も、この形式のものばかりであつたらしい。平安朝にもこの種のものが多く、刊本もこの形式であるが、この時代にはまた冊子本が用ひられるやうになつた。即ち紙を一枚づつ縦に二つ折として積み重ね、折目に近く糊をつけて接合する所謂粘葉本で、これは多分支那から傳はつたものであらうと思はれるが、卷子本が紙の表面にしか文字を書かないに對して、これは表裏兩面に書く故、その分量が少くなつて簡便であるから、略式の場合に卷子本の代りに用ひられたらしく、佛書・漢籍など、主として漢文のものに多く、また



(1) 大和綴 全形
(2) 法帖仕立 開いた所
(3) 粘葉 全形
(4) 粘葉 背及び下方の木口の擴大圖
(5) 粘葉 開いた所、糊附の所までしか開かない面を示す
(6) 粘葉 (3)の綴目の部分の擴大圖
(7) 粘葉 開いた所、折目まですつかり開く面を示す
(8) 粘葉 冊子本の如き表紙を用ひたもの

「和漢朗詠集」「萬葉集」「古今集」のやうな詩歌集にも用ひられた。また冊子本の一種である數枚の紙を重ねて中央より縱に二つに折つたもの幾折かを、折目に絲を通して綴り合せた所謂胡蝶裝（列帖）のものは（これも文字を表裏兩面にかく）、遲くも平安末期から行はれ、主として物語や歌集の類に用ひられた。鎌倉時代に於ては、前代を承けて冊子本もかなり行はれたが、その代りにまた折本が用ひられる事が多く、粘葉本は盛んに行はれ、刊本でこの形式のものも少くない。胡蝶裝も歌書物語の類には相變らず用ひられた。さうしてこの時代に於て擡頭して來たのは袋綴で、これは紙を毎丁二つ折として重ね、折目と反對の側の紙端に近く孔をあけて絲で綴ぢるもので、いくらかは平安朝からも行はれたが、この時代から漸く多くなつた。室町時代以後は、卷子本は次第に衰へて、遂に普通には用ひられなくなり、折本もだん〳〵佛經に限られるやうになり、粘葉本も勢力を失つて佛者の間に纔に殘つたが、江戸時代以後は殆ど絶滅し、胡蝶裝も、貴紳の間に殘存するに過ぎなくなつた。これ等に代つて勢力を占めたものは袋綴であつて、室町時代から江戸時代に入つては、殆ど圖書形態の典型的のものとなり、刊本も大概この形式による事となつた。これは元明以來の支那の普通の刊本がこの形式をとつたから、その影響を受けたものと思はれ、綴のかけ方も支那の刊本の如く、背及び木口の方にまはして綴ぢる所謂明朝綴が標準的のものとなり（今、普通の和製本に見る綴方である）、絲を背にまはさずして表紙の上で結び合せる所謂大和綴は、まゝ用ひるに過ぎない。又紙を一枚づつ二つ折として重ね、折目と反對の紙端を糊を以て貼り合せる法帖式の製本も、法帖の如き特殊のものに限つて用ひられた。かくの如く支那から輸入された圖書は、日本に於て種々の形態上の變遷を經てゐるのであるが、明治以後西洋文明の輸入と共に西洋紙が輸入せられ、後には作られ、圖書裝幀法も亦西洋流の所謂西洋綴（洋綴）となつて、圖書に大變革を來した。

【西洋】西洋に於ける文字の使用は、極く古い時代からであるが、圖書として今に殘存せるものは、バビロニア、アッシリヤに發掘されたクレータブレット（粘土版）を最初とせねばならぬ。その主なるものには、西曆一八五〇年レヤード（Layard）が發見したニネベのアスル・バニ・パル（Asurbanipal 669—625）王の宮趾中の一室から得たものである。竪一尺五分横一寸、厚さ四五分位の粘土やうのものに、何か土よりも堅い金屬か木材のやうなもので、當時の文字を彫りつけ、後それを多分燒いて煉瓦のやうにしたものである。これは長い文章を記するには、數個、數十個、數百個を用ひた。次に發明されたのは埃及に於けるパピルス papyrus である。これはパピルスといふ植物（葦の一種）の皮の内側の膜を細く剝いで、いくつも並べて接續させたものを更に縱横に重ね合せて壓搾して一枚とし、その表に文字を記したのであつて、長いものは繼ぎ合せて卷物とした。このパピルスの語は、紙を意味する現今英語のペーパー（paper）、獨語のパピーア（Papier）の根源であるが、現今の西洋の紙は、實質上からはこのパピルスの系統を引いたものではなく、全く別系統に發達したものである。さうしてパピルスはその後進化することなく、別種のものがこれに代つて用ひられた。即ち羊皮を精製したパーチメント（parchment）と、犢の皮を精製したペラム（vellum）であつて、これにインキ類で文字を書いた時代はかなり長く、ギリシャからローマを經て殆ど最近迄もあり、現在ですら貴重なものにはこれ等の獸皮を用ひる。パーチメント、ペラムは多く一枚が用ひられたが、現存品中にも數葉を綴つて圖書の形式をなしたものがある。但しこれ等は頗る厚手で、折るといふことは不可能に近いから自然卷くといふ形式をとつた。この卷物時代を過ぎた後は、現今の洋綴と同樣に綴るやうになつたのである（第六世紀の中期には、殆ど現今のと同樣なものが出來てゐた）。このパーチメント、ペラムに代つて初めて眞の紙が用ひられたのであるが、西洋の紙は東洋から學んだのである。即ち唐の玄宗の天寶十年（西曆七五一）に、波斯の支那國境に事變が起り、アマルカンドの亞剌比亞人は支那人を擒にしてその町に引上げたが、その支那人が紙を抄する方法を知つてゐて、これを亞剌比亞人に敎へた。その後その地方人は段々と工夫を重ねて、麻布の襤褸を片碎してこれを製紙の材料として用ひるに成功した。十世紀の頃になつて、アラビヤ文明が西漸して西歐基督敎國に入ると同時に、紙は最も早く西班牙に入り、益々製法が發達進步して後、南西獨逸・佛蘭西・英吉利に及んだのである。かやうにして得た紙をパーチメント、ペラムの代りに、圖書に用ひたのであるが、圖書の形態は、前時代を襲うて現在の西洋綴の形式となつたのである。それは數葉の紙を重ねて折り、幾折も重ねて毎折の折目に孔をあけて絲で綴り合せたもので、偶然に我が國に古く用ひられた絲を以てする胡蝶裝と一致する。

【現代の日本】この西洋紙と西洋綴が我が國に入つて次第に勢力を得、現今西洋紙に印刷せらるゝ圖書は、稀れに明朝綴・大和綴もあるが、大抵は西洋綴を以てし、クロース或は皮を以て表紙を作り、又は表紙をクロースに、背のみを皮にし、背に金文字又は色文字などを用ひて、書名・著者名・發行者名等を印する。併し現今日本に用ひらるゝ圖書の用紙は和洋兩種で、裝幀の形式も自然兩樣並用の姿である。將來も用紙に變化を來さない以上、これ等兩系統の裝幀法も變化しないものと見られる（なほ圖書の沿革については「寫本」「刊本」參照）。

【參考】*Jahrbuch der Deutschen Vereins für Buchwesen und Schriften.* (Buch und Schrift) 1. Jahrgang. 1927. ○右文故事 近藤正齋 ○訪書餘錄 和田維四郎 ○南葵文庫創立紀念會陳列目錄 ○阪實時特輯 書誌製本 ○紙譜 木村青竹 ○紙漉重寶記 國東治兵衛編 ○和漢書の裝潢について 吉澤義則（圖書館雜誌大正五ノ七）（植松・橋本）

俊頼（としより） 歌人（中古三十六歌仙の一）

【姓】源【生歿】未詳。天治元年（一七八四）「金葉集」撰修の命を奉じたのが六十七・八歲とする說がある。【家系】經信（別項）の子、俊惠の父【閲歷】初め六位藏人右少將であつたが、五位に敍して殿上を允された（家集）。仕途は淹滯したものか、「下﨟に越えられて歎き侍りける頃月のあかゝりける夜周防内侍のもとにまかりて云々」（家集）とある。寛治八年の高陽院七番歌合には左京權大夫、康和年中の堀河院太郎百首には木工頭、永久六年の六條宰相家歌合及び以後の歌合には前木工頭とある。晩年さるゆかりで伊勢に下つて齋宮に仕へ、伊

勢でよんだ歌が家集に多く見える。この齋宮は樋口齋宮であらう。堀河院の御時は宮中歌人として御寵愛を蒙つたものか、家集には「堀河院の御時云々」と記した詞書が多く、院の仰せによつて女房に具して花山の花を下見に行つたこと、高陽院殿にて舟遊があつた時汀に立つて歌をよんだこと、金椀を鳴らして響の内に歌をよめと仰せられたこと等を記してゐる。後には經信の引退してゐた近江の田上に閑居し、田園生活を營みながら不遇を歎じた。「金葉集」の終りに、「七十になるまでつかさもなくて萬にあ〳〵しきことを思ひつゞけて、七十にみちぬる沙の濱楸久しく世にも埋れぬるかな」とあつて、家集にはこの歌に「金葉集の奥に御覽じ哀とおぼしくてかきつけて侍りける」と詞書を附してゐる。又家集には「愼躬恥己を歎しんだ歌が多く、田上で田園生活をよんだ歌も注意される。「金葉集」は天治元年白河法皇の院宣を奉じ、數度奏覽の後大治二年初めて御嘉納を得た。承德元年經信が太宰府に薨じたので、彼は遺骨を携へ、内海を航して京に歸つた。經信に似て趣味が廣く、和歌の外音樂・書道・佛敎に通達してをり、深く阿彌陀を信仰したやうである。一子俊重は田上の閑居を訪れて同居したことがあり、俊重の子數輩は中納言と稱し、花林苑の歌合には俊頼に代作してもらつてゐる。俊頼と交りの深かつた歌人は顯季・公實・國信・長實・行宗・隆源・肥後等であり、忠實・忠通父子からも愛されたやうである。元永元年顯季が人麿影供を催した時、彼は長老の故を以て初獻を獻じ、俊成にも定家にも崇拜されたので後代にも重視され、その影響も大きかつた。【人物】論爭者であつた基俊との關係を見ると、彼の人物がよくわかる。基俊は學識が有り、古典主義者で、多少偏狹であつた。俊頼は見識があり、自由主義的で、可なり包容的であつた。共に歌を新しくしようとする機運を持つてゐるが、個性の相違は二つの權威の對立となつたやうに見える。元永元年の内大臣家歌合は、俊頼・基俊が共判してゐるが、兩人の態度の相違を明瞭に示してゐる。俊頼は自らの歌は多くの場合負又は持とし、明かに勝である場合も判を言ひ切つてゐないが、基俊は遠慮なく自らの歌を勝とし、強ひて俊頼の歌を負としてゐる。

寛治八年	高陽院七番歌合の作者。
承德元年	經信卿薨ず。
康和年中	堀河院太郎百首の作者。
天仁三年	山家五番歌合の作者。
永久四年	堀河院次郎百首の作者。
	六條宰相歌合の作者。
元永元年	内大臣家歌合の作者、基俊と共に判者。
保安二年	關白内大臣家歌合の作者
大治二年	金葉集奏上、この頃歿
	奈良房歌合の判者。

彼の歌に、「信濃なる木曾路の櫻さきにけり風のはふりにすきまあらすな」とあるが、これは或る人がこの着想の可否を彼に尋ねたに對し、無下の俗事なりと答へておきながら、後日、自らかく詠んだといふので、「袋草紙」には最も腹黑の事かと評してゐる。「散木集」の連歌にも「腹黑しとは名を得たれども」とある。比較的寡默で、多少は變人であり、腹黑であつたでもあらう。「今鏡」には、連歌は歌の風情を徒らにするものであるとした彼が、「金葉集」「散木集」にも、高陽院に上つた「和歌式」にも連歌を載せてゐるのは、彼が偏狹でないためであらうと記してゐる。

【著作】俊頼髓腦○家集「散木奇歌集」十卷（各別項）○勅撰集に入る歌は金葉三十五、詞花十一、千載五十二、新古今十一、新勅撰集以下十三代集に亙つて凡そ九十二首、合計凡そ二百一首○私撰集に入るもの後葉集二十五、續詞花集十一、月詣集七。

【歌風】彼は題材に於ても表現に於ても自由な態度をとり、沈潛された情熱、餘裕のある心境を通してすべての題材と用語とがよくこなされてゐる。彼は典型美を標準としないで、素朴な氣持や生活をそのまゝ出さうとしてゐる。如何なるものも興味をもつて詠めるやうな拘束されない落ちついた心をもつて、人生を觀、自己を省み、人生の寂寥と不遇の悲哀とを感じ、技巧のない率直な心で山川草木を歌つてゐる。貫之と躬恒と何れが優るかの問に對して、彼が躬恒を侮るなといつたといふ（長明無名抄）のは、眞意のある所が明瞭でないが、表現の隅々にまで個性の出てゐる躬恒の歌に興味をもつたのであらう。彼の人格と同じく、歌の姿も一方に偏せず、各種の姿がある。「後鳥羽院御口傳」には彼の歌には二つの姿がある。一は美しくやさしき姿にて、「鶉なくまのの入江の濱風に尾花波よる秋の夕暮」の如きものであり、他はもみ〳〵として餘人のえよみおほせぬやうなる姿にて、「うかりける人を初瀨の山おろし烈しかれとはいのらぬものを」の如きものであると記されてゐる。「金葉集」が基俊の手に撰せられなかつた事、俊成が基俊の弟子でありながら俊頼の歌風を慕つた事は興味の深いことである。

【參考】大日本史二二一 ○百人一首一夕話 尾崎雅嘉 ○國文學全史平安朝編 藤岡作太郎 ○日本歌學史 佐佐木信綱 ○大日本歌學史 福井久藏 ○國文學研究史 野村八良 ○六條家の歌人とその歌學思想 能勢朝次（國語國文の研究 昭和三ノ一）○俊頼及び基俊の研究 金子實英（同上）（岡下）

俊頼髓腦（としよりずゐなう） 歌學書 二卷【著者】源俊頼【名稱】「俊秘抄」「俊頼口傳集」「俊頼無名抄」ともいふ。【成立】平安朝後期【諸本】傳本題名區々であつて、「無名抄」の名は「童蒙抄」「袖中抄」「和歌色葉集」「八雲御抄」等に見えるのであるが、現行傳本にはあまり見當らない。「俊頼髓腦」と題する本と「俊秘抄」と題する本とは、大體同じで著しい相異は見えない。歌學文庫第二編所收のものは「俊秘抄」と題し、原本は内閣文庫藏本で壽永二年の奥書がある。帝國圖書館に藏する「俊頼髓腦」と題する本は嘉禎三年・寛永十六年の奥書がある。併し同じく「俊頼髓腦」と題して壽永二年奥書のある本もある。次に「俊頼口傳集」と題する本は、上記の書と違つて卷頭に目錄あり、本文にも各段毎に番號を打つてゐるが、奥書の古きものもなく、又項目も少く、局部的にも脫落又は誤記と思はれる個所多くて著しく粗である。但し續々群書類從第十五所收のもの（黑川氏藏本を底本とし清水濱臣本を以て訂正）には壽永二年の奥書があり、項目も「俊秘抄」に大體一致してゐるが、これは後から增補されたものと考へられる節がある。次にただ「獨自見抄」と題する本を圖書寮に藏し、前揭諸本が何れも全篇を上下二卷に分てるに對してこれは上中下の三卷としてゐる（下卷を佚す）が、内容は大體「俊秘抄」に近い。以上の如く題名と共に傳本區々であるが、勿論異同の個所は枝葉であつて、各本とも根本的な相異は見られない。而して「童蒙抄」「袋草紙」「古來風體抄」等の書

に既に引例が見え、俊頼の原著なる事は信じて差支へない。【內容】發端先づ和歌は男女貴賤好み詠むものであるが、情あるものは進み、情なきものは進まずと云つて歌心の必要を說き、又八病九品を分つて童蒙を教へるものがあるが、習ひ傳へなければさとる事は難いとて、學問よりも稽古を先とし、次に八雲立つの詠、聖德太子と文殊菩薩との贈答を載せてゐる。次に旋頭歌・混本歌・折句・冠折句・廻文・短歌・俳諧歌・連歌・隱題の諸體を解說してゐるが、この中に短歌につき五文字七文字と續けて七七で結ぶと說けるは、例の「古今集」の分類によりて云へるもので、平安朝一般の通說に從つたものである。次に避病、字數多少等の項あり、又神詠・寒納歌・老幼・乞食等の歌を語り、題詠の心得を說き、次にひとへに優なる歌、たけたかくとほしろき歌、よきふしに優なる心具したる歌等、和歌の樣體を二十に分つて善歌惡歌の例を示す。次ににせものの事、返歌の事、兩名・風名等の事を記し、その後は、にほ鳥、野守鏡、鬼のしこ草等百餘條に亙つて證歌の解釋をし、最後に歌人逸話を出して結んでゐる（俊頼口傳集には、その後に更に連歌の項あり）。【價値】全體として分量大なるも錯簡の譏りを免れず、すでに「六百番陣狀」「鵜川上」等これを指摘し、嘉禎三年の奧書にも云つてゐる。が、中に作歌の心得を說いて、心と詞と共に重んずべく、又一ふし珍らしき所あるべきを說き、歌の樣體の分類、連歌の說などは注意すべき管である。「金葉集」「散木奇歌集」の編著者として、歌壇に一轉機を作つた俊頼の立場を知る上にも、「童蒙抄」「奧義抄」以下、平安後期以後續出した歌學書の先蹤としても注意すべき書である。

【參考】大日本歌書綜覽（福井久藏）○日本歌學史（佐佐木信綱）○國文學研究史（野村八良）○俊頼無名抄の年代著者と其の著述（岡田希雄）（藝文大正一〇ノ七）　（中島）

渡世身持談義（とせいみもちだんぎ）　浮世草子五冊【作者】江島屋其磧【刊行】享保二十年菊屋板【諸本】其磧自笑傑作集上（帝國文庫）所收。【解說】一卷は三話より成り、すべて五卷十五話であるが、前後脈絡あるものであるから一個の長篇とも考へられる。町人渡世の法を談義に託した作品である。丁銀町有德上人・韻略寺始末上人及び中堂寺松臟上人・九軒寺寶閑上人等が長者町永代十藏寺に集まつて論議をなすといふ構想の下に描かれてゐる。即ち有德上人・始末上人といふは硬論者で、頻りに町人の勤勉節儉を說いてゐるに對し、松臟上人・寶閑上人は軟論者で、遊里と傾城の魅力を稱へてゐる。兩者は勝敗を決し得ずに和解し、始末宗側では十露盤供養をなし、遊色宗側では開祖江口の君五百五十年忌を營むことに依つて解決がつくといふのである。八文字屋本としては特異な「談義」の構想を以て作られてゐる。「談義」の構想を應用せる作品に「傾城禁短氣」（別項）があつたが、これは好色生活の談義と解すべきであつた。町人生活を內容とせるもので、談義の形式を用ひた所に、この作品の特色を見るべきである。　（吉田）

十千萬堂派（とちまんだうは）　俳句流派【解說】明治二十三年頃、尾崎紅葉及び巖谷小波の門弟その他を以て成つた俳團紫吟社一派を指す名稱で、十千萬堂は紅葉の別號である。即ち紅葉門としては、泉鏡花・小栗風葉・柳川春葉・德田秋聲・谷活東・星野麥人・鈴木苔花・泉斜汀・田村西男等、小波門としては、西村渚山・黑田湖山・生田葵山・木戸解劍・永井荷風・尾上新兵衞・栗島狹衣等があつた。その傾向は、談林風を基調としてこれを新時代化せしめたものであつた。紅葉歿後は小波が斯派の代表的人物となつて今日に及び、その作調も平明穩健なものとなり來つてゐる。　（伊藤）

橡面坊（とちめんばう）　俳人【姓名】安藤鍊三郎後小田氏を嗣ぐ。【別號】橡庵・句仙・彰人・舊號禪々・觸山。【生歿】明治二年八月十六日生れ、大正三年九月二十五日歿す。享年四十六。【法名】植紫院德本日鍊信士【閱歷】岡山縣小田郡新山村に生る。大阪毎日新聞に校正次長の職にあること十餘年、令聞があり、大阪市南區西清水町一三四に住した。晚年傍ら大阪化粧品商報の編輯を依囑され、同社の隆盛を見ずして逝つたのは惜しむべきである。句作は國民新聞虛子選の俳句を見て始め、後鶴田小鮎の糸瓜會の同人となつた。西據武庫山下盧屋の里に歿し、大阪西念寺に葬儀を行つた。【著作】橡面坊句集　深山柴　鶴田小鮎編（大正十年刊）○深山柴拾遺　鶴田小鮎編（大正十一年三月「糸瓜」第二十五號揭載）【參考】現今俳家人名辭書（紫芳社）○糸瓜（大正八ノ一二、一二ノ三）　（荻原）

とつちりとん節（とつちりとんぶし）　歌謠【名義】三味線の前彈の終りの方に、トッチリトンと彈く手があるのによる。これがこの歌の三味線では甚だ耳立つからである。【解說】早く寬政十年頃に流行し始めた。寬政十年版の洒落本「辰巳婦言」に「トツチリとんと身を落せば」、寬政十一年版の洒落本「仲街艶談」に「トツチリトンと挽く三味に」「とつちりとんだ新手にはまり」などと見える。先づ深川の廓で流行し始めたのである。文政時代には關西でも大に流行してゐたことは、「浮れ草」（文政五年）に、歌詞が七首出てゐるので明かである。「守貞漫稿」には、文化年中より行はれたやうに記してゐるが、これは寬政より流行し始めたものの繼續であらう。文政頃には一時下火になつてゐたのが、天保四年二月頃から又行はれ始めて、全國に流行した（「甚麼雜說」に據る）。「歌謠字數考」には、「此の節は扇歌（都々逸坊扇歌）の創作にて、多くは客人に題を出させ、即時にこれを歌に綴りて歌ひたるものなり」とあるが、扇歌の創作と云ふは誤りとしても、かやうに寄席藝人により、世に廣められた事は確かであらう。幕末には草雙紙式の繪入唄本や瓦版の歌本が無數に出で、その中には、弘化三年刊行の「都津地里問屋」と題する扇歌が、東海道五十三驛を詠んだ歌十三首を集めたとつちりとん節の書なども存する。今もほそぼそ殘つてゐる。都々一（別項）と併稱された流行唄であるが、明治に入つて衰微した。前彈は賑かであるが、歌は優美で、大津繪節・伊勢節などに共通の特色を持ち、幕末情調の濃い節廻しである。後には、文句入とつちりとんなど、種々の形式のものが現はれた。歌詞は、古くは次の歌が有名であつて、前記の諸書にも多く引かれてゐる。　（藤田）

　嬉さ日本に出世の鑑、されば大閤秀吉の、素性を
　尋へはその昔、國は尾張の中村に、筑前福岡さ
　云ふ藝州、聲は日吉の権現へ、猿面かけて懷胎し、
　程なく男子を生み落し、その名を名付けて日吉丸。

十百韻（とつぴやくいん）　「百韻」「千句」を見よ。

土手のお六（どてのおろく）　「杜若艶色紫」を見よ。

土手節（どてぶし）　歌謠【異名】綴節・次歌と云ふものも同一の歌であらう。【名義】吉原に通ふ人々が日本堤の土手で歌つたので、か

く名付けた。【解說】「傾城色三味線」序、「一日千軒」「新町細見澪標」等によると、京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の籬節を、古來より三名物としてゐたと云ふ。歌詞は、「洞房語園集」に、

　土手節　寬文の頃流行した唱歌　勝露作
　か・る三谷の草深けれど、君が栖ぞと思へはよしや、玉のうてなもおろかでござる。よその見る目もいとはぬ我じやに、お笑ひやるな名の立つに。

と見える。「當世小歌編」には「山谷土手節」と題して、右の歌の外六首を掲げてゐる。「用捨箱」には、三味線の名手原武太夫の門人より聞き傳へた土手節の歌として、「松の葉」卷三の「山谷降」及び「夾念」に類似の歌等を掲げ、別に「雜話見聞錄」によつて、「元祿の頃はやりしつぎぶしといふ歌」と題し、

　ゆうべ色里ではやる小節を習うた、後さきは覺えなんだが、中の小節を忘れた、さこそあるべいさて書いてもらうたを、土手へずんと落いた、輿理も錦今も此通り、面目ない、一口拍子の喰きしに、細のついたを落いた、どこへ、船宿へおいて來た、でぐはどうぞ智恵出せ、分別せい、あのやつこつ

と云ふ歌を掲げてゐるが、これは、原武太夫の門人の歌つた歌を、一二首繼ぎ合せた形式となつてゐる。繼節とは、かやうに、土手節の二歌を混じて歌ふからの名稱で、土手節の崩れた一體の歌となすべきであらうか。右の歌は、幕末時代には、「忘れ唱歌」と云ひ、江戸端唄として行はれ、今日も僅に殘されてゐる歌で、此處に古い土手節の面影を見ることが出來るであらう（「忘れ唱歌」は、「北里見聞錄」所引「北女閭起原」以下、幕末の「江戸歌大全」その他の諸書に見える）。早く、土手節の節付本が出てゐたらしいことは、「元吉原の記」に、「この直之は投節やうの小歌に妙なるものにやありけん、昔ある人の藏書に、直之直傳と記せし土手節の本を見たり。この二書は只今唯一本なるべきものにして、尤珍書とするに足れり」と記してゐるのでも察せられる。直之は吉原の幇間で流行唄の名人であつた。これが投節及び土手節の節付本を刊行したと見えるが、現在傳本は不明である。長唄の「吉原雀」の「それ綱笠をそこにおけ、二階座敷は、右か左か、奧座敷までござりやす」のところは、原武太夫の注意で、土手節を取り入れて作つたものと云ふ。これによつて、その曲節の面影を知る事が出來る。尤も寬文の土手節と元祿以後の「夾念」の系統を引く土手節とは、曲節が違つてゐたらしい。種彥は「洞房語園集」の歌は、今聞き覺えた土手節の三味線に合はないと云つてゐる。思ふに吉原通ひの嫖客の好んで歌ふ流行唄は、すべて土手節と云はれる名稱であるから、時代のたつにつれて、前と後とでは、同じ土手節でも、その實を異にしてゐるのであらう。寬政頃の洒落本には、英一蝶が作つた「買乳枕んで梢乘り込む今戸橋」（洞房語園異本所載）の歌をも、土手節としてゐるものが散見するのである。
【參考】用捨箱（柳亭種彥）○日本歌謠史（高野辰之）　（藤田）

都々逸節（どどいつぶし）　歌謠【名義】「都々逸節根元集」（小寺玉晁著、嘉永六年成）に、「唄へおかめ買奴は天窓でしれる。抽つけずの二つ折、此唄の風其奴は殿奴者〳〵。と或大一座の客の節、囃子けるが、大に興ありて笑しかりければ、此唄諷時には必ず此囃子する事と成居しが、いつの程よりか殿々吃りて、ドヽイツドイ〳〵と成てより、浮世はさく〳〵と折返し囃子事とは成しと翼樣老人の話にて、夫故諧名付るとはなくて、ドヽイツぶしとはいひ初しと也」とある。都々逸・東都一・百々一・度獨逸・都々一等、さまざまの文字を宛てる。【起原】「都々逸節根元集」によると、寬政十二年に熱田に鷄飯が店と云ふ茶屋が出來、その茶屋女にお仲と云ふ者があつて（名古屋の人、後、同所神戸町鍵屋金右衞門の女房となり、嘉永三年病死）、これが最初に歌ひ出したといふ。この茶店の女のことをおかめと云ひ、やがて神戸の遊女のことをおかめと總稱するやうになつた。都々逸節は、お仲に始まつておかめの間に歌はれ、熱田に遊び、此處を通過する旅人によつて、東西に傳播せらるるに至つた。「繪本どどいつ惣まくり」（狂々先人著、嘉永二年刊）は弘化三年に成つた書であるが、これには「ドドイツといへる小唄、江戸にて唱初しは纔四五十年の往昔にして、其もあながち流行るとにもあらず、然程に同樣の小唄にて曲節も趣も異にして、ヨシコノ節といへるなん、二十年餘をちつかたは、世にもてはやして謠はぬ人なく、（沖の暗いのに白帆が見えるあれは紀伊國蜜柑船、チヨウチヨ靜にさしこめコリヤ又ヨシコノ。などうたひはやらしけらし。其を一盛にして復もとのドヽイツ節ぞ一統て行れ、當時の歌謠とけ漸に變ぬれども年を經て廢らず。（中略）此歌根元は知らざれども、古く尾張の厚田の傀儡、ドヽイツとて拵謠へる、亂のはやしにドヽイツドイ〳〵、浮世はサク〳〵と折返し囃しし事を僕稚き小耳に挾て忘れねど、今は絕て更にいはず、然ども唱歌は今昔都も一齊くして、東都にも古來人の知る（宮の厚田の明神さんへ遠さかれとはいのりやせぬ。厚田に古く歌ひしは、此歌既に一つの證故、今猶宮驛に歌ふ所、吾嬬風とは似て非なれども、其元たる事聽けば知られぬ」とあり、これも、寬政末年の起原を說いてゐる。「守貞漫稿」には、「よしこの一變してどどいつ節となる也、故に其曲節此に似て僅に轉ず」とある。併し前述の如く、どどいつは、よしこのより以前に存在した歌であり、寬政以前によしこのが流行したと云ふ證據がないから、この說は信じられぬ。恐らく、明和乃至寬政時代に流行を極めた潮來節がその母胎であらう。潮來節が尾張でどどいつに變じ、これが上方化して關西風のよしこのとなり、又江戸化して江戸どどいつともなつたのであらう。兩者とも同樣の囃子詞を終りに付け、本調子を基として、それより二上り、三下り等に分れたところなど、共通の特色を持つてゐるので、かやうに想像せられる。
【解說】神戸に發生した音曲は、神戸節などと云つてゐたやうであるが、これが文政末年又は天保初年頃に江戸に輸入せられて盛行を極めた。菊川英山筆の錦繪に「酒機嫌浮世雙節」と題し、「わらはどゞいつで紛れもせうが、ぬしはお帳合お氣詰り、どゞいつどい〳〵してやれ〳〵、坊主にしてやれ坊主がいやなら裸にしてやれ」などと記してゐるのがその古きものである。天保時代には、名古屋の都々逸と江戸の都々逸とでは、その歌ひ方が違つてゐた。故にこれを名古屋節と江戸節に分ける。それに、上方のよしこの節を合せて、都々逸節は三つの地方に分離し、大に特色が異なつて來た。これは寄席藝人が高座に上せて歌つたが、就中都々逸坊扇歌がこれを得意とし、自分の號にもこれを以て冠した。天保九年八月牛込藁店の寄席に出て、聽衆より題を求め、即席都々逸、その他の音曲を歌ひ、評判を取つ

た。彼の美聲で歌つた歌が、都々逸の今日行はれるが如き曲節の共礎となつたものと思はれる。都々逸は本調子がもとであるが、江戸には二上り都々逸が傳はり、又三下り都々逸もあり、江戸節と云ふものは前者で、名古屋節とは役者の謂であらうと云ふ(中貞舞踊・小唄のちまた)。その後、文句入都々逸、淨瑠璃入都々逸、字餘り都々逸、その他種々の形式のものが生れ、また幕末より、これを一つの詩形として、新作することが行はれ、情歌・浮連唄歌・俚謠正調・俚歌等種々の名をもつて作られ、狂歌・川柳等と並んで、俗文學の雄なるものとなつた。種々の情歌會の如き團體も出來て、都々逸の判者が生じ、隆盛を極めた。この風は明治に入つても、明治中期頃までは少しも減退しなかつた。この方面の作法書、雜誌も刊行せられ、新聞雜誌の投書欄にも必ずこれがあり、都々逸集は無數に刊行せられてゐる。(よしこの節參照)

【參考】日本歌謠史高野辰之○明治流行歌史藤澤衛彦○小唄研究湯朝竹山人○日本歌謠集成卷十一高野辰之○江戸軟派研究尾崎久彌○風流俗謠集湯朝竹山人　〔藤田〕

鳥名子舞の歌(よなこまひのうた)　神事歌謠【名稱】鳥名子とは、伊勢太神宮に仕へて驅使の役をする地下の童男女の稱である。鳥の子の意味で、天の岩戸の常世の長鳴鷄に擬して歌舞せしめたのに起因した名稱であらう。「延喜式」等の古書には鳥子名舞とあるから、これが古稱で、「長暦記」以下の書には何れも鳥名子と記してゐる。また「天照大神御天降記」には底利古郎阿曾比と記してゐる。これも古い稱と見える。【儀式】「建久三年皇太神宮年中行事」の六月十七日「祭使參宮之間事」の條によると、舞姫候殿から鳥名子所の下部が鳥名子等を作つて出で、齋王候殿と舞姫候殿との中間で、歌を歌ひ笛を吹き、又琴を彈じて十二首の歌を歌ふ。鳥名子等は手を組んで廻り、各々歌を一所に聚めて平伏し、起きて後何れも手を合せて退出する。琴彈は忌火屋殿に御琴を上げて退出する。次いで祭使が退出するのである。後世では、右方に三周し、三度伏拜をする事等、頻繁になつてゐる。「延喜式」によると、古くは六月十六日に外宮でこの舞があり、翌日太神宮で同じ儀を行つた。また三節の祭及び解齋直會の日にも童男童女が十六人乃至十八人青摺の衣裳を着て舞つた。彈琴二人、笛生二人、歌長三人が伴奏する(延喜式)。これは御饌歌として用ひられたものである。その後、九月十八日等にも行つた例がある。【由來】平安朝の初め頃からあつたものであらうが、起原は明かでない。明治維新前までも行はれて、度會郡野篠・矢野・山村等の諸村より鳥名子の幼童が出で、原村より歌長・彈琴・笛生等が出た。童男四人が奉仕すると云ふが今は絶えた。また春日社家の富田光義の家にも、十二首の鳥名子舞の譜が傳へられてゐるが、これは渡會延經の「三祭御神樂次第」に依つて、古めかしい節博士を附けただけだと云ふ(「やまづら」「鄕のしなひ」所載)。果して春日神社に於ても、古くにはこれが行はれたものかどうか明かでないが、近世では同社でも鳥名子舞を執行したことであらう。(峯太良歌・鶴島參照)

【歌詞】「建久年中行事」所載十二首の中三首を錄する。

近江路佐の山の椎が枝をふき手折り持て驅使ぞ良る

山川に謝むや驚鷲の鵜鳥汝や此の夜中に七度驚ひやする

大川御覽くて立てる大川御良き君子に手を取りかけていざや遊はむ　〔藤田〕

となみ山(となみやま)　俳諧集　一冊【編者】浪化【名稱】題簽に「浪化集下」とある如く「浪化集」の下卷で、上卷は「有磯海」(別項)である。【名義】越中の名勝有磯海に對して、同國の名勝のとなみ山を持つて來たのである。「風や劔を振ふ礪浪山」といふ去來の賀句がある。【刊行】元祿八年暮春【諸本】續七部集・芭蕉翁全集・蕉門俳諧後集(俳書大系)所收。【内容】最初に其角の刀奈美山の引、其角發句のとなみ山の表十句(其角・浪化・嵐雪・桃隣・去來)、其角が大部分門人の句を催ほし集めた冬・春・夏・秋各六句の發句二十四章があつて、次に曲翠・浪化・正秀・臥高・胡故五吟歌仙一、浪化・去來・芭蕉三吟歌仙一、北枝・浪化・句空・林紅・牧童・萬子六吟の芭蕉百ヶ日追悼の歌仙一、其角の「枯尾華」に間に合はなかつた加賀越中の追悼の發句十二章、去來・浪化・芭蕉・之道・丈草・支考・惟然・野童・野明九吟歌仙一、嵐青・其軸・浪化・呂風・林紅・夕兆・路健七吟歌仙一を收めてゐる。刀奈美山の引によると、去來の斡旋によつて成つたものである事が知られるが、去來が元祿六年(推定)十月十一日木節・乙州へ送つた書簡によると、當時既に「浪化集」の撰に着手してゐたことが知られる。版下は「有磯海」と共に正竹の筆である。正竹は「猿蓑」の版下をも書いてゐる人で、芭蕉の書道の師北向雲竹の門人であらう。【價値】去來・浪化・芭蕉で始まる九吟歌仙は、前書によると、浪化が義仲寺に芭蕉を訪ねて「主客三句の情をむす」んだものが卷き足されたものであり、其角の引にもこの時の事を云つて浪化の芭蕉入門を云つてゐるので、浪化の芭蕉入門關係の資料として最も重要なものである。又芭蕉の墓參に來てゐた嵐雪・桃隣が、となみ山の表に加はつてゐることや、京に留まつてゐた其角の助力なども注意すべく、芭蕉に對する追悼・追悼の籠つてゐる事も見逃せない。作としても、浪化・去來・芭蕉の三吟や、「主客三句の情」の去來・浪化・芭蕉で始まる九吟などは、砂川の淺く流れるやうな、よい寂味の輕みの調で、而も氣品がある。〔潁原〕

殿居嚢(とのゐぶくろ)　故實　二帖【著者】大野廣城【刊行】初編天保八年十二月、後編同十年正月【諸本】江戸叢書所收。【解說】初編には、「此書はおほやけのかしこき事共をかきしるしたれば、すり卷の數を三百部にとゞめ板を絶しぬ」とあり、後編には、禁商賣限三百部とある。江戸幕吏の宿直用に便するために作つたもので、細長い小形の兩面折本で懷中用にしたものである。初編には、武家年中行事、武家諸役班列、服忌令公案集成、武具心得ぐさ、後編には、御曲輪朱引之略圖附諸御門番所御法令略記、五奉行御番衆指物略圖、日光山・紅葉山・東叡山・三緣山等の略圖附御傳略記、安國殿并黑本尊御傳略記、東照宮御鎭座箇所略記、山王權現略圖附御傳略記、聖堂略圖附御傳略記を記し、まゝ地圖・圖解を施し、青表紙(別項)と相並んで江戸幕府の事情を知るに便利なものである。〔石村〕

殿樣踊(とのさまをどり)　歌舞【名義】殿樣の御前で、又は殿樣の上意によつて催された踊の意。【別名】上樣踊・上覽踊【解說】寛永十二年七月二十二日、將軍家光江戸城に於て踊の上覽あり、その際尾州家より奉つた踊がこれである。踊子二十三人を尾州より召し寄せ、尾張敬公自ら踊子の中に加はつて共に踊つた。踊子は何れも尾張藩の小姓で、種々扮裝をこらし、三絃はなく、小鼓・太鼓・笛・尺八の囃子で踊つた。原歌は堀正意(杏庵と號す)の作で、囃子は、能の囃子方及び小姓の中から受け持つた。この踊歌はそれより後長く名古屋城下に傳へられ、瞽女・座頭が、これに箏・三味線・尺八の伴奏を加へて歌つた。

【歌詞】「寛永十二年跳記」には、「右此書者寛永十二年亥七月將軍家光公踊上覽有レ之。其節御家之御差上之踊歌并裝束等之記也。加藤氏町下(カヂヤ)藏本旧借而寫レ之畢。文化九年申九月中浣　野田重堅」と云ふ奧書がある。

あイま踊(十首)、うちわ踊(五首)、手うち踊(九首)、三わけ踊(七首)、伊勢踊(十首)、がつしやう踊(六首)

を掲げてゐる。いづれも、組歌の形式より成り、一連の歌を歌ひ、舞臺でそれに合せて踊り、終りに、ちらしの歌がついてゐる。これよりやゝ後の殿樣踊の歌詞を集めたものに、「百七十章歌」と題する本がある。奧書には「寛永中、公方樣へ御三家諸大名衆より小姓踊をしくみて上られし事有。御家より御上げの踊の章歌多かりし其内專後々殘りたる有。是を御國にてけ殿樣おどりと云ならはしぬ。此歌は堀正意作にて(傍略す)近松氏の書留にみゆ、此歌書堀家より得る。乙亥秋、小寺玉晁」とある。内容は、

四季花見の袖(五首)・同花の風(五首)・同笠の内(四首)・身鹽節(十五首)・有馬節(十二首)・さいとの鷺(十五首)・ちん〳〵節(九首)・ほんぼ節(十五首)・囃節(十首)・きりさは節(七首)・しのぶ節(七首)・とめて節(露の節とも七首)・なんは・節(七首)・と・んと節(十二首)・本氣節(五首)・四木節(八首)・つらさ節(十首)・待夜節(七首)・八聲節(十首)・せりうた(十二首)・うつ・節(五首)・いつか節(七首)・かりね節(七首)・見るや節(五首)・および節(七首)・しこふ節(五首)・寢ぬから節(五首)・見れは節(六首)・うつ・節(二首)

有馬節・さいこの節・ちん〳〵節の如き、元祿時代の流行唄も入つてゐて、後に段々とその時々の流行唄を加へていつたのであらう。故に歌詞は、書名の「百七十章歌」より増加して二百二十首に達してゐる。これは瞽女・座頭の所作であらう。なほ殿樣踊の歌は、名古屋の「元祿正徳頃の流行唄」にも、上樣踊及び殿樣踊と題して入つて居り、尾州の御船唄を集めた「御船歌枕」にも見える所である。歌詞は概ね古雅で、俗謠調の歌も若干あるが、種々雜多の形式より成つてゐる。長篇の歌は一つもない。「浮れ草」所載の「津島踊」も上覽踊の一種であると云ふ。

雲の繪所なるもろこしまでも、踊けは靡く君が代にやふちよし、鶴千代までも踊らじや。チツホホホホテンチタフホホイヤ(あづま踊)

【備考】「玉露叢」に據ると、寛永十二年の正月には、仙臺の伊達正宗も將軍家光に踊を御覽に供してゐる。これは仙臺の殿樣踊と云ふべきもので、この歌舞は諸國の藩より奉つた筈であるから、諸藩に殿樣踊は存したのであるが、尾州藩のみがこれを後世に傳へてゐて、他藩の事は全く不明となつてゐる。

【參考】名古屋市史風俗篇○江戸文學研究藤井乙男○日本歌謠史高野辰之○近代歌謠集藤田徳太郎○日本の小唄藤澤衛彦○玉晁小歌集藤田徳太郎(歌謠と國文學二ノ二)　〔藤田〕

鳥羽繪(とばゑ)　繪畫【解說】戲畫の一種。鳥羽僧正覺猷は戲畫に巧みであつたと傳へられ、高山寺所藏の鳥獸戲畫の如きもその筆と喧傳されてゐるので、かくの如き樣式の滑稽なざれ繪を指して後世には鳥羽繪と呼ぶに至つた。いつ頃からこの名が出たか詳かでないが、江戸時代には鳥羽繪と稱し、日常茶飯のたわいもない滑稽事を、輕妙誇大の筆致で畫いた戲畫の一種が盛んに製作された。「本朝世事談綺」には、京の正田全暇が鳥羽繪を創めたとあり、「畫事備考」には、狩野昌運門下の佐野金巖が創めたといふ。それ等の點は詳かでないが、江戸時代には、滑稽洒落な趣味に伴うて耳鳥齋や春朝齋や、その他諸家の鳥羽繪版本も盛んに刊行された。〔田中(一)〕

登張竹風(とばりちくふう)　評論家【本名】信一郎【閲歷】明治六年一月、廣島縣佐伯郡能美島に生れた。廣島中學校・山口高等學校を經て東京帝大に入り、獨逸文科を卒業した。明治三十四年、高山樗牛がニイチエ主義を鼓吹した時、第一に樗牛に共鳴した彼は、「帝國文學」(別項)に據つてニイチエ主義のために健鬪し、大に氣を吐いた。その評論は感情に驅せて、やゝもすれば正鵠を失するの弊があつたが、早稻田派の人々を相手に論難大に努めた。この間、ニイチエ主義の小說と稱する「洗ひ髮」を發表したが、結構・描寫共に傑れたところなく、論客竹風の名を輝かすものでなかつた。彼も亦小說を斷念せるのみならず、ニイチエ主義の衰へると共に、文壇より遠ざかり、第二高等學校教授となつて仙臺に赴き、久しく獨逸語學教授に專心したが、今は閑地に靜養してゐる。【著書】泉鏡花と共譯した「沈鐘」「如是經」(ツアラツストラ)、「舌鋒錄」「氣焰錄」「ニイチエと二詩人」等がある。〔宮崎〕

飛梅千句(とびうめせんく)　「守武千句」を見よ。

土肥春曙(どひしゆんしよ)　俳優【本名】庸元【生歿】明治二年十月六日、熊本縣玉名郡長洲に生れ、大正四年三月二日、東京牛込新小川町一丁目六番地にて歿す。享年四十七。【閲歷】父は蕉石と號する書家。東京專門學校の文科第一期生たり。坪内逍遙に親炙してその提唱を受け、すでに在學中から專ら演劇改良を志してゐた。卒業後讀賣新聞・中央新聞の記者、或は母校の講師等を勤めたが、その間も演劇に對する不斷の研究に努めた。明治三十四年四月、川上音二郎一座の舞臺監督として、英・佛・獨・伊等歐洲諸國の巡業に從ひ、翌年九月歸朝した。三十八年、東儀鐵笛・水口薇陽等と謀り、坪内逍遙を顧問として易風會を興し、牛込清風亭に難樂「妹山脊山」を演じたが、これは新劇運動の實際的先蹤だと云ふことが出來る。三十九年第一次文藝協會(別項)成るや、これが演劇方面の主任となり、歌舞伎座に於ける演藝部大會に「桐一葉」の木村長門守、「ヹニスの商人」のポオシヤに扮したのが、世間的の初舞臺であつた。更に翌四十年本鄕座に於て「ハムレツト」を演ずるに及び、その新技藝が識者に成功を唱はれた。第二次文藝協會組織せられて附屬演劇研究所の幹事並に講師となり、やがて四十四年の帝劇公演では再び「ハムレツト」の主人公に扮して一般から非常な好評を博した。續いて「人形の家」「二十世紀」「思ひ出」「シイザア」等にも主役を演じ、新劇界の長老たる實を見せた。文藝協會の解散分裂に當り、東儀鐵笛・池田大佐等と結んで無名會を起し、大正三年「オセロ」「瀧口時賴」等に出演したが、同九月「靈驗」の飛雲上人を

最後の舞臺とし、癲狂症を以て斃れた。【批評】典雅な氣韻ある藝風で、つねに若々しい情熱を失はず、ハムレツトの如き當時獨歩の當り役とされた。上品な姿態端麗な容貌、華やかな聲とした調子と變化ある白(せりふ)で、單に先進といふだけでなく二枚目立役としては新劇舞臺の第一人者であつた。なほ新劇の草創期にあつて、演劇の理論及び實際に亙り絶えず論著に指導に當つた功績は、先覺者建設者としての彼を忘るべからざる存在にしてゐる。著書としては、「新譯社會劇」「社會劇鈔木秀子」があり、いづれも當時の實際舞臺に資せんがために執筆したものであるが、外に川上一座のために山岸荷葉と共譯した「ハムレツト」がある。（水木）

飛談語（とびだんご）　噺本　三冊　【作者】初編には宇津山人武藤房、後編「さしまくら」には鈍亭庵、三編「都鄙談語」には龜文字の署名があるが、その誰であるかを詳かにしない。【名稱】初編及び三編には俳書を與話とし、二編「さしまくら」は、特に下部の名稱を冠してゐる。下がかつた猥談を意味するのであらう。「とびだんご」は先に出た「團子餅」（別項）などの緣に由つた名稱である。【刊行】安永二年より順次に出た。【解説】殆ど新作噺である。中には舊話の作りかへも交つてゐる。例へば「團子餅」に「朝鮮人」と題して、朝鮮人が日本の蹴鞠を鳥と思ひ、鞠の破れるのを屁を放つて死んだとある話を、本書には「鞠」と題し、朝鮮人を田舍者として作り替へてある。一般に本書の話は言語の遊戯がなく、巧まない自然的なるをかしみを漂はしめてゐる。併しエロチツクな情痴の話が多いところに、やゝ眉をひそめしむるものがある。それも危いところで綺麗に落すあたりに作者の誇りがあつたと思はれる。（小池）

鳶尾琴（とびをごと）「傍琴」を見よ。

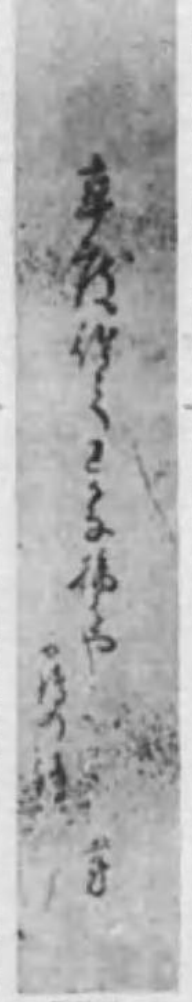
鳶眼集（とびのめじふ）　俳諧集　一冊　【編者】士朗門人　【刊行】文化三年　【解説】士朗等の連句を道彥の評したもので、第一の巻は岳輅・士朗・岱青・巒城の四吟歌仙、第二の巻は岱青・巒城・岳輅・士朗・白図・紀鳳・桂五の七吟歌仙である。この二巻を句主の名を匿して道彥へ送つて批評を求め、道彥はこれに思ふまゝの評言を下して返したのである。士朗一派の連句附方を味ひ、道彥の所見を窺ふべき好資料である。士朗等はこれに社中の歌仙一巻を加へ、且つ跋を附して刊行したのであるが、後「士朗五七集」に編入した。「道彥七部集」にも編入されてゐるが、それは評言のある二巻だけである。（鶯川）

都鄙問答（とひもんだふ）　心學書　四巻　【著者】石田梅巖　【刊行】元文四年　【解説】諸人と梅巖との問答を錄せるもの、書名は最初の「都鄙問答の段」に據つてゐる。全巻十六條、凡て實際生活に卽した問題が扱はれてをり、今讀んでも感銘が深い。本書は、同じく梅巖の「齊家論」（別項）と共に、心學の經典として重んぜられ來つたが、事實梅巖その人の思想に觸るゝには、まづ本書に據るべきである。（白石）

井礑（どぶかつちり）　能狂言　【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちと傳へられる。【梗概】勾當が出て菊一を呼び出し、嵯峨へ行く供をさせる。途中野川を渡るのに水の出たけはひがあるから、菊一が瀬踏みをして見ると言つて石を打つ。どぶどぶと沈むのでこゝは深い、上手へ打つと、どぶりかつちりと當るので上が淺いと知り、やがて勾當は菊一に自分を負うて渡せと言ふ。そこへ通行人が來かゝり、勾當に代つて負はれて渡る。すると勾當は、汝ばかり渡つてなぜ某を置いて行つたと言ふ。菊一は合點が行かないが、再び立ち戻つて勾當を負ひ、深い所に陷つて轉ぶ。辛うじて上陸し、携へた竹筒（ささへ）（酒器）を出して、兩人酒を飲み始める。通行人は、負はれて川を渡つた上に、又酒も飲まうと立ち寄つて飲む。こゝに於て勾當と菊一との間に爭が始まる。併しこれは通行人の惡戯から起つたと氣附き、兩人通行人を追ひ込む。【構想】座頭の川渡と云ふをかしみのある事柄を設け、これに通行人の惡戯を絡ませてゐる。「猿座頭」の作意も同樣であるが、餘り優れた趣向ではない。【影響】十返舍一九の「道中膝栗毛」（東海道三編）掛川より袋井への條、鰻井川のところに、この趣向を使つて盲の川渡を仕組み、北八が川中へ振り落される事にしてゐる。（野村）

杜芳（とはう）「櫻川杜芳」を見よ。

土芳（どはう）　俳人　【姓名】服部保英。通稱半左衞門　【別號】蓑中庵・蓑虫庵、初め蘆馬。【生歿】明暦三年に生れ、享保十五年（二三九〇）正月十八日歿す。享年七十四　【墓所】伊賀上野郊外長田村西蓮寺　【俳系】芭蕉門　【閲歴】伊賀上野の藩士で、內海流の槍術に達してゐたと云はれる。伊賀の上野に於ける芭蕉に因み深い所謂伊賀五庵のうち、蓑虫庵は土芳の建てたもので、芭蕉が面壁の達磨の畫に、「蓑虫の音を聞きに来よ草の庵」といふ句を讃した自畫自讃をくれたので名づけたのである（蓑虫庵集）。蓑虫庵は二度ばかりも荒廢したが、再興されて今日なほ遺存してゐる。芭蕉が大阪で病歿して遺骸が義仲寺へ運ばれた時、卓袋と共に伊賀を代表して義仲寺へ馳けつけて、初七日の追善百韻に加はり（枯尾華）、その歸りに芭蕉の遺髮を携へ歸つて、松尾家の菩提所愛染院に故郷塚を築いた。芭蕉歿後も師の遺教を堅く守り、伊賀俳人を率ゐて變風或は邪路に走るなどの事あらしめなかつたのもこの人である（伊賀實錄）。【著作】三冊子三冊（別項）（安永五年刊）○蓑虫庵集（自撰句集。寫本。蕉門名家句選所收）○横日記（蓑虫庵風士會合の日記。存否不明）。【作風】「三冊子」によつて見ると、同門中芭蕉の意を最も能く理解してゐたのは、この人であつたやうに思はれるが、唯それに比べては、作の技倆はさほどでないやうに思はれる。去來は、「仇なる事土芳に及ばず」（旅寢論）と云ひ（この「あだ」は、あどけないやうな作風を云ふらしい）、伊賀には芭蕉在世中からこの風があつて、先師の敎であらう（旅寢論序）と云ひ、其角も「是先師の一體なり」（花實集）と云つてゐるが、さう見られないでもないやうであるが、併しそれとしても技倆は優れてゐるとは云へない。【參考】冬の里（廣岡蒼友）○冬扇一路（附錄。伊賀實錄）白井鳥醉　○芭蕉翁全傳　川口竹人　○ばせを翁正傳集　竹二坊　○蕉門諸生全傳　遠藤曰人　○蕉門の栞　蓑秋・遠水・求古　○俳林小傳　中村先久　○俳諧人物便覽　三浦若海　○古蔵集　無塵・梨香　○俳諧芭蕉翁の面影　木津碩堂　（潁原）



土芳懐紙

留り字（とまりじ）「切字」を見よ。

富岡先生（とみをかせんせい）　新派脚本　三幕七場　【原作】國木田獨歩　【脚色】眞山青果　【由來・興行】大正十四年二月、雜誌「苦樂」に發表。「酒中日記」と同樣に、井上正夫のために書き卸されたと傳へるが、井上より先に澤田正二郎によつて大正十五年五月邦樂座に上演。井上は昭和三年にまづ映畫化し、翌年四月市村座で興行。

【役割】富岡先生（井上正夫）、お梅（英太郎）、大津定次郎（鶴島昇）、高山文助（伊志井寛）、お稲（村田式部）、江藤侯爵（小堀誠）、細川繁（花柳章太郎）。

【梗概】（序幕）富岡先生は、その昔高機塾で同門だつた江藤三輔が、たとひ今、大勳位で、侯爵で、朝鮮總督であつたにしても、昔馴染の村にただ歸つて來るといふだけの事に、村がそれを光榮にして大騷ぎをしてゐる事が氣に入らないのである。殊にその出迎へをさせるために、小學校の子供まで歸さずにあるといふ事を聞いて、一層機嫌を惡くする。そして侯爵が結局來ない事になつたので、元の弟子で今は小學校長の細川繁に、その違約を責めて來いといつても細川が躊躇するので、愈々風雲險惡になる。そこへ東京から歸省中の、これも元の弟子の大津定二郎が來る。大津には末娘のお梅を話はさうとしてゐる先生である。急に機嫌を直す。が、それも大津が、舊師の建碑に不同意だといふ侯爵からの傳言をすると、すぐ又腹を立てる。而も大津までそれを侯爵の見識だといふので、先生は大津を面罵する。やがて先生は細川を連れて小川へ釣に行く。そこで細川から大津がお梅を捨てて外の女と結婚することを聞かされる。さすがに先生は言葉が出ない。だが直ぐに先生は大津の代りに東京にゐる同じ弟子の高山文助を思ひ出し、急にお梅を連れて上京する。その跡の村塾では、密かにお梅を愛してゐる細川が一人寂しくもの思ひに沈む。（二幕）大磯の江藤侯爵の別邸へ大津と高山とが來て、富岡先生の身の上を侯爵に依頼する。先生とお梅とが來る。先生は上京後凡ての舊友たちと衝突し、遂には高山まで氣に入らなくなつてゐる。だが娘の身を思ふとさすがに氣が挫け、最後に侯爵にお梅を預けようとして來たのである。侯爵はわざと先生を腹たゝせるやうにする。先生はそれをぢつと堪へて只管娘のことを頼む。侯爵が承諾するので、先生は無邪氣に大喜びをするが、「今も大津と高山が來て心配してゐた」といふと、急にまた屹となる。先生は氣に入らない弟子達から同情されることに我慢が出來ないのである。憤激の果は侯爵までも氣概のない口舌の徒と罵る。そして大津と高山とが止めるのも諾かず、お梅を連れて立ち去る。（三幕）東京から歸つた後の富岡先生は、めつきり老衰し、不機嫌は募つて行く。外交官へ片附いてゐる姉娘のお稲が、侯爵の意をうけてお梅と高山のことを話せば、それはお梅が父の辛いのを高山に訴へたのだらうと僻んだり、お梅を慰める細川を見ては、お前は師匠を見舞に來るのか、それとも娘の機嫌をとりに來るのかと極めつけたりする。やがて江藤侯爵がハルビンで怪我をしたといふ噂が村に傳はつて來る。だが先生はそれを信ぜず、却つて江藤を愧死させるのだといひ、急に高機先生の建碑を今日中に仕上げろと言ひ出す。そして折からの雪の中を裏山の建碑所へ上つて行き、誤まつて碑石を倒し、その下になつて大怪我をする。間もなくその人事不省になつた先生は運ばれて來て、お稲・お梅・細川たちに介抱される。その時ハルビンで不逞の徒にピストルで狙撃された侯爵が落命したといふ確報の號外が來る。それを聞いて先生は、ムツクリ起き上つていふ、「江藤は立派に血を以て君國に酬いてくれた。おれは自分の不明を恥ぢない。……江藤は高機先生の弟子だ、おれの舊友だ」と。そして細川にお梅の一身を託し、江藤々々と呼び續けながら先生も死んで行く。

【解説】原作は明治三十五年九月、雜誌「教育界」に發表された小説である。原作には、江藤侯爵の歸省問題、舊師の建碑問題、先生の上京中の事件などはなく、外交官夫人の姉娘は原作にない人物である。結末の先生の最期も全然脚色者の創作で、原作では高山がお梅を娶に望んでゐたのを、これも落伍者である小學校長細川と平和な家庭を作ることになり、先生も安心して死んで行くといふ事になつてゐる。（久保田）

富岡戀山開（とみがをかこひのやまびらき）　脚本　四幕十二場　世話物　【作者】並木五瓶　【角書】「玉屋新兵衞・三國小女郎・出村新兵衞」と三行にある。【通稱】「二人新兵衞」或は「出村玉屋」　【諸本】書卸臺帳。演劇脚本集（文藝叢書）・脚本傑作集（續帝國文庫）・並木五瓶世話狂言集（日本戲曲全集）等所收　【興行】寛政十年正月十五日初日、江戸桐座「宿衣始小袖曾我」の二番目狂言。

【役割】出村新兵衞（澤村宗十郎）、船頭九十郎・玉屋新右衞門（嵐三八）、手代三四郎（大谷友右衞門）、仕事師豐毛の金太郎（坂東三津五郎）、玉屋嫁おえん・三國屋小女郎（瀬川菊之丞）、玉屋新兵衞（市川八百藏）等。

【題材】越前三國の玉屋新兵衞に關する巷説は明かでないが、元祿の初めには已に俳諧として謳はれてゐた事は噺本の「枝珊瑚珠」（元祿三年）中の「しんべどの」に窺はれ、「落葉集」（寶永元年）には、「三國玉屋節」として收められて居り、それが人口に膾炙した事實は「傾城新色三味線」（享保三年）等でも知り得るが、今日なほ「俚謡集」京都府の部所收の「御國節」に轉訛して傳へられる以外に、キヤリ（明和二年の長唄「花若葉圖繪」に見ゆ）や、「浮れ草」（文政五年）所收の「越前節」等としても行はれた。その他享保の頃には、既に各派の淨瑠璃や歌舞伎・浮世草子に脚色されて有名であつたが、五瓶はそれを借りて深川の岡場所を背景とする清新な世話物につくり上げたのである。【梗概】（序幕）（深川摩利支天橫町・同仲町梅本）玉屋新兵衞は何事か心に期するところがあつて、茶屋梅本に、遊女三國屋小女郎を招く。初會の客なのに小女郎は深い思慕の情を抱きそめる。その折、隣の寢床に臥してゐた芙原藤兵衞は、隔ての屏風を剝いて密に新兵衞の印判を盜み取る。（二幕）（芝神明境內）藤兵衞と猪牙舟の船頭三ぶと玉屋の手代三四郎との密談。それによると、遊女小女郎はもと下總結城の家中鶴飼兵太夫の娘で小菊と言つたが、無頼の兄九十郎のために欺かれて三國屋に賣られたのであつた。藤兵衞も同家中の侍で、小菊に戀慕してゐたが、惡事のため追放されたものであつた。藤兵衞は盜んだ印判で玉屋を陷れ、小女郎を手に入れようと企み、三四郎も亦新兵衞の許嫁おえんを我が物にせんものと共に謀議する。一方、玉屋新兵衞は、舊主兵太夫の息で江戸に流浪中の鶴飼九十郎を庇護してゐるが、今日も社前に會し

てその不身持を諫めるが聞き入れられない。（同いろは茶屋）結城家の重寶鯉の一軸の盜賊九十郎を召捕るべく出府してゐる氏原勇藏は、新兵衞を捉へて犯人を渡せと迫るが、新兵衞は十日の猶豫を乞ひ一軸を取戻さうと約する。（元の境內）手代三四郎はおえんに言ひ寄るが、玉屋出入の仕事師金太郎の頓智で耳孔に吹矢を射込まれて悶絶する。藤兵衞・三ぶは贋證文で新兵衞を強請るが見世物の羊が現はれて證文を喰つて了ふ。（三幕）（深川八幡境內・同二軒茶屋）玉屋新兵衞は、九十郎に逢ひ樣々諫めた上一軸を取戻しに赴かせる。小女郎を身請しようとしてゐる出村新兵衞と玉屋新兵衞との達引。玉屋は憤つて出村の額を傷ける。折しも九十郎から一軸請出しの代金二百兩を持參せよとの報せに、小女郎・玉屋は賞恭するが俠氣の出村は遺趣を捨てて身請金の百五十兩を投出す。玉屋は恩に感じ自らの額を傷け、小女郎苦面の五十兩と合せて九十郎の許に急ぐ。（裏の宮茶飯茶屋）新兵衞を誘ひ寄せた九十郎は、藤兵衞・三ぶと共に贋一軸で二百金を欺き奪はうとするが事露はれて逃走する。（猪の堀）九十郎に改心の望みなきを知つた新兵衞は、一軸詮議の期限が過ぎたので絶望の極、雨中にこれを斬殺する。折から來合せた出村新兵衞とだんまり模樣の見得。（四幕）（玉屋內）玉屋の後家は新兵衞の父新右衞門を後夫としてゐるが、手代がはりの實の甥三四郎を愛し新兵衞を憎惡する。許嫁おえんを縫ひ深川に通ひつめる新兵衞を今日も合はぬ帳尻の事で詰責するが、出入りの仕事師金太郎の執成で急場が救はれる。出村新兵衞は始めておえんの實の兄と明かして訪れて來る。死を決した小女郎も驅けつける。藤兵衞が強請の種にと三四郎に屆けて來た小女郎新兵衞の比翼紋の羽織をおえんは何心なく取上げると、小女郎に宛てた新兵衞の色文が落ちる。兄の出村はそれをおえんの不義の濡文と誤解し、小女郎を身請しようとしたのも、妹を無事に新兵衞と添はせたいための計らひであつたものをと歎き、妹の不義を知つた今は、新右衞門への義理立てからも、その面前でその文を讀み上げられたいと新兵衞に迫るが、やがてそれが玉屋から女への文と知れると、今度は新右衞門が、出村への義理合ひから、伜新兵衞に讀ましめようとする。おえんは仲に立つて煩悶する。新兵衞は比翼紋の羽織を剝いて小女郎と切れることを誓ひ、おえんと祝言しようと申出る。押入に隱れた小女郎は嫉妬する。折から氏原勇藏が新兵衞を召捕りに來る。新右衞門・新兵衞・小女郎は交々その罪を負はうと爭ふ。出村は猪の堀で拾つた一軸入質の通帳を玉屋に與へる。（奥座敷）三四郎はおえんを捕へて遂電しようとするが金太郎に謀られ、玉屋の姿を入れた葛籠を擔いで滿悦して出て行く。暗闇の中に、小女郎・おえんを取違へて述懷する兩新兵衞のをかしみ。玉屋新兵衞は金子を得て、一軸を請け出すべく驅けて行く。（江戸橋）一軸を背負つた新兵衞が、大勢の捕方を相手に立ち廻り。出村新兵衞・金太郎が、惡人共を追つて出て落合ひ、賑やかに幕。

【脚色】役者を巧みに捉へ、路考菊之丞に生娘と娼女とを演じ分けさせたのは見物を喜ばせたであらう。特に友右衞門の三四郎が吹矢を吹き込まれて啞となる仕打は大好評であつたと言ふ。深川の岡場所や芝神明の情景の寫生的な描寫にも五瓶獨特の緻密な面白味を見せてゐる。猪牙舟・梅本・陰子の覗穴・裏の宮の茶飯茶屋・二軒茶屋・洒落地口等で深川好きの見物を堪能せしめ、神明の吹矢や羊では見物を巧みに舞臺技巧に活用して抱腹絶倒せしめてゐる。江戸文藝全體が漸く堅實なリアリズムを失ひ、手法としてのみ皮相的寫實を採り來つてゐた時期に際して五瓶の諸作がその寫生風の描寫を展開させて行つた事は十分注意されねばならぬ。なほこの作でも五瓶の臆病な程の常識的合理主義が全篇に漲つてゐるが、それが戲曲の全構成を緊密なものにすると共に、一方詩的情調を薄め、奔放さの代りに鈍重味を加重するといふ五瓶の作品共通の作風を示してゐる。【史的地位】三國小女郎・玉屋新兵衞の情話が巷間の俚謠から淨瑠璃に移されて流行したのは、「傾城歌三味線」（享保十七年）の序に、「梅の難波に時花淨瑠璃」とあるのや、「御伽名代紙衣」（元文三年）に「三國玉屋の淨瑠璃語りて」とあるので、大體享保頃と覺しく、豐後節に語られたのであらう。「道行比翼の初旅」（宮古路月下の海所收）や、「玉屋新兵衞道行三國小女郎」（宮古路豐後の海所收）が現存するが、恐らくその頃の曲であらう。義太夫節ではやゝ下つて「三國小女郎曙櫻」（寶曆五年豐竹座）がある。歌舞伎でも、享保十八年八月大阪北新地嵐座に「三國小女郎」が演ぜられてゐる（中村十藏の新兵衞）。爾後「近江源氏軍功鑑」（享保二十一年、江戸中村座。初代宗十郎の新兵衞）や「江戸花陽向曾我」（明和六年、市村座。羽左衞門の新兵衞）などがあるが曲は詳かにし得ない。小說では「傾城歌三味線」（別項）が著名である。五瓶の本作は「[illegible]出村助花」（文化元年二月、中村座）以後、種々の替名題で屢々上演され今日に及んでゐる。改作物には、二世如皐の「艷色籬操」（文化五年三月、中村座二番目。日本戲曲全集所收）や、南北の「玉藻前御園公服」の第二番目（文政四年七月、河原崎座。大南北全集所收）や、更にこれを補訂した「月出村廿六夜詣」（元治元年八月、市村座）等が知られてゐる。〔近藤〕

【參考】歌舞伎年代記〇江戸芝居年代記〇大歌舞伎外題年鑑〇京阪歌舞伎年代記〇並木五瓶の事を記す（三木竹二「つきくさ」所收）

富永平兵衛（とみながへいべゑ）

脚本作者【本名】未詳【俳號】辰壽【歿年】未詳。但し元祿十三年迄には歿してゐる。【閱歷】未だ傳記らしいものが發見されない。歌舞伎脚本作者の祖といはれた福井彌五左衞門に次いで、名作者と謳はれた斯道の古參作者で、延寶・天和の頃、上方に榮え、元祿年代まで活躍した。延寶八年の顏見世役番附に、初めて狂言作りとして自己の名を揭げたが、この事以來、世の嘲笑をかつて、人氣が落ちたと傳へる。併し彼は近松の現はれる前の上方の作劇界では重鎭であつた。當時は主として大阪劇壇のために奮闘してゐたらしいが、晩年近くの元祿年代に入つては京都で活動した。然るに當時は、作劇法の著しい進歩もあり、京都は近松の作風には最も適した土地であつただけに、大阪に業を積んだ彼の態度とは、全然相反する點が多くあつた。かくて作劇家としての彼の晩年は、相當淋しく終りをつげた。なほ彼は、早く談林の俳諧を學び、演劇界に於ては、斯道の先達であつたらしい。【作品・作風】全盛時代の延寶天和年間の作については、殆ど記錄がなく、元祿年代のものについてのみ所傳が發見せらるるに過ぎない。それ等の名題は左の如くである。

丹波與作手綱帶（元祿三年。京、村山平右衞門芝居。丹波與作）〇鹿島の要石（元祿四年。山下半左衞門芝居。常陸のお家騒動に要石傳說）〇娵孝行記（元祿五年か。京、山下半左衞門芝居。但馬國のお家騒動に幼兒の敵討）〇武道達者（元祿六年か。京、小佐川重右衞門芝居。由良兵部讀見の敵討）〇日本月蓋長者（別項）〇業平河內通（元祿七年。京、小佐川重右衞門芝居。河內通の改作）〇鎌倉女郎花（元祿九年。大阪、嵐三右衞門芝居。曾我）〇熊野山開帳（元祿九年。大阪、嵐三右衞門芝居。お家騒動に熊本觀音利益）等。

右のうち、「娵孝行記」「武道達者」「日本月蓋長者」等は傑作の部に入れらるべきであらう（元祿時代の三大作といはれる「娵鏡」も彼の作といふ傳へがあるが、如何か）。彼の作は、すべてがお家騒動物と見られ、而も近松の作等に比して單なる輪廓に止まらず、騷動事件が主題になつてゐる場合が多い。よつて直接に內容を問題とするならば、近松の作より優れてゐるとも考へられる。彼の脚色上の特徵は、かゝる時代物の中で、殊に太刀打物を得意としたに拘はらず、輕快な滑稽味を巧妙に按排し了せる點にある。脚色法の多方面を自由にするについては、元祿年代に他に例を見ぬ作者であつた。彼の作は早く大阪に於て認められたと思はれるのに、何故か、元祿年代に入つて、京都に於て土地に不適合な時代物の作をつづけ、遂に新進の近松に壓倒されたのであつた。併し上方の時代歌舞伎、特に敵討物の如きは、彼によつて始めて脚色法を示されたのである。爾後大阪が特有の時代歌舞伎を發達させてゆく素地は、彼によつて構成されたとも見られる。なほ彼の著にかゝる「藝鑑」（「耳塵集」（別項）等と共に役者論語と稱される。新群書類從・燕事文庫に所收）は、衆道事、傾城事の狂言を揭げた文獻として珍しく、俳書「道頓堀花みち」は、當時の劇界人と俳壇との接觸を如實に物語るものである。

【參考】歌舞伎脚本史（國文學講座）〇江戸歌舞伎目上（日本文學講座）〇元祿時代の歌舞伎劇 高木助藏（近世演劇考說）〔守隨〕

富宮筍（とみのみやのけ）

假名草子風　一卷【作者】不詳【刊行】寬永四年か。【解說】寬永三年夏の末頃より京に富籤の流行した光景をうつした戲文。德川文藝類聚第一編事實小說に收む。〔小泉〕

富仁親王嵯峨錦（とみひとしんのうさがにしき）

淨瑠璃　五段　時代物【作者】紀海音【名稱】發端の富仁親王の嵯峨紅葉遊覽の條による。【初演】明和版「外題年鑑」には、寶永六年六月豐竹座とあるが、內容や現存正本の奧附等から見て、享保六年かとの說がある。【諸本】七行八十五丁本。淨瑠璃名作集上卷（日本名著全集）所收。【題材】近松作の「傾城反魂香」（別項）を書き替へたものであるが、狩野雪姬の繪と左甚五郎の彫刻を主に、その背景として富仁親王（花園帝）の兄宮蟬海僧都の叛逆事件を採入れた。【梗概】（初段）永享二年の暮秋、男裝された富仁親王は、嵯峨の紅葉遊覽に行かれる。先帝の一の宮で親王の兄なる高峰の蟬海僧都は、帝位を窺ひ、親王を失はうと高峰の紅葉へと招いたが、關白兼定公、早くもこれを看破し、檢目の千王丸が機轉と奮鬪を以て危地を脫した。（二段）親王は千王丸の妻雪姬に懸慕と稱し、僧都を迎への使者としたが、千王丸は僧都を打擲して逐ひ返し、雪姬と共に近江へ落ちる（狩野雪姬道行）。醒ケ井で再び追手に追付かれてこれを打拂つたが、雪姬の父譜手纖部に諫め諭され、改めて勅命によつて、雪姬には十日の間に高野山の寶藏に納められた弘法大師筆の小野小町の姿繪を寫すべき命が下り、成就の曉は、親王は雪姬を思ひ止まらせ給ふ事となつた。千王丸は人質として引かれる。（三段）僧都は西嵯峨の別院を內裏に擬し、天下を奪ふ謀を練る。人形造りの名人左甚五郎を捕へ來り、僧都は自ら富仁親王と稱し、その老母を楯に、雪姬の繪に對抗すべき小町の像を七日の間に刻めと命ずる。甚五郎は歸宅後、苦心最中、浪人時代に討殺した度會源吾の妻子が巡禮姿で訪ねて來て、敵討を迫つたので、事情を話して期を延ばすために、女房を人質に渡す。（四段）甚五郎は、雪姬の住居に忍び入つて、姬が工夫に疲れた態を窺ひ知つたが、いつか木屑に倒れ臥してしまつた。姬も眠りに入つた。二人の魂が胸から出て空中に迷ふと見えたが、館は忽ち照り輝いて、古の小町の姿が浮び出でた。草紙洗小町から通小町、卒塔婆小町へと移り、七小町の有樣がまざ〳〵と現はれて、二人は共に靈感を得た。（五段）甚五郎は小町の人形を、雪姬も姿繪を持つて參內する。親王は千王丸を殺したと僞つて僧都に叛逆を自白させ、一味を悉く縛せしめた後、始めて女帝の姿で出御される。雪姬は繪所を命ぜられ、甚五郎は細工の司を賜はる。源吾は僧都一味と知れたが、一子は特に瀧口に召されて、甚五郎への怨念を捨てさしめ給ひ、僧都は遠島となつた。【解說】全篇の結構は大規模で、場面の變化と詩趣に富み、海音の作中傑作となすべきであらう。狩野雪姬の件は既に宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姬」に見られたが、本曲の方が戲曲的に優れてゐると思ふ。三段目は照應變化の效果最も著しい脚色で、場面としては、甚五郎內の場が優れてゐる。四段目夢の場は七小町の案で、構巧を利用した舞臺面の興を思はせる。七小町の趣向は、海音が更に補綴して享保十二年「七小町」を發表した。甚五郎內の場は、後に「京人形」（左甚五郎參照）として完成され、雪姬の件は、「祇園祭禮信仰記」（別項）に發展した。〔守隨〕

【參考】淨瑠璃名作集解說 高木助藏

富本延壽

「淸元節」を見よ。

富本節（とみもとぶし）

淨瑠璃の一流派【名稱】流祖富本豐前掾の名に據る。【沿革】富本豐前掾は常磐津文字太夫（常磐津節參照）の門に出で、寬延年中一派を起し、爾後芝居に出勤してゐたが、明和元年歿するに及び、門下の名手齋宮太夫は、松平南海侯やその他の庇護を得て、師の遺孤午之助を補佐してよく斯流の發展に努めた。午之助の二代豐前太夫また名人の譽れ高く、安永から寬政にかけては常磐津と對抗して、その勢力遙かにこれを凌駕し、富本を知らなくては江戸音曲を語る資格がないとまでいはれた。かくて斯流は二代と齋宮太夫との力によつて大成すると共に、その基礎を固めた。然るにかゝる程の全盛も齋宮太夫事延壽が享和に歿し、二代豐前掾が文政に歿してからは、分派の新興淸元節（別項）に漸次壓倒されて、三代・四代を經た明治初期には昔日の面影なく、四代の歿するに至つて富本の芝居出勤は勿論、社會的位置も殆ど失はれた。今は四代門弟筋で新派家元の富本豐前の娘二代富本豐前によつて滅亡を免れてゐる。

【傳系】〔初代〕本名、鶴田彌司。初名、宮古路品太夫・常磐津小文字太夫。別號、豐洲。明和元年十月二十二日江戸に歿す。享年四十九。

法名、榮廣院摩譽良聲流香居士。墓所、淺草幸修院法福寺。但し市外王子に改葬。初代常磐津文字太夫がまだ宮古路と稱した時代の門下（一説に初め宮古路豐後掾門下）。小文字太夫の名で師の脇語を勤めたのは、延享元年八月中村座の「浮名の毛氈」が最初で、同四年十月師が常磐津と改姓すると同時に彼も亦改姓した。然るに寶暦二年師と分離して一流を立て、その最初に語つたのが「歲朝嘉例壽」だと傳へる。受領して富本豐前掾藤原敬親と稱へたが、寶暦十年十一月更に筑前掾と改めた。門下から齋宮太夫（淸元節祖）と大和太夫との名手を出した。〔二代〕幼名、午之助。別號、豐志。法名、榮譽院量譽壽松道聲居士。文政五年七月十七日江戸に歿す。享年六十九。初代の實子。十歳で父に別れ、齋宮太夫が後見。明和三年七月中村座に亡父三回忌追善として「文月世一夜」（下卷）を語つたのが初舞臺で、同七年十一月豐志太夫と改め、安永六年正月二代豐前太夫襲名。松平不昧公から「七重八重野邊のにしきや櫻草」の句を與つて賜はつたので、初代の鶴の丸の紋所を櫻草に改め、爾來斯流の紋所と定め、替紋を銀杏鶴輪道結一輪櫻に作つた。文化十四年十一月受領して豐前掾藤原敬政と稱した。幼時から美音を謳はれた名人で、斯流の名曲の多くは彼の全盛期に成つた。實子なく、五代瀨川路考の兄の豐太郎を養子としたが、夭折した（文化十三年七月）。〔三代〕幼名、壽太郎。後に林之助。別號、豐珠翁。文化二年に生れ、明治九年五月二日歿す。享年七十二。江戸日本橋人形町豐屋善八の子。十四歳で養子となり、文政五年十一月市村座で午之助を名乘つて初舞臺。同十一年三月同座で、三代豐前太夫を襲名して「更名櫻の壽」を語つた。嘉永三年正月受領して豐前掾藤原政弘となり、同五年更に豐前大掾と稱し、安政六年隱居して豐珠（翁）翁と改めた。明治四年三月中村座で、（祖父豐前掾の一世一代と共に）、彼の一世一代として「壽名殘島臺」を語つた。〔四代〕本名、保太郎。別號、豐洲。天保元年六月十六日に生れ、明治二十二年九月七日歿す。享年六十。三代の長男。弘化二年正月中村座で、豐榮太夫の名で父の脇語を勤めたのが初舞臺。嘉永五年正月、四代富本豐前太夫を襲ぎ、明治三年豐洲と改む。彼は斯流中興の名人といはれたほど、非凡な藝能を有し、斯流再起に力を盡したが、保守的な富本は江戸人の好尚から厭かれ、昔日の全盛を挽回することが出來ず、遂に淸元に壓倒さるゝに至り、不遇に世を終つた。〔五代〕幼名、玉次郎。明治十三年八月二十三日歿す。享年二十。明治九年五代豐前太夫襲名。〔六代〕四代と同人。五代夭折後、適當な相續者がないので、再び家元を繼承。明治十三年十一月、豐前掾と稱し、中村座の「年市廓內入」と「廓文章」とを語つた。明治十七年先代富士松加賀太夫（常磐津賀太夫）を養子に迎へ、豐榮太夫と名乘らせたが、故あつて間もなく離緣。六代歿後一時中絕したが、富本はこれで一段落を告げたといつてよい。〔七代〕本名、榎本淸久。骨董屋の次男。明治三十一年春、六代の三絃方名見崎友治の奔走で、彼の祖父が先代の藝を愛し、その家に寄寓せしめたといふ緣故から、九歳で豐志太夫と名乘り、七代家元を相續。同四十二年六月、七代豐前太夫を襲名。後に美音會幹事住田淺吉夫人に豐前太夫の家名を預けられた。〔新派豐前〕本名、坂田らく。安政四年正月十一日淺草に生れ、昭和八年八月三日歿。享年七十七。三代及び四代に師事。夫に死別後、二代名見崎得壽齋の名見崎流に入つて得梅の名を得、その後七代宗家の門に走り、豐鶴と改む。明治四十二年九月、新派を樹立して家元の認可を受け、富本都路と改名。大正九年豐前を襲名、斯流を今日に傳へた。〔三絃方〕斯流の立三味線を彈いた主なものに宮崎忠五郎（豐子）・名見崎德治・鳥羽屋里長・佐々木市四郎・三保崎兵助等がある。

富本節正本「名關山路彈」

【詞章】その大部分は劇場音樂として濡場・道行・所作等に用ひられたが、また座敷にも語られたので、端物が多く、段物は至つて少い。時代物と世話物とが相半ばしてゐるが、時代物でも世話に碎けてをり、これを道行物・準狂言物・浮世風俗物・祝言物等に分け得られる。その內容や構造も一樣でないが、概ね淀里趣味を中心としたもの多きを占め、就中天明趣味のものに名作がある。又これを文學的に見ると、「長生」の如き傑作もあるが、所作事地として役者本位に作られた爲めに、文理の整はない作も尠くない。併し上品で、優艶な詞藻に富んでゐる。作詞者は松平南海侯の如きもあるが、大部分は狂言作者で、その主なものは壕越菜陽・金井三笑・初代二代櫻田治助・中村重助・桝山金八・初代二代瀨川如皐・松井由輔等である。【曲節】豐後節（別項）のよく江戸化されたもので、また江戸淨瑠璃を最も醇化したものである。常磐津（別項）よりも派手であるが、高雅で、樂曲の組織からいへば、師流の常磐津との差違は殆どないが、富本の趣味なり、表情なり、又は發聲の差違によつて特色が自づと生れたものである。即ち個性化が擴大されて一つのスタイルとなつたのは、恰も富本が淸元となつたと同樣である。その特徵は纖麗で、詞章が明瞭に聞え、且つ子音に節をつけず、聲を變ぜしめるところに妙味がある。從つて常磐津よりもその節廻しに於ける技巧が多いともいへる。調子に無理がないために富本を左程知らぬ人でも、箏曲の奧義を究めた程の人には、琴の糸に乘つて、斯流の曲が彈奏さるゝほど、他流にも珍重されたものであつた。併し習得が困難なために、今日の凋落を見るに至つた。

【傳存曲】語物は約五百番に上るといふが、傳

存曲は七十種ぐらゐで、そのうち普通に行はれるものは四十種內外ある。【代表曲】〇歲朝嘉例壽（通稱長生）（作詞、傳松平宗衍（南海）。初代豐前掾が獨立して一派を樹てた最初の春興行に、師から賜はつたので、これに節附をしたものと傳へる。富本の祝言物中第一位の名曲）〇百夜菊色の世中（通稱關寺）（小町參詣）〇夫婦酒替奴中仲（通稱鞍馬獅子）〇其俤淺間嶽（通稱淺間）〇新曲高尾懺悔（通稱高尾さんげ）（作詞、櫻田治助。作曲、名見崎德治。天明二年八月中村座。顏世のために非業の最期をとげた高尾の亡魂が、土手の道哲に懺悔話をする趣向）〇春夜障子梅（通稱夕ぎり）〇徒愛戀曲者（通稱松風）〇幾菊蝶初音道行（通稱忠信）（作詞、二代瀨川如皐。作曲、二代鳥羽屋里長）。因みに文化・文政時代は「道行繁飛脚」（梅川忠兵衛。現存）と「夜花㚑三日月」（三日月おせん。廢絕）とが代表的名作とされ、また大好評を博したものに「道行瀨川の仇浪」（お半長右衛門。殆ど廢絕）があつた。

【參考】聲曲類纂・同補遺（新燕石十種第四）〇江戸時代音樂通解（町田博三）〇富本節の歷史（中內・田村共編（日本音曲全集第九卷））〇日本歌謠史（高野辰之）〇歌舞伎圖說（守隨・秋葉共著）〇劇代集〇唄と三味線（中川愛氷）〇近世邦樂年表（富本）〇日本歌謠集成卷十　（秋葉）

富本豐前太夫（とみもとぶぜんだゆう）「富本節」を見よ。

富本豐前掾（とみもとぶぜんのじよう）「富本節」を見よ。

留め字（とめじ）「切字」を見よ。

知章（ともあきら）「平家物の謠曲」を見よ。

巴（ともえ）「木曾物の謠曲」を見よ。

與淸（ともきよ）國學者【姓名】高田氏。本姓小山田氏。字は文儒。通稱將曹。【號】松屋・知非齋・擁書倉等。【生歿】天明三年三月十七日、武藏國多摩郡上小山田村に生れ、弘化四年（二五〇七）三月二十五日、江戸で歿した。享年六十五。【法名】天寶院性譽知非文儒居士【閱歷】小山田氏は、葛原親王を遠祖とする。その第十三世別當有重初めて小山田を稱し、後、また田中を氏として與淸の父本孝に至つた。與淸二十四歳にして江戸の商家高田氏の養子となつた。一に高田與淸ともいふのはその故である。高田家は富有であつたので、與淸は漢學を古屋昔陽に、國學を村田春海に學び、群書を蒐むること五萬卷に及び、家業の傍ら學に勵み、平田篤胤・伴信友と共に三大家を以て稱せらるゝに至つた。文政八年、四十三歳にして家を孫淸常に讓り、本姓小山田氏に復した。その後、學を以て華頂宮尊超法親王に仕へ、また德川齊昭の聘に應じて水戸の史館に出仕し、「八州文藻」「扶桑拾葉集注釋」等を撰進した。高田早苗氏は曾孫に當る。

小山田與淸像（高田早苗氏藏）

【著作】〔註釋〕竺志船物語二冊〇十六夜日記殘月抄三冊〇佛國曆象集一冊〇樂章類語抄五冊（別項）〇佐野のわたり一冊〇萬葉集標註一冊。〔考證〕松屋叢考三冊（別項）〇武州高幡不動緣起一冊。〔隨筆〕松屋叢話二冊（文政十一年刊）〇松屋筆記三冊（各別項）〇擁書漫筆四冊（文化十三年刊）〇積讀談一冊〇國號記一冊。〔日記紀行文集〕擁書倦日記（近世文藝叢書第十二編）〇懷舊日記一冊（東京專門學校講義錄附錄）〇相馬日記四冊〇鹿島日記二冊〇松屋棟梁集一冊（別項）。〔雜〕藥師寺金石記一冊（文政十一年刊）〇百人一首讀書法一冊〇賀茂眞淵翁家傳一冊〇嘉相小言一冊（文政三年刊）〇常總夜話二卷（孝子・義僕・貞女等のことを記す。文政十年刊）。以上ただ刊本のみを擧ぐ。

【學風】與淸の學は、博洽を以て稱せられた。文政の末年より「色葉類函」といふを作り、それによつて更に「群書搜索目錄」一千餘卷を編纂し、あらゆる題目の檢出に便ならしめた。彼は考證家を以て任じ、その著述には一節も孫引のないのを誇つてゐる。（以上森）

【歌風】與淸の本領は考證の學にあるから、その歌は餘技と見るべきであるが、春海に和學を學ぶと共に、その提撕を受け、その作も少くなかつたやうである。自筆の詠草もあるが、流布してゐるのは、猿渡盛章が編せる「松屋棟梁集」三卷で、これは與淸の委囑を受けてその死後成したもの、弘化四年の跋に一切が記されてゐる。彼の歌は全體的に見て巧みではない。趣向と理窟が先に立つてゐて、どことなく素人じみた樣子を見せてゐる。

旅にさかせよそに散らせ梅の花さてもちらさぬ風心あり（梅花風靜）

春の野に遊べる糸やあめつちの袋をぬひしあまりなるらむ（遊糸）

これ等はその極端な例であるが、興味の感じ方が、やゝ狂歌に近いやうに思はれる。あれほどの學者でも、藝術的の創意がない悲しさは、かやうな低卑な程度で滿足してゐたのであらう。（以上福田）

【參考】小山田與淸翁略傳（偉人史叢第十八卷・細川三香年史中卷）〇水戸文籍考　清水正健

朝長（ともなが）「源氏物の謠曲」を見よ。

伴大納言繪詞（とものだいなごんえことば）繪卷【解說】酒井伯爵所藏三卷。「看聞御記」によれば嘉吉の頃若狹國松永庄の八幡宮に在つたもので、その後江戸時代には小濱藩の武久庄兵衛これを藏し、やがて藩主酒井家の有に歸して今日に及んでゐる。貞觀年間伴大納言善男の應天門放火の事件を取扱つた繪卷で、この事件は當時世の耳目を聳てしめた政治問題で、「三代實錄」を初め「宇治拾遺」等にも精しく記されてゐる。伴大納言はおのが政敵たる源左大臣信を陷れんがために應天門に放火し、これを信の仕業として讒告したので、朝廷は左大臣を配流せんとした。然るに伴大納言の從

伴大納言繪卷（酒井伯爵藏）

俊生江恒山が、大宅鷹取なるものの子供を蹴殺したことから、鷹取が怒りの餘り、遂に伴大納言放火の眞相を暴露してこれを告發したので、大納言は言ひ逃るゝすべもなく、罪に服して遠流されてしまつた。繪卷はこれを三分し、上卷には應天門炎上の場面、中卷に源左大臣愁嘆の場面と、子供の喧嘩からやがて放火の眞相を言ひふらす場面、下卷には伴大納言配流の場面を取扱つてゐる。何れも畫面を長く連續せしめ、構圖・配置の妙を以て抑揚巧みに事件の發展を示唆し、且つ人物の表情・動作に微妙な表現を託し、深く話の內容にも立ち入つて、行き屆いた觀察を以て各段躍如たる面目を活寫せる手腕に至つては、「信貴山緣起」（別項）に相並ぶほどの技量を發揮してゐるが、畫風は「信貴山緣起」が繪佛師流なるに比し、これは寧ろ繪所の繪師一流の風彩にして線鋭せる描寫に於て特色を發揮してゐる。この繪の作者に就いては土佐光長と傳へられてゐる。光長は藤原末葉から鎌倉初葉にかけて在世した繪師で、その作としては「年中行事」六十卷を擧ぐべきであるが、これは安永年間に燒失し、今摸本を存するばかりで、比較するに十分でない。併し人物の表情・構圖等、相似た點も尠からず、且つはこの三卷、その描寫樣式が藤原風の穩雅な趣に加へて、鎌倉期に發展する動的表現をも見るべき點に於て、正に藤原鎌倉交會の作と云ふべく、これを當時の名手に擬し得べしとすれば、まづ光長を擧ぐるは決して無理でない。蓋し藤原鎌倉過渡の際に於ける浪漫時代の所產として、繪卷中でも屈指の傑作である。（田中（一））

友則（とものり）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】紀【家系】紀氏系圖によれば宮內權少輔有朋の子にて、貫之の從弟にあたり、淸正・房則の二子がある。「後撰集」卷十九の詞書によれば、女のあつたことが分る。【閲歷】寬平九年土佐掾に任じ、十年少內記、延喜四年大內記に進んだ（古今集目錄）。「後撰集」卷十五に、年四十に餘る迄司を賜はらぬことを時平に語つてゐるのは右の任官以前であらう。「古今集」は延喜五年（大內記）、貫之・躬恒・忠岑等と共に撰修に從事したのであるが、中途で歿したものか、「古今集」卷十六に、その死を悼む貫之・忠岑の歌がある。前記四十云々から推すと、凡そ年六十に近いと考へられる。歌人としての地位は貫之と匹敵したと考へられる。「古今著聞集」に、寬平歌合に左方にて初雁の歌「春霞かすみていにし雁金は今ぞなくなる秋霧の上に」を詠じ、講師が上の五文字だけを讀んだ時、右方のものは秋の歌に春霞とあるのを嘲笑したが、讀み終るに至つて一座のものが絕唱であるのに感歎したといふ說話を載せてゐる。この歌は「古今集」で讀人不知であり、顯昭註には古物語に云ふとして、この說話を載せてはゐるが、躬恒の子が詠んだとなつてゐる。歌風から推して、この歌は友則作ではあるまい。歌父も歌人であつたと見え、「古今集」卷十六に、父が生前に詠んだ歌を集めて、惟喬親王に奉り、自らも一首の歌を添へたとある。同卷十八に筑紫に下つてゐたことを記してゐるが、何時の頃か分らない。「後撰集」卷十二に身分の高い女に戀した歌、同卷七に藤原忠行と贈答した歌、「古今集」卷十六に敏行（延喜元年歿か）の死を悼む歌がある。彼は寬平御時后宮歌合、寬平菊合、惟貞親王家の歌合の作者である。【作品】勅撰集に入る歌は、古今四十五首、後撰九、拾遺二、その他凡そ八、合計凡そ六十四首あり、大部分は家集「友則集」（別項）に收められてゐる。貫之の「新撰和歌」には十二首、公任は、「夕されば佐保の河原の河霧に友まどはせる千鳥なくなり」を代表作としてゐる。能因の「玄々集」には一首も見えない。（西下）

【參考】古今集目錄○歌仙傳○大日本史二百十九○國文學全史（平安朝篇）

友則集（とものりしふ）　歌集　一卷一冊　【作者】紀友則【諸本】歌仙歌集本・群書類從二四八所載本がある。後者は歌の數が二首多く、その他小異がある。【解說】歌仙歌集本は七十二首あり、部類はないが大體に於て四季・戀・雜の順に排列してゐる。このうち友則の歌と認め難いもの十四首あるが、これ等は贈答歌、或は勅撰集に於て友則の歌の次にあるもの、或は勅撰集に於て友則の歌を落し、却つてその次の歌を收めたものなどである。後世の勅撰集はこれ等他人の歌をも友則の歌として引いてゐるやうである。「古今集」中に於ける友則の歌四十五首、「後撰集」九首は、凡て本集中に見えるが、詞書に於て小異がある。（西下）

具平親王（ともひらしんわう）　漢學者・歌人【通稱】後中書王・六條宮、又は千種殿【生歿】康保元年六月十九日、民部大輔保光の坊城の宅に御生誕、寬弘六年（一六六九）七月二十八日薨ず。御年四十六。【系統】慶滋保胤に師事し、また紀齊名・大江以言等と友として交つた（今鏡）。【閲歷】御母は女御莊子（代明親王の王女）、康保二年八月十三日親王となり、三品に叙す。寬弘四年（四十四歲）四月二十五日、一條院の梟居に詩宴を行はれ、二品に叙す。後、中務卿となる。薨去の年の釋奠は具平親王の喪によつて宴座を中止された。儒者として又歌人として資性英敏であつたが、當時は藤原氏全盛の時代で驥足を伸ばされる事が出來なかつたと見える。その點は源英明の「二毛詩」等に見ると同じ境遇であらうと推察される。卽ちかゝる御境遇が詩歌管絃に走らせたとも見られる。一條帝が甚だしく寵愛せられたのも、啻に文才を愛せられたのみではあるまいと思ふ。【著作】眞字伊勢物語二卷（伊勢物語參照）○六帖抄三卷「源平盛衰記」卷七、大納言出家事の條に、「六帖抄と言ふ歌雙紙をぞ撰されける。彼抄と申すは村上帝第八御子具平親王家の御集なり。……歌道に巧におはしけるが後の世の御形見とて集めさせ給たりける草子也」と見える。「古今六帖」と關係あるか否か不明である。又「本朝書籍目錄」には「六帖」（貫之或は兼明親王）とし、別に「私記六帖」（後中書王六帖官）とある。「古今六帖」と「私記六帖」とは自ら別であらうが、か・る記載から、後人が「古今六帖」を或は具平親王の著の如くしたものかも知れない）。（古今六帖參照）○弘決外典抄。（寬永六年の刊本あり、昭和五年金澤文庫本をコロタイプ版にして民友社より出版。本書を兼明親王著とするは誤）。【人物】御性格が聰敏で博學多才であつた。詩歌に長じ、又音律に達し、或は陰陽道・醫術、諸技藝に悉く通達してゐられた。大江匡房は古今よく父の業を繼ぐ者具平親王等五指を屈するに足らない事を言つた。要するに時世は藤原氏の勢力が絕對であつたから、政界には望もなく、ただ一世の文宗として、前中書王兼明親王と並稱せられた。晩年、世を遁れる志があつたけれども、一條帝は遂に御許しにならなかつた。

【參考】日本紀略○榮華物語（初花）○今鏡○江談抄卷四・五○古事談諸道○源平盛衰記○本朝文粹卷十二（山岸）

吒叉　「傾城反魂香」を見よ。

供奴（ともやつこ）　所作事　變化物【本名題】登城の御めぐみ御ひゐきにすがりて拙筆力七以呂波【別名】芝翫奴【初演】文政十一年三月七日初日、江戶中村座「水滸傳曾我風流」後日狂言「一谷嫩軍記」第二番目大切。【作詞】二代瀨川如皐【曲節】長唄【立唄】芳村孝次郎【作曲】四代杵屋三郎助【振附】四代西川扇藏・藤間大助（二代勘十郎）【傳來】曲・振ともに傳存。【諸本】長唄正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）等所收。【題材】舞踊の奴は「鎗奴」「鬘奴」「飯奴傀」「鋤奴」「行列奴」「奴傀」等、種々あり、歌舞伎特有のもので、實在の奴をそれぞれ舞踊化したものである。本曲は廓へ主人の供をする奴を扱へたもの。【內容】奉提灯を持つた奴（二代中村芝翫、後の四代歌右衞門）が吉原田圃を駈け出して來て、主人の供に遲れて探す振。次いで主人が廓通ひの仕草を眞似る振からクドキになり、遂に足拍子を存分覺めかしく踏み踊るうち御供に遲れたのに氣附き、提灯を點して揚屋を指して急いで行く。【價値】足拍子踏む所が眼目になつてゐるが、曲中の所謂「奴丹前」と稱する部分は、舞踊史の傳統上注目すべきである。【備考】「傾城」（別項—星傾城）「ごみ太夫」「乙姬」「浦島」（別項）「瓢簞鯰」「石橋」と組み合せた二代中村芝翫七變化所作事の一。

【參考】近世邦樂年表（長唄之部）○長唄の心得（秋葉）

小谷青楓

鳥谷部春汀（とやべしゆんてい）　評論家【本名】銑太郎【生歿】慶應三年三月、陸奧國三戶郡五戶に生れ、明治四十一年歿。享年四十四。【閲歷】家は代々南部藩士で、父を忠治と云つた。小學校を卒へるや、選拔生となつて青森專門學校農藝科に入學した。明治十五年（十八歲）出京、苦學を重ねたが、腳氣を病んで一時鄕里に歸つた。二十四歲、再び上京して早稻田の東京專門學校に入學し、同校卒業後、歸國して政治運動に奔走した。偶々同地に赴いた島田三郎にその文才を認められ、二十五年上京して每日新聞記者となつた。二十六年、歸國結婚。夫人を携へて上京し、依然として每日新聞の編輯に從事した。その年の夏、近衞篤麿の知遇を受けて雜誌「精神」（後に「明治評論」と改題）の經營に當り、始めて人物月旦に筆を着けた。その冬、單行本「東洋治安策」を出し、評論家としての地步を固めた。かくて約四年間、同誌に關係してゐるうちに、三十年、博文館の招聘を受け、雜誌「太陽」に人物月旦を執筆するに及び、よく調査された材料の上に築かれた情理兼ね備はつた人物批評は、その平明で自由な文章と相俟つて、人物批評の世界に新しい型を開き、一般の歡迎する所となり、人物評論家としてユニイクな地位を得た。居ること二年、三十二年、報知新聞に招かれて主筆となり、傍ら依然「太陽」の人物評論を擔當した。この前後、彼は單行本「明治人物評論」「續明治人物評論」を刊行し、次いで三十八年、再び博文館に入り、雜誌「太陽」を主宰し、歿するまでその地位にゐた。【著書】前記の外に、「明治人物小觀」「明治外交史」「春汀文集」等がある。歿後、「春汀全集」が博文館から刊行された。（高須）

外山ゝ山（とやまちゆざん）　詩人・教育家【本名】正一【幼名】捨八【生歿】嘉永元年九月二十七日、江戶小石川柳町に生れ、明治三十三年三月八日歿す。享年五十三。【閲歷】靜岡藩士外山忠兵衞の息。文久元年、蕃書調所に入り、次いで箕作麟祥の門に入つて英語を學んだ。同三年十六歲で開成所教授方となつた。慶應元年、幕府の選拔に依つて、中村敬宇・箕作奎吾・菊池大麓等十四名と共に英國に留學、ロンドン大學豫備校に入つたが、間もなく幕府の瓦解に遭つて明治元年歸朝した。同三年外務省辨務少記に任じ、森有禮に伴はれて渡米、五年ミシガン州のアン・アンボール高等學校に入り、次いでミシガン大學に哲學・理學を修めること四年半、同九年マスター・オブ・アーツの學位を得て歸朝、開成學校五等教授に任ぜられた。二十九歲。爾來同校が東京大學、帝國大學、東京帝國大學と進展する間、文學部教授、同部長、文科大學々長に歷任して、前後二十三年教職にあつたが、單に文學部のみでなく、法學部・理學部等に講座を持つてゐたのに徵しても、

一正山外

その知識の該博なるを知る事が出來よう。この當時にあつて、その進化主義の學說を以て一般世人を啓發した功は沒すべからざるものがある。同二十三年には貴族院議員に勅選され、同三十年東京帝國大學總長となり、翌年伊藤博文の下に文部大臣になつたが、二ケ月の後內閣は更迭した。この外各種の公職にあつた。【業績】彼の功績の最も顯著なるは、明治十四五年の交、漢字を排斥して矢田部良吉等と共に羅馬字會を創立し、井上哲次郎・上田萬年等と共に新體詩を高唱した運動である。また井上巽軒（哲次郎）・矢田部尙今（良吉）との合著「新體詩抄」（明治十五年）に於て、譯詩七篇、作詩二篇を揭げ、うちテニスンの「輕騎隊進擊の詩」及び「拔刀隊」は最も人口に膾炙した。彼は明治二十年代に入り、更に散文詩の創成を企て、同二十八年刊「新體詩歌集」（中村秋香・上田萬年・阪正臣等と合著）に於て、「旅順の英雄可兒大尉」の如き試作を公けにしてゐる。明治軍歌の嚆矢は作者も認めた如く、彼の「拔刀隊」の歌で、彼の文語自由詩の試みは十數年後に實現し、その散文詩的要求を充たした。その詩作は詩法に拙劣であつたが、最も熱心に種々の創見を發表し、且つ習作を公けにした點で、特殊な史的地位を占めてゐる。この外哲學・社會・音樂・繪畫・演劇等に啓蒙的議論を隨時發表して世を益した。なほ萬歲三唱の風は彼の定むる所であるのを見れば、社會的活動の大なるを證する事が出來る。（土井・日夏）

宅山石（とやまのいし）　隨筆　初編四卷【著者】松井輝星【名稱】著者の題詩に「攻玉宅山石、冶金淺海藥、世間藥物鮮、勿作卑賤態」とある。卽ち書名の因る所である。【刊行】弘化二年、川喜多眞彥校訂。【解說】和漢學を兼ねた著者の隨筆で、本朝に於ける事物の起原、稱謂及び雅俗語の解說、舊慣・古制、史上人物の評論、その他、歷史・地理談等主として考古的の所感を述べたものである。卷一（元）皇國文學の起原以下二十二條、卷二（亨）んンの字以下三十九條、卷三（利）高麗以下二十六條、卷四（貞）信長・信玄・謙信以下三十三條を收めてゐる。卷尾に天保十五年男源寅の跋を添へてある。【著者小傳】松井輝星。初名輝辰、字は晋賓、通稱七郎、號は羅州、又耕讀園、大阪の人。尾張の儒家眞瀨中洲に學び、易學を以て一家

を成した。文政五年（二四八二）二月歿。享年七十二。易に關する述作の多い中で、「周易象徴稿攷」「象占變通」等が行はれた。又「文章軌範」「莊子因」を校刊した。【和田】

豐澤團平（とよざはだんぺい） 操三味線彈【本名】加古仁兵衞義知【生歿】文政十年三月二十一日巳刻、播州加古に生れ、明治三十一年四月一日、稻荷座で大隅太夫の「花上野志渡寺」を彈きながら、床で人事不省に陷り、病院への途中、難町三休橋筋角で絕命した。享年七十二【閲歷】大阪の竹本千賀太夫の養子。十三歲で三代豐澤廣助の門に入り、豐澤力松と名乘つた。天分あつて忽ち腕を擧げた。天保十年因講加入。稻荷文樂軒芝居へ出勤。同十三年正月座摩の芝居で豐澤丑之助を名乘り、弘化元年二代廣助の幼名豐澤團平を襲いで御靈所の芝居を勤めた。この頃既に嶄然頭角を顯はし、嘉永六年二十七歲で江戸歸りの長尾太夫の三味線を竹田芝居で彈いた。翌安政元年八月に天滿天神境內の芝居で、長尾の相三味線として「忠臣藏」六段目を彈いてゐる上に、大立物三代長門太夫の相三味線三代鶴澤清七が病氣缺勤の代役を勤めたのは、斯道の記錄的の拔擢であつた。この頃から長門太夫に囑望されて、遂に安政三年九月二十三日、鶴澤清七の病歿後、長門太夫の相三味線と正式に決定して、元治元年十月長門が歿するまで、約九ケ年間彈いてゐた。後、湊太夫・五代春太夫を彈き、近世の名人攝津大掾を仕立て上げ、後、春子太夫に三代大

豐澤團平

隅太夫を繼がせ、大隅を仕込んで大立者とし、清水町の師匠と呼ばれ、古今獨步の名人と唱へらるゝに至つた。團平は三代廣助の弟子であつたが、その頃京に棲んでゐた二代廣助の寵を受けて藝道の奧義を授けられた。彼は初め播州高砂の人佐藤八重を娶つたが、八重は二子を殘して、明治二年四月十一日三十一歲で歿した。後妻を迎へたのが明治九年で、これが有名な才女千賀である。千賀は團平の家政を整理し、藝道に內助の功多く、多少文筆の嗜みがあつたから、淨瑠璃の新作加筆などをもした。【業績】第一に、義太夫節の整理・保存・復舊に努めた。廢曲を復活し、院本に殘された節章の一點をも苟くもしなかつた。第二に、三味線は淨瑠璃の伴奏に過ぎなかつた古來の習慣に對して、松屋清七が、三味線の符章を發明して三味線のツボを記錄するに至つて、始めて伴奏から脫し、三味線の手として獨立したのを、團平は更に大成して、節と三味線とを並行せしめることに成功した。明治十六年四月、文樂座の番附に於いて、古來始めて床本・太夫以外、三味線・人形の紋下を書き現はして三味線の位置を明確に示した。第三、淨瑠璃の新曲も多く、就中「壺坂靈驗記」「良辨杉由來」「大阪落城」「猿蟹合戰」などが有名である。但し「壺坂」「良辨杉」のあるは、千賀の慫慂功績と見るべきである（「壺坂」は千賀の加筆、「良辨杉」は千賀の作）。されば明治二十六年十一月二十日、千賀の病歿後、團平には新作曲の見るべきものが絕無であるのに見ても、これを知ることが出來よう。併し彼の音曲上の復古熱成運動け、攝津大掾との紛擾分離によつて、文樂座にて挫折したから、彥六座でこれを試み、大隅を大成せしめた結果、明治期の淨瑠璃曲風をして文樂風と彥六風との二樣を生ぜしむるに至らしめたのである。【石割】

豐島與志雄（とよしまよしを） 小說家【閲歷】明治二十三年十一月二十七日、福岡縣朝倉郡福田村に生る。第一高等學校を經て東京帝國大學佛文科に學び、在學中久米正雄等と共に第三次「新思潮」を興し、大正三年二月處女作「彼等と湖水」を發表し、爾來創作に飜譯に不斷の精進を努めて同人中最も早く世に出た。卒業後文筆生活を續ける傍ら、教壇に佛文學を講じ、曾て慶大講師であり、現在法政大學教授・帝大講師である。【著作】主として大正年間に多くの小說を書いたが、「蘇生」「反抗」「人間繁榮」「生あらば」等の作集の外、「新選豐島與志雄集」及び明治大正文學全集第三十九卷に收められてゐる。飜譯にユウゴオの「レ・ミゼラブル」、ロマン・ロオランの「ジヤン・クリストフ」の二大業績がある。【作風】柔婉なる文章を以て、市井の日常事を題材として平叙しながら、その作品は常に異常なる神經の流れと一脈の幻想味を湛はして獨自の藝術的境地を有してゐる。ことさらに深刻に走ることなく、寧ろ明るい溫雅な筆致の間にさへ、白日の妖氣とも稱すべきものを感じさせる點、全く比類なき特異である。彼は文壇に出でて以來時流に媚びることなく終始自己を操守して大成し、所謂文士といふよりは文學者たるその風格が作品の上にも現はれてゐる。代表作としては「蘇生」「野ざらし」「理想の女」「人間繁榮」を擧ぐべく、外に戲曲も十篇ほどある。【水木】

豐竹越前少掾（とよたけゑちぜんのせうじよう） 淨瑠璃太夫【通稱】河內屋勘右衞門、また幾竹屋【歿年】明和元年（二四二四）九月十三日、享年八十四。【法名】一音院釋隆信日重居士【墓所】大阪中寺町高津表門筋北入東側本經寺。【閲歷】堂島雙後の家數中衆某とも說かれてゐる（淨瑠璃譜）。生來の音樂好きは家業を捨てて義太夫の門に入り、竹本采女を名乘つた。初舞臺は元祿十一年らしい（竹豐故事）。彼は太夫としては、天稟音曲家として惠まれ、且つ性質稜々たる覇氣を藏し、藝術家としての天賚と、經營家としての才能をも併せ具へてゐた。されば初舞臺の翌年元祿十二年の頃、既に獨立の志あり、歸阪後に一派を立つることを願つてゐたともいふ。元祿十五年三月十一日、竹本座が伊勢への旅興行の時、采女は阪地に殘つて「けいせい懐子」といふ紀海音(?)の新淨瑠璃を上演したが、失敗に終つた。翌元祿十六年、道頓堀東立慶町の芝居で道具屋節と呼ばれた道具屋吉左衞門・永島重太夫と共に素淨瑠璃の出語りで興行したが、これ亦失敗に終つたので、やがて素淨瑠璃で旅興行へ出た。その歸り際に、泉州堺での心中事件を一段の世話淨瑠璃として、「心中泪の玉井」（別項）と名題をおいてかけたのが大當りだつたのに力を得て、同年歸阪後、直ちに道頓堀の東（竹本座より東寄り）に舞座の櫓を借りて、長門九郎兵衞と相座本で「豐竹座」（別項）の櫓を始めて揚げ、「堺みやげ、心中泪の玉井」を上演した。これは元祿十六年七月の盆興行で、この時始めて豐竹若太夫を名乘つた。相當の人氣を得たらしいが、興行上の成績は思はしくなかつた。續いて世話物「金屋金五郎浮名額」（別項）、寶永元年の「東坡居士」を打揚げて、若太夫一行は備中へ旅立つた。その不在中に豐

竹座が貸借りの櫓なる舞の座を泉州榮能といふ人が買收し、櫓は竹田へ讓り、小屋は壞された。歸阪して「金屋金五郎後日髮形」の新淨瑠璃に出語り、藤井小三郎の出遣ひを試みたが成績は思はしくなかつた（座不詳）。寶永三年の暮には河內屋加兵衞の助力の下に「豐竹座」を再興した。相座本に辰松八郎兵衞を配し、作者には紀海音（別項）を拘へた。これも成功と迄はいかなかつたが、この間若太夫は天性の美聲、華麗な節廻しに切磋琢磨を加へて、遂に

豐竹越前少掾（因會所藏）

「東風」の一流を編み出すに至つた。次いで享保三年正月受領して豐竹上野少掾藤原重勝と稱した。同九年の大火後は、しばらく地方を巡行して、同年十月十六日、新築の舞臺開きを「女蟬丸」で開けた。越えて同十一年四月の「北條時賴記」（別項）は、古今の大當りをとり、翌年正月まで興行を續けた。これによつて豐竹座の基礎を固め、若太夫の地盤を堅固にした。享保十六年九月三十日、再び受領して豐竹越前少掾藤原重泰となつた。この時、別に受座軒とも號した。十月十六日初日、「赤澤山伊東傳記」の大切「首途蓬萊山」で、自ら出語りをして受領を祝つた。この時天滿橋の三右衞門といふ者、芝居表へ始めて幟一本を立てたのが芝居表の幟の始めである。越前少掾は寬保元年冬、江戸へ下り、同二年正月江戸肥前座で「北條時賴記」五段目鉢木雪の段を江戸肥前掾をワキとして出語りをした。その年歸阪。延享二年十一月「北條時賴記」三度目の上演、六十五歲で一世一代の出語りで舞臺を退き、後見として豐竹座を守り立てた。延享三年秋京都で一世一代を「粂仙人吉野櫻」で勤め、寬延元年十月泉州堺で一世一代を「東鑑御狩卷」と「惡源太平治合戰」で勤めた。實に舞臺生活四十八年、新作淨瑠璃を作曲し、操にかけたこと約百四十五番。隱退後は、受座軒の作者名で「酒呑童子出生記」（延享三年五月）、「萬戸將軍唐日記」（延享四年三月）、「攝和讃新羅源氏」（寬延二年七月）を綴つて操にかけてゐる。【業績】豐竹座出でて東西の抗爭激しく、舞臺裝置や衣裳等に異常な進步を示した。これ「曾根崎心中」（別項）の大當りで、座本隱退を決意した筑後掾とその人と爲りを異にしてゐる點である。越前は天授の甲の音が古今に勝れた上に、一・二・三の音が揃ひ、東風の淨瑠璃は、流麗な音聲で節面白く華やかであるから世上に喜ばれ、そして筑後掾の創始時代の義太夫節に、東風の賑を竹本頼母によつて注入され、遂に今日の淨瑠璃を成したのは、越前の業績であると見らるゝ。【門葉】主なるものは豐竹若太夫代々、豐竹駒太夫代々、駒太夫系統なる豐竹麓太夫及び豐竹筑前少掾（別項）等である。【石割】

豐竹上野少掾（とよたけかうづけのせうじよう） 淨瑠璃太夫【本名】勝次郎。通稱紅屋長兵衞【舊名】竹本內匠太夫・竹本大隅掾・竹本大和掾【歿年】明和三年十一月八日歿。享年六十五【法名】大譽宗和貫碩居士【閲歷】竹本筑後掾（別項）の高弟、內匠理太夫の子。理太夫は內匠を姓とする一派の太夫であつたが、義太夫に教を乞うて入門した。彼は義太夫の棒揚から、その歿後に及んでも竹本座を守り、正德五年の「國姓爺合戰」に三段目の口と四段道行で、竹本頼母のワキを語つて引退した。彼の一子勝次郎は幼少の頃から淨瑠璃道に入り、伊藤出羽芝居に出勤して、伊藤三輪太夫を名乘つた。後、豐竹上野少掾（後に越前少掾）の門に入り、豐竹三輪太夫と稱し、享保八年十一月「建仁寺供養」で豐竹座の初舞臺を勤め、後、享保十九年十月竹本座の「蘆屋道滿大內鑑」から竹本を冒し、父の姓をその儘名として竹本內匠太夫を名乘つた。寬保元年九月、又豐竹座へ出勤。延享元年十一月越前少掾一世一代、三度目の「北條時賴記」で、內匠太夫は受領して豐竹上野少掾と稱し、同四年三月病氣のため退座した。翌寬延元年竹本座の櫓下竹本此太夫（豐竹筑前少掾參照）が人形遣吉田文三郎と「假名手本忠臣藏」で衝突し、此太夫が豐竹座に走るや、座本竹田出雲に懇請されて竹本座に入り、再び受領して竹本大隅掾と稱し、櫓下となつた。また同年九月京都で、竹茂都大隅を名乘つて座本となつた（東西評林）。かくて寶曆元年三度受領して竹本大和掾藤原宗貫と改め、同十三年八月「諸葛孔明鼎軍談」で一世一代を勤めて引退し、有隣軒と號した。「東西評林」（寶曆八年刊）に彼を評して、「扨も／＼あんな心の多い尻の居らぬ男はわしはいやじや」といつてゐる。竹本座と豐竹座の太夫の出入頻發は實にこの人に始まつたのである。【石割】

豐竹此太夫（とよたけこのたいふ） 「豐竹筑前少掾」を見よ

豐竹座（とよたけざ） 操淨瑠璃座【沿革】元祿十六年の創立より、豐竹越前少掾の時代までは「豐竹越前少掾」の項參照。同太夫の歿するに先立ち、寬延元年八月竹本座（別項）の「假名手本忠臣藏」（別項）興行中、初代吉田文三郎と竹本此太夫との衝突から、竹本座と豐竹座の東西太夫の出入が行はれた。これより太夫の進退節度を失ひ、その後、不平がある度に東西太夫の入替へが行はるゝといふ風に樂屋の風紀が亂れ、座と共に榮枯を知ち盛衰を共にする意氣は、太夫にも座本にもなくなつた上に、頻繁に續く座本の死は、一座の意氣を全く衰はしめ、越前歿後の翌明和二年八月三十日、豐竹座は歌舞伎芝居と變つた。元祿十六年の創立から數へて座歷六十二年、豐竹座は越前少掾と壽命を共にした。その後明和四年豐竹此吉が座本となり、豐竹此太夫（二代）・豐竹駒太夫等と謀り、菅專助（別項）を作者として北堀江市側に豐竹座の名を興し、興行を續けたが、それは殘骸に過ぎず、眞の豐竹座は明和二年を以て廢滅したといつても過言ではない。【石割】

豐竹筑前少掾（とよたけちくぜんのせうじよう） 淨瑠璃太夫【通稱】岸本屋善兵衞【前名】竹本此太夫【歿年】明和五年十一月五日。享年六十九【法名】法善院宗普日開信士【墓所】大阪天滿西寺町本傳寺【閲歷】竹本筑後掾（別項）の高弟陸奥系の人で、茂太夫の弟子。初め陸奥伊太夫といつた。合羽屋が渡世であつたから合羽伊太夫の稱がある。修業中出羽芝居を勤め、元文元年十月、竹本座を竹本美濃太夫で初舞臺、同三年八月竹本此太夫を名乘つた。延享元

年播磨少掾の後を承けて竹本座の櫓下となつたが、寛延元年の「假名手本忠臣藏」で、人形遣吉田文三郎と衝突し、同二年三月、豐竹座に移つて豐竹此太夫を名乘り、同三年三月、かしく兄殺しを直ちに脚色して「八重霞浪花濱荻」（並木大助作）を上演し大當りを取つた。その年九月二十三日受領、豐竹筑前少掾藤原信政と稱した。寶曆七年九月「蒲和源氏十五段」山伏攝待で一世一代を勤め、舞臺を退いたが、後、越前少掾の追善のため、明和元年十月「道樂記念術」に口上附で出演、續いて翌十一月の「二ツ腹帶」に出勤を名殘として、餘生を門弟の薫陶に送つた。【藝風】元來筑前少掾は小音で、大入りの時は聞き取れないと言はれたが（國花實來集）、「寶曆に情を深く語る」（淨瑠璃大系圖）のがその特色で、工夫一つで見物を引きつけた。爾來聲量のない太夫は、筑前少掾の工夫に學ぶところが多い。なほ此太夫の名跡は五代まで續いた。（石割）

豐竹肥前掾（とよたけひぜんのじよう）淨瑠璃太夫

【通稱】新右衞門【俳名】東々庵蛙井・一瓢庵等。【歿年】寶曆七年（二四一七）正月五日、江戸に歿す。享年五十四。【閱歷】寶永元年、大阪松屋町筋太物商の家に生る。生來虛弱、淨瑠璃を好み、家業を捨てて享保十一年二月、二十三歲で豐竹座「曾我錦几帳」に出演したのが初舞臺である。爾來稽古を怠らず、享保十五年八月「楠正成軍法實錄」で、初めて序切を語る。同十八年江戸に下り、吉原五十町に借家して住んだ。かくて若松丹後掾の名代で操芝居を興行し、また葺屋町辰松八郎兵衞芝居にも出勤した。元文年間、堺町にて新に操芝居の櫓を揚げ、受領して豐竹肥前掾藤原清正と稱した。これが江戸肥前座である。江戸に操義太夫節の流布したのは、全く彼の手によつて成されたのである。古來三都に、座本と座主と櫓下太夫を兼ねたのは、京の宇治加賀掾、大阪の豐竹越前少掾、江戸の豐竹肥前掾の三人のみだと言はれてゐる。彼は江戸へ下るや、歌舞伎芝居の如く通しの繪看板を掲げ、又夜中木戸前に明日札を行燈にて掛け初めたと傳へる。延享四年春、「菅原傳授手習鑑」が大當りであつたのは、江戸中の手習師匠へやす札を配つた宣傳が利いた爲めである。かく商才の利いた傍ら、俳諧もやり、「かくれんぼ」（延享二年序）、「頭陀袋」（寛延四年序）の二俳書を編纂してゐる。（石割）

豐竹若太夫（とよたけわかたいふ）「豐竹越前少掾」を見よ。

豐玉姫（とよたまひめ）「鸕鷀草葺不合尊」を見よ。

豐年（とよとし）撰學者【姓】賀陽朝臣【生歿】天平勝寶三年に生れ、弘仁六年（一四七五）歿。享年六十五【墓所】宇治稚郎子命が仁德帝と相讓り給うた義に感じて、その御陵下に陪葬せられんことを請ひ、勅許を得て、其處に葬つた。【家系】賀陽氏はもと備中の豪族で、孝靈帝の皇子稚武彥命の後裔である。即ち吉備氏と同族の皇別であるが、吉備氏の如く「新撰姓氏錄」に明記のないのは、本據たる備中の賀陽郡から中央に出て未だ聞達繁榮しなかつた爲めであらう。【學統】大納言石上宅嗣に厚遇せられ、芸亭院に居る事數年の間に廣く群書に通達し、博學は淡海三船・釋通融にも過ぎてゐると稱せられた。【閱歷】神護元年六月、賀陽氏十二人に朝臣の姓を賜はつたが豐年十五歲の時である。延曆十六年二月九日（四十七歲）文章博士從五位下にて東宮學士に任ぜらる。東宮は安殿親王（平城帝）である。大同元年三月桓武帝崩御、五月東宮卽位され、豐年は文章博士從五位下兼陰陽頭となつた。時に五十六歲。同三年五月十四日、式部大輔從四位下より兼下野守となる。平城帝の御位後、侍藤原藥子が寵を恃みて權を擅にした。それ以來、女謁が屢々行はれて英賢は多く排斥せられた。然るに豐年は、獨り素志を懷き、沈默自ら守つて憂悶を詩賦に紛らしてゐた。帝讓位後、奈良に遷幸し給うたが、豐年は職を守つて追從に與らなかつた爲めに、藥子の亂に關係しなかつた。嵯峨帝卽位の後、その宏才を惜しんで任用し、弘仁元年九月十六日（六十歲）、播磨守となされた。六十三歲、病を得て京に歸り、宇治の別業に歸臥した。晩年稚郎子命の高風を慕ひ、宇治に葬られんことを請うた事は「故老の稚郎子命の事を語るを聞き」と言ふが、弘仁三年宮中に「日本紀」進講のあつたことによつて、命の高風に感激したのであらう。又平城帝と嵯峨帝の關係に對して感ずるところもあつたので、殊更葬地を宇治に求めようと願つたことと推察せられる。即ち嵯峨帝は、既に東宮時代に廢立せられようとし、驚き悲しんで桓武帝の御陵に祈つて纔かに事なきを得た。又藥子は虛榮心強く、平城上皇の重祚をそゝのかし奉つて、所謂藥子の亂を起したのである。これ等の事件は、豐年の性格と相容れないものであつたことは想像するに難くない。【業績・人物】經史には殊に通曉し、對策は優秀の成績を以て登第した。操守も堅固で義を重んじ、事に當つて屈撓しない。又知己でなければ敢て面接するを好まなかつた。その博覽な事は、寧ろ淡海・三船の上にあつた。されば弘仁五年、小野岑守が嵯峨帝の勅を奉じて「凌雲集」（別項）を編した時、菅原清公・勇山文繼等と議して、「賀陽朝臣豐年は當代の大才なり」と上表中にも稱揚し、又病中の豐年に就いて親しく問うて撰修した。それ等によつて博學宏才を知る事が出來よう。加ふるに、彼が岑守の父小野永見に示した「日本後紀」卷二十四（弘仁六年六月廿七日の條）に題のみ見えて、その詩全部を知る由はないが、これによつて貴族階級の憎しみを受けた事は事實である。併しこの事實といひ、又職を守つて追從に與らないことなどは、當時稀に見る保調の士であつた事を想はせる。時人は「天爵餘りあつて人爵足らず」と言つた。その性格の致すところで、寧ろその高潔を偲ばせる。

【參考】經國集卷十一・十三〇凌雲集〇日本後紀卷二十四（弘仁六年六月二十七日丙寅の條）〇芸亭院と賀陽豐年　新村出（典籍叢談）（山岸）

豐臣版（とよとみばん）「刊本」を見よ。

豐宮崎文庫（とよみやざきぶんこ）「宮崎文庫」を見よ。

虎が石（とらがいし）傳說【解說】日本の傳說を發生學的に調べて見ようとする者には、これは最も手頃な、且つ便宜の多い題目と言つてよい。東海道の往來筋の一つの宿場の片脇に、この名の石が現はれたのは、比較的新しいことであつたらしく、しかも最初からこれに目を留めた好事の士が餘りに多かつた爲めに、傳說は成長しかけて終に一つの形に固定する暇がなかつた。淺井了意の「東海道名所記」（別項）が多分初めで、それから「一目玉鉾」（別項）、益軒の「吾妻路之記」、降つては「壁塡餘錄」や「海錄」「於路加於比」、さては十方庵の「遊歷雜記」まで、この事を記した書は擧せば數十種もあらうが、その記述は一つ一つ趣きを異にしてゐる。書いた人の出たらめでは

なく、土地の者が既に色々の事を謂つてゐたのである。さうしてその何れもが、大磯で作り上げた口碑でなく、必ず幽かなる無意識傳承によつて、方々からこゝへ持ち込まれたものであつた。問題は二つに分れて、我々の殊に面白く思ふのは、終始一貫してゐる石の名の起りであるが、今一つの傳說內容の方も、ぐら〳〵變つてゐたとは云ひながら、やはり大よそは由つて來たる所があつた。近代の虎が石は或る寺院の管理に歸し、人はその石を抱き試みて重さによつて石占をすることになつてゐたといふが、この俗信がもし眞面目なものであつたなら、實は最も古い形に近いのであつた。ところが以前の旅人はただ戯れにこれを玩んだだけで、美男が抱けばいと輕く揚がり、ぶをとこが持つと重かつたなどと笑ひ興じてゐる。これは「本朝國語」にも見えた大和飼川のオイトシボ石と同じ例で、嘗て傳の石神に占問ひした習俗の、一旦零落した型がこゝへ移されたのである。虎女は大磯の產で「曾我物語」以來の有名な貞女であるが、唯これだけでは、餘りにも石との因緣が薄いので、後にはこの風習をそつちのけにして、別に虎御前の精靈が、化して道の隅の石となるといふ傳へも起つたと見えて、これを咏歎した詩が「鶴里文集」には出てゐる。或は曾我十郎が路に仇人の狙擊を受けた時、この石が箭を防いだと謂つて、石の面に疵痕のあるのを示してゐたこともある。さうかと思ふとその石の凹みは、よく見ると男女の陰相を現じてゐるなどと謂つて、依然として巫娼傳道の痕跡を傳ふるものもあつた。この石の記述を見ると、石も昔から一つのものでなく、何度か次々に別のものへ名を讓してゐた。それにも拘らず大磯といへば必ず虎が石を聯想せしめたのは、一つには曾我の流布の力でもあるが、又一つにはかういふ種類の石に、トラといふ名を附する古來の習はしがあつた爲めかと思ふ。「鄉土研究」（四卷五號以下）に、老女化石譚と題して、嘗て私はこの問題の解說を試みようとしたことがある。人の忘れた虎が石は、京都・關東その他の地に幾らもあり、大磯の虎御前が諸國を遍歷して、記念を留めたといふ名石も亦數多く、祐成の愛人以外にも別に赤虎姬虎御前といふ美女が、やはりその遺跡に石を存してゐる。問題は溯つて何故に或る種の婦女に、虎といふやうな名があつたか迄、考へて見なければならぬのであつた。福島の信夫山や富士の麓には、大磯の虎が尋ねて來て、空しく引返したといふ地に傳說の石がある。これと越中立山の中腹に、登らんとして石に化した若狹の登宇呂の姥、加賀の白山の登山口に於て、同じく女人結界の禁を破らうとして化石した融の尼、更に古く世に知られた吉野金峯山の都藍尼も、私の想像ではすべて一つの名で、上古の多くのタラシ姬と共に、神に仕へた一種の女性を意味した名かと思ふ。靈山の麓に在る多くの比丘尼石・姥石・モリコ等の類には、虎が石の名はなくても、押して登らうとして化石したといふ口碑なら無數にある。化石は現實でないから後の解釋であつて、以前はただ女巫の斷念場の標の石かと思ふ。さうして東海道の新驛へは、これはただ未完成の傳說として、運び込まれたに過ぎぬと思ふ。（柳田國男）

團亂旋（とらでん）雅樂舞曲【名義】その舞姿が亂れて旋轉するので、この名が出たといふが明かでない。【異稱】「團亂傳」「后帝團亂旋」【性質】唐樂。新樂の大曲で、壹越調曲に屬する。序破急がある。舞があり六人で舞ふ。舞人は袍を着け、特殊の甲を冠る。劍を帶びない。謠曲「石橋」の末段の句に、「獅子とらでんの舞樂の砌」とあるところから見ると、或は獅子の狂ひを表はした舞踊と關係してゐるものかとも思はれる。答舞は「古鳥蘇」を用ひる。【沿革】起原は明かでないが、一說に唐の則天武后の作であるといふ。

團亂旋

「文獻通考」によると、唐の「敎坊樂」の秋舞中に「團亂旋」の名が記されてゐる。我が國に傳へられたのは、文武天皇の時の粟田道麿によると稱せられる。一說に仁明天皇の御宇大戸淸繩が作つたといふが、恐らく當時この人が改作したものであらう。舞と樂と共に今は絕えてしまつた。（田邊）

囚はれたる文藝（とらはれたるぶんげい）評論【著者】島村抱月【刊行】明治三十九年一月、雜誌「早稻田文學」揭載。再版抱月全集第一卷・改版抱月全集第二卷所收【內容】本篇は全十五項及び附記より成り、全體が戲曲的構想を以て書かれてゐる。先づ著者がナポリに舟がかりした一夜、ヴェスヴィアス山の熔岩流が赤々と染め殘してゐる夜空を眺めてゐると、「頭に頭巾を載き、眞紅の長衣を垂れ」た異裝の者が一人現はれる。それはダンテで、彼はまづ古來の哲學の變遷發達を述べ、轉じて歐洲近代文明の概觀、ルネ・サンス期の美術、沙翁劇、浪漫的時代の文藝思想等に論じ進む。第十章以下は、自然主義と標現主義（象徵主義）とについて評論し、宗教的文藝に觸れて論旨を結ぶ。次に附記の一篇で、抱月自身の意見として、日本的・東洋的な國民的文藝の建設を獨逸の鄉土藝術と對照して提唱してゐる。言ふまでもなく、著者が歐洲各國を巡遊中に得た樣々の見聞と、歐洲近代の文學思潮と哲學などについての研究とを、ダンテの名に託して極めて劇的で且つ浪漫的な、調子の高い一文に綴つたものである。最後に「情緖的、宗教的、東洋的、この關係論はなほあるべきなり。『放たれたる文藝』を說いて更に我が想を尋ねん」と、この文章を結んでゐる。彼は原始からの文藝を知識の文藝と感情の文藝に區分し、その二つの流れが、現代まで交錯し、現代は知識の流れたる科學文藝、卽ち自然主義の氾濫時代であると見る。そしてそれは科學に囚はれた文藝である。「文藝は囚はれたり。十九世紀の後半に於いて遂に精力非凡なる知識の爲めに囚はれたり。（中略）今の文藝は、一旦、全く知識の羈絆より切り放たるべし。而して其の放浪する所は情の大海なるべし」と說き、神祕主義乃至標現主義を推し延ばした宗教的文藝こそ、最後の解放さるべき文藝の碇泊所であらねばならぬと結論した。【批評】極めて客觀的且つ實證的で、その意味では、純粹に科學的でさへあつた批評家・學者としての一面と、同時に浪漫的すぎるほどの情熱と感傷の藝術家でもあつた抱月の他の側面をも窺ふに足りる長論文で、「新美辭學」（別項）などに現はれた冷徹な學究者としての抱月とは、全く別個の彼の風貌を見る。彼がこの論文で、

科學的文藝を否定したのは、當時の歐洲文壇の通念と共通するが、だからといつて、宗教文藝にその解放を求めようとしたのは、あの思索の深邃な抱月の批判力の典型を示すものとは云へない。併しこの浪漫主義的思想を強調した一文は、時恰も自然主義の擡頭期であつたので、當時の文藝界に、一大センセーションを捲き起した。殊に後に自然主義の理論家に轉じた著者の評論として意味深いものである。(近代文藝之研究參照)　(武藤)

鳥追歌 とりおひうた　歌謠【名義】門附歌の一種。もとは田畑を啄む鳥を追ひ拂ふ動作に伴ふ歌で、田歌の一種かと思はれるが、それから變化して、田畑の豐年を祈る祝詞となり、やがて一般的なほめ詞の歌と變化して、門附歌になつたのである。【異名】「雍州府志」には、悲田寺の項に、「自元日至十五日、著笠以白布覆面而歌手唱祝語。倚門戸請米錢。是號敲與次郎。又稱鳥追。元民間出白追拂田疇鳥之辭也。」とあるが、「人倫訓蒙圖彙」によると、叩の與次郎とは悲田寺に住した乞食非人の稱で、「二季の彼岸所々祭禮の比は、たゝきと云ひて口早なる事を云ひて物を貰ふ」と見える。卽ちこの叩の徒が、鳥追にも出たので、京都では鳥追と叩とを混同して稱してゐるのである(敲參照)。【解說】「本朝世事談綺」に、鳥追は諸歌の遺風であると云ひ、延文の頃、三河國の長者の宅に、正月に遊行上人が宿つたところ、長者の田の鳥追を勸めとする人々が數人年頭の禮として、さゝらをすつて鳥追の歌を歌つた。これがその起原であると云ふが、疑はしい傳說である。鳥追の事は、早く謠曲「鳥追舟」や、三莊太夫傳說の中にも見えて、室町時代に盛んに行はれ、鳥追歌も亦この時代から存してゐた(三莊太夫參照)。江戸時代ではこれが門附となり、年頭に、長篇の歌を歌ひ步いて門口に立ち合力を乞うた。大抵二人一團となり、三味線や鼓弓などに合せて歌つた。後には多く非人の女が出るやうになり、編笠を冠り、笠紐は赤い太いきれを用ひて顎に結び、美人が多かつたので、艶めかしい初春の情調を添へて、しば〳〵艶聞も傳へられた。地方では、最近まで殘つてゐたが、都會では早く明治の初めに絶えた。【歌詞】元祿以前から存してゐた「やんら目出たや、やんら樂しや、千町や萬町の鳥追が參りて、福の神を祝ひこめ、白米もよんに洗ふ、眞白米もよんに洗ふ云々」と云ふ長篇の歌詞は、全文が「本朝文鑑」(享保二年刊)にも出で、近松作の淨瑠璃「天鼓」(別項)にも見える。この歌は、上方唄や江戸長唄(各別項)等に取り入れられて、種々なる歌が出來てゐる。又幕末には、この歌の初めの方だけが流行唄として行はれ、京の端唄として、現在も一部で行はれてをり、江戸にも輸入せられて、江戸端歌ともなつてゐる。その歌詞は、「京の鳥追」又は「上方鳥追」などと云ひ、「浮れ草」(文政五年成)以下の諸書に見える。以上は京阪の鳥追歌であるが、幕末に江戸で行はれた鳥追歌は次の如き歌であつた。

海上はるかに見渡せば、七福神の寶船、艘や錦の帆を上げて、紫檀の艫櫂に舵を取る
一夜あくれば松飾り、門に羽根つく手鞠唄、春風さそふ梅の袖、鶴さ龜さの染模樣
蓬萊山に鶴さ龜、千代萬歲のお目出たや、實讓しや鳥の聲、仲睦まじくじやうさうは
御藏殿始め着衣始め、作る殿方殿方の、梅や柳の色比べ、春風さそふ歴衣

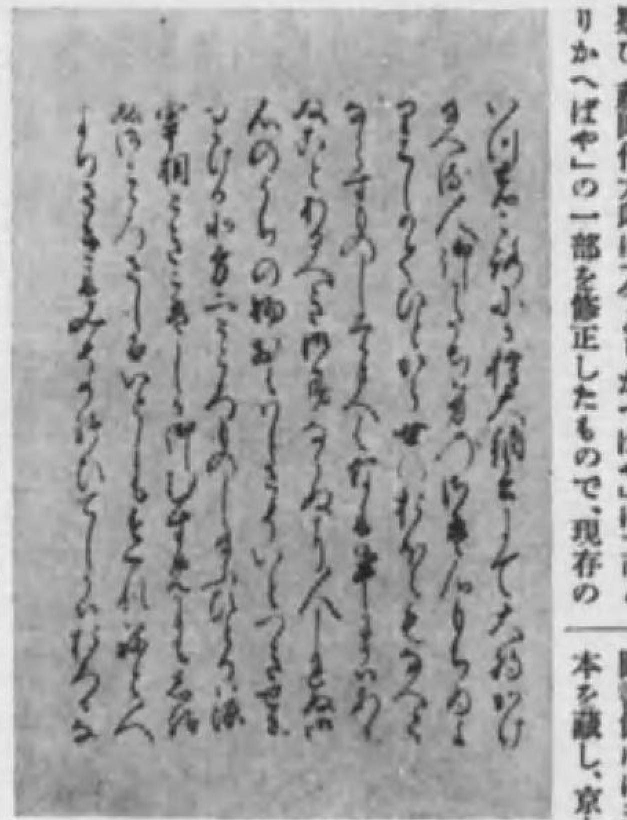
三下りの歌で、全くの祝儀歌と化してゐる。「歌謠字數考」には、「冒頭に、海上遙かに見渡せば七福神の寶船といふ言葉を歌ひてあとは唯賑はしき三絃に合はせて、何くれとなく、歌ふことなれば」とある。
【註釋書】古い鳥追歌を註解した書には、浪花の狡猊子(入江昌喜)が著はした「青陽唱話」がある。(一名「鳥追歌の解」安永八年刊。自筆稿本も存す。雜誌「歌舞音曲」三ノ一以下所載の「鳥追唱歌の解」、「香物作家叢書歌謠篇」所收)　(藤田)

鳥追阿松海上新話 とりおひおまつかいじやうしんわ　草雙紙 三編九冊【著者】久保田彥作【畫工】陽州齋周延【刊行】明治十一年一月—三月、錦榮堂。明治十七年四月の改竄省略の一冊本(歌川芳重畫)がある。明治文學名著全集本(東京堂)もある。
【梗概】お松は、京橋木挽町采女ヶ原の雪駄直し定五郎の娘であつたが、毎日母親と三味線抱へて春は鳥追ひ、平素は鶴賀節の女太夫となつて、商家の軒下や勸番長屋の窓下などに立つた。當時慶應から維新にかけて江戸に屯集してゐた諸藩の兵士間に、この母子の仇姿が評判であつた。中でも丸の內撒兵隊濱田正司はお松の色香に迷ひ、母子の罠にかゝり三百餘圓も騙り取られ、それが隊長に知れて禁足となる。その頃今一人お松を慕ふ若者で淺草の吳服屋の番頭忠藏といふ者があつて、切なる思ひで密會してゐる所へ、強て情夫の雪駄直し大坂吉が、馴れ合の出刄庖丁騒ぎで、忠藏の持合せてゐた主家の金百圓で示談となる。かうした狂言がお上に知れて、大坂吉とお松の兩人は大阪へ逃げようとして、品川で仲間の密告から大坂吉は召捕られ、お松は闇に紛れて逃げ、六郷の土手に來かゝつた時、縊死しようとしてゐる忠藏に出會ひ、二人手を携へて忠藏の郷里大阪に赴く途中、忠藏は病氣となり、路銀までも盜まれたので、二人は途方に暮れてゐた矢先、同じ宿屋に泊り合せた府中の藝者屋定五郎は、深切ごかしで忠藏夫婦を欺き、お松を藝者にしようと、當座凌ぎの身の代金三十圓を渡し、お松を駕籠に乘せて連れ出した。藝者屋主人實は甲州無宿の作造といふ無賴漢で、言葉巧みにお松を人里離れた海岸におびき出し、手籠にしようとした。お松は驚いて海に飛び込んでしまふ。折柄通りかゝつた汽船に救ひあげられ、神戸に行く。そこでお松は、忠藏の親忠兵衛を大阪に訪ね、いろ〳〵甘言をもつて忠兵衛夫婦を欺き、暫く此所に落ちつくこととなつた。そこへ、今では大阪に來て重き役目を掌る濱田正司が現はれ、お松を捕縛した上何處ともなく連れ行き、後に權妻にした。お松は情夫大坂吉が濱田の馬丁となつて住み込んでゐるのに偶然出會ひ、人目忍んで密會するうち、濱田の正妻の忠僕佐吉に知られ、身の安全を計るため、正妻お安を無實の罪に陷れ、佐吉を苦しめたので、佐吉は呵責に堪へず、自ら舌を嚙んで死ぬ。お松と大坂吉はます〳〵不義の淫樂を續けてゐた。偶々正司は罪科露顯して獄に繫がれ、そこで死んだ。お松・大坂吉の二人は、その家財を奪ひ、東京さして逃げ行く途中、山路に迷ひ、先年お松を勾引さうとした甲州無宿の作造に出會ひ、格鬪するうち、大坂吉は谷底深く蹴落され、お松は心ならずも作造の意に從つた。一日作造に連れられて出獵し、男の油斷を見すかして狙擊したが彈は外れた。作造は怒つて山刀を抜かうとした時、大熊が現はれて彼を喰ひ殺した。お松は驚いて逃げる際

谷底へ落ちてしまふ。そこを通りかかつた旅僧日海に救はれる。あたりを見廻すと、小笹の中に雪に埋もれた男の死體があつた。それは作造のために蹴落された情夫大坂吉であつた。つく〴〵身の因果の恐るべきを悟り、それより日海の弟子となり、煩惱のきづなを斷つために、額に燒十能をあてた。甲州日海の寺で三年間辛抱したが、慾念再發、師の金を盜み取らうとして見咎められ、寺男や檀家の者にしたゝか打擲されたのが原因で、さきに額にあてた燒痕から膿汁がしたゝり、打擲された個所は黑紫に腫れ上り、世間からは忌み嫌はれ、身の置き所もなく、乞食しながら東京橋場汐入堤の母の許へたどりついたが、病が重くなつて、犬の如く狂ひ死んだ。
【批評】本書は、明治初期の毒婦小說中の嚆矢たるばかりでなく、いろ〳〵の意味に於て注目すべきものがある。卽ち當時新聞に出た續物が單行本として刊行された嚆矢であり、明治毒婦物の最初でもあり、明治式合卷草雙紙の代表作でもあつたなどの諸點である。主人公及び他の人物の性格描寫も、この時代のものとしては可なり成功して居り、全體を通じて無理がなく、文章の流暢なのも特色の一つである。
【參考】明治文學名著全集第十卷　(石川(巖))

鳥追舟 とりおひぶね　謠曲　「夫婦物の謠曲」を見よ。

とりかへばや物語　物語　四卷
【作者】不詳【名稱】異腹の姉弟が、姉は男のやうで、弟は女のやうな性質であるのを、父君が「とりかへばや」と思はれたと云ふ所から出てゐる。【成立・由來】「とりかへばや」の名は「拾遺百番歌合」に見え、また「風葉集」「無名草子」には、「とりかへばや」「今とりかへばや」の二つを舉げてゐる。現存本が何れに屬するかに就いては各說がある。山岡俊明は、「今とりかへばや」とし、黑川春村は「古とりかへばや」は鎌倉以前で「今とりかへばや」は鎌倉中期の作とし、又「風葉集」に見えてゐる七首のうち、現存本には三首が見えないから、新古の二本が一部づつ混つて今の本となつてゐるとし、岡本保孝はこの二種の本共に亡佚して傳はらず、現存のものは「風葉集」以後ではないかと疑ひ、藤岡作太郎は「今とりかへばや」は「古とりかへばや」の一部を修正したもので、現存のは「今とりかへばや」であらうと云つてゐる。然るに實際「風葉集」に載つてゐる「今とりかへばや」の歌は六首で、現存の本には皆有る。但し一首の上の一句が違つてゐる。又「無名草子」に見える批評の詞で見ても、現存のは「今とりかへばや」である事は疑ひない。「古とりかへばや」との關係については、「無名草子」に「何ごとももものまねびはかならず元には劣るわざなるを是はいとにくからずをかしくこそあめれ」と云つてゐる。要するに「今とりかへばや」は全くの改作で、人名等は殆ど同じであり、男女取り違へる事も同樣であるが、筋の上で大分相違してゐるやうである。【諸本】明治以前に刊本はない。日本文學大系・國文大觀・國文學叢書・日本文學全書・況齋叢書等に收められてゐる。寫本は多いが殆ど同一系統の本で、內閣文庫・靜嘉堂文庫・松井簡治博士等の藏本は、山岡俊明本の寫しでその序があり、他に無窮會・帝國圖書館・宮內省圖書寮・佐佐木信綱博士・前田家等の藏本がある。又刈屋圖書館には五冊本、四冊本二部、三冊本都合四本を藏し、京大國文研究室・藤井乙男博士各一本、神宮文庫には第四卷の缺けたものと山岡俊明本の寫本の二部を藏してゐる。
【梗概】何時の頃か、權大納言で大將を兼ねた人があつて、北の方が二人あつた。一人は源宰相の娘、その腹に男君一人。他の一人は藤中納言の娘で、一人の姫君があつた。この男君と姫君は不思議な位似てゐて美しかつたが、妙な事に男君の方は女のやうで、姫君の方は男のやうな性質であつた。それで大納言はいつも取りかへたならばと嘆いてゐたが、仕方なくて男は女に、女は男にして育てて行つた。やがて女君は侍從となる。大納言の兄右大臣に四人の姫君があつて、大君は女御、中の君は春宮の女御であるが、四の君は美しいので名高い。それで侍從をこの君にと思つてゐる。帝の御叔父式部卿宮の一人子宰相中將は容貌美しく、侍從と相慣れ睦んで共に世に持て囃されてゐる。妻には侍從の妹君か四の君かと思つてゐるがそれも出來ない。春宮には未だ若宮がないので、名高い大納言の姫君を入內させるやうに頻りに仰せられるが、御承諾申上げない。帝御讓位あつて朱雀院にましまし、亡き御后の腹にただ一人の一の宮を女ながら春宮に立てさせらる。關白も入道したので、大納言は左大臣關白となり、侍從(女)は三位中將となる。やがて四の君と婚し、權中納言に進み、左衞門督を兼ねる。漸く普通の人と異つた我が身に氣がつくがどうすることも出來ない。妹姫(男)は春宮の後見として宣耀殿に入り尙侍となる。中納言と共に身の憂さを嘆く。或る時宰相中將忍び入つて密かに四の君に會ふ。やがて遂に懷姙する。中納言(女)これを知り遁世を志す。さて先帝の三の皇子渡唐して歸り吉野の院にいます。唐人との間に出來た姫宮二人を伴ひ給ふ。中納言吉野に入つて宮に會ひ、やがて位を極めんと豫言され、暫し止まつて京に歸る。四の君は女子を生む。夏の暑い頃中納言が衣を脫いでゐる所へ中將來り、その女なる事を見顯はして強ひて契る。中納言嘆けども詮方ない。間もなく懷姙。中納言(女)は翌年春右大將となる。中將は中納言に進む。大將(女)は吉野に行き七月晦日の頃は必ず來らんと言ひ置いて歸り、尙侍(男)等に餘所ながら暇乞ひして產のために宇治の中將の別莊に籠る。都では大騷ぎとなり、四の君も密通の事露見し勘當される。尙侍は退つて男姿にかへり、大將の行方を尋ね吉野に入つて消息を送る。宇治にて對面すれば、既に男君を生んでゐる。或る夜關白の夢に僧が現はれて、天狗の祟りで今迄のやうな事になつてゐたが、祈に依つて直つたと告げる。翌朝男君から音報があり、姉弟は吉野に籠つて互に



とりかへばや物語(池田龜鑑氏藏)

代り合はうとして各々その修行をする。やがて京に歸つて、中納言の事で一度吉野にかくれたが、關白の望に依つて歸つたと披露する。やがて夫々元の男女に復して參り仕ふ。然るに春宮(女)と、元の尙侍(男)との間に男御子生まれ給ふ。これは關白方に預けらるゝ事となり、春宮は宮中を出でられる。大將は二條に邸を造り、吉野の宮の姉宮を妻とし、四の君をも住ます。妹宮は中納言の北の方とする。女君の尙侍はやがて御子を生み、女御中宮となる。中納言はこの度の大將は明かに男なるを見て不審に堪へないが遂に解らず、宇治から行方知れずになつた人の事を常に偲ぶ。元の春宮の御子は童殿上して時には母の院にも參る。大將はこれを愛する。宇治で生れた男君も同じく童殿上して、中宮これを見て悲しみ且つ愛せられる。やがて關白は入道し、右大臣は太政大臣に、大將は左大臣關白に、式部卿の中納言は先に大納言になり、今又內大臣兼大將となる。かくて平穩に皆々榮えた。【構想】構想としては特殊な興味がある。最初に二人の容貌の酷似してゐる事を說いてとりかへて後のために用意してゐる。けれど原因を天狗の祟りとした所に、當時の時代思潮が見え、且つ幼稚さがある。成長すると共に、それを正すことが出來難くなつた事は、當時の風習がどんなものであつたかを明かに示すものである。このまゝ尋常に行つては父君の言の通り、二人共出家しなければならぬところへ、式部卿の中納言を配して混亂を生ぜしめ、それに依つて筋を發展させてゐる。戀愛譚としても、變形のために特殊の面白さを加へるが、要するに根柢に乏しい憾がある。併し他の神仙談と較べて、努めて現實味を持たさうとしてゐる點が異なる。最後が目出度しで結ばれ、且つ佛教的色彩の極めて薄い點は、この作品の成立が比較的平安朝に近い事を示してゐる。なほ吉野山のところは源氏八の宮の事に倣つてゐる。【價値】この作の價値は、その構想の特異な點に在る。平安朝・中世を通じて唯一無二である。且つその基調に於て極めて中世的ならぬ事は、この時代に於て珍らしい事で、一脈現代のナンセンス味に通ふ所がある。この點「堤中納言物語」(別項)の特異なユーモアと好き一對で、蓋し現代の價値標準を以てすれば有數の作であらう。【參考】新とりかへばや考證 岸本由豆流〇取替ばや物語考(關根正直家藏) 岡本保孝〇國文學全史 藤岡作太郎〇古物語類字抄 黑川春村〇近古小說解題 平出鏗二郎 (小木)

鳥十五番歌合 「鳥歌合」を見よ。

鶉衣諸所御菜園 「系譜」を見よ。

杜律詳解 註釋書 三巻【著者】津坂孝綽【刊行】天保六年【解說】杜甫の七言律を漢文で解釋したもので、詳解の名に背かない。邦人詩解中の白眉である。(佐久)

鳥の迹 歌集 六巻【撰者】戸田茂睡【成立】元祿十三年【刊行】元祿十五年【諸本】戸田茂睡全集に收む。また校註國歌大系の近代諸家集第一巻には、「戸田茂睡歌集」として本書及び「紫の一本」「不求橋梨本隱家勸進百首」より茂睡の作歌を拔抄してある。【解說】元祿十三年五月十八日の茂睡の序文がある。山名玉山が江戸の人々の詠歌の撰集を編まうとして成らず、茂睡はその志をついで、玉山の作歌二萬五千七百二十四首を集めた家集を參考としたのを初めとして、その詠歌を第一に書き入れ、その他同流諸家の作、又自詠を集めてこの書を成した。題名は淸水宗川が江戸の新歌を選んだ撰集に、水戸黃門光圀が「正木のかづら」と云ふ名を下された跡を慕つて、かく名づけたといふ。また茂睡の奥書があり、刊本には書林燕雀堂の奥書があり、熱心なる人々の希望を容れて選歌を埓補し、歌數八百餘に達すると云ふ。初めの四巻は四季、後の二巻は雜で、雜上には哀傷・述懐の歌があり、雜下には戀・神祇の歌がある。(茂睡參照) (佐佐木)

鳥歌合 御伽草子 一巻【作者】未詳【名稱】「鳥十五番歌合」とも。【成立】德

鳥歌合（丹綠本活字本）

川初世か。「蟲歌合」(別項)のことが書中に見えるから、同書以後の作。「斑女物語」(別項)にこの書を引いてあるから、それ以前のもの。【諸本】古板本は、寬永頃の丹綠本活字本。續群書類從卷九八四にも收め、近ごろ稀書複製會(第五期)からも、この丹綠本を複製して頒つた。【題材】異類歌合物。即ち擬人の鳥類十五番の歌合で、四生の歌合の一。「蟲歌合」に擬したもの。「蟲歌合」の判者ひきがへるに對し、鶯を先づ判者に見立てたのは、古今序から來てゐるが、鷲がその役を奪ふ所に權力を絕對視する時代相が現はれる。【梗概】春の日長に長雨さへ降り添うたので、森の下蔭、山の片岨などにうづくまつてゐる鳥共、徒然に堪へかね、中にも軒下の鶺鴒は鶯の竹林房を訪れ、蟲の歌合に倣うて鷽姫を戀ふを相聞歌の題に、我等も歌合を催し、歌人の鶯を判者としたいと計つたので、鶯は私事では叶はぬと、鳥のどうさい房をして上見ぬ鷲のすけの許しを乞はしめ、鷲は改めて鶯・鶺鴒の二人を使者として、魚族と獸類とに正式の挨拶をなした上、開始する事となつた。判者は鷲で、俳諧歌體に依り、一番鳴太に口說く鵙、左方のきんすけ、右鳥田のくゐ助、二番野山を尋ぬる鵙、左山鳥の鏡のかみ、右廣野雉右衛門以下十五番の組合せ、何れも戀の題で勝負を爭つた。【影響】假名草子「あだ物語」(別項)の前身「ふくろふ」(別項)乃至「鷽姫物語」は、本書から出

たものかと思はれる。少くとも密接な交渉がある。(島津)

鳥邊山心中 脚本 一幕 世話物【作者】未詳【名稱】狂言本によると、名題の下に「つれなく冥土の鳥時鳥、よねのきやら戀の煙競べ」と並書がある。又割書には「鳥邊山心中」と記す。【興行】寶永三年正月、京、都萬太夫座切狂言として上演。〔役割〕梅垣源五兵衛(小野川宇源次)、長谷川勘介(藤川武左衛門)、妹おまん(霧井半之助)、忠兵衛の孫太郎(坂田藤十郎)、母親(玉川千之丞)、車屋右兵衛(山下京右衛門)、大黑屋まつ(山本かもん)等。同年夏、大阪岩井半四郎座に於ても、同名題で上演された。心中の二人は、大和山甚左衛門と山下宇源太、浪人が山下又四郎、不心中は中村四郎五郎と芳澤あやめ等の配役。【諸本】京八文字屋當年出版狂言本が現存する。元祿歌舞伎傑作集下卷所收。【題材】實說として信ぜられるものはないが、一說に當時、京都二條城番詰寄行附人菊地半九郎と祇園茶屋女お染との心中があつた等とも傳へられる。當時心中狂言が流行したが、以前にこの心中が脚色されてない事から見て、或は前年頃、事實があつたのではないかと思はれる。【梗概】(城の裏門外)近習梅垣源五兵衛と腰元おまんとは豫て契つた仲とて、今日も橋の口から忍び出て睦言を交してゐた。突然鶺鴒の音がしたので、驚き隱れると、一人の男が現はれて鵠の鳥を抑へた。やがて侍が駈せつけ、源五おまんが誤り捕へられたが、朋輩ではあり、密通は見逃された。併し忽ち見出された科人は、父の重病を癒す料にと鵠の鳥を覗つたおまんの兄勘介であつた。勘介は自白すると共に毒藥を服して自害した爲め、兩人が此處で死んでは同罪になると諭されて心ならずも斷落する。侍は源五の兄分であつた。(鍛冶屋志津孫太郎住居)源五は、おまんを巡禮娘に仕立てて兄の孫太郎を訪ね、金の無心を頼んだが、城內からの報知が來た爲め、おまんが密通であると覺られ、源五は二階へ、おまんは外へ引き分けられてしまつた。その夜、源五は忍び寄つたおまんに合圖して碓を足場に、二階から下りて共に最期の場へと志す。(道行)鳥邊山の奥へと辿り着く。(鳥邊山中)二人は書置と上衣を松の枝にかけて自害した。同時に、車屋七兵衛とおまんのまつとの不心中が演ぜられた。【解說】簡單な筋であるが、全幕の起伏は興味深く、おまんの兄の件の如き、全く挿話に過ぎぬが、これあるがために城門外の場と鍛冶屋の場との對照が成功したと言へる。源五もその身分相應の性格がよく描かれてゐる。これと反對の立場から見られる破綻が心中物に於ける不心中一件の添加であらう。これによつて、源五おまんの心中への同情がかなり薄らいでゐる。お染半九郎は實說の人物であらうが、おまん源五の名は「闇無狀」の人物を借りたに過ぎないのである。道行の詞章は當時既に評判であつたと見え、狂言本に全文がある。これを多少改訂したものが、「歌系圖」に近松門左衛門作と記す上方唄の「鳥邊山」である。これが更に書き替へられて、薗八節「鳥邊山」となつた。豐後節「不心底闇魄」は、七兵衛おまつの件を綴つたものである。今日は新內節で傳はつてゐる。主人公がお染半九郎に改まり、新解釋を加へられたのが、岡本綺堂氏作の「鳥邊山心中」(別項)である。(守隨)

鳥邊山心中 脚本 一幕二場【作者】岡本綺堂【初演】大正四年九月、東京本郷座。〔役割〕菊地半九郎(市川左團次)、坂田市之助(中村又五郎)、坂田源三郎(市川壽美藏)、八介(市川米左衛門)、與兵衛(市川左升)、おそめ(市川松蔦)、お花(市川米蔵)等。【諸本】岡本綺堂戲曲集・現代戲曲全集所收。【題材】別項「鳥邊山心中」參照。【梗概】(都祇園の茶屋)寬永三年十二月將軍家上洛のお供の數に加はつた菊地半九郎は、旅寢のつれ〴〵を友達の坂田市之助と、連夜、祇園の色酒に浸つた。半九郎は、おそめといふ遊女に馴染を重ねた。おそめのまだ廓馴れない初々しさに、戀といふよりも不憫さを感じ、將軍家が急に江戸表へ下向と事決つた時、おそめを請け出し、親許へ戻してやらうと決心した。そのためには家重代の刀を手放しても惜しくないと思つて、市之助にそれをうち明けて相談した。が、凡庸な遊蕩兒でしかない市之助は笑つてそれを斥けた。半九郎は腑に落ちない心に強ひて酒を飲んだ。そのとき、庭先から市之助の弟の源三郎が留める仲居を突きのけて入つて來た。そして市之助のふしだらな所行を難詰し、無理にも連れて歸るといきり立つた。半九郎は見かねてこれを制したところ、源三郎は、今度は半九郎に向つていひたい三昧をいつた揚句、江戸の侍の面汚しとまで罵つた。もと〳〵短氣な性質のところへ、でなくても前からのもや〳〵に氣を腐らせてゐた半九郎は、「河原へ來い」とばかり突然立ち上つた。(四條河原)二人は河原で眞劍の勝負をした結果、半九郎は源三郎を討ち果した。おそめは後から驅けつけてそのさまを見、驚いて半九郎に、そのまゝこの場を去るやうに勸めた。半九郎は、さしたる意趣遺恨もないのに同僚を殺した上は、潔くその罪を引きうけて死ぬのが武士の道だといつた。それを聞いたおそめは、それなら一しよに死なせてくれと賴む。といふのも、店出しの宵から揚げ詰めにされて汚れのない自分の身は、お前一人を夫として清い一生を送りたいと歎いた。その眞情に動かされて、半九郎は、ともに二人で死ぬことを誓つた。そして二人は、廓の習ひの、春着のためにと對にこしらへた濃い紫と黑繻子の晴小袖を死裝束にして鳥邊山へと急いだ。【解說】この作の特徵は、幕あくと直ぐ竹本の淨瑠璃になることである。即ちこの作が終始チヨボをつかつてゐることである。既に「浪花の春雨」に於て試みてはゐるものの、この作者としては、かゝる形式はめづらしい。初演以來頻繁に上演され、强記の作者にしてなほその回數を覺えてゐなかつたといふ。松竹戲曲十種の一。(久保田)

鳥部山物語 御伽草子 一巻【作者】不明【成立】不詳。室町中期の作か。【諸本】群書類從卷三二一・日本文學大系所收【梗概】武藏の國のさる寺、なにがしの和尙の弟子に民部卿と云ふ人があつた。容色も淸らかに才學も優れてゐる。その頃、帝何かの御修法のために諸國の高僧を召される事があつて、この和尙も上京する事になり、民部卿も供の中に加はつて夏立つ頃京に上る。年も改まつて空の景色漸く春めく頃、民部卿は友達と北山の方へ遊びに行つたが、その途中二八にも足らぬ程の美しい少年を見る。思はず心迷ひして見惚れたが、他人の見る目を思つてその日は歸つて來たが、夜も晝もその俤が眼

につく。廻り逢ふ事もあらうかと毎日方々をまどひ歩く中、四條坊門のあたりで、木立の深い公卿の邸を見つけ、ふと門の傍へ寄つて見ると、過ぎし日の美少年が勾欄に倚つてゐた。一入増さる思ひを抱いて歸つて來たが、そのまゝ病の床に臥す。民部卿の從者に事の次第を知つた者があつて、枕許にさしより、彼の君は某の中納言の御子で、その東隣に住む老翁は自分の知人であるから、暫く其處へ住まれたら、よい都合も出來るだらうと語る。そこで和尙の許を得てかしこへ宿る。翁の子に情ある若い男があつて、民部卿の話に同情し、自分は隣家に出入し、彼の少年藤の辨と云ふにも仲よくしてゐるから文の取次をしようと云ふ。その緣によつて遂に民部卿は藤の辨と契る。夢のやうに春も過ぎて夏になる。和尙は東へ降る事になつたので、仕方なく民部卿も盡きぬ別れを嘆きながら隨つて東に赴く。辨はその後、日に增す思ひに堪へかねて嘆きの日夜を送つてゐる。乳母はその由を尋ね、仔細を兩親に告げる。父母も愛する一人子のこととて、民部卿を迎へに乳母を東へやる。乳母と民部卿と連れ立つて上京の途中、土山へ着いて翌日は都へと喜んでゐる時、京からの文がつく。それは藤の辨が遂に昨日の暮に亡くなつた知らせである。二人の嘆き云ふばかりなく、ともかく急ぎ都へ上る。父母は几帳の外まで走り出で民部卿を迎へて共に嘆く。七日鳥邊野に會して今更涙を新にし、民部卿はかねて決心した事とて自殺しようとするが、人々に止められる。かくて北山に庵を結んで行ひ濟ましてゐたが、「あらぬ道に迷ふも嬉し逢はずばいかでさやけき月をみましや」の歌を誦する程の心境に達した。そして又何方とも知れず去つた。

【解説】稚兒物語の一種で、愛する稚兒ゆゑ、眞の佛道に入つた筋は珍らしいものでなく、文章も取立てていふ程のものではないが、ただ「花の緣」（別項）の原本として記憶さるべきものである。（小木）

採物 とりもの 「神樂歌」を見よ。

屠龍之技 とりようのぎ 俳句集 大本一册【著者】酒井抱一【刊行】文化十年【諸本】近世俳諧句集（俳書大系）・俳文俳句集（日本名著全集）に帝國圖書館本を收む。【由來】寛政の初め頃から晩年までの、抱一自筆の句日記が「輕擧觀句藻」と題して二十册に達してゐる（岩崎家靜嘉堂文庫藏）。その中から拔抄上梓したのが本書である。抱一自身板下を書いてゐるのがこの集の珍重される一因である。【異本】普通本は文化九年までのものであるのに、同十二年までの發句を含んでゐるものがある。これを檢討するに、「うめの立枝」の餘中「歸去來」と題した「歸なむ居酒一と口菊寂ぬ」の句と、「古田高麗の茶盌を畫にうつし其上に讃して」と題した「幾時雨ふるやふる田のかたみ哉」の句との間に、「春興」と題した「うぐひすの口明く影や下地窓」の句より「至日」と題した「むりやりに咲や一鉢冬至梅」の句までの百三十八句（原本十四枚）を挿入したものである。この百三十八句は、文化十年・十一年・十二年の三ケ年に亘るものであるから、文化十年に一度上梓したものへ、同十三年頃これを追加したものであらうと考へられる。【内容】寛政の初め頃より文化九年までの約二十年間の年次的發句集である。「こがねのこま」「かぢのおと」「みやこどり」「椎の木がけ」（寛政及び上京の句がある）、「千づかのいね」（千束村住居のころ）「潮のおと」「かみぎぬた」「花ぬふとり」（根岸住居のころ）、「うめの立枝」の見出しの下に年代順に輯錄してある。文化九年十月龜田鵬齋漢文の序、春來窓の跋、文化十年清明後日大田南畝漢文の跋がある。

【著者小傳】抱一、名は忠因、姬路侯の次男として神田小川町の中屋敷に生れた。兄の雅樂頭忠以は宗雅と號して茶道・狂歌に長じ、狩野風の畫を能くしたので、抱一は兄に就いて畫道の手ほどきを受け、のち狩野永德の門に入り、又歌川豐春に浮世繪を、宋紫石に明畫を學び、或は谷文晁の説を聽き、若しくは光琳風の筆意を探るなど、遂に獨自の畫風を拓いた。俳諧は馬場存義に學び、初め濤花、のち杜陵と改め、更に屠龍の文字に改めた。金春流の太鼓を打ち、揚弓は江戸一の名を博し、刀劍鑑定に於ては本阿彌をして舌を捲かしめたといふほど多藝多能であつた。寛政九年九月九日、三十七歲の時、病身のため西本願寺の弟子となつて京に住むべく剃髮したので、酒井家ではこれを憚れ、千石五十人扶持を給することとなり、折柄江戸へ下つてゐた西本願寺文如上人によつて薙髮、等覺院文詮暉眞の得度名を與へられ、准連枝を以て遇せられ、權大僧都に任ぜられた。同年十一月三日京へ上つたが、滯在僅かに十二日にして病氣と稱して江戸へ歸つた。この頃から酒井家からの扶持も停止されたので、淺草の千束村に住んだ頃は、畫料の收入によつて生計を支へたといふ。新吉原へ足繁く出入し、遊女達を聲の弟子にしたのも、主としてこの時代であつた。後、根岸に移つて雨華菴と稱した。雨華庵抱一・庭柏子・鶯邨道人の諸號も、この前後から用ひたものである。文政十一年十一月二十九日六十八歲で歿し、築地本願寺に葬られた。（松川）

トルストイズム【名義】ロシヤのレオ・トルストイの著書及びその實生活に現はれた思想傾向を一括してトルストイズムといふ。こゝでは主としてその主義がいかなる影響を明治からその後までの文學思想に與へたかを述べる。【解説】トルストイズムは、大ざつぱに（一）戀愛及び性慾論、（二）非戰論及び平和主義、（三）人道主義、（四）宗教觀、（五）勞働奉仕及び簡易生活觀、（六）民衆藝術觀、（七）トルストイの人格禮讚等に分けられ得る。第一は明治二十八年八月、小西増太郎・尾崎紅葉共譯の名で、「國民之友」に載つた小說「クレーツエロウの名曲」があり、性慾は罪惡であり、性慾ぬきの愛こそ夫婦愛の理想であるといふ彼の性道德を主張したもの。一厨川白村の戀愛論等を生む元になつた。第二は日露戰爭當時、幸德秋水の「トルストイの非戰論を評す」（週刊平民新聞）がある。秋水は、日露戰爭にあたり、非戰論の主唱者である。トルストイの非戰論の提唱を「盛唱宗教指く能はず」と一應認めた上で、ただ彼が、戰爭の原因を個人の墮落に歸するのに贊成しない。「吾人社會主義者は、戰爭の原因を以て經濟的競爭に歸する」點で、彼と違ふと說いてゐるが、非戰論の底に潛む平和論は、內田魯庵や武者小路實篤等の思想に採り入れられた。第三は、中澤臨川が長篇論文「トルストイ」によつて、彼を「偉大な誠實の連續の一生」として賞讚し、ニーチエ、ロオラン、ベートーベン等と同一線上の巨人としてその人道主義を賞讚した。また德富健次郎は、明治三十年に、民友社刊

行の「十二文豪」（別項）の第十卷として、「トルストイ」を著はし、「侵略主義、壓制主義、迷信、敗德の賊國に、四海同胞を唱へ、無限の自由を唱へ、實行的宗教を唱ふるトルストイ翁云々」と述べてゐる。明治三十四年の彼の小說「思ひ出の記」（別項）は、トルストイの「幼年」「少年」「青年」から暗示を得たものだといはれ、三十九年四月には、エルサレム順禮の歸途、ヤスナヤ・ポリアナにトルストイを訪うて歸國したが、前年、健次郎の兄蘇峰もまた、歐米漫遊の歸途、ロシヤを過ぎてトルストイを訪ひ、トルストイの署名は、ますます日本に知られた。健次郎の後年の田園生活は、トルストイの感化によるものだと云はれる。トルストイの人道主義は、大正年間の白樺派（別項）に最も多く繼承された。彼が貴族に生れて、勇敢な自由思想の提唱者であつたことは、貴族出の多い白樺派の人々に强い渇仰を受け、殊にその中心たる武者小路實篤は、十九歲の時、邦譯「我が宗教」「我が懺悔」を讀んで、トルストイの飜譯を一生の主なる仕事にしようとしたとまで告白してゐる。學習院在學中からトルストイ研究に着手し、初期の論文・小說・戲曲は、トルストイズムの人道主義觀が强烈に現はれてゐる。新らしき村の建設もその影響である。外に倉田百三も亦その一人である。第四は、江原小彌太・倉田百三・岸上時造・加藤一夫等の著作に現はれる。第五は、加藤一夫・江渡狄嶺（幸三郎）・西田天香等によつて宣傳され、もしくは實行された。第六は、大正六年から八年に亙り、民主主義の氾濫時代、ロマン・ロオランのそれと共に、彼の「藝術論」が、加藤一夫・富田碎花等によつて飜譯された。その外內田魯庵は、「復活」その他を邦譯した外、絶えずトルストイの業績を記述した。（千葉）

泥人形 どろにんぎやう 小說【作者】正宗白鳥【發表】明治四十四年七月、「早稻田文學」【刊行】春陽堂より單行。現代日本文學全集（正宗白鳥集）所收。

【梗概】中產階級のインテリゲンチヤである守屋重吉は、放埒な獨身生活を續けながら三十を越しても相かはらず無爲の日を送つてゐるうちに、ふと有樂座の名人會へ行つて美しい丸髷の女を見た。それは一年前に見合ひまでして而も斥けた女だつたので、後悔に似た感じで自分の目の鈍さを嘲つた。結婚して着實な生活に入るやうに、七年越し親身に世話を燒いてくれる友人の矢澤夫婦を訪ねると、今交涉中だつた緣談が先方から破れたと云つて、更に新しい口を持つて來た。二十歲になる田舍の初心なその娘とも見合ひをしても別に氣乘りがしなかつたが、心の底には柔い愛情を欲しい氣持も漸く湧いて來たし、矢澤夫婦の勸めるまゝに結婚することになつた。以前は自分の身も心も投げ込んで愛しも愛されもする女が、何處かに潛んでゐさうに思はれてならなかつたが、今はそんな幻も消えた。新宅へ移つて祝言の日を迎へたが、花嫁の姿にも三々九度の盃にも重吉は何の興味も持てなかつた。「おれの家が嫁だつたら、何時でも、さつさと田舍へ歸つてしまふさ」、これがその翌日、花嫁に對して云つた言葉だつた。彼の口からは懷かしい甘い言葉も洩れず、散步に連れて行かうともせずに、十日も立たぬうちにふらりともと遊んだ待合へ出かけて、一人寢の床に快よく一夜を眠つて來りした。かうして新家庭も、別々の人間が住んでゐるに過ぎないもので、心の融け合ふこともなく、重吉には緣も由緣もない娘を預かつてゐるやうに思はれてならなかつた。夫婦揃つて甲府へ里歸りして歸つても、その狀態に變りはなかつた。しかし花嫁は、淋しい悲しい思ひを一度だつて近親へも打明けなかつた。多年愛讀してゐる「淑女の美德」や「婦人の鑑」に敎へられて、夫がどういふことをしようと、又「如何に夫が無情なりとも、眞心を以て盡しなば、やがて愛情を以て酬いらるゝこともあらん」と日記に書いてゐた。そして夫の出步いてる留守に、よく近所の「お釋迦樣」へ行つては、夫の身體の健かになるやう、自分に對して愛情の增すやうにと祈るのだつた。重吉の氣付かぬ間に、この「良緣の御釋迦樣で」が近所の噂となつた。

【批評】結婚、家庭生活、妻などに對する世間なみの浪漫的な考を極度に打挫いだ作品で、わが新妻を一個の泥人形に過ぎないと觀ずる重吉の頽廢的なニヒリスティツクな氣持があらゆる行間を充たして、作者の特異を代表すべきすぐれた中篇小說を成してゐる。發表當時非常な好評を以て迎へられたのも當然である。前年の「微光」（別項）に次ぐこの作は、作者に所謂新進の域を脫せる確然たる作家的地位を與へたと云つてもよい。（水木）

泥水清水 どろみづしみづ 小說【作者】江見水蔭【發表】明治二十九年四月「文藝俱樂部」

【梗概】文學者水島山三郎が馴染んだ品川の娼妓に花鳥といふのがあつた。水島は將來を考へて、花鳥と離れようと思ふが、未練があつて出來ない。その中、花鳥は小田原に住み替へすることとなつたので、水島は名殘りを惜しむ心から、塔の澤へ夫婦氣取りで遊んだ。水島は暫く素人に歸つた花鳥の中里佐保と三日間、樂しく暮したが、彼女は前途をはかなみ自殺しようとするのを、水島は驚いて押止め、將來は必ず自分の妻とするからと諭して、小田原へゆく彼女を見送つた。

【批評】素人に歸つた花鳥と三日間、箱根で遊ぶといふ事が本篇のヤマである。例の健筆で面白く讀ませるといふ外に取立てて云ふべき節もない。大體に於て無難の作である。併し取り上げた世界が變つても居り、發表當時は、可なりの好評であつた。（高須）

不問語 とはずがたり 隨筆 三卷【著者】篠崎維章【成立・由來】享保十八年の作。自序の中に、「そらに覺へし事をかたはしよりあぢきなき筆のすさびにかいやりすて侍る。實に他の目には面白からぬ言の葉を、我ひとりのとはず語りとぞ」とあるが、まさかに諳記のみによつたとは思はれぬ。【諸本】大田南畝がその所編の「續三十輻」中に編入したのを、大正六年國書刊行會で讀叢書を校訂複製したので、本書も上刊された。「三十輻」第二册中にある。【解說】國史・地理・制度・詩歌・文字等に關する斷片的考說で、往々一章數言に過ぎぬものがある。上卷にその原ふせやの里以下百二十八則、中卷に官司の四分配當以下四十六則、下卷に不夜城以下五十五則を收めてゐる。

【著者小傳】篠崎維章。字は子文、通稱金吾、東海と號した。儒學を伊藤東涯に受け、獎成つて小幡藩に賓師の禮を以て遇されたが、後、獨立して生徒に敎授し、漢學・國學に兼ね通ずるを以て聞えた。元文五年（二四〇〇）七月一日歿。享年五十四。（和田）

不問語 とはずがたり 隨筆 三卷 寫【著者】尾崎守昌（雅樂頭）【解說】著者が子孫のため

に身を修め知を擴める料として書き集めたもので、天明以前に見聞した事實の記載が多い。概ね俗習に據つた俗說で、識者を利するに足る記事は少い。上卷に父母の恩、心の勸學塞翁與門剃頭之事、人間貧福欲道、畸人の辨附安達が原殺生石、聖德太子附憲法、和歌の感應現原父子等十條、中卷に東福寺涅槃像之說、釋迦一之說、春日大明神之由來、細川幽齋古今集傳授附二十一代集之事、永樂錢通用之事等十四條、下卷に四生附獅子・虎・狐・土龍之沙汰、非事は非之說、歌によりて名を求めし人、野馬臺之詩附衣通姬、紳樂坂敵打之次第、江戶中家數人別等十八條を收め、若干の挿圖がある。天明四年の自序の末に、「於武州岡部宿令編集之もの也」とある。（和田）

不問語（とはずがたり）　隨筆　一卷　【著者】中井誠之【刊行】寬政三年【解說】著者の感想數十項を雅文體に記したもので、寓言もあり、實話もあり、概ね實踐倫理上の訓戒に係る。著者の男中井積善の跋（寬政三年）に、「其操行之正、孝友之孚、立志之堅、守分之安、憂國恤民之切、處事接物之周且篤、則雖內藏知、有不可掩焉者、云々」と述べてある通り、洵に筆者の人格を窺知するに足るものがある。誠之甃庵の歿後三十餘年に、竹山・履軒二子、故翁の舊稿を捜つて校刊に及んだと云ふ。【著者小傳】中井誠之。字は叔貴、通稱四郎、又忠藏、號は甃庵、播磨國龍野の人。儒學を三宅石庵に學び、業成つて懷德堂を大阪に創立し、その二子積善（竹山）・積德（履軒）に至りこれを大成した。寶曆八年（二四一八）六月十七日歿。享年六十六。（和田）

頓阿（とんあ）　歌人　【姓名】二階堂貞宗【法號】泰尋・泰尊等と云ひ、後に頓阿又は頓阿彌と呼ぶ。晩年、感空とも稱してゐたらしい。【生歿】正應二年に生れ、文中元年（二〇三二）三月十三日に歿す。享年八十四。【墓所】京都東山雙林寺【家系】異說異傳多き中に、「尊卑分脈」を參照し、比較的正確と思はれるものの一を揭げる。

藤原是公……二階堂行政（隱岐守 政所執事 二階堂祖）……行貫―宗貫―光貞―貞宗（頓阿）

この系譜の二階堂光貞の子（弟とい說がある）となすもの以外、藤原道長の曾孫大納言爲實の六世、或は八世の孫とする說も有力である（爲實―忠賴―今春―仁春―爲綱―爲令―良阿―頓阿）。但しこれは法系を混同した嫌ひがあり、特に師實（爲實父）を祖としたところは、二條派との緣に牽强附會した跡が著しい。若し二

頓阿筆蹟

階堂說を採るなら、祖は藤氏であるが、永く武家として續いた家系であり、光貞も下野守であつた。但し祖に行遠の如き歌名を傳へたものがあり、全然文事と無緣ではない。【閱歷】幼より和歌の道を好み、私かに二條派の嫡流爲世の家風に私淑してゐたものらしい。家集に傳へられる作で古いものは、二十三・四歲頃詠んだ嘉元百首のうちの三首のもの、本懷な詠風にその後年の傾向を豫兆してゐる。當時爲世は持明院統御在位の時代に當り、甚だ不遇であつたが、頓阿は二十四歲の年、斷然出離の決意を遂げ、叡山に登り、刻苦精勵、佛學を修めた。しかし長く留まらなかつたことは、正和四年三月五日龜岡花下會に、淨辨・慶運等十六人と爲世に率ゐられて歌を詠んでゐることや（龜岡花下會花十首寄書）、同五年三月十九日、爲世が子息を伴ひ、春日詣を試みたのに加はつて唯識論句歌を奉納してゐる記事等（頓阿法師詠・蘇春記）で臆測される。但し西行の跡を敬慕した彼は、諸國修行に出掛け、東下り等をも遂げてゐる。武藏野まで足迹を及ぼしたことは、醒が井・善光寺・田子の浦・鈴鹿山等が家集並に「頓阿法師詠」の詞書に出てゐるが、この事はやゝ後年に屬するかのやう推斷される。宇津の山で蔦の苗を採つて歸り、草庵に植ゑおいたものが成長して立派に紅葉すると云ふことも語られてゐる。文保二年正月十一日禁中和歌會始には、公卿の末席に加へられ、當座三十首など詠んでゐる。頓阿の三十歲時代は、ほぼ東山靈山附近に送られたものかと思ふ。爲世の孫爲定よりは二三歲の長で、親交深く、當時皇室には、後宇多上皇・後醍醐天皇の如き才藻優れ給へる方々があつて、師の爲世は、元應二年「續千載」奏覽後、家の榮達を祝うて住吉詣をした際など、頓阿等門下を率ゐ、その社頭で五首歌講を試みてゐる（頓阿三十二歲）。二條大納言一日千首、龜山殿千首、龜山殿七百首等纏まつた撰歌集も次々に出された。又「續後拾遺集」の撰進が、爲世の子爲藤に命ぜられたなども、當時の和歌隆盛の一斑を示すものである。この爲藤には、頓阿は殊に親昵してゐた。正中元年、爲藤の他界に際しては、「いはぬより思ひこそやれとにかくに一方ならずぬるゝ袂を」と云ふ頓阿の哀傷は、二條派歌人の齊しく同感したところであつたらう。その際一時、頓阿は厭世の情餘つて詠歌のことを斷念したと云ふ。更に八十歲に達した爲世は出離を遂げ（元德元年）、光嚴天皇御受禪と云ふやうに世は推移した。併しこの無常さこそ、却つて頓阿にとり、その半生の間辿り辿つて來た歌の道を、一層深く生かしてゆく機緣となつたものではあるまいか。特に魂のどん底より彼を搖がしたものは、元弘の亂、建武の變動であつた。「世の中靜かならず侍りし頃みむろとの庵室」にあつたと云ふのは元弘三年のこと、「名も知らぬみ山の鳥の聲はしてあふ人もなし檜の下道」と、高野谷に身をよせてゐたと云ふ建武前後のことであらうか。小田原谷の花折院に入り、爲世のために薪水の勞を採り、延元三年、舊師の往生を見屆けたと傳へるものもあるが、やゝ揣遠にすぎるらしい。と云ふのは、飛鳥井雅有の三十三年結緣經歌や內裏千首（建武二年）に名を列ねてゐるからである。ともあれ兵馬倥傯の際、洛外にあつて半生を追懷する機の多かつたことは認めて差支ないであらう。即ち爲世の薨去に當つては、强い厭世の精神より歌席などにも出なかつたと見え、時の主上は二條良基を通じ、一層歌道に精進すべきを勸め諫め給うたと云ふ。「勅なれば思ひなすてそ敷島の道に物うき心ありとも」と答へ奉つてゐる。良基（別項）は頓阿の門人として北朝に仕官し、尊氏や義詮等と相計り、文化隆運の上に貢獻するところ頗る偉大であつた歌人である。從つて頓阿また尊氏の寵顧をうけ、或は尊氏の八幡詣（北朝觀應四年）や北野詣（北朝康永二年）等に扈從し、或は百人一首談義（觀應四年）、難波詣覽（康永三年）に出會、尊氏と席を

同じうした。當時頓阿・淨辨・慶運及び兼好の四人を和歌四天王と呼稱したやうであるが、かの兼好が歌席に行を共にしたのもこの頃に始まるものらしい（室町日記）。高野山金剛三昧院奉納和歌に、兼好・頓阿が名を列ねてゐるのは有名なことであるが、恰も康永三年のことである。北朝には貞和時代、毎月三度の百首會が催されたこともあり、これ等に四天王連の加はつてゐた次第は、「近來風體抄」の記事にその證左がある。かくて逝き時の流の中に、その兼好・淨辨・尊氏も亡き人數に入り、頓阿も夙く六十の坂を越え、或は「遠島百首鈔」をものし、「後普光院關殿御百首跋」（北朝文和元年）を書くなど、動かし難き歌壇の大長老となつてゐた。正徹は、「頓阿は六十已後名を得たるなり」（徹書記物語）と晩成の人の如く云つてゐるが、これ地下人として勅撰集の如き公事に與らなかつたと云ふ意に解すべきで、歌名の如何ではない。延文の初め「新千載集」撰定の動あるや、頓阿は三百六十首の自撰集を提出し（園太曆日錄）、その草稿を彈正宮の御目に入れたりしてゐる（家集詞書）。白樂天は、「余年七十一不事於吟哦」と云つたが、頓阿もこの句より「今はわれ心もよせじなゝそぢに越えぬる後の和歌の浦なみ」と詠みつつ、七十歲以後の彼の和歌精進は却つて一層痛切のものとなつた。道嗣その他公卿連の師範として活動し（愚管記等）、良基との歌學研究は貞治二年の「愚問賢註」によりて傳へられ、二條爲明がその翌年「新拾遺集」撰定の半ばに斃れた際、その完成の業が頓阿に依囑されたことは、如何に七十六の彼が精力的であつたかを物語る。なほ五言古詩句百首題は延文末の作であり、「草庵正集」も、大體七十餘歲の蒐錄と考へてよい。「草庵集」（別項）は將軍に奉り、その推賞を受くるや、「數かずよ人はすつとも和歌の浦のもくづを玉と君し照らさば」と無上の感激の念に泣いてゐる。「新拾遺集」完成と共に、彼は生前既に五勅撰集の作者となり得た譯である。得意さ併せて想ふべく、「玉津島入江こぎ出づるいづ手船五たびあひぬ神やうくらむ」とも詠んだ。その晩年は文字通り多祥であつた。蘊堅のもとに贈つた歌にも、「人ならばはかなくぞみむ八十まで和歌の浦波立ちまじる身を」とある。「迎陽記」は、大往生の際、頓阿五句願文（弟子經賢白）なるものを殘し傳へてゐる。なほ彼の住居は、東山雙林寺であつたらうと臆測されてゐるが、四條道場・金蓮寺・仁和寺の庵・伊賀三田村等、それぞれ或る時期の止錫の地であつたことは、諸文獻の證するところである。【性格】彼は、實力發揮の許された時代に於ける稀有な大成者の一人である。常に倦まず撓まず進むといふその眞摯の精神は、作風にも反映するところが著しい。彼は西行を思慕してゐるが、兩者その性格を異にしてゐることは云ふ迄もない。康永元年法勝寺炎上の際、烏有に歸した西行自筆の「山家集」に對し、周嗣が複本を作つた努力を激賞し（家集）、西行舊蹟の雙林寺に「跡古めてみぬ世の春を忍」び、忌日々々に「山の櫻をたを」つたとしても、彼は到底二世西行の名に値しない。彼と兼好の交誼は或る點まで深かつたらしい。頓阿は兼好に比し年下であつたのみならず、可なり融通の利く社交性をも有してゐたやうに考へられる。書道に巧みで「園太曆」にも推賞され、出離以前は琵琶を愛した事も知られる。資料乏しい中に彼の性格を敢て綜合するならば、天賦の才藻を努力と精進により、練りあげ造りあげた大文人とでも稱してよいか。「さびしさを老となるまで忍びきぬ今はみ山に住みや果てまし」と云ふ類の隱遁讚美の歌も殘つてはゐるが、やはり孤獨を守りきれないのが彼の本性だつたと思はれる。【作品・編著】頓阿の歌の勅撰集に載るのは、「續千載」「續後撰」「風雅」「新千載」「新拾遺」「新後拾遺」「新續古今」の六集で、計四十四首である。○草庵和歌集（別項）○頓阿詠五十首和歌一卷（寫本）（鈔宮文庫藏、延文元年の盡夏の集書によれば二十歲時代初期の歌集）○頓阿法師詠一卷（寫本）（圖書寮藏、延文二年新千載集撰定にあたり、頓阿の獻上した自撰歌集で三百六十首）○頓阿句題百首一卷（寫本）（五玉集、即ち頓阿の外、良守・良春・頓宗・周嗣の五人が羨寄帶賦篇、その他五言一句の題により百首歌を詠じたものの一。內閣文庫・圖書寮等藏。圖書寮本は頓阿自筆本の轉寫。頓阿加點のもので類從卷一七五に收められてゐるものもある。延文四・五年の交書出されたもの）○頓阿百首一卷（寫本）（鈔宮文庫本。これは、前掲の古集句題百首と別に、一般の句題百首との兩種を編したもの）○愚問賢註（別項）○井蛙抄（別項）○水蛙眼目（水蛙抄參照）○頓阿勝負付歌合一卷（群類從四二一所收。四十八番、中に救濟のもの六首あり。判のみにて詞なし）○新拾遺和歌集（別項）○新撰歌仙（頓阿編といふは誤傳）○高野日記一卷（群類從五三二及び扶桑拾葉集に收む。僞作）○十樂庵記一卷（新類從卷四八〇に收む。北朝貞治三年二月下旬作。即ち當時、伊賀國阿山郡三田村に閑居してゐた關係、附近の古社寺の名、ゆかしき人物等につき、心覺えまでに書き止めて遺したもの）○三十番歌合頓阿判（類從卷二二三所收）。【作風】「草庵集」（別項）は、實に四千餘首の歌を含み、一家の集としては稀に見る大歌集である。「憂き身には思ひでぞなき敷島の道に忘れぬむかしならでは」（續集）と頓阿自ら詠んでもゐる通り、彼の終生は歌に始まり歌に終つてゐ、「愚管記」の記者近衛道嗣等から「末代之數寄者」と畏敬されたのは無理からぬ。その作風は、手硬く輕薄でない。何處までも質實一本で押し通してゐる。「梅の花にほひやつかにみちぬらん夜わたる月に春風ぞ吹く」「いづかたと聞きだにわかで過ぎにけり寢覺の空の山ほとゝぎす」彼の誠實は、同じ內容の作を幾種にも詠み返してゐる例多きにも知られる。彼には澤田の頓阿と云ふ譯名がある。即ち「月宿る澤田の面にふす鴫の氷より立つ明方の空」の名歌によるとされてゐる。彼の特質は、長短共に繫かつて三代調的詠風に存してゐると云つてよい。夙に良基が、「ことごとしくなく」と許し（近來風體抄）、近世に至り、伴蒿蹊が探幽の畫風に相通ふとして嘉賞してゐる如き（皇都午睡の引）、いづれもその長所を穿ち得たものである。これ等に反し、了俊が「一節詠みたる姿のほかをばつやつやよみ侍らず」（落書露顯）と貶し、「十首に七八首は古歌を多分に用ゐよみ」（和歌所不審條々）と難じてゐるのは、頓阿の他面、甘受すべき短所に相違ない。淸澹な彼の家集を繙くものは、餘りにも主觀的態度に偏し、偏知的のトリックを玩弄し、更に緣語・掛詞類の措辭の矯飾に墮してゐる點、これは了俊等反對派の歌人ならずとも認めざるを得ないであらう。併し頓阿が定家以後の二條派歌人の中に、毅然として鑿立する所以は、その淡雅な內面性と實生活から生れ出た數十首の詠にある。「しきみつむ山路くれぬといそぐかな我がすむ方の鐘のひびきに」「立歸りいつ越えむとも白雲のたなび

く山をかされてぞゆく」これ等には仄かながら西行の詠風が生き、「難波がた雲の夕ゐる波のうへに遠き生駒の山ぞのこれる」「我門の板井の水やあまるらむ刈田のおもに水草ゐにけり」の叙景には、單に古今調と云ふ如き概念によつて說明し難き本質的の映發が感ぜられる。「愚問賢註」の中心思想たる「心を面影のかすかなる所にとどめて、人のふるさぬ所を案ずべし」とは、まさにこの心境を指してゐたものとしてよい。【影響】歌道に於ける世襲的權威が轉落した時代とはいへ、勅撰集撰定の築を地下より出でて繼承することは、ひたすらその豐かなる才識と圓熟した德望とに係つてゐる。從つてその學統下に良基を生み、やがて常緣や宗祇(各別項)を持ち得た譯であり、その二條家(別項)再興の功は、やがて近世に連なる堂上派(別項)の新基礎を造つた。後世、「草庵集」及び「愚問賢註」の普及も著しきものあり、細川幽齋も「再び和歌の道起れり、これ頓阿の力なり」(詠歌大槪抄)と云つてゐる。連歌に關する功績も尠くないが、その作の一部は「草庵集」續編に附載されてゐる。

【參考】尊卑分脈〇扶桑拾葉集系圖〇二階堂家系圖〇玉石雜誌〇草庵集〇愚問賢註〇徹書記物語〇和歌所不審條々〇南山巡狩錄〇愚管記〇後鑑餘錄〇近來風體抄〇室町日記〇園太暦〇和歌所評傳抄〇和歌續後撰〇遠碧軒記〇皇都午睡〇謌女諳言〇大日本史〇野史〇類聚人物考〇扶桑隱逸傳〇先進繡像〇歌道人物誌〇山城名勝志　(齋藤(清))

鈍根草 どんこんさう　能狂言【名稱】板本「狂言記」には、「どどんきう」と讀ませてあるが、江戸初期の古寫本には、既に「どんごん草」とある。

【梗概】鞍馬の多聞天へ參詣した主と冠者は、宿坊へ立ち寄ると、馳走に茗荷の鮨が出る。主はそれは鈍根草といつて食べれば愚になる物だから食べぬと言ひ、冠者に與へる。主は蘘の生えてゐるのを見つけ、あれは利根草だから食はうとて冠者に取らせて食ふ。いよいよ下向することになつて、主は小刀を忘れるが、冠者は密かに拾つて隨ふ。路で主は氣が付いて、是非に取つて來いと命ずる。そこで冠者は仔細らしく利根草と鈍根草の由來を語つて、こなたは利根草を召されたが刀を忘れさせられ、私は鈍根草を食べても物を拾つたと言つて刀を出す。

【解說】和泉流では「眞ノ形」になると一番智になつてゐるが、普通は入門式と言ふのだから、隨分違つた演じ方をするわけである。茗荷を食すると愚になるとの俗說の典據は不明である。「世說故事苑」には、「據を知らず。按ずるに、是生薑のことなるべし」として、「東坡志林」に、「生姜多食損智」との本草の說を擧げた劉貢父の逸話を載せてゐる。　(飯田)

飛だ噂の評 とんだうはさのひやう　滑稽本　一册

【作者】風來山人【成立】安永七年【諸本】風來六々部集(寬政十二年刊、四冊)。風來山人傑作集(帝國文庫)・滑稽文學全集第十二卷所收。

【題材】五代目市川團十郎が、市川八百藏の後家おるやと密通した事件が評判となり、飛だ事〳〵と評判された。この密通事件に關して「八百藏が後家へさんじやうつかまつり」といふ落首のあつたことを、蜀山人が「俗耳鼓吹」に記してゐる。【解說】風來山人のところへ或る人が來て、飛んだ事だ〳〵と言ひながら、團十郎と八百藏の後家との密通事件を話す。山人は團十郎とは誰だと聞く。その人も膽を立てて、團十郎を知らぬといふことがあるかと言ふ。山人は世間の女達は役者贔屓に憂身をやつしてゐる。偶々その後家が名高い役者の後家であつたから評判にもなつてゐるが、世間並の女なら別に評判にもならない筈だ。團十郎とて儒者でもあれば格別、飛んだ噂だと言ふほどのことでもないと語る。對手は益々怒つて無態な理窟だと言ふ。そこで山人は、人間はどうせ完全なものでないから間違ひもあらうが、なすべき事となすべからざる事があるとて、門人の餞別に與へた戒めの書を引き、盗・博奕・密夫はなすべきでない。さうして自分の首の落ちないやうに用心するがよいと語る。噂に對する批評に過ぎないが、矢張り彼の面目の躍如たるものがある。彼の不滿から出た悟りとでもいはうか。　(小池)

とんだ茶釜 とんだちやがま　黑本　二册　十丁　十三圖【作者・畫工】富川房信【名稱】「新版化物」の角書がある。「とんだ茶釜」は「思ひがけない」といふ。當時の流行語によつた外題。後年、「化物とんだ茶釜」と改題再摺。【刊行】寶曆十三年、村田屋板。【題材】「ぶんぶく茶釜」(近藤清春畫作、ゐつゝや刊、赤本)及び「ぶんぶく茶釜」(鱗形屋刊、赤本)に據る。

【梗概】(上卷)昔々、道樂寺の野干和尚は、談義に役者の聲色をまぜ、後家や蓮葉な娘をたらす。和尚は雛の吸物でしたゝか飲んだ歸りに美女に行き會ひ、その家に伴はれる。美女實は狸で、目覺めると美女の家と思つたのは野原である。二匹の狸が逃げ出すのを捕へようとした處、一匹は逃げ遁れて茶釜に化ける。和尚はその茶釜を持つて歸る。饂飩粉に土をまぜて美濃紙にのし、魚の骨を拔く妙藥と言つて賣る。御邸の若殿が鯰汁で咽喉に刺をたてたのを治療して謝禮金を貰ふ。茶の湯の師匠の娘お幸を、深井嘉十郎が見染める。(下卷)和尚は嘉十郎に頼まれて、お幸を嘉十郎の妻にさせようと計畫する。お幸は既に父の門弟龜井大助と深い仲となつてゐる。お幸の手前で嘉十郎に茶をすゝめる席へ、白裝束の大助が出て、お幸を妻に出來なければ切腹すると言ふ。そこでお幸の父は大助にお幸を與へる。失敗した和尚は嘉十郎の機嫌をとるために、野原で拾つた例の釜で茶をたてる。釜が動き出して逃げる。大助・お幸は、結婚して榮える。

【解說】ゐつゝ屋刊・鱗形屋刊の「ぶんぶく茶釜」は、ぶんぶく茶釜の傳說を取扱つた類似の作品である。併し後者は前者を粉本としてゐるが、前者よりは遙かに發達してゐる。但し技巧上に瑕があり、趣向に惱みが見える。「とんだ茶釜」は、これ等の後をうけて從來の型を破り、文福を破戒の僧野干とし、その行動に趣向があり、茶釜の陰翳はうすれ、戀愛關係が有力となり、竹齋物の色彩も加はるなど、赤本の世界を離れてゐる。唄や詞には當世風のところが見える。房信の畫作としては初期の作で、未熟な點が認められる。流行の通言による外題に端をとつたらしく、鳥居清經にも「とんだ茶釜」(村田屋刊、黑本)の作がある。

【備考】「ぶんぶく茶釜」(清春畫作)東山殿のお茶坊主文福は狐を捕へる。料理されるところを狐は逃げたが、追はれて茶釜になる。茶釜を火にかけたので正體を現はして逃げ去る。狸は狐に頼まれ、復讐に文福を化したが捕へられる。　(小池)

鈍通興三兵衞 どんつうかうさんべゑ　「津打治兵衞」を見よ。

どんぶりこ　「楠昔噺」を見よ。

な

内閣文庫 ないかくぶんこ　文庫【解說】現在內閣書記官室の管轄の下に、內閣所藏の圖書を收容してゐる文庫。東京市麴町區丸ノ內大手門內にある。【沿革】明治十七年十一月二十四日、太政官布達第十一號の「太政官に文庫を設け、各官廳の藏書を蒐集の上管理すべし」と云ふ告示に基いて創設された。當時太政官は赤坂離宮にあつたから、その一隅に文庫を設け、文書局記錄課文庫掛に於てその事務を管掌した。同時に宮內省を初めとして各省及び元老院・會計檢查院・修史館等より圖書を引繼ぎ、その册數約四十萬に達したと云ふ。同十八年六月文庫掛は文庫課となり、その年十二月には太政官に代つて內閣が設けられ、記錄局の下に文庫課が置かれることになつた。同二十二年に內櫻田門內に書庫が新築され、藏書の一部をこれに移したが、更に同二十三年三月內務省の所管に係る千代田文庫の引繼ぎを受け、次いで同二十四年三月に至つて太政官文庫並に宮內省より託せられた紅葉山文庫の圖書を擧げて、これに藏むることとなつた。その後紅葉山文庫本は特殊の沿革を有するものであるから、最も貴重なるもの「周易傳義大全」以下二萬九千九百五十六册を宮內省圖書寮へ移すこととなつた。同二十六年內閣所屬職員官制が改定され、記錄局は廢止されて新に記錄課が置かれ、內閣書記官室の所屬となつた。翌二十七年六月には震災のため、內櫻田門內の文庫は可なり被害が甚だしかつたので、一時元の千代田文庫に移すこととなつたが、同四十四年四月に、大手門內に文庫を新築し、同年十一月に、一切の書籍をこゝに搬入した。

【藏書】主なるものは、和書に於ては德川光圀校訂の「古事記」(寫本)三册、慶長寫本の「日本書紀」三十卷十册(元紅葉山文庫藏、德川家康が林道春等に命じて五山の僧侶をして寫さしめたもの)、同じく慶長寫本の「續日本紀」四十卷並に「續日本後紀」二十卷、同じく「文德實錄」十卷、「三代實錄」五十卷、「西宮記」二十卷等で、漢書に於ては、慶長活字版「群書治要」五十卷(內四・十三・二十卷缺)、蘇東坡眞蹟の「石鐘山」一軸、智永の「眞草千字文」、明版「文獻通考」、朝鮮活版「治平要覽」等があり、洋書に於ては佛蘭西の布告類集三十册(一八三三年版)、英國の法令集等である。大正十四年三月末現在によれば圖書册數五十一萬七十九册、一萬一千九百二十二枚、七百三十軸である。

【參考】桔梗門の中から 樋口慶太郎(圖書館雜誌七四・七五)　(植松)

内在批評 ないざいひひやう　文學論【解說】內在批評及び外在批評と云ふのは、大正の末から昭和の初めにかけて、我が批評壇で一時用ひられた言葉である。內在批評と云ふのは、その當時よくこの言葉を使用した片上伸の說によると、「文學個々の作品の形式や技巧や主題の性質やに關する批評」である。言葉を換へて云ふと、文學を文學として批評する批評法と云ふ意味であつたらしい。外在批評と云ふのは、文學を一個の社會的現象として觀察し、社會學的立場から批評すると云ふ批評法であつて、從つてこの立場に立つ實際の具體的批評は、批評者各自の社會學的人生觀の如何に依つて異なるであらう。上記片上伸の如きは、所謂辯證法的唯物觀の社會批評を以て、この外在批評の極致としたやうで、彼は頻りに「內在批評以上のもの」、卽ち外在批評の必要を說いたのである。併しこの提唱は、文學批評に社會的關心を濃厚にしようと云ふ一風潮を現はしたものだと云ふ以外には、少くも內在外在を對立させることは、學理的に的確なものとは思はれない。と云ふのは、文學個々の作品の形式・技巧・主題に關する批評が、文學を社會的現象として觀察するといふことと毫末も矛盾しないばかりでなく、事實に於ては、それと一致することが多いからである。それに、內在批評・外在批評といふ言葉そのものも、この場合妥當ではないし、事實また、この言葉はただ文壇の一時的造語であつて、批評學上の術語ではない。　(本間)

内侍宣 ないしせん　古文書【解說】勾當內侍など、天皇側近の女官が聖旨を奉じて出す文書。大寶令規定の詔勅は比較的重大なる場合のもので、中務省と太政官とを經て施行せられたが、この內侍宣はこれ等の諸官省に交渉なく、日常の小事に用ひられた。桓武天皇の御代から見えてゐる。

　內侍宣、奉　勅、齋焉之觀、員數非多、自今以後、簡擇好者、勘定奏聞、若不改正、執奏之少納言必罪之者、宜承知宣勘之、不可違失。

　延曆九年五月十四日

なほ宣命體で書いた例もある。後世足利時代に至り、女房奉書(別項)がこれに代ることとなつた。　(伊木)

内書 ないしよ　古文書【解說】足利氏以後、將軍或は將軍家の武將が內々の意味を以て遣す文書。軍用・感狀・受領等にも使つたが、多くは年頭・歲暮・節句の祝儀、官職の御禮物等に對する謝禮に用ひた。

　筑後國守護職祝儀、太刀一腰(銀劍)、刀一腰(備前)、弓一張、征矢一腰、腹卷一領(朱札)、馬一疋(鹿毛)、鵝眼、黃金參十兩到來候訖、尤以目出候、太刀一振(宗助)遣之候、猶時光可申候也、

　八月廿六日　(花押)〇足利義晴

　大友修理大夫とのへ

江戸時代の內書には、花押と印章との兩方がある。　(伊木)

内新好 ないしんかう　洒落本・黃表紙作者【通稱】內田屋新太郎、或る時は小林新太郎【別號】內魚堂・魚堂・魚堂主人・魚道・魯堂・新江・白銀臺一丸等。【生歿】未詳【閱歷】元茅場町に住み、帆綱商を營む。一時零落して神田小柳町に住み、幕府御用達小林筑後の養子となり、小林姓を名乘つたが離緣となり、晚年は本所石原に住み、俳諧の宗匠となつた。世話する妻子もなかつたのか、鹿島屋と云ふ商人に引取られ病歿したと云ふ。內新好は通稱を洒落れて內親王に通はせたので、これと白銀臺一丸は狂歌の號である。彼の處女作は、洒落本に於て「一目土堤」(天明八年)、黃表紙で「妹退治」(同八年)である。爾來發表した作品數種あるが多作家ではない。文化三年以後作品がないのは、それ以後病歿したか、本所に隱遁したのであらう。彼の洒落本は滑稽を主としたもので、狂歌師らしいものである。同時に可なり通人らしい肌合が強烈に現はれて居り、それも氣障に感ぜられる位である。併し「一目土堤」は、本所一つ目の岡場所を描いた珍しい題材の書で、同じ題材の「にやんの事だ」(天明元年)と共に珍重すべき書である。

【著作】(洒落本)一目土堤〇中洲之華美(各別

項)。〔滑稽本〕鳴神力(寛政元年)○怪談文草(同十年)。〔黄表紙〕妹退治○名代振袖(寛政三年)○敦調指相撲(同年)○明花春悠化(享和二年)○金降雙歳頁(同年)○鼠婦人(享和三年)(別項)○花紅葉二人鮭鱗(文化二年)○早替卒気之蒙搦(同年)等。　(山崎)

内省的心理學的美學 ないせいてきしんりがくてきびがく 「心理學的美學」を見よ。

内的形象 ないてきけいしやう 藝術論〔英〕Inner Form〔獨〕Innere Gestalt【解説】藝術の客觀的具象形式に對して内面的形式を云ふ(美的形式參照)。ゲーテは、「内面的形式は見ゆる形式を含み、手では把握することが出來ない。唯感ぜられるのみである」と云ふ。この場合は藝術の表現内容の把握の仕方を云つてゐるのであつて、内面的形式とは材料に固有する形式法則を直觀的に感得せしめる感情をいふのである。テオドール・マイヤアは、藝術家は内部から即ち體驗の脈搏からして形成する。而して藝術は有機的統一を獲得することを以てその極致とする。そして藝術家が體驗したところのものに、かくの如き特質的形體化を與へる能力に就いて、内面的形式化の活動を認めてゐる。即ち内面的形式は、作家の個人性を通じて體驗の脈搏に統一を與へ、而も外面的表出の力を藏するものとする。かくて外面的作品は、内面的形式の證左に外ならぬと云ふ。(「創作の心理」を見よ)　(村田)

内的摸倣 ないてきもはう 藝術論〔獨〕Innere Nachahmung【解説】美的受用の心理を規定する概念でグロースの用語である。我々の美的受用に於ては、對象が與へる知覺的形式に順應して内面的追構成が行はれる。即ち身體的な摸作が行はれる。このやうな現實的活動が根柢となり、媒介となつて現實の知覺と主觀感情との融合が可能となるのである。かくて現實的な美的感情は客觀化されるといふ。而して内面的追體驗の過程に關係する身體的活動は、主として運動感覺が擧げられてゐるのであるが(ヴァノン・リー夫人は、身體の均衡・呼吸・血行を擧げてゐる)、かくの如き身體的共鳴が劇觀照の場合などに、俳優の動作表情等に順應して現はれ、美的觀賞を助けることの多いことは事實である。リップスの感情移入説(別項)では、感情の客觀化の過程は全く心理的にのみ解釋され、生理的要素・有機感覺が加はることを全く拒んでゐる。併し形式知覺に伴ふ身體的現象は、一般に美的體驗について認容されることであるから、この點で彼の考は偏狹といふべきである。例へば繪畫の線を觀照する場合などには有機的感覺が關係する。併しグロースの内的摸倣説(別項)にも幾つかの批評が加へられる。主な批評點を擧げれば(一)美的觀照に於て、それがたとひ劇觀照の場合であつても、凡ての人が身振につれて身體的共鳴を感ずるとは限らない。(二)摸倣といふ以上は、身振に對しては身振を以てするといふ意味になるが、正當にその再現が可能であるか否かは疑はしい。(三)また身體的共鳴・追體驗といふことは、藝術的印象の一種の獨創的な再構成であるとも云へる。(四)有機的感覺の快が常に美的快感を構成するとは限らない。(内的摸倣説・感情移入參照)　(村田)

内的摸倣説 ないてきもはうせつ 藝術論〔獨〕Theorie d. Innere Nachahmung【解説】グロースの美學説。内的摸倣は動物生得の本能であるとし、美的受用(鑑賞)の心理を説明する説である。一面リップスの感情移入説に通ずる點があり(實感感情・美的共感參照)、他面藝術活動に於ける創造的想像活動の説明を生理學的に説明してゐる點、及びランゲの所謂感情外現説を美的受用の説明に導き入れた點等に特色がある。(遊戲説・内的摸倣參照)　(村田)

内轉 ないてん 「韻鏡」を見よ。

内包美 ないはうび 藝術論〔獨〕Gehaltsschönheit【解説】美的對象の内包に基く美をいふ。形式美(別項)と對する概念である。即ち一般に美的樣態(別項)の美を指す。例へば崇高美・悲壯美の如きは内包美である。その特殊な用語の點に關しては「美的樣態」のフォルケルトの學説參照。　(村田)

内包美學 ないはうびがく 藝術論〔獨〕Gehalts-Aesthetik【解説】美の成立の根據を美的對象の内包にありとする美學。形式主義的美學の對語。即ち美は實在又は理念が、感官的現象として現はれることによつて成立するので、感官的現象の形式如何によるのではないといふ考へ方。主として、ヘーゲル(Hegel)の美學に由來する多くの形而上學的美學者の考へ方である。　(渡邊)

内面描寫 ないめんびやうしや 文學論【解説】外面描寫(別項)に對する語。個々の人の心理的動きを探つて書くといふ行き方であつて、單に外面に現はれた行爲を描くといふだけで滿足せず、一歩突き込んで、その心理までも説き、人間の行動の深いところに達しようとする描寫法である。日本での内面描寫に優れた最初の作品に、二葉亭四迷の「浮雲」(別項)がある。外國ではゴンチャロフ、ドストエフスキー、トルストイなどがあるが、二葉亭のものにはこれ等外國作家の、殊にゴンチャロフの「オブロモフ」や「通常人の一生」などの影響が見られる。勿論、内面描寫と外面描寫とは、必ず別々に行はれるものではない。全體は外面描寫でありながら、處々に内面描寫を試みてゐる作も少くない。フロオベルの「マダム・ボヴァリイ」やモウパスサンの「女の一生」などはその好例である。又手法は外面描寫に似てゐるが、實は内面描寫になつてゐるといふやうな作品もある。ハウプトマンの「使徒」はその例である。この作品は、一篇が空想・情緒・煩悶と云つたやうな内面の心理を表はさうとしたものであるが、それを飽く迄も普通の平面描寫で解剖的にやつてゐる。心理狀態・氣分・心の微妙な動きなどを描き出すのであるから、その意味では心理描寫ともいふ。だが描寫であるから、飽くまでも心理の説明ではない。心理描寫は外面的な描寫を生けるがまゝに描く如く、内面即ち心理の動きを眼に見得るやうに描き出すものでなければならぬ。其處に作者の技倆が大切になつて來る。最近の英國に於ける新心理學派乃至精神分析學派の作家には、この方面に一新境地を開いた巧みな者がゐる。例へばヴァージニア・ウルーフ、デー・エイチ・ローレンス、ジェームス・ジョイス、レヴェッカ・ウェストの如きがそれである。又現代の日本では、夏目漱石の諸作、殊に「明暗」(別項)、里見弴・志賀直哉の或る作品には、内面描寫の冴えた技倆が窺はれる。　(宮島)

内容美 ないようび 藝術論〔獨〕Inhaltsschönheit【解説】形式美(別項)に對立する概念。美的内容(別項)を心理的に分析すれば、(一)表象内容・知的聯想内容と、(二)感情内容とに分けることが出來る。感情内容のみに美を認めるのは一般の内容美學の傾向であるが、直喩・隱喩による聯想内容は、美意識を豐かにする

といふ點で、一般に表象的内容を美的内容に入れるのが穩當である。なほ題材・材料(素材)そのものは、藝術的形成を受けない限り非美的であり、藝術作品の彼方にあるものであるから、動因として作品の形式を規定する一面の意義はあるが、嚴密な意味で美的内容ではない。同樣に鑑賞の素材的興味も美的享受に役立つのであつて、それ自身は美的享受の本質的内容ではない。　(村田)

直兄 なほえ 歌人【姓】松田氏【號】藤園【生歿】天明三年京都に生れ、嘉永七年(一八五四)二月二十一日歿す。享年七十二。【學統】賀茂季鷹の門下【閲歷】賀茂の縣主である。正四位下伊豫守に叙任せられた。小澤蘆庵などの影響をうけて、「古今集」を作歌のよりどころとし、自然の歌風を喜んだ。歌學書「言葉の直路」(別項)は、文政四年、直兄三十九歳の時に成つたものである。直兄はこの書で、歌の大旨は「古今集」の序文にありとし、序文を總に釋してゐる。この書の特色は、歌が時代によつて變化するといふことは認めるが、つまり、歌が時代と密接な關係を持つてゐるといふことは認めるが、時代と關係がある以上に、土地と關係があると説いてゐるところにある。京都の地に優雅な歌が生れ、奈良の地に素朴な歌の生れたのは當然で、京都に住する自分が、古今調を詠むのは、これも亦當然で、非難すべきことではないといつてゐる。また調を論じては、調は自ら物に備はつたもので、これを約して言へば、語の響である。だから、語をよく響くやうに寫せばよい。調を第一に説いたりするのはどうかと言つて、景樹の歌學を難じてゐる。景樹の門下三宅嘉識は、「言葉の直路辨」を著はして、調は語の響ではなく、眞のひびきであるといつて、直兄の論を駁してゐる。又八田知紀は、直兄の論は餘りありのまゝであるべきことに偏り過ぎて、理想の方面が忘れられてゐるといつて、同じく「直路」を攻撃してゐる。【著書】言葉の直路○藤園雜歌等。　(窪田)

直江版 なほえばん 「刊本」を見よ。

直養 なほかひ 國學者【姓名】高橋氏。後西田氏。通稱庄三郎、字は浩然。【號】蓑舍【生歿】寛政五年に生れ、元治二年(慶應元年)(一八六五)歿す。享年七十三。【閲歷】直養は豐前の人、高橋元義の第四子として生れたが、文化元年出でて西田氏を嗣ぎ、その姓を冒した。西田家は小倉藩に仕へ、二百五十石を食んだ。直養三十六歳にして勘定奉行となり、それより諸役を經て、京都・大阪の留守居となり、つひに用人格に至り、加増して二百八十石を賜はつた。直養は初め漢學を石川彥岳に、和歌を秋山光彪に學び、大阪では篠崎小竹に就いて質疑した。直養は交游極めて廣く、當時の三都知名の士は、大方識つてゐたやうに思はれる。性格洒脱にして事物に拘泥せず、書畫・古器・點茶・音樂・演劇等、その趣味もまた多方面に亙つてゐた。【著作】金石年表一册(天保九年刊)○蓑舍集二册○蓑舍漫筆二十卷(日本隨筆大成所收)○詠歌眼目一册(嘉永七年刊)。その他未刊の稿本も多い。【參考】西田直養略傳 伊東尾四郎(歷史地理一五ノ一・二)　(露)

直毘靈 なほびのみたま 國學書 一卷【著者】本居宣長【名義】「古事記」の禍津日・直毘の二神の成られた所で、宣長は、「此二柱は穢より清にうつる間に成坐る神にして、直毘とは、禍を直したまふ御靈の謂なり」(記傳)と解してゐるが、この義を書名にしたものである。【成立】明和八年【諸本】文政八年版の單行本の外、「古事記傳」の第一卷に收む。【内容】本書は、先づ我が上代には道といふ言擧もなかつたが、惟神の大道が自ら行はれて、天下はよく治まつてゐた。然るに後世外來文化の影響を受けて、人々惡しき思想を抱くやうになつた。されど天照大御神が照臨ましまして、世界無比の神道行はるれば、禍津日神も如何ともすることが出來ず、直日靈によつて國家平安なる所以を説いたのである。【影響】本書出づるや、市川匡麻呂は「末賀能比連」(別項)を著はしてこれを反駁し、宣長は更に「葛花」(別項)を著はしてその説を論駁したが、更にこの論爭に關しては、沼田順義は「級長戸風」(別項)を著はし、會津正志は「讀直毘靈」を出してゐる。なほ宣長の著「玉匣」(別項)は、本書と併せ見るべき「道」に關する考察である。　(西尾)

直幹申文繪詞 なほもとまうしぶみゑことば 繪卷【解説】酒井伯爵藏一卷、詞繪共各四段。文章博士橘直幹は、天曆八年に民部大輔の職が缺けたので、その職を兼任せん事を望んで小野道風淸書の申文を奉つたが、その中に恨みがましい文句を書き過ぎた爲めか、天皇の御氣色惡しく、兼任の御沙汰もなかつた。その後、天德四年内裏燒亡の際、天皇が「直幹の申文は取り出でたりや」と御尋ねあつたので、世の人々有り難きことに語り合つたといふ。この事は、「十訓抄」などにも見える名高い話で、これを繪卷にしたのがこの一卷である。詞は慶運法師、畫者は土佐光顯と傳へられるが確證はない。光顯は南北朝頃の人といふが、畫風から見て製作年代はまづその頃とすべきである。溫雅な描寫でよく整頓してゐるがやゝ生彩に乏しい。　(田中(一))

直幹申文繪詞(酒井忠正伯藏)

直好 なほよし 歌人【姓名】熊谷信貫、後直好。通稱八十八、後助左衛門【生歿】天明二年周防國岩國に生れ、文久二年(一八六二)八月八日歿す。享年八十一【法名】不識庵香一居士【墓所】大阪西念寺【學統】香川景樹門。間島冬道はその門下である。【家系】直好の家は周防岩國藩の世臣で、直好は熊谷家の總本家熊谷清家の弟、熊谷有賀七世の後である。父は右衛門直昌といひ、算術に精しかつた。

15123

【閲歷】直好は若い時から物頭役を奉じ、又兇方を勤めてゐた。罪人を取しらべる際には、口供を書記に筆記させず、口供が終つたあとで自分で記した。要點は一つも洩らさなかつたといふことである。當時「法曹至要抄」を熟讀し、註解・頭書を作つてゐる。文政五年、師景樹の使者が岩國に來て、景樹と景綱との間の紛議を訴訟した。景綱とは景樹が別れて出たあとの香川家へ、景樹の代りに養子として入つた人である。岩國は香川家の宗家の在る地であつた。直好はこの爭ひの裁きに與つたが、ことは景樹の不利に終り、以後直好の身は、藩と師家との間にあつて、苦しい立場におかるゝに至つた。文政八年(四十四歲)、つひに意を決し、「世の中を思ひ定めし朝より雲と水とにゆく心かな」の一首を殘し、妻子を携へて藩を脫走してしまつた。藩主吉川經幹は、直好を師としてゐたが、これを聞いて、「直好は鯉魚の如し、ちさき池にては養ひ難し」と嘆いたといふ。直好に敎へを受けた熊谷直補は、この出來事を悲しんで歌數首を作つてゐる。かくて直好は京都に住まうとしたが、のち難波に下り、歌の師匠をして、そこで生涯を送つた。管絃の道にも精しく、花園三位から大曲を許されるまでになつた。「梁塵後抄」を著はしたのもこの點から首肯される。又茶道をも樂しんだ。直好は身長が甚だ高く、髷を大きく結んでゐたといふことである。【著書】法曹至要抄註解○古今集正義序註追考○古今集正義總論補註○古今集正義總論註論辨○梁塵後抄(別項)○船路日記○船路のゆきき○嚴島日記○浦の汐貝(別項)○浦の汐貝拾遺。

【人物・業績】幼時から文才があり、學を好んだ。初め鄕人吉田嘉太郎といふ人について歌を學び、雪の題で、「夜なれど土の白きはしら雪のほどろほどろに降ればなりけり」と詠み、嘉太郎をして舌を卷かせたといふ。十六歲で景樹の門に入り、周防から歌を送つた。景樹は添削のあとへ、「實にならむ秋を思へば小山田のいね驚きまで嬉しかりけり」と記して送り返したといふ。十九歲の時京都に上り、景樹のもとに一年ばかり留まつて學んだ。その折、かたはら相國寺の誠拙和尙に參じて禪を修業し、悟入して香一居士の號を授けられた。景樹に親しく接してからは、直好は幾度も鄕里と京都との間を往復してゐる。その行路を寫した、瀨戶內海を渡航した折の文が殘つてゐる。それは二十六歲の時に書いたもので、その歌に見る如く、淡々として水のやうな名文である。この年直好は、外に阿元と嵐山に花見を共にした文、景樹に從つて涅槃詣をした文の二つを殘してゐる。景樹の「新學異見」(別項)は、文化八年直好三十歲の時に成つた。この書の稿は、ひとり直好のために講じつつ成つたものだと言はれてゐる。天保十三年(六十一歲)から僅かの間に、「古今集正義序註追考」以下、三つの歌學書を著はしてゐる。景樹の論に註をほどこしたもの及びそれに類したもので、いづれにも直好の澄んだつつましい心境が覗はれる。歌集は死後門人等の集めたものである。直好は、歌はしらべあげた時は用を足してしまつたものだといつて、書きとめなどしておかなかつたといひ、生前歌を纒めなかつたのもさうした氣持からであつたらう。直好の歌は、「歌は誠實の自然の現れた調である」といふ、景樹の歌論の一點を强調し、それを實行に移したもので、直好にそれが出來たのは、一つには直好の人柄によるのである。直好は俊才木下幸文(別項)と共に、桂園門下十哲の中での雙璧とされ、景樹に師事すること實に四十年にわたつた。(鹽田)

永井荷風 ながゐかふう 小說家

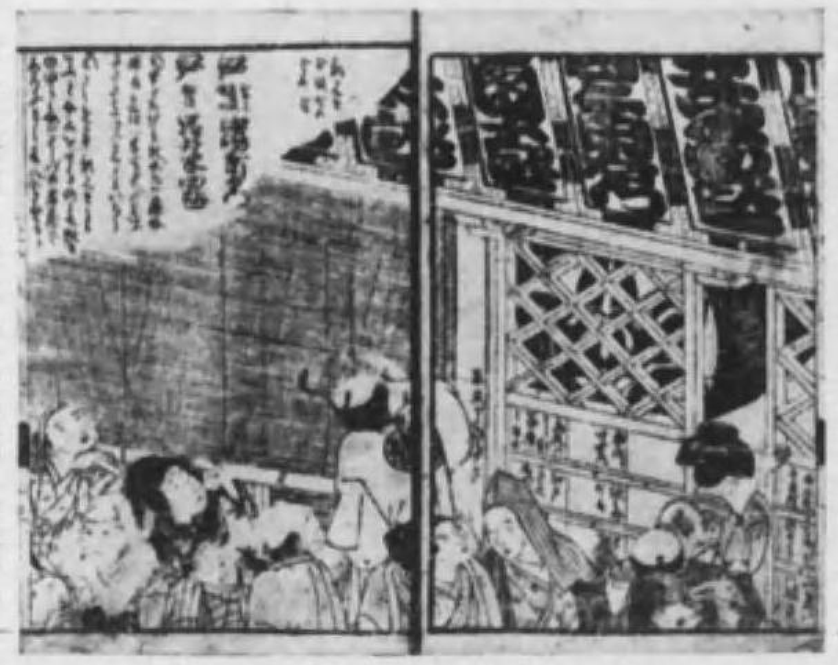
永井荷風

【本名】壯吉 【別號】金阜、また石南 【閲歷】明治十二年十二月三日、父久一郎の長男として東京市小石川區金富町四十五番地に生れた。父は當時帝國大學書記官の職にあり、後文部大臣秘書官・文部省會計局長に歷任したが、諱は匡溫、字を耐甫・禾原と號して詩を善くし、漢・洋の學に通じた人だつた。荷風は明治十六年お茶の水東京高等師範學校附屬幼稚園に通つてから小石川黑田小學校・尋常師範學校附屬小學校を經て、高等師範學校附屬中學校に入學、十九歲にして卒業。この間書を岡三橋に、畫を岡不倒に、又漢詩を岩溪裳川に就いて學ぶと共に、神田錦町の東京英語學校に通つて志賀翁川等の敎へを受け、更に荒木竹翁・福城可童等に尺八の指南を乞うた。明治三十年中學卒業、たまたま父が官を辭して日本郵船會社の社員となり、上海支店長として赴任するに隨つて南支に遊び、三ケ月餘にして歸朝した。直ちに東京高師附屬外國語學校に入り、支那語を修めること三年に及んだが、遂に業を終へずして廢學した。それは文藝の道に志した爲めで、二十歲の時、短篇小說「簾の月」の未定稿を携へて、當時最も崇拜してゐた廣津柳浪を訪ひ、請うて門生たることを許された。翌三十二年一月に處女作「おぼろ夜」が雜誌「よしあし草」に載つたのを初めとして、漸くその作品が世に出始めた。而もこの頃は一面、清元・踊・尺八等遊藝の稽古場通ひに忙しく、且つ落語家朝寢坊むらくの弟子となつて寄席の高座へも出る始末であつた。更に翌年六月には狂言作者榎本破笠の請人で、福地櫻痴の門下生として歌舞伎座の作者部屋に入り、殆ど一ケ年を過して後、櫻痴が日出國新聞の主筆となれるに從つて同社に入つた。約一年にして解雇される迄の間に、長篇小說「野心」及び「地獄の花」(別項)を出した。後、曉星學校の夜學に通つて、專心佛蘭西語の學修に努めた。三十六年二十五歲の秋、米國に渡航、初めタコマにある事一年、後古屋商會の一員となつて萬國博覽會開催中のセントルイスに轉じ、ミシガン州カラマヅの大學に入學して、哲學及び佛蘭西語を專攻した。半年にして日本公使館の下級官吏となつて華盛頓に赴き、更に橫濱正金銀行の支店員となつて紐育に止まつた。一年半後、四十年に正金銀行リヨン出張所詰を命ぜられ、宿望を達して憧憬の地佛蘭西に入ることを得た。半歲後、銀行を辭して巴里に遊び、翌四十一年夏歸朝、大久保余丁町の邸に入る。時に年三十歲。六年に亙る外遊中の業績たり記念たるものに、「あめりか物語」「ふらんす物語」(各別項)がある。歸朝後は專念創作の筆を執つたので、作品漸く多きを加へ、「歡樂」「すみだ川」「冷笑」(各別項)等の名作が相次いで生れた。四十三年慶應義塾大學文學科の刷新に際し、聘されてその敎授となり、機關雜誌「三田文學」を主宰することになつたが、所謂三田派(別項)の文學はこれに據つて興り、當時自然主義文學全盛の時代にあつて、淸新にして異色ある一文藝陣を

布いたのである。彼は小說の創作以外に、隨筆又は江戶藝術の硏究にも筆を染めた。隨筆「紅茶の後」「大窪多與里」、東京散策記「日和下駄」、浮世繪その他を論じた「江戶藝術論」等の所產がある。大正二年、父を失ひ、五年に至り健康勝れざるの故を以て敎職を退き、同時に「三田文學」の主幹をも辭して、個人雜誌とも云ふべき「文明」「花月」を二年に亙つて次ぎ次ぎに出した。大正七年末、「斷腸亭」たり「十里香館」たる大久保の家を去り、一時假寓の後、大正九年、麻布市兵衞町に洋館を新築して「偏奇館」と名づけ、爾來こゝに居住して興來れば筆を執る自適の生活を送つてゐる。初め某氏の女を娶つたが和せずして去り、嗣いで新橋の妓を納れたが、これもまた去つて、今知命を超えて獨棲をつづけてゐる。著作としては前記の外、約十篇の戲曲の創作があり、「平維盛」「秋の別れ」「夜網誰白魚」等を左團次が上演し、また「柏屋」(原題「夢介」)「三柏葉樹頭夜嵐」「紫草思掛稻」等が帝國劇場で上場された。「三田文學」を主宰した當時、小山內薰等と謀つて「古劇研究會」を興し、誌上に劇道の研究を發表した。大正十年松竹合名社が女優の養成を企つるや、その講師の任に當つた。なほ市川左團次と相好く、七草會の一員としてその有力な助言者となつてゐる。【著作】荷風全集六卷(春陽堂)があり、その他明治大正文學全集(第三十一卷)・現代日本文學全集(第二十二卷)・日本戲曲全集(第四十卷)等に作品が收められてゐる。【作風】初めゾラの寫實主義を奉じて「地獄の花」等を以て文壇に見えたが、外遊中の「あめりか物語」「ふらんす物語」以來、その作品に著しく抒情味を加へ、歸朝後は自然主義の流行盛んなる中にあつて、主觀的享樂主義的の優れた作品を投じ、無味單調に墮したわが文壇に淸新雅醇な異色ある詩境を拓いた。彼の洗練された官能と享樂的本能は、雅致皮相な現代の生活を呪うて、これと當面して痛烈な批評となり、目を轉じては江戶文化の憧憬となつた。小說「冷笑」や「偏奇館漫錄」等は、その前者の代表であり、「江戶藝術論」や「散柳窓夕榮」等は、後者の所產である。而して僅に江戶の名殘を留める世界を狹斜の巷に見出しては「新橋夜話」以下の花柳小說を成し、これを風土に求めて「日和下駄」の散策記を著はした。その性向から現代と軌を一にして進むを屑しとせざる彼は、必然的に文壇一般の風潮を超越して、常にひとりの道を步み續けて獨自の藝術を大成させて來た。なほその文章は、正に當代の逸品として讃嘆に値する。日本語の情味と漢文の典麗とラテンの明朗とを兼ね具へ、而も雅俗・硬軟・新古の語彙を自由に驅使して些の苦澁を見せない。更に微妙な音律的な調子と、新鮮な感覺的分子に富んでゐて、快き感銘が人を醉はしめずには措かない。小說以外に「紅茶の後」等の小品隨筆の類が珍重せらるゝ所以は、この文章のすぐれた魅力に由ると云はなければならない。歸朝當時の文章は、やゝ調子づいた聲高い多彩的なものだつたが、漸次蕭然たる趣を呈し來つて、今は淡々たる筆致の裡に無限の情趣を湛はしてゐる。なほ譯詩を集めた「珊瑚集」(別項)がある。その文字の柔細と淸婉と、また他に求むべからざるものであつて、詩壇に小說家として彼ほど大きな影響を與へた者はない。(水木)

長生見度記 ながいきみたいき 黃表紙 三冊 十五丁十七圖

【作者】朋誠堂喜三二 【畫工】戀川春町 【名稱】長生をしてかゝる世相を見度いとの意であるが、また先蹤の書、「無益委記」(別項)を響かせてゐる。「見度記」「無益委記」は、ともに「未來記」のもぢりである。【刊行】天明三年、蔦屋板。【諸本】黃表紙百種(續帝國文庫)・黃表紙名作集・赤本黑本靑本(名著文庫)・黃表紙二十五種(日本名著全集)所收。【梗概】(上冊)(1)自序。(2)三度目御禮帳と書いた錦帳を下げてゐる家、正月の三つある年、母親に子供たちがいろいろのねだりを言ふ。母親正月の五つある年まで待てとたしなめてゐる。(3)彼岸の物貰ひ雨に濡れてゐる。彼岸は天氣惡しく、中日は大に荒れることになつてゐる。(4)女奉公人の目見え、その頃は女奉公人の給金が男より高くなつてゐる。(5)時鳥の會に大勢集まつてゐる。昔は



長生見度記(加賀豐三郎氏藏)

時鳥は山にばかり居たさうななどと語つてゐる。(6)雨の中の角力の觸太鼓、雨天三十日興行といふのが定めである。(中冊)(7)座敷幟を飾る。(8)大川の涼み、見番舟といふ大屋形舟を繫いでおいて、舟から舟へ藝者を出してやる。(9)高輪の茶屋、兩側となつて向ふが聞へて、客ども騷がつてゐる。(10)女の石尊參り男より多くなり、大木太刀を擔いでゆく。(11)七夕の短册を書いて賣る。また短册をつけた七夕竹を賣り步く。(12)八月の月見、吉原は見世を引いて休んでゐる。(下冊)(13)深川の萩寺、客人萩の上風を聞いて樂しんでゐる。(14)江戶芭蕉翁塚三十三所廻りの流行、俳人達御發句といふものに節づけして唱へながら步く。(15)顏見世前敎看板を揭げる。(16)春興入大小、名鬮の刷物などを賣つてゐる。(17)顏見世切落しで陳皮を賣ひあるく。(18)師走鏡餅飾り物類を賣つてゐる。二十一日頃から年忘れの女郞買に出かける。【解說】當時の社會の情景を材料として、その傾向を誇張し、或はその裏面を穿つことによつて、滑稽を恣にすると共に、多少の諷刺を試みたのである。たとへば、時鳥の會、深川の萩寺の如きは、當時の飼鳥の流行、また萩寺の萩見物の流行によつて、その滑稽を解すべく、江戶芭蕉翁塚三十三所廻りの如きは、江戶に於ける芭蕉翁塚建立の流行と、八十八所廻りの類の流行を共礎とした滑稽に合はせて、當時の俳人の態度を揶揄したものとして見るべきであらう。作者は縱橫の空想を以て未來の世相の豫想をなし、得意がつたのであるが、今日から見

れば、何の諧謔も見出されないものが多い。世相の變遷と照し合はせると、また別意の興味を將來する作である。安永八年の戀川春町作の「無益委記」の意匠を踏襲したものであるが、五年も後出の書であるだけに、風俗人情の觀察、また諷刺に於ても精細を加へられたことが注意される。前作と共に大に歡迎せられ、更にその翌年の天明四年には、竹杖爲軽の「夫從以來記」(別項)を上梓させるに至つた。この三者を世に黄表紙の「三未來記」と稱してゐる。共に三馬の所謂名作二十三部の中に數へられてゐる。〔山口〕

永井堂龜友 ながゐだうきいう　浮世草子作者【本名】不詳【別號】兵作堂・其邑【閲歴】京都の人。南嶺の後をうけた八文字屋本の作者で、その傳は詳かでない。【著書】風流鼻合戰(寶暦十二年)○大和言葉風俗詩人氣質(同十三年)(別項)○當世銀持氣質(明和七年)(別項)○風流茶人氣質(同上)(別項)○風流酒吸石龜(同八年)○風流孝行娘袖日記(同上)○赤烏帽子都氣質(同九年)(別項)○世間姑氣質(安永二年)(別項)○小兒養育氣質(同上)(別項)○風流行脚噺(同上)○町家繁昌世間旦那氣質(同三年)(別項)○笑談醫者氣質(同上)(別項)○世間仲人氣質(同五年)○立身銀野甚(同六年)。
【作風】其磧以來、平凡に墮した氣質物の後を忠實に傳承した作家で、何等の清新味なく獨創を缺き、ただ先人を模倣して平板に流れてゐる。一體に筋立に誇張のあとが少く、氣質物の要素たる教訓的賞辭の強調せられてゐないところをとる。中で「世間姑氣質」(別項)を佳とすべきか。明和安永の頃は文學の中心が諸般の文化と共に、上方より江戸に東遷しつつあつた過渡時代で、八文字屋としては實暦四年に其笑・瑞笑合作の「世間長者氣質」(別項)が出たが、同年江戸では、升旗の「世間御旗本氣質」(別項)が出てゐる。そこに文藝東遷の徴運がうかがはれる。この實暦から明和安永にかけて八文字屋系の氣質物は次々と刊行せられ、量に於ては最盛時をなしてゐる。龜友は多作といふ點から見ても、この頃の代表作家である。〔吉田〕

長歌 ながうた　歌謠【名稱】雜藝(別項)の一種であるが、平安時代の末に、「古今集」の長歌を短歌と書き誤つた本があつて、長歌の事を短歌と云ひ、短歌形式の歌を長歌と云つて、歌學者の間にやかましい論があつた。それで、こゝに長歌と云ふのも、その説によつたもので、普通の短歌の事に過ぎない。或は神歌や今樣(各別項)が何れも息を短くつづめて歌つたに對し、この歌の歌ひ振が長く聲を引いた爲めに生じた名で、和歌の方で短歌を長歌と云ふのは、この雜藝の名によつて誤られたものかも知れぬ。古代の大歌に、長埴安扶理・短埴安扶理と云ふ名があるが、この長短の相違は、長歌の名稱と同意かと思はれる(埴安扶理參照)。【出典】「梁塵祕抄」(別項)卷一に出づ。【解説】大概勅撰集に出た和歌を取つたものである。その歌ひ出しに「そよ」と云ふ囃子詞を入れてゐるのが特徴である。

そよ大原や朧の淸水世にすまば又も逢ひ見ん面變りすな

これは「袖中抄」に引用した古歌である。二句神歌と形は同じであるが、内容曲節は甚だ異なつてゐる。寧ろ朗詠の和歌に近いもので、或は漢詩交の朗詠に對して、和歌の朗詠とはこの類のものであつたかも知れず、又古代の和歌披講風の曲節であつたかも知れない。兎に角、他の雜藝が多く民衆的氣分の多分にあるに拘らず、この歌のみは最も貴族的な歌謠であつたと思はれる。〔藤田〕

長歌 ながうた　「上方歌」を見よ。

長唄 ながうた　「江戸長唄」を見よ。

長哥古今集 ながうたこきんしふ　歌謠書　一冊【刊行】天和二年正月、わしや板。【諸本】稀書複製會複製本がある。日本歌謠集成卷六所收【解説】江戸吉原に行はれた流行長歌二十二篇(その中に端歌が一篇ある)を集めたもので、目錄は次の如くである。

長哥古今集

西國道行・美人揃長歌・身のうきわざ道行・はうた長歌次左衞門・淸成寺道行・金澤八景・吉原名寄・貸船・うらみ長歌河内通ひ・邪身の歸・命の爭ひ・はやり長歌・たゞのり・歸道行・木曾船道行・白拍子善光寺詣・四國落・吉原はやり道行・うた道行・吉原美人揃・今川智略道行・大磯の八郎ためなね・羅生山谷入・清玄七年の亡魂・今川花見車。

多くは歌舞伎歌で、また淨瑠璃物もあり、道行・景事・揃の類の歌が大部分である。その歌は「古今役者物語」等の書に見えるものと同一の歌が多く、彼此比較するに都合がよい。全十四丁。序と跋とを除いて、歌詞には挿丁表裏に遊女の姿繪が描かれ、舞踊その他の風俗の參考となる。即ちこれは歌舞伎歌より出で、吉原などで流行した歌であつて、それには踊の作つたものもあつたのであらう。その繪は菱川師宣の筆かと云はれる。著者は不明であるが、序文によつて見るに、鏡が池の近くに住んだ人であらうと云ふ。【價値】この本は甚だ稀覯書に屬し、師宣の筆とすれば、繪畫の方でも浮世繪史の上に甚だ價値を持つてゐるが、歌謠書としても、長歌本の最も古きものとして、また當時の吉原の流行歌を知り、歌舞伎歌との交渉を考へ、或は歌舞伎・淨瑠璃そのものを考察する上にも、逸すべからざる貴重な資料である。中に端歌次左衞門の歌つた端歌の一首が出てゐるのも珍重するに足る。この人は、同じ頃の天下一播磨芝居の看板に、「上がたふし　次左衞門」とあるのと同じ人であらうか(舞曲扇林・京都古習志)。【備考】跋文によると、同じ著者が、別に端歌を集めて「小歌萬葉集」と云ふ書を撰んでゐるやうであるが、その書の存在は、未だ明かでない。〔藤田〕

仲枝 なかえ　漢學者・國學者【姓名】宮地氏。通稱卯藏【號】水渓【生歿】明和五年に生れ、天保十二年(二五〇三)歿す。享年七十四。【閲歴】仲枝は宮地春樹(別項)の長子、幼より谷眞潮に學び、少壯更に江戸に出でて諸家に出入し、又塙保己一に從つてその群書類從編纂を輔けた。文政中、事に坐して祿を奪はれ、城北久萬村に屏居したが、後また赦されて高知に還つた。仲枝は博聞を以て聞えたが、なほ武技を嗜み、詩歌に巧みだつたといふ。その門からは鹿持雅澄(別項)が出てゐる。【著作】山内家年代略記(寫本)○秦寶公諸事(寫本)等。〔森〕

中江兆民 なかえてうみん　思想家・評論家【本名】篤介。幼名竹馬【別號】青陵・秋水・南海仙漁・木強生【生歿】弘化四年、高知城下新町に生れ、明治三十四年十二月十五日、東京小石川武島町の自宅に歿す。享年五十五。【閲歴】舊土佐藩士。慶應元年、十九歳で同藩留學生として長崎に赴き、平井義十郎に就いて佛語を學んだ。同三年、外國船に搭じて江戸に出で、村上英俊の塾に入つて佛蘭西學を學んだが、後破門された。明治元年、箕作麟祥の門に入つた。又一時大學南校の助教となつた。翌二年福地源一郎の日新社の塾頭となる。同四年司法省に出仕、佛蘭西留學を命ぜられ、岩倉大使に隨行して渡歐した。巴里に於ては西園寺公望・光妙寺三郎等と交遊した。當時ナポレオン三世の帝政瓦解の後で、巴里コンミユンの動亂にも際會し、民主主義的自由主義思想の深い感化を受けた。佛蘭西留學中は實證論哲學及び史學・文學を學び、また「日本外史」「十八史略」「孟子」等の佛譯を出した。明治七年歸朝、元老院書記官に補せられ、次いで外國語學校長に任ぜられたが、幾くもなく辭して麴町番町に佛學塾を開いた。當時の塾生に小島龍太郎・酒井雄三郎・小山久之助等があつた。時恰も自由民權熱の勃興期に當り、西園寺公望・松田正久等と結んで東洋自由新聞を創立し(明治十四年三・四月)、また雜誌「政理叢談」(同十五年二月、佛學塾)を創刊、ルーソーの民約論を譯載し、盛んに佛蘭西流の自由平等の政治論を主張して政府を攻撃した。また十四年、自由黨組織の際にはその創立に參畫した。同二十年、保安條例が發布されて、東京を追放され、十二月大阪に移つた。翌二十一年、同志と共に東雲新聞を創刊、主宰した。又壯士芝居を創案して、その顧問となつた。

中江兆民

二十二年、憲法發布と共に保安條例が解かれ、再び東京に移り、後藤象二郎の「政論」の主筆となつたが、後藤の入閣により解體し、同志と共に自由黨を再興し、自由新聞・立憲自由新聞・民權新聞等を主宰して專ら民黨の糾合に努めた。二十三年、國會開設に際し、大阪水平社に擁せられて代議士に當選したが、間もなく辭職した。同二十六年頃より實業界に入り、諸種の會社に關係したが何れも失敗した。三十一年、伊藤内閣の自由黨と提携するに及び、國民黨を組織し、雜誌「百零一」を發行して在野黨聯合、藩閥討滅を主唱したが、資金に乏しく間もなく潰散した。三十三年秋、毎夕新聞の主筆となり、次いで國民同盟會成るや、自ら投じて大に奔走したが、紀州遊説中、喉頭癌にかゝり、翌年泉州堺に寓居して病を養ふ。醫より餘命一年半と宣告され、生前の遺稿として「一年有半」の稿を執る。九月歸京、小石川の自邸に入り、「續一年有半」を執筆、十月刊行。十一月病いよ〳〵篤く、翌月長逝した。【著作】ショーペンホウエル道德大原論○維氏美學(別項)○民約譯解(別項)○理學沿革史(フイエー原著)○理學鉤玄(明治十九年)○革命前佛蘭西二世紀事○三醉人經綸問答○平民の目ざまし(別項)○憂世慨言○選擧人の目ざまし○四民の目ざまし○一年有半(別項)○續一年有半(同上參照)。
【批評】佛蘭西に學んだところは、ルーソーの民主主義的自由主義の政治思想並にオーギュスト・コント派の實證論哲學の感化影響に育つたが、後年に及んでは獨自の唯物論の哲學體系を建てるに努め、自らナカエニズムと名づけた。兆民の自由民權論の指導理論を見るには「平民の目ざまし」と「三醉人經綸問答」を讀まねばならぬ。この唯物論の思想は哲學といふよりも一種獨特の科學的唯物論と云はるべきである。自然科學と社會科學の全體系を總括して、獨特の科學的唯物論の立場から組織しようと努めたらしいが、方法論的にも不十分な點が多く、反對の立場からの異論をも挿む餘地が少くないが、その方法の根本態度に於ては、十分の卓見を含んでゐる。而も唯心論の宗教思想やカント派の批判哲學は勿論、在來一切の觀念論的及び實證論的の哲學思想をすべて否定して、純粹の科學的唯物論を建てようとした意圖は、注目すべきである。「續一年有半」は彼の思想の歸結を語つてゐるが、秋水の「基督抹殺論」には、その思想の傳統が認められる。(平民の目ざまし參照)〔武藤〕
【參考】兆民先生　幸徳秋水

仲雄王 なかをわう　漢學者【閲歴】未詳。ただ「文華秀麗集」の序によつて、弘仁中、大舍人頭兼信濃守となり、又從五位下行内膳正となつた事が知られる。恐らく弘仁七年より九年迄の間である事が、「文華秀麗集」撰者たる仲雄王以外の人々の官位によつて推察せられる。その他弘仁十三年十月八日、山崎なる河陽館への行幸に從ひ、嵯峨帝の河陽十詠に和した詩や、讃を傚つて外にゐて述懷した詩などもある。それ等に據つて閲歴の一斑を僅に想像し得るのみである。或は弘仁十三四年頃歿したのかも知れない。漢學者であり詩人であつて、「文華秀麗集」の序を書いてゐるが、その外には「賦得擧高祖」や「彘肩辭」等がある。彘肩は豚の肩の肉で樊噲の故事、擧高祖の鴻門の會の事であるが、漢書によつて作つたものである。藴蓄あり銳敏な碩學であつたと思はれる。〔山岸〕
【參考】凌雲集○文華秀麗集○經國集(卷十四)

中書 なかがき　連歌【解説】中古に於て私の連歌會では、發句以下附句全部を書き取らずに、各自前句に附けた自分の句ばかりを書き取つて持ち歸る習はしで、この各自の懷書を中書と稱した。晴の會ではかゝる事はしなかつたと「連歌辨義」に見えてゐる。〔福井〕

長崎派 ながさきは　繪畫【名稱】江戸時代に於ける日本畫の一派。九州長崎の地を中心として榮えたるを以て、この稱呼を生じた。【解説】長崎は當代の外國文化藝術流入の門戸であつて、こゝを中心に外國藝術の感化多き畫人が輩出したが、普通長崎派と呼ばるゝ中に

は、前後の二時期を劃し得る。〔前期長崎派〕明末の亂を避けて來舶した支那の黄檗僧等の一團を先驅として榮えるに至つたもので、就中、正保年間この地に來つた黄檗僧逸然は、實にこの派の祖と言はれる。逸然の門人には當時長崎の唐繪目利の役を勤めた渡邊秀石及び鑄金術で一家を成した河村若芝の二人があり、渡邊秀石門には、上杉桂翁・廣渡一湖等の外、弟に秀岳、子に秀朴があり、その後元周・秀溪・秀彩等、一家相次いで秀石の畫系を繼承した。河村若芝(號蘭溪道光)の流は、釋一山・河村若元・山本若麟・濱田若鳳等相繼いでこれを傳へた。又秀石門下には小原慶山があり、一格を成してその子克紹(號巴山)以下相傳へ、慶山の弟子石崎元德(號晶山)、又その弟子森島元琪・安田元系もそれ〲この地に畫名を馳せた。これ等の前期長崎派は要するに明朝北畫の一樣式を傳へたもので、長崎の地には、以後江戸時代を通じて長く繼承されてゐたが、日本畫壇にとつては、既に足利以來圓熟し來つた漢畫が榮えてゐた當時であつて、別に大局にはさしたる感化を及ぼさなかつた。ただ長崎には和蘭等から移入された西洋寫生畫の感化が一般に行き亙つてゐたので、この傾向を肖像畫等に發揮した畫人としては、喜多元規が最も著聞してゐるが、かゝる西洋寫生畫の一派は南蠻風俗畫にも興味深き發展を見、所謂長崎繪の流行ともなつたが、これは又やがて亞歐堂田善や司馬江漢の洋風畫とも聯關するものである。〔後期長崎派〕享保十六年十二月より同十八年九月まで、この地に滯在した清朝の畫家沈南蘋の畫風を祖述するものである。南蘋は宋代以後榮えた院體花鳥畫の流に棹さす所謂鉤花點葉體の華麗な寫生畫を得意とした人である。南蘋門人としては長崎の人熊代繡江(熊斐と稱す)あり、その子繡山・繡滸及びその門人江越繡浦・眞村蘆江・立場佩川等長崎の地に在つてこの一派を繼いだ。更に南蘋の流を江戸に傳へた畫人としては黑川龜玉を嚆矢とし、これに次いでは熊斐の門人宋紫石が著名である。その子に紫山、その孫に紫岡、その門人に董九如・森蘭齋等があり、宋紫石の流を承け繼いだが、又江戸の地には熊斐門の建部凌岱・林松林、南蘋に私淑せる鏑木梅溪、その子雲潭等あり、これ等の畫人中には長崎人もあるが、皆江戸で畫名を馳せた人々である。近畿の地に於ける南蘋派としては長崎人の黄檗僧鶴亭を以て初めとするが、これに相次いで三熊花顚・勝野范古等あり、并花鳥寫生畫に於て著名である。如上の長崎・江戸・京都以外にも、この系統に屬する畫人が各地に散在してこの派を弘めたが、その中では因幡の土方稻嶺(宋紫石門)、松前の大原吞響(南蘋に私淑)、肥前鹿島の天龍道人(熊斐門)、羽後横手の佐々木草因(松林門)等が著しい。素よりこれ等の諸作家は、南蘋派として描寫樣式上共通する點多く、又前期長崎派とも氣脈を通じてゐるが、その間自ら夫々の特色を異にする點も尠くない。殊に當代南宗文人畫隆盛の機運に伴うて、その同じく支那新來の清新味多きに併せて、又同じく長崎を誕生地としてゐる關係もあり、旁々北畫系統とも見るべき南蘋の寫生畫は、我が國に於ては却つて南宗文人畫の中に攝取せられ、漸次この派の一要素となり行く傾向が顯著であつた。　（田中（一））

仲實 なかざね　歌人【姓】藤原【生歿】生年未詳。元永元年(一一一八)歿す。享年六十三(日本歌學史)。【閲歷】承曆二年の頃、丹後守(內裏歌合)、康和二年の頃、備中守(仲實朝臣女子根合歌)、康和年中越前守兼中宮權大進に任じ、正四位下に敍した(堀河院太郎百首)。長治三年藏人頭から參議に陞つた重長が未だ頭であつた頃、殿上の人々をあまた具して大井川に逍遙した時、彼も俊賴・隆源・敦隆等と共に隨行したが(散木弃歌集)、官は中宮亮とある。その後天仁三年の頃も中宮亮であつた(山家五番歌合)。

藤原宇合…………諸成―仲實―邦忠
　　　　　　　　　　　　　―國能
　　　　　　　　　　　　　―實資
　　　　　　　　　―公義(大治二年卒)

永久四年の頃は無官にて前越前守と稱した(六條宰相家歌合)。「散木弃歌集」の外、「基俊集」「國基集」にもその名が見え、俊賴を初め基俊・國基・隆源等と同輩としての交りのあつた事がわかる。そして俊賴と特に親しかつたもののやうに思はれる。【著作】綺語抄三卷(別項)〇類聚抄五十卷(散佚)〇古今和歌集目錄二卷(別項)〇歌は金葉集以下勅撰集に入るもの凡そ二十二首、堀河院御時百首、永久四年百首、前記の歌合歌集等に見えるもの等がある。
【附記】「勅撰作者部類」に、歿年を天仁元年とあるのは、「尊卑分脈」(卷三(四十三頁))に眞興流永業の子に仲實があつて、嘉承三年(天仁元年)歿とあるのと一致するが別人であらう。また「日本文學者年表」に、保安二年薨、正二位權大納言とあるのは公季流實季の子にて、地位身分が甚だしく相違する。「綺語抄」の著者は俊賴等と同輩にて、備中守・中宮亮・越前守等に任じた人で、「尊卑分脈」に歌人とある仲實を指すのであらう。
【參考】日本歌學史佐佐木信綱〇國文學研究史野村八良　（西下）

仲實綺語抄 なかざねきごしよう　「綺語抄」を見よ。

中澤臨川 なかざはりんせん　評論家【本名】重雄【生歿】明治十一年十月、信州上伊那郡南向村に生れ、大正九年八月十日歿。享年四十三。【閲歷】生家は有名な「養命酒」の醸造本家鹽澤家である。明治二十五年、松本中學校に入學、文藝愛好の念は當時から非常に深く、吉江喬松等と交つた。又數學が得意で夙に電氣科學が志望であつた。同三十年松本中學卒業、第二高等學校に入學。この頃、長

中澤臨川

野縣南安曇郡梓村の中澤家の養子となつた。同三十四年東京帝大工科大學に入學、電氣學を專攻。在學中、窪田空穗・小山內薰等と雜誌「山比古」を發行、又島崎藤村・國木田獨步・田山花袋・柳田國男・蒲原有明等と交遊した。同三十七年大學卒業、東京電氣鐵道會社技師となり、後、京濱電車技師長となつた。晩年、松本市外に工場を建設し、中澤電氣株式會社を經營した。又一時雜誌「文藝復興」を出したこともある。【著作】嵐前集(感想・文藝美術の評論)〇舊き文明より新しき文明へ〇破壞と建設(以上論文集)〇トルストイ〇ベルグソン(以上評傳)〇露西亞印象記(ブランデス原著)〇近代思想十六講(生田長江共著)〇新社會の基礎〇嵐の前(以上評論集)〇臨川全集(大正十二年春陽堂、第二卷まで以下未完)。外にロシヤ文學に關する研究評論、又ニイチェ、ロマン・ロオラン、ベルグソン、タゴール、ダ・ギンチ等に關する研究紹介がある。
【批評】自然科學殊に理論物理學に造詣が深かつた彼は、その認識と世界觀に立脚した純粹の科學的態度をもつて、文藝の批評・研究等にも臨んでゐた。單に文藝のみならず廣く最近思潮、殊にトルストイ、ニイチェ、ベルグソン、ロマン・ロオラン等の思想哲學等には深い興味と理解をもつて研究した。文藝時評の如きも、當時の文藝界を動かすものがあり、「新ヘムレットと新ドン・キホーテ」や、「思想か實行か」などの如きは、その代表的な論評であつた。後年、文明批評・社會批評に筆を染めてからは、當時の世界大戰前後の思想的不安動搖の中に、新しき理想と光明とを發見すべく努めた。吉江喬松氏は「或は死か再生かを說き、中年期の心理狀態の變化に對する叡智の目醒めを說き、時には、冷たい夕の霧の中に浮ぶベザロフの墓を、やがて大地の愛を、そしてはつきりとつかみ得た一層確かなる自己の姿によつて明るい悅びを、プラグマチストとしての自己の態度を、言ひ換へれば、自分の理想の徐々に、極めて徐々に實現せられるかすかなる悅びを說いてゐる」と述べ、又「その純情は小兒の如く、その熱誠——天才のみの持ち得る眞の熱誠——は、ニイチェその人の如くであつた」と述べてゐる。　（武藤）

中島歌子 なかじまうたこ　歌人【幼名】とせ【生歿】天保十二年江戸日本橋北新町に生れ、明治三十六年一月三十日歿す。享年六十二。【閲歷】中島又左衞門の次女である。文久元年十八歲で、水戸藩士にして天狗黨の一人なる林忠右衞門に嫁したが、忠右衞門は武田耕雲齋・藤田小四郞等と共に王事に盡し、遂に下野國部田野原に戰死し、歌子もために捕へられて獄に投ぜられた。在獄數月、悠々自適して少しも憂ふる色がなかつたといふ。放免の後、加藤千浪に就いて歌道を磨き、兼ねて書道にも巧みで、上下の信望厚く、三十年の長きに亙つて後生を教へ、歌道の振興に力を盡した。樋口一葉(別項)の如きも、その教を受けた一人である。後日本女子大學に聘せられ、又御歌所に奉職すべく內意があつたが、蒲柳の質の故を以て遂に受けなかつた。肋膜肺炎で歿し、特旨を以て從七位に敍せられた。歌集を「萩のしづく」といふ。歌は平明、特に稱すべきものではない。　（賴富）

中洲雀 なかすすずめ　洒落本　一冊【作者】道樂散人無玉とある。【名義】水中の洲に住む雀切。中洲の岡場所を描いたので附けた名。また吉原雀に對した名である。【刊行】序に丁酉(安永六年)とある。【諸本】江戸時代文藝資料第一輯・洒落本代表作集(近代日本文學大系)所收。【題材】自序に「近き比を以て中洲埋めて納涼所となりしより」とある。中洲の埋め立てられたのは安永元年で、これを大川中洲新地と稱した(日本橋區中洲町)。その中洲に岡場所の出來たのを描いたもので、當時の流行物を列擧したのは、前年出た「風俗問答」などに暗示を得たのであらう。
【梗概】因果地藏の作者への諭しの言葉の中に、「何とかして金を取る考案をしたらよからうが、拵繪同は古い、當世はとかく人の思ひつく事でなければ流行せぬ」といはせて、それから當時流行の物を列記し、江戸四季の行樂も、春は上野・飛鳥・道灌山・日暮し、夏は何處々々とあげ、さて今流行する場所は、月にも納涼にも中洲であると、それから中洲の近況、遊里の風俗、料理屋、食物の品目、見世物、大道藝人等を詳細に述べてある。
【構想】洒落本の一種に、狂文體で遊里の狀況を描いた遊里案內風のものがある。本書はそれに屬し、單に近年賑かになり出した中洲の狀況を狂文で綴つたもので、筋も何もない。風來山人の最も得意とした狂文、「放屁論」「天狗髑髏鑒定緣起」(各別項)等、「風來六々部集」の狂文に共通せるもので、篇中に見える流行物は絕好の風俗資料であらう。　（山崎）

中洲之華美 なかすのはなび　洒落本　一冊【作者】內新好【畫工】無署名【名稱】中洲であげる納涼の煙火と繁榮とをもぢつたのである。內題には單に「假里擇」とあり、序文には「假里擇中洲の華美」とある。【刊行】天明九年(寬政元年)【諸本】德川文藝類聚第五所收。【題材】天明七年十一月九日吉原角町から出火、廓中全燒し、深川・大橋側と共にこの中洲に假宅が出來た。その繁昌を描かんとしたのだ。中洲は安永元年埋立、四年に納涼地・岡場所として繁昌を極め、寬政元年取拂はれるまで續いた。書中朝日如來の現はるゝのは、吉原京町二丁目丸屋甚右衞門方の持佛。高尾解脫は、中洲は三つ叉と稱し、仙臺侯に高尾が斬られたと云ふ傳說のある所から案出したもの。
【梗概】先づ中洲の繁昌が假宅のため、愈々繁昌せる光景を記し、並木の假宅が中洲に移轉した事から、大橋・永代の二通人が大文字屋に入る樣子を描いた。兩人盛んに假宅へ移轉して來た妓樓の通をならべる。一家のお職美春に如來と云ふ客が來た。假宅通で鈍んだ妓樓を順に云つたりする。火鉢にくべた玉子が如來の額に飛び出して當ると、通人要が變じて佛像となり、我は朝日如來である、並木町の釋迦如來に依賴され、そこの假宅を當地に移すやう盡力し、あらゆる遊女濟度のために來たのだと云ふ。一同禮拜する中に、美春は特に一心に祈願をこむる樣子であつたが、忽ち亡靈の姿と變じ、妾はこの三つ叉で殺された高尾の靈である、今如來の利益を蒙つて佛果を得たと云つて昇天し、如來も紫雲に乘つて飛び去つた。
【解說】洒落本に背景に因みある神佛を現はすのは、本書以前既に田螺金魚作「一事千金」(安永七年)、無氣しつちう作「女鬼產」(安永八年)がある。共に兩國回向院に善光寺の開帳があつたのに因んでゐる。本書は、これ等の影響を受けたものらしい。淺草並木の假宅が中洲に轉じた事情を如來に託して說明したのである。單に中洲の岡場所を描いた洒落本には、「中洲雀」(安永六年)、「大抵御覽」(安永八年)(各別項)があるが、特にその地の假宅を描いたのは本書と「女郎買之糠味噌汁」(天明八年)とである。この假宅を追想的に書いたものに、京傳作「傾城買四十八手」(寬政元年)(別項)、「志羅川夜船」(同年)がある。　（山崎）

仲藏狂亂 なかぞうきようらん　所作事　狂亂物【名稱】初代中村仲藏が演じた狂亂のため。【本名題】「狂亂雲井袖」【初演】天明四年十一月十三日初日、江戸桐座「重重人重小町櫻」第一番目五立目【作詞】初代瀨川如皐【曲節】長唄【作曲】初代杵屋正次郎【立唄】初代松永忠五郎【振附】二代西川扇藏【傳來】曲・振とも傳存。【諸本】日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集(日本名著全集)・長唄全集(日本音曲全集)等所收。【題材】「定家葛」を骨子としたもの。【內容】小野良實(初代中村仲藏)は息女小町姬が王子に無態の入內を强ひられた爲め、密かに小町姬を落したが、行方が知れなくなつてゐたので、上使としてその詮議に來た文

屋秋津(初代尾上松助)に間ひ亂された窮餘の一策に、俄かに狂氣を粧うて狂ひ廻る。續狂言の一幕中に挾まれた短い舞踊が、現行の如く獨立的舞踊になつたもので、狂亂物としては贋狂亂の形式である。【價値】江戸の顏見世狂言には長い一幕を緩和するために、折々半途で短い舞踊が挿入されたが、それ等の好適例として見るべく、また曲・振ともに濃く深い趣味がある。「關の扉」(別項)と同一狂言中に出來たものである。

【參考】役者年給狀○繪本番附○註釋名曲選　高野辰之(名著文庫一九)　〔秋葉〕

長田王 ながたのおほきみ　歌人【本名】「長田」は普通ナガタと稱してゐるが、細井本「萬葉集」、溫故堂本「萬葉集」ではヲサダとよんである。【生歿】生年は不明。天平九年(一三九七)六月歿(續日本紀)。「續日本紀」天平十二年冬十月の條に、「從四位下長田王授從四位上」とあるのは、同名異人であらう。【家系】不明。一般には長皇子(天武帝と大江皇女との第一の皇子。弓削皇子の兄君)の御子と考へられてゐる。が、これは岸本由豆流の「萬葉集攷證」に、第一卷山邊御井ノ歌の解釋中に言つてゐる如く、果して信ずべきか否か疑はしい。【閲歷】「續日本紀」の元明帝の和銅四年四月の條に「從五位上長田王授正五位下。」とあるのが初見である。次は「萬葉集」卷一に、「和銅五年壬子夏四月、遣長田王于伊勢齋宮時、山邊御井作歌。山の邊の御井を見がてり云云」とあるので、この年何等かの官命を帶びて伊勢へつかはされたものと見える。それ以後、元明帝の和銅八年四月正五位上を、元正帝の靈龜二年正月從四位下を授けられ、同十月近江守となつた。聖武帝の神龜元年二月に從四位上、天平六年三月に正四位下、同年九月衞門督となり、四年十月攝津大夫となり、天平九年薨去された。「萬葉集」卷三の作品によれば、二十六年の短生涯の間、一度筑紫へ遣はされて今日の熊本縣の南部葦北郡の邊まで赴かれた事が知られる。

【作品】すべて「萬葉集」に出づ。卷一の最後に近く伊勢の山邊御井の作がある。前述の題詞に歌數を記さないから、題詞の次に續け載せてある三首を王の作とすべきやうであるが、内容が御井に於ての作と思はれないから、既に左註の文に於て王の作であるまいと疑つてゐる。故に第二第三首は今除いておく。次に卷三に、筑紫に遣はされて肥後の水島で作る歌が二首、又同所で作る歌が一首。確實な作は總計四首である。皆短歌で旅の歌である。

【作風】「萬葉集」の他の旅の歌のやうに、故鄉や家人の懷しさを歌はず、また景色の寫生をもやつてゐない。言はば自己の行動を寫してゐる。類のない旅の歌である。「山の邊のみ井を見がてり神風の伊勢處女ども逢ひ見つるかも」(卷一)、「葦北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ」(卷三)、皆同類の作風である。旅の歌としては、最も素朴な原始的な種類のもので、天平の時代にかくの如き作家の有ることは珍らしい。尤も「聞きし如まこと貴く奇しくも神さび居るか此れの水島」の一首だけは、己の行動でなく島の樣を寫してゐる。然るにこれとても、他の作家の旅の歌のやうな純粹な叙景、生き生きした自然の活寫の如きは見られない。若しこの歌を叙景歌とすれば、叙景歌のうちでの最も素朴な類の作と言ふべきである。要するに、長田王の作風は、「萬葉集」の中期から末期へかけての作家中で、最も古朴な歌風を代表するものと言ひ得る。　〔森本〕

長田秀雄 ながたひでを　戲曲家・小說家【閲歷】明治十八年五月十三日、東京神田區神保町に生れた。祖父は熊本縣菊池神社の社司で歌人として聞えてゐた。父の名は足穗、開業醫であつた。富士見小學校を經て獨逸協會中學校に學んだ。年少の頃から文藝に志し、後繼者たらしめようとする父の希望に反いた。明治四十二年、自由劇場(別項)の創立に際し、木下杢太郎・吉井勇等の盟友と共に、新劇運動に投じた。處女作「歡樂の鬼」は、同四十四年六月、自由劇場によつて有樂座に上演された。この作は、その作家的地位を定めたものである。爾來劇作に耽り、大正九年以來市村座に入り、演劇の實際方面に携はつてゐたが、昭和三年同座を退き、專ら創作の生活に入つた。なほ劇作生活に入る以前に、詩友木下杢太郎・北原白秋と共に、「明星」(別項)に詩を發表し、「スバル」「屋上庭園」(各別項)の頃にまで及んだ。而してその詩は冷艶沈痛の響を成した。主要作は「阿蘇山の獄」「帝國劇場」「水仙」「紅眼」「饗々」等である。長田幹彦はその弟である。

【著作】處女作以來「死骸の哄笑」(大正三年)「飢渇」(別項)「大佛開眼」(別項)「先夫の子」(大正十年)「石山開城記」(大正十二年)等の外にも劇作多く、また創作小說並に新聞小說の執筆もある。現代戲曲全集第十卷(國民圖書株式會社)・脚本叢書(新潮社)・日本戲曲全集現代篇第四十一卷(春陽堂)に代表作が收められてゐる。

【作風】「歡樂の鬼」は、純然たるイプセン系統の寫實主義的近代劇である。以來彼の作劇術は近代劇正系のリアリズムに終始してゐる。彼が自身書いてゐる所によつても、イプセンの社會劇の影響感化に育つた以外、チエホフに傾倒した時代もあつたといふ。併しその後彼自身の道を發見し、且つ現代劇以外に歷史劇乃至は文化史劇の分野にも新しい地歩を進め、「大佛開眼」「石山開城記」等の大作を發表した。彼の作風には自然主義系統の陰鬱な運命觀と、チエホフに一脈相通ずる情趣乃至は感傷とが特色づけられてゐる。　〔北原・武藤〕

長田幹彦 ながたみきひこ　小說家【閲歷】明治二十三年三月、東京市麴町區九段中坂に生れた。長田秀雄の弟である。麴町富士見小學校・東京高師附屬中學校を經て、早稻田大學英文科に入學、專ら英・佛・露の文學を學んだ。明治四十二年頃から、學半ばにして漂泊生活に入り、北海道に遊んでは、或る時は鐵道工夫の群に入り、或る時は炭坑の木賃宿に投じ、終には旅役者の一團に投ずることになつた。併しその經驗は空しからず、四十四年の暮、東京に戻り、かの旅役者の生活を題材とした短篇「澪」を「スバル」に掲載した(明治四十五年)。この作に依つて、彼は岩野泡鳴・正宗白鳥等から推奬され、一般文壇からも認められて、作家的生活の第一歩を踏み出すことが出來た。その年の四月に、當時文壇の檜舞臺となつてゐた「中央公論」に、短篇「零落」を發表するに至り、一躍人氣作家となり、爾來十七年間雜誌に新聞に多くの作品を掲げ、その著書百卷近くに及んでゐる。一時は、自然派作家の衰頽の後を受けて、谷崎潤一郎と共に人氣を背負つてゐたが、中途から通俗小說に赴き、文壇の中心的勢力から離れるに至つた。

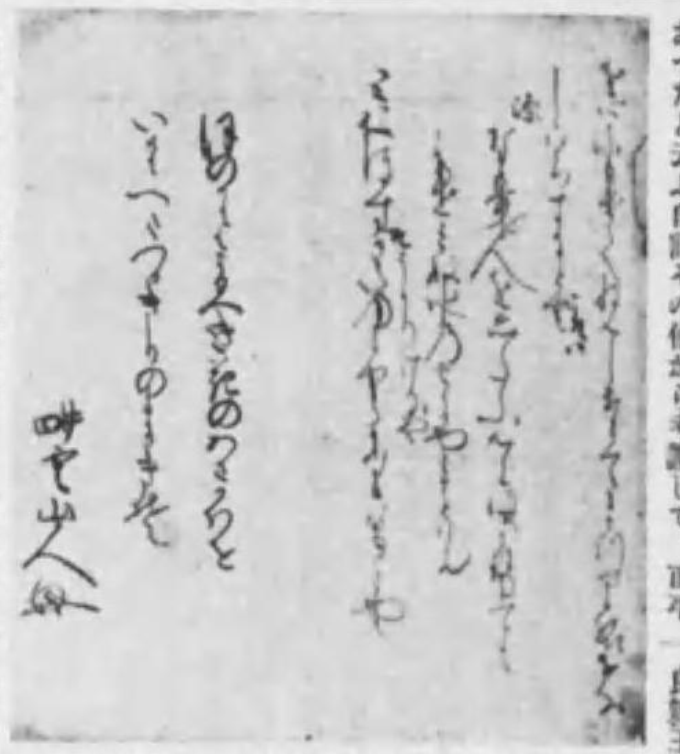
【作品・作風】出世作「澪」「零落」は、ともに作者が北海道を流浪した當時の經驗に題材を得たもので、「澪」は丁度港の澪のやうに、所定

めずふは〳〵と浮き沈んで流れ行く旅役者の一團の中で、田之助といはれる美貌の若者が、小樽の運漕問屋の娘に思はれ、且つ誘惑されて東京へ逃げようとする途中に摑まつて、また元の一座に落ち着くやうになつたが、一體かういふ旅役者の末はどうなるかといつた儚さを、流暢に感傷的に描き出した作である。「零落」も亦前作と同じやうに、種々な旅役者の境涯を描いて、讀者に「詩のやうな美しい廢滅の匂」を傳へようとしたものである。これ等の出世作を初め、短篇「扇昇の話」(大正二年)、「鰻ころし」(同三年)等には、儚なき者、捨てられ者、日蔭者等、人生の消極的方面に對する作者の人間的同感が强く表はれてゐて、讀者に深い感銘を與へるが、彼の作風は次第に享樂的・頽廢的となり、主として鴨川情緒とか、花柳生活とかを描き、延いては「情話文學」なるものの流行を齎すやうにもなつた。その方面の代表作としては、「祇園夜話」(別項)「祇園情話」等がある。　〔宮島〕

長親 ながちか　學者・歌人【姓】藤原【氏】花山院【字】子晉【號】畊雲。自筆と信ずべき零本「源氏物語」(保坂潤治氏藏本)の奧に見える識語に畊雲山人とある。山人は散人とも、又畊の字は耕ともあてられる。【法號】明魏・魏公上人【生歿】生年未詳。永享元年(二〇八九)七月十日寂。享年八十餘(耕雲記)。【墓所】遠州横谷耕雲寺にあり(南山雲錄並註書)とも、上野國妙義山にあり(兵家茶話)とも云はれるが不詳。【家系】祖父は師賢、父は家賢。家賢は正平十九年、三十五歲にして正二位内大臣となり、同二十一年(貞治五年)五月、三十七歲にして薨じた。時に長親は、從三位權中納言左中將であつた。今「南朝公卿補任」「尊卑分脈」「扶桑拾葉集系圖」等によつて系譜を示して置く。

師信―師賢―家賢―┬長親
　　　　　　　　　├長賢
　　　　　　　　　└元要

長賢は權中納言となり、元要は明に入り、法を求めた(新葉和歌集)。【學統】祖父・父、共に「新葉集」の作者で、長親も家に於て歌學の修行を積んだ。且つ宗良親王の指導に與るところも多かつた。【閲歷】長親の生年は明確でないが、應永二十一年、六十餘歲であつたと云ふ自記その他から考證して、正平の初め、即ち四條畷の戰の行はれた前後、吉野の行宮地に於て生れたものと考へられる。



長親筆蹟（保坂氏藏「源氏物語」書入）

七八歲頃から父に歌の手ほどきを受けてゐたが、父が内大臣に任ぜられると間もなく薨去した(正平二十一年)。未だ三十七歲の壯年であつただけ、長親の受けた打擊は大きく、矢叫びの絶え間ない亂世といひ、早く遁世の望を抱いたものかと云ふ。而も父の喪にゐるその翌々年、後村上天皇の崩御に際會した。「三年まで干さぬ涙の藤衣とはまたいかにそほる袂ぞ」と云ふ當時の詠出には、哀痛の情が溢れ出てゐる。而も彼を慰めた唯一のものは文學への一路であつた。折しも南風競はず、これまで各地に轉戰し給うた宗良親王は、吉野に還り給うたので(文中三年)、歌道に於ける新たなる師を求めることを得、「南朝五百番歌合」(天授元年)にも參じ、「新葉和歌集」の撰定にも關與した。文章博士となり、「耕雲千首」(別項)を編したのは、天授二年のことであるが、宗良親王はその翌年再び吉野を脫出し給ひ、信濃に赴き給うたが、事志と違ひ、長谷寺で剃髪し給ふと云ふ南方衰微の狀況であつた。その間長親は弘和三年内大臣、元中二年從一位右大臣と云ふやうに、地位は累進していつたけれども、心なほ安んぜず、元中九年南北兩朝の合一を機とし、天皇に陪して歸洛したまゝ直ちに落飾、三光國師の門に入り、白河に隠棲した(四十歲頃)。その後漸く全然世俗から離れてゐたが、應永十五年に至り、東山華頂山下の耕雲庵に移り、更に南禪寺師西院に住した。當年彼の獨自の性理說と佛說とを加味した歌論を著はし、世にこれを「耕雲口傳」(別項)と呼ぶ。當時歌壇は頓阿・良基相繼いで歿し、ひとり了俊のあるのみで、全くの衰微期に入つてゐた。「傳聞强記老而不衰」と評された彼は、强ひても歌界の重鎭に推され、貴賤混合「七百番歌合」(應永二十一年)には判者となり、その序を書いてゐるやうに、該會の點者たる場合が多かつた。室町幕府に召されることもあつたらしい。正長元年にはなほ在京してゐたが、その翌永享元年遠江國耕雲寺で終つた。何の目的で東下したか考證し難い。一說に上野の妙義山に終ると云ふやうな傳へもある。

【著書】耕雲口傳(一「すぢめ」、また「和歌抄」ともいふ)(別項)○耕雲歌卷一軸(寫、圖書寮藏。短章のものであるが、歌序の中に佛教的文學觀の一層濃厚になつてゐるのを見る。晩年京の西山にゐた時のものらしい)○耕雲千首一卷(續類從三七八に收む)(別項)○耕雲百首一卷(寫、彰考館藏)○擣題和歌集三卷(寫、「題林」に耕雲の撰定の由出てゐる。主として俊成・定家時代の佳作を三千六百餘首選び、これを春夏(上)・秋冬(中)・戀雜(下)に類聚したものである。耕雲自らの作を加へてゐる點、注目すべきである)○兩聚記一卷(續類從・扶桑拾葉集の中。信公と無準とのことを記す)○源氏小鏡三卷(「源氏物語」の解說及びその大意を敘べた童蒙書で、足利義持に獻じたものだといふ)。その他、「倭片假名反切義解」(別項)の著があり、「源中最秘抄」を抄出し、「仙源抄」を書寫し、「源氏物語」を校訂して所謂畊雲本を作つてゐる。

【作風】南朝の歌調は二條家(別項)の正系を傳へてゐる。殊に長親の師事した宗良親王は、二條爲世の女爲子の腹に出られ、血統すらも繼ぎ給うてゐられる。併し南朝諸人士の生活的體驗、わけても行宮の實情は、二條派の尙ぶ歌心と矛盾するところ尠くなかつた。その兩面の反映するところとなつて作り出されたものが新葉和歌調である。長親の作は、二十五首をその中に算することが出來るが、二條派に對する不滿さは、それにすら歷々と窺ふことが出來よう。

春きても川風さむしみかの原たつや霞のころもかせやま

月のころ霜の袖は明けやらで風にわかるゝ花のよこぐも

荻の葉のたよりもつらき風かな軒端の梅いろかはるころ

晩年の作には、信仰の輝きの溢れ出した類のものが多い。應永二十七年、日御崎靈神奉納歌三首を掲げる。

内教のなききによせてあらし山御しまもれはうごきやはせし

今ぞみるながれしみづのかしは島しづみもはてぬ御の先を

あきつしまの外まで照らせ日の御崎くもらぬ御代の光をへつゝ

【史的地位】 混亂的環境の中に、未だ革命的運動を遂げる力は彼に與へられてゐなかつた。但し了俊などと等しく啓蒙的先驅者であつた地位は認むべきである。文運の社會化は、さうした人々の時々の努力に依つて、意外に遠く伸展せしめられたのであつた。殊に佛教的文學觀は、長親に於て特に注目すべき方面が多い。 （以上齋藤(清)・池田）

【國語學上の業績】 五十音及び伊呂波を研究した最も古い一人である。その著「倭片假字反切義解」(別項)は、假名の起源・沿革及び五十音の音韻組織、平假名・片假名の字源等を說いた最古のものであつて、江戸時代に於ける假名の研究に大きな影響を與へたものである。この外に「以呂波之傳」(一卷、寫本。別名「新撰伊呂波口傳」「伊路波傳授」)がある。伊呂波の字源を說いたものである。因みに、從來「仙源抄」(長慶天皇御撰)を明魏の作と誤つてゐた。而して同書の跋に、定家假名遣(假名遣參照)の說が頗る杜撰で、信賴し難いものなることを指摘してあるので、明魏を以て假名遣研究史上の偉勳者と見做してゐた。併し「仙源抄」は明かに長慶天皇の御撰であるから、假名遣に於て從来明魏が負うてゐた名譽は、當然長慶天皇に歸し奉らねばならぬものである。 （以上亀田）

【參考】 大日本史○野史○南山皇胤錄附錄長親傳(耕雲友全集)○南朝公卿補任○畊雲老人畫像贊○嬾尻○南方紀傳○仙源抄の二證本 山脇毅(國文一五ノ九・一一・一二)

中務 なかつかさ 歌人(三十六歌仙の一)【本名】未詳【稱呼】父君敦慶親王が中務卿であつた(後には式部卿)からであらう。【家系】「本朝皇胤紹運錄」には、敦慶親王の御子、母は伊勢とあり、「歌仙傳」もこれと同じであるが、

- 宇多天皇
  - 醍醐天皇
    - 重明親王 ― 徽子女王
    - 朱雀天皇 ― 昌子內親王
  - 敦慶親王
    - 源後古
    - 源方古
    - 女子(中務、母伊勢)

親王と伊勢との御關係に就いては疑ひの餘地がある。但し伊勢に女のあつたことは、「伊勢集」に依つてわかる。中務にも女子のあつたことは、「拾遺集」卷一に「子にまかりおくれて侍りける頃東山にこもりて」とあり、同卷二十に「むすめにおくれ侍りて」「うまごに後れ侍りて」とあるによつてわかる。【生歿】未詳。【閱歷】未詳。家集に「朱雀院の御屏風云々」とあり、「村上の先帝の御時歌めすに奉る」とあり、更に天元二年(圓融天皇)源順が能登守に任じて下る時の歌がある。その他順との贈答歌は、集中に多く見える。「袋草紙」二によれば、天曆十年齋宮女御(徽子女王)の歌合(麗景殿女御歌合)に於て、左の歌は兼盛、右の歌は中務各一人にて讀んだとあり、家集に「麗景殿の女御中宮に奉り給ふ扇にあしでにて云々」とあり、「前齋宮の五十賀の御屏風わかな」とある。後者は恐らく天元元年であらう。その他朱雀院の女一宮(昌子內親王)の御誕生(天曆四年か)や御裳着の時の歌や、粟田右大臣(兼か)・堀川中納言(兼通か)などの名が集中に見える。更に「後撰集」卷三には貫之との贈答歌があり、實賴に送つた歌、仲平の邸に行つた時の歌などがある。「拾遺集」卷十三に兼盛の贈答歌があり、「後撰集」卷十一、「拾遺集」卷十四によつて源信明と關係のあつたことがわかる。又「拾遺集」卷十七には、天祿四年五月の歌、同集卷十七に天曆の御時「伊勢集」を奉つた時の歌がある。【作品】家集に「中務集」(別項)があり、勅撰集に入る歌は後撰集七首、拾遺集十四首、詞花集以下凡そ四十首、合計凡そ六十一首である。【批評】天分はあつたかも知れないが、これを境地や表現に於て練ることは、さまで苦心努力してゐないやうに見える。時には古い表現や構想を襲用して、歌としては熟してゐない不徹底さも見える。 （西下）

中務集 なかつかさしふ 私家集 一卷 【作者】中務【撰者】未詳【諸本】群書類從卷二七三所載本と歌仙歌集本とがある。前者は歌の數二百五十四、後者は二百四十三で、大部分は共通の歌であるが、前者のみにある歌は十六首、後者のみにある歌は五首である。歌の順序は全く一致する。【內容】部類はなく漫然と書き集められてをり、屏風の歌が多い。詞書中興味のあるものは、「鮭のかれたるをおこせて」「後撰の時ども書きて人につかはすに」などがある。 （西下）

中務內侍 なかつかさのないし 歌人【本名】未詳【稱呼】詳しくは伏見院中務內侍といふ。【生歿】未詳【家系】左大臣冬嗣の後、父永經(冷泉と號す)は「公卿補任」永仁二年敍位の部に、「從三位、藤永經、四月十三日敍、元前宮內卿、故大藏少輔從四位下範宗朝臣二男云々」とある。【人物・閱歷】歌文の才あり、歌は「玉葉集」春下に一首、戀五に一首(新撰作者部類)、著作には「中務內侍日記」(別項)がある。その書出しは弘安三年季冬であるが、宮仕は數年前であらう。正應の頃、病のために一時里にさがつた事もあつた。明細な經歷は不明。 （野村）

中務內侍日記 なかつかさのないしにつき 假名文日記 一卷 【作者】伏見院中務內侍の作と傳へられる。【成立】その時々の日記ばかりではなく、後年の追補が多いと云ふ說が行はれてゐる。【諸本】寫本は少く、內閣文庫・彰考館・無窮會文庫・靜嘉堂文庫、その他の藏本があるが、系統は同一のものである。「扶桑拾葉集」卷十三並に群書類從日記部に收む。その他、日本文學全書・國文大觀・有朋堂文庫等所收。【內容】弘安三年、伏見院の御懺法の事から書き始めて、正應五年病重くして、里にさがつたまでの事を載せてゐる。主として宮廷の公事に關する記敍であるが、どちらかと云ふと、「辨內侍日記」(別項)よりは筆づかひが詳密である。文章は概して古雅で、古文や古歌を引用した所も多い。【批評】冒頭でも分るやうに、いろ〳〵な體驗をした中年者の心の惱みを憩へたと云ふ趣が一卷を貫いてゐる。人間苦を味ひつつ、なほ解脫の域に入り得ない境地を敍べてゐるので、一種陰森な瞑想的な表現の文學と見られる。そして或る無常觀に支配せられ、頗る儚げな述懷が尠くない。これには、彼女の內面生活に、何か心を淋しくさせた事情があつたであらうし、一方には佛敎的敎養が與つたのであらう。

【參考】類纂(圖書寮の藏本で語句索引)○宮廷女流日記文學 池田龜鑑 （野村）

長塚節 ながつかたかし 歌人・小說家 【號】櫻芽【生歿】明治十二年四月三日、茨城縣結城郡岡田村國生に生れ、大正四年二月八日福岡九州大學病院にて結核症で歿した。享年三十七。【流派】正岡子規門人。アララギ派【閱歷】

長塚節

水戸中學を中途退學。明治三十三年三月二十八日(二十二歲)、正岡子規の門に入り、和歌・俳句・寫生文を學ぶ。子規歿後、雜誌「馬醉木」の同人となり、多くの作歌と歌論・寫生文等を發表した。なほ節は寫生文から脈をひいた所謂ホトトギス派の小說を作つた。家にあつては農事を勵み、父が政治に熱中して家事を顧みる暇がなかつたので、彼は自ら代つて竹林の栽培等をもなした。また旅行を好み、歿年に至るまで多くの土地に足跡を印し、歌もそれによつて得たものがその大半を占めてゐる。晩年に東洋の造形美術に思ひを潛め、歌の上にも、「氣品」「冴え」を强調するに至つた。【著作】長塚節全集六卷(春陽堂)がある。【歌集】長塚節歌集(別項)【歌論】萬葉集卷十四○東歌餘談○萬葉口香○寫生の歌に就いて○枯桑漫筆等。【短篇小說】芋掘り○開業醫○おふさ○教師○隣室の客○太十と其犬○炭燒の娘等。【長篇小說】土(別項)。【寫生文】佐渡が島○鉛筆日抄○彌彦山○才丸行き○須磨明石等。【批評】歌風は、手堅い寫生をなすに、蒼古なる萬葉調を以てしたものである。これを伊藤左千夫(別項)の作に比するに、線がやゝ細く、左千夫流の甘美な抒情味に乏しいやうに見えるが、よく注意すれば、芭蕉の俳句に流れてゐるやうな味ひを感受することが出來る。殊に晩年の作、「鍼の如く」に於て、その特色を見る。小說・寫生文も、すべて細い描寫に終始し、彼一流の見方をもつて貫いてゐるが、それでも、當時勃興しつつあつた自然主義の手法から見れば、やゝ異なる點があつた。これ彼をして餘り有名にしなかつた點でもあるが、今から見れば、當時評判になつた自然主義作家のものに比しても、左程遜色はない作品を遺してゐる。 （齋藤(茂)）

【參考】長塚節の藝術論 藤川忠治(國語と國文學八ノ一・二・三)○アララギ二百號記念

長塚節歌集 ながつかたかしかしふ 歌集 【編者】古泉千樫主として編纂。【刊行】大正六年、春陽堂。次いで島木赤彥增補、大正十五年六月、長塚節全集第三卷に收む。【內容】節の歌風は萬葉調であるが、夙くから寫生の歌を唱へ、手堅い子規風の見方、表はし方に加ふるに、萬葉人の息吹と芭蕉等の風懷とを以てした。晩年に、歌の「冴え」といふことを强調するやうになつてからは、渣滓が無くなり、人生悲哀の深秘に觸るゝに至つた。「病床雜詠」「鍼の如く」の幾十首の歌は即ちそれである。又彼は早くから、東歌・神樂・催馬樂等の調子を吟味して、おのづから長塚節調を創造するに至つた。 （齋藤(茂)）

長俊 ながとし 故實家 【姓名】榊原氏。通稱は一學。字は子章・五陵。【號】香山・忘筌齋【生歿】享保十九年生れ、寛政九年(二四五七)十一月二十日歿。享年六十四【墓所】江戸谷中感應寺中了院寺【閱歷】世々幕府に仕へ、伊勢貞丈(別項)の門に入つて學び、儒學者で有職故實に精通した人であつた。【著書】本邦刀劍考一卷(百家叢說第二編所收)○中古甲冑製作辨三卷(別項)(寛政十三年刊)○東鑑異本考○東鑑部類索引○東鑑要目集成○江戸誌○駿河國誌等。 （石村）

永年 ながとし 故實家 【姓名】春田氏。通稱は播磨。字は帶市・甲壽【號】平山・壽慶堂【生歿】寶曆三年尾張に生れ、寛政十二年(二四六〇)五月二十九日歿した。享年四十八。【閱歷】幕府の具足師で、清水濱臣の門に入り、有職故實に通じてゐた。【著書】延喜式工事解三卷(文化三年刊。續々群書類從法制部所收。延喜式兵庫寮の武器製造の制及び作法を解說せるもの。その子元長の跋がある)○延喜式工事通解一卷(同上所收。當時の度量衡に就き記せるもの)○溫故韋囊一卷(寛政七年成。染革を概論したもので、當時の記事等に徵し、名稱・染色・用法等を詳記す。別に染革を著色した圖一卷が添つてゐる)○甲組類鑑一卷(鎧の威毛に就いて記したもので、國史・舊記の文を摘記して解說を加へ、鎧の雛形に著色の圖を掲げてある)。 （石村）

中臣氏 なかとみし 「神祇の四姓」を見よ。

中臣祓 なかとみのはらひ 「大祓詞」を見よ。

中臣壽詞 なかとみのよごと 壽詞 【名義】大嘗會に中臣が奏上する御代壽ぎの詞。【成立】現存する中臣壽詞は、平安朝末期に近い康治元年十一月に記錄せられたものであるが(台記別記)、最初に制作せられたのは極めて古い時代であることは、その文章・用語・內容等によつて明白である。恐らく祝詞(別項)中の最古の文章と共に上古に成立したのであらうが、その時代を明瞭にすることは出來ない。而して「台記別記」に收錄せられるまでに、辭句の改修せられたところ少くなからうと思はれる。【儀式】大嘗祭の起原は、太古にあるのであるが、時代を經ると共に漸く盛大に行はれ、平安朝初期に於て完備した。「貞觀式」及び「延喜式」によれば、大嘗祭は十一月下の卯日に夜を徹して行はれ、その翌日辰日から、午日に至る三日に亙つて節會が行はれる。辰日の節會を悠紀の節會、巳日のを主基の節會、午日のを豐明の節會と云ふ。節會は主上が新穀で作つた御酒・御饌を聞し食すと共に、これを群臣にも頒ち給ふ公宴であつて、「中臣壽詞」の奏上は辰日の節會に行はれる。當日主上は豐樂殿の悠紀の御帳に出御せられ、皇太子・親王・皇族以下百官が參入して所定の席に就くと、中臣が榊を捧げて儀鸞門の東の戸から參進し、版に就き跪いてこの壽詞を奏上する。【本質】壽詞は、吉詞の義であつて祝賀の詞である。而して中臣壽詞は吉詞の言靈の活動により、御代の長久を壽き奉るものであつて、その冒頭に「現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇我御前仁、天神乃壽詞乎稱辭定奉良久止申須」とあるから、高天原に起原を發する天神の壽詞を皇御孫命なる現御神に奏上するものである(祝詞參照)。【文章・用字】文章は純粹の和文で、形式的修飾に重きを置いて古雅であり、森嚴莊重の氣を帶びてゐる。用字は漢字の音訓を混用假借し、手爾乎波は眞假名を用ひて細書し、稀に漢文の語法を借りてゐる。これ等の點は祝詞と異る所がない。【內容】一篇の組織は三節から成る。第一節の內容は神話で、神漏岐神漏美の命が、天孫を降臨せしめられるに當つて、「天つ御膳の長御膳の遠御膳」として、齋庭の瑞穗を依さし給うたことを語り、次に中臣の遠祖天兒屋根命が、その子天忍雲根神を天の二上(高天原に在る二

峯並び立つ山）に上らせて、皇孫に獻るべき御膳つ水を天神に請はしめた事を語つてゐる。第二節は右の神話を承けて、今の大嘗祭に於ける悠紀・主基の國郡卜定のことを述べ、その齋田に奉仕する男女の役目を舉げて、それ等の者が瑞穂を耕作し御酒を醸すに當つて、清淨を極め鄭重を盡したことを表示し、次いで今日の卯日に獻る黒酒・白酒の大御酒を聞し食す天皇が、皇神たちの加護によつて、堅磐に常磐に御代を知し召すやうにと壽詞を奏上することを叙べてゐる。而して第三節は第二節に附け加へた詞であつて、「又申さく」に始まつて、親王・諸王・百官以下天下萬民が、この盛儀を歡び祝して益々榮えて奉仕すべき壽詞を称々聞き給へと告げて文を終る。【價値】かく壽詞は他の古い祝詞と相似た文體・組織・内容を有し、その神話及び故事を述べたのは、大嘗祭に悠久遠大の感を起さしめるために效果があり、第二節は壽詞の主部として、御代の長久を壽ぐ精神が辭句の上に繰返し述べられ、神話的叙述と相俟つて一篇の壽詞を莊重嚴肅にしてゐる。要するに、文章・用語も極めて古雅であり、内容は遠大で森厳の氣に滿ちてゐる。「祝詞式」中の二三の名篇と共に我が上代散文の貴重なものの一である。
【註釋書】「中臣壽詞講義」「祝詞」參照。（次田）

中臣壽詞講義 なかとみのよごとかうぎ　註釋書　二巻【著者】鈴木重胤【成立】天保十五年に稿成り、嘉永五年に訂正淨書。【諸本】國文註釋全書中に祝詞講義の附錄として收む。【解説】「中臣壽詞」の本文の校並に略註は、宣長の「玉勝間」巻一（本居宣長全集所收）に初めて見えてゐるが、重胤は更に進んでこの周密な研究を遂げたのである。本書は上卷に於て踐祚大嘗祭の諸儀式を極めて詳細に考證し、下卷に於ては「中臣壽詞」の起原・意義等を解説した後に、詞義に就いて精細なる解釋を述べ、從來世人の注意を牽かなかつたこの一篇の貴重な古文獻に基礎的研究を下してゐる。（次田）

中西梅花 なかにしばいくわ　詩人【本名】幹男【別號】落花漂絮・梅花道人【生歿】安政三年江戸淺草千束村に生れ、明治二十四年發狂して日淸戰爭前後に歿した。【閲歷】漢法醫の家に人となり、天性の詩才があつた。佛語を學んだ事もあるといふ。學歷は殆どなく、常に「萬葉集」を愛誦し、又俳諧をよくした。幸田露伴の紹介で讀賣新聞社に入り、記者生活を營んだ。その新體詩を作り始めたのも露伴のすゝめに基く。在社二年にして去り、明治二十三年東京をはなれて尾濃の間に放浪し、戊溪山に籠居參禪した。後、歸つて入谷に居を定めたが、遂にそこで歿した。「新體梅花詩集」（明治二十四年刊）（別項）がある。【批評】梅花道人の位置は、その詩集がよく物語つてゐるが、その發行當時には、既にいはゆる「文學界」運動の機運が鬱勃として擡頭し始めた時分で、すでに彼の存在は時代錯誤たらんとする頃であつた。畢竟「新體詩抄」時代以後、透谷や藤村の生れるまでの過渡期の一詩家であつて、山田美妙と梅花とは、この二十年代初葉に並稱すべき二詩人であり、湯淺半月・磯貝雲峰・北邨散士（矢崎嵯峨之舎）・戸川殘花・大西操山等と共に、この時期の詩壇の成員をなしてゐた。美妙齋はかつて評して、「温雅な雲峰子、綺麗の殘花子、一種飄逸の梅花入道云々」といつたが、この過渡時代には先づ似たり寄つたりの詩才の集合で、一人として衆才にぬきんづる詩的光燄を發揮し得たものはなかつた。梅花の飄逸は生來の性癖で、この時代に多い前時代よりの通性の繼續者の一人でもあつた。詩が大成しなかつたのは缺才の小に基いたのである。（日夏）

中根淑 なかねきよし　國學者【姓名】舊姓曾根氏、幼名は造酒。字は君艾【號】香亭【生歿】天保十年二月十二日生れ、大正二年一月二十日歿す。享年七十五。【閲歷】淑は曾根直の第二子として江戸に生れた。朝川善庵の外孫である。幼少の時から幕臣中根氏の養子となつた。長じて武藝を好み、傍ら研學したが、別に師と云ふべきものはない。徳川幕府に仕へて徒目付となり、轉じて步兵指揮官になつた。明治元年（三十歳）幕府の命で駿河に移り、沼津兵學校の教授になつた。明治五年徵せられて陸軍參謀局に出仕し、次いで少佐になつたが、同八年（三十七歳）重病に罹り職を辭した。それより日本文法の書を著はした。後、文部省編輯局に出仕したが、數年にして辭した。爾後仕官せず、文筆を弄して悠々自適の生活をしてゐた。淑の妻（西村氏）及び子（忠）は共に淑に先立つて歿したが、敢て後繼者を作らず、爾後家を捨て諸方を浪遊し、風月を友としてゐた。晩年は駿河の興津に居り、此處で病歿し、火葬したが、遺言して墓を造らしめなかつた。【著書】（文法に關するもの）日本文典二冊（明治九年三月刊）○日本小文典二冊（明治九年八月刊）○日本文典考證二冊（明治十二年刊）【その他】中根香亭藏草一冊（大正三年刊。香亭の詩文集）○香亭遺文一冊（大正五年八月刊。淑の歿後に遺稿を集めて出したもの）。【業績】淑は中年以後、俗界を超越した生活をしてゐたが、明治十年前後に出した文法書は國語學界に裨益する事が少くない。就中その最初に公けにした「日本文典」は、當時の學界に少からぬ刺戟を與へた名著である。本書は文字・言語・文章・音調の四部から成るものであるが、その前に前論として（一）人稱語脈論、（二）上古文字有無論、（三）文字音訓論、（四）日本語外國語論、（五）假名文字論、（六）字畫煩簡論、（七）俗字論、（八）日本外國言語正否の論の八項に就いて論じてゐる。これ當時の國語學界の重要問題を論じたものであつて、所謂穩健で注意すべきものである。その本論は西洋文法に範を取つたものであつて、外形は田中義廉の「小學日本文典」（別項）と似てゐるが、内容は遙かに進んでゐて、甚だ詳密で而も正確である。勿論、今日から見れば缺點もあるが、當時としては頗る名著と稱すべきものであつて、爾後の國語學界に大なる貢獻をなしたものである。なほ本書は明治二十年頃まで學校の教科書として廣く用ひられた。
【參考】中根香亭自敍傳　香亭遺稿（福田）

仲文 なかふみ　歌人（三十六歌仙の一）【姓】藤原【別名】國茂【生歿】貞元三年（一六三八）歿す。享年七十一。【家系】藤原宇合の後、公葛（一説に興範）の子。【閲歷】貞元二年上野介に任じ正五位下に叙した。公任の近くに住つて歌の贈答があり、天延二年周防に下る元輔と歌を贈答し、能宣（別項）に車の餞を乞うた。【作品・作風】勅撰集に入る歌は拾遺三、その他凡そ五首。○藤原仲文集。歌數は群書類從二四九所載本は六十四首、歌仙歌集本は五十四首、共通の歌は三十一首、前半は大略等しいが後半が相違する。詞書中には三人稱が用ひられ、「仲文」「同じ人」等もあり、歌仙歌集本の後半には「國茂」の名が見える。作風には生活

を享樂してゐる所があつて、契沖が「おほよそ俳諧なり」と指摘してゐるのは當つてゐる。又紀伊國の郡名七つをよみこんだ歌もある。（西下）
【參考】歌仙傳○河社

長町女腹切 ながまちをんなのはらきり　淨瑠璃　世話物　三段【作者】近松門左衛門【興行】「外題年鑑」に元祿十三年正月六日とあるが、高野辰之氏が本作の中卷に、「寶貫高い此節二貫目ぢかい廿兩」及び「あれは澤村長十郎、あつたら男をやがて大阪へ下り舟、歌流金子も雜波津へ」の句あるを、銀相場の變動及び役者移動の上から考證して、元祿説を否定し、更に水谷弓彥・黒木勘藏氏等がこれを補説して、正德二年秋の上場と推定してゐる。【諸本】八行三十七丁本、山本九兵衛板。諸種の近松集及び世話淨瑠璃大全（下）に收む。【題材】實説は明かでなく、「戲場年表」に、「元祿十二年八月七日、大阪にてお花半七情死。歌舞伎井筒屋かめ抱お花情人道修町刀屋半七と云。此情死男は咽を突死に切れずして三日目に死す。女は腹を切り後咽を突立即死す」とあるが信じ難い。【梗概】〔上之卷〕（京堀川、刀屋石見内）石屋町井筒屋のお花は、情人刀屋半七に種々身の上の相談をしたが、その後暫く顔を見せないので、首尾を案じて、大阪なる叔母と稱して半七の親方石見の店を訪れる。石見は少しも氣付かなかつたが、偶々眞實の叔母が訪ねて來た爲め暴露し、主人は半七を打擲するが、その場萬事を察した叔母が氣轉を利かせて、その場を治める。この叔母は兩親のない半七にとつて、親にも代るべき人である。叔母の所用といふのは、さる屋敷から依頼された信國の脇差のこしらへを半七に託するためであつた。併しこの脇差は、嘗て飯山藩士であつた半七の一家に祟つたことのあるものであるが、今かうして再び手に觸れる不思議さを、叔母はしみじみと半七に語つて聞かせる。〔中之卷〕（石屋町井筒屋）井筒屋太郎左衛門は、お花の繼父九兵衛を呼んで、近く年季の明けるお花を二十兩でもう一年の切ましを勸める。そこで九兵衛は、折から二階で坊主客の相手をしてゐたお花を呼んで得心させようとするが、半七と添はうとしてゐるお花は、いつかな承知しない。九兵衛は怒つて散々半七を罵つた上、お花を打擲する。偶々門口でこの樣子を聞いてゐた半七は堪りかねて跳り出で、二十兩の小判を叩きつけるが、九兵衛は受取らず、半七は、井筒屋の男たちに追ひ出される。（西石屋茶屋）坊主客は氣分を替へて騷がうといふので、お花等を伴つて西石屋の關東屋に行く。お花は少しも氣が浮かず、若しや半七が見えるかと、二階から往來に氣を配つてゐると、確かにそれらしい姿が香屋の蔭に佇んでゐる。お花は平ひ豆腐を買ひに行く阿彌陀籤に當つたので、わざと迷惑さうにして出て、半七の許へ走りよる。半七はさつきの二十兩は、先度の脇差の中身をすりかへたその賣りへぎの金であると打明け、とても遁れぬ身の上なれば、相携へて大阪まで逃れ、事情を叔母に告げて死なうといふ。「お花半七道行」。〔下之卷〕（大阪長町甚五郎内）二人が叔母の家を訪れて見ると、果して叔母の夫甚五郎は、お屋敷から脇差について急な御用とて召されたまゝ、未だに歸らぬとの事であつた。胸に應へた半七は、少しも早く事情を打明けようとするが、叔母は又半七が遊女を伴れて來たので、夫が甥に對する信用を失ひはしないかと氣が氣でない。そこへ甚五郎が遽だしく歸つて來た樣子に、急いで二人を長持の中へ匿す。血眼になつて驅け込んだ夫の一伍一什の話に、叔母ははつと胸塞がり、途方に暮れたが、今更我が家に祟るといふ妖刀を、亡き兄から預つた大事の甥に渡した責任感、並に夫の身まで破滅に導いた申譯から、罪を我が身一つに引受けようと、突然、そこに置いてあつたかのすりかへの脇差を腹に突きたてる。半七・お花は驚いてとび出し、あくまで默罪しようとするのを、甚五郎は叔母を犬死させるなと二人を逃す。【解説】「外題年鑑」に、元祿十三年正月の興行としてあるため、近松が最初の世話物といふ事になつてゐたが、その誤れることは洗練された文章によつても窺はれる。但しお花半七の情事と老婆の切腹との繼ぎ合せに、やゝ無理がある事は否めない。實曆十四年五月竹本座上場の「お花半七京羽二重娘氣質」は本篇の改作。歌舞伎では多少本篇を改作し、享保十六年正月大阪角座で「鬢紋刀銘月」と題して興行した。お花・半七の狂言は、この他上方にも江戸にも多いが、原作とは餘程違いもののみである。但し明治四十四年三月の東京明治座中幕狂言「長町女腹切」は、本作の上之卷と道行と下之卷とを上演したもので、叔母が澤村源之助、半七が中村又五郎、お花が市川莚若、甚五郎が市川左團次といふ配役であつた。小說にも多く、京山の合卷のみでも數部を數へる。なほ部分的な趣向を取つたのでは中之卷井筒屋の場で、半七が九兵衛に小判を投げつけるところを、「冥途の飛脚」（別項）の忠兵衛の封印切に用ひ、又「伊勢音頭戀寢刃」（別項）の刀の摺り、又はお紺が貢の伯母に化けて行つて、眞實の伯母と鉢合せをするところなどに用ひてある。（高野〔正〕）
【參考】歌舞音曲考説 高野辰之○近松傑作全集解題 水谷弓彥○近松名作集解題 黒木勘藏○大近松全集解説 木谷蓬吟○近松全集解題 藤井乙男○正・續歌舞伎年代記○演藝畫報（五ノ四）

仲光 なかみつ　「源氏物の謠曲」を見よ。

中村秋香 なかむらあきか　歌人【號】不盡之屋・槐陰雪屋・乾坤廬・今かくれが・松下庵等。【生歿】天保十二年九月駿州静岡に生れ、明治四十三年一月二十九日興津別莊松の下庵に歿す。享年七十。【墓所】東京駒込染井墓地【閲歷】父は静岡藩士で名を錄翁といふ。秋香十五歳にして歌學を松本直秀に、漢學を戸塚積齋に受けたが、後更に八田知紀に學んだ。明治六年以後、教部・内務・文部の各省に奉職し、大學事務官を經て同二十三年第一高等學校教授となり、同三十年御歌所寄人を命ぜられて晩年に及んだ。歌集を「秋香集」といふ。【歌風】明治三十一年十一月「新體詩歌自在」を出した作者は、當時の詩歌の舊態に安んじて居られなかつたらしく、新味をその歌にも出さうとしたのであつたが、未だ舊い殼を破るに至らなかつた。晩年、新題を詠じて新時代に伴はうと計つたが、穿きちがへた新しさで多く失敗に終つた。叙景の歌に次のやうな清新見るべきものがあつた。

小車は今やつゝみにかゝるらむ幌の上する青楊のいと

（相原・金子）

中村歌右衛門 なかむらうたゑもん　「金澤龍玉」を見よ。

中村花瘦 なかむらくわそう　小説家【本名】中村壯。本姓篠崎氏【別號】柳岡・雪後【生歿】慶應三年江戸赤坂藥研坂に生れ、明治三十二年二月七日牛込新小川町の寓居に歿す（腦患）。享年三十三。【閲歷】父は篠崎德藏、舊幕臣、

維新後鳥取縣權大書記官を經、日本銀行金庫課長となる。母久子、居區氏。少時四谷にあつて小學教育を受け、某漢學者に學び、その頃から漢詩に特別な嗜好をもち、又叔父大竹昌徳に就いて、夙に雪門の俳諧に遊んだといふ。弱冠の頃神田に移り、正規の學課よりも文筆讀書の方により多く親しんだ。同窓には飯田旗軒・丸岡九華などがゐた。九華の紹介で、硯友社(別項)に入つてからは、文筆の方が面白くて、遂に學校を退いてこれに專心することになつた。小說としての處女作は「谷間の雪」(二十四年八月―十一月、都の花)であらうが、文壇にその名を認められたのは「離れ蓑」(二十四年八月、新著百種第十七號)であらう。爾後、讀賣新聞・山陽新報等に小說を寄稿し、硯友社の中堅作家の一人として頗る人氣を集めた。前者に寄稿したものでは「晒し井」、後者へは「陽炎」などが有名であつた。日清戰爭の際には春陽堂の依囑を受けて、獨力「日清交戰錄」の編輯に當つた。戰爭後、やまと新聞社に入り、轉じて萬朝報記者となり、傍ら「新小說」「文藝俱樂部」「少年世界」等に小說を寄稿した。就中「薄けふり」(明治三十年六月 新小說)・「抓み髮」(三十一年七月、同上)等は好評を得た作であつた。晩年は不幸續きで、妻と二兒を先立て、次いで翌年歿した。萬朝報に揭載された「三人若衆」はその絶筆である。その漢詩の嗜好は大分後まで續いてゐた。また俳諧には素養があつたので、硯友社の句會の紫吟社でも、錚々たる作者であつた。英語が讀めただけに、英米の小說を耽讀してはよく飜案した。【作品】「五少年」(少年物、明治二十四年四月)、「離れ蓑」(二十四年八月)、「陽炎」(二十六年九月)、「こぼれ萩」(二十六年十月、「晒し井」外一篇)、明治文庫第七花痩集(二十七年二月)、「ぬくめ鳥」(二十七年十月)(以上單行本)等。その他匿名探偵小說數篇。

【批評】小說家としての花痩を論ずる際に、第一に見逃し難いことは、彼が探偵小說界の先驅者の一人であつたことである。處女作の「谷間の雪」からして既にさうであるが、地方新聞へ寄稿したものは大抵探偵小說であつた。本來は探偵小說でないものにも好んで探偵小說的分子を採用してゐる。今日彼の名が文學史に殘つてゐるのは、主として硯友社中堅の一人としてであるが、この背景がなくとも、探偵小說界の先驅者として、彼の名は當然文學史上に載錄される値ひがある。（柳田（泉））

中村吉藏 なかむらきちざう　劇作家【幼名】常治【號】春雨【閲歷】明治十年五月十五日、石見國津和野町大字後田の商家に生れた。明治二十八年(十九歲)大阪に出で、三十二年上京、早稻田專門學校哲學科に入學、且つ廣津柳浪に師事し、三十四年小說「無花果」(別項)を發表。三十六年改稱早稻田大學卒業。三十九年六月米國に渡り、プリストン大學及びコロンビア大學に學び、後英獨佛等を旅し、露西亞を經て四十二年歸朝。四十三年社會劇「牧師の家」を發表、爾來春雨の號を廢して實名を用ひた。四十四年文藝協會(別項)に島村抱月と共に「人形の家」の演出に當つた。翌大正二年協會解散、藝術座(別項)成立に際し、抱月に招かれて同座脚本監督となつた。「剃刀」「飯」「帽子ピン」「眞人間」、その他の社會劇を同座のために執筆上演した。また「白隱和尚」「淀屋辰五郎」の二作をも發表した。七年抱月逝き、同座解散の後は、專ら劇作に耽り、大正九年「井伊大老の死」、同十年「大鹽平八郎」、十一年「錢屋五兵衞父子」等の三つの長篇歷史劇及び「地震」「牛と鬪ふ男」「無籍者」「道化役者」などの現代劇、或は「星亨」「預言者日蓮」「人骸」等をそれぞれ發表刊行、且つ上演した。十四年以來、早稻田大學文學科講師としてギリシャ劇史・現代劇史を講じ、昭和三年度から沙翁劇研究の講座をも擔任した。

【人物・作風】處女作「無花果」をもつて文藝界に現はれた頃の彼は、新教的の基督教思想に立つてゐた。當時は宗教的乃至基督教的の思想運動が、青年知識人の中に廣く横溢してゐたのである。その後、彼が外遊中、就中、イプセン以來の近代劇の實演を觀、且つその戯曲に親しんで、思想の上にもその藝術表現の上にも、全く近代劇傳統の新しき演劇を創始する決心を固めて歸朝した。その後、恰も新劇運動の勃興に際會し、彼の新しき演劇に關する理論並に創作の實踐的效果を着々收めることになつた。後年、作者の思想が次第に民主主義的傾向を帶びて、一時は科學的社會主義に近づいたこともあるが、その後若干の變化を示して來てゐる。劇作家としての彼が新しき社會劇・歷史劇、及び最近の諸作の如き傾向のそれにまで進展して來た經過については、一々ここに述べる暇がないが、彼の理論及び創作に於て、舞臺的劇場的に見て甚だ實踐的效果が多いといふ事は、他の新しき劇作家と比較して、種々な點で彼の特色とされなければならない。なほ歐洲演劇、就中イプセン劇・希臘劇・沙翁劇に關する研究及び作劇術、並に舞臺・劇場に關する研究等の理論と實際の兩方面に於ける造詣が深く、且つその方面の論著にも見るべきものが少くない。（武藤）

中村敬宇 なかむらけいう　「中村正直」を見よ。

中村憲吉 なかむらけんきち　歌人【號】鶯村草堂主人【流派】伊藤左千夫門人。アララギ同人。【閲歷】明治二十二年一月二十五日、廣島縣雙三郡布野村上布野中村修一の次男として生る。大正四年東京帝國大學法科大學經濟學科を卒業。同年十一月結婚。同五年十月まで東京に住み、歸國して家業に從ふ。同九年春兵庫縣西宮に假寓し、同十一年大阪每日新聞社經濟部に入り、同十五年退社歸村。家督を相續して再び家業に從つた。明治四十一年故堀内卓造の誘導により初めて作歌し、伊藤左千夫の門に入り、アララギ發刊と共にその同人となつて現在に及び、同派歌人の重鎭である。丁寧執拗の實相寫生と、新鮮の感覺と、萬葉調に加ふるに一種幽微な調べを以てその歌風の特色とする。第三歌集「しがらみ」頃から、もつと實相に深く參入した歌を作るに至り、故村の漫吟、比叡山の連作の如きその特色を發揮してゐる。特に比叡山の連作は、直接に大きい廣い生命に向つて自己の感動を開放して歌はうとしてゐる。【著書】【歌集】馬鈴薯の花(島木赤彥合著、大正二年)〇林泉集(同五年)〇中村憲吉選集(同十一年)〇しがらみ(同十三年)〇松の芽(同十四年)等。その他、古歌評釋・歌論・隨筆等がある。（齋藤（茂））

中村重助 なかむらぢゆうすけ　脚本作者【初代】【別名】俳名、故一。作者名として、高門とも稱したといふが、如何か。【生歿】寶曆五年(二四一五)八月三十日歿。享年五十八【法名】閑室院種譽日道【墓所】東京本所香場妙源寺【閲歷】五代中村勘三郎の三男に生れ、表仕切場・樂屋等の取締や、三階の掟書・席札等を始めたといふ。次兄中村仁右衞門が、表仕切場等の法規を定めたと傳へるから、これに基いたものであらう。中村家の出であるところに特殊の威令も行はれた事と思ふ。主として狂言の仕組等に關與して、作者無人の時のみ筆を執つた。從つて名作といふものも聞えぬ。但し仁右衞門は、せり出し・廻り道具等を工夫したといふところから見ても、彼には狂言作者たるべき素質があつたのであらう。

【二代】(作者名に帳元のみを勤めた重助を二代と認める說もあるが、今これに從はぬ)【別名】俳名、故一。作者名にも用ふ。初め笠林堂勘、また金井三平。故門とも傳へるが、如何か。【生歿】享和三年(二四六三)九月二十日歿。享年未詳。【法名】起念院千泉鶴子【墓所】初代に同じ。【閲歷】三代中村七三郎の伜、壕越菜陽(別項)について作道を學んだとあるが、早くは金井三笑に就いたかと思はれる。寶曆十一年の頃から金井三平を以て名を現はし、時に中村清三郎や櫻田治助等の次席に列したが、明和元年十一月重助と改め、同五年霜月、森田座で立作者となつた。以來三座を往來し、櫻田治助と相並んで新進作者として大に氣を吐いた。四十年間ほど奮鬪の後、大酒のために身を果したといふ。名作者の名を擧げたのはこの重助である。【作品】【脚本】繪巡曾我(明和七年春、森田座。下り山下金作の女工藤とお千代半兵衞、女鳴神。夏まで續いた當り)〇都染鼓王鼓(明和七年顔見世、森田座。下り中村富十郎の女暫と白拍子鼓王)〇雪方曾我年々曆(明和八年春、森田座。坂五郎と宗清引・夕顔)〇菊慈童酒宴の宿(酒呑童子と山姥・新。三ケ津の役者を三幕に配した顔見世の趣向)〇兒雷表飛入何紫(安永六年霜月、市村座。廣長十二役)〇櫻木交高尾曾我(安永七年春、市村座。曾我と伊達騷動・夕顔)〇五代源氏貢振袖(天明二年顔見世、中村座。奥州攻・袈知島・夢結明子)〇初曆閑曾我(天明四年春、森田座。曾我と夕顔、二番目早飛脚とおさん茂兵衞の二日替り)〇雲鶴竹振袖源氏(天明五年顔見世、中村座。吉野)〇櫻井花吉野壯士(天明六年霜月、中村座。)〇「今川本領貢入船」(天明七年八月、中村座。今川に鞘當別太鼓)〇籠伊達大門(寛政四年霜月、市村座。伊達秀衡)等がある。時代から世話へと作柄の展開した傾向が認められるが、漸次に輕味が加はつた。作意に風流があると評された所以である。(淨瑠璃)常盤津富本に名を擧げた。〇樹花輪浮船(常盤津、安永五年顔見世、市村座。吉原曾我要紀)〇大銀杏鉋文中仲(富本、安永六年十一月、市村座。鞍馬獅子)〇夢似而富士白妙(常盤津、安永七年二月、市村座)〇風曲江戸紋(富本、天明五年十一月、中村座。其朝)〇浮名草月小夜衣(常盤津、天明七年八月、中村座。おさん茂兵衞)〇想中二世の關夜(明淨瑠璃。寛政四年十一月、市村座。冥途の道行)その他數多ある。【著作】「芝居乗合話」(別項)が彼の著作と傳へる。江戸歌舞伎一般に亙つた記事であるが、作者道の衰へを歎き、女方の心得の變化を憂ふる等、彼の人物を知る材料が見られる。

【三代】【本名】未詳【生歿】文化二年(二四六五)十二月十二日。享年未詳【法名】義全院武仁寂榮【閲歷】八代守田勘彌の妹三津五郎の妻が再縁した事があるが、家系については明かでない。墓所は、初代・二代に同じ。作の見るべきものも傳はらぬ。

【四代】【別名】幼名、勝太郎。十助とも書く。故門。【生歿】天保十二年(二五〇一)七月二十九日。享年未詳【法名】故說院現乗日法【墓所】本所法恩寺中實泉院【閲歷】四代中村七三郎の伜で、初め櫻田治助・松井幸三・勝俵藏等の下について、文政中から作者として名が出たが、その末年に立作者となつた。主として淨瑠璃・長唄等に筆を執つた。常盤津「彌生の花淺草祭」(三社祭、又は善玉惡玉。天保三年三月、中村座)や長唄「内裡模樣源氏染」(田舍源氏。天保九年三月、市村座)等がある。

【參考】新刻役者全書〇芝居乗合話中村重助〇作者名目三升屋二三治〇狂言作者概略　（守隨）

中村春雨 なかむらしゆんう　「中村吉藏」を見よ。

中村星湖 なかむらせいこ　小說家・飜譯家【本名】將爲【閲歷】明治十七年二月十一日、山梨縣南都留郡河口村に生る。甲府中學を經て早稻田大學英文科に學び、四十年七月卒業。直ちに「早稻田文學」記者となる。その前年夏長篇小說「少年行」(別項)を脱稿、「早稻田文學」の懸賞募集に應じた。四十年四月選者長谷川二葉亭・島村抱月に依つて、その當選が公けにされた。五月、脚本當選作たる佐野天聲の「意志」と共に、「早稻田文學」臨時增刊號に發表さるゝや、一躍新進作家の列に加はり、以後作家として、又「早稻田文學」記者として活躍した。四十一年二月短篇集「半生」の出版を初めとして、短篇集「星湖集」(四十三年四月)、「漂泊」(大正二年八月)、「女のなか」(三年九月)、「失はれた指輪」(八年七月)及び「島原の尼」(十一年)等があり、又大正十二年には、長篇小說「藤卷順吉」を福岡日日新聞に連載した。同三年四月には、相馬御風と共に早稻田文學普及會を起し、文學講話叢書を刊行すると同時に、後には會員を指導する任にあたつた。外國作家の中では特に佛蘭西のフローベルに私淑し、大正六年六月「ボヴァリイ夫人」の飜譯を出版して直ちに發賣禁止の厄にあつたが、九年十一月、その禁が解けて新潮社から改譯出版された。またモウパッサン、アンドレーフなどの飜譯も數種ある。昭和三年五月渡歐、主として佛蘭西にあつてその地の文學、特に農民藝術を研究し、四年六月歸朝した。【作品】長篇の代表作としては、處女作「少年行」、短篇では、自然主義的なものとして「星湖集」の諸篇、自然主義に象徴主義的要素を加味した「失はれた指輪」の諸篇を擧げることが出來る。【批評】作家としての全體の特色は、客觀的に事象人物の動きを描き出す點にある。時とすると、初期の作品には、平面的描寫に過ぎる點があつたが、中期の作品にはその缺點が全くなくなつた。併しそれと同時に、單に描寫で滿足せず、象徴的筆致を用ひ、又事象人物の意味づけに重きを置く傾向が見えて來た。これは自然主義に對する作者の不滿の表はれとも見られる。現在では、その不滿が、未だ何處にも落着を見出し得ない。（宮島）

中村清五郎 なかむらせいごらう　脚本作者【別名】幼名玄之助。俳名了雀【生歿】享保三年(二三七八)正月二十四日歿。享年未詳。【閲歷】元祿年代には役者として奮鬪してゐたが、後、中村傳七(別項)の門に入り、作者に轉じて遂に立作者にまで昇り、寶永年代に名を殘した。その妻が生島新五郎の妹であつた關係から、彼も繪島事件に連坐して、正德四年遠島に處せられて病死した。【作品】現在知られてゐる彼の作品は極めて尠いが、時代をやつす作柄に、獨特の持味を示した。「女帝愛護若」(愛護若の書き替へ。寶永四年三月、中村座)や「中將姫京雛」(別項)等がある。（守隨）

【參考】狂言作者概略〇日本演劇史 伊原敏郎

中村清三郎 なかむらせいざぶらう　脚本作者【初代】【別名】中村明石清三郎。幼名藤吉。俳

名藤橫、後、蘆若と改めるとの傳もある。【生歿】寛保三年（二四〇三）二月十七日歿との說がある。享年未詳。【閲歴】二代中村明石勘三郎の妾腹の子といひ、一說に二代の孫說もあり、中村清五郎の娘を娶るとも傳へる。異母姉が中村七三郎の妻である關係からも、初めは役者であつたらうと想像されるが、分明でない。作者としては、元祿年代中村座に勤め、中村七三郎・三升屋兵庫・中村清五郎等と合作した。【作品】作風に關する所傳はないが、江戶歌舞伎に世話種の抒情的要素を入れたのは、彼の力に由るかと思ふ。知られてゐる作品は、左の數種に過ぎぬ。○子子子子（元祿九年十一月、中村座。女鳴神、鐘の所作で有名）○參會名護屋（別項）○百合若大臣（元祿十年、同座）○「兵根元曾我」（別項）○傾女三十二相（元祿十一年、同座）等。

【二代】【閲歴】作者名を明石清三郎、又は藤橫とも名乘つてゐて、寛延寶曆頃、中村座に勤めてゐる。立作者の地位にゐるが、名を殘した程の名作は餘り傳はらぬ。幼名を藤吉、俳名を藤橫といつた。寛保三年に歿した清三郎が、二代かとも疑はれぬでもない。さうすると、寶曆年代の清三郎は三代に當るが、この間の代數は明確を缺いてゐる。（守隨）

【參考】狂言作者概略○日本演劇史 伊原敏郎

中村蓼後 「中村花痩」を見よ。

中村傳九郎 なかむらでんくらう 俳優【初名】中村勘太郎。又四代中村勘三郎【俳名】舞鶴【生歿】寛文二年生れ、正德三年（二三七三）十月二十五日歿す。享年五十二【法名】本住院道觀日法【墓所】本所荒井町妙源寺【閲歴】父は初代中村勘三郎の長男で、二代勘三郎の兄中村勘九郎。延寶六年、三代勘三郎が夭折し、その實子幼きため、入つて宗家をつぎ、四代勘三郎となる。この時僅に十七歲。貞享元年、竹松を五代勘三郎とし、己れは太夫元をやめてただの俳優となり、初めて中村傳九郎といふ。元祿元年三月、中村座で「奴朝比奈大磯通」に朝比奈三郎をつとめ、糸鬢頭に、顔へ鍾馗をつけ、顔に猿隈と稱する化粧をなし、臺詞に關東訛りのモサ言葉をつかひ、坊主小兵衞といふ俳優を供奴にして、「丹前」の藝を演つたのが世好に投じて、今日まで彼の朝比奈は團十郎の五郎、七三郎の十郎と共に歌舞伎劇の典型となつてゐる。【藝風】體格は小兵だつたが、所作事が上手で、且つ武道や荒事もよく出來たのみならず、前にいつた朝比奈のモサ言葉と同じく、破格の關東訛りと、一種の警句をセリフにいつて觀客を悅ばすのが、その特色であつた。例へば「貴殿の一言、耳に藏込んで、喜悅胎と淺からぬ仕合」「數盃汲んで、土手ツ腹がよじりを返す」の類である。これを傳九郎の「名言」といつた。【傳系】【二代】八代勘三郎と同人。【三代】十一代勘三郎と同人。【四代】初名は大谷德五郎。三代大谷廣治の養子、中村勘三郎の婿である。【五代】十二代中村勘三郎と同人。（伊原）

中村傳七 なかむらでんしち 脚本作者【別名】幼名傳次郎。俳名角止。【歿年】享保十年（二三八五）か、十一年か。享年未詳。【法名】觀應院法譽日傳【墓所】東京本所妙源寺【閲歴】四代中村勘三郎事元祖中村傳九郎の門人として、初め役者であつたが、後、作者となり、元祿後享保中頃まで主として中村座の作者として働いた。江戶に於ける作者事業の嚆矢であると傳へる外、劇場內部の法式を定めるなど、漸く內容充實の機運に向つた江戶歌舞伎のために、大なる功勞者である。引道具・せり出し・押出し等の大道具の活用を盛んに見せて、當時の觀衆を驚歎せしめた。【作品】作風につき、木に竹をついだやうだとの惡評があるが、これは一には江戶狂言の通弊でもあり、特徵でもあるところで、二には狂言によつて慰安を與へるといふ彼の主義からでもある。かくて時代世話の混淆等が全然問題にされぬ作柄が多いのである。享保に入つてからは、村瀨源三郎との合作が多い。主な當り狂言には、女楠天下太平記（大根演。正德三年十一月、中村座）○万民大福帳（顔見世に暫の初めて傳へる。正德四年十一月、同座）○坂東一壽曾我（時宗の靈驗劇。正德五年正月、同座。大當り七月まで續く。七月より初に鳴神）○一富士穗拜曾我（享保五年正月、同座）○松飾鎌倉鬧（鎌倉、薬古征伐。享保九年正月、同座）○入船隅田川（隅田川。享保九年二月、同座）○太平御國歌舞妓（太平記。享保十年正月、同座）○狂伊豆日記（伊豆日記。享保十年十一月、同座）等。なほ臨踊の「嬉悩實」と「酒呑童子」とが彼の作といふ說も傳はつてゐる。（守隨）

【參考】歌舞伎事始 寛永一籌 ○狂言作者概略○紙屑籠 三升屋二三治 ○劇場訓蒙圖彙 式亭三馬

中村富十郎 なかむらとみじふらう 俳優【初代】【家號】天王寺屋【俳名】慶子、また琴嶺舍。【生歿】享保四年に生れ、天明六年（二四四六）八月三日歿す。享年六十八。【法名】蓮華院慶子日榮【墓所】大阪中寺町妙王寺。また一心寺【閲歴】初代芳澤あやめの三男。中村新五郎に養はれ、享保十四年冬、養父と共に江戶へ來り、十六年春、市村座で子役として初舞臺をつとむ。同年冬、京都へ上り、初めて女方として出で、これより三都の劇場を往來し、瀨川菊之丞と共に女方の二大巨星だつた。【藝風】容貌美しく、藝も多方面であつた。實父あやめは地藝專門だつたが、彼は地藝と所作とを兼ね、娘方・和娘・奧方・長幼・尊卑等の柔くに巧みで、殊に女武道事を得意とした。「女朝比奈」「女由良之助」「女非人仇討」「女景清」などがそれである。晩年には更に男子に扮し、「揚羽の蝶吉」「大藏卿」「藤屋伊左衞門」「竹拔き五郎」「景清」などをしてゐる。所作事での當り藝は「石橋」と「道成寺」で、今日行はれてゐる「娘道成寺」は彼が創めた曲である。

【二代】【家號】八幡屋【初名】市川熊太郎・中村三光・三代中村松江【俳名】慶子【生歿】天明六年京都に生れ、安政二年（二五一五）二月十三日歿した。享年七十。【法名】妙案院高林三光日暉【墓所】大阪寺町正法寺【閲歴】はじめ四代市川團藏の門下其之助の弟子となり、子供芝居へ出たが、文化九年冬、三代歌右衞門の門に入つて三光といひ、大阪の大劇場へ現はれ、文化十年冬、松江と改めて江戶の中村座へ下つた。天保四年十一月、富十郎の名を繼ぎ、同十四年、生活が贅澤だといふので、大阪を追放され、堺を根據として京都の劇場をつとめてゐたが、嘉永六年九月、江戶の市村座へ下り、堺へ歸つてから死んだ。【藝風】容貌は揚らなかつたが、姿勢よく、音聲すぐれ、やはり初代と同じく地藝と所作とを兼ね、地藝では時代物も世話物もよく出來、且つ音曲や唱歌も上手だつた。大阪では難波に住したので、俗に「難波の太夫」といつた。【三代】【初名】中村梅太郎【家號】八幡屋【生歿】安政六年大阪に生れ、明治三十四年二月二十一日歿す。享年四十三。【法名】梅林院高圓大光日富【墓所】東京小石川白山大乘寺【閲歴】中村鶴助の弟子。明治十九年、鳥熊に

伴はれ、東京の春木座（後、本鄕座）へ來り、二十三年十一月、富十郎の名をついだ。（伊原）

中村尚輔 なかむらひさすけ 國學者【通稱】興三【號】蓉舍【生歿】文化六年生れ、明治十二年七月七日歿す。享年七十一。【閲歴】讃岐高松の藩士で、初め武を以て家名を顯はさうと思つて槍術を學び、その奧義を極めた。後、友松良介に從つて歌文を學んだ。詠歌に巧みで、又手爾波語格に精しかつた。明治初年の頃は、皇學寮で教鞭を執つてゐた。【著書】尙輔は本居派の流を汲んだ人で、宣長の「詞の玉緒」（別項）を增補訂正して、「玉の緒疑語」三卷（詞の玉緒參照）を著はし、又宣長の「古今集遠鏡」（別項）に倣つて「拾遺集遠鏡」を著はした。この他、「雅語摘要解」「蓉の露」「蓉舍歌集」等の著がある。（龜田）

【參考】香川縣史

中村正直 なかむらまさなほ 學者【姓名】幼名釧太郎。後、敬輔に改む（鄙貝に在る閑窶圭龜之助に倣り一時敬太郎と稱す）。【號】敬宇。幼時鶴鳴・梧山の號を用ひた。【生歿】天保三年五月二十六日江戶麻布に生れ、明治二十四年六月七日江戶川の私邸に逝く。享年六十。【墓所】谷中天王寺【家系】父は通稱武兵衞、京都二條城交番同心、母松村氏。家貧にして父は眞綿を伸す手內職を營みつつ正直の教育に力を注いだと云ふ。安政五年四月高橋氏鐵子を娶る（明治三十九年六月九日歿）。一女に、親族の一男を迎へて家を嗣がせた。【閲歴】傳ふる所に依れば、三歲にして句讀を葛島茂右衞門に、書を鹽田龍潭に學ぶ。鶴鳴は即ち龍潭先生の與へた雅號。後、石川梧堂に就き書道大に進み、その與ふる所の雅號梧山は、直に神童中村氏を連想させ、名門貴紳爭うて揮毫を乞うた。五歲の時から讀いた句讀の師岩崎多右衞門は、大にその才を愛して敎導懇篤を極め、十歲の時勸めて昌平黌の素讀吟味を受けさせたが、成績拔群の故を以て白銀三枚の賞に與かつた。この事は子供心にも學問に多大の趣味を感じ、他日偉大なる學者たらしめた轉機となつた。十五歲の時井部香山の塾に入る。學ぶこと三年、十八歲の時、昌平黌寄宿寮に入つた。これから後の勉強は非常なもので、彼はあらゆる漢籍を暗誦し、一字も誤らなかつたことを以て有名であり、これとあの立派な文章とは、昌平黌時代の修養の賜に外ならぬ。安政二年五月には、二十四歲の若さで學

中村正直

問所教授方出役を命ぜられ、四年六月には、學問所勤番に進んだ。同十一月に至り、甲府徽典館學頭の命を受く。徽典館は幕府の譴を蒙つて移住せる旗下の子弟を敎導する所、生徒は往々驕傲で敎官を苦しめた事も稀でなかつた。敬宇、少壯の身を以てこの大任を拜し、勉學躬行遂に生徒の畏服する所となり、學風も頓に刷新されたと云ふ。六年春罷めて再び江戶に歸り、學問所勤番組頭勤方を拜命し、萬延元年には儒者勤向見習となり、文久元年儒者見習に進み、翌二年終に儒者に列し、大御番の上に班するに至つた。元治元年將軍家茂の上京に陪從したが、幾くもなく又駕に從つて東歸し、これより專心子弟の薰陶に當つた。彼は又早く昌平黌內に在つて熱心に洋學を研究した。ために浪士輩から國賊呼ばはりをされ、身邊の危險に迫つた時代もあつた。文久二年正月箕作阮甫の懇請に依り、箕作奎吾・同大六（菊池大麓）を門人に取つた。彼は奎吾がほぼ英學に通じてゐるので、來訪の度毎に人なき一室に請じて、發音・譯解等を質したと言ひ傳へられてゐる。彼が手寫した英漢辭書十冊が傳はつてゐる。勝海舟の所藏を借り、慶應元年夏九十餘日を費して筆寫せるものである。時勢に目醒めた幕府は、慶應二年俊秀の少年十二人を選んで英國に留學せしむるに當り、監督として敬宇は川路太郎と共に同行を命ぜられ、十月二十六日、英國商船で橫濱を出帆した（留學生の中には後年の外山正一・林董・菊池大麓等がゐた）。然るに留まる事僅に一年餘、幕府が倒れて學資の途絕え、慶應四年四月倫敦發、六月末橫濱着、江戶に入つた。時に將軍慶喜は恭順を表して駿遠の地に退く。幕府の舊臣これに隨ふ者多く、敬宇も亦八月靜岡に移つた。やがて藩學學問所の一等敎授となり、明治五年六月の東上まで勤續した。この間、かの有名なる「西國立志編」（別項）「自由之理」の邦譯を公にした。五年の東上は、勝安房を介して時の大藏大輔井上馨の懇請に由るものである。新設飜譯局を主宰すべき職命は固辭したが、在宅の儘仕事に從つても差支なしとの條件で、遂に同八月「大藏省飜譯御用申付候事」の辭令を受けた。これ明治政府へ仕官した初めで、東上後の第一着の事業に、同六年二月の同人社の設立がある。大藏省の方は飜譯局の廢せらるゝと共に罷め、暫く閑散の身であつたが、同八年十一月、東京女子師範學校の設立せらるゝに及び、强ひて請はるゝ儘攝理の依囑に應じ、十三年一旦辭任したが、十七年再び校長の命を承け、逝去の時まで勤續した。これより先き十年八月、東京大學文學科敎師を囑託され、十二年一月には東京學士會院會員に、十四年敎授に任ぜられ、二十一年六月文學博士の學位を受けた。十九年元老院議官に任じ、二十三年貴族院議員に勅任された。その間市會又は區會の議員となつたこともある。併しこの方面に於ては眞面目に職務を見たと云ふ以外、格別特記すべき程のことはない。二十四年六月二日俄に香根に異常を覺え、七日午後安らかに長逝した。【著作】西國立志編十一冊（譯、明治四年刊）○自由之理六冊（譯、明治六年刊）○英譯漢語一冊（譯、明治四年刊）○共和政治三冊（譯、明治六年刊）○西國童子鑑二冊（譯、明治四年刊）○西神雜纂二冊（譯、明治七－九年刊）○西洋品行論十二冊（譯、明治十一年刊）○李禮諾京時事童子龜鑑（譯、明治十七年刊）○西洋節用論一冊（譯、明治十九年刊）○報償論一冊（著、明治二十一年刊）。なほ外に門人等の編纂した「敬宇先生詩文偶抄」（松村操編、明治十四年刊）、「敬宇中村先生演說集」（木平謙編、明治二十一年刊）がある。以上のうち「西國立志編」（別項）が最も廣く讀まれ、これに次いで「自由之理」が讀まれ、以て異常な感化を當時の青年に與へた。【人物】第一に感服すべきは、その刻苦勵精、進んで熄まざるの好學的態度である。恐らく儒者として殆ど完成に近き逸品で、而も時勢の刺戟に應じ、獨學を以て蘭・英に通じ、晩年に及んではゲーテを讀み、又法華經の眞髓を探らんとして梵語を學び、頗る通ずる所があり、博識强記、嚢中に物を探るが如しと云はれた。第二には德行高潔で幾多の逸話がある。第三に宗教心である。彼は恐らく所謂基督信徒ではなかつたらう。ただ彼は謙虛の心を以て道を求めた。儒

者後の海外思想に遠ざかつたのは洋學のお蔭であらうが、洋行後は敢然として信者以上に熱心なる基督教の提灯持となつた。要するに彼は一個の徹底した舊時代の典型的君子であつて、新時代を指導すべき大先覺ではなかつた。併し著作を通じての新時代への影響に就いて見れば福澤諭吉のそれにも匹敵する。【業績】敬宇の事業の中には、前記官歷に示されたる教授教育の公務の外、訓盲啞院の創立と云ふのがある。東京築地に在留せる醫師英國人ホールドの主唱を贊襄し、數名の友人を誘つて樂善會を組織したのは明治八年五月、翌六月初めて訓盲啞院設立を出願し、九年三月その許可を得た。教育を始めたのは十三年二月だが、これが我が國に於けるこの種事業の嚆矢であり、實にまた今日の東京盲學校并に東京聾啞學校の前身をなすものである。併し敬宇の事業として最も著名なるは、寧ろ同人社の創設であらう。彼の東上後、靜岡に在つた時の門人や文部下の學生で、就いて教を願ふ者が多かつたので、六年二月、遂に邸內に家塾を設けることにした。これが卽ち後に慶應義塾と並び稱せられた同人社である。主として英學を授け、創立當初は生徒僅かに十八人であつた。日を經るに從ひ、入門者漸く多く、後には生徒數常に數百人を下らなかつたが、彼の他界と共に衰滅に歸した。次に彼の大事業は、數多き著譯と共に「同人社文學雜誌」(別項)である。（吉野）

【參考】中村正直傳　石井研堂

中村武羅夫　なかむら むらを　小說家・評論家

【閲歷】明治十九年十月四日、石狩國岩見澤町に生れた。小學卒業後、土地の小學校長田村翁に就いて、國語・漢文・算術などを三ケ年間學んだ。十七八歲の頃札幌に出で、畫を志して日本畫家佐々木泉溪に二ケ年餘り學んだ。また二十歲より二十二歲まで、小學校の代用教員ともなつたが、小栗風葉の「青春」(別項)を讀んで文學熱を刺戟され、明治四十年(二十二歲)の春、文學者たらんとして上京、大町桂月の紹介で風葉の門下生となつた。又當時田山花袋編輯の「文章世界」に投書した關係で、同じく桂月の紹介で花袋と相知り、その他、德田秋聲・眞山青果などとも相知つた。翌年「新潮」の訪問記者となり、明治四十四五年頃よりその編輯を託せられて今日に及んでゐる。その間大正十四年より昭和三年まで、文藝雜誌「不同調」を發行經營したこともある。【著作】〔長篇小說〕人生(第一部曠野の門・第二部歌人、大正九年十一月新潮社刊、處女作)○渦潮(時事新報所載)○女王○女人群像○夜の潮○嘆の都○處女(以上講談社刊)○愛情の彼方へ(春陽堂刊)○群盲(大正十二年九月、續篇)○瑠璃鳥○綠の春。その他「現代長篇三人全集」(新潮社刊)中の十冊に收められた作品がある。〔評論・隨筆〕文壇隨筆○誰だ？花園を荒す者は○中村武羅夫讀物全集等。

【批評】終始一貫、名編輯者として活躍して來たが、その間、風葉門にあつて長篇の筆を磨き、長い雌伏の後に目覺しい飛躍をなし、長篇作家として一家を成した。その作風は線が飽くまで太く、その構想は寧ろ粗雜と思はれるまでにスケールが大きく、遮二無二猪破して行くところに特徴がある。この作風は彼の性格の反映でもあると思はれる。なほ彼は創作の傍ら文藝批評・時事評論・社會時評、その他映畫・音樂など、あらゆる分野に亙つて覇氣に滿ちた健筆を揮つてゐる。（高須）

長屋王　ながやわう　詩人・歌人【生歿】天武帝の四年に生れ、聖武帝の天平元年(一三八九)二月十二日に死を賜はる。享年五十四。【系圖】天武帝―高市皇子―長屋王【閲歷・人物】歌人であり又詩人である。「懷風藻」の詩に據れば、晚秋に詩人を會して新羅の客を宴し給ふことが多く見える。それ等の點から推するに、詩人としては歌人としてよりも一層傑出し給うたやうである。天武帝の御孫として當時の新知識であり、權勢をも有せられた事は當然である。故に藤原氏の人々には邪魔物扱ひにせられたのは已むを得ないが、同情すべきである。卽ち天平元年二月十一日に中臣東人が、王は左道を學んで國家を傾けようとすると讒した(續紀)。その裏面には、勿論藤原氏一族が王に對しての反感が存在する。翌十二日、藤原武智麻呂が王の邸を急に圍んだので、實は憤激して王は自殺せられたのである。しかし天平十年七月には、王の遺臣大伴子虫が中臣東人を斬り殺した。その時に、「長屋王を誣告したのは汝だ」と稱してゐる。又「日本靈異記」卷中には、「有"賊姤人"讒"天皇"奏"長屋謀傾"社稷"將"奪"國位"」とも記してゐる。結局長屋王は、藤原氏のために除かれたものである。左道とは佛教に結びつけた妖術で、當時流行したものらしく、「續紀」の天平元年四月三日の條にこれを禁止した事も見えてゐる。（山岸）

【參考】懷風藻○日本靈異記

永愷　ながやす　「能因」を見よ。

長好　ながよし　歌人【姓名】望月氏。廣澤氏とも。名は別に筆友とも稱し、後には長孝とも書く。【號】小狹野屋・桂雲【生歿】元和五年に生れ、延寶九年(二三四一)三月十五日歿。享年六十三(六十四歲說もある)。【學統】細川幽齋―松永貞德―望月長好【閲歷】近世歌人中、閲歷不明の一人である。早く信濃から上洛し、貞門に於て詠歌の修行を積んだものと見られる。貞德の門下には註釋の事に携はつたやうな學者の多かつた中に、彼は眞に出藍の歌人であつた。いつ頃か洛西廣澤池畔に菴を結び(家集に、寬永元年彼の四十歲當時、この小狹野屋で詠んだ作が載つてゐる)、それを小狹野屋と呼んだ。「此秋もまた世にかよふ草の戶にさせてふ蟲の聲ぞ悲しき」と云ふ菴での歌が有名になり、飛鳥井雅章が激賞したと云ふ逸話も傳へられてゐる。その菴が或る年の大風に吹き飛ばされたことが、家集に見えるところからしても、全くの一小菴であつたものらしい。併し歌人らしい歌人に乏しい時代に於て、彼を慕ふ人々との間に相當の往來もあつた。木下重風・參議資長・飛鳥井雅直・木下順庵・權僧正閑兩等の名が、同門以外に彼の家集に出てゐる。「けふもまた垣ねのうばらつたひきて霜ふむ鳥の跡はありけり」と云ふ彼の詠によつて、その閑居が「霜ふむ鳥の庵」と呼ばれたとか、「よしや吹け秋の草木の嵐山月のかつらも雲にしをるゝ」と云ふ名月の夜の雨を惱んで詠んだ歌のために、桂雲の號名を賜つたとかいふ逸話は、彼の社會的聲譽のほどを裏書するものと解することが出來る。なほ彼が單なる厭世的隱者でなかつたことは、家集第四卷中の文集によつても、その交遊の廣さを證することが出來よう。【著作】廣澤輯藻(別項)○桂雲集類題(廣澤輯藻中の歌、後にその集に洩れ傳へられた歌の類題で、天明元年長好の百囘忌に有賀長收が校正出版)○詠歌大本祕訣五卷(寫)(門人長羽に傳へた詠歌上の口傳書で、卷一に歌の三義、卷二・三に詠歌大旨の註、卷四・五に歌論詞が纂せられ

てゐる)○古今集仰學十卷(寫)○神大極祕五字傳一卷(寫)等。

【歌風】誇張して損はない當時の歌壇に於て、注目すべき歌人の一たるを失はない。彼の實生活の反映の妙趣と共に、いかにも技巧の妙味が存してゐる。

つらかりし夜の嵐も忘られて明くれば拾ふ庭のささ栗

夕嵐木のはをさそふ聲のうちに行秋遠る入相のかね

彼の交友には漢詩人があり、屢々和漢聯句を試みてゐる。「觀雪詠秋」とか「閑居閑談」とか云ふ多くの歌題が既にそれを反映してゐるが一般に聯句が引緊つて居り、體言止が多い。

すゞしさや月みぬ宿も夕がほの宿の花垣ならの下風

いへばえにいはぬ心を山ぶきの花にやさわぐ井のしら浪

（齋藤(清)）

【參考】近世畸人傳

長與善郎　ながよ よしを　劇作家・小說家【號】平澤忠夫(初期使用)【閲歷】明治二十一年八月六日、東京麻布に生る。父は醫學博士長與又郎。學習院高等科に進む時、彼は法科を選んだが、後、文科に轉じた。明治四十一年卒業、東大英文科に入學したが、中途退學。法科志望から文科に轉じたのは、後の白樺派(別項)同人等の影響が多かつた。從つてトルストイ、イプセン、メエテルリンク等に親しみ、「白樺」の熱心な愛讀者であつたが、創刊後一年ほどの後には、遂にその同人となつた。大學在學當時、同誌上に短篇小說などを發表したことがあるが、同人となつてからは、多く力作長篇を發表して、間もなく同派の重要な作家の一人となつた。「白樺」廢刊後數年の大正十三年四月には、雜誌「不二」を創刊して「白樺」の意志を承け繼ぐことに努力し、一方「演劇新潮」の同人となつた。昭和初年の大患後は、昔日の如き活動を示さなくなつた。【著作】〔選集〕明治大正文學全集第三十四卷○日本戲曲全集第四十四卷○現代戲曲全集第九卷。〔單行本〕盲目の川○彼等の運命○或る人々○明るい部屋○生活の花○結婚の前○陸奧直次郎○青銅の基督○春田の小說○平野○二週間○或る社會主義者○竹澤先生といふ人○春の訪問○求むる心○エピクロスの快樂○項羽と劉邦(別項)○韓信乃死○朝顏○三戲曲○陶淵明○文明主義者○一人旅する者等。代表的な作品としては「盲目の川」「陸奧直次郎」「青銅の基督」「竹澤先生といふ人」「項羽と劉邦」「夜の戲曲」「朝顏」などが擧げられよう。

長與善郎

【人物・作風】柔道二段とか三段とかの腕前があつたばかりか、エネルギッシュな、正義派的な、激しい情熱家であつた。從つて白樺派の同人として、無理解な周圍と最も激しく論難し合つたのは、彼であつた。さう云ふ激しい情熱が、この作者の作品に、重厚壯大な味ひを有たせもすれば、息詰まるまでの壓迫的・強調的な力強さを感じさせもする。が、短い作品の中には輕くて明るい、朗かな味ひのあるものも決して少くはない。併しさうしたものは、必ずしもこの作者の本領とは云へなかつた。飽くまでも作者は局面の廣い、骨組のがつしりした、そして材料の中にグン〳〵と入つて行つて、寧ろあくどい感じがする迄にこれを掘り下げて行く。題材的には彼はよく人間の力を取り上げ、それの破綻を描いた。從つて作品は多く悲劇的であるが、それも色々な人間の性格の相剋よりも、強い力に生きるものの運命的な破綻を描いたものが多い。其處にこの作者の一種の宿命觀があつた。徹底的に個性を伸ばすことが、宿命に、言ひかへれば天の思召しに、撞着することになるといふのは、徹底的に個性を伸ばすことその事のうちに、天の思召しがあるとする個性尊重主義の、最も根本的な想念への明確な把握を、まだこの作者が十分に得てゐなかつたからである。併し「竹澤先生」以後の作品には、さうした悲劇的な世界を一步踏み出して、作者はも一つ高い天の調和を靜かに見詰めようとしてゐる。【史的地位】遲れて白樺同人となつたけれども、その情熱的な果敢な態度を以て周圍と鬪つたことや、特に彼の有する鋭い善惡意識や倫理感が、第二義的にではあつたが、大に白樺派といふ集團を特色附けた點から云つて、重要な役割を果した。それだけこの派內では重視されてゐたが、當時、文藝界一般が、靜かに落着いた作品を好む風潮に支配されてゐたので、力瘤で固まつたやうな彼の作風は、餘り好意的には受取られなかつた。從つて直接この作者からの影響は、一般文藝界に現はれてゐない。ただ後の新現實主義末期の作家犬養健は、初めこの作者から若干の指導を受けたらしい。（片岡）

【參考】長與善郎論　西宮藤朝(文章世界)○長與善郎論　片岡良一(國語と國文學六〇)○小傳(明治大正文學全集三四附錄)

半井桃水　なからゐ たうすゐ　小說家【本名】冽【別號】菊阿彌【生歿】萬延元年十二月二日生れ、大正十五年十一月二十一日歿。享年六十七。【墓所】東京市本鄕區片町蓮昌寺【閲歷】對馬國嚴原の人。上京して尺振八の共立學舍に學び、明治二十一年、東京朝日新聞記者となつた。翌二十二年、同紙上に「啞聾子」を載せ、次いで「しぐれ筵」「海王丸」などを掲げて、新聞小說家として名を馳せた。次いで二十四年に書いた「胡砂吹く風」は通俗小說として上乘のものと稱せられた。樋口一葉(別項)が桃水の門に入つたのは丁度この年である。一葉の處女作「闇櫻」は桃水の校閲を經て、雜誌「武藏野」に出したのであつたが、二十五年六月、一葉は一身上の事情から桃水の門を離れた。後期の作として特に傑出してゐるのは、瀬島の義民齋藤彥內を主人公とした「天狗廻狀」で、老練の筆は能く篇中の人物・光景を描き出してゐる。一生の作品三百餘篇、珍らしい多作家だつた。なほ平生音樂を嗜み、俗曲歌詞の作も亦少くない。（高須）

半井桃水

長柄長者黃鳥墳　ながらちやうじや うぐひすづか　讀本六卷【作者】栗杖亭鬼卵【插畫】石田玉山【名義】長柄長者一家を中心に、鶯の報恩物語の意。【刊行】文化八年【讀本】輸入文庫所收。

【梗概】加賀國富樫家の臣佐々木源太左衞門は、公金費消の廉で、京都の留守居を免ぜられて歸國の途中、將軍家より淀川浚の召に推參する河內の郡司で、同姓同名の佐々木源太左

衞門と大井川の渡りで同宿し、具足櫃の間違ひから遺恨となり、河内の源太左衞門は生駒山寶山比丘の豫言が的中して討たれたので、一子源之助は母諸と共に、重代の寶刀旭丸と系圖を持ち仇を探すことになつたが、伯父源吾に諸を殺され、系圖を奪はれて家を横領された。然るに源之助は偶々長柄長者の娘梅ケ枝の愛する發唐琴を救つたのがもとで、その婿となるが、長者の後妻環と情夫大仁坊とに毒殺されようとし、身の大望を梅ケ枝姉妹に語つて難を遁れた。その夜大仁坊と環は惡事の露顯を恐れ、梅ケ枝を殺して館を出奔し、長者をも惨殺した。その後源之助は發唐琴に梅ケ枝の死を告げられ、且つその導きで仙賢洞仙實は父の仇加州の源太左衞門の家に到り、その弟子實は長柄長者の甥で、嘗て勘當された十三郎と相知り、こゝに目出たく洞仙を斬つて父の仇を報いた。かくて源之助は歸國して母の再生したのに遭つて喜んだが、また淀の城主木村巽惣左衞門の援助を得て、源吾・大仁坊及び環を討ち、源之助は梅ケ枝の妹轉木を、十三郎は彼のために死んだ遊女九重の妹八重を娶り、佐々木・長柄兩家を再興した。

【解説】勸善懲惡の作意に、復讐物語を主として數々の奇談を交へた。讀本の末期のものに見る餘りに奇を求める事なく、平淡な筆である。

【參考】繪入文庫解説　〔笹野〕

長流（ながる）「長流」を見よ。

奈河龜輔（なかはかめすけ）　脚本作者【別名】龜助、龜楠とも記す。屋號は永長堂、又遊泥居とも。【生歿】未詳、但し寛政頃に歿か。【閲歴】奈良の商人出らしく、放蕩の果、河内の知己を頼つたが、この頃遊里・劇場に遊ぶ中、狂言作者を志して並木正三（別項）に入門した。奈良と河内を謂ふ身とあつて、奈河と稱したといふ。正三門下で並木を稱へないが、正三との交渉には別段の事情もなかつたらしい。ただ龜輔には經濟上の後援者があつたので、役者等に對しても、十分作者としての權威を揮ひ得たので、それ等の事情はあつたかと思ふ。明和年中から天明に及ぶ二十餘年間の作者生活を送つて、立作者として京大阪に活躍し、數十種の當り作を得て、當代正三につぐ名聲をあげたので、その業績も正三門下に於て尤なるものである。天明八年、江戸の番附に彼の名を見出すものがあるが、單にその名聲を利用されたに過ぎず、勿論彼の江戸下りはなかつた。彼と交渉のあつた役者は、正三からの歌右衞門を初め、三五郎あり雛助ありで、即ち彼の作の範圍の廣さと、關係した劇場の多さを語るものである。歌舞伎講釋と名付けて、後世の本讀（ほんよみ）（別項）を創めたのも、上方では彼であると傳へる（天明初年）。親友の經波新地吉田卯兵衞は彼の案で、その聚樂庵の庭を風流に構へ、安永年中は遊人がこゝに群つたといふ。天明五年、彼はこの庵に唐物を陳列し、唐の開帳と稱へて人々を招いて悦んだ。又時には在邊に麥飯を商つたりした。彼の人物にはこの種の趣味性が十分見出される。この點では正三と全く相反してゐたやうにも思はれる。門下の秀才としては、奈河七五三助（別項）が最も名高い。龜輔の名は七五三助の高弟奈河篤助によつて繼がれた。【作品】正三は淨瑠璃をも書いたが、龜輔は凡て歌舞伎の脚本であつた。但し當り作を讀本淨瑠璃に綴つて印行した事はあるが、これは例外である。現在まで五十篇足らずの脚本の名題が知れてゐるが、世話物は十篇ほどで、他は悉く時代物と見られる。名篇と思はれるものを擧げる。【世話物】伏見京橋評實錄（安永六年七月、大阪中の芝居。實說物）○紫花の增家傑會合（安永七年七月、同座。双蝶々と五人男）○丑天神血染宮人（天明二年七月、角の芝居。いろは新助）○つれ〳〵噺（天明三年九月、中の芝居。揚巻助六）等。【時代物】競伊勢物語（別項）○花錦五代記會說（安永五年二月、中の芝居。先霞）○伊賀越乘掛合羽（別項）○伽羅先代萩（別項）○大自在背子寶貸（安永六年十一月、同座。天鉢記）○けいせい黍稻場（同年十二月、同座。大内騷動）○けいせい大内の雛形（安永九年正月、京都龜谷早雲合座。大内騷動、鵺塚の前篇）○加々見山廓寫本（別項）○殿下茶屋聚（別項）○二王門綱歌錄（天明二年四月、同座。石川五右衞門）等。右のうち、「伊勢物語」「伊賀越」「先代萩」「加々見山」「殿下茶屋」は彼の五大傑作ともいふべきで、古來喧傳され、今日まで生命のあるものである。又「伊勢物語」は直に彼によつて、讀本淨瑠璃に綴られて世に迎へられた。又その他の數作が淨瑠璃に書き替へられて、操芝居の當り狂言となつたものもある。正三の作と共に、龜輔の傑作も、後世繪入根本（別項）として盛んに行はれた。時代物と世話物とを問はず、おどけ狂言をもよく綴つた。「萬悪大目山」（安永四年十一月、中の芝居）、「源氏鬢打出槌」（安永五年十一月、同座）の如きはこれである。安永・天明の交は、七五三助を屢々合作者としてゐた。

【作風】並木正三が出て、時代淨瑠璃の脚色と舞臺裝置を歌舞伎に採り入れた爲めに、時代歌舞伎の寛義が確立し、社會の歡迎を受けたのであつたが、これを脚色の態度から見る時は、正三の場合はまだ淨瑠璃の樣式から離脫し切らなかつたといへる。完全に歌舞伎の時代物が成立したのは、龜輔に俟たねばならなかつた。正三の作に於て最もうけた舞臺技巧による演出法を、龜輔は第二にして、寧ろ自然な、人事や社會の問題から、直接取材する態度をとつた。このために龜輔によつて開拓された題材の分野は講釋の方面であつた。故に舊作の增補は別として、彼の作には實の書卸しが多く、時代物にはお家騷動を好んで選んだので、範圍の手廣い、又錯綜した脚色による感興の漲る上に、正三物に發見されなかつた自然味に富む效果を得たのであつた。又彼が四番續の脚色法に大綱を定めたと傳へるのも、漸く彼を俟つて歌舞伎脚本に、戲曲論的自覺を得たと言ひ得るからであらう。かくして時代歌舞伎は龜輔によつて完備したと見られ、當年の上方は、當にその流行期と言ひ得る。化政度に至ると、流石に彼の作は煩雜に過ぎるといふ非難を浴びた。名題の調み方に特殊な案を用ひた事は、正三に倣つたかとも思はれるが、當時の流行でもあつた。前掲の類の外に、「大當百足山」「もふ〳〵よかろ丑の御執達」の類も多い。

【參考】戲財錄並木五瓶○南水漫遊濱松歌國○傳奇作書西澤一鳳○京攝戲作者考木村歌吾○狂言作者考○近世戲曲研究守隨憲治○江戸歌舞伎同上（日本文學聯講）　〔守隨〕

奈河七五三助（なかはしめすけ）　脚本作者【本名】幼名金次郎（一說に新次郎）【號】洗口【生歿】文化十一年（二四七四）十月二十日歿す。享年六十一。【閲歴】大阪道頓堀の茶屋觸新に生れたが、長じて日本橋に旅宿を業とし、三ツ星末廣屋といつたと傳へられる。奈河龜輔（別項）について狂言作者となつたのは明和・安永の頃か。安永年中は屢々龜輔の下に屬して時代物に筆を執つた。天明元年冬は、中の芝居に於て「蓮歌茶屋奉文案」を出して角の芝居の龜輔作「天下茶屋」に相對し、共に大當りを得た。この頃から七五三助は獨立し、その名も謳はれて、やがて當時の上方作者界に龜輔高弟として、十輔・五兵衞（五瓶）等と肩を並べたのであつた。寛政六年以後、十年間ほど江戸に下つてゐたが、屢々火災に遇ひ、文化三年歸阪して再び上方に活躍してゐた。彼の江戸に下つてゐた間に、並木五瓶や辰岡萬作（各別項）等が地盤を築いてゐたので、以前ほどの鮮かさはなかつた。彼の門からは奈河篤助（別項）・同十八助・同九二助等が出た。

【作風・作品】作者生活は比較的長かつたが、龜輔に就いても彼程の大いさを享け得なかつたらしく、脚色は舊作の摘削や綯ひ交ぜが多いため、一部からは洗濯屋と呼ばれた。併し場面の配合に就いては一種の妙味を示す外、特殊な寫實的描寫に成功した爲め、當り作も尠からずあつた。「隅田川續俤」（天明四年三月、角の芝居）（別項）、「けいせい北國曙」（寛政元年一月、中の芝居。柴田勝家）、「大振袖雅柳」（同年三月、同座。關ヶ原合戰）、「いろは假名四十七訓」（寛政三年九月、角の芝居。鎌倉や嶋の平右衞門等）、「埋草花大樹」（寛政四年一月、角の芝居。太閤記）、「色讀模實戰」（寛政四年五月、角の芝居）等は傑作に屬する。彼の作風に注目される所は、時代に世話に、極めて廣く自由な筆致を見せた點にある。龜輔に比して時代物にも輕快な運びを見せた事は、時勢に應じた故もあるが、又彼としての進歩でもあらう。

【參考】戲財錄並木五瓶○作者店おろし三升屋二三治○言狂作書西澤一鳳○狂言作者考○江戸歌舞伎守隨憲治（日本文學聯講）　〔守隨〕

奈河篤助（なかはとくすけ）　脚本作者【別名】初め十九助と記す。一洗堂とも號して、略して一洗、又は一泉といふ。金龜堂・奈河龜助等。【生歿】天保十三年（二五〇二）二月三日歿。享年七十九【法名】釋淨應【閲歴】もと泉州の一向宗の僧であつたが、還俗して狂言作者たらんと志し、大阪に上つて奈河七五三助（別項）の門に入つたと傳へる。七五三助から十九助の名を貰つたが、頭髮の赤いために、猩々の篤助と言はれたといふ。寛政年中より京大阪の各座に活躍するうち、當時の劇界の大立者三代中村歌右衞門に接して、初代歌右衞門の俳號一洗を貰つたが、後、交を絶つて一洗を返し、剃髮して金龜堂一泉と稱し、以後、主に濱芝居に作を提供したといふ。その頃、二代奈河龜助を繼いだが、龜助に似て彼も本讀みに巧妙であつた爲め、京都にあつては、正本講釋を以て屢々客席に招かれたといふ。老後、洛東山眞葛原に茶店を開き、一服一泉といつた。彼の門からは奈河晴助（別項）が出た。

【作品・作風】晩年の濱芝居時代も名作があつたが、大芝居時代に好評を得た作は次の如きものである。「川崎踊拍子」（寛政八年八月、京早雲座。伊勢音頭と親宿の九人斬り）、「けいせい忍逢淵」（享和元年正月、角の芝居。石川五右衞門）、「けいせい品評林」（文化三年一月、中の芝居。天草攻）、「けいせい寄佳節」（文化五年一月、中の芝居。京都の和妻表紙）、「復讐高音鼓」（文化五年八月、角の芝居。馬琴の三國一夜物語）、「東都名物錦繪始」（文化八年一月、江戸中村座。おこま才三と加賀見山）、「霧頭價彩幕」（文化九年一月、同座。三勝半七）等。三都を往來して、七五三助に似て脚色の幅廣く、上方脚本界の末期を飾つた一人である。手堅い作風は、師の七五三助より寧ろ龜輔に近いと言はれた。彼には「作意書」の著があつて、作道を說いたが、役者の演出を重しとする意見が述べられてゐる。

【參考】言狂作書西澤一鳳○南水漫遊濱松歌國○狂言作者考○近世日本演劇史伊原敏郎○江戸歌舞伎守隨憲治（日本文學聯講）　〔守隨〕

奈河晴助（なかはるすけ）　脚本作者【通稱】宮島屋喜兵衞【別號】雲晴助【生歿】文政九年（二四七二）正月二十九日歿。享年四十五【閲歴】夙く素人假狂言の作等を好み、奈河篤助（別項）の門に入つて、京因幡藥師芝居に作者となつてゐたが、西澤利右衞門に招かれて大阪に下り、初めて大芝居に出た。文化七年篤助の江戸下りによるその補充の意味かと思はれる。初め德叟や七五三助の下にゐたが、やがて立作者となつて活躍した。二代嵐吉三郎や璃寛のために多くの作をなした。作の當りは、彼を初め嵐小六・淺尾工左衞門等によつてよく演生かされた爲めとも傳へる。

【作品・作風】作者生涯の短かつた割に當り作を多く出した。「敵討[illegible]」（文化九年九月、角の芝居。[illegible]）、「けいせい筑紫䌫」（文化十一年一月、角の芝居）（別項）、「敵討浦朝霧」（文化十二年九月、中の芝居。殿舞の女盜賊と扇屋殺し）、「園雪戀組題」（文化十三年正月、中の芝居。讚留）、「油商人廓話」（同年七月、同座。芝翫の油）、「濃紅葉小倉色紙」（同年九月、同座。小倉騷動）、「遠江灘戀賊」（文政二年九月、京南側芝居。日本駄右衞門）等がある。なほ文政五年正月、中の芝居「けいせい染分總」（とん〳〵三吉）は、金澤龍玉（別項）事歌右衞門の作であるが、三幕目とん〳〵の場は、晴助の筆で好評を得た。但しこの作について、龍玉の横暴を憤つて刺し違へんとしたともいふ。その他に龍玉の名の下に彼の作にかゝるものは甚だ多い。濱松歌國とは特殊な交渉があつたかして、歌國の名は常に彼の下位に見える。作風は甚だ明快であつて、寧ろ七五三助に似てゐると許された。

【參考】作者店おろし三升屋二三治○言狂作書西澤一鳳○狂言作者考　〔守隨〕

泣尼（なきあま）　能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作（狂言不審紙）。【格式】一番習といつて、中習と大習との間の物になつて居り、又裝束、眞の形となると大習になつてゐる（和泉流）。「狂言不審紙」には「此狂言年若にて難レ勤云々」とある。【題材】「古今著聞集」の興言利口第二十五の說話が、粉本と認められる。

【梗概】或る田舍者が、親の三年忌に談義を乞はうと上京し、某寺の長老に布施の相談も調へて同道する事になる。長老は談義が下手で參詣人のないのを慮り、談義を聽いて泣いてくれる尼に、布施を山分けと定めて連れて行く。やがて在所に着いて談義を始めるが、尼は居眠りをしてゐて泣かない。一座の談義果てて長老はそこを辭し、尼の仕打を苦々しく思つてゐる所へ、尼が現はれる。長老は大喝一聲、憎い奴め、談義の折に泣けかしと思ふ時には泣かいで、今ほえたとて何の役に立たうぞと、喧嘩になつて尼を打倒す。尼は長老をやるまいぞ、やるまいぞと追ひ込む。

【構想】粉本たる「古今著聞集」の方では、說經の始まるか始まらぬに尼が泣き、後に導師の說計を發く落ちになるのが滑稽の中核である。處がこの作では、泣けかしと思ふ時に居眠りばかりしてゐて、談義が濟んでから泣いたので、長老が怒るといふ作意になつてゐる。又僧も尼も檀徒の布施に夢中であつた世相の

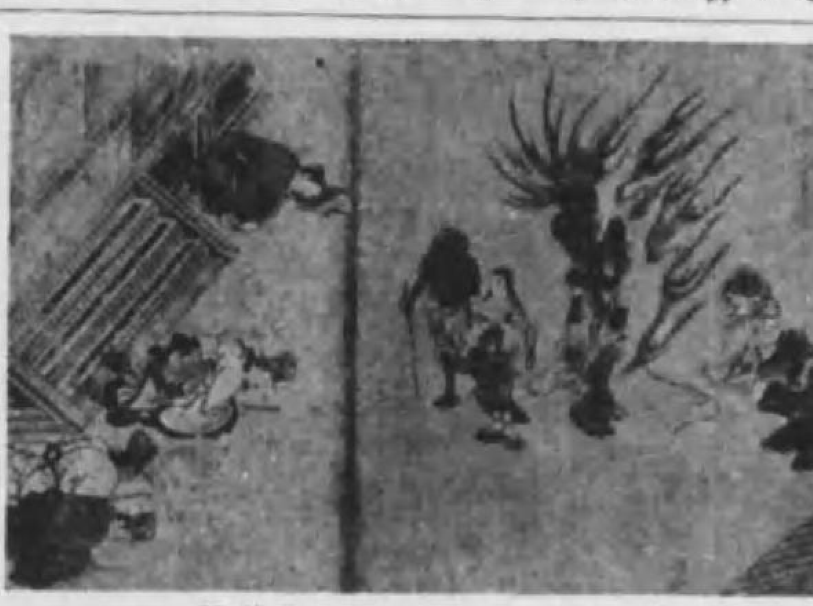
反映せられてゐるのも皮肉である。

長刀應答（なぎなたあしらひ）　能狂言【名稱】今「なぎなたあしらひ」と呼んでゐる。【流派】小習（和泉流）。

【梗概】或る家の主が參宮を思ひ立ち、冠者を呼び出して、今は庭の花も盛りであるから、留守の間に知音の方がお訪ねなさつたならば、長刀應答せよと言ひ付けて旅に出る。冠者は長刀應答の意を知らぬので、不用心だから長刀で誰彼の別なく追ひ返せとはいゝ思ひ付きだと言つて留守をしてゐる。其處へ入り代り知人が訪ねて來るのを、冠者は長刀で追ひ拂ふ。仕様もなくて知人達は冠者を抱きすくめて長刀を奪ひ取り、歸つて行くのを、冠者はそれを取られては、客人をあひしらふ物がないと言つて追ひ入る。

【解説】和泉流以外に、未だ所見はない。薙刀拾掃とか薙刀應答とかいつて、受けつ流しつする應答の謂ひを、一曲展開の種にした狂言である。「犬子集」十一にも、「闘ねとかひの人はあやにくゝと絶つゝとふを長刀あしらひに」と見え、「吾吟我集」にも、「或時はやりとめにしつ或時はつらき薙刀あひしらひかな」とあるから、古くからの俗言であらう。和泉流では、この狂言は所謂御斷狂言といつて、「御家始へ御斷申上相勤ザル」狂言になつてゐたものである。（藤田）

泣不動縁起（なきふどうえんぎ）　繪卷【解説】三井寺の證空が、その師智空の病重るや身を以てこれに代らんことを祈つたところ、證空が日頃信心する不動明王の畫像が證空の志に感じ、涙を流して遂に又證空の身代りとなつたといふ物語は、證空の傳記や「曾我物語」などにも見える著名な話であるが、これを繪卷としたものは「泣不動縁起」「不動利益縁起」又は「證空繪詞」といひ、京都清浄華院所藏の一卷や青地幾次郎氏所藏の一卷が世に知られてゐる。青地本には詞書あり、清浄華院本には全くこれを挿入しないが、圖様に至つては殆ど相近いものである。青地本は隆恩筆と傳へられてゐるが、畫致から見れば、南北朝頃の製作かと思はれる。清浄華院本は、青地本よりも更に少しく下る足利初期の製作であらう。「考古畫譜」には、隆恩筆と傳ふる一卷本以外に、光茂筆といふ二卷本を擧げてをり、清浄華院本に逸した詞書の一卷を添へて想像すれば、或はこれに相當するものでないかとも考へられるが詳かでない。而して主題は、三井の不動信仰に伴ふ物語で、「阿彌陀縁起」などと同じく、神佛が人間の身代りとなる筋合ひの如きは、時代的所産としても興味がある。（田中（一））



泣不動縁起（清浄華院藏）

投節（なげぶし）　歌謠【名義】雅樂の風俗等にも、投節の名稱があつたらしい。これは一句の終を投げて歌ふ事で、「紫の一本」にも、「投節と云ふ事往古にもなきに非ず。郢曲にも是あり。道灌院殿御歌に、思ふ事投節聲に歌ふなりめでたや松の下に群れゐて」と、「雪玉集」の歌を引いてゐるが如くである。これと同様に、江戸時代の流行歌にも、歌の終を「ヤン」と歌ひ捨てるものがあつたので、かく名付けたのである。風俗の「大鳥」の歌に、「大鳥の羽根にヤレナン」などとある歌ひ方の脈絡を引くものと解する説もある（日本歌謠史）。古く、これは梛節（なぎぶし）と云ふ名稱の變化したものと云ふ説があつた。梛節とは、狂言小歌の「ここ通る熊野道者の、手に持つたも梛の葉、笠にさいたも梛の葉云々」と云ふ歌のことで、「好色大鑑」の作者（「色道大鏡」の作者畠山箕山の事か）が、これを作り替へて、「逢ひた見たさは飛び立つばかり籠の鳥かや怨めしや」と云ふ歌を作つた。これが近代投節の祖であると云ふ説があるが、これは信じられない（「野郎友三味線」「糞笠園談」所引「男女色競馬」）。「好色伊勢物語」には、「梛を投げて唄ふ故此名あるか、一説に梛節、伊豆のお山の梛の葉と唄ひ出してよりの名といへり」とあり、これは「今度ござらばもて來てたもれ伊豆のお山の梛の葉を」と云ふ歌をもつて、この名稱の起原としたのであるが、恐らく、この説の如くで、これより投節の一名を梛節と云ふ名稱も生じたのであらう。狂言小歌に梛節があり、それより投節が出たのではあるまい。また考へるに、投節はすべて宴席などで、酔興に乗じて投げやりに、出たら目に歌を歌ふこと、江戸時代では、嫖客などが、ぞめき歩いたりする時に、投げやりによい加減に歌ふ意であるとも解せられる。前述の「雪玉集」の「投節聲」も、この意に解した方が妥當であり、江戸時代には、投節と云ふ説は、種々なる形式の各種の歌謠に用ひられてゐて、必ずしも特定の、或る一種の流行唄にのみ使用せられてゐるのではない。要するに投節とは、遊里歌謠の一般名稱であると思はれる。そゝり節・そゝり歌・ぞめき節・ぞめき歌・かすり歌・地絡り節などと云ふのと、同じ意味で使用せられた語であらう。「歌曲考」「嬉遊笑覽」等に、隆達小歌のことを投節と云つてゐるのも、隆達小歌が節の終りを投げ捨てる歌ひ方をしたからであるとも解釋せられるが、寧ろ右の流行歌謠に對する一般名稱から來てゐるものと解すべきであらう。

【沿革】明暦・萬治頃に、京島原柏屋又十郎の抱への女郎河内が、歌ひ始めたものである（一日千軒）。「好色二代男」にも、京島原の事を叙して、「はや隣にはひいて投節河内と聞えた」と記してゐる。「松の葉」に「大阪屋河内風」とあるのは誤であらう。これは江戸弄齋（弄齋節）を變化して、歌ひ出したもので、さらりとした小意氣な歌であつたから、大に世に行はれて、流行歌謠の代表的なものとなり、投節の名稱をも獨占したのである。古くは京島原の投節、江戸吉原の繼節、大阪新町の籬節を三名物と稱した（「傾城色三味線」序、「新町細見澪標」「一日千軒」）。三都で盛んに歌はれたが、元祿を經て、寶永・正徳に至り、衰へを見せた。

享保十五年刊「史林残花」の「投節曲」の項に、「異國山吹之後不ㇾ得ㇾ其人（中略）其枝既泯矣」とあつて、江戸吉原では、異國や山吹の如き遊女が、その名人であつたらしいが、享保頃には既に亡んでゐた。京都では、正徳頃に三文字屋左衛門方のよし松が名人で名聲あり、その後、山本屋つや方の小倉と云ふ女郎が上手で、寛保頃まで存在し、後、長くこの歌が存續したと云ふ（一日千軒）。「日本民謠大全」「俚謠集拾遺」の京都市のところに、投節として、「渡り比べて世の中見れば阿波の鳴戸に波もなし」の如き、「松の葉」所載の投節と同様の歌詞を載せてゐるのは、今日も古昔の投節が繼承せられてゐるのであらう。「熊野民謠集」に「熊野投節」と題して、「きくのきかぬのきいたのきくの、ばかなからしぢやあるまいし」の如き歌を掲げてゐるのも、古代の投節に關係があるであらうか。

【曲節】詞形は三四・四三・三四・五の近世調で、この形式は、投節に至つて最も完成せられたものとなつたのであるが、その實際の歌ひ方は、次の如くであつた。

逢ひた見たさは（上ふし）飛び立つ（中持）ナアばかゝ（下）（この間三味線合の手入）
籠の鳥か（はるふし）、ヤアナ籠めしやン（この間合の手入）
籠の鳥か（持）、やなア籠の（この間に合の手入）
籠の鳥か（はるふし）、ヤナアうら（上）、めしやン（合の手入）

合の手の三味線の譜は「大幣」に詳しく記されてゐる。三味線は、本調子であるが、後には二上りの調子も出來、これは本調子と連彈きをするとよいと云ふ。節廻しは、人によつて差違あり、古今の變遷が甚だしかつた。河内風の歌ひ方は、「上下の句さらりと、三味線あひしらひも短く、歌のとまりやんと歌ひしなり」であつたが、「今様は節のたけ緩やかに、鳴物相の手拍數も少く、歌の止りは節にて言ひ棄て、ゆう〳〵と聞え侍る」、また「音聲しめやかに調子は低き方よし」、又「近頃歌の下の句、三字目の節を下げて歌ふ事、伊達にてよろし。此歌の曲節、急ならず序破に止まりて靜かなる方なり。よりて上の句次の七文字の初二句、又は返しの初二字を寄せて歌ふべし。唱歌に映ありて面白き事なり」と云ふ（以上「松の葉」に據る）。【歌謠書】「淋敷座之慰」（投節四十三首）、「大幣」（當世投節七首）、「當世小歌揃」（新投節十六首）、「新投節」（刊本、六十七首）、「松の葉」（投節百首）、「新町當世投節」（刊本、四十八首）。諸書にて重出再出あり。以上の外、「歌曲手集糸投節 河内」と題する一冊の書も刊行せられたらしい（明和九年刊「大増書籍目録」）。

【備考】江戸では、享保頃に投節は絶えたらしいが、その後にも、遊里では一種の投節が存してゐた。

參考投節、馴れし寢の起き臥しや、夜ごとに變る枕の數も、積る思ひの變き酌（享和二年刊。但馬屋板）
投節歌、馴れし寢の變きふしや、夜ごとに變る枕の寢も、神ふは君に逢ふ夜半の、床に積りし寢め言（享和二年刊。新吉原細見）

などと見えるのがそれである。併しこれも、もとは京都の投節から導かれたものかも知れない。一中節の古曲「夕霞淺間嶽」の「馴れし廓も今日ばかり」のところが、投節の節附であるから、これより出たものかとも思はれる。この投節のことを、後に大津投節（略して大津ナゲ）とも云つて、近江大津の遊廓で行はれた流行唄に基いてゐると云ふ。この節附を用ひた現存曲は、河東節の助六物の「しんぞ命」、長唄「吉原雀」の「馴れし廓」、常磐津節「關の扉」の「ゆくも歸るも」、「古山姥」の「馴れし廓」、「戻り駕」の「又古へに」、宮薗節「其俤淺間嶽」の「風に柳の」、「玉菊」の「夕べ〳〵の」、清元節「北州」の「松の位」の條などに用ひられる。又これと別種の節附の投節があり、これより可なり遅れて發生した純粋の江戸風の曲節である。新内節「尾上伊太八」の「俺等は今から」、「道中膝栗毛赤坂の段」の「此の彌次さん」、常磐津節「釣狐」の「昨日北風」、常磐津長唄掛合の「角兵衛獅子」の「親兄弟に」、清元節「權八」の「逢ひた見たさに」、「吉原雀」の「深山の奥の」の條などに用ひられ、前者の優雅なのに比べて、傳法な歌ひ方である。これによつても、投節が特定の歌の名稱ではなく、時代的變遷に從ふ流行歌謠の一般的な名稱であつたことが分る。

【參考】嬉遊笑覽○日本歌謠史 高野辰之○近代歌謠集 藤田德太郎○江戸時代音樂通解 町田博三○校註松の葉解説 藤田德太郎　（藤田）

名古屋音頭（なごやおんど）　踊【名稱】尾張名古屋で行はれた音頭歌。【解説】寛永頃、京の葛山音頭の流を汲むと思はれる一流が、名古屋に入り、一種の踊音頭を生じた。寛永七年刊の「踊入今様くどき」と題する書がそれで、作者は京島八郎兵衛とあり、名古屋駿河町下、萬屋清左衛門の刊行である。十五篇の歌を集めた土地の風俗が詠み込まれてあり、中には順の子節と云ふ滑稽な掛合歌もある。これも盆踊として行はれたのであらう。歌ひ手と三味線彈と踊子の様を描いた口繪がある。

【參考】紙魚（第十四册）○日本歌謠史 高野辰之○日本歌謠集成卷七○近代歌謠集 藤田德太郎○甘露堂文庫稀覯本改覽 尾崎久彌　（藤田）

生さぬ仲（なさぬなか）　小説　四册【作者】柳川春葉【發表】大正元年八月から二年四月まで大阪毎日新聞。【刊行】大正二年七月、春陽堂。明治大正文學全集（柳川春葉篇）所收。

【梗概】一人の子供をめぐる生みの母と、生さぬ仲なる繼母との愛の葛藤を描いたもの。東洋漁業會社の社長渥美俊策は、根がお坊ちやん育ちのため、一旦衰へかゝつた社運を如何ともする事が出來なかつた上、妻眞沙子の父親赤澤充輔（俊策は叔の後援によつて社長の椅子を贏ち得てゐた）が社のために謀つた策が却つて會社を一層行詰らせて了ふ。俊策は自暴自棄に陷り、酒色に身を濡らしてゐる時、突然先妻諸岡珠江が出現した。彼女は新橋の藝者であつたのを俊策に落籍され、滋といふ子まで生んだに拘らず、家出して外人の妻となり、海外に去つたのだが、今莫大な遺産を手に入れて歸朝したのである。そして實子滋を自分の手に渡すなら渥美家を窮境から救つてやると言つた。慾に眼のくらんだ俊策の母は、獨斷で眞沙子を離縁して了つた。彼女は實家へ歸らずに夫の友人日下部の所へ一時身を寄せた。その後、滋は無理矢理に珠江の所へ連れて行かれたが、却つて彼は生さぬ仲の眞沙子を慕つて何うしても珠江には馴れつかぬ。一方眞沙子は世間の誤解を恐れて一旦實家へ歸つたが、元赤澤家の下女であつたお多の家に移り、仕立物などでさゝやかな暮しを立てゝゐると、お多の母親が頻りと再婚を勸めるので、堪りかねてその家を飛び出す。そして或る神社の境内で、實母の家を出て彼女の跡を追つてゐた滋の姿をチラリと見て追掛けようとすると、通行の巡査に淫賣婦と疑はれて留置される。釋放された後も彼女は當もなく街を彷徨つてゐるうちに、或る日清島町の休憩場で行倒れとなり、夕刊賣の男の子に助けられたが、思ひ

懸けなくもそれは微であつた。其處で二人は世を儚んで親子心中をしようとすると、偶然にも日下部の手によつて助けられた。珠江は飽くまでも微に對する愛着から、いろ〳〵と術策を弄するが、遂に育ての親の愛に打勝ち難いのを知つて淋しく旅に出る。折柄放監されてゐた俊策も罪を解かれて歸り、眞沙子も元の枝へ歸つて、再び淵爽の家には平和な春が回つて來る。

【解說】場面の變化を企んで、讀者の興味をそそるため、あまりに偶然が多い。二つの違つた母性愛を描いた點に同感が持たれるが、結局、勸善懲惡主義で一切を解決してゐるために、彫りの淺い憾みがある。併し少年微の哀れ深き描寫には、流石にこの作者の識味ある筆ならではと思はせる。本篇が大每・東日の兩新聞に連載さるゝや熱狂的な歡迎を呼び、ために同紙は少からず部數を增すに至つたので、彼を同新聞社の專屬作家として優遇するに至つた。〔以上高須〕

【上演】(一)大正二年二月、大阪浪花座。俳優は、秋月桂太郎・村田正雄・井上正夫・嵐德三郎・片岡我童等の新舊大合同と銘打つた一座で、五十餘日間打通しの大當りだつた。同時に、關西到る處にこの作が流行した。(二)東京では、同年十月、新富座で市川猿之助・市川壽美藏・市川松蔦・市川左升・中村又五郎・坂東秀調等の手でこれを上演した。(三)大正六年二月、歌舞伎座で新派が眞山青果の新脚色でこれを上演した。役割は、前に新富座で松蔦の眞沙子を喜多村綠郎、秀調の珠江を河合武雄、又五郎の日下部正也を東辰夫、左升の巻野大造を松本要次郎、荒次郎の赤澤を後藤良介、壽美藏の淵美俊策を伊井蓉峰がした。從來のものに比べて全くその面目を改めた新脚色の、とりわけ二幕目の珠江の新邸と四幕目の澁谷村附近大竹藪とは全然脚色者の創作によつて出來たもので、自然この二幕が評判になつた。後に、河合武雄がこの二幕目だけを獨立させ、「乳に飼はるゝ獸」と名づけて得意の演しものとした。〔以上久保田〕

梨壺の五人（なしつぼのごにん）

歌人　【名義】梨壺は宮中昭陽舍をいふ。五人は「後撰集」の撰者大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城をいふ。【由來】天暦五年撰和歌所を梨壺に置き、藏人左近少將伊尹を別當とし、右の五人を寄人として、「萬葉集」を訓釋せしめ、合せて「後撰集」を撰せしめられた(後撰集參照)。これに依つて、後世この五人を梨壺の五人といふ。「後拾遺集」の序には、「梨壺のいつゝの人」とあり、「色葉和歌集」には「此等の人々は梨壺の五人なり」とあり、「二中歴」には「梨壺歌人五人」とある。「八雲御抄」には、「梨壺の五人めでたしと雖もかの古今の四人の撰者には及ぶべからず」と記させ給うてゐる。

【參考】國文學全史平安朝篇(藤岡作太郎)〇國文學研究史(野村八良)〔西下〕

梨本集（なしもとしふ）

歌論書　五卷　【著者】戸田茂睡　【成立・刊行】元祿十一年五月成る。同十三年刊。【讀本】續々群書類從第十五所收。【內容】序文の冒頭に「歌は大和こと葉なれば、人のいふといふ程の詞を、歌によまずといふことなし」とあるが、これは寬文五年、この著者のかいた宣言書の文句を髣髴せしむるものであるが、かの宣言書に於て、制詞禁詞を打破して、「萬葉集」「三代集」によんだ詞は遠慮なくよむべきであると說いたのを、ここには一々實例をあげて、つぶさに制詞・禁詞のいはれなきことを論證してゐる。序文の中には、「萬葉」には俗語多く、就中長歌には平懷な詞が多いが、「古今」の頃から、こは〳〵しくききぐるしい詞はよまなくなつて、詞の善惡を生じ、私の好惡から、僻言多くなり、末々には先達の僻言を道の格式とし、益々僻言をいふに至り、「歌の詞に制といふ事を書出し、五てんの詞、主ある詞、よむまじき詞、遠慮すべき詞、俊成の好みよむべからずと宣ひし詞、定家卿の不詮義」と宣ひし詞、いとしからずといふ詞」などいひ、言葉に詞をすゑて人の赴き易きやうに道を狹くするに至つたが、これは以ての外の邪道で歌の零落の端である。二條家(別項)の僻說をやぶり、歌の正道にかへさねばならぬといふ意味をのべてゐる。本論は、「初五文字におくべからずといふ詞」「終りにいふまじきといふ詞」「遠慮すべきといふ詞」「ぬしある詞といふ事」「よむまじきといふ詞」の五項に分ち、制詞・禁詞をした言葉の例を一々あげ、その他に用ひられた實例をあげたりして、その不可を駁してゐる。【價値】二條家歌學の僻說は、自由研究の精神によつて破碎さるべき必然の運命であつたとはいへ、その先鞭をつけた功勞者として、木瀨三之・下河邊長流・僧契沖(各別項)及びこの著者の如きは、忘るべからざる人々である。就中この著者が、この書に於て大膽に、明快に、二條家歌學の制詞・禁詞の不合理を、確實な基礎の上に立ち、豐富な例證を以て論證し、用語の自由を主張したのは、實質的に最も注目すべき業績である。在滿の「國歌八論」(別項)(そこには建設的方面が多分に見られる)に於ける中世歌學の攻擊と共に、最も注意さるべきである。而もこの書が當時文化の盛んであつた京阪の地に生れずして、江戸で現はれた爲めもあつて、歌界の影響も、さして大きくなかつた。併し中世歌學を破壞する最も有力な議論をはやく示した人で、近世歌學の爛漫たる盛花期を導いた人ともいふべく、同じ著者の「百人一首雜談」「僻言調」等と共に、この書は近世歌論の初期のものとしては最も注目すべきである。

【參考】戸田茂睡論(佐佐木信綱)〔鹽川〕

奈須與一（なすのよいち）

能狂言　【格式】小習(和泉流)。【題材】流布本「平家物語」卷十一の那須與一の事をそのまゝ採つたもので、狂言的脚色を以てしたものではない。【梗概】源平屋島合戰の折、判官義經の軍勢は陸に構へてゐる處に、沖から小船が非常に飾つてこちらへ漕いで來て止まる。見ると傾城が一人立つて扇を船の背檣に立ててゐる。判官は後藤兵衞實基の獻言によつて、那須の與一を射手に選ぶ。與一は一應は辭退したが遂に神明に祈つてこの大任を全うし、あつぱれ敵味方の喝采を博する。判官大滿足の態で、「いとほしの與一や、よう射させた。けなもの、こちへ來て餠を食うで、酒を食へとの御諚あつたとぞ申しける」と落す。

【解說】これは語と稱するもので、判官には判官の位、與一には與一の格で、仕形がある。那須の語は、狂言と同樣獨立して行はれるが、この類に「鱸庖丁」や「朝比奈」の語がある。能の「八島」(別項)の中入に使はれることもある。歌舞伎所作事の「素襖落」に取り込まれてゐる。(素襖落參照)〔野村〕

那須與一（なすのよいち）

幸若舞曲　(三十六番の一)　一卷　【成立】室町期　【諸本】古板本は寬永十二年板(十行本)。上田萬年校訂「舞の本」、同再刻名著文庫本「舞の本」(富山房)。新群書類從第八舞曲部に收めてある。又節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【內容】平曲物。屋島扇の的の武勇譚。〔島津〕

何故話（なぜばなし）

【民】Why so Stories

【解說】民譚の最も古風なる形態の一つ。「書紀」卷二の「此世人所謂反矢可畏之緣也」といふが如き例の、上古の記錄にも多かつたのを見ると、多分は既に神話の時代に始まつてゐたのである。日本には餘りその數が澤山にはないやうに言はれたのは、單に蒐集がまだ盛んでなかつた爲めかと思はれる。分布の最も弘い現在の例としては「猿蟹の尻はなぜ赤い」があり、或は又蚤と虱の由來などがある。いはれと呼ぶのが適當かも知れぬが、どこの國でも今では「なぜ話」と謂つてゐるから、將來はこの語を採用するのが便利であらう。起原が古いだけに民族の特徴がよく現はれてゐるが、一旦神話の領域から出てしまふと、寧ろ「大話」(別項)などの影響を受けて、到底有り得べからざる事實を說く點に、話術の技巧を求めようとし、從つて夙く童話に化し易かつたのである。その中で、特に今後の採集者に注意せられてもよいのは、小鳥の世界を說いて見ようとした一群の由來談である。雀・燕・鶺鴒・啄木鳥・百舌・時鳥、それから鶏・梟などもこの仲間に加はつてゐるのみならず、なほ今日餘り眼にふれぬ鳥類までが、皆それ〳〵の昔話を持つてゐる。アイヌの部落にも鳥の話は非常に多く、一部分は我々のもつものと似てゐることは、前に吉田巖氏が細かな報告(鄕土研究一ノ六七二頁以下)を出してゐるが、日本には又一つの重要なる特色が見出される。例へば雀は親孝行で、御齒黑を附けかけて親の臨終の床へ飛んで行つた故に、今でも頰は汚れてゐるが穀類を容易く得られる。燕は黑繻子の帶をさがしてゐたから、啄木鳥は伊達の衣裳を着かへてゐて、親の死目におくれた故に、今でもその網に食物を見つけるのに辛苦するといふやうに、教訓を含み且つ多くは死といふ事を聯想させ、話は必ずしも常に滑稽談ではない。時鳥は殊にこの話に富んだ鳥であるが、近代最もよくいふ弟殺し、夫戀しと啼くといふ話から、古くは死出の田長や杏手鳥小鍋燒きの話に至るまで、悉く前生の因緣を語り、また亡靈の長く昔の悲歎を記憶してゐることを叙べるのである。これは「なぜ話」の童幼のために、發明されたものでない確かな證據と言つてよいのみならず、同時に又鳥が空の世界の使であり、その言葉が靈の神秘であつた時代の遺產と認むべきものかも知れないのである。東北六縣の處々の田舍には今でも盲の巫女が一定の祭の日のみに、特に美しい韻律の語を以て、小鳥の話をする地方がある。即ちこれが神話として行はれてゐた痕跡は、我が國に於てはまだ相應に顯著だと言ふべきである。〔柳田(國)〕

謎帶一寸德兵衞（なぞのおびちよつとくべゑ）

脚本　三幕七場　世話物　【作者】四代鶴屋南北　【通稱】「大島團七」【別名題】「恨鮫帳復讐奇談」【名稱】際物を脚色するため、「夏祭浪花鑑」の世界を借りたので、一寸德兵衞を持ち出して名題を洒落れたもの。【興行】文化八年七月十八日初日、江戸市村座上演。

【役割】浪人大島團七(五代松本幸四郎)、團七女房お梶・德兵衞女房お辰(五代岩井半四郎)、釣舟の三吉實は道具屋德七(七代市川團十郎)、三河屋義平次實は足輕八內(嵐村四郎五郎)、奥女中琴浦(市川團之助)、大島佐賀右衞門(大谷門藏)、國元お磯(三枡浪江)、玉島若黨磯市(荻井才三郎)、玉島兵太夫(淺尾與次兵衞)、團七娘お市(岩井松之助)、番頭傳八(嵐新平)、義平次女房お虎(市川宗三郎)、傾城お磯(岩井粂三郎)、大和屋德兵衞(三代坂東三津五郎)。

【讀本】大南北全集第四卷所收。【題材】當時飯田橋にあつた敵輾のために死んだ事件と、入谷田圃の女殺し一件とを夏祭の世界に盛り込む。【梗概】(序幕)(道具屋裏手)釣舟の三吉は、勘當された親の家から、茶器を盗み出す。(向兩國茶見世)大島佐賀右衞門は藝者お磯に迷つて浪人とまでなり下つたが、お磯に逢つて恨みを云つてゐると、三河屋義平次に金を催促される。玉島兵太夫がそれを救ふが、佐賀右衞門は大島團七に計られて却つて兵太夫を恨む。團七は番頭傳八と計つて三吉から浮牡丹の香爐を捲きあげる。(本所石原)佐賀右衞門は兵太夫に斬りかけたが、團七が駈けつけて兩人とも斬り倒し、兵太夫が所持の千壽院の刀を盗む。娘お梶は叔母琴浦、若黨彌市、腰元お鶴と共に通りかゝり、父の橫死を嘆く所へ團七出て、言葉巧みに勸めるので、遂に仇討助太刀の約束で、お梶はお市といふ子まである團七の妻になる。團七は藝者お辰を德兵衞に取られたので、お辰と瓜二つのお梶をかうして手に入れたのである。〔二幕〕(入谷團七住居)團七は病氣になつたお梶を苛酷に扱ふが、お梶は夫を父の仇と知らぬので辛抱してゐる。彌市・お鶴が、お梶を見舞ふ。三吉は香爐について團七に掛合ひに來るが、團七は義平次と共謀して追ひ返し、その上金の抵當に、お梶を義平次に貰らうとするが諾かぬので、鐘司で折檻すると、お梶の顏に疵がつく。義平次は代りに娘のお市を連れて行く。(入谷田圃)お梶は義理ある仲とて追つて行く。お梶は駕籠を追つて來たが、團七が駈けつけて支へ、お市をやつた跡で遂に自分が兵太夫を殺した事實を吐いてお梶を殺し、强請りかける合揃りの傳八をも井戸へ突き落す。大和屋德兵衞と女房お辰が來かゝる。〔大詰〕(深川大和屋)お辰は三吉とお磯の仲を取持つ。團七は友達の喧嘩から入り込んで、お辰を中に德兵衞との取引になり、お辰の父義平次も來て、三吉へお梶殺しの罪を塗りつけんとするが、順禮のお虎婆の口から義平次は元兵太夫の若黨で、子供の折お辰を誘拐したことが露顯し、お辰はお梶の妹と判明する。お梶の靈はお市に乘り移つて團七の惡事を告げる。(仲町裏手)德兵衞・お辰は團七を討つて父姉の仇を報じる。

【脚色】短い世話物だけに複雜の弊に陷らず、三吉の件がやゝ不用と思はれる以外は、首尾一貫して上乘の脚色振りである。殊に二幕目の段取りや、お梶・お辰を早替りに演ぜしむる手際などは、南北の長所を發揮してゐる。全體の構想と二幕目の鮫帳の技巧、御家人生活の描寫などは、後の同人作「東海道四谷怪談」(別項)の原據となつた。【價値】惡のエッセンスともいふべき大島團七の性格描寫の巧みさは稀譜の價値がある。傑作の割に上演度數の少かつたのは、初演が俳優病氣の關係から不入りだつたのと、「東海道四谷怪談」に株を奪はれた爲めである。大正十一年九月明治座に復活されて好評を得た。〔渥美〕

納蘇利 なそり　雅樂舞曲【名稱】納蘇利の字義不明(大槻如電は地名ならんと謂つてゐる)。また「なつそり」ともいひ、双龍舞・落蹲(一人舞の時の名。二人舞ならば、決して落蹲といはない)等の異稱がある。【性質】高麗樂。新樂、小曲。高麗壹越調曲に屬す。舞があり普通二人で舞ふ(屡々一人で舞ふこともある)。舞人は胡服を着し、帽をかぶり、動物に似たる假面をつけ、手に桴を持つて舞ふ。假面は金青色のものを常に用ひ、綠青色のものは一人舞に用ふと「體源鈔」に記してある。この舞を双龍舞と呼び、これを双龍の舞であるとなすが、その假面から見ると、獸類に屬するやうに見える。番舞は「陵王」を用ひる。【沿革】起原・傳來共に不明。或は「陵王」(龍王)と結び附いて、林邑樂(別項)として傳はつたものを、後に右方樂に改作したものではないかと思はれる。平安朝に至つては、競馬節會などに用ひられた。（田邊）

納蘇利（面）

名垂 なたり　和學者【姓名】澤田氏。通稱は友治、後、新右衛門。名は成啼・春【號】五家園・木陰の舍・和氣茫舍・花園【生歿】安永四年奥州會津に生れ、弘化二年(二五〇五)四月歿す。享年七十一【閲歴】奥州會津藩の世臣で、幼より學を好み、和歌を嗜んで、同藩の和學師範安部井武氏に從つて二條風の歌を學び、後上京し、芝山大納言持豐の門に入つて更にその奥義を極めた。常に藩主に近侍して歌を詠んだが、藩命に依つて「日新館童子訓」「新編會津風土記」の編纂に與り、又和學師範の命を受けて學政の順序を逕述して上進したこともあつた。中にも故實の學に精しきを以て知られた。【著書】家屋雜考(別項)〇和歌體六種辨〇古學考〇鈴歌雜談〇五家園雜記〇無名歌集等。多く明治の兵燹に燬けて傳はらないといふ。（石村）

夏神樂 なつかぐら　舞踊【名稱】夏に行ふ神樂の義。【解説】神樂は元來冬の夜、火を焚いて演ずるのが習ひであるが(御火焚參照)、夏、川の瀬に榊四本を立てて柱とし、篠竹を欄として供物を供へ、これを河社と呼び、こゝで神樂を演ずるのが夏神樂である。みそぎの意味であらうか。火は焚かぬが法である。なほ四月の内侍所の神樂は、この夏神樂の作法に依ることになつてゐた。(神樂參照)（小寺）

夏草 なつくさ　詩集【著者】島崎藤村【刊行】明治三十一年十二月、春陽堂。【内容】全十四篇二十八章。「晩春の別離」を佳篇とする。處女作以上の優れた詩境の展開がない。ただ農人を詠つたことが素材の上での一變化であり、現實詩材の傾向と見られる。但し作そのものは佳作とは稱されぬ。藤村の第三詩集である。（日夏）

夏小袖 なつこそで　小説【作者】尾崎紅葉【發表】明治二十四年十二月、讀賣新聞に連載。【刊行】同二十五年八月、春陽堂。紅葉全集第二卷所收。【梗概】灰吹屋五郎右衛門は、名代の吝ん坊で溜め込み一方の頑固老爺である。麥飯を食はせてゐる癖に、人使ひが荒く、大根葉さへ土藏の中に干して鍵をかけて不寢番をする。年頃になつた息子傳之助と娘おそめは、一方が近所の娘お八重と出來てゐるし、一方は手代の和七といゝ仲になつてゐるが、親爺が慾の塊りの分らずやなので、とても夫婦になれまいから、いつそ二組一緒に驅落して、諸同士の長屋暮しでもしようかと相談する。そこへ降つて湧いたやうに老爺が後妻を迎へることになり、見合ひに來た當の相手といふのは、何にも知らずに母に強ひられたお八重だつた。その上おそめにも緣談があつて、千圓の支度金に惚れこんだ五郎右衛門は、成り上り者の五十男へ是非嫁に行けと云ふ。兄妹とも一時に身の上の一大事に直面した。折角息子は、あることないことお八重の惡口を云つて破談にさせようとするが、親爺が承知しないので、すつかり途方に暮れてゐると、番頭の佐助が計らずも活路を開いてくれた。それは五郎右衛門が誰にも知られぬやう桐の木の下に、三千圓の大金を瓶に入れて隱してゐることを發見したのだつた。息子と番頭は首尾よくこれを手に入れたが、五郎右衛門は金の紛失を知つて地團駄を踏んで失望落膽して泣き出す。物蔭から息子が出て來て、自分の働きで金を見つけて上げるからお八重を自分の嫁にし、またおそめと和七を添はせてくれるかと訊くと、「金さへ出るなら」とすべての交換條件を承諾し、誓約書さへ書く。やがて番頭佐助の手で金貨が運ばれ山のやうに積まれるので、五郎右衛門は狂喜する。傳之助もおそめも和七も番頭も、銘々の喜びで、目出たい目出たいと喚ぐのに釣りこまれ、五郎右衛門も金貨の上に腹這ひになつて、白髪頭を振り立てながら「目出たい目出たい」。【批評】この作は、モリエールの名作たる「守錢奴」(L'avare)を飜案したものである。題材や境遇が未だ十分に日本的にこなれてゐない憾みがあると共に、題名をも「夏小袖」の俚諺から取つたのにも知られるごとく、單に滑稽洒脱の趣を主にして原作の鋭い諷刺の一面は失はれてゐる。併しそれだけに廣く愛讀されると共に、ひと頃の舞臺に好適の臺本となり得て、初演後十年間にも亙つて新派の出し物となり、その輕妙な會話が常に喝采を博して來た。（以上水木）

【上演】明治三十年十月、東京眞砂座で「滑稽演劇、いろ〳〵」と名づけて上演。この時、落語家の眞似をするものとして寧ろ評判は惡かつたが、伊井一座の重要な演目の一つになつたのは、小島(後の兒島文衛)のお染が傑作であつたからであつた。三十六年一月、近松の「壽門松」と鷗外の「玉篋兩浦嶼」とをもつて、眞砂座から市村座へ、この一座の晴の進出をした時でも、大切にこの作を上演した。そしてその結果は、三木竹二をして「先づ新演劇始まつて以來の俳優の作物として、お染などは、最上に位するものであらうと信ずる」といはしめ、後にまた、尾崎紅葉をして「高田の荒尾譲介の出來は、これをかの夏小袖の小島のお染と兩々相對して、新演劇の双璧と謂つても可ならんか」とさへいはしめた。その後に至つても、種々な劇團で、屢々この作は上演される機會をもつた。が、大正五年四月、本郷座で、久々にて伊井一座が木村操のお染でこれを出して以來、最近では、全くその上演を絶つた。（以上久保田）

夏木立 なつこだち　小説集【著者】山田美妙【刊行】明治二十一年八月、金港堂。【内容】第一篇と第二篇とあるが、普通はただその有名な第一篇のみを指していふ。第一「籠の俘囚」、第二「玉屋の鏖」、第三「花の茨、茨の花」、第四「柿山伏」、第五「仇を恩」、第六「武藏野」(別項)、以上の短篇六種を收めてある。この六篇のうち、第一と第二とは未發表の作と思はれるが、第三から第六までは何れも舊稿で、第三は「我樂多文庫」第十五・十六號(明治二十年十二月、二十一年二月)に、第四は同文庫第九號以下(明治十九年十一月より、原題「明治小說天狗」)に、第五は「以良都女」第七號(明治二十一年一月)に、第六は讀賣新聞(明治二十年十一月)に發表されたものである。美妙の小説「風琴調一節」(明治二十年七月)の序詞によると、第二の「玉屋の鏖」は原題を「黄金剛石」といつたものらしく思はれ、隨つて制作年代も明治二十年七月より以前と推される。文體は六篇とも言文一致「だ」「した」「居た」「あつた」の調。第一「籠の俘囚」は、沙翁の「レイプ・オヴ・リュクレシア」の燒き直しめくもの。羅馬の顯貴族アッピアスは、平民バアジニアスの娘バアジニアを見染め、父が戰場に出てゐる留守中に、役人のクロウヂアスを買收して、バアジニアを役所の一室に拘禁して思ひを遂げる。父はこの報に急いで救ひに來るが既に遲い。娘は恨みを呑んで父の手で死ぬ。第二「玉屋の鏖」は、或る玉屋の店で、黄金剛石が陳物の瑠璃を相手に氣焔をあげて、陳物を罵倒し板張硝子に嗜められるといふ諷刺的對話。第三「花の茨、茨の花」は、獨逸物の飜案と斷つてゐる。或る牧羊少年が笛の音が仲介となつて、牧場の傍のお城に閉ぢ籠められてゐる若君と遊び仲間になる。この若君はさる遠い國の王子で、臣下の惡漢のため國を横領されてゐる。少年はお城の贅澤な部屋で喜んで何日か過したが、やがて父母が戀しくなり、そこを逃げ出さうとする。或る夜若君に暇乞に行くともう死んでゐた。少年は無事父母の許に歸つたが、二度とお城の華美な生活を羨まなかつた。第四「柿山伏」は、函根の湯治場でデモ小説家那須窟外の駄法螺を眞に受けた僞大臣野馬勇は、窟外に政治小説の代作を賴む。窟外はそれを得意で引受けたが、出來て出版したところ、散々の不評で、窟外も野馬も大恥をかく。第五「仇を恩」は、仇を仇で返さず恩で返したら又恩で返されたといふ小話。第六「武藏野」(別項)。【批評】美妙の名は前年「武藏野」(別項)の一篇によつて少數の具眼者には驚異となつたが、更にこの「夏木立」が出て一躍文壇の花形となつた。明治文學では、古典的作品の一つである。だが「夏木立」の好評も實は「武藏野」の一篇によるので、他の五篇は小説としていふに足りない。「籠の俘囚」は骨を折つてゐる割合に、作爲の痕が露骨に見え、バアジニアの言動もいかにも芝居じみてゐる。「玉屋の鏖」と「仇を恩」は暫く措く。「柿山伏」は一種の駄洒說で取るに足らぬ。「花の茨、茨の花」は可憐な散文詩めいた物語で、やゝ讀むに足るが飜案である。描寫手法と文章とは、當時として兎に角清新と認めてよい。浮調子で甚しく西洋臭いのと、造語・比喩に幾多の非難があるのは蔽はれぬ。【附記】「夏木立」第二編は明治二十三年四月刊行され、依田學海の「龍大門」、春亭花友の「あやしき赤繩」、櫻(何人なるか未詳)の「哀々」が收められてゐる。（柳田(泉)）

夏木立（表紙）

夏祭浪花鑑 なつまつりなにはかがみ　淨瑠璃　九段世話物【作者】並木千柳・三好松洛・竹田小出雲【名稱】角書に、「團七九郎兵衛・釣船三婦・一寸德兵衛」とある。脚色中に高津宮祭を入れたので、夏祭と据ゑ、夏祭を難波の名物とする心と、内容の男俠を又その心として續けた語である。【興行】延享二年七月十六日初日、竹本座上演。非常な當り作で、年の暮まで續いた。直ちに歌舞伎芝居に入り、八月には京都の都萬太夫座に、翌年にかけて大阪の三座に上演され、甚だ評判をあげた。【太夫】(序)竹本此太夫・同百合太夫・同柏太夫・同美太夫、(二段目)竹本紋太夫、(三段目)竹本錦太夫、(四段目)竹本政太夫、(五段目)竹本紋太夫・同柏太夫、(道行)竹本百合太夫、(六段目)竹本紋太夫・同錦太夫、(七段目)竹本政太夫・同島太夫、(八段目)竹本此太夫、(九段目)竹本島太夫・同柏太夫。【人形】團七九郎兵衛・お辰(吉田文三郎)、釣船三婦(桐竹勘十郎、竹川七郎次とも)、一寸德兵衛(吉田才治)、義平次(桐竹門三郎)、大島佐賀右衛門(吉田彦三郎)等。【正本】十行六十一丁本・七行百一丁本。淨瑠璃名作集下(名著全集)所收。【題材】魚屋團七の親殺しの件は、元祿年代の事實であるらしく、同十一年に、大阪片岡仁左衛門座に上演されてゐる「宿無團七」に團七・三ぶ・德兵衛三人とも現はれ、この後、屢々上演されたので、これによつたものである。もと無賴漢であつたらしい者が、俠客物流行の大阪歌舞伎によつて、俠客に書き替へられて來たものと思はれる。但し延享元年冬に、堺の魚賣の長町裏での双傷事件があつたから、この巷説の流布に乘じて仕組まれたものらしく、お辰燒顏の件は了然禪尼の事實に據つたと傳へる。【梗概】〔序〕(色の水上浅分けた御鯛茶屋の[illegible])堺のお鯛茶屋に、頼光跡目論の[illegible]覽の場を演じて遊興に耽けるのは、豫て乳守の太夫琴浦を身請けした濱田家中の諸士頭玉島兵太夫の伜磯之丞である。同家中の大島佐賀右衛門は磯之丞を失脚させようとして、殊更磯之丞を煽てる。玉島家の恩を被る者屋團七の女房おかちは、奥方の内命を受け、巧みにその慈愛を感ぜしめて、磯之丞はやうやく屋敷に歸る事となつた。〔二段〕(殿の錠意を發込んだおやま繪の拜領物)濱田館の大殿の歸國につき、家老介松主計より諸士へ土産が配られる。磯之丞へは傾城の一軸が渡されて戒むるところがあつたが、これによつて兵太夫は磯之丞を勘當に處した。此度の御慶びに乘じ、おかちの奔走により、佐賀右衛門の下郎と喧嘩した爲めに入牢してゐた團七も放たれることとなつた。〔三段〕(出入の珠數をつまぐつた珠數三昧の男作)無賴漢の釣船の三ぶも、今は心改まり、

碌數を爪繰つてゐるが、住吉の濱邊を通りがかりに、翠簾屋にねだられてゐる磯之丞を見てこれを助け、放免の良人團七を迎へに來たおかち親子を見つけて、磯之丞に引合はす。磯之丞を追つて來た琴浦に佐賀右衛門が窺ひ寄つたが、放免された團七が現はれた爲めに、忽ち彼に逐はれてしまふ。佐賀右衛門から頼まれた一寸德兵衛が團七をねらつたところ、おかちが落ち合つての物語で、心氣一轉してわれと生國を同じうする玉島家のために、磯之丞を匿まふこととなる。琴浦は三ぶが引き受ける。〔四段〕（手代が鰻を掴出した浮牡丹の箱入娘）九郎兵衛と名を替へた團七は、磯之丞を內本町道具屋孫右衛門店に勤めさせて清七と言はせた。清七はいつか娘お中と契つたが、かねてお中に想ひを寄せた手代傳八は、仲買彌八と共謀して香爐を求める武士客を使つて、清七から主家の金五十兩をまき上げた上、その罪を被せて、この家から逐ひ出す。偶々來た團七は、その武士と見せたのが舅義平次であつたと知る。夜に入つて忍び寄つた清七はお中と諜し合ふうち、外の番屋で彌市を刄にかけ、それと氣の付かぬ傳八から金を奪つて立ち退く。〔五段〕（道行妹脊の走書）清七とお中は、松屋町を一筋に安居天神の森に辿りつく。〔跡〕最期を遂げんとしたが、三ぶに救はれる。傳八も尋ねて來たが、誤つて自ら縊る。〔六段〕（男の意地を立てぬいた燒鐵の女房作）高津の夏神樂で賑やかな折柄、松屋町の三ぶは、磯之丞を又も他家へ匿すために腐心の最中、德兵衛女房お辰が訪ねてその役を申出たが、三ぶはお辰の美貌の故に躊躇した。お辰はわれと顔に燒鐵を當てて決心を示した。三ぶが佐賀右衛門の手下を追つて出た留守中、團七からの使として義平次が來て琴浦を預つてゆく。磯之丞はお辰の船で備中へやる。あとに來た九郎兵衛は、又義平次の惡心を見てとり跡を追ふ。〔七段〕（舅が慾を止め兼ねた紅粉絞の色入帷子）宵宮の賑ひの中を、細引でからげた駕籠を急がせる義平次に長町裏の畠中で追ひついた九郎兵衛は、舅の心が改まらず、擲でその耳をそいだ事から、遂に義平次を殺してしまふ。〔八段〕（友達に心を碎いた石刻雪沓の合印）七日過ぎてまだ義平次殺しの下手人はあがらぬといふ。田島町の九郎兵衛は、妻子のために悶えてゐる。德兵衛が玉島へ下る暇乞にかこつけ、九郎兵衛を訪ねてその心を察し、罪を引き受ける心を示したが、何うしても打明けぬ。終に德兵衛はおかちを口說くと見せ、兩人斬り合ふ時、三ぶが飛び込んでこれを抑へ、團七の胸を讀んで妻子の離緣狀をとる。そこへ捕手が寄せた。德兵衛は召捕を承はつて屋根に追ひつめ、巧みに九郎兵衛を落す。〔九段〕（親と子の緣を繋いだ貫ざしの捕繩）介松主計が德兵衛內に磯之丞を尋ね、お家の重寶力王の太刀紛失の疑のためとて引いてゆく。三ぶがおかちと手鞠をかけられた伜を連れて來て、親子三人を落さうとしたが、既に手が入つた。佐賀右衛門が來かゝる磯之丞を見て討ち取らんと拔いた太刀は、力王の太刀であつた。佐賀右衛門は召捕られ、磯之丞はその功によつて先知に戻る事となる。九郎兵衛は德兵衛の手で繩についたが、磯之丞は身に代へて救はんと誓ふ。

【構想】本曲は世話物九段續きの最初として、世話淨瑠璃に一期を劃した作で、世話物が時代物と對立すべき機運を具體化したものである。大阪は古來俠客氣質の流行地であつたから、これを以て世話物の複雜化を計るのは賢明な策であるが、作者はやはり苦心して、玉島家といふ武家屋敷を相當に働かせてゐる。よつて五段目までは、磯之丞を中心とする時代世話物であり、その後が團七による世話物であるやうに感ぜられぬでもない。併し團七の伏線として、先づおかちを現はし、おかちによつて三ぶや德兵衛の姿を見せてゆく手法は、誠に自然に運ばれて作者の手腕が十分に窺はれる。角書によると三人の俠客が併立するのであるが、何れもその行爲に於て、結局武士氣質に似た俠客氣質を以て終始してゐるのと、彼等の女房がまた悉く女俠客的行爲を示してゐるのとで、本曲は完全な俠客狂言としての統制を得てゐる。女俠客は歌舞伎畑からの移入があるが、色氣を含むところに世話物としての重要性を示してゐる。個々の脚色の上に特に注目される事は、歌舞伎式手法によつて效果を目指した部分にある。三段目住吉で、團七が佐賀右衛門との出會ひには、床店の暖簾越しに佐賀右衛門の利腕を掴んで現はれる如き、四段目の清七お中が、番屋で彌七を倒し、次いで傳八を自害せしめる運びの如き、その著しいものである。但し作者のかゝる態度に出でたのは、或は當時最も豪勢を誇つた吉田文三郎の案も加はつてゐはしまいかと想像される。事實、文三郎の演出によつて本作の價値の高まつたと思はれる部分も甚だ多い。人形に帷子衣裳を着せて遣ひこなした事や、義平次殺しに本泥本水をかけた事等、珍しく言ひ囃された。又衣裳の模樣に目新しさを加へて、團七縞・德兵衛縞の名を殘し、或はお辰の風俗を定めたり、人形の頭には、和藤內を應用した「團七」を後世に留めた如き、其技の手腕に俟つたのである。かくして作者と演出家との隔意なき提携によつて、夏狂言としては、從來見ない內容の充實に成功したのである。【影響】七段目・八段目が著名であつたが、七段目は特に殺し場として獨特の流行を見、歌舞伎の舞臺にも屢々上演された。本曲の書替として女團七を生んだのは、立役を女方でゆく歌舞伎の一時的の現象によつたものと思ふ。並木正三の名作「大坂神事揃」や「宿無團七時雨傘」（各別項）等も一影響と見られるであらうが、全的に當代の俠客物に刺戟を與へた事は尠くないのである。

【參考】淨瑠璃譜○新刻役者全書卷之下○脚色餘錄三編下四淨一風○攝陽奇觀卷六浪松歌國○淨瑠璃名作集下解題 黑木勘藏 【守隨】

夏目漱石 なつめそうせき 小說家・俳人【本名】金之助【別號】漱石枕流・漱虛碧堂・破障子。但し遂作にはすべて漱石の號を用ひた（明治四十二年頃までは自ら漱石と記した）。【生歿】慶應三年正月五日、江戶馬場下（今の牛込區喜久井町）で生れ、大正五年十二月九日、牛込區早稻田南町七番地で歿した。胃潰瘍。享年五十。【法名】文獻院古道漱石居士【墓所】東京雜司ケ谷墓地【家系】先祖は甲州の武田氏滅亡後浪人して武州に移り、江戶開府以前に牛籠の鄉士として土着し、元祿以來馬場下の名主役を世襲して明治維新に及んだ。生地の今の町名は、家の定紋（井桁に菊）から來たと云はれてゐる。父は夏目小兵衛直克（明治三十年六月八十四歲にて歿）。母は千枝（明治十四年一月五十三歲にて歿）。漱石は四男で末子であつた。三歲の時鹽原昌之助の養子となり、數年後實家に歸つたが、戶籍の上では明治二十二年一月（二

十二歲）まで養家の姓を名乘つてゐた。同二十五年四月、分家して北海道平民となり、大正二年東京府に復籍した。明治二十九年六月（三十歲）、貴族院書記官長中根重一長女鏡子（十九歲）と任地熊本で結婚し、二男四女あり、外に一女があつたが夭折した。【閲歷】初等敎育は初め養家から戶田小學校（淺草）に通ひ、實家に歸つて後、折原小學校（牛込）、ついで錦華小學校（錦町）に通つた。明治十二年（十三歲）、一ツ橋中學校（後の府立第一中學校）に入學し、十四年中途退學し、三島中洲の二松學舍で漢籍を學び、更に成立學舍に學び、十七年九月（十八歲）、大學豫備門豫科に入學し、途中一度原級に留まつて、二十一年七月（二十二歲）、本科に進級し、二十三年七月（二十四歲）卒業、帝國大學文科大學に入學して英文學科を專攻し、二十五年特待生となり、二十六年七月卒業した（二十七歲）。大學豫備門在學中、江東義塾に、大學在學中、早稻田專門學校に敎鞭を執つたことがあつたが、それは學費補給のためであつた。大學卒業後、同年十月、東京高等師範學校講師囑託、二十八年四月、松山中學校敎諭となり、二十九年四月、第五高等學校敎授に任命せられ、三十三年六月、現職のまゝ英語硏究のため二箇年間英國に留學を命ぜられ、三十六年一月歸國。同年四月第一高等學校敎授、東京帝國大學文科大學講師（英文學擔任）任命。三十七年明治大學講師囑託。四十年三月、すべての敎職を辭し、同年四月東京大阪朝日新聞社員となり、出勤せずして文藝的述作の發表をすることを契約し、逝去の時までその實行をつづけた。四十二年十一月より四十四年十月まで、東京朝日新聞文藝欄を擔任した。【病氣】その半生は殆ど病患と戰つた半生であつた。大學豫備門入學後、先づ盲腸突起炎を病み、トラホームをも患つたことがあり、大學卒業の翌年あたり、肺部に故障を生じて療養のため弓術を始めたりもした。ロンドン滯在中に强度の神經衰弱症に罹り、その症狀は歸國後まで續いてゐたが、同時にその頃は慢性の胃病に惱まされ、糖尿病の症狀をも呈してゐた。朝日新聞入社一二年後は胃傷過多症の徵候が殊に著しく、四十三年八月、修善寺溫泉で療養中、胃潰瘍のため吐血して重態に陷つたが、その前後數ケ月は長與胃腸病院で暮した。翌年二月退院して八月大阪で講演し、又胃潰瘍で倒れて湯川病院で治療し、九月に痔の手術を受け、翌年また痔を手術し、大正二年三月「行人」（別項）執筆中胃潰瘍で病床に就き、翌三年十月にもまた同じ病症で臥床し、四年三月にもそれを繰返し、五年十一月には「明暗」（別項）執筆中途に最後の胃潰瘍を發して、二回の大出血の後臥蓐十九日にして永眠した。【旅行】かくの如く病患の身體であつたが、相當の旅行家で、官命で二ケ年間英國へ留學したことを別にしても、明治四十二年、滿鐵總裁中村是公の招待に應じて、朝鮮と南滿洲を二ケ月間漫遊したのを初め、一生を通じて旅行した數は少くなかつた。そのうちの或るものは作品の材料となつた。同四十四年二月學位辭退事件があつた。それは文部大臣が文學博士を授與したのを受けなかつたことである。當時彼は學問文藝の兩界に通ずる趨勢に鑑みて學位制度の功少くして弊多きを信じてゐた。【交友】中村是公・狩野亨吉・大塚保治・菅虎雄等とは親交最も長く、學生時代に米山保三郎と親しかつたが早世した。併し藝術的に影響する所の最も大きかつたのは正岡子規（別項）であつた。その交遊は一高在學中からで、後、子規は退學して文壇人となつたが、漱石も明治二十二年頃から作句し、二十七八年には著しき進境を示し、三十年には俳壇の錚々たる者として碧梧桐・虛子等の名と共に、子規に依つて擧げられた。漱石は病床の子規を慰むるために、「倫敦消息」を雜誌「ホトトギス」に寄稿した。後、「猫」の中篇も子規の靈に捧げられた。後進には寺田寅彥・松根東洋城・森田草平・鈴木三重吉・阿部次郎・安倍能成・野上豐一郎・小宮豐隆（これは全集編纂者として發表された連名である）。その他、眞鍋嘉一郎・速水滉・內丸最一郎等があり、又周圍に集まつた人々には、野間眞綱・皆川正禧・野村傳四・松浦一・坂元雪鳥・中川芳太郎・和辻哲郞・津田青楓・岩波茂雄・瀧田樗陰・赤木桁平・芥川龍之介・松岡讓・久米正雄・菊池寬・成瀨正一・松浦嘉一等があつた。宗敎に關しては大學學生生活を終つた頃、鎌倉圓覺寺釋宗演の下に參禪したことがあり、釋宗活と知つたのもその時であつた。晚年には、神戶祥福寺の青年禪僧鬼村元成・富澤敬道の敬慕に對しても少からざる關心を示した。葬儀は宗演禪師が導師であつた。【文學】文壇に緣を持つた最初は大學學生時代で、上級には尾崎紅葉・川上眉山・石橋思案等があつて華々しき文壇的活動をしてゐたとき、漱石は或は子規と俳句を論じ、或は漢詩を作り、或は「方丈記」を英譯し、或は「老子の哲學」を論じ、卒業の前年には、藤代禎輔・松本文三郎等と「哲學雜誌」を編輯してホヰットマンを硏究したり、又は英詩人の自然觀について講演したりしてゐた。それから十餘年間の沈默の讀書時代（尤も、その間も俳人としては現はれてゐたが）が挾まつて、「吾輩は猫である」（別項）を以て一躍して文名を轟かした。明治三十八年（三十九歲）、彼はすでに認められたる學者であり、思索家であり、且つ一流の俳人でもあつた。

夏目漱石

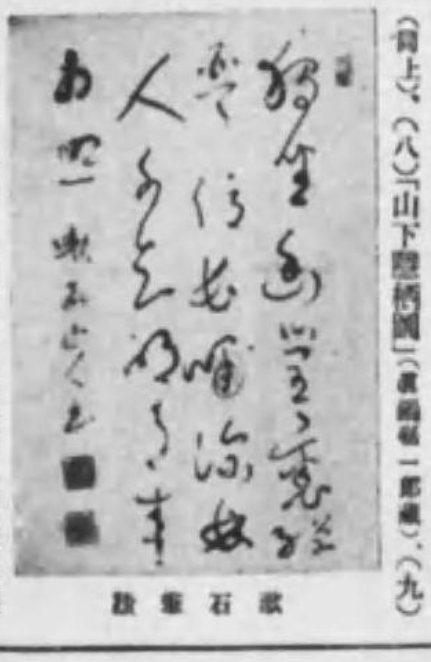
夏目漱石自畫像

【著作】（短篇物語）倫敦塔（別項）（明治三十八年一月、帝國文學）○カーライル博物館（同年四月、學鐙）○幻影の盾（別項）（同年四月、ホトトギス）○琴のそら音（同年七月、七人）○一夜（同年九月、中央公論）○薤露行（同年十一月、中央公論）○趣味の遺傳（同三十九年一月、帝國文學）（以上七篇「漾虛集」（別項）と題して同三十九年五月大倉・服部兩書店より發行）○坊つちやん（別項）（同三十九年四月、ホトトギス）○草枕（別項）（同年九月、新小說）○二百十日（別項）（同年十月、中央公論）（以上三篇「鶉籠」と題して同四十年一月、春陽堂より發行）○野分（別項）（同四十年一月、ホトトギス）（これは「鶉

夫」と合せ「鶉籠」と題して同四十一年九月、春陽堂より發行）（以上十一篇、漱石全集第二卷・普及版漱石全集第二・三卷）。〔長篇小説〕吾輩は猫である（明治三十八年一月より同三十九年四月まで）○虞美人草（同四十年六月二十三日より十月二十九日まで朝日新聞に連載）○坑夫（同四十一年一月一日より四月六日まで朝日新聞連載）○三四郎（同四十一年九月一日より十二月二十九日まで朝日新聞連載）○それから（同四十二年六月二十七日より十月十四日まで朝日新聞に連載）○門（同四十三年三月一日より六月十二日まで朝日新聞連載）○彼岸過迄（同四十五年一月一日より四月二十九日まで朝日新聞連載）○行人（大正元年十二月六日より朝日新聞に連載）○心（同三年四月二十日より八月十一日まで朝日新聞に連載）○道草（同四年六月三日より九月十四日まで朝日新聞に連載）○明暗（同五年五月二十六日より朝日新聞に連載し、十二月十四日、即ち歿後五日にて絶筆して未完成）（以上各別項）。〔小品・隨筆・紀行〕夢十夜（明治四十一年七・八月）○永日小品（同四十二年一・二月）○滿韓ところ〳〵（同十一・十二月）（以上三篇いづれも朝日新聞で發表され、後「文鳥」と共に「四篇」と題して同四十三年五月、春陽堂から發行）○思ひ出す事など（同四十四年一・二月、朝日新聞に載せられ、後、續篇評論十二篇と共に「切拔帖より」と題して春陽堂から發行）○硝子戸の中（大正四年一・二月、朝日新聞）。以上の外、なほ多くの小品隨筆と評論を纏めて漱石全集第九卷に收められてゐる（普及版漱石全集第十三卷小品、第十四卷評論雜篇）。〔詩・歌・俳句〕漢詩百七十六首（五言・七言・絶句・律、明治二十二年より大正五年に亘る。殊に大正五年八月十四日より十一月二十日まで殆ど一日一首を作つてゐる）○俳句二千餘句（明治二十二年より大正五年に及び、春の句が最も多い）。外に連句（虚子・四方太・漱石）・俳體詩（虚子と合作のものもあり）・新體詩等がある。皆明治三十八年以前のものである。和歌は八首、英詩は十一篇。以上は「猫」以前の文章・飜譯と共に漱石全集第十卷所收（普及版第十五卷）。〔研究書〕文學論（明治四十年五月、大倉書店）○文學評論（同四十二年三月、春陽堂）（各別項）○漱石全集第八卷（普及版第十一卷・第十二卷）。以上の外、日記・感想斷片・書簡・講演談話筆記等がある。漱石全集第十一卷乃至第十三卷及び別冊に收む（普及版第十六―二十卷）。

孤客入石門圖
（野上豊一郎氏藏）

【作風・思想】初めは著しく浪漫的な色彩に富んだものが多く、當時の文壇の主潮ともいふべき所謂自然主義的傾向の外に、超然として筆を驅つてゐた。「倫敦塔」「幻影の盾」「草枕」等がその代表作であつた。同時に寫實主義的成分も次第に發達して、「カーライル博物館」「坊つちやん」「二百十日」及び「吾輩は猫である」等を作り出し、「三四郎」「それから」「門」に至つては、もはや浪漫主義の匂ひはあまり殘つてゐない。表現の上では「虞美人草」を頂點として浪漫的色調は淡くなり、次の「坑夫」に於ては、寧ろ思ひきつて散文的なものにさへなつてゐる。しかし「坑夫」は、作者のあたまに湧いたものでなく、他人の經驗についての一種の聞書であるから、例外としてもよい。とにかく作者は、「三四郎」「それから」「門」以後、漸く本質的の礦脈に掘り當てたやうに、それ以來は、ひたすらに内へ内へと深く掘り下げて行つた。それは心理解剖の鶴嘴で掘り下げて行く人性研究の礦脈であつた。「彼岸過迄」「行人」「心」「道草」、さうして最後の「明暗」（これは不幸にして未完成のまゝ遺されたが）、一作は一作より深く強く掘り下げられた。かくの如くして作者の發見したものは、人間の性格に根づよく培はれてゐる自我主義（エゴイズム）であつた。自我主義（エゴイズム）の發見は、作者をますます厭世家にし、人間嫌ひにした。けれども最後の「明暗」を書く頃、作者は心的に更に一飛躍をして、私を去つて天に則れといふ廣い人間愛の方へ考へ方が向いてゐた。それは出發當初の反抗的思想、憤人的傾向に比して著しい變化であつた。文壇に立つて十二年、長篇をものすること十一、その經路を考へて見ると、初めは人の登らぬ山道を辿つてゐたやうであつたが、いつしか人界を低く見下す高さに達してゐたかの如き觀がある。殊に「心」「道草」は最もよくその標高を示すものである。【附記】漱石は、小説を書くことを本業としたが、それだけ苦しみも多かつたらしく、併し詩や俳句を作るのは樂しみのやうであり、書畫に至つては更に樂しみのやうであつた。文壇的に有名になつてからは揮毫を依頼する者が多く、或は斷り、或は進んで書き、その書いた俳句の數は短冊だけでも相當の數に上つたであらう。畫は「猫」の時代に水彩畫を試みてあまり成功せず、後、油繪で寫生をしたがこれも成功せず、文人畫風の繪を始めて一家の風韻を發揮するやうになつたのは、大正二三年以後のことである。その傑作と稱すべき半折の山水凡て九あつた。（一）「南山松竹圖」（大震火災にて燒失）、（二）「閑來放鶴圖」（夏目家藏）、（三）「煙波縹渺圖」（同上）、（四）「孤客入石門圖」（野上豊一郎藏）、（五）「一路萬松圖」（夏目家藏）、（六）「秋景山水圖」（同上）、（七）「青嶂紅花圖」（同上）、（八）「山下隱栖圖」（長嶋雄一郎藏）、（九）



漱石筆跡

「花開水自流圖」（長與又郎藏）。書では、「歸去來辭」（草書）と「般若心經」（草書）が大作である。【參考】夏目漱石赤木桁平○文章道と漱石先生上卷森田草平○漱石の思ひ出夏目鏡子○文豪夏目漱石（新小說大正六ノ一）○漱石先生追悼號（新潮大正六ノ二）○漱石先生追悼號（新思潮大正六ノ三）○故夏目漱石（大觀昭和三ノ一〇）○夏目漱石研究森田草平（日本文學講座）○夏目漱石小宮豊隆（岩波講座日本文學）（野上）

夏山閑話（なつやまかんわ） 隨筆 五卷 【著者】小野高尚【別名】「夏山雜談」。夏山のこと草しげき物語の意。【諸本】國書刊行會叢刊本。隨筆大觀・日本隨筆全集等所收。【解說】高尚が平直方といふ名の下に編述したもので、神道・官制・有職・故實・古言・書法、その他諸種先例ある事物を叙說したもの。著者の序に據ると、元文戊午（三年）に大阪天王寺に參詣して歸

樂鶴閑の席で知合になつた、もと京都の大臣家に侍を勤めた秋山色樹（頭身翁、晴樂翁と改名）の菴を鳥羽の里に訪問して日を重ねる間に、公事を初め萬のことを聞き紀したのを書き付けたものが、この一篇を成したと云ふことになつてゐる。終りに「寛保辛酉（元年）八月上澣平直方」と署してある。「大鏡」などの序言に似せて言ふ所を見ると、全くの寓言らしい。併し本文は、神國・神祇等の標題を設けて眞面目に簡潔の說明をしてゐる。各卷數十百項を收めてゐる。殊なる發明等は少いやうだが、知識を博くする料にはなるであらう。（和田）

名取川（なとりがは） 能狂言 【格式】小智。但しカケリ入といふ小書附（こがきつき）になると、一番智といつて、かなり重い物に屬する（和泉流）。【題材】陸前の名取川は歌枕として名高く、「みちのくにありといふなる名取川無き名取りてはくるしかりけり」（古今集）の歌は、最も人口に膾炙してゐる。この作では、評判を得る意味の名取を洒落りに名前を取る意としてゐる。【梗概】戒壇の地を踏み受戒までした僧、或寺へ參つて大見から「きたい坊」、小見から「ふしやう坊」と名附けられた。急いで國許へ歸らうと途々、道々その名を忘れようとするのを、きたい坊にふしやう坊、きたい坊にふしやう坊と吟じ、或は謡節に、或は舞節に、若しくは小歌節に唱へ、更に踊行節に誦する。やがて大河に到り、これを渡る。水中で轉んだ拍子に、はて何やら落した。珠數あり、笠あり、扇あり、したが名を忘れたと、拍子にかゝつても思ひ出せず、然る處に何某が出て、殺生禁斷の所であるのに何をするかと詰る。僧は殺生をしないと辯じ、且つこの川は名取川で、何某は名取の何某だと聞き知り、己が名を取られたと推し、名を返せと迫る。何某はこのあきれた言ひがかりに、稀代な事をおつしやる、不祥な所に來かゝつたと當惑すると、僧は、そのきたい坊にふしやう坊が私の名だと言つて二つの名を取返し、本國さして歸る。【構想】「泣尼」（別項）と同じく、素朴な田舍坊主を主要人物としてゐる。古文學を背景とする名取川を題材とした「川盡し」の文句は、謡ひ物として當時行はれてゐた一種の文學形式（狂言綺語參照）で興味がある。川に取られたと思つた名前を、何某のふとした調から思ひ當るといふ、少々わざとらしくはあるが、ウイットを一の趣向としてゐる。【影響】この作に含まれてゐる「川盡し」の文句は、その後江戸長唄に用ひられてゐる。寶暦九年七月刊行された「歌撰集」に、七變化の一として「倒城名とり川」が載つてゐる。（野村）

七柏集（ななかしはしふ） 俳諧集 四冊 【編者】雪中庵蓼太【名稱】また「しちはくしふ」ともいふ。【刊行】天明元年五月の序、江戸西村源六刊。【諸本】中興俳諧名家集（俳書大系）所收。【解說】蓼太が慶長以來元祿に至るまでの俳風を「貞德」「檀林」「次韻」「虚栗」「續虚栗」「未來記」「炭俵」の七時代に分ち、自らその各時代の句風に倣つて、獨吟歌仙一卷づつを卷き試み、以てその變遷の跡を明かにしたもので、なほ蓼太が門人達中と興行した連句百餘卷を附錄として添へてある。分量からいへば附錄の方が遙かに多いが、その本體は題名によつても明かな通り、勿論俳風七變の意を悟らせるにある。ために附言として牛歌坊沙羅佛の筆で七變の歌仙流行の跡を記してある。而してその「猿蓑」を取らないで「未來記」を以て一時代を代表させてゐる如きは、蓼太が自家勢力の宣傳的手段に利用したのである事はいふまでもない。併しその七變に倣つた獨吟は、頗るよく各時代の特質を把握して、縱橫自在な才を見せて居り、連句に於ける彼の手腕は十分にこゝに認める事が出來る。更にその附錄に至つては、普通の歌仙の外に、和漢・漢和等も交へ、蓼太の連句の眞面目は、ほぼこの書に於て盡されてゐると言つてもよい。なほ本書の卷頭に大田南畝が序して「兒童諳蓼太、走卒知雪中庵」と言つてゐるのは、卷中、不寒・菊貫侯等貴顯の士との應酬が多い事と相照して、當時の蓼太の社會的地位がよく物語られてゐる。（潁原）

七草草紙（ななくさざうし） 御伽草子（二十三篇の一） 一卷 【成立】室町期か【諸本】古板本は御伽草子本、寛永整板本。御伽草子前編（今泉定山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷等所收。【解說】孝行物語、由來談。正月七日に七草を摘んで帝の供御に供へる由來。昔支那の楚國に大しうと云ふ者があつて、天性至孝、百歳に及ぶ老父母が眼も霞み、耳も聞えぬのを悲しみ、とうこう山に登つて兩親の若くなるやうに三七日天に祈つた。滿願の暮方に帝釋天が天降つて納受の由を告げ、正月六日の夜酉の時から、芹・薺・御行・田平子・佛の座・菘・清白の七草を、柳の木の盤に載せて玉椿の枝で打ち、東方の井から汲んだ若水を以て白鷺鳥の渡らぬ前に服するならば、八千年も長生するこの鳥の壽を轉じて忽ち若返ると教へたので、その言葉の如くすると、兩親共俄に二十歳許りに若返つた。奇特を聞召した帝は大しうを召して位を讓られた。七草の行事は、この孝德を記念するためであると云ふ。「松風村雨」にも、ほぼ同じ七草由來談が語られてゐる。（島津）

七歸上戸 「當世七歸上戸」を見よ。

七車（ななくるま） 俳諧集 五卷二冊 【著者】上島鬼貫【本名】俳諧七車【名義】七車は、「萬葉集」の「戀草を力車に七車積みて戀ふらく我が心から」の歌を初めとして、戀草に詠み合せられてゐるのが普通であるが、しかし七車は數の多いことをいふのであり、漢語に五車之書などいふ語もあるから、述作を多く載せた意味で名づけたのであらう。鬼貫の自序に、「つゞまやかにしるし置て子孫に永く殘さんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て」とある。【成立】享保十二年【刊行】天明三年【諸本】槿亭鬼貫全集（俳諧文庫）・元祿名家句集（俳諧叢書）・元祿名家句選（俳書大系）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【內容】鬼貫の自選句文集である。但し出版の際大阪の書肆興文堂高橋平助が、鬼貫の門人高橋只川の後裔であるといふ緣故から、稿本「七車」の所藏者荒木氏と謀り、三宅嘯山に託して既に太祇の「鬼貫句選」（別項）に抄錄されたものを除去して刊行したのである。內容は、卷一、春之部發句百二十八、附句一、表三句一。卷二、夏之部發句八十三。卷三、秋之部發句八十八、附句二、表三句一。卷四、冬之部發句五十八、表三句一。卷五、序跋類十三篇、贈辭記讃類十一篇、哀傷類九篇の文章より成つてゐる。享保十二年三月鬼貫自序、天明三年八月三宅嘯山の跋がある。【價値】太祇の「鬼貫句選」と合せて鬼貫の自選句文集全部をなす譯になるので、鬼貫の句文を最も確實に知るには、句選と共になくてならぬ第一史料である。鬼貫の自序は、主として彼の俳歴の一部を語るものであり、嘯山の跋は、鬼貫の傳記を相當精

しく語るものとして、合せ見るべきものである。ただ鳴山の跋は時代のや丶降るものであるだけに、檢討の餘地があることは云ふまでもない。（森銑）

七つのや　「切字」を見よ。

七つ面 ななつめん　脚本（歌舞伎十八番の一）
【作者】津打治兵衛・藤本斗文【初演】元文五年三月、江戸市村座春狂言「姿観隅田川」第二番目【沿革】次いで寛保二年七月、大阪大西芝居「星合榮景淸」第四番目に景淸が賴朝を討たんため、面打大和の元興寺赤右衛門（市川海老藏）と名を替へて、本作を演じたのが大當りで、後世に行はれたのはこの時のに據つてゐる。海老藏（二代市川團十郎）歿後、本作を演じた主なる俳優は、九代市村羽左衛門・四代五代市川團十郎等である。【傳來】廢滅。但し九代市川團十郎が、福地櫻痴に新作させて「新七つ面」として復活上演（明治二十六年十一月、歌舞伎座）、これは海老藏の「七つ面」にヒントを得て、新たに能がかりに改作したものである。【題材】柏莚（二代團十郎）が實生太夫宅で能面を種々見せられた時に暗示を得て、後、脚色させたものと傳へられる。
【梗概】面打元興寺赤右衛門實は粟津六郎左衛門（市川海老藏）が、淺黄頭巾の上に鱗烏帽子・素袍の下のみを附け、左手で櫻の枝を肩に擔ぎ、右手に扇を持つて出る。舞臺の東方に面箱が五つ並べてある。吉田少將惟貞（八代市村宇左衛門）の所作があつて、野上の斑女（玉澤才次郎）に面を見せんと、初めの箱を開くと笑尉の面が出る。次に吉田少將御臺櫻姫（嵐中歌川）に面を見せようと蓋をとると、嘯吹の面が出る。その次に斑女と櫻姫とが互に少將をいどみ、嫉妬深いのが般若のやうだと意見のために箱を開けると凄い般若の面が出る。次は姥の面、最後に武惡の面が出て口をくわつと開いた所へ、粂の平内兵衛（二代松本幸四郎、後の四代團十郎）と勅使太宰の豫主（村山次郎右衛門）とが、惡事を相談して都鳥の一卷を盜んで來て出す所へ、人の足音に彼の一卷を他に見せじと後へ廻すと、武惡の面が卷物を引喰へて取る。平内これはと驚いて振り返ると、面箱の蓋はチヤンと閉つて押しても開かない。これ等の面はどれも眉毛唇などを動かしたので、海老藏の早替り扮裝と知られた。
【解說】勿論、純粹な所作事ではなく、所作の加味せられた一種の變化物式な劇物で、柏莚が扮裝術の巧妙を應用した即ち扮裝早替りの鮮かな妙技を見せるのが主眼で、內容の至つて乏しいものである。
【附記】大阪所演の面は、笑尉・釣眼・嘯吹き・武惡・黑髭・般若であつた。なほ竹柴金作作の「新曲七つ面」（昭和三年十月、歌舞伎座）があるが、これは落語の獅を舞踊化したもので、お伽噺式の他愛のないものである。
【參考】壽十八番歌舞妓狂言考　石塚豊芥子（新燕石十種第三）〇劇代集　二代岡田市助編〇歌舞伎圖說　守隨憲治・秋葉芳美共編（秋葉）

難波 なには　「神事物の謠曲」を見よ。

難波江 なにはえ　隨筆　七卷十四册　【著者】岡本保孝【諸本】百家說林續編所收。【解說】卷一に於烏の假字以下四十條、卷二に復古學之論以下四十條、卷三に國號以下四十條、卷四に北條氏略譜以下四十條、卷五に源氏物語新釋以下四十條、卷六に『權綱宜在皇統』といふ事以下四十條、卷七に日吉山王以下四十條を收め、每卷を上下二册に分つてある。國史・國語・國文・有職に關する事項の考證で、殊に音韻・語法に係るものは精到を極めてゐる。「にとへとのわかち」「にとをと同じ意に通ふ例」「さときとの辨」「通と違とのてにをは」「のとにと近し又をにも近し」「すら、だに、さへ」の諸項の類がそれである。また古典籍の傳來・解題等について、後世に益ある文字もある。（和田）

難波潟猫の囈語 なにはがたねこのねごと　「復讐猫殿屋敷」を見よ。

浪速人傑談 なにはじんけつだん　傳記【著者】政田義彦【刊行】安政二年【諸本】續燕石十種（國書刊行會）所收。【解說】天和以降、浪速で歿した一能一技に長じた人々七十三人を、德行・皇朝學・儒家・武技・新刀名家・書家・畫家・天學・算學・卜筮・物産・相學・醫家・俳諧・鍼家・拾遺・茶道の十七項目に分けて傳記を記したもの。その傳記の根據として序文に「悉、正しき書籍より拔萃し、又は篤實なる老人の物語せしを譯す、かならず予が妄說とする事なかれ」と謂つてゐる。（土井）

浪華人物誌 なにはじんぶつし　傳記　一册【編者】毛生正華【本稱】「新刻浪華人物誌」【刊行】文政七年【解說】當時の藝苑に關係ある人々の姓名・通稱・居所等を記したもので、儒家・醫家・和歌・天學家・易學家・書家・畫家・篆刻家・文雅の九門に分け、約四百名を收載してゐる。本書は同編者に依る「浪花鄕友錄」二册（安永四年刊、寛政二年刊）「續浪花鄕友錄」一册（文政六年刊）の續編と見るべきものである。各編を通じてほぼ同數の人名を、同樣な部門に分類してゐる。記すところは何れも簡易であつて、人名辭書としてよりは、寧ろ減る手がかりを供するものであらう。（土井）

浪速叢書 なにはそうしよ　十五卷　索引一卷
【編者】浪速叢書刊行會【刊行】大正十五年十二月以降順次刊行。【解說】大阪の地理・商業・風俗等に關する叢書で、一卷から六卷までは攝陽奇觀（濱松歌國）、七・八卷は攝津名所圖會大成（曉鐘成）、九卷は大阪商業史資料（諸組合仲間商屋及びその規約、商業工業諸職沿革、外國貿易并商業上の慣例）、十・十一卷は大阪訪碑錄、十二・十三卷は地誌で、十二卷には蘆分船（一無軒道冶）・難波鑑（同上）・難波十二景（山本渭濱）・難波十觀（同上）・浪花のながめ（白峯齋梅好）・浪花の梅（同上）・附大阪地圖、十三卷には堺鑑（衣笠一閑）・全堺詳志（高志芝巖）・住吉名勝圖會（岡田玉山）・天保山名所圖會（曉鐘成）を收めてある。十四卷は風俗と題して浪花の風・皇都午睡（平亭銀雞）・虛實柳巷方言（善具屋先生番堂）・狂哥夜光玉（知雲亭雪洞及び門人栗由亭眞末）・浪花色八卦（外山翁）・浪花今八卦（雙四軒）・浪花花街今いま八卦（故譲軒）・粹學漫筆（著者未詳）・月華餘情（同上）・浪花青樓志（堀江園）・澪標（李苑）・浪華十二月畫譜（狂言堂春の屋眼月）を收め、十五卷は演劇と題して浪花其末葉（竹憩三笑）・女大名東西評林（著者未詳）・戲場樂屋圖會（松好齋半兵衛）・樂屋圖會拾遺（同上）・大歌舞伎外題年鑑（著者未詳）を收め、十六卷は索引となつてゐる。（石村）

難波鉦 なにはどら　假名草子　六册【作者】西水庵無底居士（傳未詳）。【名稱】詳しくは、「諸分難波鉦」、後、改題して「好色艶栗庭子」、また「諸分店頭」とも云ふ。【成立・刊行】本書初刊本には、初頭に「徒然草」の口調をまねた假名の序があり、終りに「延寶八申三月日水月庵遊色居士」と記し、次に淡交の後序がある。その要點を抄譯すると、傾城買は老若を問はず何人もするが、客の心得即ち諸分座配の情意に通じたものは誠に鮮い。近頃これに關する書が頻りに出るが、佯紫譜に陷し、兎角穴さがしに終り、益するところ少きを慨し、西水庵無底居士一書を撰し、その妙諦を示す。分ちて六卷となし、諸分難波鉦と名く云々、延寶八年春日、一生軒不埒とある。又六卷の終りには、淡交の跋があり、洛下南華軒と記してある。故に成立刊行は、延寶八年春とみて大過なからう。また西水庵無底居士・水月庵遊色居士・一生軒不埒・南華軒等、何れも皆一時の假名であらう。【諸本】流布本にはまだ刊記のあるものを見ぬ。元祿七年に、「艶栗庭子」と改題、更に後「諸分店頭」と改めて刊行したが、この二本には假名序にある水月庵遊色居士の名と、跋の南華軒との名が削られ、淡交の後序が全文削除されてをり、更に「店頭」には、六卷の挿畫六入の圖一面が省かれてゐる。思ふに、風紀問題のためであらう。この點から「店頭」の版行は、正德・享保の改革當時と推定される。「店頭」は江戸時代文藝資料第四に收めてある。
【解說】大阪新町の遊女の名寄であり、又かねて諸分の書でもある。諸分といふ事は、取捌きの意味で、女郎の對客關係を云ふ。例へば客をはめるには如何。又これを振るにはどうと所謂手管とか魂膽とかの仕方で、素より生きた人間相手の事であるから、定木を以て一律に判斷することは出來ないが、併し元來が女郎は職業であるから、賢愚・粹不粹の差別はあるにしても、其處には又一定の法則がなくてはならぬ。この法則は姉女郎から妹女郎、それからそれへと傳へられて、口傳もの即ち遊女の六韜三略になつてをる。その韜略の奧義を披瀝したものが諸分書で、「難波鉦」は、その諸分書中の尤なるものである。その趣向は、大盡が問題を課して、女郎からいろ〳〵口傳を探り出すといふ仕組で、例せば一卷松の部で「初冠…井筒」とあるは、初冠即ち初會の客に對する女郎の心持を井筒から聞いた意味であり、又二卷「空蟬…妻崎」とあるのは、空蟬は既に女郎が客を有してゐる時、偶々馴染客が來て會はねばならぬといふ場合に、窃かに座敷を拔け出す手段をいひ、その解答を妻崎がしたことになつてをる。かやうに百種の質問が發せられたに對し、新町現在の太夫二十六人天神七十四人都合百人の女郎が、皆それ〳〵客の質問に應じて、解答したやうに見せたもので、これに由つて色里の仕掛が悉皆判るといふ仕組である。この構想は、萬治三年刊「吉原鑑」に、既にその一端が現はれてをる。例せば或る人が水月不隣のけぢめを問ひ、高雄がこれに答へ、又傾城卷金の無心に對し、金太夫が解答を與へてゐる。この先例に倣つたのであるが、「吉原鑑」は僅かに二十四問であるに對し、「難波鉦」は實に百問の多きに達し、而も內容が充實し、難問答の解決が頗る多い。遊客手引草として、最も優れた作の一である。なほ初めに開口の一文があつて、大盡が遊里に出掛ける際、丁稚の彌之介を呼び出し、又乳母を呼んで、いろ〳〵仕度を命ずる所は、狂言の大名と太郎冠者の口吻を學んだもので、以下すべて口語體の一問一答に、話を進める例は、後、其磧などが評判記の開口に學んだ所で、一の新例と言つてよい。（水谷）

霞亭文庫本「浪花鉦」

【參考】吉原書籍目錄　霞亭補遺（新群書類從第七）

浪花の田鶴 なにはのたづ　浮世草子　五卷
【作者】序に「そこの國そのこと何氏のそれがし」とあるが未詳。【刊行】元祿八年【諸本】浮世草紙（國刊行會刊）第二卷所收。
【梗概】（卷之一）（一）明石屋の與三といふ男、夜遊びの歸りに女の振袖を誤つて着て戻り親仁に抱き付かれた話。（二）尾花木工太夫なる男、死んだ馴染の女郎の幽靈に惱まされたが、雲行和尙の轉智で助かる話。（三）儉約著財の雜話。（卷之二）一つの連續した物語で、金澤屋左五衛門の軒にたゞずんだ法師が、十文字屋九一といつた昔の色懺悔をする。（卷之三）（一）薄屋宗頓といふ老人、子供のためを思つて死後に小判形の瓦錢の作り物を殘した話。（二）九文字屋仁助方の振舞に、宿老が鯉を捕まうとして傷ついた話。（三）撞木町の火事に傾城の逃げる話。（卷之四）（一）利右衛門といふ男、朝起して往來の落し物を拾つて生計を立てる話。（二）四條の芝居見物中の十二屋の新太の妻が、新太と妾の間の子供をあやすうち、子供が楊枝で咽を突いて傷くので、妻妾の間に爭が起るが、太夫元のとりなしで和解する話。（三）松ケ根屋編右衛門、一度沒落したが、黑大豆を少しづつ買つて步いたり、釣錢を誤魔化したりなどして、人並に生活した話。（卷之五）（一）藤岡屋金左衛門の龜鶴七轉八起の話。（二）佐久間屋半久、古稀に達して遊興を止めたが、五十匁の前銀を失つて騷ぐ夫婦に一步一摑みを取らせ、「此一つの物こそ大事の上の調法」と悟る話。
【解說】各種雜多の世上の物語を集めたもので、特に中心思想といふやうなものは汲み取り難い。併し詞章も拙劣ではなく、かなりの健筆と思はれ、物語の內容は、さして面白いものはないが、この頃のものとしてさう劣つた作品ではあるまい。（增田）

難波みやげ なにはみやげ　浮世草子　五卷
【作者】未詳。穎原退藏氏は俳諧師の手すさびであらうと言つてゐる。【角書】極城【刊行】寶永七年【諸本】近世文藝叢書第五卷所收。
【梗概】（卷之一）（一）淀の下り舟を王城の鎭の神の使が呼び止める。その敎に從ひ、舟に

おじ乗つた三人の山伏に咒文を示すと、三人とも河中に落ち込んだ。三人は貧乏神の末社達で、舟に殘した笈の中には、「貧家」と書いた札を三千枚づつ持つてゐた。舟中の比丘尼の提案で、乗合の者が種々の諸國咄を試みる。(二)四つ橋の商家の六十一になる隱居、「打老兒丸」を服して、精力絶倫となつた話。(三)越後町の太夫、いやな男に身請けされ、戀しい男にあひたさに狐憑の眞似をしたがくすべ殺され、幽靈となつて戀人に文を殘す話。(四)堺の三狩といふ大盡、敵娼きり山の身請に世評を憚つて苦心した話。〔卷之二〕(一)「わるくちをかきしあを表紙」の中の遊里・劇場等の雜話。(二)江戸のばゝそだちの大盡と巴屋の勝山が馴れ染めの話。(三)京のげんぶく大盡の遊興の話。(四)江戸の醫者の伜、遊興して勘當されたが「朝起丸」を賣りひろめて許され、二代の法橋となり、種々の病人に接して江戸の廣さを痛感する話。〔卷之三〕(一)芙木屋ゆき方で、座敷普請の事から二人の大盡及びその敵娼間に面倒が起りかけたが「粹」な心からめでたく納まつた話。(二)大盡の諸相、揚屋の主が女郎の受けた大盃を助けるのを怒る大盡など。(三)伊丹の男、扇屋の太夫を請出す前に、太夫の以前からの客全部に暇乞の文を響かせた話、外、諸客の諸相。(四)大阪屋の太夫に通ふ南清・東又といふ二人の大盡があつた。東又の末社かん八が、太夫の前で、「清大盡の羽織は短かすぎる」と言つたのを、東又は怒つて出入を止める。かん八はわざと南清の末社となつて種々の奸策を用ひ、太夫と南清の手を切らせて東又の手に入れたが、東又はなほも勘當を許さなかつたといふ「粹大盡」の話。〔卷之四〕(一)大阪の大盡が江戸に下るに際して末社達を太夫の横目役に殘したが、太夫の無分別から一騒ぎの起る話。(二)大盡の本妻の召使おさん、大盡の妾宅通ひを止めんと苦心し、若衆仕立で妾宅に乗り込む話。(三)十九といふ大盡が遊興に耽けるので、妻の親が千兩調へて商賣に轉向させようと計るが無效。(四)傾城が客から金をねだる方法など。〔卷之五〕(一)遊興を止め若法體をして商賣に成功した男と、おろかな大盡に賴みか

難波みやげ（題簽・初頁）

けられて、自分は酒の飲み死にをした男の話。(二)若後家の不行跡が家を亡ぼす話。(三)新町の女郎屋の惣領・木村屋又次郎の驕奢生活が過ぎて仕置にあふ話。(四)跋文風に、「粹大盡」の讃辭を列ねる。

【解說】言ふ迄もなく色里物で、大盡・傾城が中心をなしてゐる。各々說話として特に面白いものもなく、卷之三の第一章及び第四章など多少筋があるといへるが、同じく第五章の伊丹の男を「上々吉の粹男」と褒めた作者の意圖は、この兩章を「粹大盡」の典型として描いたに違ひなく、この心持は跋文にも見られるやうに、實に全作を通じてのものであらう。個々の說話中から、形式的な文化史・風俗史方面の資料も拾ひ出せるであらうが、文藝作品として價値の低いに拘らず、この「粹の讃美」が主潮となつてゐる所、この作品の最も重要な方面と認めたい。勿論この作品が他に比し特殊の地位にあるとはいへまいが、通と粹との時代相を知る好資料であらう。〔增田〕

難波土産 なにはみやげ　雜俳集　一册　【刊行】元祿五年　【讀本】德川文藝類聚雜俳第十一所收。【解說】西鶴・雲流・遠舟より京都の常牧・和及、及び江戸の不角・調和等の高點句を集錄した珍書。〔西原〕

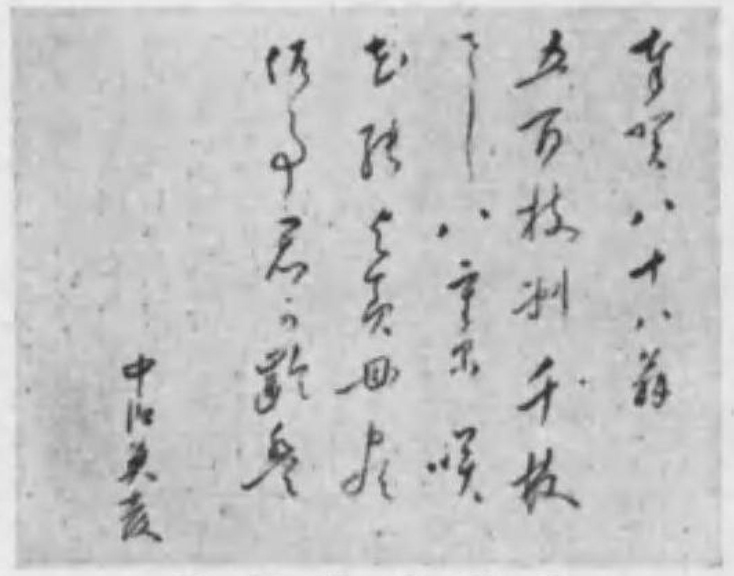
難波土産 なにはみやげ　演劇書　五卷　【著者】穗積以貫　【名稱】淨瑠璃芝居の根據地たる難波の土產といふ義か。角書に、「淨瑠璃文句評註」とある。內題は「淨瑠璃評註」。【刊行】元文三年春　【讀本】新群書類從第六・近松世話淨瑠璃集(帝國文庫)所收。外に單行本(上田萬年校)もある。【內容】著者は當代の儒者であつたが、淨瑠璃芝居等を好むまゝに、年來院本數種を讀む中、要所の辭句等を摘出して、自ら註を加へ、博識にも尋ねてゐたが、書肆の乞ふに委せてこれを刊行したものであると序に記してある。收められた作品は、「御所櫻堀川夜討」「お初天神記」(卷一)、「安倍宗任松浦簑」「北條時賴記」(卷二)、「大內裏大友眞鳥」(卷三)、「國姓爺合戰」「苅萱桑門筑紫䡄」(卷四)、「蘆屋道滿大內鑑」「大塔宮曦鎧」(卷五)であつて、卷一には初めに發端を添へてゐる。各段はまづ名題の解說から、本文中の辭句に對する說明と、時に評を添へ、最後に總評とも見るべきものを置き、整然たる形式が見られる。近松作の道行文に對しては比較的詳細な註と評を加へてゐるが、他の作品の道行の場合には註を省いてゐる。これに就いて彼は、近松の道行の氣高さを失つた他の作者の場合に註を加へる如きは潔しとせぬと論じてゐる時、氣概の見るべきものがある。「苅萱桑門筑紫䡄」の場合をとつて、名題文字を許し、奇數たらしむべき態度は認めるにせよ、徒らに鑄字の弊に陷る事は考ふべきであると說く時も注目すべきである。又淨瑠璃のそら事も、眼前の事實は十分調査の上にてあるべしと述べ、近來の作者の不吟味を痛撃する所がある。「國性爺」などは完全といふべきも、「樓門」の場で錦祥女に懷鏡を遣はす條は、甚だ審しと指摘した。語句の解を主としてゐるが、その基調に人形の働きを認めてゐる態度が、興味ある註書たらしめた。發端の條は淨瑠璃の由來と近松との問答によつて成立してゐるが、そこに近松は淨瑠璃の文章が、人間ならぬ人形を働かすものたる立場から、十分考究さるべきことを述べ、且つそのための作文の態度としては、虛と實との間を操ふべきことを論じてゐる。近松の藝術觀を知るための資料としては、この部分は數行の文字にすぎぬが、甚だ貴重な文獻となつてゐる。(近松門左衛門參照)〔守隨〕

莫告藻 なのりそ　隨筆　七卷(現存三卷一册)寫　【著者】本多忠憲　【解說】卷一に有職故實

その他種々事物の稱謂等に係る辨考を收め、卷二に知名の人々の作文・作歌等を抄寫し、卷三に再び故實、その他倚古の雜說を收めてゐる。著者の自序がある。

【著者小傳】本多忠憲。通稱は甲馬、號は華陽。伊勢國神戶藩主忠統(猗蘭公)の孫で、國學に通じてゐた。歿年不詳。「源氏物語不挿塵」「宇津保物語不挿塵」「塵泥」(別項)等の著述がある。〔和田〕

魚彦 なひこ　國學者　【姓名】本姓は伊能。楫取と名乘る。通稱は茂左衛門。初名景躬、後に景良、更に魚彥。【號】青藍・茅生庵　【生歿】享保八年三月二日に生れ、天明二年(二四四二)三月二十三日歿。享年六十。【法名】光雲院桂通魚彥居士　【墓所】下總國香取郡牧野村觀福寺　【家系】祖先は肥後の人尾形三郎維義、その四世の孫神兵衛大輔景能が、下總國香取郡大須賀莊の地頭となつて伊能村に住居し、里の名を以て氏とした。景能から二十四世因幡守朝辰(稱して眞白さいと)は國分氏の孤子を援け、上總の正木某と戰つて死んだ。その子守胤、弓箭の道を捨てて同郡佐原に移住してから七世に至つて魚彥が生れた。父は景榮、母は土子氏。【閱歷】魚彥六歲の時父を失ひ、母に養育せられたが、幼少から讀書執筆を好んで自ら群童に異なる所があつた。明和二年家を子景序に讓り、江戶に出て濱町山伏井戶に居住し、眞淵を師とし、朝夕親炙してその歌風を承け、古語研讚の道に入つたが、特に「萬葉集」を尊び、古語研究に力を盡した。又書を建部綾足に學んだが、法を古に求め、姿形を目前の寫生にとり、自ら一家の風を成した。就中梅と鯉魚とを得意とした。更に又俳諧連歌を好み、寺町と號した。眞淵歿して後、彼に從ひ學ぶ者二百餘人。諸侯にして弟子の禮を執つた者もあつた。【著作】古言梯一卷(別項)(明和元年八月成、同二年刊)○萬葉集千歌二卷(安永三年成)○續冠辭考一卷(賀茂眞淵全集第二所收。眞淵の冠辭考の補遺。七十四語を追加)○冠辭懸緒一卷(安永八年成、冠辭五十の解釋)○楫の嶋手四卷(別に序目錄一卷。嘉永四年刊。古語を五十音順に排列した辭典)○楫取魚彥家集(安永五・六兩年の作品)(別項)○大船楫取魚彥雜集(明和七年編著。續日本歌謠全書第八編所收)○ならの葉○筆のさきこと○百人一首略傳○兩夜の燈火等。


楫取魚彥筆跡

【批評】彼の「古言梯」は、歷史的假名遣の研究であつて、方法は科學的である。彼の語學思想は、眞淵の「語意考」に觸發され、契沖の「和字正濫抄」の影響を受けたもので、後世の語學者足代弘訓・田中延香・岡本保孝等の著に基礎を與へてゐる。詠歌に於ても眞淵の上代風を以て終始し、古語古調を自由に驅使し、同音語同一語を反覆した歌調にすぐれてゐた。その外、旋頭歌・長歌を作り、催馬樂調にも手を染めてゐる。

【參考】近世三十六家集略傳(河喜多眞彥)○楫取魚彥家集序(清水濱臣)〔西尾〕

鸚訓歌字盡 なぞるうたじづくし　黃表紙　三册十五丁二十二圖　【作者】式亭三馬　【畫工】歌川豐廣　【名稱】「一人娘二人婿」の角書があり、外題は「小野篁歌字盡」のもぢりで、鸚訓は內容を暗示しながら「歌字盡」にふれる。【刊行】文化二年泉市刊。【類材】「狂言末廣榮」(京傳作歌舞伎臺、天明八年刊)、「粉接銀煙管」(京傳作戲畫、天明八年刊)、「山鴫鴨翼轉破瓜」(京傳作戲畫、寬政二年刊)等によつてゐる。

【梗概】伊勢の國の油屋太郎兵衛の娘お染は、丁稚の久松と深くなり、日向國の茶屋の治郎兵衛の娘お梅は、寺小姓の粂之介を戀慕する。何れの親達も折を見て結婚させようと思つてゐる。流行の痲疹で、お染・お梅は死んだ。お染の死は定業であるが、お梅は閻魔の手落ちからである。なきがらは既に火葬にしたので、據なく、お染の屍にお梅の魂魄をかへす。蘇生したお染は、魂魄がお梅であるから、日向の親里を慕ふ。日向から迎へに來たが、身體はお染であるために、太郎兵衛は引渡さず、身體を引張り合つて爭つた處、首が飴のやうに伸び、治郎兵衛は首から上を連れて日向に歸る。日向の方での食ひ合せが惡く、伊勢の方にある身體が苦しむ。伊勢の方では竹齋に診察させた處、一服の粉藥を日向の國へ持たせてやり、それを飲まずに口にあてた儘、大磁石の力で、伸びた首をちぢめ、頭を伊勢へ引戾す。治郎兵衛は伊勢へ來て訴へた處、半月づつ久松と粂之介に添はせる事になる。娘は久松と駈落の支度をしてゐるうちに粂之介の番になり、遂に粂之介と出奔する。閻魔は娘を眞中から二分し、魂魄も二等分して二人に與へ、左甚五郎と竹齋とで不足の半分を作り、お染・お梅は各々一人前の身體となり、それぞれ結婚する。

鸚訓歌字盡（帝國圖書館藏）

【解說】三馬は冒頭に、一部の大意と題してそ

の趣向の據るところを記し、明の李卓吾の「山中一夕話」、梅塢散人の「婦人やしなひ艸」「お染・久松」「お梅・粂之介」等の淨瑠璃、八文字屋本の「竹齋物語」等に據る旨を記してゐるが、それは衒學的に根據を和漢の先行作品に附會したのみであつて、實は山東京傳の「狂言末廣榮」の趣向、「山路鵯鼠轉䘥瓜」の趣向、「扮接銀煙管」の一體二人格の人物等を取合せたのみである。竹齋は「狂言末廣榮」の大坂平庵であり、お染の身體にお梅の魂魄を入れたことは、「扮接銀煙管」の粂之介、「狂言末廣榮」のお六、「山路鵯鼠轉䘥瓜」のからたけ等を結合しただけである。「山路鵯鼠轉䘥瓜」の九郎助稻荷と朝日如來のするところを、左甚五郎と竹齋とになさしめる。作の山は竹齋の療治にあるが、それは京傳の眞似で、京傳が鐵の楊をさゝせ、鐵粉人の油を附けて燮を結はせ、それを磁石で引寄せる案じに比較すると劣つて居り、魂魄を二等分するのは「山路鵯鼠轉䘥瓜」（羽勘仁王參參照）の洒落れた趣向には及ばない。一人物を二人で爭ふ事なども、京傳の作には及ばない。本書には敵討物の流行によつて、春町・喜三二以來の黄表紙の本質が失はれた事を嘆じてゐるが、それも京傳などの作品には遙かに早く見えるところであつて、三馬によつて始めて唱道されたものではない。

【備考】「狂言末廣榮」大坂平庵は頓才で親病を治療し、かさはり長者の娘お六の首が、戀人を慕つて京都までのびた治療にも成功する。「扮接銀煙管」男の方は半兵衛、女の方はお夏と名づけられた二頭一體兩性の一人物は、和國流の首つぎの名人の治療で、完全な二人物となり、それ〲戀人と結婚する。　（小池）

鍋八撥 なべやつばち　能狂言　【別名】「羯鼓焙碌」　【格式】本神文濟相傳の部（大藏流）。【解說】目代が出て、新市をお立てなされるがために、一の店についた者に市司を仰せ付け、又萬雜公事を御免なされるとの高札を打つ。そこへ羯鼓を商ふ者が來て、一の店を飾らうと思ふがまだ夜深いから暫く休まうと寢てしまふ。所へ、わさ鍋賣が來て側へ寢る。やがて羯鼓賣が眼を覺まし、場所爭ひの喧嘩になる。目代が騷ぎを聞きつけ仔細を尋ねると、二人共同じ事を言つて埒があかぬ。そこで何か勝負をする事になり、いろ〱勝負するうち、鍋賣は羯鼓賣の眞似をし、車返りをして鍋を割つてしまふ。しかし數が多くなつて目出たいことだといふ筋。古來有名な狂言で、壬生狂言などにも利用されてゐる。趣向は「牛馬」などと同樣で、市を扱つたところに當代風俗の反映が見られる。大藏流では玄惠の作と稱せられてゐる。　（能田）

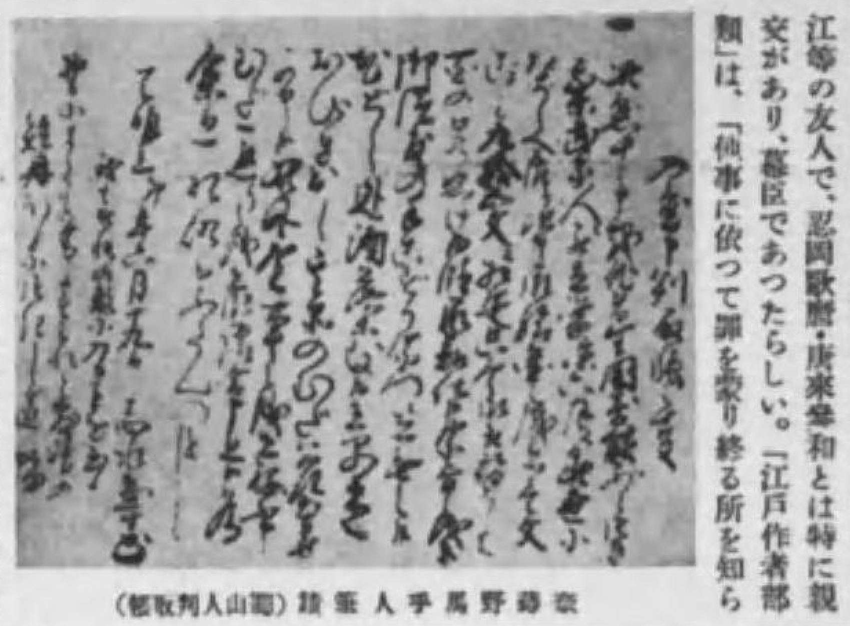
酩酊氣質 なまゑひかたぎ　滑稽本　二冊【作者】式亭三馬【名稱】「醉醒七癖」と角書がある。八文字屋の所謂氣質物に倣つた命名で、無くて七癖有つて四十八癖といふ俚諺に基いて、角書を附したものである。【成立・刊行】自序によれば、文化二年の三月一日に一晝夜で作つたもので、出版は文化三年の春。【諸本】三馬傑作集（帝國文庫）・式亭三馬集（近代日本文學大系）・滑稽文學全集等所收。【題材】酒に醉うた間に現はれる人の氣質、性格にはいろ〱ある。本編はこれをかつぎ上戸、あくたい上戸、面白くない上戸、くどい上戸、小言上戸、なき上戸、異見上戸、ねぢ上戸、理窟上戸、腹立上戸、騷ぎ上戸、しやべり上戸の十二の上戸に分つてゐる。

【梗概】「かつぎ上戸」しといふ音が不吉であるとして、忌む男が芝新門前の新道白子屋四郎兵衞樣新春の御慶申入れやすと言つて來た手代新吉に對して、元日早々縁起惡しと咎を卷き、よばよん門前のよん道よろ子屋よ郎兵衞樣よん春の御慶申入れますと言ひ直せといひ、新吉をよん吉と呼び、御新道を御よん道と、白木の三方をよら木の三方、仕方をよ方といふ。〔あくたい上戸〕俺は醉はないと言ひながら、對手に向つて憎まれ口を叩く。〔面白くない上戸〕老師の老爺が嚔をしながら、ひよろつく足を踏みしめて招待された家へ來る。そして主人の煙草入を批評し、煙草を貰つて飲む。馳走になつた米の相場や酒の値段などを聞いて不愉快な感を抱かせて闇々しく坐りこむ。〔くどい上戸〕人間僅か五十年、樂しむ所は二十年といふ文句を幾度となく繰返して女房を困らせる。〔小言上戸〕親子講をして人を招待し、小僧や女中に盃臺の置き方、酒のつぎ方、料理の順序など、細かい點に一々小言を言ふ。〔なき上戸〕酒を飲むと泣きたがる老婆、昔の事までいひ出して死んだ娘の[illegible]、惣領の不身持、二番目の息子が奉公先から離緣になつた事など、くど〱と取止めもなくいひ出して泣く。〔異見上戸〕若い者を捕へて先づ酒の講釋をする。若い者が獨身でゐては惡い、妻帶せねばならぬ。而も器量選みをしては駄目だなどと異見をする。〔ねぢ上戸〕すつかり醉ひつぶれて、誰から盃を貰つたかわからぬが、なほも對手になりて人を苦しめる。〔理窟上戸〕物識り顏に出たらめの講釋をする。酒は天の美祿といふが、天ではなくて天であるとか、酒好まざらんは玉の盃の底なきが如しといふ文句は、平親王涛盛入道前關白太政大臣の弟宮に、吉田の少將といふ人があり、その若君の石堂丸が、俠宗太といふ人買ひに殺されたのを悲しんで出家した吉田の兼好法師が、つれ〲草といふ草に書いたものだなど。〔腹立上戸〕酒を飲むとつまらぬことに腹を立てる。甚兵衞さんも客なら藤兵衞さんも客だらうス。ほんの事だがコレ。八右衞門さんが客ならば傳八さんも客だんべい。呼ぶからにやア客でなくつてどうするもんか。それならおれも客ぢやアねへかといふ風に。〔騷上戸〕醉うて無性に騷ぎたがる。俗惡な流行唄や義太夫を語つて、獨り悦に入つてゐる。〔しやべり上戸〕酒を飲むと喋ぎたがつて、べら〱と留めどもなくしやべる。歌を歌ひ、地口を連發して駄辯を弄する。

【構想】凡例に「希はくば其幸が身振にて見給へ。作意あらはれてをかしみ又讀むにまさる。彼其幸は（[illegible]）予が幼少の頃聞及びし、一瓢、白兎、三榮に等しき身振の達者、物眞似の名人也。余かれを愛する事久し。故に此書を授くといふ」とある通り、櫻川甚幸がために、彼の身振をも豫想して書いたものである。一種の自問自答體で、落語の影響がある。【史的地位】戲作者として立つた三馬には進むべき道はいくつもあつた。併し彼の成功は勿論滑稽本にあつた。寫實的に人間の性癖乃至性格を寫して滑稽を表はすにあつた。その途に進んだ第一の作としては本篇あたりが注意される。勿論深い意味の心理描寫ではないが、彼の爾後展開して行つた方針を立てた源は、こゝらに考へらるべきである。【影響】三馬が新境地を見出したものだけに、影響は彼自身の作の上に多い。直接間接に「當世七癖上戸」「四十八癖」などから「浮世風呂」「浮世

床」（各別項）などの上にこれを認めることができる。（滑稽本項參照）　（小池）

奈蒔野馬乎人 なまけのばかひと　黄表紙・洒落本作者【本名】鈴木氏。通稱、庄之介【別號】志水燕十・し水えん十・志水裏町・淸水つばくら・志水狸町・子規奈蒔野馬乎人・臺園西の陛士。【生沒】未詳【閲歷】四方赤良・朱樂菅江等の友人で、忍岡歌僻・唐來參和とは特に親交があり、幕臣であつたらしい。「江戸作者部類」は、「仕事に依つて罪を蒙り終る所を知らず」と記してゐるが、天明三年以後の作品は見當らない。【作品】（黄表紙）化物二世物語（天明元年版）〇身貌大通神略縁起（天明元年版、忍岡歌僻著）〇吃多風取帳（天明三年版）（別項）。（洒落本）一騎夜行（安永九年版）〇山下珍作（天明二年版）〇詰都洒美選（天明三年版）。



奈蒔野馬乎人筆蹟（蜀山人判取帳）

【批評】通人であつた作者は、洒落本に手をつけて、多くの體驗を語り、更に黄表紙に入つた。彼の黄表紙は、洒落本的色彩を多分に持ち、「身貌大通神略縁起」の如きは、三張羊に互つて、通を内容としてゐる。洒落・地口にも遊里的色彩が濃い。黄表紙作者としての態度は「吃多風取帳」（別項）に於て完成してゐる。通人としての冴えは勿論認められるが、丸味の籠つた作風である。「吃多風取帳」以後の作品は未見。挿繪は多く歌麿が畫いてゐる。　（小池）

【參考】江戸作者部類

男信 なましな　語學書　三卷三冊【著者】東條義門【成立】天保六年夏。但し初稿は文化五年に成り、初めは「撥韻假字考」と題した。【刊行】天保十三年三月刊。著者の奧書は天保六年六月二十二日。雲華院大含の序は同九年夏。【内容】本書は古くムとンの區別があつた事を論究したものである。義門は（一）我が上古にもン音があり、言葉にも用ひたであらうと推定し、殊に漢字の韻で鼻にかゝるものは一様ではないのであるから、これを寫す際に見てムとする事はあるまいとし、（二）我が國の古書には、ンに用ひたと思はれる字と、ムに用ひたと思はれる字とには明かに區別があり、その區別は韻鏡の法則に一致してゐる。即ち韻鏡十六攝の中、臻及び山に攝せられる文字の韻は「古事記」「日本書紀」「萬葉集」等に於て、ナ・ニ・ヌ・ネ・ノに轉用した例多く、又ラ行音、カ行の濁音及びチ、イに轉用してゐる。而して深及び咸に攝せられる文字の韻は、マ・ミ・ム・メ・モの音及びハ行の濁音に轉用して居り、この兩種は截然と區別せられてゐる。（三）古い地名・人名等に就いて見ると、上記の區別は儼然と存在してゐると說いて例證を舉げ、臻山所攝の字はン、深咸所攝の字はムとなると斷定した。以上でンムの研究の主要の點は終つたのであるが、（四）更にンム兩存說に對する反駁論十二條を自ら設けて、これを解決し、（五）次に韻鏡に依つてンムを識別する方法を記し、更に日常使用する漢字を五十音順に掲げてンムの別を示し、柔鬘に遡つてンムの別を論じ、併せて「ン」「ん」の字源を說いてゐる。なほ「男信」の稱號は上野國利根郡に存する男信と云ふ郷名があつて、ンとムとの區別を示す實例として適切である爲に、これを用ひたのである。【價値・影響】ン音が上代國語に存したか否かと云ふ事は國語音韻上の重大問題である。本居宣長は、「字音假字用格」「地名字音轉用例」「漢字三音考」「呵刈葭」（各別項）等に於て、ン音はム音から轉じて後世に生じた不正の音と主張したのであつて、當時上田秋成はこれに反對したけれども、その論據薄弱であつて、宣長の說が殆ど定說として認められてゐた。然るに義門は確實な論據と周到な研究とに依つて、宣長の說の誤りを指摘し、ンム兩音が古代から存した事を立證したのであつて、その國語音韻研究史上の功績は忘るべからざるものである。後に出た寛蔭の「音韻假字用例」（別項）は本書に依ることが少くない。「男信」よりも少しく遅れて刊行せられた關政方の「傭字例」（關政方參照）は、「男信」ほどに詳細ではないが、同じくンム兩存說を唱へたものである。義門は自說と符合する點多く、又自分の考へ及ばなかつた點を政方が解決した點もあつたので、大に喜び、「傭字例」の批評並に「男信」を政方に贈つた。その翌年（天保十四年八月）義門歿後、政方は「奈万之那の中にいさゝか疑はしと思ふふしをろ〲書出て、もし上人世にいまそからば、かくぞ問はまし と思ふ」まゝをしるしつけたものが、「男信質疑」一卷（寫）である。この外に岡本保孝に「男信存疑」一卷（寫）の著がある。この書は「男信」の稿本の時に、その說の不備誤謬を指摘したもので、義門は保孝の說に從つてゐるところ多く、男信の成立には重要な關係を有するものである。

【備考】「男信」も「傭字例」も共にンとム、即ちnとmのみについて研究したものであるが、釋行智は更に一歩進んで、その名著「悉曇字記箋釋」（寫本）の中に、語尾の ŋ についても研究してゐる。これは吾が音韻學史上特に注意すべき事柄である。　（能田）

並木 なみき　小說【作者】島崎藤村【發表】明治四十年六月、「文藝倶樂部」。【刊行】同四十一年、短篇集「藤村集」（博文館）に收む。藤村全集第五・藤村創作選集下卷（春陽堂）所收。

【梗概】近頃相川の思ふことは、會社でも評判になつてゐる。彼はもはや四十に近い。彼が仕事に倦み、前途のことを案じて、思ひ疲れてゐるところに舊友原が訪ねてきた。原は金澤の學校に勤めてゐたが、八年間の地方生活を引上げて上京して來ることになつたのである。その日相川は、勤めから歸りがけに古本屋をひやかしながら、久しく逢はない舊友たちの上を思つた。翌日は例によつて缺勤して約束通り訪ねてきた原を迎へた。二人は思ひ思ひのことを考へながら、散歩をつづけて日比谷に出てみる。そこには中年者の目には異樣に映る新しい時代の風俗がある。殊に地方に暮した原にとつては、見るものが珍らしかつた。彼等は「まだ〱吾儕の時代だと思つてゐるうちに、何時の間にか新しい時代が來てゐる」といふ感慨を語り合ふ。友達に分れて歸りながら相川は、原などの老い込んだのを笑へない氣がしてくる。その翌日、社の歸

りがけに自分たちが腰辨街道と名づけてゐる道を通りながら、丁度この溝端に同じ高さに揃へられ、枝も葉も切り捨てられて各自の特色を延ばすことの出來ない並木の柳を見て、「あゝ、並木だ」と相川は腰辨の生涯を胸に浮べた。「もつと頭を擧げて歩け」、かう彼は口の中でいつて見て、塵埃だらけになつた人々の群を眺め入つた。

【批評】淡々と書き流したやうな描寫の中に、胸を壓するやうな一脈の憂鬱を描いてゐる。チエホフが好んで描くやうな中年者の無氣力と哀愁が滲んでゐる。この作は作者の當時の感慨をもらしたやうな作で、すべての情熱や感傷を底にひそめて、只管にあるがまゝの現實そのものを見つめようとした時代の作品を代表してゐる。　（武重）

並木永輔（なみきえいすけ）　脚本・淨瑠璃作者

【通稱】綿屋治右衞門。別名、永助・榮助・榮輔等とも記す。【生歿】未詳【閲歴】綿商の傍ら劇作をなしたものと見られる。並木丈輔（別項）の弟弟子として宗輔の門に出で、並木正三（別項）等の先輩である。丈輔と同様に、操芝居にも歌舞伎芝居にも作の筆を執つたが、丈輔とは反對に、歌舞伎芝居の作者として、古く享保末より關係してゐて、操芝居の方は、寶暦四年から明和四年に至る十四五年間であつた。この間、豐竹座の退轉もあつて、豐竹座の淨瑠璃作者としては最後を勤めた一人と見られる。宗輔門下に丈輔と並び稱されたが、丈輔からは遙に後輩で、淨瑠璃の作は宗輔の死後に發表してゐる。豐竹座退轉の間、一時竹本座に聘されたが、やはり豐竹座の作者と見るべきである。

【作品・作風】〔脚本〕女夫星浮名天神（元文三年正月、角の芝居。おはつ德兵衞）〇今輪台貫島（寛保元年十二月、中の芝居。木津勘助）〇二橋死出渡（延享四年二月、中の芝居。高麗橋の要敵討）〇九州苅萱關（寶暦二年三月、中の芝居。苅萱道心）〇文月恨切子（明和元年八月、中の芝居。若野殺し）等。以上は、書卸し後數回上演されてゐるので、持當代の名狂言である。時代に世話に、かなり自由な筆致が窺はれる。脚色範圍の廣い點については、後輩正三以上と思はれるが、舞臺裝置の規模の大なる點で、社會的名聲は正三に越され、最後的成功を彼に奪はれるに至つたと見られる。合作者としては、並木笛風・松屋來助・松屋久右衞門・安田蛙文・中田萬助等が古く、後には並木正三・並木十輔等がゐる。淨瑠璃の方面では、「相馬太郎孝文談」（寶暦四年二月）を最初として、「星兜弓勢鑑」（明和四年正月）まで五六篇ある。その間、竹本座で「小夜中山鐘由來」（明和三年七月）を近松半二の下に綴つた外は、彼が常に立作者であつた。淺田一鳥・豐竹應律・黒藏主等が合作者である。書替物等が多く、歌舞伎脚本に比して、その價値は相當劣つて見える。作者としては歌舞伎脚本に得意であつたらうと思はれる。

【參考】並木正三一代噺〇戲財錄（並木五瓶）〇言狂作者西澤一風〇京攝戲作者考（木村默翁）〇音曲類纂（書籍月報）　（守隨）

並木五瓶（なみきごへい）（初代）　脚本作者【本名】未詳【別號】五八・吾八・五平・五兵衞・並木舍・淺草堂等。【生歿】文化五年（二四六八）二月二日歿。享年六十二【法名】彩雲英藻信士【墓所】東京深川靈巖寺塔中正覺院（大阪四天王寺西門前納骨堂の傍にも墓碑あり）【閲歴】大阪道修町の人。和泉屋と言ふ役木戸の伜で、煙草屋を營み、後、今宮で酒屋を開いた。並木正三（別項）の門であるが、辰岡萬作（別項）とも何等かの關係があつたやうである。大芝居に作者としてその名を現はしたのは、安永元年十一月大阪角芝居小川吉太郎座（日本萬歲寶曆出）が最初であり（二十六歲）、立作者となつたのは、安永四年度の京早雲長太夫座（二月けいせい鶴鳴寶）に於てであると言はれる（伊原氏說）。爾後主として大阪角芝居に在つて、尾上菊五郎・嵐雛助・中山文七・尾上新七・澤村國太郎・中村富十郎、及び淺尾爲十郎・四代市川團藏等のために筆を執つた。寛政六年冬には江戸に下つて都座の三代澤村宗十郎に屬し、八年度よりは桐座に轉じて寛政十一年度には共に大阪中座に出勤したが、同十二年度よりは再び團藏と結んで江戸中村座に活躍、瀨川菊之丞並に五代松本幸四郎と相携へて長く市村座に籠つたが「反古籠」に所謂「近來精力薄く、加ふるに去にしより老病こもごも至つた」ためであらうか、文化四年度を以て市村座を退き、河原崎座にスケとしてその名を連ねたが、幾許もなくして淺草堂と號した。淺草並木の雷神門に因んで、門人並木陸六を雷夾、同高輪宗夾を風治と名づけて茶見世を營んだ事は有名である。江戸座の俳諧を嗜み、劇書「戲財錄」（別項）の外に、「俳諧通言」（文化四年）の著がある。

【作品】五瓶の作として、その名を知り得るものは百十餘篇に達するが、主なる作品を列記する。〔上方時代〕天滿宮菜種御供（別項）〇錦祭貞綬鼓（安永六年七月角座）〇日本花赤城鐘鑑（安永六年十二月角座）〇金門五山桐（樓門參照）〇袖簿播州廻（安永八年三月角座）〇女節用衣紋考見（安永九年四月角座）〇南陸艶抄書（同年同月同座切狂言）〇歸命曲輪文（別項）〇けいせい黄金鯱（別項）〇けいせい倭荘子（天明四年正月中座）〇思花街容性（天明四年八月角座）〇浴陽見物左衞門（天明四年九月角座）〇弓勢金平鑑（天明四年十一月角座）〇義經千本櫻（書き替、天明五年十一月角座）〇けいせい彩衞池（天明五年十二月）〇大漆續懐富（天明六年三月大西芝居）〇仇討賽永紀（天明七年七月大西芝居）〇大和會見取替長（天明七年十一月角座）〇けいせい金觴鉄（天明八年三月角座）〇網風俗文選（寛政元年三月京亀屋座）〇漢人韓文手管始（別項）〇入間詞大名賢儀（寛政四年正月中座）〇雨下知情秤旗上（寛政四年四月中座）〇五人切五十年廻（同上切狂言）〇比翼鳥邊山（寛政四年六月京亀屋座）〇平井権八吉原鶴（寛政五年三月角座）〇島廻戲聞書（五大力參照）。〔江戸時代〕閨訥子名歌譽（寛政六年十一月都座）〇江戸砂子慶曾我（五大力參照）〇渡雁操吉原雙育（寛政七年七月都座）〇源平柱礎曆（寛政七年十一月桐座）〇隅田春妓女容性（別項）〇青樓詞合鏡（寛政九年正月桐座二番目）〇月武藏野秋狂言（寛政九年七月桐座）〇富岡戀山開（別項）〇滑稽漂花饒（寛政十年三月桐座）〇傀儡漢宮秋（寛政十一年正月大阪中座。傾奇作書開錄上卷「新大極寶悟新聞」「同歌舞伎調色の謎」參照）〇積陽長兵衞（寛政十二年正月中村座）〇男毀女持門（享和元年十一月市村座）〇江戸紫由緣十德（享和三年正月市村座二番目）〇略三五大切（文化三年正月市村座二番目）〇河原噂京諺（同上）。

【作風・史的地位】元祿期に完成した現實主義の文藝思潮は享保期を經て上方に沈滯固定したが、これを再び整理したものが明和・安永以後寛政に至る江戸文藝の思潮であつた。本質的には全く非現實主義的であるが外形的には寫實主義的な態度が一般に要求されてゐる。

五瓶の持つ瑣末的な寫實主義的態度と、常識的な合理主義的態度とが江戸劇壇に迎へられた理由がこゝに在る。彼の狂言作者としての生涯は、「黄金鯱」や「衣紋考見」に端的に示されてゐるロマンチックな古典的傾向から「五大力」や「富岡」に現はれてゐる寫實的傾向への展開の過程を明示するものであつて、結局上方後期の文藝思潮が江戸前期の文藝思潮に推移する過程を一身に體現してをり、この點に彼の文藝史的重要性があり、上方狂言の江戸への移入者と謂はれる所以でもある。次期の南北が五瓶と江戸根生えの治助との統一であり、更に默阿彌が五瓶と南北との統一であつた點も、五瓶の寫實主義と合理主義とが示す知的傾向が、江戸劇壇に殘存してゐた固有の感覺主義・非知的傾向を克服して行つた必然の歴史的展開として始めて理解される。

【參考】戲財錄（燕石十種第一）〇晴念刊違筆（燕石十種第二）〇傳奇作書（新群書類從第一）〇京攝戲作者考（續燕石十種第二）〇紙屑籠（同上第二）〇反古籠（同上第二）〇金曾木（日本隨筆大成第一期第三卷）〇作者槪おろし（新群書類從第三）〇並木五瓶の事を記す（三木竹二「つきくさ」所收）〇演劇通史花房柔實〇名人忌辰錄（關根只誠）〇狂言作者の傳統（第六）伊原青々園（早稻田文學明治二九ノ一七）〇近世日本演劇史（同上）〇世話狂言の研究　小山内薫・吉井勇・長田秀雄（古劇研究會）〇歌舞伎狂言傑作集第三卷解說（坪内逍遙）〇五瓶・南北とその時代　近藤忠義（早稻田文學昭和二ノ七）〇並木五瓶研究　伊原青々園（新潮社版日本文學講座）　（近藤）

並木五瓶（なみきごへい）（二代）　脚本作者【通稱】野々山正三郎【別號】篠葉山人【生歿】明和五年江戸に生れ、文政二年（二四七九）七月七日同地に歿す。享年五十二【墓所】深川靈巖寺中正覺院【閲歴】本所割下水の旗本、野々山大膳の二男。放蕩の結果劇界に入り、初代並木五瓶の門弟となつて、初名篠山正三郎、後に篠田金治と改め、三代坂東彥三郎に隨身してゐたが、文化十三年中村座の顏見世に立作者に昇進、文政元年、師名を相續して間もなく歿した。【作品】不破名古屋雪拂（文化十三年十一月中村座。伊達騷動の顏見世狂言）〇頃櫻曾我湊（文化十四年三月中村座。黒船忠右衞門と濱永清玄）〇行末尾鳴戶白浪（文化十四年九月中村座。飯沼の十郎兵衞）。　（渥美）

並木五瓶（なみきごへい）（三代）　脚本作者【別號】並木舍【生歿】寛政二年（二五一五）江戸に生れ、安政二年十月十四日同地に歿す。享年六十七。【墓所】深川靈巖寺中正覺院【閲歴】二代並木五瓶の門人で、初め篠田魏六といひ、中頃、師の舊名を襲うて篠田金治となり、天保四年十一月、三代並木五瓶となり、同時に立作者に昇進した。【著作】〔脚本〕四天王劇場寄初（天保四年十一月森田座。二代瀨氏の顏見世狂言）〇富平家世盛（天保九年十一月河原崎座。淺瀨之丞顏）〇御攝曳綱拔（天保十年十一月河原崎座。二代瀨氏の顏見世狂言）〇勧進帳（天保十一年三月河原崎座。歌舞伎十八番）〇聰訪忠臣鞍（天保十一年五月河原崎座。忠臣藏の前驅。由良之助の夢）。【草雙紙】五十三驛梅東路（嘉永元年、二世歌川豐國・歌川貞房畫。弘化四年市村座所演「尾上梅壽一代噺」を譯る）〇伊呂波藏水滸傳（嘉永二年、二世歌川豐國畫。高井美十傳）〇五十三驛錦絵双紙（嘉永六年、二世歌川國貞畫。五十三驛狂言改作）。　（渥美）

並木十輔（なみきじふすけ）　脚本作者【別名】十助とも記す。【生歿】未詳【閲歴】並木正三（別項）の門下に、並木翁輔と並び稱され、京阪の歌舞伎芝居に活躍した作者である。正三に何時からついたかは明かでないが、奈河龜輔・並木五瓶（各別項）よりも先輩ではあるまいか。寶暦年中より天明年代に至るまで、一方の立作者として名作を發表してゐる。【作品】「けいせい陸玉川」（明和四年正月、中の芝居）（別項）や「けいせい咬噌吧恋文」（明和七年二月、中の芝居。大内騷動）等は傑作の部に屬する。正三の「天竺德兵衞聞書往來」（別項）や龜輔の「殿下茶屋聚」（別項）等には、彼もその一部に執筆してゐる。

【參考】言狂作者西澤一風〇脚色餘錄（同上）　（守隨）

並木丈輔（なみきぢやうすけ）　淨瑠璃・脚本作者【別名】丈助とも記し、暴丈助ともいふ。本名未詳。【生歿】未詳【閲歴】曾根崎新地に貸席を業としてゐたと傳へられる。享保年中の末頃から寛延年代にかけて、豐竹座の淨瑠璃作者として活躍した傍、大阪の歌舞伎芝居のために脚本を書いて、當時の上方劇界に大に氣を吐いた。並木宗輔（別項）門下で、並木永輔（別項）と並び稱され、並木正三（別項）の先輩として、彼が歌舞伎から操への轉向の路を拓いたとも觀察せられる。宗輔へ入門の時期も明かでないが、享保年中に宗輔に就き、安田蛙文（別項）の後をうけて、師を助けたものと思はれる。今日知られてゐる範圍では、享保十八年七月興行の「茶俗人吾妻雛形」が淨瑠璃の處女作であるが、その間、寛保・延享の交は、專ら歌舞伎芝居に屬した。かくて前後二十年間ほどの作者生活と見られるが、比較的當り作多く、當時の名作者といはるべきである。

【作品・作風】淨瑠璃は十篇ほど算へられるが、享保年度の分は、宗輔を立作者とした合作である。「萬屋助六二代褂」（享保二十年五月）や「苅萱桑門筑紫轢」（別項）等は有名である。彼が立作者となつてからのものでは、「容競出入湊」（寛延元年正月、鳥舟）、「八重霞浪花濱荻」（同二年三月、かしくと洲崎屋敷の心中と綿崎傳場の喧嘩）、「十輪物ぐさ太郎」（同二年十一月、千刻伴兵）等は名篇といふべきで、歌舞伎にも屢々上演された。「八重霞」は事件より十日以內で書卸し上演したので大評判をあげた。「出入湊」も非常な當り作であるが、これは既に歌舞伎でも評判を擧げたものである。彼が立作者時代の合作者としては、安田蛙文・淺田一鳥等がゐる。脚本では「形見噂浮名奥島」（寛保三年五月、中の芝居）や「東寶我宮士見郷」（延享元年十一月、大西芝居）等も知られた作であるが、最も名作と思はれるものは、「黑船一世一代男」（寛保三年正月、大阪中の芝居）である。馬子頭の庄兵衞が、歌道の儀で根津四郎右衞門と達引があつた事實を脚色したので、四郎右衞門の註文もあつたと傳へ、姉川新四郎の案も加はつたらしく、殊に見る當り狂言であつた。前述の如く淨瑠璃に書き替へられて好評を得たのも當然と思はれる。脚本の方面での合作者には、澤村文治・松屋來助等がゐる。かくて彼の作風は淨瑠璃と脚本とを問はず、時代より世話に得意であつたやうである。爾後、世話物が從來の切狂言式の簡單な構想に止まらず、規模を大に、複雜なる構想を持つに至つたので、それ等の傾向を示した丈輔等の功績は十分認められねばならぬ。並木正三もその出發當時は、丈輔等に注目したところ、砂からぬものがあつたと思ふ。

【參考】戲財錄(並木五瓶)○訴事聞書往來○南水漫遊(濱松歌國)○言狂作書(西澤一鳳)○京攝戲作者考(木村默老)○歌曲類纂(豐竹月岑)○淨瑠璃大系圖(竹本長門太夫)　(守隨)

並木正三(なみきしやうざう) 脚本作者【本名】幼名は久太郎。通稱高砂屋平左衞門【別號】當正軒。作者名として初め泉屋正三を名乘り、後、大西庄(正)三ともいつた。【生歿】安永二年(二四三三)二月十七日歿。享年四十四。【法名】當譽正三居士【閱歷】正三の父は、初め雲州侯に仕へてゐたが、辭して大阪に到り、堀江に住んで植物から油を搾る法を研究してこれを業としてゐたといふ。奴正兵衞と呼ばれて人にも知られ、道頓堀扇子屋に遊ぶ頃、その娘との仲に久太郎を儲けたが、後、故ありてその妹と芝居茶屋泉屋に入聟となつたので、久太郎は泉屋で育てられた。かくして幼時は歌舞伎芝居や操芝居に出入して、この社會で成長した。延享元年、父正兵衞が出羽芝居に關係した時、少年の彼は、手づま機巧の水船仕掛を工夫して人目を驚かしたといふ。處女作は寛延元年八月十一日初日、大西芝居の「鍛冶屋娘手追噂」である。この時は泉屋正三と名乘つた。寛延三年、並木宗輔(別項)に入門して並木と改め、一時豐竹座に抱へられたが、院本作者としてよりも、歌舞伎脚本作者として奮闘し、以來、主として大阪の三座に働いた。早くは、坂東豐三郎・三桝大五郎等のために、後には中村歌右衞門のために多くの作を書いた。家業として菓子屋を營み、高砂屋と稱し、宗右衞門町に長く住んで町年寄をも勤めてゐた。孝心あつく、二階に座敷を造り井戸を構へて老父を慰めたといふ。寶暦十年の頃は吉左衞門町に住んだ。安永元年秋から胸を病んだが、臥床する程でもなく年を越し、翌年春、「日本第一和布苅神事」を書いたのを最後とする。上演は歿後一月過ぎであつた。子は淺尾正三と名乘つた。寛政中、中の芝居前の茶屋の主人が二代目正三を繼いだが、一篇の自作もないと傳へる。但し古狂言に對する物知りのため重寶がられて、俗に正三隱居といはれたといふ。十三回忌には主な門弟によつて追善本讀會が催された。正三は宗輔に就いて作劇法を學んだが、歌舞伎作者として終始したので、正三を以て歌舞伎作者の並木系の祖とする。爾來並木系は、主として上方に於ける作者界の一大勢力を成した。並木翁輔・同十輔(別項)・同利助・奈河龜輔(別項)・並木五瓶(別項)等は門弟中、名の聞こえたものである。

【著作】歌舞伎脚本を主として、他に淨瑠璃數種がある。(脚本) 現在までに名題の知れた作は百種以上に上るが、この中には書替等も少くない。世話物が三十餘種、他は時代物に屬する。名作と思はれるもののみを掲げる。(一、時代物) 大和國井手下紐(寛延二年十二月大西芝居。織田騒動に興金茂右衞門)○幼稚子敵討(寶暦三年)(別項)○けいせい天羽衣(同年十二月)(別項)○敵討一休噺(寶暦四年九月中の芝居。上杉騒動)○道中千貫樋(同年十二月)(別項)○天竺德兵衞聞書往來(同七年正月)(別項)○三十石艠始(同八年十二月)(別項)○釋太郎天狗酒醼(同十一年正月)(別項)○竹箆太郎怪談記(同十二年七月角の芝居。竹箆太郎傳說)○惟喬親王魔術冠(明和三年三月中の芝居。惟喬惟仁御位爭)○けいせい桃山錦(明和五年二月早雲座。豐臣軍記)○東山殿女狩(明和七年二月角の芝居。足利將軍)○桑名屋德藏入船物語(明和七年十二月)(別項)○三千世界商往來(安永元年正月)(別項)○近江源氏噂講釋(同年三月同座。近江源氏)○日本第一和布苅神事(安永二年三月、中の芝居)。(二、世話物)鶴濡紗絞染(寛延元年十二月角の芝居。かしく)○高臺橋鮫鱗島(寶暦三年閏二月角の芝居。雷電の喧嘩)○四橋出入の勝鬨(明和元年六月布袋屋座。古手屋八郎兵衞)○往古大坂村在所由來(明和三年十一月角の芝居。お染久松)○宿無團七時雨傘(明和五年七月)(別項)。外に所作事も相當に綴つた。地は宮薗節が多い。又時代といはず、世話といはず、おどけ狂言をも書いてゐるので、彼の作劇の範圍は極めて廣い。世話物には一夜漬の狂言が多くて、それ等は正しく彼の創作と認められるであらうが、一體には淨瑠璃との交渉が深く、淨瑠璃の當り作を書き替へた類も相當に見出される。宗輔に入門し、豐竹座作者としても活動した正三としては當然であるが、彼の作劇法には淨瑠璃操芝居から得た部分が甚だ著しい。大道具に機巧を應用して屢々觀衆を驚歎させた事もその一である。「けいせい天羽衣」「三十石艠始」「東山殿女狩」の如きは、それ等の代表作に屬する。ぶん廻し即ち後世の廻舞臺は、彼の發明と傳へて名高い。部分的な脚色法に想像以上の手段を用ひたのも、當時の淨瑠璃界の影響が少からぬと思ふ。「男女相生鑑」や「大坂神事揃」等、その尤なる例である。これ等の案は、一面彼の性質に根ざす點も見逃す譯にいかぬ。狂言の名題にその例を見る事も多い。「三十石艠始」は最も有名であるが、「東西合目鏡」「大松百助齋六法」「中臈妖龍宮島臺」「尾上菊五郎不登噺」等、人の意表に出でた類である。彼の作には、後世「綸入根本」(別項)として出版されたものが甚だ多い。(淨瑠璃) 宗輔についたが、忽ちその死にあつた爲めか、宗輔の遺命により、一時、豐竹座に留まつたとも傳へるが、作者生活は短い。○增補日蓮上人御法海(寶暦元年十月豐竹座。宗輔作の增補)○一谷嫩軍記(寶暦元年十二月)(別項)○四天王寺伽藍鑑(近松作の改作。但し寶暦七年四月、大松百助座の當り狂言を讀本淨瑠璃に改めたもの)○新舞臺謠曾の三番叟○許館狐馬醉○容競唐土噺○當世操樣浮名楓○關取二代勝負附(以上明和五年九月竹田芝居)等。これらの作に於て脚本との交渉は極めて密接であつて、脚本の當り作が後世淨瑠璃に書き替へられた類も少くない。【雜著】數種ある中に、化粧法を記した「容顔美艶考」が當時相當に流行して有名であつた。

【人物・作風】歌舞伎作者としては、拔群の稱譽を得て、作劇法について近松門左衞門(別項)と並び、才智の點で櫻田治助(別項)と較べられたが、これ等は淨瑠璃の名作者たる宗輔を師ふこと鮮からぬものがあるためもあり、他面、父親正朝から繼ぐ性質の然らしむるところもあると思ふ。彼は譯文の名人とも言はれて、書替狂言の才を認められたが、即ち原作の筋が發見されながら、新たな脚色に十分な價値を認められたので、こゝに淨瑠璃に通じた型が巧妙に描寫されてゐる。而してそれ等を活躍させるに成功した機巧の應用は、彼の中に潛む才智に據ると思はれる。彼の所謂名作は多くはこの方面を主とした脚色に成功したものであり、觀衆を驚歎させたのであつた。かやうにして彼の脚色法は、歌舞伎方面で從來經驗せぬ驚異であつたが、その成功のためには、彼の人物が持つ篤實の點が、大に作用するかに察せられる。父親に對して孝子であつ

た逸話が傳へられ、歌右衞門との親交が記されてゐること等は、よくこの點を物語つてゐる。從來この社會に瀰漫してゐた役者側の横暴は、彼の前に極めて從順に統一されたので、作を成功に導いた一の動機ともなつたと信ずる。かくて宗輔から讓られた作劇法によつて彼の成就したものは時代歌舞伎であつた。操芝居の隆昌によつて元祿後の歌舞伎脚本が、淨瑠璃の上演又は書き替へのみに僅かに命脈を保つて來たものが、彼の奮闘により、操芝居の衰運にも乘じて、その後歌舞伎芝居の全盛期を招いたことは、偉大な功績である。彼の門葉は、更にその缺を補つて行つたので、歌舞伎脚本史上の彼の地位は甚だ高いものがある。(並木丈輔・並木永輔參照)

【參考】並木正三一代噺○戲財錄(並木五瓶)○京攝戲作者考(木村默老)○言狂作書(西澤一鳳)○浪速人傑談(秋田義一)○近世戲曲研究(守隨憲治)○江戸歌舞伎(同上)(日本文學聯講)　(守隨)

並木宗輔(なみきそうすけ) 淨瑠璃作者【通稱】松屋宗介【別名】享保年中は作名を主に宗助と記し、竹本座時代は並木千柳と稱した。【雅號】介柳・市中庵など。【歿年】寶暦元年十一月中旬か(年代に寛延二年、或は三年說がある外、月日にも九月七日說がある)。享年五十七。【法名】未詳【墓所】未詳【閱歷】大阪の人。もと俳諧の嗜みから戲作道に入つたかと思はれる點があるが、斯道の素養は明かでない。豐竹座の名作者といはれた西澤一風(別項)につき、淨瑠璃作者として名を出したのであるが、別に竹田出雲の門との說も傳へられてゐる。享保十一年豐竹座に、師一風の下に相弟子たる安田蛙文と共に、「北條時賴記」に名を連ねたのが最初である。爾來二十六年間、大體淨瑠璃作者として一貫した生涯を了へた。西澤一風の後をうけ、豐竹座の立作者として竹本座の竹田出雲・文耕堂・三好松洛等に對抗して、よく豐竹座のために奮闘したのであつたが、寛保元年の頃から、何等の譯あつてか、執筆は一時稀れになつて、爲永太郎兵衞(別項)がこれに代つてゐたが、やがて延享二年、聘せられて作者無人の竹本座に轉じた。當時は最も好調に、彼一代の上からも、淨瑠璃史上からも、名作を多く書いた。歿する年再び豐竹座に勤め、「一谷嫩軍記」(別項)の三段目を書きながら、華やかな一代を結んだと傳へる。その間、寛保元年、豐竹越前少掾(別項)の一行に加はつて、江戸肥前座に下つたが、居ること一年で上阪した。作者としての並木姓は宗輔に起るので、爾來操芝居・歌舞伎芝居に於ける作者道の一系統をなす。門葉には、並木丈輔・同永輔・同鯨兒・同正三(別項)その他の名が擧げられる。歌舞伎作者としては正三が成功したので、その方面では正三が並木の系祖と見られてゐる。並木千柳の名が後世歌舞伎方面で繼がれてゐる。彼自身も歌舞伎作者として名を連ねた事もあるが、名作は出なかつた。

【作品】一生の作品四十餘篇が擧げられてゐて、大體は時代物である。尤も脚色の發達によつて時代世話の作柄のものも相當見うけられる。世話物と認められるのは、「和泉國浮名溜池」(合作者安田蛙文。享保十六年四月、近松の五十年忌歌念佛の改作)、「萬屋助六二代稀」(豐竹。作者並木丈輔。享保二十年五月)、「茜染野中の隱井」(豐竹。作者原田由良助。元文三年十月。鶴屋南浮名色揚の改作)、「夏祭浪花鑑」(別項)、「雙蝶々曲輪日記」(別項)等である。選集に「並木宗輔淨瑠璃集」(續帝國文庫)・「海音・宗二・出雲・宗輔傑作集」(有朋堂文庫)等がある。作の傾向を見るに、合作者によつて自ら次の如く三區分せられる。(一)合作者安田蛙文時代。享保十一年から同十七年に至る。一風指揮の下に執筆を初めたが、宗輔のためには修業時代の觀もある。大體題材も南北朝以前に選び、專ら時代物を書いた。名篇としては次の如きものがある。「北條時賴記」(別項)(一風作と認められる)、「攝津國長柄人柱」(別項)、「尊氏將軍二代鑑」(享保十三年二月。足利直義謀反)、「後三年奧州軍記」(同十四年正月)、「忠臣金短冊」(同十七年十月。義士)等。(二)合作者並木丈輔又は單獨作時代。享保十八年から延享元年に至る。但し寛保年中は、執筆から遠ざかつてゐるから、元文までとも見られる。世話物の修練期とも考へられて、時代世話の傾向が發見される。「莠伶人吾妻雛形」(享保十八年七月。縮張師から材をとつて、後の「攝州合邦辻」を生む)、「南都鑑後藤目貫」(別項)、「苅萱桑門筑紫𨏍」(別項)、「和田合戰女舞鶴」(別項)、「安倍宗任松浦簦」(單獨作。元文二年正月。後に「奧州安達ヶ原」を生む)、「釜淵雙級巴」(別項)、「狹夜衣鴛鴦劍翅」(單獨作。元文四年八月。鹽谷判官と高師直。「假名手本忠臣藏」に暗示を與へた)、「鶊山姫捨松」(單獨作。元文五年二月。當麻中將姫の改作)等の相當な名篇が見える。淺田一鳥との合作「道成寺現在鱗」(寛保二年八月)は歌舞伎に影響した。(三)竹本座時代と晩年。從來の傾向を集中させた時代で、淨瑠璃作者としての完成期と見られる。柔剛宜しきを得て、道義を尚ぶ間に、よく人情を漂はせた作を綴つた。「軍法富士見西行」(合作者、竹田小出雲・小川半平)、「夏祭浪花鑑」(合作者、三好松洛・竹田小出雲)、「菅原傳授手習鑑」(合作者、竹田出雲・三好松洛・竹田小出雲)、「義經千本櫻」(竹田出雲・三好松洛)、「假名手本忠臣藏」(竹田出雲・三好松洛)、「雙蝶々曲輪日記」(合作者同上)、「源平布引瀧」(合作者、三好松洛)(各別項)等は、悉く竹本座のために書いた。絶筆の「一谷嫩軍記」(別項)とその前の「日蓮上人御法海」(別項)とは、再び豐竹座に戻つての作である。

【作風】右の如き合作者の變遷によつて、大體の作風の變化も窺はれるが、又宗輔自身の作者としての展開の跡を辿ることも出來る。安田蛙文とは相弟子らしいが、作の傾向は相違してゐたやうで、蛙文との合作には堅さが著しく見える。殊に丈輔の場合と比較するに、後者にはかなり抒情的傾向が認められる。これ等の時代を劃たことが宗輔自身の筆力を圓熟させたとも考へられるので、「和田合戰女舞鶴」や、「釜淵雙級巴」に於ける情味の濃い時代物を産んだ所以である。又一面に於て當時既に「狹夜衣鴛鴦劍翅」の如き構想上の成功をも收めたのは、彼自身の筆力の習熟にもよるが、相反する二傾向を持つた蛙文と丈輔との如き作者との交渉が、大に作用してゐる所もあると思ふ。竹本座に於ける出雲・松洛等に伍して何等の遜色なく、淨瑠璃史上稀に見る名篇の出現時代を齎したのも當然であらう。「手習鑑」に於て、松洛と千柳と出雲とで、二段目三段目四段目の別れを書き分けた趣向は、また各々三樣の作風を示してゐるとも見られる。宗輔の師一風の特徴は、好んで改作をなし、又その巧妙さにあつた。彼も亦これを學んだが、彼に於てはそれが改作以上のものに到達してをり、ために構想の複雜化、内容の照應等に十分成功したのであつた。彼が時代物の名作者として、海音・出雲・文耕堂と共に、淨瑠璃四天王と呼ばれたのも當然である。

【參考】聲曲類纂○戲財錄（燕石五集・杏園月岑）○京攝戲作者考（鳥有山人）○傳奇作書初編（西澤一鳳）○晴翁漫筆（續燕石）○江戸時代戲曲小說通志（豐本園主人）○淨瑠璃名作集上解說（黑木勘藏）○近世邦樂年表　（守隨）

奈與竹物語繪巻（金比羅神社藏）

雙樹落葉 なみきのおちば　隨筆　三卷【著者】名島政方【刊行】天保十二年【解說】本書は曩に文政年中「蹈鞴」（名島隨筆）（別項）と題して刊行した二卷本を三卷に更めたもので、內容は同じである。谷川士淸閱、河齊多賀彥校。文政七年淸水濱臣、同四年柴田以文の序、同九年高橋知周の跋及び天保十二年河齊多賀彥の識語がある。　（和田）

名見崎德治 なみざきとくじ　「富本節」を見よ。

名寄 なよせ　「物盡し物揃へ」を見よ。

奈與竹物語 なよたけものがたり　「鳴門中將物語」を見よ。

奈與竹物語繪巻 なよたけものがたりゑまき　繪卷

【解說】讃岐金刀比羅宮所藏一卷。後嵯峨のみかどと或る女房との戀物語を畫いたもので、この話は「古今著聞集」にも見えてをり、群書類從にも「鳴門中將物語」（別項）の名を以て載錄されてゐる。寬政十二年の奥書によれば、後深草天皇が讃岐白峯寺に寄進せられたもので、繪は隆能、詞は爲家と傳へられてゐるが、勿論明かでない。詞繪とも各七段、濃彩の描寫で、大和繪が漸く類型化せられて來た鎌倉最末葉の製作と思はれる。なほ後世住吉如慶や淨田一蕙が、この繪卷を摸寫したものも世に傳はつてゐる。　（田中（一））

奈良繪本 ならゑほん　「刊本」「挿繪」を見よ。

奈良時代文學 ならじだいぶんがく　「大和時代文學」を見よ。

奈良柴 ならしば　音樂書　一卷【著者】原盛和（眞武太夫）【別名】三絃根元記【名義】卷末に記す著者の詠歌中の語による。【成立】もと森下の武士であつた著者が、若い頃から諸流淨瑠璃を究め、明三絃から歌舞伎の三絃にまで達したが、元文元年八月十五夜に、わが才の足らぬを慨んで、三絃唄本まで悉く燒却したのであつたが、その後、彼に賴つて江戸の淨瑠璃三絃等に關し、その由來や內容を質した數名の人々に對して、自ら書き送つて敎へ傳へたことがあつた。その數包の書留を纏め編んだものが本書である。この成立の年は明和四年であらうか。現在所傳のものは、後人の追記が加はつてゐるらしい。故に形式的に整理された結果は見られないが、所傳の稀な江戸淨瑠璃や唄について、音樂に中る言說も尠からず、甚だ貴重な文獻である。【諸本】自筆本によつて傳へられたものが、「燕石十種」に收められてから世に擴まり、活版にも翻刻され、溫知叢書第八編にも收む。【解說】まづ淨瑠璃節の發生から、江戸淨瑠璃の系統を說いたが、薩摩派を擧げず、杉山丹後掾（別項）を江戸淨瑠璃の根元とする說、注目すべき所說がある。次いで半太夫操座の流れ物名題を詳細に列擧し、更に江戸節三絃の由來から、名手山彥源四郎を稱へ、俱舍論鈔の詞章、七月芝居風流踊の解說、小舞十六番の歌詞を記し、七段獅子由來に亙つて江戸歌舞伎の傳統に及んだ。中に見て淨瑠璃は操を體とすべしといひ、歌舞伎に於て徒らに狂ひ廻るは、踊りであつて所作ではないと喝破した如き、傾聽に値ひする。

【參考】溫知叢書第八編解說　（守隨）

奈良朝文法史 ならてうぶんぽふし　語學書　一冊【著者】山田孝雄【刊行】大正二年五月【內容】本書は著者の「日本文法論」（別項）を前提とし、日本文法史論の第一編として、專ら記錄に現はれたものに依つて、藤原朝・奈良朝の文法を研究したものである。序論に歷史的日本文典編纂には、先づ第一に記錄に現はれた語法の變遷を精査せねばならぬと云ひ、次に文法變遷の跡を概觀するに、（一）奈良朝以前、（二）奈良朝期、（三）平安朝期、（四）院政鎌倉期、（五）室町期、（六）江戸期に分ち得ると云ひ、各時代の文法資料、文法の變遷を簡單に記し、次に現代文の亂雜であることを指摘し、文法史研究の必要を述べ、次に文法の歷史的研究に當り、品詞により變遷の著しいものと然らざるものとあるといひ、著者の所謂單語の四大綱のうち、用言と助詞は頗る變遷が多いが、體言と副詞は變化極めて少い。卽ち名詞及び數詞には文法的變化は殆どない。代名詞及び副詞には多少の變化があるといつてゐる。次に本論に入つて、奈良朝（藤原朝を含む）文法の研究資料としては、金石文・古文書及び書籍の類があるが、直ちに文法研究の資料となるものは、金石文では佛足石歌のみ、正倉院文書では寺院の緣起、宣命の草案など一二に過ぎない。書籍では「記紀」では歌謠及び僅少の假名書の部、「續紀」では宣命及び少數の歌謠のみ、「風土記」「法王帝說」「延喜式」等も亦上記のものと同樣であり、「古語拾遺」以下は、若干參考になると云ふに過ぎない。かくして當代文法の直接資料としては「萬葉集」一部があるに過ぎない。而もその「萬葉集」も直ちに資料になるのは、假名書の部分たる卷四・十四・十五・十七・十八・二十の六卷だけであつて、確實な資料は極めて僅少であると云ひ、次にこの時代には話語と文語との區別はなかつただらうと考へられるから、今この區別を立てないと記してゐる。次に愈々當代文法の研究に入つて、（第一）語論（一、代名詞。二、用言。三、副詞。四、助詞。五、語構成の大要）（第二）句論（一、句の形式及び成分。二、句の運用。三、句の接合ミ排列）（第三）東歌にあらはれたる特殊なる語法、と章をわかち、多數の用例を擧げて歸納的に研究してゐる。【價値】文法史研究の必要は何人も痛感しながら、從來何人も着手しなかつた。著者はこの必要にして而も困難な事業を、初めてなしたものであつて、多少の不備や缺點はあるけれども、新事實を闡明したものもあり、日本文法史の起點となる時代の文法を全般的に明かにして、國語史の研究（及び國語系統の研究）に貴重な資料を提供するものであつて、國語學上に貢獻するところ實に甚大なものがある。【備考】本書はもと「平安朝文法史」（別項）と併せて一書にする考で著作されたものであり、殊に本書の補遺が「平安朝文法史」の卷末に載せられてゐるから、「平安朝文法史」を併せ見るべきである。　（龜田）

奈良傳授 ならでんじゆ　「歌道傳授」を見よ。

奈良版 ならばん　「刊本」を見よ。

成田山分身不動 なりたさんふんじんふどう　脚本　五幕八場　時代物【作者】三桝屋兵庫（市川團十郎）【名義】團十郎の信仰佛たる成田山不動が一體分身の靈驗を示す幕切れの場面による。角書の「少將百夜車 松風通小町」は三番目による。【諸本】正本屋小兵衞版繪入狂言本一冊が現存する。元祿歌舞伎傑作集上卷所收。【初演】繪入狂言本の刊行によると、元祿十六年四月興行と見えるが、「金の揮」や「江戸芝居年代記」によると、二月から開演され、不動の部分は七月まで持越したやうにもある。江戸森田座。淨瑠璃、薩摩掾外記。ワキ、左平太。

〔役割〕紀貫之（鈴木平吉）、竹の內武勇之介（森田勘彌）、村雨（市川竹之助）、中納言行平（村山四郎次）、松風（歌村十次郎）、深草の少將（多門庄左衞門）、在原業平（橋本金作）、小野小町（荻野澤之丞）、大伴の黑主・胎藏界の不動（市川團十郎）、大伴のたきとう（荻野又九郎）、空海・金剛界の不動（市川九藏）、下人とり助（西國兵介）等。

【題材】團十郎の祈り籠たる不動尊を拉し來つてはゐるが、實はその靈驗談ではなく、最後に靈像の示現があるだけで、松風行平と小野小町とが主な題材を成してゐる。而も部分的に見れば、謠曲物といふこともできる。「松風」「昭君」（序）、「草紙洗小町」（二）、「一角仙人」「通小町」（三）、「天鼓」「角田川」（四）、「關寺小町」（五）等である。一角仙人の件は、既に「鳴神」（別項）として、從來歌舞伎に好評を博した脚色である。（歌舞伎評判記參照）

【梗概】（序幕）（須磨の浦）流刑中の在原行平は汐汲女に馴染みて、はかなく慰められてゐたが（汐汲）、この度、召還の宣旨下り、勅使として紀貫之・文屋康秀等が下り、在原の執權竹の內武勇之介も從つた。同じく流刑に處せられてゐる呉熊大とんなる惡人は、行平が馴染んだ村雨に迫り、肯んぜぬのを怒つて釜に打込んだが、危く武勇之介に救はれた。行平の上洛に、村雨の姉松風も歎きに沈み、同行を乞うたので、武勇之介は姉妹の帶を汐に浮かべて判じたところ、松風の帶は沈んだので、村雨のみ伴ふ事となつた。（二幕）（禁裏）彌生も末なるに花が咲かぬため、待花の題で詠歌の宴が催される。然るに、小町が「待つ花に霞や闇の戸のくらし、ほのかに照らせ國の櫻木」と詠ずると花が開いた。人々の悅ぶ時、大伴の黑主が現はれて、「萬葉集」に見える古歌であるとて集を見せる。少將は傍から驚く小町に勸めて、草紙を洗はしたところ、正しく書き入れたものと判り、黑主は冠裝束を剝がれる。（行平館）松風が若衆にやつして訪ね、既に戀慕の情を斷つたと告げる。然るに行平が村雨と盃を交すと、その松風の姿は大蛇となり、止めると元の姿となつた。實は神泉苑の龍王と明かし、眞の松風は須磨で終つた由を告げ、又黑主が惡計の暴露れたのも水の故であるとなし、熊野に籠つて龍神を封じたから、急ぎ下つて色を以て距すべしと小町に敎へる。（三幕）

成田山分身不動（狂言本）

（那智山）黑主の行法中、喜撰は通風仙人、猿丸太夫は高陽仙人と稱して仕へる。小町は女染實となつて黑主に近つき、小町に似てゐると嚇される小野のお通と名乘り、遂に黑主の心を蕩かし、醉ひ倒させて注連繩を切つたので、龍は飛び去つた。小町は歸落する。（小野良稚館）少將は百夜通ひの約束で忍び入つたが、小町の寢間には隱男が臥してゐた。小町の兄良稚が詫めると、添臥は蠕蜥であつた。と、傍らの壺の內から黑主が現はれて小町にかゝつた。（四幕）（住吉社）小町は數度の不思議にも別條のなかつた事は、神の守護による所とて參詣する折柄、黑主の父たきとうが來て、黑主は戀の病で枕もあがらぬ由を訴へ、小町の娘狹衣の前から與へられた綾の鼓を打つたが、終に音の出ぬを悲しみ、傍の鼓が瀧へ身を投げる。（渡船場）黑主は成田不動へ參詣せんと、僧形にかへて渡船に乘つた。偶々乘り合はせた妻子にも姿を隱したが、鼓の音が響くと共に、船頭實は父たきとうが現はれ、一同に親子の名乘りをさせて消えた。併し黑主は小町を思ひ切れぬとて、自ら劍に貫かれて果てる。（五幕）（禁裡）歸朝した空海が參內し、葬海陛子に筆を投げて龍字を書き、奇瑞を示す。（關寺の邊）小町が狂ひ廻つて現はれたが、良稚等が來て、やうやう本復する。今迄の黑主は胎藏界の不動と現はれ、空海は金剛界の不動と現じた。【構想】名題に謳つた不動その物は、「兵根元曾我」（別項）に於けると類似し、全脚色には殆ど交渉がない。事實は小町の戀物語とも見るべきで、小町對業平の戀愛と、小町對黑主の關係を並立させて、劇的な連鎖を遂げんと計つたものである。但し當年の江戸歌舞伎に通ずる脚色法から見れば、強ち一貫した主題を求めるでもなく、偏に各場相互の情緒の關係が効果的ならばよいのであつて、この點では本作も相當の上作といへよう。二幕目で緊張の感がやゝほぐれ、三幕目に亙つて濡れ場に內憐感をそへたものが、次の四幕目では愁歎場となつて涙を求める。最後には狂ひを置いてゐる。業平よりは寧ろ黑主が活躍して各場を連絡させてゐる。一場面に最も多く情緒を盛つたのは三幕目の那智山であらうが、こゝは「鳴神」を挿入したものである。かく見ると、序幕が全く獨立してゐる事に氣付く。行平も松風・村雨も、この場の汐汲や帶引の所作を配する以外、全作に對して殆ど無用の題材たるに過ぎない。二幕目の盃事の場面は機巧の應用であらうが、甚だしく奇異な感を以て見られたであらう。又詞章は傳はらぬが、外記淨瑠璃が大に各場の所作を助けたであらう。【附記】市川團十郎は生地を下締とも傳へ、よ

つて成田山の不動を信仰してゐたと説かれるが、「兵根元曾我」の不動以來、信仰心の上にその莊嚴味に於て、江戸の民衆から喝采を得た爲めか、彼は屢々不動を演じた。本作では伜九藏に不動の藝を譲つたものとも言はれた。九藏事二代團十郎が不動を完成したので、由來代々市川家の至藝として傳はり、七代團十郎はこれを歌舞伎十八番（別項）の中に算へた。明治に入つて中絶してゐたが、現市川左團次によつて明治四十五年復興せられた。「鳴神」と「不動」との併合は、寛保二年に至つて、「雷神不動北山櫻」の名狂言を生んだ。（守随）

業平（なりひら）　歌人（六歌仙の一・三十六歌仙の一）【姓】在原【別稱】在五中將。在原氏の五男にて近衛中將の意。在中將ともいふ。【生歿】天長二年に生れ、元慶四年（一五四〇）五月歿す。享年五十六。【家系】阿保親王の五子、母は桓武天皇の皇女伊登内親王、行平の弟。兄弟の順序に異説があり、「三代實錄」には、仲平・行平・守平・業平とある。業平が五子であるならば、仲平の上になほ一人の兄があることになる。「本朝皇胤紹運錄」に、大江音人を加へて長子としてゐるのが誤であらう（大日本史）。【閲歴】嘉祥二年從五位下に敍し、

桓武天皇─平城天皇─阿保親王─行平
　　　　　　　　　　　　　　─守平
　　　　　　　　　　　　　　─業平─棟梁─元方
　　　　　　　　　　　　　　　　　─師尚
　　　　　　　　　　　　　　　　　─滋春（元滋春）
　　　　　　　　　　　　　　─仲平
　　　─伊登内親王

貞觀七年右馬頭、元慶元年中將に任じ、從四位上に敍し、同三年藏人頭に任じた。「古今集」に依つて知り得る事蹟は、（一）惟喬親王のお供をして獵狩に行き、貞觀十四年親王が御出家になつて小野に籠らせ給うたので、雪を冒して御庵室を御訪ね申した事。親王の薨去が貞觀十五年であるならば、この訪問は同年正月である。親王は文德天皇の第一皇子で御寵愛も深かつたが、外戚に權勢がなかつたので、皇位を繼がれる事ができなかつた（大鏡・日本史）。親王の御母は紀有常の妹靜子、業平の妻は有常の女である（紀氏系圖）關係上、親王の御不遇に御同情申上げたのであるとされてゐる。（二）五條の后の西の對に住まれた方（二條后）に關係があり、二條后が東宮御息所と申した時代（貞觀十一年より元慶元年迄）、大原野の行啓に近衛司として供奉した事。彼が東下りをしたのは二條后に忍んで通つた事が露顯した爲めとされ、或は后に忍び通ふ手段として出家したが、その後髪を生やすために奥州に下つた（江談抄巻十四）といひ、或は后を取り返される時髻を切られたので、髪を生やすために奥州に下つた（古事談巻二）ともいふ。江戸時代の學者は二條后に忍び通うた惡德を辯護して、藤氏の勢力を殺ぐ一手段であつたとしてゐる。（三）東下りをした事。「古今集」には杜若・都鳥の歌があり、「伊勢物語」にはその他淺間山・宇津山・富士山等の歌がある。東國に下つたとしては、道中の歌が少いとの故を以て東下りを否定する説もある。奥州八十島にて小野小町の髑髏を弔うたといふ説話もある。（四）伊勢に下り、齋宮に通じた事。「本朝皇胤紹運錄」には、師尚・滋春の母を齋宮恬子内親王とし、内親王を文德天皇皇女、母は惟喬に同じとある。（五）布引瀧に遊んだ事。（六）紀有常の女に通つた事。（七）母が長岡に住んでゐた事。（八）紀利貞が阿波介に任じて下るのを送別した事。（九）貞觀十七年基經四十賀の歌を詠んだ事。「後撰集」巻十六には「思ふ心ありて前太政大臣（良房）によせて侍りける」歌がある。表面上藤氏と抗爭したやうには見えぬ。（一〇）業平の家にゐる女に敏行が通つた事等である。「後撰集」に依つて知り得る事蹟は、（一一）伊勢と關係のあつた事。但し時代錯誤がある。（一二）「身の憂へ侍りける時津の國にまかりて住み始め侍りける」と詞書である。而して「古今集」中、三十首の業平の歌は、すべて「伊勢物語」中に見えるが、「伊勢物語」中に見えない業平の歌は、「古今集」には一首もない。「後撰集」中、業平の歌は十一首にて、内三首は「伊勢物語」中に見えるが、九首は物語外の歌である。「古今」「後撰」の撰者は、何から業平の歌と認める歌並に相當に長い詞書を引用したであらうか。「土佐日記」には、「業平の君の山のは逃げて入れずもあらなむといふ歌なむおぼゆる」とあつて、貫之は「古今集」撰修後約三十年にして、なほ業平の歌なるものを認めてゐる。「古今集」の場合は、「伊勢物語」が唯一の材料であつたとも考へられるが、「後撰集」には然らざる場合が考へられる。「古今」「伊勢」の前後は容易に決せられないが、現存「伊勢物語」の原形が「古今集」以前に存在してゐたと考へることは、必ずしも不合理ではない（伊勢物語參照）。「伊勢物語」のある部分が「古今集」の撰者によつて業平の歌と認められてゐることを以て推せば、「伊勢物語」にはなほ他の或る部分に業平の歌がある場合が考へられ、やがて「伊勢物語」全體が業平の事蹟を基礎としたものであると考へられるやうになり、業平の事蹟は豐富になり、業平が五條の后にも通じた（大鏡）ことになる。傳説化されてゐる業平と史實上の業平とを分離することは甚だ困難であるが、「大日本史」の如く消極的に傳説を認めなければ、事蹟そのものの中に文學的要素を含んでゐる業平の取扱ひとして不十分である。小野小町（別項）が傳説的美人として考へられてゐるに對し、業平は傳説的美男として考へられ、「三代實錄」には「體貌閑麗、放縱不拘、善和歌」と三つの性質を與へてゐる。「源氏物語」のモデルとして業平が擧げられるのは、この三性質に起因し、餘りに傳説化された爲めに、業平は吉野山に隱れて神仙となつたとさへ言はれるに至つたのである。

承和八年	右近衛將監（十七歳）
同　九年	阿保親王薨ず
同十二年	左近衛將監
同十四年	藏人
嘉祥二年	從五位下（二十五歳）
貞觀三年	伊豆内親王薨ず
同　四年	從五位上
同　五年	左兵衛佐
同　七年	右馬頭
同十一年	正五位下
同十四年	渤海の使を鴻臚館に勞ふ。惟喬親王御出家
同十五年	從四位下
元慶元年	右近衛權中將、從四位上（五十三歳）
同　二年	相模權守、後は美濃權守
同　三年	藏人頭

【作品】業平朝臣集（群書類從二四八所收本は短歌五十八首を收め、部類はない。このうち「伊勢物語」の歌四十九首、「古今集」の歌四十一首、「後撰集」の歌八首である。行平・仲平の歌も混入してゐる。「更級日記」に「中將の集には隅田川さあり云々」とある）。○勅撰集に入る歌は古今三十首、後撰十一首、拾遺三首、新古今以下凡そ四十三首、合計凡そ八十七首、私撰集に入るものは新撰和歌八首、金玉集二首。【批評】業平の歌は觀念的でありながら情熱がこもつてゐる。彼は表現の完

成を求めようとしないで強く詠まうとしてゐるが、歌の調子はいづれかといへば散漫である。貫之が「古今集」序に、「其の心あまりて詞たらず、しぼめる花の色なくて香のこれるがごとし」と評してゐるのは適切である。

【參考】三代實錄（元慶四年五月）○古今集目錄○歌仙傳○本朝皇胤紹運錄○大日本史二百十八○百人一首一夕話○伊勢物語○大和物語○古今集○後撰集○國文學全史平安朝篇○評釋業平全集（窪田空穗）（西下）

業平（なりひら）　歌舞伎【名稱】在原業平を題材とした作品をいふ。【解説】「伊勢物語」による傳説化された業平が初め題材となつたので、主に舞踊方面に於ける好題目であつたが、それ自身に於て展開の餘地はなかつた。元祿時代に入つて、劇的完成の機運に乘じ、始めて戯曲化されたのである。併し所謂王代物に屬するためと、配さるべき女性の小町が行平又は少將との交渉に移つた爲め、業平を中心とする戯曲には、餘り發展性がなかつた。

【種類】歌舞伎發生以來の樣式について見るに、野郎歌舞伎は、初期時代を（一）舞踊時代と（二）科白劇時代とに二分される。（一）にあつては、性質から（イ）踊と（ロ）舞とに分たれる。女歌舞伎の初期にあつて、女が男裝すべき要求の下に種々の態を演じた中に、業平狂亂ともいはるべきものがあつた。金の風折烏帽子に小袖を着、太刀を佩き、艶の小唄を歌ふのであつた。この時の小唄が業平に關するものなりや否やは明かでない。その後、遊女等の女歌舞伎流行期に入つて、「伊勢物語」に見えた「高安通」の件が取入れられ、即ち或る種の内容を持つやうになつて、組歌の形式を整へ、舞踊式の舞臺が生れた。これ等はすべて（イ）であつて、その官能的な所に主體があつた。併し女歌舞伎には、他面狂言・小唄等の分子も入つたので、その系統を引いたものが、女歌舞伎時代の末には、特殊な小舞を生じたので、その中に「高安通」も採用された。こゝに於て（ロ）に屬する樣式が發生した。代表的なものを十六種（多少の出入はあるが）を限つて「小舞十六番」（別項）と稱し、舞藝の樣態の基本となした。但しこの名稱は、女歌舞伎初期の業平の狂亂と直接交渉があるとも思はれぬ。「小舞十六番」は、主に稽古用のものとして傳授されてゐた爲め、一般には注目されなかつたが、若衆時代に入るや、その中の「高安通」から展開した演技として、玉川千之丞によつて演ぜられた「高安通」は甚だ有名であつた。こゝに漸くにして劇的樣式が加はり、業平と女と出て、夫婦愛の主題を現はすに成功したのである。併しこの作は、千之丞を主役としたところから、實際は業平側は脇役に廻つてゐる。こゝまでを（ロ）とし、（一）に屬する樣式である。（二）に於ては、脚色の作用を特徴とし、又本體とする。これに屬する作品を性質から分類して、（ハ）戯曲と（ニ）所作事とする事ができる。年代からいへば元祿以後に及ぶので、業平を用ひた作品をあげる事になると、他の類よりは僅かであるが、相當な數に上つて來るので、代表的なものに止めるが、（ハ）に脚本と淨瑠璃との二方面がある。脚本としては、早い頃に宮永平兵衛作「業平河内通」（元祿七年京、都萬太夫座上演。業平井筒の謡物語をお家騒動に入れた）が見える。當時としては興味ある作であつたが、元祿劇の型としては脚色その物の複雑味に劣り、後世への永續性はなかつた。これに代つて、騒動事件を主體とし、内容の興味を狙つた作として最後的の成功を遂げたのは、奈河龜輔作「競伊勢物語」（別項）である。時代物流行のただ中であり、歌舞伎の發達期に於ける産物であつただけに、歌舞伎脚本の傑作として後世への影響も亦大であつた。その外に、これ程の作が現はれなかつた爲めに、脚本としては、業平が主役に廻らなかつたが、この「競伊勢物語」を以て一貫した觀がある。更に淨瑠璃にも書き替へられて直ちに流行し、現在では淨瑠璃として命脈が保たれてゐる。但し淨瑠璃方面では、これより早く、近松門左衛門作「井筒業平河内通」（享保五年三月、竹本座上演。惟喬惟仁御位爭を主題とし、「競伊勢物語」の原據となる）（別項）があつたが、後世への流行は大したものでなかつた。（ニ）所作事としては、業平は屢々利用されたが、中で有名なのが、「化粧六歌仙」（六歌仙參照）である。初め嵐雛助によつて、寛政元年大阪に演ぜられてから、三都に歡迎されたが、業平は三番目に現はれて、小町に戀を訴へる趣向になつてゐる。小町が六人を連續する作用をなす關係からであり、勿論業平も歌仙中の一人として描かれたのである。この作は天保年中、中村芝翫によつて江戸風に書き替へられて、現在も上演されてゐる。かくて今日から顧みれば、題材としての傳統が極めて長いに拘らず、業平が演劇化された機會は、舞踊方面に多くあつたやうである。平安朝初期の人物として、半ば傳説化されてゐる上に、古代の貴族生活が後世の平民からは接觸し難い點が、かゝる結果を生んだのではあるまいか。（守随）

業平餅（なりひらもち）　能狂言【別名】業平餅食（なりひらもちくらひ）【梗概】在原業平は和歌の道に交つてから、玉津島の明神に參つた事がないので、紀の路の旅に出て、とある道邊の茶店に憩ふ。亭主が餅を勸めるが料足がないので、代りに歌を詠んでやると言つて、餅の威德を語つて聞かせたりなどするが聞き入れない。そのうちに業平であることが亭主に知れ、承り及んでゐる色好みのお方なれば、娘に宮仕をさせてくれと依頼される。業平は耳よりの話、早く本人を出せと言ふ。亭主が承知して呼びに行く間に、業平は餅を盗み食ひして咽喉につめる。いよいよ娘が出て來たのを見ると、意外の醜女、呆れ果てて一策を案じ、傘持の供に押付けようとするが、傘持も斷る。娘は飽くまで業平がいとしいと、逃げる業平を何處迄もと追つて入る。

【解説】色好みの業平に、街道の餅屋を配し、貧乏公卿諷刺の意が含まれてゐるであらう。玉津島を出したのは、無論和歌三神の説に基く。寛正五年四月の「京糺河原勸進能」十日の演能番組中にも「餅クイ」と見えてゐる古い狂言である。今「女物」に屬してゐる。この狂言は初期歌舞伎狂言として東西で利用されたものの如く、「舞曲扇林」には、「大坂に餅業平・大小の上手といひし日本傳助」と見え、「八十翁物語」所揭の笠屋一座の女舞芝居木戸口の圖には、「なり平もちくひ」の建看板が見えてゐる。鷺流正本では、名稱は「業平餅」であるが、人物は行平になつてゐる。もと他流の狂言に據つたがための違誤でなければ、後人の改竄であらう。（能勢）

成通（なりみち）　蹴鞠家【姓】藤原【法號】栖蓮【生歿】承德元年生れ、平治元年（一八一九）歿す。享年六十三。【家系】右大臣俊家の孫、權大納言宗通の第四子。【閲歴】右近衛少將・

中將を經て天永元年參議に任じ、長承三年從三位權中納言となつて侍從を兼ね、康治二年正二位に進み、久安五年權大納言に轉じ、平治元年に薨去した。成通、人と爲り多才多藝で、笛・歌・詩・今樣より馬術に至るまでよく通達し、中にも蹴鞠の一技はその最も精通してゐたところで、「古今著聞集」にも、「侍從大納言成通卿の鞠は、凡夫のしわざにはあらざりけり」と歎稱してある。その妙技に關する傳說的說話は尠からず世に傳へられてゐる。「成通卿口傳日記」に、成通が鞠を好んで懸(かゝり)の下に立つこと七千日、その一千日に當つた日に、鞠の精がその姿を現はして種々物語つたことを記して後に、「今も昔も我ほどの鞠足あらじと覺ゆ。これよりのち出こん事もしりがたし。歌をよまむ所に人丸の影をもてなす。鞠をこのまむ人は末代といふとも、我事をおろそかにいふまじきなり」と述べてある。後人、この言に基いて、鞠の明神の社を成通の西洞院の故宅に建てて祭つたといふ事である。【著書】成通卿口傳日記一卷(群書類從卷三五四所收。初めに成通の銘行等のことを述べ、次に蹴鞠に關する心得、「木のもとにたつ事」以下三十餘箇條を記し、奥書には、「建久六年十月廿六日、賜鎌倉殿右大將御本書畢。末代規模物也、可レ秘レ藏之、努不レ可二他見一、鎌倉若宮別當法眼定暁記レ之。」とある。又初めの部分を「蹴鞠」、後の部分を「三十餘箇條」と呼んでゐるものもある)。 (石村)

鳴神(なるかみ) 脚本(歌舞伎十八番の一)【作者】初代市川團十郎【本名題】「門松四天王」【初演】天和四年二月十五日初日、江戸中村座【題材】賴光四天王の世界に、謠曲の「一角仙人」を交へ、鳴神上人に雲の絕間を配した。「赤染衛門榮花物語」(別項)等も參酌されたか。

【解說】この作は「遊女論」(不破參照)以來の大當りで、元祿七八年には「鳴神遊女論」などの名題で勤められ、元祿十一年八月、江戸中村座では「源平雷(なるかみ)傳記」(別項)と題された。初演の脚本は現存しないので、その內容は詳かでないが、「鳴神」の趣向等に於ては、現存する狂言本「源平雷傳記」や、「四座役者評判記」(續書類從第二期刊)にある所作淨瑠璃等に見るものと、さほど相違するとは思はれない。それ等によると、後世のものと相違する要點は次のやうである。鳴神上人(市川團十郎)が絕間姬(伊藤小太夫)の容色に見惚れて窟より落つる所で、「粂の仙人」の如く、姬の布晒姿に見惚れて落つる段取になつてゐて、作は全體として肉感味が薄い。これを改作した元祿十六年「成田山分身不動」(別項)では、團十郎役の黒主の仙人(鳴神)が荻野澤之丞役の牛飼女實は小町(絕間)の膚(はだへ)に手を觸れるので、非常に肉感的になり、寧ろ後世の「鳴神」に接近してゐるものである。【沿革】「鳴神」は、當時非常に歡迎されたと見え、團十郎はその他の作にも翻案してゐるが、元祿九年十一月、江戸中村座では「女鳴神」(後出)が生れ、後世まで「鳴神」と相對して屢々上演された。次いで二代團十郎も數度勤めたが、享保十八年七月、江戸市村座で、津打治兵衛の改訂になる「相栄山鳴神不動」(なるかみふどう)に鳴神上人(二代團十郎)と絕間姬(瀨川菊次郎)とで演じたのが、後世に殘されたものの原作で、「毛拔」「不動」等も取り入れてある。これを增補したのが寬保二年正月、大阪大西芝居「雷神不動北山櫻」(後出)である。「毛拔」(別項)「鳴神」「不動」(別項)の三部曲が綜合集大成されたものであるが、後には再び分離進化し、且つ洗練されて今日の如く獨立したのである。この作は七月六日まで大入りで打通した當り狂言で、翌三年八月、大阪豐竹座では爲永太郎兵衛が、「鳴神」の條を取り入れて「久米仙人吉野櫻」と題して上場した。京阪では、この「北山櫻」によつて後世まで行はれ、江戸では寬保元年三月、市村座で藤本斗文が添削した「鳴神上人北山櫻」(上人・絕間の配役は北山櫻に同じ)が

鳴　神　(寶永四年五月市村座)

文化度まで行はれたものの基準である。所作淨瑠璃は古くは外記節が多く用ひられ、その後、大薩摩節に改められて通例となつたが、勿論地藝を主としたものである。然るに明和元年三月、江戸市村座「鳴神花雲井」の時、九代市村羽左衛門と二代吾妻藤藏とで常磐津節で勤めたのが、所作事化された初めで、後世、豐後系統の淨瑠璃で演じられる先蹤をなした。安永二年九月、江戸森田座「拐鶴鳴神櫻」の時は、五代團十郎と二代山下金作で、長唄と唄淨瑠璃との掛合であつた。「歌舞伎十八番」の制定をした七代團十郎は、文化九年六月、江戸市村座「京諧雷神櫻」が初役で、天保五年三月、大阪角の芝居で、始めて「歌舞妓狂言組十八番之內鳴神櫻」として名題を掲ゑた。同七年三月、江戸森田座「(歌舞伎十八番の內を新狂言に取結て)櫻艶色鳴神」(作者三升屋四郎、日本歌謠集成卷十一所收)は淸元節で、古典味が薄くなり、且つ所作事化された。同十四年六月及びその後數回の上演はあつたが、今日に傳存せず廢滅した。現行のものは岡鬼太郎が「北山櫻」によつて訂正した一幕物で、明治四十三年五月、東京明治座で、現市川左團次の鳴神上人と故澤村宗之助の絕間姬とで復活されたものを長唄で演じられた。因みに「鳴神」は、市川宗家では三代・六代・九代の三優はこれを勤めず、他家で勤めた主なるものは初代荻野伊三郎・初代佐野川市松・三代四代市川團藏・初代尾上菊五郎・九代市村羽左衛門・五代松本幸四郎(高麗藏當時)・初代三代中山新九郎・幾島重四郎・初代中村歌右衛門・七代片岡仁左衛門等である。

【雷神不動北山櫻】(作者)安田蛙文・中田萬助(角書)【別名題】「櫻花雲鳴神不動」「鳴神上人北山櫻」「鳴神上人五穀雨」「鳴神上人行力櫻」等。【初演】寬保二年正月十六日初日、大阪大西芝居(座本佐渡島長五郎)。【曲節】小唄と淨瑠璃との掛合【唄】中川木四郎【作曲】瀧岡六三郎【傳來】北山岩窟の段のみ訂

正を經て傳存。【讀本】歌舞伎新報(一五五一—一五五四)・南水漫遊續編四の卷(新群書類從第二)・演藝畫報(第、第四ノ六)・雷神不動櫻(田村西男編)所收。【內容】五段續きの四段目の中と切が鳴神の條である。「毛拔」は三段目にある。皇子御降誕あつたにも拘らず、比叡山に堂塔建立の御約束を朝廷が果されぬので、上人は怒つて南海下界の龍神を封じ込め、黒雲坊(佐渡島長五郎)と白雲坊(市川勘五郎)とを從へて北山の龍神が岩窟に籠る。世は非常な旱魃となつた。陰陽師安倍淸行は上人の所行と判じたので、帝は美女雲の絕間(尾上菊五郎)をして北山へ登らしめ、色仕掛で上人を迷はして墮落させ、遂に龍神を封じ込めた注連を斷ち切る。欺かれた上人は顏色を變へ凄じい勢ひで絕間を追駈けて來て捕へる。林傳內(山本京四郎)が現はれて上人を殺す(この上人の死體が五ッ目で鳴神不動の所作になる—この所作は「二人道成寺」に取り入れられてゐる)。絕間は文屋豐秀(榮崎民之助)に助けられて、桂剛之丞と立波官藏との竹輿に擔がれて歸る。五段目の大切に「不動」がある。【價値】原始的な科白劇としての一代表作であるが、對話の官能的描寫の優れてゐる點、現實と架空との交錯が融合調整されてゐる點、完璧に近い內容形式を備へてゐる點等に於て歌舞伎十八番中の傑作でもあり、近代劇と一味相通ずる所がある。殊にその對話は簡素で、輕妙で、諧謔に富み、而も音樂的に活々(いきいき)してゐるのが、この作の生命である。

【女鳴神】「鳴神」を女で見せる趣向は、元祿九年十一月江戸中村座の「子子子子子子」(「元祿十年版芝居評判繪盡」作者中村明石淸三郎、荻野澤之丞が絕間政之助)が最初で、次いで同十二年六月江戸山村座「一心女雷師」(元祿歌舞伎傑作集上卷所收。生島大吉の花山の尼君と松本兵藏の絕間姬)があり、その後多種多樣に演じられ、當初地藝を主として勤めたが、寶曆期以後は豐後系統の淨瑠璃を用ひて所作事として勤めるやうになつた。後世に影響を及ぼした作は、江戸では、初代瀨川菊之丞所演「(をんな鳴神)思の淵津瀨」(寬保三年三月中村座。作者津打治兵衛)、瀨川菊次郎所演「歸花雛女鳴神」(寶曆二年三月市村座。作者壕越二三治)、初代中村富十郎所演「鳴神髮繡入櫻」(同九年三月同座。作者並木良輔)、二代小佐川常世所演「戀衣緣初櫻」(寬政四年四月河原崎座。作者増山金八)等で京阪では中村富十郎所演「嫗髮歌仙櫻」(別項)二代山下金作所演「男哉女鳴神」(天明三年六月大阪角の芝居。作者並木五兵衛、後の五瓶)等である。又この外「女鳴神」を勤めた主なるものは、二代三代五代瀨川菊之丞・二代吾妻藤藏・二代嵐和哥野・初代二代澤村國太郎・初代中山富三郎・芳澤いろは・六代岩井半四郎・坂東しうか・三代四代澤村田之助等である。

【主要種目】【義太夫節】(をんな鳴神)思の淵津瀨(前出。淸石十種第二所收)○男哉女鳴神(前出。長唄その掛合)○振袖鳴神(享和元年十一月大阪角の芝居。若衆の鳴神)等。【宮古路節】女鳴神振分曾我(寬保三年七月大阪角の芝居)○頃卑娘鳴神(寶曆七年五月江戸市村座)。【常磐津節】鳴髮繡入櫻(前出)○戀衣緣初櫻(前出。瀨川文庫藏稿本第六所收)○戀衣偉花王(文化元年四月江戸河原崎座)○雲帽子丈端(天保元年十一月江戸中村座)○立浮名大和(同四年十一月同座)○雲常巖天女翁人(通稱鳴神。弘化元年十一月同座)等。【富本節】綠櫻山路傀(寶曆二年三月江戸中村座)○女鳴神瀨川帽子(通稱鳴神。安永九年三月江戸市村座)○御影屛繪女鳴神(文政七年六月江戸河原崎座)○雲聲女鳴神(安政元年六月同座)○繡入鳴神櫻(寶曆二年正月江戸中村座)等。【淸元節】田三升初女鳴神(明治十四年二月東京春木座)等。

【狩補女鳴神】一幕三場【作者】福地櫻痴【初演】明治二十四年九月三日初日、東京歌舞伎座【曲節】常磐津【太夫】八代常磐津小文字太夫【作曲】六代岸澤式佐【振附】花柳壽輔【內容】(上の卷)片岡山鞍馬房堂の場、同僞井順慶屋形の場。(下の卷)龍王ケ峰雨乞壇上の場。但しこの時新に泊瀨の前が絕間之助に對面する場面などを上の卷に書き加へたが、現今では上の卷は殆ど上演されず、下の卷の「女鳴神」のみである。常磐津節の「女鳴神」(弘化元年市村座)を修正したもの。鳴神尼(四代中村芝翫、現歌右衛門)實は松永彈正娘泊瀨で、父の仇織田信長を滅亡させんと龍神を窟に封じ込めるので、雲の絕間之助(故家橘)は、關逸水の無心とて入り込み、稚兒姿美若丸の名を僞はつて墮落させる趣向。遂に佐久間信盛(市川八百藏、現中車)が出て押戻す。

【參考】劇代集(二代澤田左交)○壽十八番歌舞妓狂言考(石塚豐芥子(新燕石十種第三))○歌舞伎十八番考(山田春塘(第、演藝畫報二ノ八))○歌舞伎圖說(守隨憲治・秋葉芳美共撰)○鳴神(伊原青々園(歌舞伎狂言傑作十二種、演藝畫報六ノ一二))○鳴神の上場と其作格(市川左團次(第、歌舞伎一二〇))○女鳴神縁談(中村歌右衛門(第、演藝畫報八ノ六・八)) (秋葉)

生川正香(なるかはまさか) 國學者【名】幼名茂五郎。後、熊五郎と云ひ、元服後は三郎助、晚年に正香と改む。【號】春明【生歿】文化元年十二月に生れ、明治二十三年八月七日歿す。享年八十七。【閱歷】正香は伊勢國津市岩田町の藥種商生川淸人の子(兄四郎は夭折)。初め德川春樓(津の商人)に就いて俳諧を學び、次いで樋口高樹(松阪の商人)に就いて和歌を學び、後、足代弘訓に從つて和歌及び國語學を學んだ。又蘭學を獨學してゐる。正香は俳人としては一家を成し、俳諧に關する著書もあるが、最も力を注いだのは國語學である。しかし國語學に於ては、主として本居春庭(別項)の說を增補したのみで、特に注目すべき研究もなく、學界に大きな影響を與へるには至らなかつた。但し風俗史の方では、相當注意すべき研究がある。

【著書】【國語學】八衢補の擧百卷(「詞八衢」(別項)の說に基いて、例證を擧ぐる爲に發見したもの)○辭の二道上・中二卷(元治元年刊。下卷未完成。「詞の通路」(別項)の詞の自他の說を敷衍して「ぬる」「つる」の手爾波に接續する語は、自動詞・他動詞に依つて區別がある事を說いたもの)○活語二葉草四卷(明治十六年成る。佐行四段活と佐行下二段活の動詞を古書から蒐集して意味・轉統等を研究したもの)○日本小文典辨惑一卷(チャンバレンの「日本小文典」(別項)を反駁したもの)○國化文章論一册(普通文の事を記したもの)○國語學自在二卷(刊)○諷翁發句係辭一覽一卷(刊)。【俳諧・其他】俳人大系圖一卷(刊)○俳諧古物語○校正宇治拾遺物語十五卷(寫本)○校正保元平治物語二卷(寫本)○小倉の山路後の栞一卷(寫)○日本文典譯語引和蘭活字考一卷(寫)○八集類書(未完稿、寫本十餘卷)○近世女風俗考二卷(明治二十六年刊。日本隨筆大成第一期卷二所收)○近世男風俗考○奇遊職人考○好問賞實○好問漫錄等。

【參考】生川正香翁(言語學雜誌一ノ四) (龜田)

成島柳北(なるしまりうほく) 新聞記者【姓名】初めの名は温、字は叔屬、後名を惟弘、字を保民と改む。甲子の日生るゝを以て甲子太郎と

窮した。【號】確堂とも。柳北の號は柳原の北に家が在るに因る。又自ら謔して文墟といふ。私かに謝安に比するのである。【生歿】天保八年二月十六日淺草に生れ、明治十七年十一月三十日歿す。享年四十八【墓所】本所小梅本法寺、また木母寺に碑があり、長命寺には半身像を刻した碑もある。【閲歴】幕臣成島稼堂の子。幼より穎悟、詩文を好み、八歳の時和歌集を著はす。安政元年、十八歳家を嗣ぎ、幕命を以て祖父東岳の著「東照宮實記」五百餘卷の編輯を督し、安政三年侍講となり、翌年布衣に叙せられ、父稼堂の著「後鑑」三百七十五卷の訂正をなし、萬延元年に完成し、黄金・時服を賜はつた。

成島柳北

文久三年その言議幕吏の忌諱に觸れて閉門を命ぜられ、閉居の間專ら英學を修めた。慶應元年、擢でられ、次いで騎兵頭並となり、祿千石を受く。翌三年騎兵頭となり、俸を增して二千石となり騎兵奉行に進む。この年冬、議合はずして職を辭す。慶應四年外國奉行に任ぜられ、踵いで會計副總裁に進み、從五位下大隅守に叙せられた。官軍東下に際し、職を辭して隅田川の畔に閑居。明治五年歐米を漫遊し、六年歸朝。翌七年朝野新聞社長となり、雜錄數百篇を草し、文名大に揚がつた。明治九年、筆禍を得て入獄したが、出獄後筆硯愈々健、また山水を探り、錦心繡腸の文を賦し、或は花柳事情を書いて文名天下に高く、就中「柳橋新誌」(初編)の著最も世に行はれた。【著書】柳北の詩文は朝野新聞・花月新誌に登載せられたるものが多く、單行本としては「柳橋新誌」(安政六年刊)、「柳橋新誌」二編(明治七年刊)がある。「柳橋新誌」第三編は明治九年の著であるが發行禁止となり、僅かに序文だけ傳はるのみである。○京猫一斑(明治七年刊)○柳北奇文(明治十一年刊)○明治新撰泉譜○柳北[illegible]航海文數(明治十七年出版)○柳北先生雜錄集(明治十八年出版)○柳北遺稿(明治二十三年出版)○柳北遺稿二册(明治二十五年出版)○柳北詩鈔(明治二十七年出版)○柳北全集(明治三十年「文藝倶樂部」臨時增刊)○航西日乘(明治十四年著「明治文化全集」外國文化篇)等。

【批評】戲作者系統の地位の低かつた明治初年の文壇及び新聞記者界に投じ、その精錬した筆致を以て、硬軟行く所として可ならざるなき才筆は、天下を傾倒せしめ、特に漫錄體なる一種の文體を以て時事を痛罵し、朝野新聞の名が漫錄に依つて喧傳されたのは、正に文壇及び新聞界に於て一新時期を劃したといふべきである。（尾佐竹）

【參考】二十一代先覺記者　大阪每日新聞

成瀨無極 なるせ むきよく　獨譯家・評論家【本名】淸【閲歴】明治十七年一月一日東京に生る。一高を經て東大獨逸文科を卒業。慶應義塾大學豫科に教鞭を執つた後、第三高等學校教授兼京都帝國大學文學部助教授となり、大正十年海外に留學して同十二年歸朝した。文學博士、現に京大文學部の教授である。その作家的活動は、主として明治四十年代から大正初頭に於てであり、折柄の新機運に際會し、「帝國文學」に據る有爲なる新進として幾多の小說戲曲を發表して來た。爾後は專攻の獨逸文學研究に籠つて創作の筆を收むるに至つたが、學問的業績に關する評論紹介の外に、折に觸れての隨筆・小品の類を多く書いてゐる。永く京都に居住する關係から、講壇以外にも關西文藝界・新劇界のよき指導者となり、つねに新しき文化運動のために力を致してゐる。【著者】戲曲小說集「極光」、小品集「東山の麓より」「東山夜話」「夢を作る人」等、他に評論として「近代浪漫主義」「疾風怒濤時代と現代獨逸文學」の著がある。（水木）

鳴瀧音人 なるたき おとんど　狂歌師【本名】池澤權右衞門【別名】古今亭・團栗庵・泥田坊【生歿】享保三年生れ、寬政八年(二四五六)六月歿す。享年七十八【閲歴】江戸京橋銀座二丁目の商人。天明の初めより赤良・菅江・眞顏・金埒・[illegible]等と交り、天明五年に「狂文棒歌撰」三册、寬政八年には「休息歌仙」一册を著はしてゐる。一書に音人通稱中村常次郞とあるは、同家の手代で、初め音人と號し、後、古今亭を繼いだ二代目の音人である。（野崎）

鳴門中將物語 なるとちゆうじやうものがたり　物語　一卷一册【作者】不詳【別名】奈與竹物語【名稱】「鳴門中將」の名は、本文の人物に附せられたる諢名。「奈與竹」は文中の歌「高くともなにゝかはせんなよ竹のひとよふたよのあだのふしをば」及び「あだに見しゆめかうつゝかなよ竹のおきふしわぶる戀ぞ苦しき」から出たるであらう。この書名が初めて見える吉野朝時代の「乳母草子」、二條良基の「思ひのまゝの日記」等には「なよ竹」と記してあるから、この方が古い名であらう。【諸本】讚岐琴平宮所藏の繪卷物一卷は、最も古いものである。池田龜鑑氏は別系統の繪卷の摸寫を藏してゐる。「古今著聞集」卷八好色の部にも入つてゐる。池田氏の繪卷及び「古今著聞集」には、物語の前に、後嵯峨天皇の御經歷を記した一條が附いてゐるが、これは流布の本には見えない。前田家藏の寫本には、「寬文六歲藤原爲尹卿以眞筆寫之」の奧書があり、東京帝大圖書館藏のは文政五年の寫本である。その他群書類從・國文大觀・日本文學全書等に所收。國文全書には岸本由豆流の考證が載せられてゐる。【成立】「古今著聞集」及び池田龜鑑氏藏の繪卷物の初め及び流布本の終りにも、後嵯峨天皇の御名があるから、文永九年以後の作であらう。これが「古今著聞集」に入つてゐる事は一つの問題で、岸本由豆流も、考證でこの事を言ひ、後人が「著聞集」に揷入したものだらうと云つてゐる。併し、近く池田龜鑑氏が得たといふ「古今著聞集」の古寫本には、この部が揷入である事の確證があるので、これは揷入と見て差支ない。「色葉集」及び「風葉集」に「なると物語」の名があるけれど、これとは別の物語で詳しい事はわからない。黑川春村は「古物語類字抄」に、「かれは一名なよ竹物語とも號して實記なれば風葉にも加へざるに依て此集にも省きぬ。但かのなよ竹は建長の始にいできしかど、實錄なれば風葉には載せぬを、故鎌倉柏園(由豆流)の考證には、風葉に載せぬをもて、文永後の物と思ひて其說いたく誤したり」と云つてゐるが、この說では、後嵯峨天皇の御名は後人が附け加へたとしなければならぬ。兎に角「乳母の草子」「思ひのまゝの日記」にその名がある事からすれば、文永九年後とするもそれより餘り遠くない頃に出來たものであらう。【梗概】彌生の頃、和德門の御壺で鞠の御遊があつた。見物の中に美しい女がゐるのを認められた後嵯峨天皇は、六位の藏人をしてその後を追はしめ給うた。女は左衞門の陣の所で「なよ竹の」と申上げよ、その御返事を此處で待たうと云ふので、藏人は歸つてその詞を奏したが、誰も解き得なかつた。爲家卿に尋ねて、初めて「高くともなにゝかはせんなよたけのひとよふたよのあだのふしをば」(大和物語)と云ふ歌の意である事が知れたが、再び行つて見ると女は旣にゐなかつた。藏人は帝の御氣色も惡いので、一所懸命に搜したが解らず、遂にその頃有名な陰陽師文平に占つて貰つた所が、夏のうちに舊の場所で會ふと告げた。果して五月十三日最勝講の閉白の日に左衞門の陣の邊で見つけたので、その跡をつけると、三條白川の某少將の家に入つた。帝から文を賜はつて事の由を知つた夫は、如何にせんと迷つたが、遂に女を諭して御返しを書かせた。然るに女は御文の「此の暮れに必ず」とある下に、只一字「を」と書き加へて奉つた。この意味が又解らないので人々は騷いだが、家隆卿の返事を引いて、人の召すのに「よ」といふは男の返事、「を」といふは女の返事と解き明かした。やがてその夜、女は密かに參つたが、身の嘆きを細やかに奏したので、明くれば家へ歸された。その後も時々密かに召されたが、男はやがて中將になり、近習の列にも加へられた。けれど祕密はともすればあらはれ易いもので、世人この男を諢名して鳴門中將と云つた。蓋し鳴門はよきめ(わかめと女をかけて)の出る所であるからである。

【解說】實記なので、構想といふべきものもないが、女が古歌を以て藏人の追跡を逃れ、又故事を以て御召しに答へて愈々御寵愛の心を深からしめた所に、近代の機智に見るやうな快さがあり、又それがこの作の表現上の狙ひ所となつてゐる。（小木）

【參考】鳴門中將物語考證　岸本由豆流

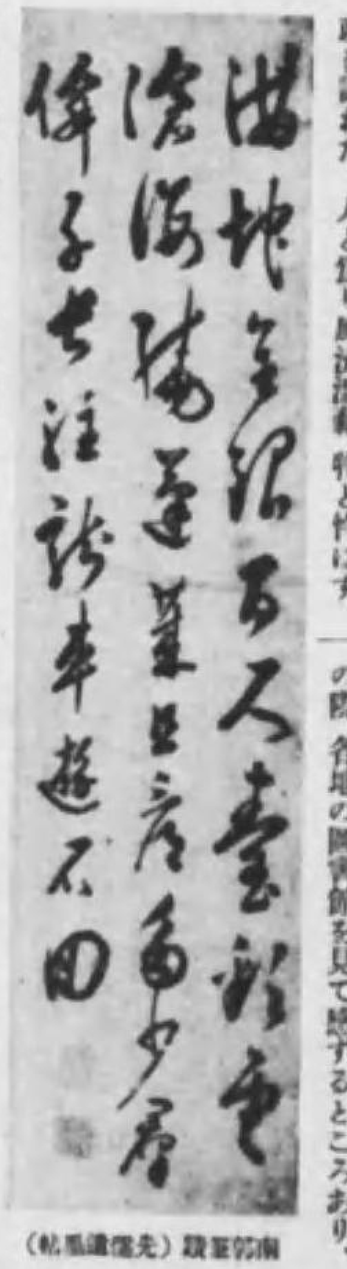
南留別志 なるべし　隨筆　五卷三册【著者】荻生茂卿(徂徠)【名義】每則推定の意「なるべし」の語を以て終るのが多いところから、かく命名した。外題に「徂徠先生可成談」とある。【刊行】元文元年【諸本】寶曆十一年の刊本は「南留別志付和歌世話」と題し五册。明治二十一年の活版本は一册。百家說林・日本隨筆大成・日本隨筆全集所收。【解說】凡百の事物の稱謂・名目に就いて、その所由を說き語原を擧げ、轉訛を匡さうと試みたもので、漢字の訓、國語の語源に關する考說は、國語學上參考となるもので、著者一家の見識を窺ふに足るけれども、附會と見られる場合も少くない。通編四百餘條、每條概ね簡單で一二行に止まる。宇佐美灊水の所校。なほこの書を批評したものに、「可成三註」三卷(小林巴陵・森崎東海・谿井笠澤共著。刊)、「非なるべし」二卷(富士谷成章著。刊)、「南留別志の辨」一卷(著者未詳。刊)、「あるまじ」二卷(伊勢貞丈著。刊)、「ざるべし」一卷(谷眞潮著。刊)等がある。（和田・龜田）

南畲 なんしや　「南宗畫」を見よ。

南海 なんかい　漢詩人【姓名】祇園瑜。字は伯玉。通稱は與市【別號】蓬萊・鐵冠道人・箕踞山人【生歿】延寶五年生れ、寶曆元年(二四一一)九月八日歿す。享年七十五。【閲歴】家ではもと醫を業として紀藩に仕へた。父に隨つて江戸に來り、年十四の時、順庵(別項)の門に入つて學び、最も詩に長じ、兼ねて書畫を能くした。壯年藩府の儒員に擢んでられた。【著作】詩學逢原一卷(別項)○詩訣一卷○一夜百首二卷○南海先生集五卷(田中由黃編)。

【批評】その詩は豪放奇麗、塵俗の氣なく、縱橫甚だ過ぐるがために、動もすれば繩墨の外に逸する嫌ひがある。（佐久）

南郭 なんかく　漢詩人【姓名】服部元喬。字は子遷。通稱は小右衞門【別號】芙蕖館。[illegible]號、周雪・觀翁【生歿】天和三年九月二十四日京都に生れ、寶曆九年(二四一九)六月二十一日歿す。享年七十七【墓所】品川東海寺中少林院【閲歴】十四歳の時江戸に來り、十六歳で柳澤吉保に仕へた。壯年に及んで徂徠(別項)と相知り、遂にその門に入り、專ら詩文を攻め、後致仕して家塾を開いた。文名漸く高く、屢々諸侯に招かれ、殊に晩年に至りては、肥後侯禮を厚くして招き、文辭を問ひ、傍ら藩政を詢ねた。人と爲り風流溫籍、物と忤はず、ために藝苑の士、皆これを敬慕した。【著作】大東世語五卷(別項)○唐詩選國字解七卷○南郭文集四十卷。


南郭墨蹟（先儒遺墨帖）

【批評】江村北海の「日本詩史」に、「我が邦の詩、元和以後、白石・蛻巖・南海その選なり。今南郭を以て夫の三子に較ぶれば、南郭は天授白石に及ばず、工警蛻巖に及ばず、富贍南海に及ばず、而も竟に三子の下となし難きは何ぞや。(中略)南郭よく地步を守り、勝を一章一句に求めずして功を一卷一集に奏す。今その集を閱するに、初編は瑕類頗る多し。二編は十に二三を存す。三編四編最も粹然たり」といひ、兪曲園の「東瀛詩選」には、「子遷は物君茂卿の高弟たり。經學微しく逮ばざるに似たり。然れども、其の詩は則ち頗る出藍の歎あり。五七言古詩は氣韻高古、且調藻あり。而して七律尤も長を擅にする所。沈雄博厚、儼然として少陵(杜甫)の遺韻あり。東國詩人中にありては、卓然として家を成す者なり」とある。（佐久）

南學 なんがく　「漢學」を見よ。

南葵文庫 なんきぶんこ　文庫【解說】德川賴倫侯の設立經營にかゝる公開圖書館で、麻布區飯倉町六丁目の邸內に在つたが、大正十三年七月、藏書を擧げて東京帝國大學圖書館に寄贈した。【沿革】賴倫侯は明治二十九年外遊の際、各地の圖書館を見て感ずるところあり、紀州藩主の手元本として傳へられた二萬有餘の書籍を整理せしめ、書庫及び閲覽室を前記の場所に建てて南葵文庫と命名した。同三十五年四月開館し、舊藩の子弟及び篤志の者の閲覽に供した。その後增築、同四十一年十月には公開して一般の閲覽に供した。爾來每月講演會等をも催して來たが、大正十二年關東の大震災により、東京帝國大學附屬圖書館が灰燼に歸するや、侯爵は文庫一切を寄附移管したのであつた。【藏書】主として記錄・歷史書が多かつたが、その後蒐集したものも、この種のもの及び我

が國の哲學倫理に關する書が主であつた。小中村淸矩の遺書五千餘册（國學院藏書）、坂田諸遠の藏書一萬五千册（坂田文庫）、島田篁邨の遺書一萬二百餘册（靜嘉堂藏書）、宗伯爵家の記錄約二千枚、山井重章の遺書二千七百餘册、大木伯爵家の藏書七千百餘册等の和漢書があり、洋書には、カミング博士の遺書九千餘册、藏原惟廓の藏書二千册、中井芳楠の遺書七百餘册、伊達武四郞の遺書千三百餘册があつた。その外、寄託本には、本居家藏書・佐佐木家藏書・松浦武四郞遺書・依田學海遺書・勝海舟遺書等があつて、十餘萬册に及んでゐた。昭和三年十二月、帝大圖書館の新築が完成したので、藏書は全部こゝに移された。藏書目錄としては、「南葵文庫藏書目錄」（明治四十一年刊）、「南葵文庫圖書目錄二」（大正二年刊）がある。

【參考】南葵文庫概要（圖書館雜誌一）○南葵文庫の方針（德川賴倫）（圖書館雜誌五）○南葵文庫の興隆（高木文）（好書雜載）　（分部）

南京遺響 なんきやういきやう　註釋書　三卷　【著者】鹿持雅澄　【成立】上・中卷文政三年、下卷文政四年　【諸本】續史籍集覽第五所收。【內容】「續日本紀」「日本後紀」「續日本後紀」「三代實錄」「古語拾遺」「熱田大神緣起」「日本靈異記」「聖德法王帝說」「聖德太子傳曆」「本朝月令」、常陸・丹後・播磨・肥前の四「風土記」「大神宮儀式帳」「佛足石歌碑」、以上十六書所載の歌謠通計八十首につき註釋したものである。その著作の趣旨は卷頭例言に明かである。

古事記日本紀萬葉集に載たる外に續日本紀よりこのかたの史典其他群籍どもの中に雜出たる古風の歌どもをとたみ探出てそれがことそのこゝろを考へしるして古學のたづきとす。

記・紀の歌を除きたるは宣長の「古事記傳」、契沖の「厚顏抄」、久老の「日本紀歌解」等があるからこれに讓つたのである。「萬葉集古義」（別項）著述後の作であり、「古義」に於けると同樣甚だ詳細周到を極めてゐる。先づ校字につきても諸本を漁つて校訂し、なほ聞え難い所は私案を加へてゐる事、また「古義」と同樣である。註釋は語釋と大意とより成つてゐるが、故事出典・人物履歷等の考證甚だ精細であり、又語釋については言語の時代的變遷にも意を拂つてゐる。なほ註釋に當つては、宣長の「歷朝詔詞解」及び「古事記傳」、久老の「續日本後紀歌の落葉」、野呂實夫の「佛足石歌傍注」、山川正宣の「佛足石歌集解」等の諸書を引用し、その他、契沖・宣長・士清・篤胤等諸家の說を參照して、殆ど遺漏なきを期してゐる。記・紀「萬葉」以外の古歌謠を蒐集したものには、今井似閑の「萬葉緯」（別項）があるが、註釋書では總括的なものとしては古今唯一のものである。而も內容懇切周到を極めてゐる點は、「萬葉集古義」と同樣、註釋史上に永く記念せらるべき書である。　（中島）

南京遺文 なんきやういぶん　附卷共二册　【編者】佐佐木信綱・橋本進吉　【刊行】大正十年　【解說】上古文研究の資料として、奈良朝時代の文獻のうち、當時の實物の今に存するものの中から、全部萬葉假名を以て記した文及び助辭の類を萬葉假名で記した文（所謂宣命書の文を含む）を集輯して玻璃版に附したもので、更に國語學・國文學・文獻學等の參考資料として注目すべきものを選んで附載してゐる。卽ち奈良時代當時の原本文は原物と認められるもの十八種、原本ではないが奈良朝の書寫と認められるもの三種、併せて二十一種を收め、附載の部には、假名字源、漢字の字形及び音訓、國文脈の漢文、文學史料、典籍等に就いて、代表的なもの又は標本とすべきもの各一二種、すべて九種を收めてゐる。而して實物の大きさは大部分實物大であつて、一々の解說及び釋文は附卷に載せてある。上代の國語資料として豐富な實例を含む「記紀」「萬葉」「風土記」等の奈良朝時代の作品が、後世の轉寫本しか殘つてゐない今日、本書に收められたものは、上代の國語を研究する第一資料と云ふべく、又本書に收められたものの大部分は、正倉院御物に屬し、容易に披閱し難いものであつて、それ等が原本のまゝ複製してあると云ふ點に於て、我々の享ける利益は大きい。

【附記】本書に採錄漏れになつたもの十種、及びその後の發見に係る古鈔本「四分律音義」中の萬葉假名のある部分を集めたものが、「南京遺文拾遺」として、「南京遺芳」（佐佐木・橋本編、昭和二年刊、コロタイプ版）の卷末に附されてゐる。　（岩淵）

南溪 なんけい　「北窓瑣談」を見よ。

楠公物の謠曲 なんこうもののえうきよく　謠曲　【曲目】楠公父子の忠誠を描いた曲に、「湊川」「楠露」「櫻井」「花櫓」等あるが、その中、現行のものは「楠露」だけである。【諸本】觀世流謠本。謠曲叢書・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）所收。

【楠露】四番目　【作者】觀世淸廉節附。【內容】楠正成（ツレ）は朝敵足利尊氏討伐のために兵庫の津に下つたが、戰死を覺悟して、わが子正行（子方）を故鄕へ歸すこととし、種々敎訓を與へた後、訣別の宴を催し、正行の傅恩地滿一（シテ）は舞を舞つた。そして正行は泣く泣く滿一と共に河內に歸る。【題材】「太平記」卷十六「正成下向兵庫事」に據つた。一段劇能。觀世現行。

【構想】劇能としての脚色は整頓してゐるが、明治時代の新作で雅味に乏しい。

【參考】謠曲評釋（大和田建樹）○謠曲大觀第二卷
佐成謙太郞　（佐成）

難語考 なんごかう　「山彥册子」を見よ。

難後拾遺 なんごしふゐ　歌書　一卷一册　【著者】源經信。一說にはその子俊賴。俊賴の子俊惠はその妹が逝去した後、その遺品を調査したところ、父俊賴の遺草が少々あり、確かに俊賴の手跡に違ひない「難後拾遺」の草案をも發見したので、「難後拾遺」は俊賴作であるかも知れない事を淸輔に語つた。しかし淸輔は經信が口授して俊賴が筆記した場合を考へた（袋草紙二）。【名稱】「難後拾遺抄」ともいふ。【成立】通俊が獨占的に「後拾遺」を撰した事に對しては各方面の反對があつたが、中にも經信は、力量・聲望共に通俊に優るとも劣らなかつたので、大に不平であつた。依つてこの難を書いたものと思はれる。【諸本】續群書類從四五五所載。南葵文庫本（一册）は、元祿十年八月契沖が松下見林本によつて書寫した奧書がある。【解說】序文に「後拾遺とてこの比世にかき騷ぐ集あり、人の持たるを暇のひまに人に讀ませて聞きつれば」とあつて、勅撰集たる「後拾遺集」に對して傍觀的態度を示してゐる。次に集中には勿論善い歌もあるが、如何はしい歌もあるので、それ等を書き拔き批評を加へた、或は同意見の人があるかも知れないと記してゐる。卽ち春二十首・夏十一首・秋八首・冬一首・別離一首・哀傷四首・戀十六首・雜二十三首、合計八十四首（內一首は拾遺所、二首は無評）を揭げて、嚴重な批評を加へてゐる。これを作者別に分けて見ても、別に偏見があるとも見えないが、公任の歌の批評には謙遜な態度を示し、序文にも「此の中にやんごとなき歌よみの詠めると書きつけられたる歌の、心得難きもあれば其れをも恐し乍ら書きつけたるなり」とあり、評の所にも「我が僻事にこそあらめ、及ばぬか」とことわつてゐる。批評は各方面からなされてゐる。例へば（一）「折らでただ語りに語れ山櫻風にちるだに惜しき匂を」は、寧ろ「折つて歸りたし、折りたくはなし」の情をよむべきであり、「君戀ふる心はちゞに碎くれど一つも失せぬ物にぞ有りける」が、千と一とを對比してゐるのは俗惡であるといふのは、全體の構想に就いての批評である。（二）「よそにてぞ霞たなびく古里の都の春はみるべかりける」は、都の外に出て見てゐる感じが出てゐない。「行き歸る旅に年ふる雁金はいくその春をよそにみるらん」は、花のあることをよまねば春をよそにする感じがしつくり出ない。「曇る夜の月と我が身の行末とおぼつかなさは何れまされる」は、我が身のおぼつかない狀態が出てゐないなどといふのは、全體的な表現力に就いての批評である。（三）部分的な表現上の批評としては、「行き歸る旅に年ふる」は、道中で年を經るが如く、「池にはひさす藤の花」は、「池にはひかゝる藤の花」の意であらうが無理であり、「誰が袖に君がさぬらん唐衣よな〳〵我に片しかせつゝ」は、末句がいひさしのやうであるといふが如くである。（四）原作を改惡したものとして、「梅が香を夜半の嵐のふきためて槇の板戶のあくる待ちけり」（原作、よもの嵐）「逢坂の關うち越ゆる程もなく今朝は都の人ぞこひしき」（原作、まづは都の人ぞ）などを擧げてゐる。（五）その他歌になつてゐないもの、平凡なもの、實際の意味が十分出てゐないもの、修辭の惡いもの、事實に相違した形容詞、本歌取の惡いものなどを指摘してゐる。槪して批評が表現形式の上から論じられてゐるのは、當時の歌人が表現形式に苦心し、その完成に依つて想を磨き、境地を進めようとし、彼等の意識が主として形式の上にあつたからである。批評の根本觀念は幽（又は優）であり、批評の標準が一定してゐるので、個人的な批評ではあるが、當時の批評の傾向を知ることができる。

【參考】源經信の歌論（難後拾遺と後拾遺問答）久松潛一（心の花、昭和四ノ一・二・四）　（西下）

南宗畫 なんしゆうぐわ　繪畫　【名義】東洋畫の一流派、略して南畫ともいふ。北宗畫（北畫）に對する名稱。南宗・北宗兩派區別の提唱は、明代以來の事で、殊に明の文人董其昌が代表的であるが、以後この兩派についての論議が頗る盛んであつた。南北名稱の由來は禪宗の南頓北漸に準ぜしむる說と、支那地理上の南北に歸屬せしむる說と兩說あつて詳かでない。

【性質】南北兩宗を區別するは、その描寫樣式に係つてゐる。卽ち南宗畫とは北宗の克明な形似や遒勁な氣格を主とするものと違つて、描法は比較的柔軟で灑落たる草筆多く、色彩よりも寧ろ水墨に親しみ、形象の如きも印象的な描寫を主眼としてをり、主題の如きも山水が最も多い。而してその表現するところに至つては、詩趣や氣韻を第一とし、詩畫一致の境地を理想としてゐる。この點に於て詩人文士の餘技に出づる所謂文人畫（別項）とその本質を同じうするものと言ひ得るが、その範圍に至つては、兩者の間におのづから出入あるを免れない。（北宗畫參照）

【沿革】南宗畫の發展は董其昌の說によれば、唐の王維に始まつて以後、張璪・荊浩・關同・郭忠恕・董源・巨然・米芾父子を經て、元末の四大家（王蒙・倪雲林・黃公望・吳鎭）に及ぶといふ。南宗畫の初めが、唐の王維まで溯り得るか否か、又その傳承の次第のごときも甚だ詳かでないが、併し元末四大家の後、やがて明淸に至つては、南宗畫極盛の機運を見るのであつて、支那の近代繪畫史の主潮は正にこの派によつて形成された。日本に於ては江戶時代の中葉以降に於て、始めて南宗畫の發達隆昌を見るに至つた。當時我が國文人の間に、この派の主義を鼓吹する學者輩出すると共に、外からは「芥子園畫傳」の舶載せらるゝあり、更に享保の頃には、長崎に淸の南畫家伊孚九・費漢源・江稼圃等相次いで來たので、その畫を學ぶ者頗る多く、長崎より京都・江戶に及びやがて全國にこの派の普及を見るに至つた。この派の畫人としては大雅・蕪村の兩家を初めとして、以後文人・志士等のこの派に屬する者輩出し、幕末より明治にかけ、その極盛時代を現出したが、やがてはその氣韻主義や印象描寫が偏重に過ぎて行き詰らねばならなかつた。　（田中（一））

男色大鑑 なんしよくおほかがみ　浮世草子　八册　【作者】井原西鶴　【名稱】目錄には男色大鑑の下に「本朝若風俗」と記し、題簽には「男色大鑑」の上に、丸の內に「本朝若風俗」と記してある。なほ序の終りに貞享四年龍集丁卯除日と記し、「鶴永」「松壽」の二つの印がある。【刊行】貞享四年、大阪伏見吳服町淀屋橋南詰林深江屋太郞兵衞、京二條通山崎屋市兵衞刊。右の外に江戶日本橋青物町萬屋淸兵衞を加へた本もある。【諸本】本朝若風俗（惜玉文庫）・西鶴全集（帝國文庫）・西鶴名作集（日本名著全集）・西鶴全集（日本古典全集）・浮世草紙等に所收。

【解說】每卷五章、すべて四十章より成る。但し第一卷第一章は、具體的說話を成さぬ序說の類である。前半の四卷は武士に關し、後半の四卷は歌舞伎子に關する說話より成る。共に變態なる性慾生活、好色生活を取扱つてゐるものとして、所謂好色物に屬すべきものである。但し武士の念友關係には、自ら義理・意氣地が生じて、敵討・果合ひ等を誘致することが多かつたので、本書前半の武士說話には、義理や意氣地に關する血腥き事件に及ぶものが多い。この點では武家物と共通性を持つてゐる。後半の歌舞伎子に關する說話も、純粹に性慾、好色生活を取扱つてゐるとはいひ難い。武士のそれに類した義理や意氣地を含んでゐるから、前半の武士說話に準ずるものとすることが出來る。而して說話中の歌舞伎子は、その頃名を知られたものが多く、これを當時の「野郞評判記」に徵し、比較して見ると、ほぼそれ等をモデルにし、實際に就いて綴つたものと察せられる。花崎初太夫・平井靜馬・玉川千之丞・玉川主膳・玉村吉彌・伊藤小太夫・小櫻千之助・瀧井山三郞・大吉彌・鈴木平八・藤村半太夫・松島半彌・戶川早之丞・上村辰彌・嵐今京之助、その他なほ幾人かの名が見えてゐる。要するに、男色は多く女性から隔離された特殊社會に起る現象であるが、この時代は特に官能的享樂の解放的に行はれた結果として、常態を逸した性的享樂の風の行はれた社會の風習を反映したものであることは言ふまでもあるまい。而して義理や意氣地の結合も亦、當時の社會的事實を示したものである。

【史的地位】男色の社會的事實の起原は、文獻に徵しては知られないが、極めて古い時代に

在るであらう。我が國に於ても「古事談」「徒然草」などの記述より、遙か以前に在つたことは言ふまでもない。而してこれが文學の素材と

男色大鑑（小田久太郎氏藏）

同上（本文・挿繪）

なつたのは、室町時代からである。尤もこれより以前にも和歌にそのことかと推察されるものはあるが、物語小說などの材となつたのは、室町時代を初めとする。卽ち「秋の夜の長物語」「幻夢物語」「あしびき」「辨の草紙」「鳥邊山物語」「松帆浦物語」「嵯峨物語」（各別項）などがそれである。これ等は、物語の形態・文體を襲うてをり、內容は主として愛で、それに信仰を配してゐる。中には、武士の義理・意氣地より敵討ちに及んでゐるものもある。江戸時代に入つては、「よだれかけ」卷五の男色二倫書といふ男色に關する褒貶等の論議をなした書がある。これ等の後を承けた「男色大鑑」は、形の上では浮世草子の新しい形を取り、文體も亦物語のそれを離れてゐるが、內容に愛と共に義理・意氣地を持つてゐる點で、先蹤とさしたる相違はない。併しそれにも時代的なる新しみはある。歌舞伎子との關係に材を選んだのは創意であるが、それも精神に於ては、室町時代の作が寺小姓を選んでゐるのと似たものである。かく考へて來れば、本作は全然西鶴の創意から出たものとはいひ難いが、表現・描寫の技巧の優秀と淸新の點では、先蹤の作は比較にならない。西鶴はこれより先き、「好色一代男」や「好色五人女」（各別項）の一部分に男色に關する事を書いてゐるが、ただ僅かの紙數を費してゐるに過ぎない。本作一度出でて世は初めて男色の文學に注意したらしい。卽ちこの後「好色江戸紫」「好色俗むらさき」「男色比翼鳥」「男色木芽漬」（各別項）等續々男色を材とした浮世草子が現はれて、文學史家が所謂男色物の一目を設くるやうになつたのは、本作の影響として見るべき現象である。この點から見ても、浮世草子の歴史中に占むる本作の地位は、頗る重要なものといはねばならない。（藤村）

【參考】同性愛の文學 藤村作（上方文學と江戸文學）〇西鶴名作集解說 山口剛（日本名著全集）

男色木芽漬（なんしよくきのめづけ） 浮世草子 六册

【作者】藤屋閑齋自然坊の署名がある。【角書】士農工商【刊行】元祿十六年【解說】讃岐國屏風浦に住む兒玉關三郎は、十三歲の頃から居合劍術・取手早業・相撲・腕押・立廻りを習ひ覺え、風流の兒氣（たしみ）は去つたが、生來の美男であつた。十五の年に元服して衆道の達人になりたき心願を立て、近江の石山觀音に參詣して祈をこめようと思ひ立つ。途中淀の川舟で同船の鄕門の物語から、鞍馬の毘沙門に參拜することに心をかへ、五條の橋に上陸する。と、先程の鄕門が姿をかへて現はれ、自分は鞍馬に住む淸越天狗といふものである。汝衆道を志しながら田舍者の悲しさに、よしなき石山詣して女道に陷らんとするにより、毘沙門天の仰せを蒙り、今こゝに現はれたのであると告げる。關三郎感涙肝に銘じ、鞍馬に到り宿坊にたのみ、天狗の敎へた童子の間に通夜する。童子の間とは、粟田の右大臣といふ人、うつくしき童子とこの間にてあひ、寺ありし室であるといふ。果してその夜天冠を着た美童子忽然とあらはれて關三郎と千夜を一夜と契る。これは毘沙門天の御門に住む百歲足之介といふもので、毘沙門天の仰せにより關三郎と契をかはしたのである。足之介は關三郎に向ひ、衆道の大事は一生に念者一人、兒一人、若衆は兄分を二度持たず、念者は重ねて少年に約せず、これ衆道の根本綸旨であると示敎し、卷物一卷を與へて消え失せる。この卷物は卽ち男色木芽漬と題し、男色の種々相を描寫したものである（卷一の二）。讃岐國善通寺の住持照智坊は、生れついての女嫌ひであるところから、愚蒙の村人これを尊び敬つてゐた。或る時、村の世話役の重右衞門、村中の人を集めて相談するには、善通寺は弘法大師誕生の寺で、眞言緇素衆道の根本たるべき寺であるゆゑ、照智坊へも各々の子供のうち器量のよいのを選んで童子として差上げねばならぬといふ。衆議は忽ち一決したが、照智坊は都にて修業の間に、宮河町建仁寺門前の陰間の許にも通つたことがあるので、田舍の童子に一向に眼を向けない。こゝに同村佛谷の孫三の一人娘おみつは、母親の言ひ付けで繁々寺に出入りする。照智坊も水木辰之助に似通うてゐるおみつの姿に心をひきつけられる。或る日の暮、旅裝束の若衆が來て一泊をこふ。照智坊若衆振の美しさに思ひつき、戀の仲となる。それは弘法大師が照智坊の淺ましくも女色に陷ちんとするを敎ふために、假に童子となつて現はれたのであつた（卷一の二）。都に住む美木十郎左衞門は今年三十二、買ひつづけたる若衆千人切といはれ、鮟を子と稱した。買色は實に粋のもてあそぶべき事にあらずと一念發起して、三月二十五日の今日は、法然上人の誕生日なりと黑谷の方へ足を向け、敦盛塚を戀に拜しての歸途、平野敦千代といふ美童と道伴れになり、南禪寺の門などを共に見物し、遂に自宅に誘うて歸る。その夜首尾よく契をかはす。十日ばかりすぎた或る日、敦千代は故鄕播州に立ち歸るといふので、誘はれて十郎左衞門も共に發足する。伏見大阪と過ぎ、須磨寺の邊り門構への立派な屋敷に着く。その夜は種々の款待をうけた上、旅の疲れも出てぐつすり寢入つてしまふ。須磨寺の鐘の音に眼ざめてみれば、家も人もない敦盛塚の傍である。それより十郎左衞門は都新黑谷の上人に賴み、その弟子となつて、蓮生坊の蓮の字をとり蓮肉坊と名乘り、偏へに後生三昧に世を過した（卷一の三）。加賀國七尾の淨光院の弟子に春智坊といふ僧があつた。矢村の代官一宮十之丞の一子波之助は、十四の春より春智坊に學問の敎をうけてゐたが、いつしか二人は兄弟の契深き仲となつてゐた。或る秋の日、二三日見えなかつた波之助が、春智坊の許を訪れ、窓越しに春智坊をよび、持參の惠心作の彌陀と春智坊所持の法然上人の一寸名號とを取替へてくれと賴む。春智坊了承して名號を渡すと、波之助は墓所の方へと歸つてゆく。春智坊不審に思ひ、後を追ひかけたが既に姿は見えない。十之丞の許を訪ねると、波之助が先刻寺に見えた刻限に、遽かにとりつめて亡き人となつたといふ。棺の蓋をあけてみると、左の手に春智坊から與へられた一寸名號らしい紙片を握りしめてゐた。春智坊は浮世の無常を觀じて諸國修業に出て、若松の湧通寺に三年ほど住んでゐたが、一度故鄕に立ち戾らうとして、越後の村上より越前に向ひ、加賀の國に越えるため、有乳山の麓なる庄屋に一泊を乞ふ。その家の孩兒は生れた時より乳飲む間も泣きやまずに泣き續けてゐたが、春智坊が門を入つた時から、ひたと泣きやむ。その上左の手は生れた時より握りしめてゐて、どうしても開かないといふ。春智坊抱きあげてその左手をそつと指で押し開けると、何のこともなく開く。見ればかの波之助に與へた一寸名號を握りしめてゐたのである。春智坊は夫婦の勸めにより、こゝにしばらく足を留める（卷一の四）。以下各卷、いづれもこの類の四說話から成り、合計二十四說話の男色物語である。（小泉）

男色子鑑（なんしよくこかがみ） 浮世草子 五册

【作者】九思軒鶴長【角書】當流 風俗【刊行】元祿六年【諸本】「和國小性氣質」（元祿三年改題再版）、「騎千里新話」（寶曆十二年）がある。「和國小性氣質」は氣質全集（帝國文庫）所收。【解說】十五說話より成る。京の三條室町に若松屋平次郎といふ美童があつた。浪人明石文右衞門といふ男、平次郎と「念友の契約未來かけてのかため互におろそかならぬ」仲となる。然るに文右衞門は元來不屆者で、平次郎も今は堪忍ならず、今宵祇園林にて潔く果し合ひをなさうと果し狀を遣はす。文右衞門は命あつての物種と、その日のうちに逐電する。平次郎はそれとも知らず、二親への書置き細々と認め、丁稚に提灯持たせて祇園林に急ぎ、今か今かと待つてゐたが、文右衞門が來ないので丁稚を見せにやると、晝のうちに田舍に出立してしまつたと分る。平次郎は胸を押沈めて是非なく宿に立ち歸り、惜しや十七の春に前髮を落してしまふ。こゝに靑木山舟といふ男、零落して淸貧のうちに世を送つてゐる。或る時、無二の親友の家に月待に赴き、過まつて平次郎の手に貢の盃を落したのが緣となり、衆道の契固く、影の形に添ふ如く一杯の湯茶も一人では飮まぬほどの親密さとなつた（卷一の一）。都の分限者名古屋三郎は、歌舞伎若衆の吉三郎に入れ揚げ、財產を殘らず遣ひ果して家を出で、裸一貫の身を惡友善哲の近江の家に賴つて行く。そこで名古屋は魚捕る網をすきならひ、細々と暮してゐる。吉三郎は名古屋の事を忘れかねてゐるところへ、使が來てその文を屆ける。吉三郎は驚いて舞臺を休み、使と共に名古屋の行方を探し求めて、我が家に迎へ取り、裏座敷に住まはせて世話をする。吉三郎は病に罹りて不歸の客となり、名古屋は遂に行方知れずになつた（卷一の二）などの如く、衆道精神ともいふべき、義理・意氣地を表はしたものを主とし、以下卷二の一、和國にもあるかんたんの枕、卷二の二、川風にふるひ付きたる戀路、卷二の三、やりて悔敷笑子の二親。卷三の一、芭蕉に落ちし眞の譽、卷三の二、あらたなりける地藏の靈夢、卷三の三、冥途にしれし心中男。卷四の一、綠は朽ちせぬ二世の契、卷四の二、身を捨ててこそ浮む戀路、卷四の三、屍をさらす賀茂川の水、卷五の一、姿をかへてねらふ敵、卷五の二、思ひ出たり男山の昔、卷五の三、顏見世の切手ただもらうて高い物、卷五の四、後をしたうて若衆の喪良などを含んでゐる。（小泉）

男色太平記（なんしよくたいへいき） 草雙紙 黑本・靑本 三册 十五丁十九圖

【作者】未詳【畫工】鳥居淸滿【名稱】明和八年鱗形屋刊行の黑本・靑本には「湯尾峠孫杓子」の角書がある。【刊行・諸本】明和三年鶴屋刊と明和八年鱗形屋刊の二種があり、同樣に黑本・靑本兩樣の體裁で刊行されてゐる。明和八年刊は再摺らしく、畫工は同樣に淸滿である。【題材】「御伽婢子」（別項）の卷之十「宮守の妖」。

【梗槪】〔上〕越前國湯尾峠は瓜生判官が嘗て城を構へた處である。數十年を經て、曹洞宗の僧鷹外和尙はそこに住み、或る夕暮に美しい若衆と濟達になり、我が庵に伴ひ、迷ひの者と知り、罪障を懺悔させる。亡靈は語る。曆應年中、瓜生判官は新田義治に心を傾ける。その起りは、判官の弟義鑑坊が義治を戀慕し、兄を勸めて新田につかしめたが、後、判官は足利に從ふ。ただ義鑑坊のみは新田に屬し、義治を預つて男色關係を結ぶ。〔中〕判官は我が死後に寵愛の女うつせみの亂行もあらんかと憂へて、女の腕に蝶蝶の生血を塗り、金崎城攻擊に向ふ。義鑑坊はこの女の力で判官兄弟を再び新田方に味方させる。判官は深山寺の關をたばかり越え、高師泰の陣へ夜討をしかけて大勝を得る。義治は疱瘡を患つたが、義鑑坊の祈で、もとの麗しい容貌となる。〔下〕義治は、判官・義鑑坊等に守り立てられて勢盛んになり、瓜生方は勝に乘つて足利方を追ひ、却つて谷底へ閉ぢ込められ、遂に判官・義鑑坊は自害する。鷹外和尙は日のあたり昔の棟を見て、かゝる名僧も色に迷ふかと憐み、「毘盧沙那經」の文を書くと、數萬の蝶蝶が一時に消えて成佛する。越後國湯尾峠の茶屋の軒に、大きな杓子をしるしにして、疱瘡を輕くすます御守を出す。

【解說】「御伽婢子」の「宮守の妖」に蝶蝶館のプロットを與へ、民間信仰や傳說にも觸れて構想したもの。外題は「宮守の妖」の依據である「太平記」卷第十七・十八を通して、もとの作品に歸つた案であらう。黑本・靑本としては常套的のことながら、內容の性質上、經文の引用などによつて、特に佛教的色彩が強くあら

はれ、又演劇方面の色彩も濃い。「太平記」中の人物を男色に見立てたところが、やゝ思ひ付ではあるが、「御伽婢子」の何でもない記事を誤解し、作中に矛盾を含むなどは傑作とは云へぬ。（小池）

男色比翼鳥　なんしよくひよくのとり　浮世草子　六巻【作者】東乃紙子（序）。畫工政信の變名であらうと推定されてゐる。【畫工】奥村政信【刊行】寶永四年【諸本】江戸時代文藝資料巻三所收。但しこれは序文、巻頭とも「風流比翼鳥」とあるが、東大圖書館本（大田南畝・醒芥子・黄遠園亭等舊藏）には、明かに皆「男色」とある。但し題簽はない。

「男色比翼鳥」序文・挿繪（東大圖書館藏）

【梗概】松枝鉄之助なる少年、親の敵栗原安左衛門を討たうと諸所を探すこと三年、丹波の切戸の文殊堂に參籠し、唐崎香羽之丞なる美少年と知り合ひ、文殊菩薩の靈夢を蒙り、奥村幸手軒なる浪士を頼んで隅田川の邊りに隠れてゐる敵を討つ。【解説】全體の筋は、以上のやうに極めて簡單であるが、内容の大部分を占めるものは、幸手軒が、友人なる市川源藏・山田半平兩人との男色女色優劣論、その例證として互に引用した和漢さまざまの物語であつて、全體の筋は要するに串戲的のものと思はれる。それ等の中には人口に膾炙した古來の傳說もあるが、また當時の巷說か乃至は作者の創作かと思はれるものもある。とにかく男色物乃至好色物の一つの異型と言へようか。作者「東乃紙子」が、政信なりや否やは別として、巻末に明かに署名ある政信筆の挿繪は味ふに足り、また芝居の内外を寫した場面など、その方面の參考ともならう。【參考】新撰列傳體小說史（前編）水谷不倒　○江戸時代文藝資料第三解説（増田）

男色十寸鏡　なんしよくますかがみ　浮世草子　二巻【作者】序に、「洛陽之野人三夕軒好若藏士」とある（雍甚の「好色本目録」に憂軒好若衆士とあるは誤）。勿論何人か明かでないが、同じ頃の「好色訓蒙圖彙」「好色貝合」（各別項）と似た類のものであり、當時の體裁、挿繪の畫風なども似て居り、又序文の署名などから見て、右二書の作者と推定される吉田半兵衛を擬するのも、必ずしも不當でないであらう。【刊行】貞享四年（序文）。【解説】上巻は、「兄分勤學之巻」とあつて、「衆道得心第一儀」「衆道は只實を根本の事」「兄分風俗并嗜の事」「若衆のために儀を思ふべし若恩の事」「若道の契誓紙にあり付り腕股ひき様」「若道の初髪繁昌かきやう」「若衆えの心入并數調第一の事」「少年と初めての懸とりいりやう」「少年若道のしたて氣を通す事」「兄性小草履とりしたての事」「野郎參會の心得并床物うりが事」の諸節に分ち、能隠權說から「兄分」たる者の種々の心得を說き示してゐる。下巻は「若衆勸學之巻」であつて「若衆得心第一儀」「身持たしなみの事」「伊達風情心得の事」「分て心がけ有べき事」「他所の若衆とつきあひ心得の事」「餘所え出る心得の事」「主人に愛せらるゝ若衆心得の事」「僧に愛せらるゝ若衆心得の事」「心を花車第一の事」「町人若衆心得の事」「人に物を借まじき事」「人に戀慕せられし時心得」「早く兄分をさだむべき事」「何事も兄分にとふべき事」「人に狀つけられし時の事」「手跡よき若衆心得の事」「眞食物心得の事」「匂ひをとむる事」「若道床入の事」に分れ、相當懇切詳細である。かくの如き、いはば「指導讀本」は、「好色訓蒙圖彙」「好色貝合」（各別項）などと共に浮世草子の一異型をなすものであり、當時の遊興歡樂的精神と、訓蒙說明的思想の結び付いたものである。今日から見て、當時の社會風俗を察知するに便をなすことは言ふまでもない。（増田）

男色十寸鏡（東京帝大圖書館藏）

男色物　なんしよくもの　浮世草子【性質】同性愛・同性性慾の生活を取扱つた浮世草子。編物集と稱物とあり、また具體的描寫のものと說明的なものとがある。編物に在つても、純粹に同性愛や同性性慾のみを取扱つたものと、これに伴ふ義理・意氣地を併せ取扱つたものとがある。後者は一面好色本に通じ、一面武家物（別項）に通じてゐる。【時代との關係】男色は男寵・若道・衆道・密道・義兄弟・念友などとも稱し、男性間に於ける同性愛・同性性慾關係を指すものである。この關係は僧侶・武士の間に多くあつたが、又遊蕩者と若衆野郎輩との間にもあつた。男色の對象となつたものを、世に若衆・美少年・少年・美童・少人・兒・垂髪・前髪・喝食・男娼・渡り小姓・香具賣・小草履取り・若衆・陰間・陰子・舞臺子・本子・飛子・かげろふ・色子・野郎・新部子などとも稱した。この俗の古く存したことは、和漢の古典籍に散見する所で知られるが、特に元祿期にかゝる文學を生み出したのは、素より時代と密接な關係を有したに相違ない。男色は生理的には、同性の有てる異性分に對する愛戀、性慾であるといはれるが、この不自然行爲は、生理的・心理的の病者・變質者に多い。而してこれを社會的に見ると、僧院・兵營・船艦・刑務所・寄宿舍・大奥などの、同性のみから成る變態の社會に流行する。併し元祿期に於ける流行は、以上の社會的理由のみでは解し難い。この享樂時代の富豪が、異性間の好色生活に滿足し得ず、又これに飽きた結果として、この變態生活に依る刺戟を求めた富が多いであらう。彼の賣色の美青年即ち若衆役者の類が存在して、富有なる享樂者の間に歡迎された事實は、蓋しこれを證するものである。而して又かゝる賣色者の存在は、益々この風を助長したに相違ない。元祿期に於ける男色物の流行は、かゝる意味を持つた男色の流行と密接な關係を持つて起つた現象に外ならない。【作品】室町時代の男色物語には、「秋の夜の長物語」「幻夢物語」「あしびき」「辨の草子」「鳥邊山物語」「松帆浦物語」「嵯峨物語」（各別項）等があるが、江戸時代の男色物は、これ等とは内容形式共に大に違ふ。室町時代のものは、從來の物語風の形に、變態的な戀愛生活を書いたものであるが、江戸時代のそれは先にいつた如く、所謂衆道を嗜く男子の一分に關する意氣地又は義理から起る殺伐な敵討や果し合ひ等を含むものと、同性愛・同性性慾を中心とした好色生活を書いたものとあるが、併し後者にも、多少意氣地・義理の伴ふことも少くない。西鶴の「男色大鑑」（別項）は、その兩方に亙るものである。今主なる著作を擧げれば、「男色十寸鏡」「男色子鑑」「男色木芽漬」「男色比翼鳥」（各別項）、「野郎文反古」（色好親軒作、寶永三年刊、男色關係者間の諸書簡體に擬したもの）、「野白内證鑑」「野傾旅葛籠」（各別項）等であるが、「野傾」と冠したものは、遊女に關する說話を含むものである。なほこれ等の外にも、「好色江戸紫」（別項）の如き、「好色」と冠した書にもこれに屬せしめて然るべきものがある。（武家物・町人物・好色本參照）（藤村）

南水漫遊　なんすいまんいう　演劇書　十五巻又は二十七巻【著者】濱松歌國【成立】文化末年か。【解説】主に歌舞伎・淨瑠璃關係の記事を收めた十五巻本が、記載整頓の工合から、他の雜事をも多く收めた二十七巻本よりも後に成つたらしいと言はれてゐる。新群書類從には十五巻本を翻刻してある。初編・拾遺・續編各五巻、演劇に關する種々の記事を集めてゐる。「傳奇作書」「脚色餘録」（各別項）と並んで、主として大阪を中心とする演劇史料の重要な文獻である。（増田）

南杣笑楚滿人　なんせんしやうそまひと　戲作者【本名】楠彥太郎【別號】志怖埒・杣人・曾滿人・南楚・獻仙人楚間人、時には西村の印を用ひた。【生歿】寛延二年生れ、文化四年（二四六七）三月九日歿す。享年五十九。【法名】只但受樂翁居士【墓所】東京芝區西久保心光院。【閲歴】芝宇田川町に住み、その職業には古來諸說があり、「江戸作者部類」は書肆とし、「戲作者小傳」は紺師となし、曲川亭雪麿は芝神明邊に住居した鬢師仙白であると言ひ、北齋翁は板木師なりとし、活東子は北齋說に賛成する。又手習師匠であつたとする說もある。

敵討闘鳳尾神

生涯に職業を屢々かへた結果、かうした諸說が存するのであらう。彼には子がなく、遺金が五兩あり、死後友人等が集まつて葬儀を行つた事が「江戸作者部類」に見える。門人には畫德齋夫成・待名齋今也があり、數種の作品をも出して居り、「仇討意官輪」（文化元年刊、讀本）には、物事夫成の狂歌をのせてゐるが、これ等は楚滿人の匿名かとも考へられる。爲永春水は初め二世楚滿人を名乘つた。

【作品】（黄表紙）敵討三味線由來（別項）○新鏡戲樂通寶（政演畫）（以上天明三年刊）○八橋調能流（政演畫、天明四年刊）○古渡日記帳（政美畫、天明七年刊）○頼光一代記（政演畫、天明八年刊）○鵜飼敵名歌芝（春朗畫、寛政四年刊）○敵討義女英（別項）（寛政七年刊）○三世相郎滿八算（豐國畫）○敵討姥捨山（豐國畫）○富士色坂絞曾我（豐國畫）（以上寛政九年刊）○敵討沖津白浪（豐國畫、寛政十一年刊）○娘敵討局鎖面（豐國畫、寛政十二年刊）○敵討梅之接（豐廣畫、享和元年刊）○敵討都葉山（田形前編の角書がある。豐廣畫）○敵討宮川世談（田形後編の角書がある。豐廣畫）○敵討柳間鳳尾鉀（前編、豐廣畫）○板間之榮木（後編、豐廣畫）○伊豆日記旭源氏（春亭畫）（以上享和三年刊）○冬雪物語（親子塚前編と角書がある。豐廣畫）○春雪物語（親子塚後編と角書がある。豐廣畫）（以上文化元年刊）○初編三組盃○中編三組盃○三編三組盃（豐廣畫、三編の續き物。文化二年刊）○昔語姑獲鳥仇討（豐國畫）○仇報妹背島○後編妹背島（豐國畫）○復讐編一代記（春亭畫）（以上文化三年刊）。【合巻】三重忠孝貞（豐國畫）○敵討鶴殺曾嬢（豐國畫）○敵討柳木花王（豐國畫）（以上文化四年刊）○復讐談御音隣池（前編楚滿人、後編夫成作、豐國畫、文化五年刊）○河州大森縁（初代楚滿人遺稿、爲永春笑補、國貞畫、文化八年刊）。【讀本】楠物語僞家花（楚滿人遺稿、豐國・國貞畫、文化六年刊）。

【作風・業績】岸田杜芳の「草雙紙年代記」（別項）に序してゐることなどから、楚滿人名の作品四種を出した天明三年には、既に當時の戲作者間には多少知られてゐた人物であるらしく、且つこれ等の作品が果して處女作であるか否かを疑はせる。敵討物に終始した彼も、當時の黄表紙の傾向には初めから沒交渉では

なく、「新鋳戯楽詞寶」の如きは、遊人を主題として洒落本的色彩が強い。併しながら當世風の作品には殆ど歯が立たず、「敵討義女英」（寛政）が世の喝采を博するや、この方面に自己の行くべき道が多少見えて來たらしく、これまでは、楚満人の敵討物の準備時代であつた。「新鋳戯楽詞寶」は別として「敵討三味線由来」「八橋調能流」の如き敵討物と、「頼朝一代記」（天明三年刊、清長畫）「頼光一代記」「文覺一代記」（寛政五年刊、豐國畫）の如き一代記物と、「源平軍物語」（天明七年刊、政美畫）、「二代大中黒」（寛政五年刊、春英畫）、「刈萱桑衣日記」（寛政五年刊、春英畫）の如き軍記物とがあり、いづれも黄表紙としては時代遅れのものであるが、音樂を取入れた敵討物はやゝ見られる作品である。作柄は多くは子供向の低級さで、且つ屢々修養の不足や戯作者としての素質の惡さを暴露する。「敵討義女英」の歡迎によつて楚満人の創作態度に活氣を呈し、彼自身も古風であると意識し、京傳や全交に伍し得るものではないと思ひながらも、「三世相郎満八算」の三世相、「今度者與息子」（寛政九年刊、豐國畫）の鬼と見世物、「化物大閉口」（寛政九年刊、豐國畫）の化物に遊歩した人間社會の取り合せ、「一狂言狐會入」（寛政十一年刊、豐國畫）の狐に化されての 排興の如く、やゝ世間並の作品をも出したが、それも漸減し、享和元年頃から本格的に敵討物となつてゐる。敵討の最大原因の怨恨には、多く青少年の戀をからませ、武器・寶物等の爭奪によるものもある。青年男女が多く活躍する初々しさに世の喝采があり、南方に起つた事件は江戸或は北方に移行して解決し、北方に起つた事件は南方に進めて解決する事が屢々である。作品中には殺害の方法を色々と趣向し、中には慘酷と思はれるものも見える。女性は多くは貞節で、後妻は屢々先妻に殺される。後年には幼女虐待の記事や年少者の孝行を特筆する。そして結末は類型的のお目出度で、結婚で結ぶ場合が多い。敵討物として筋を複雑にし、内容を充實させる必要上、黄表紙としては長篇に過ぎ、合卷的傾向の作品即ち前・後二篇、或は初・中・後の三篇の續き物が享和の末から出て來る。楚満人は敵討物を黄表紙に取入れ、黄表紙の形態を合卷へ轉移させた一有力作者ではあるが、それには偶然的の分子が多く含まれ、黄表紙の展開に偶々彼の一方的の缺陷と長所とが合致したものであり、世の推移を洞察しての事ではなく、この偶然さが、實際以上に彼の名聲を高く評價させてゐる。（小池）

楚満人似顔繪（化物大閉口）

南總里見八犬傳 なんそうさとみはつけんでん 讀本 九十八卷百六册【作者】曲亭馬琴【畫工】柳川重信・溪斎英泉・二世柳川重信・玉蘭齋貞秀・歌川國貞等が分擔執筆。【名稱】略して「里見八犬傳」「八犬傳」などとも呼ばれる。下總里見家に仕ふる犬の文字を姓とする八人の豪傑の傳記をつゞるに據る。【成立】成立の顛末は、本書の最後の總跋に代へた附録「回外剩筆」に書くされてゐる。これを成稿した作者晩年の文化十一年から天保十二年までの間の苦心は、尋常のものではなかつた。それは更に彼の日記や、屢々殿村篠齋に書き送つた手簡でも知られる。文政六年には妻と男宗伯とが患ひ、同十年には自身が大に病み、また天保四年夏頃から右眼の明を失つたところへ大病に罹り、引續いて神田同朋町に醫を業としてゐた宗伯が歿した。かく引續く不幸のうちに、また左眼も漸く見えなくなつて、天保十一年には全く失明してしまひ、次いで妹も歿し、妻にも先立たれた。その一家の處理はともかく、彼の失明は作家として如何にも悲慘であつた。啻に「八犬傳」のみならず、多くの讀本・合卷等の述作を成して ゐた精力絶倫を以てしても、視力が衰へては稿本を手さぐりに大字數行を書いて行き、漸く筆を絶つやうに見えたので、出版書肆文溪堂、貸本屋等がしきりに懇願し、宗伯の妻路女が少しく文字を知るのに、一字一句毎に教へて書かせ、大團圓を遂ぐるに至つた。この時馬琴は七十五歳であつた。【刊行】文化十一年（第一輯）・同十三年（第二輯）・文政二年（第三輯）・同三年（第四輯）・同六年（第五輯）・同十年（第六輯）・同十二年（第七輯上帙）・同十三年（第七輯下帙）・天保三年（第八輯上套）・同四年（第八輯下套）・同五年（第九輯上帙）・同六年（第九輯中帙）・同七年（第九輯下帙上）・同八年（第九輯下帙中）・同九年（第九輯下帙下）・同十年（第九輯自卷二十九至卷三十二）・同十一年（第九輯自卷三十三至卷四十五）・同十二年（第九輯自卷四十六至卷五十三）。【諸本】第一輯より五輯まで山青堂（山崎平八）が刊行したが、他事に耽つて破産し、その刻版を涌泉堂（美濃屋甚三郎）に賣つた。然るにこれもその人を得ず、第六輯刊行後第七輯は文溪堂（丁子屋平兵衞）の助けで辛うじて刊行したが、遂に版權を手離し、文溪堂が買取つて續刻發行した。出版の度毎に裝幀を變へてゐるが、多く犬を象つた模樣で、半紙本である。この當時再版されたものには、第七輯卷之七の犬田小文吾が暴牛を駐むる圖がない。版木が轉じた時に失はれたものか、或る事情で削つたとも言はれてゐる。なほ永く版木が遺つてゐて、明治以降東京で兎屋（半紙本百六册）・博文館（明治三十年、中紙本、三十七册）等で再版され、また日本名著全集（菊半截、三册）にも複刊されてゐる。また活版では東京稗史出版社本・兎屋本・帝國文庫・國民文庫・有朋堂文庫等がある。なほこの草稿の現存するもの、早稲田大學圖書館に三十八册、そのうち、第八輯卷之一が稀書複製會で複製されてゐる。また馬琴が校訂した手澤本が帝國圖書館に藏せられてゐる。【題材】作者はよく序跋或は發言、簽尾の附言に、典據・批評・考說・註解等をしてゐるが、それに題材等が暗示されてゐることがある。これは支那小說、特に「忠義水滸傳」に據り（第二輯卷之二の末の附記等）、また「北條五代記」「甲陽軍鑑」「本朝三國志」（回外剩筆）「里見八犬士の故事」（青齋事實等）を藉りてゐるが、最も「水滸傳」に多く據り、「里見記」「里見九代記」「里見軍記」「房總治亂記」「房總志料」等を參考して作り設けられたのである。また仔細に見れば「三國志演義」等の支那小說や、我が國の軍記及び記錄・地誌等に依據したものが多く、恰も

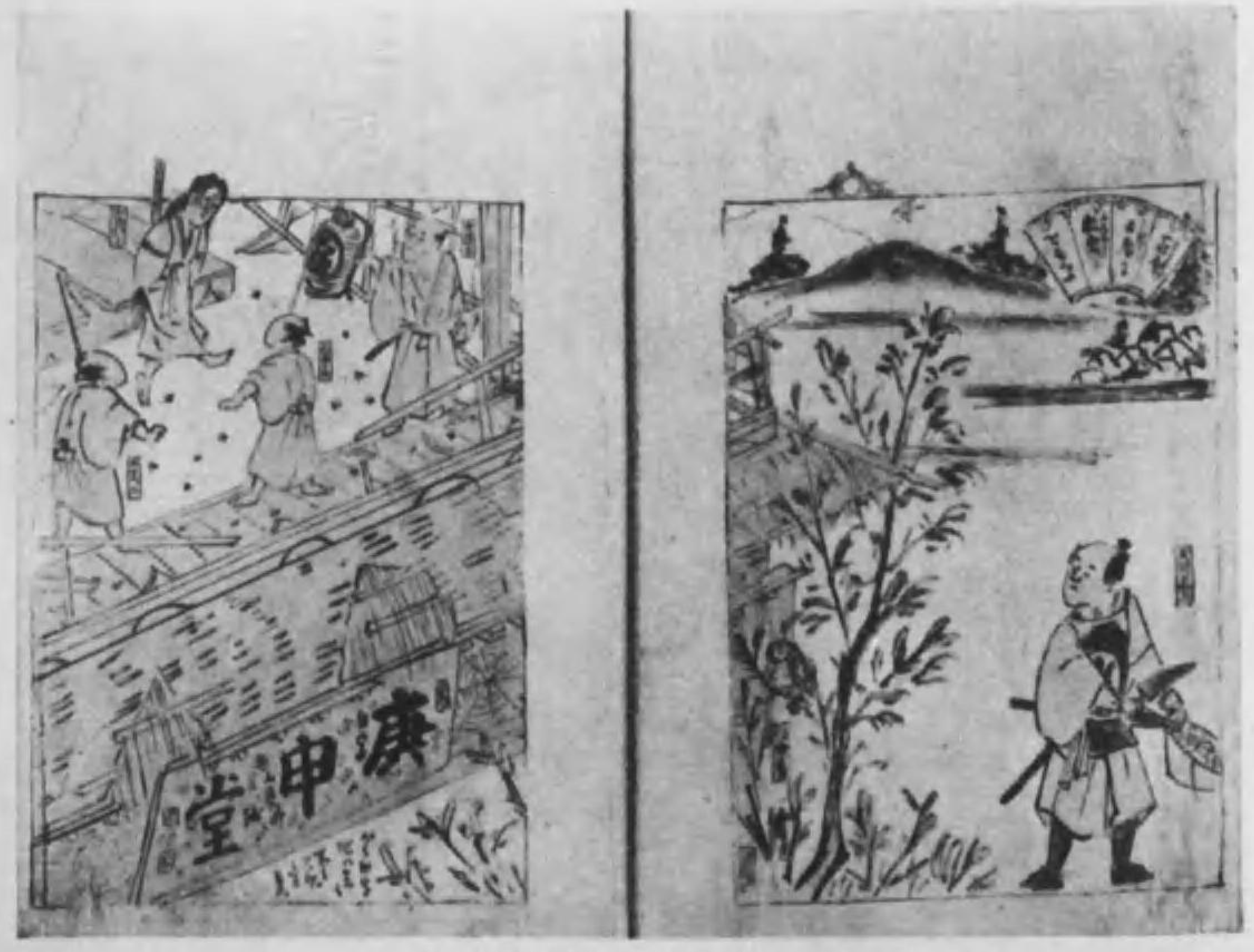
馬琴自筆八犬傳稿本

全拾冊 曲亭主人著編
里見八犬傳第八輯
上帙五冊
壹之卷 三拾丁
願人板元 丁子屋平兵衞

第八輯表紙（早大圖書館藏）

南總里見八犬傳第八輯卷之一上套
東都 曲亭主人編次

第八輯本文（同上）



第八輯 卷之二 插繪（同上）

彼の知識と手法とを展開し、形象化するために、物語が作られたかの感がある。例へば、關平の知識を新たにすることがなかつたら、犬川小文吾の越後に於ける物語はなかつたであらうし、雅穴の考證を得なかつたら、ゝ大法師が結城に赴く途中の説話は、生れなかつたであらうし、殊更に九輯の大部分を親兵衛の附りの物語に費してゐる點や、冗長で衒氣に滿ちた考證を隨所に挿入してゐる點などから見ても、彼の知識・學殖の披露のために書かれたもののやうである。

【梗概】〔一輯〕關東管領足利持氏は、京都の將軍足利義教と確執を生じ、永享十一年二月鎌倉で討たれた。下總の豪族結城氏朝は持氏の子を擁して結城城に據り、持氏恩顧の士多くこゝに集まつたが、衆寡敵せずして嘉吉元年四月終に落城した。この時、結城勢の名將里見季基は、討死に際して嫡子義實の英才を惜しみ、杉倉氏元・堀內貞行の二臣を附けて戰場を落した。義實等はかくて血路を開いて遁れ、相模三浦から安房に渡らうとして白龍の昇天を見た。當時安房は館山の安西景連、平館の麻呂信時、瀧田の神餘光弘の三將に分割され・長狹・平郡の二郡を領した光弘が最も旺んであつたが、彼は妖婦玉梓の愛に溺れて政を紊したので、奸臣山下定包は權勢を恣にして玉梓と通じ、遂に已に恨を含む杣木朴平・洲崎無垢三を唆いて光弘を殺させ神餘の家を奪つた。こゝに於て安西・麻呂は、共に定包を討たうと圖つた。その頃義實主從は景連を頼つて來たが、兩將は彼等を疑ひ、この國に産しない鯉魚を求めたので、義實等は長狹白箸川の上りに釣して偶々神餘の忠臣金碗孝吉の流寓するに逢ひ、彼に導かれてその夜のうちに定包の老黨萎毛酷六が預る東條の城を拔き、翌日氏元を殘して後陣に備へ、義實は孝吉・貞行と共に二百餘騎を率ゐて瀧田に向ひ、途中千餘騎の義兵を得てひた押しに定包を圍んだ。定包は先づ岩熊鈍平・錆塚幾內を將として、五百餘騎にこれを迎へ擊たせたが、忽ち幾內は討たれ、鈍平は深傷を負ふ敗戰に、退いて固く城を守つた。これがため義實等は大軍に糧食盡き、且つ定包は妻立戸五郎を遣はして安西・麻呂に援を請うたので、孝吉・貞行は各々奇策を以て合戰に出でんとしたが、良將義實はこれを止めて檄文を附けた鳩を放ち、城內の士氣を攪亂する計を施し、これが奏效して鈍平・戸五郎の兩人は、定包を殺して傭兵と共に義實に降つた。義實は卽ち城に入つて民のために倉廩を開き、孝吉に命じて鈍平・戸五郎・玉梓等を成敗させたが、この時玉梓は深く義實・孝吉を恨み、彼等に祟りをなすと誓つて死んだ。一方定包の請に應じた安西・麻呂は、共に兵を進めて東條の氏元を圍んだが、景連は麻呂の所領を併せんと氏元に內通して信時を討たせ、自ら信時の居城平館を攻めて一擧に野望を達したので、氏元は蕪崎鐵武に信時の首を持たせ、義實にこの由を報じた。やがて景連は老黨蕪戸訥平を使として義實に好を通じ來り、かくて嘉吉元年七月景連は安房・朝夷二郡を領し、義實は神餘の舊領を併せて安房は一時平定した。次いで義實は功臣を賞せんとしたが、金碗孝吉はこの時功成つて義を忘れず自殺した。その後義實は上總椎津の城主の女五十子を妻として娘伏姫・嫡子義成を儲けたが、伏姫に夜泣きの癖があつたので、三歳の時安房郡洲崎明神に祈り、役行者の示現に依つて仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の八字を彫れる水晶の珠數を得、これより姫は健かに美しく成長して行つたが、こゝに堀內貞行は東條よりの歸途、長狹郡富山に近い里の百姓技平の家に、狸に養はれた犬があることを聞き、これを瀧田の城に伴ひ來りて後園の番犬とし、名を八房と呼んだ。然るに伏姫十六歳の秋、景連は訥平を使者として凶作を告げ、米五千俵の借用と伏姫を養女にしたい由を申し入れたので、義實は米を貸與し、養女の義は卻けたが、翌年は里見領が凶作となつたので、孝吉の遺子金碗孝德を使として五千俵の返還を請はせると、景連は孝德を留めて急に兵を集め、自ら大軍を率ゐて義實の城を圍み、且つ訥平に命じて東條の貞行を攻めた。これには流石の里見勢も應戰の暇なく、七日にして早や落城と見えたが、圖らず伏姫を與へようとの義實の戯言を信じた八房が、單身景連を殺して來たので奇勝を博し、間もなく訥平等も討たれて義實は全く安房を平定した。かくて義實は、持氏の末子管領成氏より京都に請うて治部少輔に任ぜられ、改めて安房の國主となつたが、八房は伏姫を欲して止まず、遂に因縁を悟つた伏姫は、八房に伴はれて兩親の城を出で永く富山に隱れた。これより先き孝德は景連の許を遁れ出で、成氏に援を請うて主家を救はんとしたが果さず、私かに歸城の機を狙つてゐたが、この怪聞を知つて八房を擊たうと謀り富山に潜入した。

〔二輯〕この間に伏姫は富山の洞窟に籠り、法華經を念じて妖犬を德化したが、物類相感の理によつて懷姙の身となり、一日山中に逢うた神童にこれを告げられるや、八房と共に自殺せんとして偶々孝德の鐵彈に斃れた。折柄義實は奥方の遺言と役行者の示現によつて、貞行を伴うてこの場に來り、かの八行の珠數に祈つて一度姫を甦らせたが、姫は自ら刄に伏して果て、その傷口から白氣が昇つて珠數を八方に飛び散らした。これやがて八犬士が諸方に生るべき前兆であるが、孝德はこの時

伏姫深山に畜生に伴はる（第一輯）

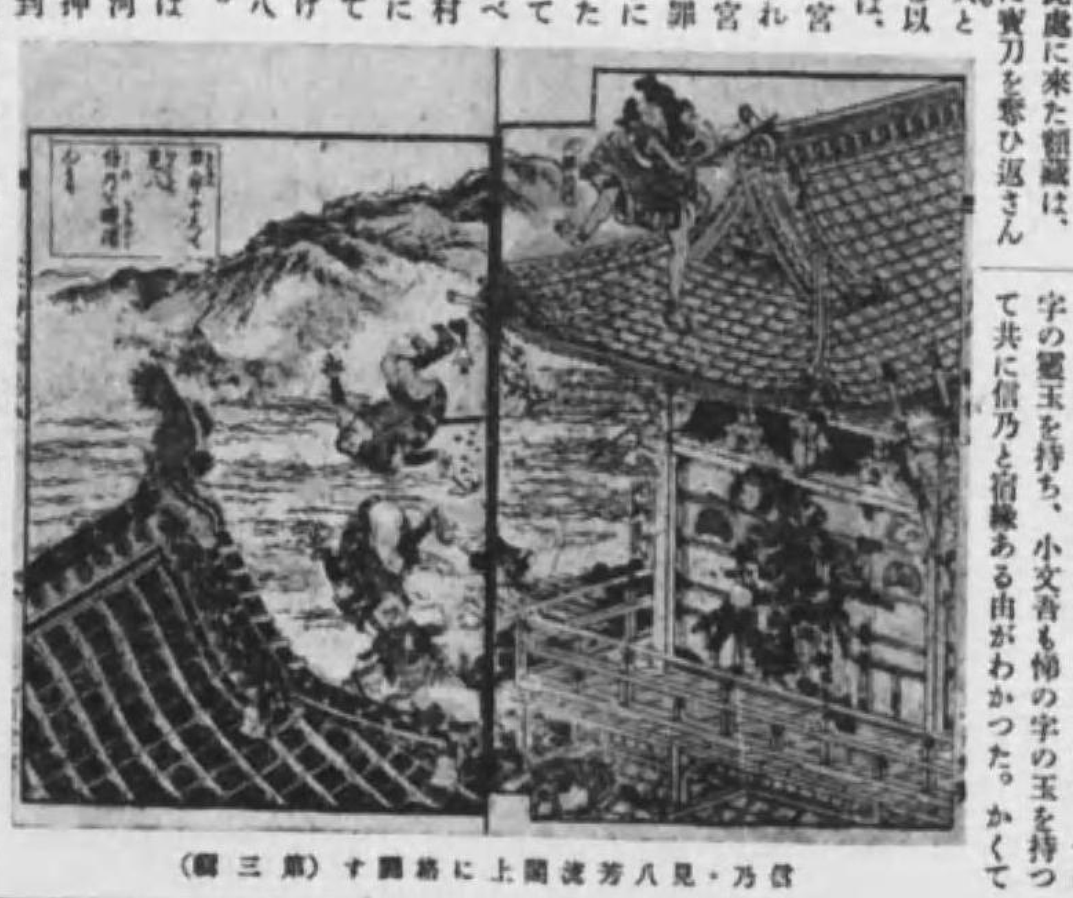
罪によつて出家し、ゝ大といひ、伏姬の後世を弔ひ、且つかの靈珠を集めんとて旅立つた。先に結城落城に際して、持氏の子春王・安王は管領清方の將長尾因幡介の手に因はれ、持氏の近習大塚匠作は主家の寶刀村雨丸をその子番作に託して親子亂軍の中を遁れたが、次いで春王・安王が、因幡介等の手で京に押送される途中、匠作は私かにこれを奪はんとして果さず、二君と共に青野ケ原に討たれた。この時後等の跡を追うて來た番作は、直ちに因幡介の部下を斬り、木曾夜長嶽の麓に遁れて君父の首を葬つたが、偶々賊僧蚊牛を討つて、許婚の結城の方人井丹三の娘手束とこゝに會し、共に武藏の里に忍ぶこと三年にして番作の故郷武藏豊島郡大塚の莊に歸つた。然るに番作の家は義姉龜篠の夫舞々山蟇六のために奪はれてゐたので、番作等は百姓糠助を初め村人の深切に護られてこの里に侘住ひの身となつたが、やがて手束は瀧野川の辨天に祈つて懷姙し、一子信乃を生んだ。かくて信乃は十一歳の時母を失ひ、父に仕へて益々孝且つ俊敏であつたが、偶々飼犬與四郎が蟇六の猫を殺したことから蟇六は難題を構へて村雨丸を奪はうと圖るので、番作はこれがため自殺し、死を決した信乃が情けの刃で與四郎を斬ると、その傷口から孝の字を彫つた玉が飛び出して信乃のものになつた。そこで信乃は村人の議を容れた蟇六夫婦の許に養はれることになり、父の遺言によつて犬塚信乃戍孝と名乘り、同年輩の額藏といふ蟇六の小者と親しくなつた。これが伊豆北條の莊官犬川則任の遺子莊之助で、鎌倉の足利成氏、兩管領に攻められて靜我に退き、義教の四男政知、京より右兵衛督として伊豆に來り暴政を布くや、

父則任はこれを諫めて諫死した。莊之助は母に伴はれて縁者なる里見の家臣蜑崎輝武を頼つて行つたが、戰國の世とてこれを果さず、途中母が病歿したので、蟇六に養はれて今日に至つた者であることを知り、且つ額藏も出生の時に得た義の字のある信乃と同樣の玉を持つてゐたので、これと義を結び、額藏は莊介義任と名乘つた。

〔三編〕その翌年、蟇六は信乃の喪の明けるのを待つて元服させ、養女濱路の聟とする由を披露し、信乃はうはべ許りの溫情に育つて十八歳となつた。時に文明九年、武藏豊島の城主豊島信盛は、越後の長尾景春に味方して弟練馬倍盛と共に山内・扇谷の兩管領に叛き、巨田持資・植杉刑部・千葉介自胤の三將に攻められて滅んだ。又この年に百姓糠助は、嘗て信乃等と同じ玉を持つ一子玄吉と葛飾行德で別れた旨を信乃に告げて病歿した。然るに翌年陣代簸上宮六は、媒妁の役人軍木五倍二・卒川庵八等と蟇六の家に宿り、濱路を見染め、やがて五倍二を通じて婚を申入れたので、蟇六等は信乃を遠ざけようとして先づ扇谷の浪人網乾左母二郎、惡船頭土太郎等を語らひ、信乃を神宮川に誘うて村雨丸の寶刀を奪ひ且つ水中で殺さうとしたが果さず、翌日信乃は濱路の切なる情を斥け、額藏に送られて寶刀を成氏に獻ずるために靜我に赴いた。その夜蟇六は宮六と濱路の婚姻を結ばうとしたが、神宮川で村雨丸をすりかへた左母二郎は、豫て戀する濱路を奪つて逐電し、武藏本郷に近い圓塚山で、追うて來た土太郎等三人の惡漢を斬り、濱路も信乃に節を立てて討たれた。折柄こゝで火定に入つた修驗者寂寞道人肩柳が現れて左母二郎を殺し、村雨丸を奪つたが、

彼は練馬の老臣犬山道策の子道松で、扇谷定正とその臣竈門三寶平を君父の仇と狙ひ、家傳の忍術を以て修驗者となりすまし、軍資金を集めてゐた。濱路は實にその異母妹であつた。その時信乃に別れて此處に來た額藏は、事情を知つて信乃のために寶刀を奪ひ返さんと、道松今は犬山道節忠與と爭ふが、道節は火遁の術を以て遁れた。一方蟇六・龜篠は、婚姻を偽つたといふので、宮六・五倍二のために慘殺されたが、恰も歸宅した額藏は宮六を討つて主の仇を報じ、罪によつて宮六の弟社平の手に捕はれた。さて靜我に赴いた信乃は重臣横堀在村を通じて成氏に寶刀を獻ずる旨を述べ城中に招かれてから始めて村雨丸の盗難を知つたが時既に遲く、敵の間諜と誤まられて捕はれようとし、捕物にかけては藩中無双の勇士犬飼見八信道と芳流閣上に格鬪した。

〔四編〕この時、信乃と見八は共に三層樓の屋根より坂東河の岸につないだ船に落ちて押し流され、葛飾行德の浦に到り、旅宿古那屋文五兵衛に救はれた。この文五兵衛はかの神餘光弘の横死の際、主君を護つて討たれた那古七郎の弟で、伜小文吾、娘沼藺といふ子があり、沼藺は市川の船長山林房八に嫁いで、大八といふ子をまうけてをり、小文吾は大力で犲獺犬太といふ土地の惡漢を懲してから犬田の小文吾と呼ばれ、近頃鎌倉



信乃・見八芳流閣上に格鬪す（第三編）

の山伏先達念玉と修驗道觀得の所得爭ひの相撲に、妹聟の房八と爭つたことがある。また見八は文五兵衛の舊知の靜我の武士犬飼見兵衞に養はれた、かの糠助の遺子玄吉で、信の字の靈玉を持ち、小文吾も悌の字の玉を持つて共に信乃と宿縁ある由がわかつた。かくて兩勇士は、古那屋に潜むことになつたが、信乃はその夜から破傷風に罹つたので、見八改め現八は、武藏栗浦に名藥を求めに行つた留守中、在村の命を受けて信乃の詮索に來た新織帆太夫のために、文五兵衛は代官所に引かれ、小文吾獨り信乃を護つて窮地に陷つた。この事情を知つた房八は私かに先の相撲の遺

恨に託して沼藺を返し、己は信乃を訴人する如く見せて小文吾の手にかゝり、信乃の身代りにならうと企て、母妙眞と圖つて巧みに小文吾を欺き、沼藺と共にその刄に斃れた。房八のこの苦計は彼が光弘を殺した杣木朴平の後で古那屋のためには仇であつたところから出で、小文吾は意外な悲劇の展開に驚くが、この房八と沼藺の生血によつて信乃の破傷風は立ちどころに癒え、且つその場に現れた念玉と觀得は實にかの八つの靈玉を集めんとする金碗孝德のゝ大法師と、里見家のために勇士を求めて廻國する蜑崎輝武の子照文であつたので、因縁の奇遇は一層深いものとなり、ゝ大によつて房八の子大八が仁の字の玉と牡丹の痣とを持つて幼いながら犬士の一人である事實が明かとなるに及んで、一同の悲嘆はその頂點に達した。翌朝小文吾は房八の首を信乃の首と偽つて父を救ひ、信乃・現八は小文吾に送られて大塚に犬川莊介の額藏を訪ねて行くが、この三人がそのまゝ歸らぬので、ゝ大がその後を追ひ、照文が獨り文五兵衛・妙眞等と大八や佛を護つてゐた。然るに妙眞に懸想した市川の惡漢颶風の舵九郎に事を見破られさうになつたので、照文は妙眞と大八今は犬江親兵衛仁を安房に伴ひ行かうとし、途中舵九郎一味に襲はれるが、不思議にも親兵衛は黑雲に捲き上げられて神隱しに逢ひ、舵九郎は空中に裂かれて果てる。やがて照文は妙眞とその僕依介を伴うて一旦安房に歸り、文五兵衛は小文吾等を尋ねて大塚に向つた。

〔五編〕先に大塚に赴いた信乃・現八・小文吾の三犬士は、武藏豊島の神宮河原に到り、矠平といふ漁夫に逢ひ、信乃出發後の變を知り、瀧野川の金剛寺に詣つて額藏の莊介を救ひ出さうと圖つた。一方額藏は、社平・庵八・五倍二等のために水責め鞭責めの拷問に遭つたが、靈玉の加護によつて命を全うしてゐるうち、社平等の賄賂を受けた陣番丁田町進は、額藏を死罪に陷し、七月二日庚申塚で刑戮しようとした。その日信乃・現八・小文吾は、これを知つて一擧に刑場を破り、社平・庵八・五倍二等を討つて額藏を救ひ、町進の追擊を、矠平とその子、力二郎・尺八の兄弟の援を藉りて遁れたが、力二郎・尺八は、この時町進を討つて共に命を落した。次いで四犬士は上野の國明巖山に赴いたが、やがて犬山道節を尋ねようと扇谷定正の居城白井を指して行く。こゝに一族山内顯定との不和により俄に鎌倉から白井に城を移した定正は、七月五日砥澤の山に狩獵して、翌日多くの家臣を率ゐて歸城する途中、村雨丸の名刀を所持する千葉の浪人犬出太郎と稱して行列に近づいた一人の武士が、突然定正を討つて、我こそは練馬倍盛の老黨犬山道策の一子道節忠與なりと名乘りを擧げた。併しこれは、豫め彼を謀らうとした定正の計で、道節に討たれたのは定正に扮した家臣越杉駄一郎であつたが、駄一郎は先に倍盛に直接槍をつけた者であつたので、道節はその首を奪ひ、また父道策を手にかけた竈門三寶平をも討ち、君父當座の仇の首級二つを得て、奮戰その場を遁れた。折から此處に來つた四犬士も追手の一隊に疑はれて刄を合せたが、道節の術に救はれて散り〲に程近い荒芽山の山中に遁れ入つた。この荒芽山の麓には、音音といふ老女が、曳手・單節といふ二人の嫁と侘び住ひをしてゐたが、音音はかの矠平の妻で、嫁二人は力二郎・尺八兄弟の妻であつた。その昔、音音は犬山道策の家中姥雪與四郎今の矠平と戀に落ちて、力二郎・尺八をまうけ、道節の母お提非の方の情に救はれたが、池袋の戰の後に一家離散して今日に至つたのであつた。その夜四犬士と道節及び先の庚申塚の變に、馬役仁田山晋五の奸計により額藏と信乃として梟首された我が子、力二郎・尺八の首を奪つて來た矠平とは、期せずして音音の家に集り、互に事情を明かして再會を喜び、且つ共通の玉と痣によつて道節が犬士の一人であることも明かになつたが、早くも一同の動靜は定正の追手の知る所となり、その家は時を移さず巨田新三郎の軍勢に取圍まれた。

〔六編〕已むを得ず、矠平夫婦は家に火をつけて遁れ、五犬士も各々血路を開いて落ちのびたが、小文吾に護られた曳手・單節は馬に縛りつけられたまゝ野武士に襲はれ、その折變異に遭つて行方知れずになつた。小文吾は夜どほし東を指して走り、武藏阿佐谷の里に到つて、手負ひ猪を倒して獵師並四郎を救ひその家に伴はれた。邪惡の並四郎は小文吾の所持する沙金に目をつけ、これを殺さうとして反つて討たれたが、並四郎の妻船蟲は、贓品の名寶嵐山の尺八の盗人と偽訴し、小文吾を役人畑上語路五郎の手に捕へしめた。併し小文吾は機智を以て巧に身の明かしを立て、賊婦船蟲は却つて召捕られた。折から國主千葉介自胤は小鳥狩の歸途、この事を聞き、語路五郎に船蟲を責めさせ、尺八と共に失はれた小篠・落葉の名刀の行方を詮索し、且つ小文吾に仕官を勸めよと命じて石濱に歸城した。然るに自胤の長臣馬加大記は、押送中の船蟲を奪つて語路五郎を獄死させ、小文吾を敵國の間者として自邸に幽閉した。かくて小文吾は、一年餘を因はれの身として送つたが、偶々大記の僕品七の物語により大記の姦惡を知つた。それは自胤が石濱の城主となつた當初、大記は自胤の兄實胤の長臣として赤塚の城下に威權を振つてゐたが、實胤が家督を弟に讓らうとするや、大記は自胤の老黨粟飯原胤度・籠山逸東太の二人に、勢を殺がれることを恐れ、胤度が主命を帶びて、名寶嵐山の尺八と小篠・落葉の名刀を携へて、赤塚に使せんとするに際して自胤に讒し、逸東太を謀つて途に胤度を討たせ、その折尺八と名刀を並四郎・船蟲に奪はせて、逸東太をも失脚させ、自ら二者の權勢を併せたのであつた。間もなく大記は小文吾を謀害せんとしたが、靈玉の奇特によつて果さず、又千葉家横領の謀叛に誘はうと圖つたが、小文吾が肯かないので私かに刺客を派した。然るにこの刺客はこゝに招かれてゐた旦開野と稱する女田樂師のために擊たれ、次いで小文吾と脫出を謀つて、旦開野は大記をも討ち果す。彼女は即ち粟飯原胤度の遺子犬坂毛野胤智が仇討せんための假りの姿で、小文吾はかくて毛野と共にこの處を脫出するが、墨田河原で毛野を見失ひ、偶々忠僕依介に會つて、市川の變と安房に於ける父文五兵衛の病死を知り、一時故郷に歸つて後、毛野を尋ねて鎌倉に赴き、便を得ずしてまた旅を續けた。次に犬飼現八は、荒芽山から先づ行德を訪ねたが、小文吾の消息を聞かず、諸犬士の行方を求めて江戸から京に上り、擊劍を指南して三年を過して得るところなく、再び東に下つて下野國庚申山の麓に到り、茶店の老爺鵙平から奇談を聞いた。それに依れば、庚申山は豫て山賊・猛獸・妖怪の棲處として噂が高かつたが、これを憂へた赤岩村の赤岩一角武遠といふ武藝の譽れ高い鄕士が、變化を退治して處の禍

儀を除かんものと高弟數人を隨へて山に登つた。途中門人等は恐怖に襲はれて下山し、一角獨り奥深く分け入つたが、そのまゝ姿を見せないので、一同は翌日里人をかり集めて捜索に赴き、一角の無事なのに逢ひ、喜んでこれを伴ひ歸つた。その後一角は後妻に牙二郎といふ子が生れてからは、今までに變つて先妻の子角太郎を憎むこと甚しいので、角太郎の實母の兄である犬村の蟹守儀淸が甥の不幸を憫んで我が家に引取り、角太郎が十八の春まで育て上げて娘雛衣に配せ、やがて儀淸夫婦は前後して病歿した。一方牙二郎の母も牙二郎の幼時に頓死して、此處に流れ來た船蟲といふ女が一角の後妻となつた。この船蟲の惡心のために角太郎は雛衣との仲を劈かれ、剩へ伯父から讓り受けた家產を奪はれて、今は赤岩村と犬村との間に草庵を結んで味氣ない日を送つてゐるといふ。現八はそこで今なほ妖怪の噂ある庚申山に分け登り、夜道を冒して、胎内竇と呼ばれる山中第一の石門に到ると、折からの月光を透つて怪物が現れたので、その左眼を射てこれを退け、進んでとある洞窟に達すると、火を焚いて彼を待つ人があつた。これは眞の赤岩一角の亡靈で、彼は先年の登山の時この山に數百年を經た山猫のために噛み殺され、山猫は一角に化けて牙二郎を生み角太郎を害しめてゐたので、今現八に射られた怪物も、毎夜この山に遊行に來るその山猫であるから、角太郎を助けて仇を討つてくれと、證據の短刀と己が髑髏とを現八に託した。そこで現八は下山して角太郎を訪れ、その名より推して犬士の一人ではないかと訊ねると、果して角太郎も共通の痣と禮の字の玉を持つてゐたが、玉は先頃雛衣が病氣の際誤つて噛み下したといふ。折から繼母船蟲が何故か角太郎を訪れて來た。

〔七變〕船蟲は、昨夜左眼を傷つけられた夫一角のために氏神へ參詣の歸途、角太郎との不緣を悲しんで入水しようとした雛衣を救つて來たと言つて、先に自ら割いた角太郎と雛衣との夫婦仲を復緣させて戻つて行つた。彼女は馬加大記に助けられ、千葉の城下を遁電して後こゝに流れ來り、端なく贋一角の後妻となつて惡事を重ねてゐたのである。併し現八はこの船蟲の仕打を疑ひ角太郎等のために實情を探らうと、獨り赤岩の一角方を訪ねた。折から一角の許に一人の客があつた。彼は馬加大記に謀られて遁電し、一角の門弟となり、長尾景春に推擧されてゐた籠山逸東太で、この程景春の手に入つた木天蓼丸の短刀の鑑定を誂はんため、主命を帶びて一角を訪ねて來たのである。一角は木天蓼丸の良材を得て眼藥にせんと密かに幻術を以てこれを掠めた。そこへ現八は旅人を裝うて入り來り、牙二郎・逸東太以下數人の内弟子に挾まれて武藝を現し、忽ち彼等を取りひしいだ。これを恨んだ一同は一角の奸計によつて現八を暗殺しようとするが、靈玉の加護によつて危難を知つた現八は奮鬪して脫れ、角太郎の庵に退く。その後を追つて牙二郎と逸東太は角太郎に迫るが、一足遲れてその場に來つた一角と船蟲は兩人を卻け、掠て得た木天蓼の粉末と併せて雛衣の胎兒の肝を一角の眼傷の藥に用ひたいと、強ひて角太郎夫婦に迫つた。そこで哀れ雛衣は無理往生に割腹する。途端に雛衣の腹からは角太郎の靈玉が飛び出して一角を斃した。驚いた船蟲と牙二郎は角太郎に斬りかゝり、これがため薄傷を受けた角太郎の血を、現八はかの庚申山で託された髑髏に受けると、髑髏の主こそ角太郎の實父であると分つたので、角太郎に實情を告げ、即ち山猫である一角・牙二郎をその場に討ち取つて、角太郎は父の恨を返し併せて赤岩の妖怪を除いた。やがて亡父と雛衣の弔ひを終へた角太郎は、犬村大角禮儀と名乘り、他の犬士に會はうと現八と共に發足した。船蟲はこの時逸東太の證人として長尾家に曳かれる途中、脊掛の驛で逸東太を欺き、木天蓼丸と路銀を奪つて逃走した。話變つて犬塚信乃はその後甲州巨摩郡富野穴山の麓に到つた時、銃獵中の武田の家臣泡雪奈四郎とその僕蟇内が賊を働かうとするのを懲し、その折兩人の助命を誂うた村長四六城木工作が、信乃の外舅父井丹三の郎黨であつたことを知つてその家に逗留するうち、信乃の亡妻濱路の靈が乘り移つた木工作の養女濱路に戀されて頻に懊せられる。然るに豫て泡雪奈四郎と通じてゐた木工作の後妻夏引は、信乃・濱路を遠ざけんとして果さず、奈四郎は遂に木工作を銃殺し、程近い石禾の指月院に夏引と會して信乃に罪を轉嫁しようと謀つた。かくて夏引の訴へにより武田家の眼代甘利堯元は、翌日信乃と濱路を引立てて行つたが、意外にも堯元は指月院の沙彌念戍によつて夏引等の密計を知り、信乃を救ひに來た犬山道節であつた。これより先き、ゝ大法師は行德を立ち出で諸國を遍歷中、故あつて石禾の指月院に足を留め近在を德化してゐたのであるが、安房より更に犬士を尋ねに出でた蜑崎照文と會し、また荒芽山を遁れた道節は、犬川莊介と共にこの國に來つてゝ大に會し、莊介が先に小文吾等を求めて旅立つた後、ゝ大・照文と共に、指月院に留まつてゐたのであつた。信乃と濱路はかくて指月院に伴はれ、各々久しぶりの物語をしたが、この時濱路は二歳の時鷲に攫はれた里見義成の五の君濱路姫であることが分つた。一方、贋の甘利堯元は信乃等が出たあとを木工作方に赴き、奈四郎の奸策を看破して夏引と家僕出來介を召捕り、これを責めて實情を知り、明君武田信昌に言上し、奈四郎を捕へんとしたが、奈四郎は早くも蟇内を連れて遁電した。こゝに於て信昌は自ら指月院に赴いて、ゝ大・犬士に對面し、その智勇を知つて永く當國に留めようと圖つたが、信乃・道節はこれを避けて、濱路姫を安房に送る照文と同道して出で、途中武藏神田の原に於て奈四郎を討ち木工作の恨みを晴らした。その翌年の春、先に鎌倉を立ち去つた犬田小文吾は、伊豆の沖に難船して大島・三宅島に漂ひ、それより浪華を經て近藏・北陸道を巡つて後、越後刈羽郡小千谷の郷に滯留中、處の俠客で角力の上手である宿の主石龜屋次團太に勸められて、小文吾は同國古志郡二十村に行はれる名物の鬪牛を見物に行き、偶々その日の呼び物の須本太牛が暴れ狂ふのを取り鎭めて勇名を轟かせた。

〔八變〕その後小文吾は眼病に罹つて、次團太方に逗留してゐた。然るにかの毒婦船蟲はこの國に流れ來つて、古志野金倉山の山賊童子隱子酒顚二の妻となつてゐたが、計らず鬪牛の日に小文吾を見て阿佐谷の恨を返さんと附け狙ふ中、小文吾の病癒を知るや贋按摩となつて近づき、刺し殺さうとしたが却つて小文吾に取押へられ、次團太等によつて山中の庚申堂に縛められた。話變つて甲斐の指月院を立ち出でた犬川莊介は、小文吾を尋ねて、行德から常陸・奥州を經巡つて越後に入り、恰も

この夜船蟲の囚はれた庚申堂に憩ひ、毒婦の巧言に欺かれて彼女を救ひ、酒顚二の山寨に伴はれて行つた。その夜のうちに石龜屋を襲撃しようとする酒顚二一味の惡計を知つて、共に石龜屋に赴き、折しも靈玉に祈つて病癒えた小文吾と力を併せて賊を鏖殺しにした。この時船蟲はかの甲斐を遁電して酒顚二に從つてゐた泡雪奈四郎の惡僕蟇内と山寨に火を放つて逃れたが、小文吾・莊介の兩人は、次團太の申立てにより、賊を滅した功で國主長尾景春の執事稻戸由充に請ぜられ、片貝の別館に赴くと意外にも由充の手に捕へられた。當時景春は上野白井に在城し、越後の政は專ら片貝の別館なる景春の母箙刀自の掌るところであつたが、武藏大塚の城主大石憲儀と石濱の城主千葉介自胤は共に箙刀自の女婿に當るので、兩家のために罪人たる二犬士を討ち取れとの命を由充が受けた。併し由充は義に篤い武士で、刀自のこの擧を諫めたが、その甲斐なくて小文吾・莊介を捕へたが、その器量を惜しんで私かに酒顚二の手下潤六・穴八を殺し、その首に莊介の佩刀小篠・落葉と、曾て鎌上社平の佩刀であつた小文吾の刀を添へて刀自を欺き、二犬士を無事に脫れさせた。恰もその時大石・千葉兩家から箙刀自への使者として、丁田町進の弟畔五郎と馬加大記の甥蠅六郎が來てゐたので、小文吾・莊介の贋首と佩刀は彼等の歸國の土產として遣はされ、兩人はこれを護つて信濃路を歸る途中、諏訪の湖畔に於て蠅六郎は落葉の斬れ味を試みようと居合せた鎌倉薨兒といふ乞食を斬つたが、同じ乞食の相模小猴子と稱してこゝに潛んでゐた犬坂毛野のために親仇として討ち取られた。更に毛野はこの二人の後を追つて來た莊介と、小篠・落葉を爭つて鬪ふが、後から畔五郎を討つて來た小文吾に止められて三人は不思議な對面をする。かくて毛野・小文吾・莊介は程近い青柳の宿に會しての物語に、毛野も共通の痣と智の字の玉を持つ犬士の一人であり、かの小篠・落葉の名刀は、本來莊介の家に傳はつたもので、莊介の父の歿後に賣られたのを毛野の父が鎌倉で買ひ求め、これを自胤に獻じて後、並四郎・船蟲に奪はれ、また賣られて行德で小文吾の手に入り、信乃に贈られて遂に莊介の手に戻つてゐたこと等が判明した。そして籠山逸東太を討つ一念急なる毛野は、翌日獨り二犬士に別れ去り、小文吾・莊介は甲斐の指月院へ向つた。さて犬村大角と犬飼現八は東海道を經巡ること三年に及んだが、他の犬士に逢ふことなく、共に赤岩に戻つて雛衣の三回忌と亡父の弔ひを濟ませ、再び出でて武藏千住河原に到り、二人の賊に逢つてこれを追うたことから、圖らず穗北の豪族氷垣夏行方に入つた賊と疑はれて捕へられ、私刑に行はれようとしたが、その夜夏行の娘重戸の夢枕に立つた伏姬の加護に救はれて脫れ出で、千住河の船中に道節・信乃の二犬士に逢つた。これより先、道節・信乃に捕へられてゐた河太郎・野良平の二賊を引立てて、四犬士は夏行の許に赴いて大角・現八の寃を雪いだので、夏行は罪を悔いて聟の落鮎有種と共に犬士の味方となることを誓ひ、永く四犬士を家に留めた。間もなく大角・現八は、この由をゝ大に報ずべく指月院に使し、信乃と共に殘つた道節は、有種が同じ練馬の殘黨であるを幸ひ、これと力を併せて、今は程近い五十子に在城する扇谷定正の動靜を窺つてゐた。指月院に着いた二犬士は、やがて莊介・小文吾と此處に會し、共に犬江親兵衞を尋ねて甲斐の山地を探索する。その留守中、豫て結城の古戰場に結庵して諸將供養の大念佛をしようとしてゐたゝ大は、指月院を後住に讓して先づ穗北を志し、武藏豐島郡麻生の郷を過ぎる折から、此處に妖術を用ひて良民を掠める長坂山の賊僧鞭坊を擊ち、次いでこの賊のために年久しき棲處を奪はれてゐた猫を救つて大德を現した。茲に又犬坂毛野は、武藏湯島の天神の境内で物四郎といふ放下師に身を代へて、仇の在處を探ねてゐた。或る日毛野に觀相を求めた旅人は、かの越後の石龜屋次團太の乾兒百堀鮒三で、次團太がその後妻嗚呼善と通じた乾兒泥海士丈二に謀られ、船蟲が殘した木天蓼丸の短刀に關して寃罪に陷ちたので、扇谷定正の家臣目前の情に縋らうとして遙々來たのであつた。その時恰も五十子から社參に來た蟹目前が寵愛の猿を逃がしたので、物四郎は手練の早技を以て捕へ、功によつて鮒三のために次團太の助命を請ひ、また定正の忠臣河鯉守如に武藝を驗されて奸臣龍山免太夫こと實はその後定正の寵臣となつてゐた毛野の仇籠山逸東太を討つべき密命を受けた。この時道節は物蔭にあつてその始終を聞いてゐた。これより先き蟇内と共に越後を遁電した船蟲は、武藏司馬濱に近い谷山の邊に住まひ、辻君となつて客を殺し財を奪ふ惡事を働いてゐた。或る夜も蟇内と共に、賽塞平・鬼四郎といふ者を殺したが、恰も甲斐を發つて道行中の犬田・犬川・犬村・犬飼四犬士のために捕へられ、積惡こゝに報いて蟇内諸共慘殺された。四犬士は、また道節・信乃の二人とも會し、落鮎有種を加へて毛野の仇討と定正の討伐を合議した。

・大巧に賊腕を滅す（第八變）

〔九變〕文明十五年正月、龍山免太夫は扇谷定正の命により、小田原の北條家に使者として仁田山晉五・竈門鍋介・鯨杉駄三・鴨嶋鵜四郎以下の諸卒を從へて五十子の城を出で、武藏品革の宿を過ぎて鈴森にかゝつた時、蟹目前の密命を受け、圖らず多年の宿願を果す機を

得た犬坂毛野は、單身行列を要擊して兎太夫・惡四郎と血戰し、折から東西に現れた小文吾・莊介と力を併せ、遂に兎太夫の舘山逸東太以下を討ち果して本懐を遂げた。この報に接した定正は大に怒り、河鯉守如の諫止を卻けて自ら三百餘人を手勢として品革に急行する。かくと見るより、此處に兵を伏せてゐた現八・大角・道節は、一時に起つて定正の兵を攻め惱まし、中にも定正は、道節に追はれて兜を射落され、已に危く見えたが、守如の子河鯉孝嗣に救はれて漸く那里の城に遁れた。この襲に蟹目前と守如は責を負うて自刃した。一方後陣の信乃は、二十餘人の小勢を以て五十子城の虚を衝いてこれを乘取り、倉廩を開いて民に施したが、品革の勝報に囲を解いて去り、翌日七犬士は穗北に歸り、それよりゝ大に會はんと結城に發足した。さて安房の里見家に於ては、義實は既に平群の瀧田に隱居し、嫡子義成家を繼いで安房郡稻村に在城し、杉倉氏元・堀内貞行・荒川清澄・東辰相の四家老に扶けられて勢旺んであつたが、こゝに同國館山の城主蟇田權頭素藤は、もと近江膽吹山の兇賊但鳥業因の子源金太素藤といひ、業因が京に刑死の後、この國に遁れ來て偶々疫癘の鬼語を聞き、當時館山城下に猖獗を極めた疫病を治癒してより、昔の徒黨と結んで次第に勢を得た。時の館山城主小鞠谷如滿はこれを懼れ、郎黨兎苔孝彌太を遣して素藤を討たうと圖つたが、素藤は却つて孝彌太を謀つて如滿の家を奪つた者である。かくて館山の城に入つた素藤は、如滿の側室朝顏・夕顏を我がものとして榮華を誇つたが、疫病のために二人は相次いで急死したので、當時反魂の術を以て聞えた八百比丘尼妙椿を招いて二人の姿を求め、甦を遣らうとしたが、妙椿はこの時里見の五の君濱路姫の姿を現して見せた爲め、素藤は姫に懸想して結婚を申入れ、忽ち義成の拒絕を受けた。これを恨んだ素藤は妙椿と圖り、義成の子義通が初甲の式を擧げた際、これを捕へて義成に抗した。こゝに於て義成は自ら三千餘騎を率ゐて館山に素藤を攻めたが、義通が人質に取られてゐるので、決戰の途なく、徒らに城を圍むのみであつた。折から瀧田の義實は、伏姫の靈を祭らうと富山に微行したが、素藤の一味となつてゐた安西・麻呂の殘黨安西出來介・麻呂復五郎・天津九三郎等は、途に義實を襲つた。この時伏姫の神靈により、此處に養はれて既に九歲となつてゐた犬江親兵衛が現れて義實の急を救ひ、犬士の一人として義實に見參した。また同じく伏姫の神靈に護られて二人の嫁曳手・單節と共に、荒芽山から此處に移り住んでゐた姥雪與四郎も、敵の一人南彌六を捕へて現れ來り、伏姫の神慮を義實に告げた。かくて義實と共に富山を下つた親兵衛は、直ちに義實の許しを得て花咲翁與四郎に名馬青海波の轡を取らせ、單身館山城に使して油斷した素藤を見事生捕つて大功を樹て、素藤に代つて館山の城を治めたが、義成の仁心によつて隅田河岸に追放された素藤は、やがて妙椿の妖術によつて人不入山の庵に伴はれ、暫く淫樂に耽るうちにも、館山を奪ひ返して親兵衛に復仇せんものと頻に秘策を練つてゐた。かくて獨り山を下つた妙椿は、妖術を以て稻村城なる濱路姫を、養母夏引の幻影となつて脅かし、その夜詰として親兵衛を館山より招かしめ、靈玉を地下に埋めさせて後、濱路姫と親兵衛と不義ある如く義成に疑はせて、遂に親兵衛を放に立たせ、計成るやその夜の中に幻術を以て武具を奪ひて兵を呼び、素藤と共に一擧に館山を陷れて再び叛いた。里見の將荒川清澄は兵を率ゐて直ちにこれを攻めたが、妙椿の妖術に擊たれて大敗した。こゝに於て先に富山で義實に助命され、恩を感じて歸順した南彌六と出來介は、清澄の贋首を作つて素藤を刺さうと圖つたが、途中濱路姫を奪ひ去らうとする妙椿に遮られ、姫は伏姫の神靈に救はれたが、この折妙椿は神靈に胸を蹴られて、以後妖術の衰へを來した。南彌六・出來介は、やがて城中の素藤に近づいて刺さうとしたが、遁れ來た妙椿のために捕はれて殺害された。然るに神靈に護られて無事稻村の城に戻つた濱路姫は、伏姫の命を父義成に傳へたので、義成は遂に親兵衛召還を志して蜑崎照文と姥雪與四郎を發足せしめた。一方稻村を去つた親兵衛は、先づ市川・行德に赴いて父祖の靈を弔ひ、それより江戶に向ひ、上野の原の茶店に憩ひて毛野の仇討と五十子落城の事を聞き、且つ定正の忠臣河鯉孝嗣が冤罪のためにその日處刑されようとするを聞いて、これを救はうと不忍池畔に赴いたが、圖らず孝嗣は定正の岳母箙大刀自の出現によつて救はれたので、親兵衛は孝嗣を里見に推擧しようと故意に喧嘩を賣つてその武藝を試し、やがて誠意を告げて先の茶店に伴つた。然るにその茶店の老婆は、實は孝嗣の幼時その乳母であつた政木狐で、圖らず正體を現してから、河鯉を去つて年久しく此處に茶店を開き、多くの人を救つた善根によつて、白毛九尾の靈狐となつたので、通力を以て今箙刀自に化け孝嗣の難を救つたのであるが、また親兵衛發足後の安房の事情を、詳しく親兵衛に告げ、妙椿はかの八房を奪つた狸が佛果を得ず里見家に崇つてゐるのであるから、親兵衛の靈玉に照して擊つべしと敎へ、更に孝嗣を以て一千人を救助したとて、その場で不忍池に入り狐龍となつて昇天した。そこで親兵衛は孝嗣と共に、上總に還らうと兩國河原に到り、偶々賣藥商人となつてゐた石龜屋次團太と百堀鮒三が土地の惡者のために難儀するを救ひ、共に安房に向はうとして宿つた船宿に、偶々照文・與四郎と邂逅し、義成の御敎書を頂き、また素藤に追はれた館山の兵六十餘人の來り加はるを併せた。そこで一同快船に乘じて上總に渡り、直ちに館山に迫つて靈玉の奇特によつて岩壁を割き、城内に亂入して素藤を捕へ、靈玉を以て妙椿に翳せば陰火と共にその姿は消えて、如・是・畜・生・發・菩・提・心の八字を背に現した狸の骸が見出された。かくて荒川清澄は素藤以下の捕虜を率ゐて稻村に凱旋し、親兵衛は七犬士召會の先命を果さんと、政木大全と改名した孝嗣並に次團太・鮒三を伴つて、そのまゝ結城に發足した。越えて四月十六日結城古戰場の草庵に於て、ゝ大法師は里見家の代香使蜑崎照文、七犬士以下二十餘名をもつて、結城戰死者五十年忌の大法會を修せんとしたが、結城の菩提所逸匹寺の僧德用はこれを怒つて、結城の家臣長城・堅名・根生野の三士を語らひ、同勢三百五十餘人、僅かにゝ大の一行を襲つた。こゝに七犬士は大に戰つたが、不意を擊たれて照文・與四郎は虜にされ、ゝ大も既に危きところへ、恰も館山より來つた親兵衛が、忽ち敵を打破り、鐵砲に攻められて左右川に落ちた同行の大全・次團太・鮒三を尋ね行くうち、犬塚信乃と再會し、八犬士こゝに揃つて、一同照文・ゝ大を助けつつ程近い六

なんそう

道山能敎院の廢寺に難を避けた。時に結城の使者小山朝重は、この場に急行して味方の非を謝り、ゝ大等に禮を盡して陳謝すると共に、德用以下の家臣を處罰して事落着したが、結城・里見兩家は、これを機として舊交を復し、ゝ大は照文・與四郎と共に、先君里見季基の遺骨を奉じて安房に歸つたので、義成は領内白濱に新に延命院を興し、盛大な追悼會を營み、ゝ大を院主にした。次いで穗北の豪族氷垣方に落着いてゐた八犬士は、大船を艤裝して稻村に迎へられ、改めて義實・義成兩公に謁して君臣の誼を結んだが、この時里見家では八犬士の本姓を金碗と定められ、その勅許を請はんがため、犬江親兵衛・蜑崎照文を正副使として京に上された。兩人は途中三河國苛子崎の湊に於て、海賊ゝ純友森勘太・海龍王修羅五郎一味のために危難に遭遇したが、同行の姥雪與四郎の水練と國主畠尾伊近の軍兵とに救はれて、恙なく京に到り、執權細川政元を經て將軍足利義尙に申請し、八月二十五日八犬士に金碗宿禰の姓を賜ふ宣旨を受けた。然るに細川政元は親兵衛の勇を惜しむの餘り、照文のみ御敎書を授けて還らしめ、親兵衛と與四郎を永く館に留めたので、親兵衛等はどうかして脫れ還らうと圖り、政元のために惡臣を懲らして屢々功を樹て、遂に名畫金岡の無瞳の虎が畫師巽風の點睛を得て洛中を脅かすを射留めた功によつて歸參を許され、無事に東下の途に就いた。一方、安房に於ては里見家の武威旺んとなるに及んで、義實は義成に說いて他國の確執に備へ、七犬士に命じて水陸兩戰の調練を怠らなかつた。玆に扇谷定正は豫て犬士を恨むの念強く、加ふるに河鯉孝嗣を奪ひ去られた事を知つてからは、愈々里見の勢を憎んでこれを攻めようと志し、先づ大石憲重を說客として諸侯に圖つた處、山内・千葉・長尾、甲斐の武田、相模の三浦等何れも定正に贊成して、その翌年十一月下旬より十二月初旬にかけ、これ等諸氏の軍勢は續々定正の居城五十子に集まり、軍議を凝らして、十二月三日聯合軍は國府臺を根據とし、安房洲崎より武藏石濱に亙る水陸二十里の戰陣を布き、陸は山内顯定・滸我成氏を將とし、水上は定正自ら總帥となつて、長驅里見の境域に迫つた。時に里見方では、御曹司義通陸上の主將となり、犬塚信乃・犬飼現八・犬川莊介・犬田小文吾・犬江親兵衛を防禦使とし、水上は義成自ら出陣して犬坂毛野を軍師とし、犬山道節・犬村大角を防禦使としてこれを迎へ擊ち、攻防よく努めて水陸に奮戰し、五十子・石濱・忍岡・大塚の四城を陷れて十二將を擒とし、遂に山内・扇谷の兩管領以下を奔らしめ、一部を武藏に駐めて全軍安房に凱旋し、翌文明十六年二月、水陸の大施餓鬼を行つて戰禍を蒙つた窮民を撫恤した。この戰の前、義成はまた蜑崎照文・大樟法六郎を使として上京せしめ、禁裏・柳營に貢物を獻じさせたので、兩度の獻上を嘉せられた朝廷並に將軍家では、義成父子の官位を陞す宣旨を賜ふと共に、策命使を照文等と共に東下させられたが、恰も里見が諸侯との合戰に大勝を博した折であつたので、策命使は直ちに和睦の調停に立ち、和議こゝに成つて、里見家では四城と十二將を諸侯に返還し、六月一日里見及び兩管領以下の諸侯、相模の洋上に集ひ、策命使秋篠廣當・熊谷直親立會ひの下に盛大な和睦の式を擧げ、誓紙を取交して事落着した。次いで策命使歸京のため洲崎を出立せんとするに當つて、八犬士・ゝ大・照文は相具して同行し、禁裏・柳營に御禮の上洛を果して、七月二十日無事安房に歸着した。かくて八犬士は功を賞せられて、各々一城の主として祿一萬貫を賜り、家老上席に列せられ、更に義成の八人の姫を室として賜ふことになり、各々赤縄を引いて天縁を定めたが、中にも信乃は濱路姫と、大角は雛衣の名に似たひな衣姫と不思議に配せられた。翌年二月八犬士は愈々華燭の典を擧げ、また政木大全は別に一城を賜つて家老次席となり、里見家の縁者眞利谷家の女を配せられた。ゝ大は先の上洛に禁裏より禪師の法號を受け、伏姫神の勅額を賜つて來たが、この年勅額を奉じて盛んな祭典を行ひ、法燈を弟子念戌に讓つて後富山に退隱し、伏姫の石窟に籠つて遂に寂し、八犬士はその後各々兒孫を儲けて富貴顯榮の日を送つてゐたが、老年となるに及んで半知を返上し、相携へて富山に入り仙術を得た。後、子の八犬士は富山に登つて父に會ひ、その誡めを聞いて共に致仕して他鄕に遊び、里見義堯の世となつて召還されたが、老年の故を以てこれを辭し、その子の八犬士が義堯・義弘の二君に仕へて、高名を阪東に謳はれたといふ。

【構想】馬琴は讀本を作るに當つて、敵討・巷談・傳說・史傳を材としたが、何れも彼の理想としたところの武士道の精神、儒敎の思想を、因果應報の觀念に統制して、具體的に表現した。常に勸善懲惡を標榜しつつ、又娛樂本位の態度をもとつた。その娛樂本位の態度は、固い敎訓に讀者を親しませるための方便に出でたものでもあらうが、寧ろ彼の小說の目的觀から來たものでもある。後期の史傳に取材したものに於ては、筋・結構の上に完成を示してゐる。即ち前期の敵討・巷談・傳說に取材したものは、この史傳物のために修練の段階に在つたものとも見られるのである。實に敵討物・巷談物・傳說物の要素が悉く攝取されて大きく構成されたものが史傳物である。それには「椿說弓張月」「朝夷巡島記」「近世說美少年錄」「開卷驚奇俠客傳」(各別項)及びこの「里見八犬傳」等を數へるが、就中「八犬傳」は最大長篇で、馬琴の力量と手腕とを集めたものである。馬琴が「八犬傳」に期したものは「水滸傳」に比すべき規模の雄大と、武士道の理想としての諸德の形象化、儒佛思想から得た彼の觀念の現示であつた。「水滸傳」の百八の豪傑に擬した八犬士は、伏姫・八房の因緣から生れたもので、それ〲犬の文字を冠した姓を有し、身に八房の黑斑の擬似である牡丹の黑痣があり、伏姫の珠數の四散した仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌八行の中の一字が彫られた不思議な靈玉を持つてゐる。これ等八犬士の列傳を敍して、その所持する靈玉に現れてゐる文字の犬江親兵衛には仁、犬川莊介には義、犬村大角には禮、犬坂毛野には智、犬山道節には忠、犬飼現八には信、犬塚信乃には孝、犬田小文吾には悌の八德を配置して、これを具體的に描出しようとしたものであるが、何れも類型の武士道的人物で、豪勇無双の道德的權化に外ならない。その生立ち境遇に、武士道の精神を高調し、儒敎の思想を誇張して善を表現し、その反對の精神・思想を表象した姦雄・奸臣・惡漢・毒婦等に對立させ、因果應報の觀念によつて善が惡を懲らすといふ勸善懲惡の意を寓するのである。道節は君父の仇扇谷定正を狙ひ、君に槍をつけた越杉駄一郎、父の仇

應円三寶平を討ち、毛野は奸臣馬加大記、籠山逸東太を討つて父の仇を報い、親兵衞は里見家に仇をする鳥越蟇田素藤、妖尼妙椿を討つといふやうな事件が重疊し起伏して行く。その事件を飽くまで複雜にし奇想妙案を凝らしては、犬角の父赤岩一角を噛み殺して化けたる山猫、妙椿實は八房を育てた狸等の不可思議な說話を點綴する。もと八犬士が善果を齎すべき約束を以て出生するといふ段取は、奇想妙案のそも〳〵の緒で、その活躍によつて波瀾を構成し、或は山猫の贋一角が雛衣の胎兒を奪はうとして、雛衣の自ら伏した刃のもとに迸り出た玉の靈力に斃れるとか、親兵衞が靈玉を以て、なほも玉梓の怨念の結ばれた狸の化けた妙椿を退治るとか、また下總に在つた幼い親兵衞が、惡漢蛇九郎に殺されようとして安房の富山に神隱になつたり、道節等を匿まひ、追手に圍まれて最期を遂げたと見えた姥雪與四郎・曳手・單節が、上州から富山に救はれてゐたりするやうに、靈玉の奇特や伏姫神靈の加護で統制してゐる。それ等は因果應報の觀念に由るものであるが、この因果の脈絡は實に全篇に横たはつてゐるところの根柢で、八犬士が互に相助け、相結ばれて行くのは、里見家の勃興を物語る、かの伏姫の實した善果であつた。表面八犬士の傳記を敍してゐるけれども、さうして結ばれて行くところ、上を流れてゐるものは道節を中心に犬士が交錯する豐島練馬の復讐を展開し、底を流れてゐるものは、里見家の勃興を胚胎するところの構想である。そこには傳奇作家の馬琴――敵討物・巷談物・傳說物の馬琴がゐる。また黃表紙や合卷や洒落本や院本を作つた馬琴がゐる。又考證評論家の馬琴がゐる。凡そあらゆる種類と傾向の馬琴がゐる。彼が『我を知る者はそれ唯八犬傳か』と言つたのが肯かれるであらう。なほ櫟亭琴魚が本作の批評に馬琴が答述した「犬夷評判記」には、この構想等に就いて彼自ら語つてゐる。

八犬仙山中遊戯圖（第九輯）

【史的地位】八文字屋物が解體して、世に現れた「英草紙」「雨月物語」「本朝水滸傳」（各別項）などを先蹤とする讀本は、それ等上方に於ける初期の讀本の多く飜譯し飜案した支那小說の要素を繼承してゐるのであるが、なほ八文字屋ものの浮世草子が多く取つた淨瑠璃・歌舞伎の要素をも混在させて、文學的要素の上から浮世草子の系統を追ふものである。併し初期讀本は後の讀本の道念と結構とに方便的なものとなつて、本質的に浮世草子を中斷する介在であつた。浮世草子が世相を寫し義理と人情を扱ふに對して、これは敎訓を標榜して稀有なる事件を構成した。その眼目は世相・人生の描寫ではなくて、筋・結構にある。その結構・脚色に、支那小說や淨瑠璃・歌舞伎の要素が大きな役割を持つてゐる。馬琴もやはり「水滸傳」に據つた「高尾船字文」（別項）に、またその巷談物に、淨瑠璃・歌舞伎の要素を多く取入れてゐるが、そしてなほ「八犬傳」に於ても、濱路の悲戀、芳流閣上の格闘、行德の悲劇、荒芽山の奇遇等の場面のやうに、淨瑠璃・歌舞伎の世界を見るやうな傾向はあるが、漸次支那小說の一方に偏して來た。それは衒學癖があつた爲めばかりではなく、彼自身の思想精神を表現し、その雄大な結構を構成するに特に「水滸傳」を最もよい模範とした爲めでもある。彼は「本朝水滸傳」を江戸讀本の祖とし、批評を書いて蛇足をなつかしんでゐる。既に「新編水滸畫傳」（別項）の譯述の筆を執り、また合卷に「傾城水滸傳」（別項）を作り、そして遂に「八犬傳」の大作を成した。その文學的價値をかの「椿說弓張月」（別項）に讓るとしても、彼の全精力を打込んだ代表作であり、世界的長篇として我が通俗文學の最高標準を示すところ、國文學史上比類なきものと言はなければならない。【批評】「八犬傳」の文章は、七五の韻律を主として綴り、豐富な修辭的の言葉と文字を使用し、最も絢爛の美に富む。その描かれた舞臺は、房總・武州を中心とし、兩毛・甲斐・越後・京都に展がつてゐるが、必ずしも忠實に地理に即して書かれたものでなく、自然描寫も觀念的である。また事件人物の敍述描寫は、說明であつて表現ではないといふやうに感じられる。なほ人物の性格描寫も殆ど類型に止まつてゐる。八犬士の中では信乃の生立ちの邊りが最も描寫的でよく、道節が最も面白く描かれてゐる。それから船蟲の飽くなき惡玉振りは、やゝ盡してゐる觀がある。筋の面白さ、構造の面白さを期した爲めに、餘りに奇抜な筋に陷つたものが多い。けれども最初「全本となさんこと兩三年の程になん」と豫告したものが、出づるに隨つて構想し、實に二十八年間も書きつゞけた小說として、實によく整つたものである。凡そ當時代の通俗小說の諸要素を具備し盡し、大きな舞臺に多くの人物を驅使し、數十年に亙る複雜な事件を構成して、よく物語の展開に齟齬を來さしめず、同様の事件を繰り返さぬやう、周到な注意を以て全篇を一貫した構想にまとめ上げた點は、彼の製作力の偉大に因るものでなければならない。かの「水滸傳」の著しく現實離れのした構想の雄には及ばないとしても、これはまた理想を掲げて現實に近づかうとした點で、「水滸傳」とは自ら別の世界を成してゐると言へる。【影響】第一輯以來好評を博したので、夙くから當時の文藝に影響してゐる。「合卷八犬傳犬の草紙」（一名、雲齋芳流犬の草紙、笠亭仙果・二世種彦等作）、「假名讀八犬傳」（二世

爲永春水作、鵞亭琴靈・假名垣魯文等連作）、「遺局八犬傳後日譚」（二世爲永春水作）、淨瑠璃「（里見八犬士）八犬義士譽勇猛」（八犬士傳）、常磐津「梅魁若八總」等や、その他、錦繪・俳句などにも廣く行はれた。

【參考】近世物之本江戸作者部類 曲亭馬琴（國書刊行會）○犬夷評判記 櫟亭琴魚撰・曲亭馬琴答述（國書刊行會・德川文藝類聚）○燕史外題鑑 爲永春水○南總里見八犬傳批評 依田學海（國文庫第六編）○八犬傳評解大合集 蘆風等（早稻田文學・演劇・馬琴日記抄）○八犬傳物語・八犬傳年表・八犬傳人物一覽・八犬傳談餘 內田魯庵（名著全集）○馬琴研究 藤村作（日本文學講座）○里見八犬傳著者野堅（昭和七ノ六）○南總八犬傳 和田萬吉（岩波講座「日本文學」）○支那文學の馬琴の作品に及せる影響 麻生磯次（日本文化叢考）○馬琴の讀本と東支叡（日本文學講話）○馬琴の讀本と太平記 後藤丹治（月刊日本文學二ノ一）○文渓堂と八犬傳 四花山人（高間三・四）○八犬傳の版元について 伊藤專三（新小說一三ノ三）○八犬傳を讀む 鶴田得鈿（大帝國一ノ四）○法華の功德（八犬傳より）佛敎社同人（國文中の佛敎文學談義）（笹野）

南窻筆記（なんさうひつき）　隨筆　五卷【著者】加藤美樹【諸本】百家隨筆第二所收。【解說】主として考古學的の考說を集め、殊に武家故實及び民間習俗に關する記事が多い。卷一に本朝古史の事以下十八則、卷二に安樂寺飛梅の事以下二十則、卷三に熊野烏の事以下二十四則、卷四にちがひ棚の事以下四十則、卷五に朱印の事以下十九則を收めてゐる。往々僻說も交つてゐるが、大體に於て參考の價値はある。（和田）

南陀伽紫蘭（なんだかしらん）　浮世繪師・洒落本作者・黃表紙作者【姓名】窪田易兵衞。また安兵衞【別號】春滿・俊滿・尙左堂俊滿・黃山堂・一筋千杖・鶯辛坊【生歿】寶曆七年に生れ、文政三年（二四八〇）九月二十日歿す。享年六十四【法名】喜譽尙左俊滿居士【墓所】淺草黑船町正覺寺【閱歷】幼少の時父を失ひ、伯父某に養はれた。本所・神田宮澤町・小傳馬町三丁目と轉住した。畫を楫取魚彥に學び、春滿と號したが、勝川春章の門人と紛れるのを厭ひ、俊滿と改めたのだと云ふ。後、北尾重政に學んだ。卽ち政演（山東京傳）とは相弟子であつた。特に左手が利き日常の用は左手でなしたので、尙左堂と云つた。狂歌は頭光（つぶりのひかる）（別項）の門人で、一筋千杖はその狂號、鶯辛坊は川柳の號である。その詠「夜の梅見て戻りしと女房にいひ譯くらき袖のうつり香」は、人に知られてゐる。畫の外、蒔繪の沈金彫に長じ、世に行はれた。文才あり多くの作品がある。その處女作は黃表紙「通鳧寢子の美女」（安永八年）、洒落本「玉菊燈籠辨」（安永九年）（別項）で、彼の二十三四歲の時である。また政演とは親交があり、互にその作品の挿繪を畫き合つてゐる。

狂歌六家仙圖（俊滿筆）

彼には黃表紙の方が比較的多いが、それも多作ではない。江戸つ子らしい凝つたものである。特に「吉原啌之峰有多」（安永九年）は政演畫で、吉原年中行事を知るによい書である。【著作】〔洒落本〕玉菊燈籠辨○神通汚（天明元年）〔黃表紙〕通鳧寢子の美女○浮世の四時（天明四年）（各別項）。○穿當本調子（安永九年）○鸚宮卷（同年）○遊客古事附太平記（天明元年）○出世吉原（同年）○通人穿物語（天明二年）○芳野の由來（同年）○五郎兵衞商賣（同年）○佐名草伊達下谷（天明三年）等。〔狂歌集〕狂歌角合一冊（寬政四年）○狂歌左綱繪三冊（享和二年）○狂歌左綱繪二冊（前者とは別本、文化年間）。（山崎）

南蠻鐵後藤目貫（なんばんてつごとうのめぬき）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】並木宗輔【名稱】本作の二段目、主人公後藤又治が浪人して目貫師となつたことに取る。後藤が南蠻鐵の如き男で、目貫のやうに城の固めとなつたとの意をも通はす。【興行】享保二十年二月七日初日、豐竹座。但し五日間で禁止された。【諸本】版行百二十三丁。寫本としてのみ傳へられてゐる。【題材】材を大阪落城の事と後藤又兵衞の逸話に取り、時代を南北朝に移した。先行曲として紀海音作の「義經新高館」がある。【梗概】〔初段〕（評定）鎌倉の將軍足利尊氏の膝下では、都の守護の任にある新田義興の放埒及び謀叛の風聞に就いて評議。時に鶴ケ岡の神職が義興の奉納した鏡を持參した。見ると鏡の裏には、天下一の文字が記されてある。正しく謀叛と云ふ事に決つた折柄、義興の老臣片岡一桐が佐藤局・正貞尼と共に、謀叛の風聞を申開くべく下向する。さすがの一桐も天下一の文字には辯解に窮した。已むなく一桐は、佐藤局・正貞尼の反對を押して義興公の愛妾染殿を人質として下す事を承引する。かくて結城譽田稻葉之助は、直ちに染殿を受取りに上洛する。〔檄狩〕義興は愛妾染殿を相手に花見の酒に醉うてゐる所へ、佐藤局・正貞尼は一足先に歸洛して、一桐が染殿君を人質として下す事を承引したと申上げる。義興の怒りは勿論である。侫人神田主膳兄弟は、これ幸ひと一桐を內通者だと讒言する。遙々歸國した一桐は神田兄弟の討手に取卷かれる。一徹な君の心を知る一桐は、歸策を若き忠臣結城鳴戸之助に授けて自害して果てる。染殿を受取りに來た稻葉之助も、一桐の誠忠に感じて、一桐の首を染殿に代へて乘物に入れ、一時を繕つて歸る。〔二段〕（大津追分街道）近江の國栗本郡に大酒家の故に五斗兵衞と呼ばれる目貫師がゐた。今日も街道に醉ひ臥してゐると、鎌倉へ下向する譽田稻葉之助が通りかゝる。五斗兵衞は鎌倉武士に恩はないと動かない。稻葉之助がこの乘物は染殿君だと云へば、早くもその死首なる事を見破つてしまふ。稻葉之助も、これこそ名高い軍師後藤文治と察したが、後藤は五斗兵衞と名乘らずに去る。時に父を尋ねて五斗兵衞の子大三郎が來たので、稻葉之助は大三郎を無理無體に引連れて行く。〔五斗兵衞宅〕五斗兵衞實は後藤文治の家では、大三郎が見えないので大騷ぎ

である。殊に妻の闘女はなさぬ仲なので心を痛めてゐる。この日深編笠姿で都方の將船田左衞門利村が尋ねて來て、味方に加はらん事を懇望する。そこへ大三郎は供廻り美々しく立派な侍になり、今日は父を十萬石の大名に抱へるべく、尊氏の使者として入つて來る。併し文治は旣に都方に味方して了つたので、已むなく、承引を装つて子を返した。〔三段〕(義興館)義興は、晝夜を分たず踊り狂つてゐる。結城鳴戸之助は溢る〻赤誠から、亂舞の中に割つて入つて諫言するが、船田左衞門が出てその逸る心を諭す。折柄後藤文治が殿に御目見えのため登城する。侫人神田兄弟は何とかして御前をしくじらせんと、巧みに好きな酒を勸める。後藤は終に醉つて正體なく奴共に叩き出される。(船田館)歸つて來た文治のへべれけな様子に、こ〻に引取られてゐる闘女も娘傳女も、共に愛想をつかして無緣を迫る。折柄莫然たる鐵砲の音が響く。左衞門が文治を試みたのである。と、今迄正體なかつた文治は俄に飛び起きて、その空砲である事を見破り、なほ砲の五番に依つて敵が中途まで攻め寄せた事を敎へる。左衞門は大に感歎し、早速一方の大將として出陣を乞ふ。闘女はこの有様に詫びを入れるが、却つてさんざんに恥しめられ、已むなく娘を連れて立ち退かうとするが、傳女は突然懐劔を抜いて咽に突き立てた。娘の心に恥ぢて闘女も後を追はうとするが、左衞門は鎌倉方に奪はれた大三郎を取返してこそ貞女であると諭す。かくて闘女は稚ケ島を抱いて鎌倉を指して行く。〔四段〕(道行富士見笠)闘女は遙々と東海道を下つて行く。(小松坂)大三郎が旣に討たれたと聞かされた闘女は、尊氏を我が子の敵と一途に思ひ詰め、松陰からその乘物へ發砲した。併しそれは身代りの譽田稻葉之助で、闘女はその場に捕へられる。(譽田館)その後、闘女は夜に日に稻葉之助の詰問に苦しめられてゐる。かくとも知らず大三郎は、この家の婿に望まれて來る。早速手柄に闘女の折檻を言ひ渡されるが、事の現はれんことを恐れて大三郎も涙を呑んで母を打つ。併し稻葉之助は早くも始終を察し、衣類に事寄せて母を與へる。〔五段〕(義興城中)城中では笛や太鼓で打囃してゐる所へ、船田・後藤・結城の三勇將が驅せ來つて、愈々悲運にある事を傳へる。義興公も今更に放埒を悔い、三人に最後の盃を賜ふ。かくて今生の思出に染殿の舞が始まる。舞の内に染殿は、自分の親ながら内通の侫人神田主膳を殺す。時に大三郎が神田兄弟の首を出せば和睦するとの尊氏の書翰を持參する。かくて東西は目出度く干戈を收める事となつた。

【解説】大阪落城のことを脚色したものは、旣に海音に二三見られるが、形式・内容共に本曲に於て完成したと云つてよい。これは一つには宗輔の時代が丁度時代物の形式の完成期であつた故でもあるが、更に内容に至つては彼の周到な筆致の功を擧げねばならない。主として宗輔一人の手に成つたが故に、合作の弊もなく、よく整つた力作と云ふ事が出來る。併し餘りに史實に近かつたので、直ちに上演を禁ぜられたのは不幸であつた。主な人物を史實に比較して見ると、足利尊氏は德川家康、新田義興は豐臣秀頼、片岡一桐は片桐且元、後藤文治は後藤基次、船田左衞門は眞田幸村、結城鳴戸之助は木村長門守、染殿は淀君、但し染殿は義興の母ではなく、愛妾とされてゐる。更に國家安康の鐘の文字を作り變へた天下一の鏡の文字の事、淀君人質の事、家康狙擊の事、又後藤基次が近江にあつて、赤貧を顧みず大酒をあふつてゐた事、家康が播磨一國を以て基次を招いた事等々の事實を巧みに脚色した。なほ徒らな片言の中にも幾多傳說的題材を取入れてゐる事は注意すべきである。本曲の山は三段目切「船田館の場」で、左衞門が空砲を放つて後藤を試みると云ふ思付き、また醉うても本心を失はない勇士の明智、闘女の女らしい淺はかさ、それに傳女の可憐な死、打つて變つた後藤の雄々しさなどが興を惹いた。【影響】延享元年三月、江戸肥前座に於て興行された「義經新含狀」は本曲の改作であるが、世界を「義經記」に取り、多少筆を加へて、全く異つた場面も二三ある。「泉三郎伊達目貫」は寶曆七年七月、同じく江戸肥前座の上演で、これは全く「新含狀」の外題を變へたものである。又「後藤伊達目貫」(興行年月未詳)も「新含狀」と全く同文である。再び上方へ歸つて上演されたのが、寶曆四年七月二十九日初日、豐竹座の「義經腰越狀」である。これは「後藤目貫」と「新含狀」との兩影響に成るもので、今なほ上演を見る三段目切「和泉三郎館の場」は、全く「後藤目貫」の「船田館の場」と同一である。又同じく大阪落城の事を脚色した諸作、「近江源氏先陣館」「鎌倉三代記」「日本賢女鑑」等に影響するところが多い。

【附記】昭和四年版帝國文庫第十篇「紀海音並木宗輔淨瑠璃集」所載の「南蠻鐵後藤目貫」は「義經新含狀」を誤り載せたものらしい。

【參考】邦樂年表(義太夫節之部)○德川文藝類聚第八解說　(鶴見)

南蠻文學 なんばんぶんがく　「切支丹文學」を見よ。

南屏燕語 なんぺいえんご　隨筆　三卷　【著者】釋南山【刊行】天保二年【解説】禪家の佛教的隨筆で、上卷に來意・用心・日課・閱經・懺悔・備忘・賑相の諸目を擧げ、中卷に詩偈・文章の二項を論じ、下卷には專ら隨筆の「象浴篇」を抄し、往々自家の案を加へ、諸書を參考して禪門所用の稱謂・名目・法器等を知るに便してゐる。文政九年の著者の自序があり、天保二年臘月の刊記がある。

【著者小傳】釋南山は禪僧。名は紹岷、字は古巢、一號山庵、俗姓は笹野氏、相模國高座郡大澤村の人である。弱歲佛門に入り、江戸品川東禪寺に在つて内外の學に精勵し、後、仙臺瑞鳳寺住職となり、中頃京都妙心寺に陞り、晩年瑞鳳寺に復歸し、天保十年十一月八日寂、世壽八十七。儒學を究め、詩文書畫を能くし、當時の名流に敬愛された。著述に「叢林貫華集」「法苑詩規」「南山外集」等がある。(和田)

南方語族 なんぽうごぞく　「マレー・ポリネシヤ語族」を見よ。

南北新話 なんぼくしんわ　俳論　二冊　【著者】建部涼岱(綾足)【名義】或は北し或は南して受けた敎の謂である。【刊行】寬延元年【由來】本書はもと法橋百川に上木を勸められたことがあつた。その後著者が江戸淺草に吸露菴を結んだ頃、愈々梓行することになり、李鵲に校書を囑し、延享四年七月の百川の序と翌五年六月(七月十八日寬延と改元)の麥湖樓主人の跋を附して剞劂に附したのである。【諸本】俳諧論集(俳諧文庫)・中興俳話文集(俳書大系)所收。【解説】本文は著者が北陸金澤にあつて、乙由門の希因に就いて發句を修め、南海伊勢に走つて同門梅路に附句を學んだ當時の日記で、麥林舍乙由及び希因・梅路の俳論俳話を主とし、これに著者の意見を附したものである。全篇五十項目、發句の變化、麥林の說、希因が辨、句法の論、みづから句を定る法等より、麥林夜芝居の附句并梅路が夜話に至るまで、その記すところは句作の實際に關するものが多く、俳諧の根本に觸れた問題は甚だ少い。併し本書に取扱はれた俳論俳話は、ともかく麥林舍下の所謂伊勢派俳諧の性質を覗ふに好適のものの一つである。(各務)

南畝莠言 なんぽしゅうげん　隨筆　二卷　【著者】大田覃【刊行】文化十四年【諸本】新百家說林三・日本隨筆大觀所收。【解説】著者が讀書の際抄錄し置ける事どもに私案を加へた如きもので、その渉獵の博いところから百般の世事・人事に亙つてゐる。或は風俗・世態に係る事、或は器財・調度に係る事、詩歌・文墨に係る事、文字・語諺に係る事、古名人の逸話、古典籍の論、その殆ど際限がない。上卷に二十六夜の三律の光から足利學校易の事に至る九十三條、下卷に升平・昇平の文字から乾隆の初鑄鑄出し事に至る三十條を收め、門人文寶堂筆の古圖稿抄數葉を挿む。文化十四年の自序と文寶亭の跋がある。卷尾に後篇二冊近刻の豫告が出てゐるが、實行を見ずに止んだ。本編二冊はもと稿本數卷の中から、文寶亭が書肆榮星閣(角丸屋甚助)と共に、隨抄隨刪したものの由が序文中に見えてゐる所から察すると、原稿は多分に出來てゐたらしい。南畝の隨筆の澤山ある中で、讀書子の參考となるものの隨一であらう。(和田)

南浦文集 なんぽぶんしゅう　文集　三卷　【著者】文之玄昌【名稱】南浦は、その雅號。【刊行】寬永二年八月、京都四條寺町【解説】釋僧文之玄昌の漢文を收錄したもので、卷上に三十八篇、卷中に四十四篇、卷下に二十六篇を收錄。著者は、晩年薩摩の島津家久・同義弘に禮遇され、同國正興寺・安國寺等に住したので、家久・義弘が明・琉球・呂宋・安南等に贈る書を代作したるもの多く、慶長・元和の交の薩摩藩の史料に關するものがあり、且つ夙に儒學にも兼ね通じてゐたので、儒學の史料に關するものもあり、全卷に亙つて有用の文字に富んでゐる。(鷲尾)

南溟 なんめい　儒醫【姓名】龜井魯。字は道載。主水と稱す。【號】後、南冥と記した。【生歿】筑前の姪ノ濱に生れ、文化十一年(二四七四)歿す。享年七十二。【墓所】福岡市地行淨滿寺【閱歷】十四歲の時、肥前の僧大潮に就いて詩文を學び、後、京阪に出でて醫術を研き、永富獨嘯庵に從つて學ぶ。又長州に往き、山縣周南に就いて徂徠の說を受けた。業成るに及び、藩侯擢んでて儒員となし、甘棠館を設け、道載をして敎授たらしめた。道載は徂徠の學を唱へ、子弟を啓發する所多かつた。昭陽はその長子、小琴はその孫である。明治四十四年十一月十五日、從四位を贈られた。【人物】性、豪放不羈、禮儀を修めず。これを以て人の怨を買ひ、その職を免ぜられ、遂に怏々として樂しまなかつた。その作る所の詩は皆悲憤慷慨の意を寓してゐる。【著作】毛詩考○南溟問答○辨惑論○論語語由○左傳講義○肥後物語○半夜物語○南居小草○南溟詩文集(六十二卷)等。(佐久)

南遊集 なんゆうしゅう　詩集　一卷　【著者】惟肖得巖【解説】惟肖得巖は至德の末、明に歷遊し、後、東歸して土佐の吸江菴に留まる。應永十七年相國寺に住し、後、周防の瑞雲寺、阿波の寶冠寺に歷住し、應永二十四年天龍寺に遷り住した。この集は、東歸以後二十餘年間の作にかゝる。七言絕句二百五十四首、五言八句六十四首、五言絕句六首、四言四句二首、七言八句九十三首を收む。土佐の吸江庵で京都の諸友と往來したが、この間の贈答の作が殊に多い。絕海中津の衣鉢を受けて推敲に努めたもの、絕海の謫居したる攝津錢原の鈴羊谷を訪うた詩に、「獨尋舊事向松間、二十餘年一夢還、流水浮雲人寂寞、落花啼鳥淚潺湲、神仙髣髴應猶閉、俗子春遊境自閑、不識此身拘底事、滿頭白髮復辭山」と、その風調の一斑を知るべきである。(鷲尾)

南遊東歸集 なんゆうとうきしゅう　詩文集　二卷一冊　【著者】別源圓旨【刊行】寬文四年、京都三條麥屋町鈇屋林傳左衞門開板行。【解説】外題は「南遊東歸集」とあり、內題は「南遊集」「東歸集」の二部に分れてゐる。「南遊集」は、元に歷遊中の詩、各體百餘首及び結夏秉拂等二篇を收む。首に元の僧雲外の別源天童十詠の跋文を揭ぐ。別源の雲外天童十境詩の和韻、萬松關等の十首は、この集に收めらる。雲外その跋文を作り、後にこの集の首に揭げられたものである。「東歸集」は、日本に歸つた後の詩二百餘首及び小佛事秉拂等數篇を收む。首に竺仙梵僊・寰石知芝及び雲外の序、後に東明慧日の跋あり。竺仙梵僊の序の末に、「曆應庚辰結制後三日、書于淨智東堂、四明梵僊拜手」とあり。東明慧日の跋の末に、「曆應庚辰夏首、命再書、適病目不能工、五住建長叟東明」とあり。別源圓旨(別源)が元に渡つたのは元應二年二十七歲の時で、滯留十一年に及んだ。「南遊集」は、この年間の作にかゝる。その東歸したのは、元德二年三十七歲の時で、建武・曆應の頃、鎌倉の圓覺寺・建長寺の禪林に在り、相模の栗船里に寓居した時の詩がある。「東歸集」は、この年間の作にかゝるもので、即ち竺仙梵僊・東明慧日の序の末に、曆應庚辰(三年)とある。この後、康永の初め、鄉里越前に歸つて朝倉氏の歸依を受け、弘祥寺の開山第一世となり、文和三年京都に上り、眞如寺・建仁寺に歷住し、貞治三年十月十日、建仁寺洞春菴に壽七十一を以て寂したのである。康永以後二十餘年の間に詩文の作られたものがあつたであらう。しかし今は知るよしがない。要するに「東歸集」は、東歸以後十餘年間の詩文である。(鷲尾)

南嶺 なんれい　國學者・浮世草子作者【姓】多田氏。時に桂氏を稱した。【名】義俊・義寬・秀樹・滿泰・武起と云つた。【字】政仲・公美・子謙【通稱】造酒。後に將監・兵部・左衞門【別號】秋齋・春塢。また俳號は男鈴。【生歿】元祿十一年生れ、寬延三年(二四一〇)九月十二日歿す。享年五十三【墓所】京都東山本妙寺【閱歷】攝津の人、京都に出でて參議右衞門督學廣・中山大納言等に從つて有職故實を學び、大阪長堀に私塾を開いた。又甲州流の兵學を究め、後、壺井義知(鶴翁)に就いて古典學を修む。また半時庵淡々に師事して俳諧を善くした。かつて「舊事紀僞撰考」に於て「舊事紀」の僞撰なることを論證し、師壺井義知が著作に「舊事紀」を典據とせることを難じ、その說を撤回せんことを勸めた。壺井はその說を究むることをせず、濫りに師說を批する無禮を怒つて破門したといふ。初め東武に遊び、また尾州に居り、後、京都に歸つた。八文字屋自笑の囑に依つて浮世草子及び役者評判記の筆を執つたといはれる。

【著作】南嶺は國學・有職故實の研究を本領と

せるため、その方面の著述が甚だ多い。彼自身が執筆せるものと、彼の講義口授を門人が筆記して出版せるものとある。その主なるものを擧げる。〔國語學〕伊呂波聲母傳一冊（初めに假名の作者の事を記し、次にいろは四十七字の一字々々に就いて音義を記してゐる。義俊の國語に關する書は殆ど本書と同類の音義のもので、學術的價値に乏しい）〇以呂波聞義抄三卷一冊（「伊呂波聲母傳」と同類で、やゝ詳しくいろはの音義を說いたもの）〇伊呂波傳受一冊（「伊呂波聲母傳」と同類で、それより簡單なものである）〇日本聲母傳一冊（前記の書と同類のもので、初めに日本語と外國語の區別、聲韻の事、聲音の事等十ケ條の口傳を記す）〇母字音配傳一冊（前記の書と同類で、無相文雄から傳へられたと記してゐるが直に信じ難い）〇本語口傳一冊（「伊呂波聲母傳」と同類。外に「本語抄」と題する書が二卷あるやうであるが同類であらう）〇和訓八例一冊（國語の語源を論じたものであるが、國語中の漢語・梵語・蠻語（西洋語）系統の語についてその區別を記してゐる）。〔有職故實・國史〕故實纂要（別名「故實千箇條」）四卷（神代の事及び服飾・器物等の故實を記したもの）〇職原鈔辨講二十卷（寛延元年から同三年三月まで續いた講義を門人が筆記したもので、初めに「職原鈔」の諸本及び註釋書に就いて述べ、次にその全文を講義したもので、書中屢々その師並河誠所の說を破つてゐる）〇三十箇條故實辨一冊〇故事紀傳撰考一冊（享保十六年成る。十ケ條の故事を擧げて依實たる事を論斷す）〇日本紀神代卷口義十卷（吉田神代卷の講義）〇武門故實百箇條三冊（嘉永元年刊）〇務祭記一冊〇神代釋三卷（延享五年成る）〇神代卷闢要抄七卷〇神代卷秘要抄十二卷〇日本書紀疏聞私考二卷〇日本書紀義解三十卷〇古事記本義〇古語拾遺本義〇中臣祓本義〇創祓辨一卷。〔隨筆・雜〕南嶺子四卷〇南嶺遺稿四卷〇秋齋閑語四卷〇秋齋隨筆〇秋齋著筆（各別項）〇遊和草二卷（隨筆）〇寐覺草紙三卷（自序寛保三年。日本隨筆大成第二期卷七所收。隨筆集）〇神明憑談二卷（享保十九年）〇神實辨一冊（寫）〇神拜恐惶抄一冊〇凡右雜記〇凡右雜記續篇〇宮川日記〇牛官談〇獸肉論〇春夢隨筆〇多田滿仲五代卷十卷〇鈴本顯露草〇桂花抄等。

また彼が筆のすさびとして八文字屋本の代作をしたことは、從來謂はれて來たことであるが、それは確乎たる根據があるのではない。實曆二年板の「世間母親容氣」（別項）の序の署名に南圭梅嶺翁とあり、また末尾に秋齋桂先生著南嶺子といふ廣告あるのに依つて、これは南嶺の製作と謂はれる。併しながら實曆二年は南嶺の死後二年に當り、その間の年月の距りが不審である。かく見る時、これとても餘程明確でない。研究者は次の如きものを南嶺作とみてゐるが、自笑・其笑、又は其笑・瑞笑の連署であつて、南嶺の署名はない。「武遊双紋巴」（自笑・其笑、寛保二年）、「女非人綴錦」（自笑・其笑、寛保二年）、「鎌倉諸芸袖日記」（自笑・其笑、同三年）、「花楓剣本地」（其笑・瑞笑、寛延二年）、「道成寺岐柳」（其笑・瑞笑、寶曆元年）。これ等の作品は、「母親容氣」の外は、淨瑠璃・歌舞伎、又は古文學の飜案小說である。卽ち「武遊双紋巴」は「釜淵双紋巴」（別項）より、「女非人綴錦」は「敵討襤褸錦」（別項）より、「花楓剣本地」は「絵狩劔本地」（別項）より飜案せる事は確かであり、「道成寺岐柳」は「道成寺現在蛇鱗」（寛保二年豐竹座上場）あたりから暗示されたらしく思はれる。また「鎌倉諸芸袖日記」（別項）は、「鎌倉袖日記」（松本治太夫正本）その他「夜會記」の趣向に基くことは、すでに藤岡作太郎の謂ふところである（近代小說史）。故にこれ等の作品の趣向の形式は、自笑・其磧時代に創始されて新しいものではないが、その文章の點にやゝ特色が存する。この時代の他の作品に比して、これ等の作品の文章は、著しく尖銳の感じを有してゐる。觀察が鋭く文調が急湍度で、從つて警句と諧謔に滿ちてゐる。署名は同じく自笑・其笑、若しくは其笑・瑞笑でも、どうしても他の作品とは異なる作者の筆に成つたものであらねばならない。これが「母親容氣」の南圭梅嶺翁より推して南嶺の作であると考へられる理由である。（吉田・藤田）

南嶺遺稿（なんれいゐかう）　隨筆　四卷【著者】多田義俊【刊行】寶曆七年【諸本】日本隨筆大成卷十所收。【解說】卷一に尾州寓葉以下二十項、卷二に近世神寶傳以下三十八項、卷三に甲乾之字義以下二十七項、卷四に水干如木以下二十四項を收め、通篇百九項に上る。有職故實・和歌・字義・古書・服飾・飲食、その他百般についての感想及び見解を述べたところの純隨筆である。寶曆七年良芸之の序、同年門人細谷文卿の跋がある。又本書は細谷文卿の所校に成つたものである。（和田）

南嶺子（なんれいし）　隨筆　四卷【著者】多田義俊【刊行】寛延三年【諸本】日本隨筆大成卷九所收。【解說】著者一流の神道家的見地より儒佛二敎の弊、その外龐醫・巫覡・蠱惑等を說破し、又事始・字義・古書・有名人物の評論等に及び概ね詼諧に傾いてゐる。卷一は御船風波ノ論以下十一條、卷二は儒佛ノ徒神事ニ戻ル義以下二十四條、卷三は庸醫誤ル人義并六尺ノ字以下三十條、卷四は猿樂古今ノ異以下二十五條、通篇合計九十條を收めてゐる。卷首に引用書目九十七部を擧げてある。（和田）

に

二上り（にあがり）「三味線」「調子」を見よ。

二上新内（にあがりしんない）　歌謠【名義】二上りの調子で歌ふ新内節（別項）の意。略してただ二上りとも、新内ぶしとも。また新内投節・一口新内・よいわいな節とも云ふ。【解說】幕末の流行唄。とつちりとん節（別項）と同じく、深川の遊廓に起つた流行唄であらう。文化四年版の洒落本「船頭部屋」に、「男がよくて金持で」とあるのが、二上新内の「男がようて金持で、それで女子がほれるなら、中から下のきれぎれは、一生やもめで暮すであらうぞえ」の文句を取つたものであるなら、文化の初めには、既に行はれてゐたのである。文政になつて大に流行し、三都にまで及んだ。文政三年版の洒落本「婦身嘘」に、「二上りの騒唄」「どこの座敷も二上りで騒々しい」「二上り へ八ツ九ツや明七ツ、表のくゞり戸をとん〳〵と、桑名ぢや情ぢや紀香來、今宵逢はればこがれ死、へ切れてくれろと氣強くも、口には云へど目に涙、男はそれと承知のを、立す裾とらへて泣き出だし、わたしがこれ程思ふゆゑ、藝者のろけはやめさんせ」などと見えるのが、それである。文政六年には、名古屋でも大に流行した（小歌志彙集）。爾後、幕末に至るまで行はれて、瓦版本も種々刊行せられ、明治以後も酒間の座興を添へて今日に至つてゐる。【曲調】テンポの遲い淺艶な調子の歌で、新内の曲調と氣分とを、よく出してゐる。三味線は二上り。調形は、七五四句より成る。卽ち今樣形式で

ある。稀れに同一曲節を反復することによつて、七五六句より成る歌もある。また最後の句は、七と五との間に、囃子の詞を入れる。例へば「惡どめせずとそこ放せ、あすの月日がないやうに、とめるそなたの心より、歸る此の身がエーマードンナニドンナニつらからう」の如くである。これより、七五・七五・七五・七四五の如き形式の歌も、若干生じてゐる。また最後の五句は「よいわいな」「居るわいな」などの如く、ワイナと云ふ語で止めた詞が多く、よいわいな節と云ふ名も、これから生じた。【備考】淨瑠璃から出た流行唄には、この外に二上り新内と同時代の流行唄、一中節（一中くづし）の如きがあつて、詞形も二上り新内に似てゐる。大正初年の流行唄、奈良丸くづしが浪花節より出てゐることなどと、同じ消息である。

【參考】日本歌謠史（高野辰之）〇明治大正昭和流行歌曲集（世界音樂全集第十九卷）（藤田）

新潟繁昌記（にひがたはんじやうき）　繁昌記　二卷【著者】寺門靜軒【成立】安政六年春【解說】俗體の漢文で越後新潟妓館の光景を記述したもので、「江戸繁昌記」（別項）と同類の著である。（佐久）

ニイチェイズム【名稱】ニイチェ主義といふことで、ニイチェの思想を承けて、これを主唱する思想。【解說】ニイチェは十九世紀後半の文學者哲學者で、個人の解放を叫び、權力意志の思想を說いて超人の哲學（或は天才主義）を打建て、キリスト敎的凡庸主義に反抗し、本能主義を唱へて性慾の解放に努め、人間の獸性を重視した思想家である。かゝる主義を我が國に於て闡明したのは高山樗牛である。これより先き、明治三十年頃ドイツ政治思想の流入につれて、哲學も亦輸入され、同時にエマアソン、カアライル等の英米文學も入つて來た。ニイチェを最初に我が國へ紹介したのは吉田靜致で、同三十二年頃の哲學雜誌に「哲學史上第三期の懷疑論」として彼はニイチェ思想の大要を述べた。續いて長谷川天溪は「早稻田學報」で、簡單にニイチェの片影を紹介した。樗牛のニイチェイズムを唱へたのは、その後のことで、同三十四年の雜誌「太陽」一月號に「文明批評家としての文學者」を、八月號に「美的生活を論ず」を掲げ、ニイチェ思想を鼓吹した。樗牛は單にニイチェを紹介したばかりでなく、ニイチェを借りて、日本の思想界、學界に對する彼自身の反抗と不滿とを表白した。而して更にニイチェの個人主義に基く本能主義・天才主義（各別項）を主張して、スツルム・ウント・ドラング（別項）の時代を現出せしめ、浪漫主義（別項）文學の隆盛を促した。かゝる樗牛のニイチェイズムの鼓吹は、當時の日本文壇に大きな反響を與へ、殊に文壇の風潮に敏感であつた小栗風葉は、個人主義を採り入れた長篇かの作物を作つた。また登張竹風は雜誌「帝國文學」に據つて、樗牛の主張に味方し、ニイチェの紹介に力め、早稻田派の文士を率ゐてゐた坪内逍遙は、これに斷乎として反對し、文壇に一波瀾を捲き起したが、その餘波は雜誌「新聲」の記者と「帝國文學」の記者との論爭となり、延いて倫理學界・敎育界にも、主に本能滿足主義に對する是非の批判が頻りに起つた。かくまでに文壇を賑はしたニイチェの哲學思想・人物は、その割合には闡明されなかつたとは云へ、道德的・倫理的懷疑に陷つたものの行くべき道は、個人主義か宗教の門にあることを暗示する大きな役割をなした。而して當時の文士の一部及び青年學生をスツルム・ウント・ドラングの新運動に參加させ、浪漫主義文學運動の先驅となつて、新文明を招來する機運を造らせるに至つた。（宮島）

新嘗祭（にひなめまつり）　神道【名義】天皇御親ら新穀を天神地祇に奉られ、なほ御親らも聞食さるゝ、最も大切な御祭儀の一つである。（大嘗祭參照）（田中（義））

にひはり　俳誌【創刊】明治四十四年六月【解說】伊藤松宇（別項）を盟主とする乘燭會の機關雜誌として生れ、俳諧の史的趣味、連句諷味等の研究發表を趣旨として刊行された。「にひはり」の名稱は、日本武尊の御詠に採つたものであるが、昭和三年九月以降改題して「筑波」といひ、今日に至つてゐる。（伊藤）

新學（にひまなび）　歌論書　一卷一冊【著者】賀茂眞淵【成立】明和二年【刊行】寛政十二年【諸本】歌學全書第十二編・續歌學全書第一編・賀茂眞淵全集第二・和歌叢書第七冊等に所收。「初學萬葉抄」一卷は本書の改題である。【內容】終りに「明和二年七月十六日に　賀茂眞淵しるしぬ」とあり、荒木田久老の跋がついてゐる。大體に於て「歌意考」（別項）と同じく尙古主義の歌論の披瀝であるが、これは斷片的ながら、部分的に、よりくはしい見解が見られる。「萬葉」以外、「記紀」その他諸歌集についても廣くこれを味ふべきことを說き、歌以外文章を學ぶについての注意まで書かれてゐる。而してこゝには明かに一歩をすゝめて、古を知るために古歌が最もいゝのだといふ崇古主義の根本にまでふれてゐる。古歌を知るためには古書を知るべきであると論じ、皇朝の假名を說くに、悉曇・韻鏡（各別項）等をあてはめて論ずる不可をとき、或は古書をよむ上に律令等を知るべきことを論じ、長歌の大に詠まるべきを主張し、赤人・人麿等の歌人を許し、「古今」「後撰」「拾遺」「古今六帖」等の集を批評し、綸詞は「古今集」の適切なるを論じ、「古今集」の旋頭歌のひがごとであるを論ずる等種々注意すべき意見がのべられてゐるが、「萬葉」の丈夫ぶりの歌風を高唱し、彼の崇古主義・皇國主義を中心として、國學者としての斷片的の學說をのべてゐるのである。【價値】「歌意考」に比すると、やゝ斷片的の嫌ひがあるが、より一層彼の立場を明かにし、部分的に種々な見解が見られる。特にこの書に對しては景樹の「新學異見」（別項）の駁論が出で、「新學考加餘」（一卷、寫、本間游清）、「新學異見辨」（一卷、黄合大枝）、「新學異見辨」（一卷、寫、山平仲農）、「ことばのしもと」（一卷、寫、戸那正令）等の駁論の駁論もものされてゐる點に徴しても、近世歌論史上忘るべからざるものである。（藤川）

新學異見（にひまなびいけん）　歌論書　一卷【著者】香川景樹【成立・刊行】文化八年成（熊谷直好序）、文化十二年刊行。歌學全書第十二編・續歌學全書第四編・和歌作法集等所收【內容】眞淵の「新學」（別項）に對する駁論で、「新學」の首章を十四に區分して一々原文を記し、これを批評し反駁し、自己の反眞淵派の立場を强調してゐる。眞淵が古の歌は調を專にした、それはうたふ物だからであると言ふを批評して、「誠は天地の調で、最純眞正なもの、この誠から自ら調をなせるもので、聲を用ひて調べなしたものでなく、又うたふといふのは言を長うする意味で後世の詠むと等しく、曲調にかけかまへて謠ふ意味ではない」と論じてゐる。大和國は丈夫の國で、「萬葉」は丈夫ぶ

り、山城は手弱女國で、「古今」は手弱女であると論じ、「古今集」の六歌仙(別項)の批評は、古風を顧みず、丈夫ぶりをさげすむものとして眞淵が難じてゐる論等に對しても、一々これを反駁して、柔といひ剛といひ、ひとしくその時の姿を體とするがよいといふ立場から、丈夫ぶりに偏し、婦女風を嫌つた眞淵の態度を難じ、「萬葉」を讀み、「萬葉」に倣ふべきといふ眞淵の主張に對してはその非をならし、雄々しく強きは質朴の體で、質朴の詞しきは實に至理である。歌は情のまゝに自ら調べなりて思慮を加ふべきものでなく、古に擬似する暇などはない。古に似せたならば「飾れる僞」となるのである。又似せようとしても似るべきものではなく、今の世の歌は今の世の辭で今の世の調であるべきであると論じ、眞淵が推重した實朝の歌を貶し、又眞淵の「古今」以下の歌集その他記・紀・物語等のよむべきことを說いてゐるにも反對して、歌は感情を主とするもので、更にその必要なく、文は義を本とするもので、一わたり見るのはよいが、今を捨てて古風の文を書くべきでないなどと論じてゐる。【價値】眞淵攻撃に急にして肯定し難い點もあるが、眞淵の崇古主義に反對して、彼の歌に對する大體の考を述べ得てゐるものとして、「歌學提要」(別項)その他の彼の歌論書と併せよまるべきである。彼の歌は現代の詞や調であるべきと說いた現代主義の立場は蘆庵(別項)の繼承であり、眞情・調べ・誠を說いたのは彼の攻撃した眞淵に於ても見られる所で、必ずしも獨自の見解とは思はれない。而して「古今集」等に彼の理想を求めてゐたらしい考が見られるのも、現代主義の立場からは一種の矛盾と言はねばならぬ。が誠を天地の調として、それが自ら歌となると說いたのは卓見である。この書に對する駁論の書として、業合大枝や山平伴鹿の「新學異見辨」等の出た事も注意すべきである。(新學參照)　(藤川)

鳰鳥 におどり　【刊行】享保四年　半太夫節・河東節詞曲集　橫本五冊【解說】本書は普通「鳰鳥萬葉集」の名を以て世に知られてゐるのであるが、京都大學本は、表紙・外題とも失せて見る由なけれど、內題も柱も共に「鳰鳥」とのみあり、合歡堂沾涉・坂本梁雲の序にも、皆「鳰鳥」とばかりいひて萬葉の語見えず。梁雲(江戸半太夫)の序に、

「儀東江の水に添し樹をうごかして風を軟ゆるの枝に搏ず今夢平の鳴々嚶に一節／＼にしてつくはねのこのもかのもは有そしありといへども武藏ののしゆきがもとを尋ていまだ錄せしも侍らざりしを愛に蘭洲の男みづから書し集てより袖にするにかろしまことや此道のあだえずにほどりの息ながく鄙はらは後世をして鳥鷺のあらそひをとゞめんものか」(全文)とあり。その裏面に、

江戸半太夫子　坂本半次郎　［印］
江戸半太夫弟子　手塚平　河東　［印］
同　房室　蘭洲　［印］
書林　勸文堂
　　　泰奇堂

とあり、卷尾に河東の跋を載せ、その餘白に享保四己亥春三月於武陽章臺鈴巢梓行井上氏と細書したるを見れば、同年河東・蘭洲二人の手によつて主として編成されたるも、集中半太夫物多きより半太夫の子半次郎の名を列記したのであらう。各卷の目錄は左の如し。

賀之部卷第一
濱萩・京わらべ・四季・すけ六・かつた・住形松・松の內・松の雙・小もん盡・みつの朝

戀慕部卷第二
公家・京づくし・きぬた・元ぶく・袖とめ・かみ格・和髮すき・帶引・名寄祭文・傾情調狀・色あたか・竹篇摩・吹分相山

見瀛部卷第三
かみ結・猿をくり・物ぐるひ・一本帶・團輪

紀行部卷第四
おせん・熊小袖・ほうか僧・巴やまぶき・大和之助・五人曾我・露のまへ・袂のまへ・らてなの前・しのだ妻・はしら暦・和そが・さくら笛・きようつら・向ゆの・なる神・傳道の鄕・扇子寶・江ぐち・袖とめ・浮世草

物語部卷第五
鷄ぞろへ・名闕・熊木實・小袖もやう・葵見八景・相撲物語

已上五十五段　(藤井)

鳰鳥万葉集 におどりまんえふしふ　詞曲集　橫本二冊【刊行】享保八年八月、鶴屋喜右衞門板。【內容】半太夫節及び河東節の詞曲集で、題簽には「にほ万葉集　江戸半太夫　江戸河東　直傳」とある。上卷には「四季のまひ」より「嫁物狂」に至る三十九曲、下卷には「神樂囃子」より「あら世帶」に至る四十六曲を收む。總目錄左の如くである。
(一)四きのまひ(二)京わらべ(三)おんせん臺(四)くきづくし(五)うらしまの道行(六)小もんづくし(七)十郎かみすき(八)五尾ゆんぶく(九)ほうか僧道行(一〇)ほうか僧かつこの段(一一)松のうち(一二)まつののち(一三)かなはのだん(一四)吹分あいの山(一五)こくせんや　かいづくし(一六)やはらぎ助六(一七)てうちんもんづくし(一八)そでさめそが(一九)袖とめの道行(二〇)おんなかがみゆい(二一)くゆあくた川(二二)かたみそが(二三)かたみなくり(二四)ありまふで(二五)きぬた(二六)てうのはつがい(二七)袖とそで(二八)かうやしん中(二九)おしこそで(三〇)ふみまくら(三一)たなばた(三二)かせんかいづくし(三三)吉原八けい(三四)助六後日心中(三五)きそおぐら(三六)ひぞへおび(三七)元ぶくかみすき(三八)しかた松(三九)かき物ぐるい(四〇)かぐらじし(四一)同しのびの段(四二)だるいおせんの道行(四三)江ぐちの道行(四四)しのたづま(四五)そでわかは(四六)せみ丸の道行(四七)同びわのだん(四八)同かねのだん(四九)なれそめそが(五〇)にいの前道行(五一)だて娘の道行(五二)小袖もやうの段(五三)けいせい道中双六(五四)はつねむこ(五五)そらせう／＼の道行(五六)五人そがの道行(五七)おせん江戸物ぐるひ(五八)柱ごよみの道行(五九)馬上らうゆの道行(六〇)けいせいうけ狀(六一)熊小そでの道行(六二)やまとのすけ(六三)きようつらの道行(六四)あふぎうり(六五)きやうらん菊枕(六六)ふねのうち上(六七)ふねのうち下(六八)露のまへ道行(六九)熊木うり(七〇)天王しのびの段(七一)柳のかみすき(七二)まつよひ(七三)たもとのまへ(七四)新かたみおくり(七五)いしなゆのだん(七六)すまふのだん(七七)三つのあき(七八)さらがふみ(七九)あふぎ八けい(八〇)竹馬のむち(八一)あけゆの(八二)わにのだん(八三)はるのそら(八四)おぼろまんざい(八五)あらせたい。　(藤井)

鳰の浮巢 におのうきす　小說【作者】宮崎三昧道人【發表】明治二十八年五月、東京朝日新聞。【刊行】同二十九年二月、春陽堂。【題材】吉原扇屋の名妓鳰照の傳說を小說化したもの。
【梗概】良家の生れだが、今は紙屑買の幸次郎は、茶店女の妹おきぬと二人で家運再興のために奮闘してゐるうち、花魁鳰照の道中姿に逢ひ、何とかして一夕の歡を得たいと苦心する。揚代の工面に、おきぬの客黑部某から惠まれた金で谷中感應寺の富籤を買ふ。それが當つたと聞き、嬉し紛れに商賣道具の屑籠を川に拋り込んで感應寺へ駈けつける。だが肝心の富札は、屑籠に結びつけてあつたので金

を受取ることが出來ない。はつと思ひ詰めた幸次郎は氣違ひとなる。おきぬは多田の藥師へ日參して兄の平癒を祈る。深川の俠商信傳(しんでん)は、一夜おきぬの災難を助けてこの話を聞き、幸次郎の體を不憫に思ひ、情理を籠めて鳰照に說く。鳰照は義理と情に絡まれ、馴人の露川と緣を切つて、信傳に落籍されて幸次郎の妻となる。幸次郎は狂氣が癒え、信傳の世話で家運を戾すが、鳰照の心中を推し測つて離緣して露川の許に歸さうとする。鳰照は今は幸次郎の離緣を納れ、生命を捨てて露川に詫びをする。
【批評】如何にも哀れ深い物語で、切々と讀者の心をうつものがあり、脚本體の形式も內容に相應はしい。だが三昧の筆の重苦しさから來る一種ぎごちない感じが、どうしても拔けてゐない。古院本に見る「あはれ」も「さび」もあるが、優れた作とはいひ難い。　(柳田(泉))

二家族 にかぞく　小說【作者】正宗白鳥【發表】明治四十一年九月より數箇月に亙り「早稻田文學」に連載。【刊行】同四十二年七月、新潮社。
【梗概】瀨戶內海の一漁村に名門として知られてゐる虎屋と新屋敷との二家族の生活を、虎屋の息子猛夫とその父淸吉、新屋敷の息子貞一とその父喜助とを中心人物として描き出したもの。この二家族は遠い姻戚關係もあるのだが、今日ではすつかり生活の方法が異つてゐる。虎屋の主人淸吉は、堅實に一家を經營し、新たに土藏も建て、親讓りの朽ちた大黑柱、傾いた棟をも修繕し、次第に財產をふやして行つた。息子の猛夫は小學高等科の四年、歲は十四で、學問が好きで、小學卒業後は中學に行き、やがては學者にならうといふ大望を抱いてゐる。從つて村の他の子供達や若者達とは附合ひをしない。友達はただ新屋敷の貞一だけだつた。貞一は、猛夫とは異つて學問が嫌ひで、家の手傳をやつたり、若い漁夫だの、よくない人達と遊び步き、段々不良になつて行く。彼の父の喜助は、猛夫の父の淸吉とはこれ又反對で、徒らに金儲けの夢を見、派手な生活をし、放縱で失敗ばかりして次第に產を傾けて行く。そして愈々金に困ると、大げさに漁船を海へ出したりした。かくて失敗に失敗を重ね、遂に遣り繰りに困つた擧句は、裁判沙汰まで惹起して、新屋敷の運命があやぶまれた。で、已むを得ず虎屋の主人は、喜助と一緒に岡山まで出向いて行つて、公け沙汰にしないですませた。その折、淸吉は初めて喜助に誘はれて遊廓に遊んだ。この噂がひろまるに連れ、息子の猛夫は惱まされた。彼は元々村の卑俗な、淫蕩な、野卑な生活を汚らはしく思つてゐたので、父までがみだらな生活をしたと聞かされては、彼はどんなに絕望したか知れなかつた。もう一時もこの村にゐるのがいやになつた。
【批評】作者最初の長篇小說。別に一貫した筋があるでもなく、また纏まつた物語的興味があるでもない。それにも拘はらず、讀者を易々と最後まで惹きつけて行く力はある。自然主義的手法、若しくは現實主義的態度を最もよく代表した作品であらう。これには作者の皮肉もなく、虛無的思想もなく、頽廢的要素もない。ただあるがまゝの生活を、あるがまゝに描いただけである。從つて白鳥の諸作中、稀に見る客觀的作品である。性格は猛夫・貞一・淸吉・喜助等、何れも鮮明に描き分けがしてある。ただ併し、猛夫に最も力が注がれてゐる割に、生きた感じが薄い。他の三人は具象的に浮き上つてゐるが、猛夫は何處かつくりもののやうな感を抱かせる。季節々々の漁村の風物、殊に九月の暴風雨の後の狀況など、手に取るやうに鮮かに描かれてゐる。この一篇により、作者は長篇作家としても認められるに至つた。　(宮島)

にぎはひ草 にぎはひぐさ　隨筆　二卷【著者】佐野紹益【刊行】天和二年【諸本】本書は今稀覯に屬する。明治の複刊本は誤植が多い。日本隨筆全集卷十八所收。【解說】「徒然草」になぞらへて自己見聞の事、藝道の所感等を漫錄したもので、多くは晚年に及んで五六十年の既往を追懷した談である。上卷には茶道の事、和歌名匠の事、乞食僧靜閑・宗圓の話、埋忠氏の井手の蛙の事、細川幽齋の古今傳授の話、儉約と吝嗇との別、「徒然草」の評、商家主從の間の事、無反の刀脇指の流行、鈴木正三の「因果物語」の評等を記し、下卷には本阿彌光悅の爲人、その烏丸光廣・飛鳥井雅章との交涉、八條宮智仁親王の事、蹴鞠の事數條、養珠院及び僧日遠の事、本滿寺日重上人の「和語抄」の評、和歌・俳句の評論、奈良不退寺在原業平の像等を錄してゐる。本阿彌光悅は己が諸藝の師であつて、永く近侍した關係から、その人物・言動を述べること、最も要領を得て居り、又茶道・蹴鞠は頗る堪能であつたと見えて、これを說くこと甚だ詳細である。卷尾に「天和二年歲次壬戌季秋中浣、京室町物門辻書肆得榮堂二口伊兵衞梓」とあるのみで、序跋はない。
【著者・小傳】佐野紹益は家號を灰屋、通稱を三郎右衞門と云つて、京都上立賣の富商。諸藝に通じて搢紳の家に出入し、風流の交遊を以て聞えた。名妓吉野との情事は世の知るところである。元祿四年十一月十二日歿す。行年八十三。　(和田)

二九十八 にくじふはち　能狂言【解說】淸水の觀音樣に妻乞をした者、靈夢によつて西門の傍に立つてゐる女を妻に定めようと行つて見ると、果して女が衣を被いで立つてゐる。未だ獨身だといふので、宿を問ふと歌で答へる。春日の室町らしい。室町の角よりしてはいくつめかと問ふ。すると女は「あゝにくし」とばかり言つて去つてしまふ。別に憎くもあるまいから二九十八軒目と云ふ事であらうといつて訪ねあて、さて被物を取つて見ると、ひどい醜婦なので驚いて逃げようとすると、女は觀世音の御引合せなのを逃げるものがあるかと追ひ入るといふ筋。大藏流では入門式になつてゐるが、和泉流では小習である。觀音や藥師に妻乞や申子の通夜をする事は當代の流行だつたものか、文學上例が多いが、狂言にも「因幡堂」「吹取」「瞽女座頭」等相當に見出される。「瞽女座頭」の方は同じ淸水の靈驗でも、座頭と瞽女とが夫婦になる事になつてゐるが、「二九十八」の方の結末は、狂言の常套的終結で類は却つて多い。　(織田)

肉附け にくづけ　藝術論〔英〕Modelling〔佛〕Modelé, Modelage.【解說】彫刻製作技術上の重要な一過程で、實在對象(主として人體)が有する厚味・立體感・圓味を作物に與へる仕方をいふ。普通粘土や蠟でする。かくして人體的印象の再現が完全に行はれたものを原型(モデル)として大理石又は靑銅等にうつすのであるが、吾々が展覽會等で屢々見るところの石膏像の如きは、むしろこの原型そのまゝのものと見做すべきものであるが、これ

をも鑑賞するといふことは、蓋し肉附けが彫塑技術上最も重要であることを表明する。繪畫の方面に於ても、明暗・暈し、或は明色暗色の照應關係を以て、畫面に於ける對象の立體感を完成する場合も、肉附けと稱して不可はない。文學論に於ても同樣の意味で使用されることがある。

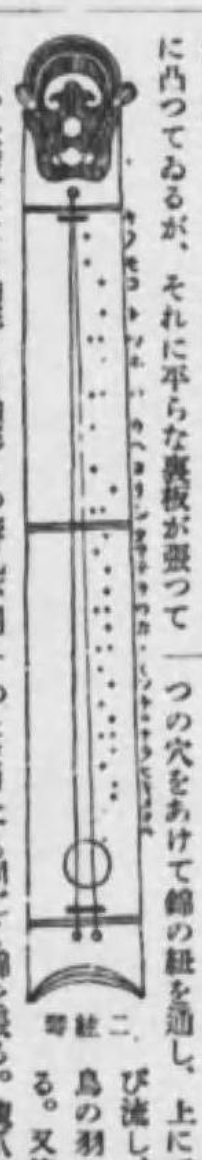
【參考】ロダンの言葉 高村光太郎 〔村田〕

肉彈 にくだん　戰爭文學　【著者】櫻井忠溫　【刊行】明治三十九年四月、丁未出版社。櫻井忠溫全集・戰記名著文庫・戰爭文學集(現代日本文學全集〇)・新潮文庫等所收。

【梗概】明治三十七年日露開戰に際し、著者櫻井氏は松山聯隊の旗手として五月末遼東半島の一角に出征したが、折柄青泥窪への關門南山の陷落を見たので、爾來新たに編成された第三軍に屬し、乃木將軍の指揮下に旅順攻圍戰に從ふ事になつた。對陣月餘にしてまづ歪頭山に初陣し、續いて劍山の險に激戰を經驗して敵の第一防禦線をわが手中に收めた。而して數次の猛烈な逆襲を斥けつつ警戒守備の任に當り、炎熱と雨露に交々惱まさるゝ塹壕生活を續けること一ケ月、漸くわが追擊準備が整つたので、第二防禦線を襲ひ、鏖戰苦闘三日に亙つて太白山一帶の陣地を占領し、更に長驅追擊して、初めて難攻不落を誇る堅壘、旅順要塞の本防禦線に迫るに至つた。やがてこれが攻擊の據點とすべく豪雨を衝いて大孤山の攻略に當り、著者も死を期して骨箱を用意した程で、敵壘よりの銃砲火に加ふるに、背面からは敵艦隊の砲擊さへ受けて極度に苦戰したが、二日にして遂にこれを奪取することが出來た。越えて二週日、わが軍は愈々第一回總攻擊に轉じた。この間著者は中尉に昇進し小隊長として陣頭に立つ事になり、目標たる東鷄冠山砲臺に向つて進んだ。わが砲兵隊の猛擊に掩護されつつ逐次躍進し、八月二十一日以來步兵の突擊が行はれ、鐵條網と機關銃とを冒し、敵壘直下に所謂肉彈戰の慘烈なる場面が繰返されたが、徒らに死屍を積むのみに終つた。二十四日未明、中隊はその後を繼ぐ「必死隊」として進擊したが、敵の第一散兵壕を破るや中隊長戰死し、兵は一人々々斃れ、代つて指揮する櫻井中尉また右手を擊たれた。而も屈する色なく白刃を左手に堡壘を占領したが、一隊の敵兵が直ちに逆襲して大混戰が演ぜられ、中尉は更に左手を射貫かれ、又右脚まで碎かれて立つ能はざるに至つた。夜が明けたが、累々として戰場を埋むる死傷者に伍し、敵の虐殺と味方からの砲彈の危險に曝されながら、流血の刻々と生命を奪ひ去るにまかせて重傷の身を橫へてゐるより外なかつた。その時見も知らぬ高知聯隊の近藤竹三郎が、わが身の負傷を顧みず、瀕死の中尉を負うて敵圍より脫出し、辛うじて死中に再生を得しめたのである。

【批評】著者が自ら序する如く、本書は旅順役の一面を描いたものに過ぎず、またその悲壯慘烈の度も或はその後に於て甚だしかつたかも知れないが、而も日露戰爭を記念する作品中最も世に迎へられた所以は、一にわが國に於ける近代戰爭文學の最初の所產たりしと共に、著者がその體驗を卒直に描いた點とにある。即ち本書出でて初めて戰線の機構局面に接し得ると共に、人間的な戰火記錄としてこれに親しむことが出來たのと、またやゝ稚拙粗大の文辭ながら、偶感觸目せる身邊の事實をその直後に記述せる事とて、生々しき實感を與へた爲めである。この故を以て、著者が左手を以て執筆したといふこの血の記錄は、今日に至るまでよく讀者を感激せしめ、啻に戰爭文學第一の書としてのみならず、明治・大正を通じて最も多く讀まれたる作品の一つとしても特記せらるべきである。これが海外に於ての反響も頗る大で、本田增次郎、ミス・ベエコンに依る英譯の行はるゝ外、シンチンゲルの獨譯、バルビの伊譯、更に佛・伊・支語にも譯され、露語譯の出づること實に五種の多きに及んだ。なほ本書の姉妹篇として、著者が旅順の役を全部的に回顧的に描いたものに「銃後」がある。 〔水木〕

二絃琴 にげんきん　樂器　【異稱】八雲琴 やくもごと　【構造】現時はこれに二派あり、一を八雲琴と呼び、一を東流二絃琴といふ。兩者はその構造に於て大同小異である。八雲琴は長三尺六寸、頭幅四寸一分、尾幅三寸八分の細長い平たい胴の上に、二絃を並行に極めて近接して張つたものである。胴は初めは竹で造つたが、今は多く杉又は桐で造る。併し竹で造つたやうに似せて、表板には頭・中・尾の三所に竹節の形を彫つてある。表板は竹を割つたやうな形に凹つてゐるが、それに平らな裏板が張つてある。表板には日輪形と月輪形との響孔が開けてある。尾の方には高二寸六分許の糸巻が二本左右に立つて居り、これに卷き付けた二本の絃は、一個の小さな風門と稱する孔を通つて胴の表に出るやうになつてゐる。それで駒は尾の近くと頭の近くとの二個所にあり、尾に近いものを雲額といひ、頭に近いものを龍角といふ。兩者は高さ四分、後者は高さ五分ある。この兩駒の間の絃の部分を彈ずるのである。東流二絃琴もその形大同小異であるが、ただ長さ少しく短く、且つ裏板のないことが大に異つてゐる。胴の表面には三十一個の徽があつて、これを勘所の目安とすることは一絃琴と相似てゐる。琴糸は青色の濃淡あるものを用ひる。琴臺には机形のものと鬪の如き形のものとがあり、普通には後者を用ひる。



二絃琴

【奏法】一絃琴の奏法と同じく、左手の中指に轉管と稱する白竹又は象牙の管をはめて、それで絃の勘所を按じ、右手の食指に龍爪と稱する角製又は象牙製の爪をはめて、それで絃の龍角に近い部分を彈じて鳴らす。轉管は元來須賀川の千鳥に象るといふ。長さ一寸八分、前より六分の所へ二つの穴をあけて錦の紐を通し、上にて後へ結び流し、その形鳥の羽の如くする。又管の先端のとまりにも同じく錦を裝る。龍爪は管の兩端を斜に切つてある。その最も長い所で一寸二分の長さあり、その最も短い所は二分あつて、その部を錦で卷く。二本の絃は全く同調に調律してあるから、これを彈ずる時は常に二本を一緒に彈くのである。【樂譜】樂譜は徽の名を書き記す。徽は又壺ともいふ。壺の

琴臺

名は、次の和歌の各文字を徽額に近い方から順に唱へるのである。「ヤクモコト、ツホハウヘヨリ、シタマテヲ、ワカノミソチニ、ナラヒキメヌル」これを壺の歌といふ。

【沿革】我が國の古代及び支那に、二絃の琴が有つたか否かは不明である。今日行はれる八雲琴の起原は、江戶時代の中頃文政年間に始まる。その頃伊豫國宇摩郡天滿村の人中山吉士道轉なる者が、關口流の武術を學んでその奧義を傳へ、又醫學を修修して刀圭の理を窮めたが、音樂を好み、京都に出でて菊岡檢校の門に入つて箏曲を學び、文政三年十月、出雲國琴引山の天日隅宮に祈願を籠め、遂に宇迦の神山の竹を伐り、これに陰陽の二絃をかけて八雲琴を作つた。その初めは出雲琴又は玉琴と呼んだが、後に「八雲たつ」の古歌に因つてこれを八雲琴と呼び、又自ら名を改めて中山琴主といつた。そして再び京都に出てこの八雲琴を弘めた。然るにその時有名なる葛原勾當も亦獨立に二絃琴を發明して、これを京都の琴屋政田屋甚兵衞に作らせ、これを竹琴と名付けたが、或る時中山琴主と葛原勾當と相會し、互にその考案の一致せるに感嘆したが、勾當は琴主に讓つて名をも八雲琴と稱し、その家元を中山琴主とした。かくて琴主が、「八雲琴譜」と稱する書を發刊した時には、葛原勾當も亦自ら序文を書いた位であつたが、後に琴主と勾當と不和になつたので、遂にその書から葛原勾當の名を除き、中島檢校なる假名を以てこれに代用するに至つた。中山の門人備後尾の道の大岸正當といふ者が、頗るその技に通達して名人の名あり、多くの新曲を作つた。明治の中頃迄は相當に盛んであつたが、その後非常に衰へ、今日では名古屋に一色輝琴女史のある外は、あまり行はれてゐない。大岸正當は號を元琴といひ、その時江戶の旗本の次男に加藤桑太郎といふ者があり、幼より音曲を好み、長唄の囃子に達してゐたが、大岸元琴の門に入つて八雲琴を學び、八雲琴の古風なるに慊らず思ひ、俗曲・端唄等の俗耳に入り易いものを主として奏したので、師から破門された。そこで彼は自ら藤舍蘆船と名乘り(藤舍とは、彼の定紋が下り藤であるのによる)、八雲琴の名を改めて、東流二絃琴と稱して世に弘めた。關東に於ては、遂に八雲琴を壓倒して獨り榮えるに至つた。初代蘆船の一子加藤常理は、愚にして遂に家產を蕩盡したが、常理の妻はまの兄本多利貫なる者が、その跡を襲いで二代目蘆船と稱し、一時は相當の勢力もあつたが、明治の末年から急に衰へて、今日では門弟等が辛うじてその跡を維持してゐる有樣である。

龍爪

轉管

【參考】八雲琴譜 中山琴主〇新撰八雲琴譜 近藤蘆翠〇東流二絃琴唱歌集 初代藤舍蘆船 〔田邊〕

にごりえ　小說　【作者】樋口一葉　【發表】明治二十八年九月、「文藝俱樂部」【刊行】一葉全集上卷・現代日本文學全集所收。

【梗概】酌婦のお力は菊の井の一枚看板で、媚びるでもなくむしろ我儘に振舞つて、それで不思議に人氣があつた。が、傳法を裝ふ胸の中には人に言はれぬ惱みがあつた。從つて何處か可憐な風情が感じられる。或る時、ふと呼び込んだ客の結城朝之助は、場所柄に過ぎた頼もしげな男で、逢ふ瀨の重なるに伴れ、お力もいつか馴染んでいつた。さうしてゐるうち、或る月の夜に、お力の以前の情人の蒲團やの源七が訪ねて來たが、お力は眼をつぶつて會はずに歸し、朝之助にわけを聞かれると辛い立場を訴へて吐息をもらした。お力に現をぬかした源七は、落ちぶれ果てた今もなほ彼女を忘れかねてゐる。女房のお初が悲しみを抑へての心盡しも效がない。それだけお力には、人の恨を受けながら色戀の切實がつくづく嫌になるのであつた。朝之助が來るとお力はコップ酒を呷りながらの身の上話に、もとを言へば代々傳はる出來損ねで、そのための貧苦から、と言ひさして泣き出した。一方源七は暮しに詰つても働かうとしない。賣女づれに見かへられたかと、お初は口惜しく涙ぐみ、子供の事から思ひ餘つてお力を罵つた。源七は行詰り上、遂に彼女を離緣して了つた。魂祭も過ぎた間もなくの事、源七はお力を殺して自分も死んだ。それは無理心中ではないかとの噂であつた。

【批評】お力を中心とした世界を表とし、源七を中心とした世界を裏とし、最後に兩者を一つに締めくゝり、その間にしんみりした人情味を湛へてゐる。殊にお力を主とした女性描寫に於て、色香を賣る女や、實意ある人妻等の生活裏の諸相が、世故に長けた筆で精細に寫されてゐる。中でもお力は、最も心理的に描かれてゐる。それに伴れては遊里特有の酒間の情景等も巧みに要を得て描かれてゐる。生一本な寂しさを、蓮葉的な言動に包んだ主人公を通して、世間の嘲罵を浴びながらも、その誤解を解くによしもない女達の暗い生活に、作者は深い同情を寄せてゐる。陽氣な外見と痛ましい內實の隔り、そこに作者の狙つた現實があつた。作中に漂つてゐる情趣には未だ人の世の儚さを嘆く分子が多いが、特異な題材をとつてゐると共に、一葉の作としては最も現實味に富んでゐるもので、文章も平明のうちに纖細な味を出してゐる。「たけくらべ」(別項)と共に作者の代表作である。なほ本篇は、眞山青果によつて脚色され、大正七年六月歌舞伎座で、河合・喜多村一座によつて上演された。 〔福地〕

西周 にしあまね　學者　【姓名】幼名經太郎、やゝ長じて壽專、後修亮。外に時懋・魚人・魯人の名もあるが、公文書には多く周助と書し、寛にこれに從ふ。後また周と通稱す。【號】鹿城・天根・甘寐舍・甘寐齋　【生沒】文政十二年二月三日石州津和野に生れ、明治三十年一月二十九日東京に歿す。享年六十九。【墓所】東京青山墓地　【家系】家は代々津和野の藩醫である。父は時義、母は米田氏米子、周はその長子、外に一弟二妹があつた。安政六年三月石川氏ます子を娶る。【閲歷】幼少の頃から祖父時雍の薰育を受けた。十二歲の時初めて藩主龜井茲監に見え、中尾從格となり、時懋と名乘る。この頃より學に勵むこと甚しく、嘉永元年(二十歲)遂に父祖の業を捨て儒學を修業すべき命を受け、五月元服の式を行ひ、髮を蓄へて修亮と稱し、七月養老館句讀を拜命した。同二年九月、大阪遊學を願つて三年の暇を賜つた。大阪では後藤機の松陰塾に入つたが、翌年八月大阪を去つて岡山學校に移つた。同四年十月退學歸郷、翌五年九月培達塾頭を命ぜられた。越えて嘉永六年二月江戶詰となり時習堂講釋を命ぜられた。江戶出府後の周は洋學に志し、藩邸內の醫野村春岱に和蘭文典を學んだ。次いで安政元年三月、彼は松陰塾時代の舊友の援助を得て、君父に遺書して

亡命した。これより大野藩士某及び郷人池田多仲に蘭學を學び、和蘭兵術の書を讀んだ。更に、大阪・岡山時代よりの舊友鈴木維義を介して杉田塾に通學し、次いで多仲を介して手塚律藏の塾に通つた。同三年初めて英語を學ぶ。同四年春、幕府の蕃書調所頭取古賀謹一郎に會ひ、手塚の推擧により、蕃書調所教授手傳並となつた(二十九歳)。同時に手傳並となつたものに津田眞一郎(後に眞道)がある。爾來兩人は永く手を携へて我が國文化の開發に貢獻した。同六年五月蕃書調所教授手傳を拜命。文久二年六月多年の願ひが容れられて、兩人は和蘭留學の命を受けた。六月十八日江戸を出發、翌三年五月和蘭に着いた。留まること三年、慶應元年十二月無事歸朝した。

西周

同二年三月開成所教授となり、四月その將來せる和蘭政治學の書を譯すべき幕命を受け、萬國公法を譯述して上つた。九月命により京都に赴く。これより先、將軍家茂大阪に薨じ、慶喜職を嗣いで京都にあつた。京都に於ける周は徒らに無聊に苦しむのみであつたが、諸藩士の聲名を傳聞して來り、意見を叩くものが多く、後には就いて學ぶ者も出來、遂に五百人に垂んとし、諸侯中來つて西洋法學の講義を聽くものもあつた。同三年三月突然慶喜の召にあひ、佛蘭西語を授けることとなつた。爾來慶喜の側近にあつて、相當重要な役目をなすに至つた。幕府の外交文書を譯したのも當時のことである。將軍の多忙なるに從ひ、佛蘭西語の學習を廢するに至つて、慶喜との交渉はやゝ疎遠くなつたが、私塾の方は益々盛んになり、西洋政治に關する諮問はいよ〱頻繁であつた。同年十二月慶喜の大阪に走るに隨ひ、更に翌慶應四年鳥羽伏見の戰爭起り、慶喜の江戸に遁れるや、これを追うて東に歸つた。江戸に到るや直ちに目付と共に立憲政體調査の事を命ぜられた。同年二月東叡山に奉仕して慶喜に謁した。時に慶喜は大久保一翁・勝安房の言を用ひて恭順、罪を謝するに決意してゐた。周は命ぜられてこれが告諭の文を草した。四月慶喜に扈從して水戸に行く。閏四月江戸に歸る。五月詔により德川家達靜岡に封ぜらるゝに及び、事漸く定まり、慶喜は駿府に移つた。周は一身の歸趨に迷つて一度は恩師手塚律藏(維新後瀬脇壽人と改む)を頼らんとしたが、當時阿部邦之助が軍僕を沼津に起すに當り、友人大築尚志の推薦によつて、招かれて兵學校頭取となつた(明治元年十月)。同二年三月、勝安房の推擧により、山縣有朋に見出され、軍部の顧問として兵部省出仕を命ぜられ、學制取調御用掛を兼ねた。彼が永く軍部特殊の立法に參するの端はこゝに始まる。就中山縣との交情は晩年まで續いた。同十一月育英會を開く。軍部に於ける地位は年と共に進み、その間侍讀の命を拜し(四年八月)、明六社に入りて學者としての活動を鮮明にし(明治七年以降)、宮內省御用掛を拜し(九年一月)、東京學士會院會員に選まれ(十二年一月)、爾後屢々その院長となり、又文部省御用掛を兼ねて東京師範學校の事務を視(十四年六月)、元老院議官に任ぜられ(十五年五月)、次いで又貴族院議員に勅任せられた(二十三年九月)。而してこれ等の職任、また各々斷續したが、終始誤らざるは陸軍省幷に參謀本部との密接なる關係である。彼は元來蘭・英・佛の語に通じ、博く參照して獻替する所があり、兵法字書の編纂を初め、海陸軍刑法・陸軍官制職制・軍法會議等の如き、皆その力に籍らざるはない。然るに明治二十四年頃より著しく健康を害し、同三十年一月遂にまた起たなかつた。

【譯著】萬國公法四冊(譯、慶應四年)○百一新論二冊(同上)(著、明治七年三月)○致知啓蒙二冊(著、明治七年九月)○利學二冊(譯、明治十年)○奚般氏心理學二冊(譯、明治十一・二・三年)○公法手錄一冊(譯、明治十五年)○甲評西先生論集一冊(萱生奉三編、明治十三年刊)等。外に短篇論文が主として「明六雜誌」「東京學士會院雜誌」「學藝志林」「內外兵事新聞」等に發表されてゐる。

【業績】國事多端の際に當つて、先覺の一人として各方面に殘した足跡は、實に大きいと言はなければならない。早くより慶喜の君側にあつて特殊の役割を果したのを初めとして、早く育英のことに力を用ひ、或は軍部の顧問として軍政の創立に努めた。殊にその卓見を稱すべきは、洋行前すでに西洋性理の學、又は經濟學に注意した點にある。彼に獨立の研究、纏まつた著述もなく、從つて學者としての名を後世に傳ふべき何物をも遺さなかつたのは、過渡時代の人としては已むを得なかつたであらう。併し彼が、早くより蘭・英二國語を能くし、中頃獨・佛語にも通じ、後には拉丁・希臘語をさへ解したといふから、當時の碩學中群を拔いて世の尊崇を受けたのも寧ろ當然であつたと言ひ得る。　(吉野)

【參考】西周傳(森林太郎)(鷗外全集第七卷)○明治文化全集法律篇解題○和蘭に於ける日本最初の留學生(赤田威友)(明治文化研究昭和四ノ六)

西川流 にしかはりう　舞踊流派【解說】創始者の姓に據る名稱で、寛保或は寶暦以後の人といはれる初代西川仙藏より始まつたが、廣く世に行はれるに至らず、藤間流(別項)の三代目藤間勘兵衞の門弟藤間勘助が、藤間より轉じて西川の家を嗣ぎ、四代目西川扇藏を名乘つてから、初めて世に謳はれた。彼の振附で有名な作品は、歌舞伎十八番の「勸進帳」(別項)である。彼は振附の名人として鳴らしたばかりでなく、近世の名手たる藤間勘翁・初代花柳壽輔・西川鯉三郎にも敎へた。西川流は、扇藏の門弟鯉三郎に依つて名古屋に傳へられ、名古屋の名物となつた。正系の家元は東京に在るが、八代目を嗣いだ六十餘歳の老女は、大震災後間もなく歿し、その養女が九代目を嗣いだ。　(小寺)

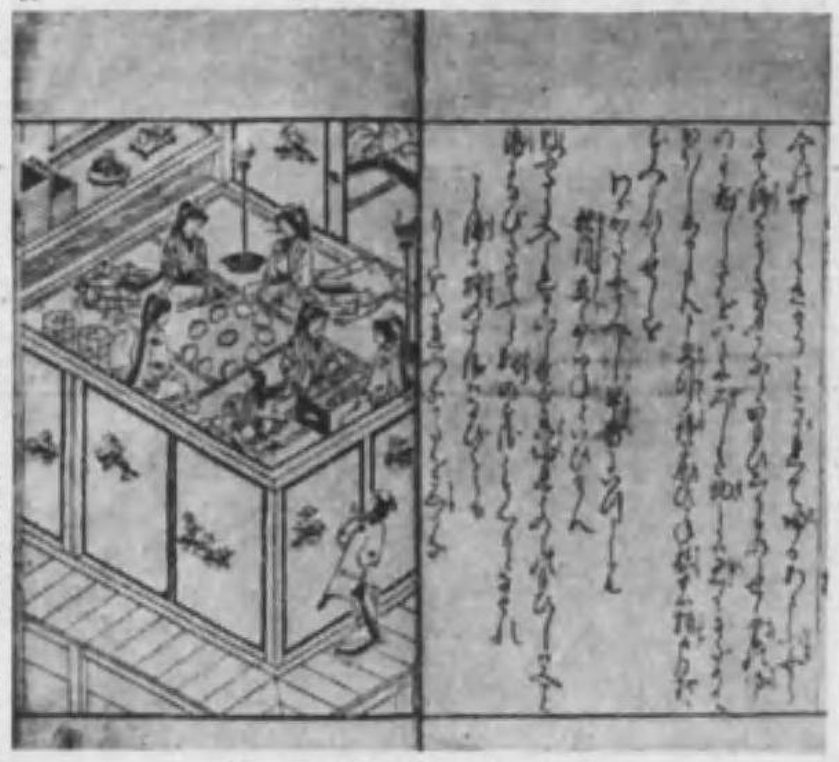
【參考】わが六大舞踊流派の特質(坪內逍遙)(逍遙選集卷三)○少年時に見たる歌舞伎の追憶(同上)

錦繪 にしきゑ　繪畫【解說】浮世繪(別項)版畫の最も進歩したもので、明和二年から作られた色摺版畫に附せられた名稱である。明和以前から色摺版畫は存在し、紅摺繪と稱せられてゐた。然るに明和二年に至つて美麗な色摺版畫が作られたので、その美しいこと恰も錦のやうだとて、蜀山人が錦繪と名付けたと傳へる。紅摺繪と錦繪の相違は、色版の發達によつて、あらはされた色彩美に關するのであつて、この時期に俄かに色版の發達を見、その技巧上の發達が、優れた色摺版畫を作製を促すに至つた。また紙質・顏料等の上にも改良を加へ、これまでの柾紙を廢して、明和以後奉書を用ふるに至つた。その大きさにも變化があつて、これまでの紅摺繪の版畫とは寸法の上からも區別される。(浮世繪參照)　(藤懸)

錦木 にしきぎ　「夫婦物の謠曲」を見よ。

錦木 にしきぎ　假名草子　五卷五冊【作者】未詳。淺井了意といふ説もあるが、北山邊に住んだ貞德門下の或る俳であるといふ説(新つれづれ)がある。【名稱】錦木は「青海」に、一尺許りの木を彩色したもので、古來陸奧の風俗に、男が女に逢はうと思ふと、女の門にこれを立てる。女も逢はうと思へば取り入れる。取入れなければ更に加へて立てて千束を限りとする。「思ひかね今日立てそむる錦木の、千束を待たで逢ふ由もがな」「徒らに千束朽ちにし錦木を、なほ懲りずまに思ひ立つ哉」といふ證歌まで出てをる。即ち錦木は、文字のない國の艶書の代用をしたものであるから、本書が艶文を集めたもの故にかく名づけたものであらう。【刊行】初版は寛文元年辛丑九月吉日とあるだけで書肆の名はない。【諸本】寛文板の外に、刊年月のない本もあるから、何度か重版したに相違ない。江戸時代文藝資料第四所收。【解說】本書は、戀の文盡しであつて、目錄は、

(卷一)寄二幼女一初戀、後朝戀、見初戀、行路隔戀。(卷二)初戀、聽戀、歎眠戀、別離戀、慕戀、忍心戀、無レ返事戀、被レ隱戀、被レ讒恨戀。(卷三)不レ逢レ忍戀、作レ文戀、後朝又契レ後戀、待戀、求レ妬戀、被レ厭戀、留別戀。(卷四)寄二遊女一戀、遊女恨戀、作レ傾城文、恨二待不レ來傾城文、遣二傾城一文、傾城返文、恨レ不レ來傾城文、嫉戀、寄二好色一戀、作レ厭戀。(卷五)忍久戀、互忍戀、忍不レ逢戀、名立戀、變レ約戀、變レ契戀、誘引戀、絶戀、被レ捨戀、調ノ義理、一懸卷句の歌。


錦木（本文・挿畫）

初めて艶書を贈る事から、その拒絶、二度目の文、次第に波瀾を惹き起して、戀の成就、滿足、疑惑、痴迷、破綻、哀愁、絶望等、戀の種々相や道程を艶書の文面に表現したもので、その構想は「堀河院艶書合」(一名「詞花懸露集」)や、近くは「薄雪物語」(別項)などから得たものである。併し「詞花懸露集」に比すればすべてが當世風で、文章の組織が複雜になり、且つ通俗化した所に、この書の價値がある。この種艶文には、故事や引歌に花を咲かせ、作者が博識を衒ふことが多く、さながら寄木細工を見る如く、ただ巧みに文章を組み立つるのが眼目になつて、力も熱もないのが常である。本書も亦この域を出でてゐない。併し一種の美文としては技巧の優れたものであり、好色本の一種として、當時にあつては、かなり歡迎されたものである。【影響】既に「薄雪物語」があつて、「錦木」の如きは、その影響を受けたものであるが、更にこの書に由りて艶書體小説が、ます〱盛んになつた。「水のかしは」「小夜衣」「好色錦木」「薄紅葉」(別項)「雲の梯」「誰袖の海」「新錦木」等、一々記すに遑がない。西鶴の「萬文反古」(別項)も、內容は別であるが、形式はこの體で、やはりその流れを汲んだものである。

【參考】堀河院艶書合附詞花懸露集　(水谷)

錦戸 にしきど　「判官物の謠曲」を見よ。

錦之裏 にしきのうら　洒落本　一冊【作者】山東京傳【畫工】自畫【名稱】內題には、「靑樓晝之世界錦之裏」とある。【刊行】寛政三年【諸本】德川文藝類聚第五編・近代日本文學大系第十二編・洒落本大系等に所收。【題材】洒落本の趣向が年々古くなつたので、捻つて夜を生命とする青樓の晝の世界を描かんとしてゐる。百人一首の歌骨牌の歌の句に合せて、男女の情緒を述ぶる趣向は、洒落本「面美知之娌」(天明九年)の趣向を襲用し、又夕霧伊左衞門の情話の筋と人物をも借りてゐる。

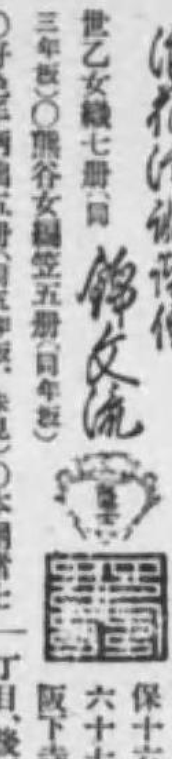
【梗概】攝津新町の廓に、吉田屋喜左衞門と云ふ妓樓がある。吉田屋のお職女郎夕霧の部屋では、いぎたなく寢てゐた番頭新造川竹・振袖新造夜舟・あしかの等が漸く起き出でる。馴染の遊女を措いて他の遊女に遊んだ客が朝歸りに、新造等に捉へられて來る。遊女等の朝湯通ひ、朝飯がすむ。お齒黑をつける。臺所では肴の仕入がある。これ等を順序よく精細に寫生してある。人無き折を窺つて、夕霧は戸棚に隱して置いた情人藤屋伊左衞門を出し、屏風の中に入れて慰める。折柄隣座敷の次の間では、新造等が集まつて歌骨牌をとつてゐる。その歌の文句が二人には一つ〱に身に當る。この時、遣手婆を初め若者等が來て伊左衞門を打擲し、店から突き出さうと騷ぐ。夕霧は制しかねて自殺しようとする。すると次の間の長持から「夕霧どの心底見えた」と聲かけて現はれたのは浮里の客である。藤屋の出店の番頭で、伊左衞門に顏見知られぬのを幸に、夕霧の心底を見屆けに來てゐたのであつた。彼はそこで伊左衞門に錦の財布を渡す。中には夕霧身請の手附金五百兩と勘當許しの父の手紙とがある。伊左衞門と夕霧の二人は、思はず手を合せて感謝した。

【構想】前半に於ける妓樓の朝より晝すぎ迄の描寫は、要を得てゐると共に精緻を極め、京傳でなくてはと思はれる。後半は人情本の世界で、本篇としては光彩を添へるに過ぎない。要するに作者の努力して寫さうとしたのは妓樓の晝の寫生であつた。【影響】巧緻を極めた妓樓の晝の光景の描寫は、後世の作家に多大の影響を與へたらしく、春水は「春色惠之花」(別項)第二編に、「晝の世界の穿をいはゞ錦の裏の糟粕にて故人山東庵の筆意に恥べし」といひ、松亭金水は「閑情末摘花」(別項)第二編に、「故人京傳子が青樓の晝の世界を錦の裏と譏られしこそ妙案なれ」と言つてゐる。

【參考】洒落本評釋 山崎麓　(山崎)

錦文流 にしきぶんりう　浮世草子・淨瑠璃作者・俳人【姓名】未詳【閱歷】詳傳不明。西鶴門の俳人で、錦頂子と號した。著作の序の署名の上に、浪花津俳諧仙と冠したものがあるから、大阪に住んでゐて、俳形であつたと推想される。印には、茅(本朝諸士百家記・棠紫時勢粧)

梅稍庵（徒然時勢粧）と見えてゐる。一時堀江に住んだことが「本朝諸士百家記」に、享保五年頃に座摩の邊にゐたことが「徒然時勢粧」に見えてゐる。「鶴財錄」は彼を西澤一風・水田西吟と共に、文者三傑に數へてゐるから、當時浄瑠璃作者として相當の人氣を得てゐたであらう。【著作】〔浮世草子〕傘大門屋敷五册（寶永二年板）○風流今樣好五册（同年板、未見）○當世乙女織七册（同三年板）○熊谷女編笠五册（同年板）○好色手柄咄五册（同五年板、未見）○本朝諸士百家記十册（同六年板）○徒然時勢粧七册（享保五年板）〔浄瑠璃〕本海道虎石（元祿十二年、竹本座）○傾城八花形（同十五年、竹本座）○高名大鶴帳（寶永元年、竹本座）○仁徳天皇萬年草（正德三年、豐竹座）○西行法師墨染櫻（享保二年、豐竹座）○熊野權現烏午王（享保四年、曾根崎芝居）○國仙野手柄日記（伊藤出羽掾座、興行年不明）○男色寶茂侍（豐竹座、興行年不明）。浮世草子作者としても、浄瑠璃作者としても、獨自の世界を開拓し得たものではない。畢竟いづれの方面でも二三流作者である。　（藤村）



織錦舍隨筆 にしどりのやずいひつ　隨筆　二卷

【著者】村田春海【名稱】織錦舍は著者の堂號。【諸本】百家說林續編（井上頼圀博士所藏の寫本に據る）所收。【解說】和歌を中心として國學に關する諸方面の考察を發表したもので、語學・修辭・有職等に係ることも多い。上卷に「ちひさき水鳥」以下六十五條、下卷に「伊勢物語新義の大凡」以下二十四條を收める。尋常一樣の隨筆と異つて長文の考證論などが多い。下卷の「家集辨」「天字讀法考」「萬葉閣隔考」「和學大概」「美濃の家苞の難」「この葉のしな」等の諸篇が即ちそれである。殊に下卷には「萬葉集」に係る條項が多い。卷中所々に本居宣長の意見を駁撃してゐる。兩者の學問上の見地の違ふことが窺はれる。全篇美しい雅文で書かれてある。　（和田）

西澤一風 にしざはいつぷう　浮世草子・浄瑠璃作者【本名】義敎。通稱は九左衞門【別號】與志・朝義・集樂軒【生歿】寛文五年生れ、享保十六年（一七三一）五月二十四日歿す。享年六十七【法名】嘗譽貞寂禪定門【墓所】大阪下寺町大蓮寺【閲歷】大阪上久寶寺町三丁目、後、心齋橋南へ四丁目に住んで正本屋を業とした。父太兵衞より代々書肆で、子を九左衞門といひ、孫を利兵衞といつた。その子利兵衞（律要一風）は、演劇の功勞者で、又脚本の貸本を始めた人として知られてゐる。利兵衞の次男が脚本作者の西澤一風軒（別項）である。さて彼の作家としての生涯は元祿十一年から享保十四年に及び、三十年に亙つてゐるが、享保三年までは浮世草子を書き、その後は浄瑠璃を書いてゐる。その間に作る所、浮世草子約二十篇、浄瑠璃約十曲であつて、平均一年一作に當る。彼の浄瑠璃は悉く豐竹座のために筆を執つたものである。作品の數の比較的に少いのは、正本屋の業務を持つてゐた爲めでもあらう。彼の浄瑠璃中、享保十一年四月豐竹座の高櫓にかけた「北條時賴記」（別項）は、最も喝采を博したものである。その著「今昔操年代記」（別項）は操浄瑠璃の史料として有益なものである。【著作】新色五巻書（元祿十一年）○御前義經記（同十三年）○女大名丹前能（同十五年）○寛濶曾我物語（同十五年）○風流今平家（同十六年）○傾城武道櫻（寶永二年）○遺變五人男（同四年）○野傾友三味線（同五年）○風流三國志（同五年）○茶傾ひそり顏（同五年）○傾城伽羅三味線（同五年）○御前二代曾我（同六年）○今源氏うつぼ舟（享保元年）○風經三本鑓（同三年）○後家色絡縁（同三年）○井筒屋源六戀寒晒（田中千柳と合作、享保八年）（以上各別項）○日本五山建仁寺供養（享保八年）○頼政追善芝（同九年）○女蟬丸（同九年）○昔米萬石通（同十年）○南北軍問答（同十年）○身替弓張月（同十年）○大佛殿萬代石礎（同十年）○北條時賴記（別項）（以上田中千柳と合作、享保十一年）○今昔操年代記（同十二年）○熊坂今物語（同十四年）（各別項）。

【批評】彼は浮世草子作者としては、西鶴歿後八文字屋本時代に至るまでの一時期を代表すべき作家の一人で、多く西鶴の作を模して翻案物的好色物を綴つてゐるが、なほ「平家物語」や、語物の取入れ等に新意匠を見せた續物を書いて、西鶴を通俗化してゐる。この通俗化の點では、八文字屋物の先驅をなしてゐる。

【參考】西澤一風（水谷不倒「列傳體小說史」）○西澤一風（藤村作「上方文學と江戸文學」）　（藤村）

西澤一風軒 にしざはいつぷうけん　脚本作者【本名】利助（嘉助とも）【別名】幼名、利藏。通稱、正本屋利助、略して本利。また正本屋九郎右衞門。利助を義弟に讓つて後、九左衞門と改めた。【號】李叟・狂言綺語堂・世代軒など。俳名は秋犀庵杏々、後、滄々と改む。【生歿】享和元年に生れ、嘉永五年（一八五二）十二月二日歿す。享年五十二【墓所】大阪下寺町大蓮寺にあると傳へるが、墓碑は發見されてゐない。【家系】玄祖父は元祿期の小說家兼浄瑠璃作者たる西澤一風（別項）である。一風は又、正本屋九左衞門と稱して、當時隆盛な出版書肆であつた。その子九左衞門、孫利兵衞と代々業をついだが、一風より四代の孫利兵衞（俳號一風）は、當時操芝居衰へて歌舞伎芝居の興隆に鑑み、在來の院本出版の業を轉じて、歌舞伎名狂言の臺帳を刊行することを思ひ立つた。かくて繪入根本（別項）流行の機運を造つたといふ。利兵衞の長子（利兵衞）は鳳棠と號し、家督をつぎ、次子が利助で、父の俳號一風を取つて一風軒と稱した。

【閲歷】内本町二丁目に住んでゐたが、文化九年父の歿後、兄と離れて堺筋清水町に移り、正本屋貸本業等を營んだ。幼時から戲場を好み、早熟の性であつたが、十二三歲の頃、既に四方連の狂歌師と交つてゐた。戲作を好み、家業は好む所でなかつたが、便宜を得て古來の浄瑠璃脚本に關する多くの文獻を蒐集して樂しんだ。天保十一年兄の死によつて業を一手に引受けたが、書林榮海堂は義弟に讓つたといふ。常に戲作・狂歌・俳諧等を試み、十五六歲の頃から作の筆を執るうち歌舞伎役者との交りも生じた。文政年中は、奈河一洗・同晴助・歌右衞門事金澤龍玉等の代作をなしたといふ。狂言作者として一風の名を出したのは天保初年からである。天保年中は、多く二代中村富十郎や四代中村歌右衞門のために作を提供したが、天保十二年江戸に下つて市村座に關係した事から、後七代市川團十郎の上阪に際して、彼のためにも執筆する所があつた。天保末年から晩年にかけては、演劇の考證等に專念し、大著述を殘した。京傳・馬琴が風俗の考證を發表してからの戲作者間の流行を追つたもので、著作の大部な點は彼の精力家たるを思はすが、記錄の蒐集を主とする態度に終り、考證家としては、京傳等より遙かに劣つてゐる。濱松歌國（別項）も同種の傾向の人物であるが、歌國の方がなほ堅實な點が見える。かゝる解釋は彼の劇作方面にも向けられるので、創作より改作が多く、而も理につんだ作柄は、彼のために惜しむべき點である。

【著作】〔脚本〕けいせい雪月花（天保元年正月、大阪角の芝居。けいせい忍術池の改作）○花柳鈴音野山路（天保六年五月、大阪中の芝居。義經千本櫻の改作）○花魁若八總（天保七年正月、大阪中の芝居。馬琴の八犬傳）○紅色桔梗女關七（同年七月、大阪北の新地芝居）○女猿曳同鳳（天保九年六月、大阪堀江芝居）○けいせい濱眞砂（天保十年正月、大阪角の芝居、女五右衞門の增補）○紅楓いろは文庫（天保十三年八月、大阪角の芝居。いろは文庫）○昔語稻妻帖（嘉永元年三月、江戸河原崎座。京傳の別製浸藏）等。【合卷】願絹瑠璃錄（嘉永二年刊。安政二年五編まで刊行。芝居の書に據るか）。

【雜著】讀傳奏（嘉永二年成、新群書類從第二所收）○綺語文草（嘉永三年成、同書及び演劇叢書第十一所收）○皇都午睡（別項）○傳奇作書（別項）○脚色㨾録（別項）○忠臣藏類聚大成○源平類聚大成（以上演劇に關する叢書）○内外譜曲句集○勢語句抄○綺語堂發句集。

【參考】西澤一風軒が傳（西澤一風（傳奇作書初篇下卷））○西澤一風小傳（水谷不倒（新群書類從第二））○綺語文章解題（演劇叢書第十二）　（守隨）

西洋血潮小暴風 にしのうみちしほのこあらし　「自由之凱歌」を見よ。

西村茂樹 にしむらしげき　敎育家【名】初名鼎。字は重器【號】泊翁（鷗年）【生歿】文政十一年三月江戸に生れ、明治三十五年八月十八日武藏南葛寺島村にて歿す。享年七十五【墓所】東京市本鄉區駒込林町養源寺【閲歷】下總佐倉藩士で、幼時藩校に入つて文武を修め、長じて儒學を安井息軒・大槻磐溪に、西洋兵學を佐久間象山に、蘭學・英學を手塚律藏に、佛學を原坦山に學んだ。嘉永三年二十六歲で支藩佐野の重役となり、執政たること十五年、開港論者として老中阿部正弘や徳川慶喜に屢々上書した。王政維新後も新政府に建白するところがあつた。明治三年、佐倉藩大參事となり、廢藩後印旛縣權參事に任ぜられたが、同五年これを辭し、東京深川に居を卜して家塾を開き、青年訓育に從事しつつ著述の筆を執つた。その頃、大木喬任の意見で頒布された新學制が、實利に偏し、道德振作の旨に及ばないのを遺憾とし、明六社同人の一人として、人心・風俗の改善に力めた。同七年、文部省五等出仕を命ぜられ、八年、三等侍講を兼ね、翌年文部大丞に榮進、同年三月、日本弘道會の前身、修身學社を創立した。次いで雜誌「修身學社叢說」を發刊、同十四年、毎月道德講演を開いて一般の參聽を許した。それから同十七年、修身學社を日本講道會と改稱し、その會長に就任。その頃、歐化主義が漸く勃興し來るを見て深く憂慮し、同十九年十二月、帝大講堂で、三日間に亙り、日本道德に關する講演をなし、世の注意・反省を促した。同二十年六月、「弘道雜誌」を發行し、會名を日本弘道會と名づけてその事業を進めた。同二十一年七月、華族女學校長を兼任し、且つ宮中顧問官に任ぜられ、同二十三年九月、貴族院議員となつて在職二年に及んだが、間もなくこれを辭し、專ら弘道會の事業に力を注いだ。同三十四年、文學博士の學位を授けられた。

【著書】泊翁叢書○心學講義○儒學講義○日本道德論（別項）○經濟要旨○西史年表○泰西史鑑○萬國史略○西國事物起原○婦女鑑○小學修身訓。　（高須）

西村天囚

西村天囚 にしむらてんしう　評論家・小說家【本名】時彦【生歿】慶應三年七月鹿兒島縣北種子島に生れ、大正十三年七月歿す。享年五十八【閲歷】東京帝大古典講習科に學び、更に重野安繹の指導を受けた。明治二十二年「大阪公論」に入つて論說を擔當したが、翌二十三年大阪朝日新聞社に轉じ、二十六年福島中佐（安正）騎馬旅行の歸途を浦鹽に迎へて「單騎遠征錄」を書いた。翌二十七年日清戰爭が起るや從軍記者となつて觀戰記を草し、二十九年轉じて東京朝日新聞主筆となつた。後、南支那に漫遊、三十五年大阪朝日新聞社に入り、四十三年渡歐、東京朝日新聞に「觀歐遺信」を寄せて紙上を賑はした。それから四十五年、明治天皇の崩御に際して哀悼の辭を草したが、それは大正初頭に於ける踐祚の賀辭と共に一世の名文と稱せられた。天囚は獨り論文に長じたのみならず、小說に於ても夙に一家を成し、明治二十年「屑屋の籠」（別項）前篇を書いて公刊し、二十一年後篇を書いた。外に「さゞなみ」「奴隸心中」「天目山」等の作品がある。が、中途筆を小說に絕ち、論說を書く傍ら、日本に於ける漢文學史その他を研究した。その業績が學界の注目するところとなり、文學博士の學位を授けらるゝに至つた。大正八年、大阪朝日新聞社を辭して社友となり、後、宮內省御用係を拜命して重要文書の起草を擔當した。前記の外に、「尾張敬公」「日本宋學史」等の著がある。　（高須）

西山物語 にしやまものがたり　讀本　三册【作者】建部綾足【名義】京都西山の松の尾にあつた物語の意。【刊行】明和五年、江戸須原屋市兵衞・三河屋利兵衞・京錢屋七郎兵衞・文臺屋太兵衞版。【諸本】明和五年刊行の半紙本と、文化十年刊行の大型三册本（浪花加賀屋善藏版）とがある。珍本全集（帝國文庫）・雅文小說集（有朋堂文庫）所收。【題材】作者が明和四年、京都に遊んで得た西八條村の珍談を題材としたものであることは、「近世物之本江戸作者部類」及びその註に、小津桂窓も云つてゐるが、文化三年卯月十七日上田秋成が、この作の主人公大森七郎のモデルである渡邊源太といふものに邂逅して、その實說を記してゐるものによれば、源太の妹が一族の團次の子右内と私かに行末を契つてゐるが、富み榮えてゐる團次は、家道の衰へた源太の家との結婚を拒むので、源太は妹を婚禮姿にして伴ひ行き、最後の談判を試みたが、なほ聽しないので妹を殺したといふのである。

【梗概】〔卷之上〕（こがねの卷）京都西山の松の尾に大森七郎といふ士が、妹かへ・弟惣次と共に老母に仕へてゐた。その家に祖先彥七から傳來の寶刀があつた。楠正成の遺物で、曾て異變があつてこれを寺に納めたが、七郎は志あつて貧苦の中に金を調へて取り返した。（かへの卷）それ以來怪しい事が頻りに起り、母も病に罹つたので、同じ里に住む從弟の八郎は、その子の宇須美を介抱の手傳に遣る。かくて宇須美とかへとは、密かに行末を契つた。（太刀の卷）その後、或る西國の大名が武藝者を抱へようといふので、七郎と八郎とは武藝を競べることになる。勝負の結果は八郎

の夢となつた。それは母の病の時に受けた恩を思うて夢を譲つたのである。(巻之中)(あやしの巻)この事を知つた母は、かの寶刀の祟だといつて寺に返すやうに進めたが、七郎は聞き入れず、酒を酌んでゐると、側の剣鍋が躍り上つて梁に着いたり、壺といふのに狐が鳴いたり、又或る夜七郎に正成の亡靈が現はれて太刀を持ち歸つた事を憎み、留め置く時は祟をみせるといふやうな怪しい出來事があつた。(琴の巻)一方八郎は祿を得て富み、人を集めて毎日のやうに宴を催した。或る日招かれて行つたかへは、宇須美等に勸められて琴を弾いて興を添へたが、丁度風のために燈火が消えて、宇須美と深く契つた。(文の巻)併し七郎は愈々貧しく、八郎との間も段々疎くなり、宇須美とかへは、ただ文にのみ想ひを寄せてゐた。(わかれの巻)その中に、八郎は西國へ赴くことになる。かへと宇須美とは別れねばならないので、互に悲しい思ひを訴へ、殊にかへは母の目につくやうに物思ひに沈んで痩せ衰へた。かれて事情を知つてゐた七郎は、媒人を立てて結婚を申込んだが、八郎は即座に拒絶し、また宇須美に贈り文をさへ書かせた。(巻之下)(露の巻)そこで七郎は早速かへを結婚裝束にして伴ひ行き、最後の談判をしたが、なほ聽しないので丈夫の振舞を見よとて妹を殺して歸つた。八郎は死骸に取りついて嘆いた。彼が縁談を拒絶したのは、占者に不吉の緣と云はれた爲めであつた。(よみの巻)それ以來病勝ちであつた宇須美は深草の里に籠り、はかなく別れたかへの供養を怠らず、或る秋の夜その亡靈に逢つてしみじみ語つた。(ほきの巻)又姉の死が全く八郎のためだと恨んでゐた惣次は、仇を報いようとするので、七郎は私と公との道を說き聞かせた。然るに八郎が寺を建て亡き人の菩提を弔つた爲めか、宇須美の病も癒え、漸く相互の實情も知れ、兩家が和睦して共に榮えたといふ。

【構想】作者は悲話を題材とし、若い男女の戀に近世武士の道義的觀念を取扱つたが、それが當時のこととて憚る事情もあつたものか、前後に緊密な關係のない寶刀の祟、女の幽靈等を脚色し、却つて散漫に流れ、統一を缺いてゐる感じを與へる。又上中下三册を中古の物語風に九の巻に分ち、序に「從學の士をして古を以て今を御し、俗に卽いて雅をなすの術を曉らしめんと欲す」とあるやうに、現世的の題材を扱ひながら、擬古の形式と文體とを取り、古語や古歌に一々出典を註する等、初學者の學習に便ぜんとして書いてゐる。【史的地位】國學者の古典研究は眞淵に至つて大に振興され、純文學の上にも著しい影響を及ぼした。眞淵の弟子の綾足が「西山物語」を書いたのもその現はれの一つである。同時に荷田在滿の「白猿物語」「落合物語」、眞淵の「由良物語」等に刺戟されたものである。しかも讀本の要素と色彩とを備へ、なほ從來の怪異系統を離れた趣向と、長篇の形式とその文章とは、讀本(別項)の發達を促進し、また後の江戸國學者等をして雅文小說の一群を生ましめた重大な意義のあるものである。(笹野)

西山物語（表紙・初四）

【參考】綾足と秋成 藤井乙男(江戸文學研究)

二十一代集 にじふいちだいしふ 和歌 【名義】二十一代の勅撰和歌集の意。【解說】「古今集」より「新古今集」に至る八代集(別項)と「新勅撰集」より「新續古今集」に至る十三代集とを合せたもの。「新葉集」を加へて二十二代集とする說もある。正保四年版、大本五十六册がある。(西下)

【參考】拾芥抄○歷代和歌勅撰考 吉田令世

二十五絃 にじふごげん 詩集 【著者】薄田泣菫 【刊行】明治三十八年五月、春陽堂。【解說】全二十五篇三十六章。「公孫樹下にたちて」「澤潟の歌」「金剛山の歌」「雷神の歌」等を代表詩篇とする。著者の第三詩集である。この集に於て、泣菫は前二集とは一見見違へるばかりの飛躍を試みた。長篇詩作を盛んに試み、好んで古語雅語を選擇して自在にこれを驅使し、その婉雅妖麗に自ら沈溺し、さきの瑰麗あつて實感少き缺陷は、次第にその影を潛めて、詩語を自由にし得る境地に達したと共に、その古語雅語の間に於て、よく著者最近の感懷を自在に表現せんとする好望を明かに示して來た。これがため、彼の地位は俄然高まつて、蒲原有明(別項)と相並んで、藤村去りし後の詩林の双璧とならんとする實力をあらはすに至つた。この結果は、「白羊宮」(別項)によつて收められた。(日夏)

二十五座の神樂 にじふござのかぐら 舞踊 【別名】里神樂【解說】里神樂(別項)は、曲の數に依り、甲地では七十五座の神樂と稱し、乙地では三十六座の神樂、十二座の神樂と稱する。二十五座は、旣に東京に行はれた由を「東都歲時記」に記し、東京市民は今も里神樂の別名として二十五座と呼んでゐるが、この名稱は、東京にのみ限つてはゐない。たとへば越後南魚沼郡藪神村にも二十五座の神樂がある。(神樂參照)(小寺)

二十五菩薩來迎會 にじふごぼさつらいかうゑ 「練供養」を見よ。

二十四孝 にじふしかう 假名草子 一巻一册 【作者】原本作者の名を記したものはないが、「昆陽漫錄」には、元の郭居敬の作とある。「世孝百詠」には、郭居業と記す。假名譯文は何人の手に成つたか未詳。【名稱】「二十四章孝行錄」とも。稀にただ「孝子傳」と稱するものもある。【諸本】嵯峨本「二十四孝」、寬永九年九月中野市右衞門刊。江戸版では明曆二年松會

市郎兵衞の「新版二十四孝」一册、寬文五年鶴屋仁兵衞印行「二十四章孝行錄抄」一册、天和版「首書二十四孝」一册、貞享三年版「二十四孝諺解」二册、元祿版「二十四孝諺解」二册、同洛下隱子貞阿撰「二十四孝俗解」四册、寶永版熊澤蕃山撰「二十四孝小解」一册、享保三年版毘沙門某撰「對類二十四孝」二册、お伽草子の「二十四孝」一册、これ等が主なもので、この外「二十四孝」の單行本は數種ある。御伽草子後編(今泉晶山校)・有朋堂文庫・日本文學大系十九巻等所收。【解說】この書は、古來孝子として聞えた二十四人を選び、詩と傳とを記し、小兒に孝道を勸めた敎訓書で、何年頃日本に渡つたかは詳かでないが、假名草子としては慶長頃、嵯峨の角倉氏で刊行したものが、最も早いものである。これは紙數二十四丁、上段に繪があつて、下段に詩と傳とがあり、詩には訓點を附し、傳は假名文である。何人が譯したかは詳かでないが、書は光悅風で、所謂光悅本、又嵯峨本と稱するものである。次の寬永版の事は判らないが、明曆二年の江戸版は、この嵯峨本を底本としたものらしく、挿繪の構圖までほぼ同じである。寬文本・貞享本ともに、それぞれ孝子の人名は同じであるが、順序に多少の入れ替へがある。なほ「二十四孝」は、すべて繪入本で、孝子の選定も、大舜を初め、ほぼ一定してゐるが、中に二三異同のあるものがある。例へば熊澤蕃山撰「二十四孝小解」の如きがそれである。異同を示せば、

(一)大舜(嵯峨本)—大舜(熊澤本)(二)漢文帝—漢文帝(三)丁蘭—曾子(四)孟宗—閔子(五)閔子騫—仲由(六)曾參—董永(七)王祥—剡子(八)老萊子—江革(九)姜詩—陸績(十)唐夫人—唐夫人(十一)楊香—吳猛(十二)董永—王祥(十三)黃香—郭巨(十四)王褒—楊香(十五)郭巨—朱壽昌(十六)朱壽昌—庾黔婁(十七)剡子—老萊子(十八)蔡順—蔡順(十九)庾黔婁—黃香(二十)吳猛—姜詩(二十一)張孝張禮—王褒(二十二)田眞田廣田慶—丁蘭(二十三)山谷—孟宗(二十四)陸績—山谷。

熊澤本は、張孝と田眞の二兄弟を除いて、その代り仲由と江革の二人が入つてゐる。然るに「昆陽漫錄」に載する二十四孝の人名は、嵯峨本に比すると、江革・韓伯兪・閔損・陸績・義姑・五武・子路仲由・鮑一・趙孝宗元覺等の名があつて、漢文帝・唐夫人・楊香・王褒・朱壽昌・庾黔婁・吳猛・張孝・山谷等の名が削られ、九名の交替がある。石川雅望著「ねざめのすさび」に據ると、「二十四孝」は「初穎日記故事」といふ兒童敎訓書中の初めに載せてあるといふ。我が國でいへば、恰も「實語敎」(別項)「童子敎」などの、寺子屋式のもので、それゆゑ異本があると思はれる。この「二十四孝」に就いては、學者間に種々論議されてをるが、これは「孝經」(別項)などと同一に考へたからであらう。その行狀にも無稽の事などがあり、寧ろ敎訓の意を持つた小說的作品として取扱ふべきものである。郭巨の一話の如きは、親のためとはいひながら、子を生き埋めにせんとするのは人情に悖つたことである。王祥の鯉の如きも、理に合はぬ話である。理窟なしに孝の犧牲的精神を鼓吹した童話的作品と解すべきである。【影響】江戸時代に於て、最も廣く行はれたものと云へば、「百人一首」(別項)の右に出づるものはない。「二十四孝」は勿論それに比ぶべくもないが、これ又人氣ものの一種であつた。前記の諸本の如き主なものではあるが、この外「二十四孝」の單行本及び節用・諸禮集等に收載されたものを擧げたら、かなり澤山なことと思はれる。又擬似本に就いて、その二三を擧げると、「釋氏二十四孝」「皇朝二十四孝」「對類二十四孝」、これ等は硬派に屬するものであるが、假名草子・浮世草子の類本には、「日本二十四孝」「本朝二十不孝」「今樣二十四孝」(各別項)があり、鳥居庄兵衞畫の繪本「本朝二十四孝」(別項)及び近松半二作淨瑠璃の同名本等は、いづれも有名なものである。なほ個々の話題に就いては、閔子騫の題材が、繼子いぢめの小說に作られ、唐夫人の話が說經節の正本に取入れられ、その他、王祥の鯉、孟宗の筍、郭巨の釜等が、小說の題材になつたことはいふまでもなく、彼の掘出し物の話が、今も坊間に行はるるを見ても、この書がいかに民衆的であり、又極めてその影響の大であつたかを知るに足る。それだけこの書が一般に感化を及ぼし、孝行奬勵に與つて力あつたことも認められる。併し目的のために手段を選ばず、親のためならどんなことをしても構はぬといふ、多少誤つた孝を抱かしめたことも否まれない。(水谷)

嵯峨本二十四孝（龍宮館蜂氏藏）

【參考】昆陽漫錄 青木敦書(百家說林正編上)○ねざめのすさび 石川雅望(百家說林續編上)○故事熟語大辭典 簡野道明

二十八宿 にじふはつしゆく 詩集 【著者】横瀨夜雨【刊行】明治四十年二月、金尾文淵堂。「新現代詩人全集」新潮社版第四巻所收【解說】「新月の巻」(二十四篇)と「夕月の巻」(十六篇)に分れてゐる。「新月の巻」には「花守」時代の作で洩れたるもの及びその後の作品。「夕月の巻」には、第一集の「夕月」から拔萃した作品を蒐めてあるが、大抵三十一二年頃の作である。その中に有名なる「お才」(三十一年六月作)もある。未だ民謠の新機運も動かなかつた時代に、唯一の民謠として珍しがられたばかりでなく、自ら婉轉たるリズムがあつたので、作曲されることなくして世に喧傳された。「お才」は作者自身の手によりて再三辭句に改訂を施されたが、矢張り最初「文庫」(別項)に發表されたのが好い。この作以來筑波は有名になつて、夜雨を指して筑波根詩人とさへ呼ばれるやうになつた。「お才」の外にも民謠がある。本詩集の樣式は「花守」と同樣二三篇の五七調を除いては七五調で押し通してゐる。用語も亦夜雨一流の典雅溫籍で、古語・近代語共に極めて洗練されてゐる。(河井)

二重母音 「母音」を見よ。

二條院讚岐集 にでうゐんさぬきしふ 歌集 【作者】二條院讚岐 【諸本】宮内省圖書寮に「讚岐集」と稱する寫本一巻がある。群書類從巻

二一九・續國歌大觀等所收。【內容】「靑柳の糸くる下枝は掃きてけり」の歌より「大かたに秋のねざめの露けくは」の歌に至る合計一百首の歌を收める。部立はない。各歌概ね前書を有し、歌合等の歌は「法輪」「賀茂の歌合」として一首あるのみ。この他、贈答による御製一首、三河內侍の歌一首、大殿三川一首、作者不明の歌二首の作を含んでゐる。この集の作者は、「千載集」戀二に選ばれたる「寄石戀」我戀は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間もなし」によつて、「沖の石のさぬき」と呼ばれたと傳へられる。この歌を初めとして、「雨の後のさなへ」名殘なく晴れぬめれども早苗取る田子の小笠はぬくよしもなし」の如く、平明流暢なれど着想に巧なる歌が多く、抒情味は豐かであつて、純叙景歌を多く見ない。又「形見を見て戀ふる、戀」そことだに知らせていにし我せ子が留むる笛の音こそなきぬる」の如く、ロマンチックな物語めくものもある。併しこの家集所收の百首は、作者の生涯のうち、早き頃の歌を集められたと見えて、「新古今集」に入れる十六首のうち、「明ぬれどまだ後朝になりやらで」の歌一首のみしか集中には見出せない。また「千五百番歌合」選入歌や、「千五百番歌合」の歌も見られない。「新古今集」の頃に、既に現在の體裁に纏められたものであらう。【價値】新古今時代の多くもない女流歌人の中で、家集の存するものは、僅かに「俊成卿女集」「小侍從集」「式子內親王家集」(各別項)等、數部に過ぎぬ點よりして、新古今時代和歌史研究の史料としても重要である。　（松浦）

二條家

にでうけ　和歌【名義】和歌史上藤原爲家(別項)の長子爲氏を祖とする歌の家筋をいふ。【沿革】俊成・定家二代に亙り中世初頭の歌壇に覇を稱へた御子左家(別項)は、定家の子爲家に至つて、その守舊的態度により其譲愈々固く、前々代よりの競爭者たる六條家(別項)も殆ど屏息して、歌壇の勢力を一手に掌握したが、その歿後、爲氏・爲教・爲相の三子各々家を立て二條(爲氏)・京極(爲教)・冷泉(爲相)の三家に分れた。而して二條家の爲氏と京極家(別項)の爲教とは同母兄弟ながら互に和せず、二條家對冷泉家(別項)の領地爭ひ起るや、爲教は異母弟の爲相(母阿佛尼)側に與みして二條・京極兩家葛藤の種を蒔いた。次いで爲氏の子爲世(別項)、爲教の子爲兼(別項)の代になると兩家の爭ひは判然歌壇の覇權爭ひとなり、折柄の皇統迭立の爭ひと結びついて、二條家は大覺寺統に、京極家は持明院統に支持せられて互に反目抬抗し、その間おのづから兩家の取との對立を見るに至つた。今日傳はる「延慶兩卿訴陳狀」(別項)は花園帝の延慶年間歌集勅撰の御企畫に關し、爲兼撰者に擬せられたるに對して爲世より異議を申し立て、爲兼これを駁したるに對して更に爲世より訴陳したる奏狀の抄出であるが、この中に兩家の相反する立場を最も如實に覗ふ事が出來る。爲世を初め二條家の立場は、爲家嫡流として父祖の庭訓を金科玉條視し、爲家の穩健正雅の歌風を宗としてこれより一歩も出でざらんとし、制禁の詞等をやかましく論じた。而して京極家が實平以往の風體に歸ると稱して病を避けず禁忌を憚らず、ただ世俗の詞を以て僅かに眼前の風情を詠ずる態度を以て、祖先の叢意に背き當道の陵轢を爲すものとした。この保守的消極的見解は、後世まで二條家歌學を一貫する信條である。自然その詠出する所の歌は平凡陳腐に墮し、何等清新の趣あるを認めることが出來ないのであるが、大覺寺統に庇護せられた同家は、京極家が爲兼の猶子忠兼がその本流閑院家に復して衰微したに對して なほ後まで榮え、勅撰集第十二の「續拾遺」より第二十の「新後撰」に至る九集中、第十四の「玉葉」を爲兼に讓り、第十七の「風雅」を花園上皇御自撰になつた外、殘りの七集を凡て自派から撰集した。鎌倉時代を經て南北朝時代に入るや、二條家は京都に止まつて遂に北朝に仕へ、爲定「新千載」、爲明「新拾遺」、爲遠・爲重兩人「新後拾遺」を編んだが、後、一門內に亂輕起つて遂に衰微絶家し、勅撰集最後の「續後古今」は、飛鳥井家の撰集する所となつた。

爲氏 ── 爲世 ── 爲道 ── 爲定 ── 爲遠 ── 爲衡
　├ 定爲(二條法印)
　　爲世 ├ 爲藤 ── 爲明
　　　　 ├ 爲冬 ── 爲重 ── 爲右
　　　　 └ 爲子

かくして二條家宗家からは、終始何等見るべき歌人を出さなかつたが、門下よりは屢々人材が現はれてゐる。先づ爲世の門人なる千種有房(別項)は、久我通光(別項)の孫で、二條家歌學を祖述した「野守鏡」(別項)を書き、南北朝に入るや頓阿(別項)が出で、二條家歌學の正統を受けて當時最も重んぜられ、家集「草菴集」(別項)の外、歌學書「井蛙抄」「愚問賢註」(各別項)を殘してゐる。「近來風體抄」(別項)を著はした二條良基(別項)も同家の歌學を傳へた者である。室町時代に入り二條家の學統愈々勢力を占め來り、堯孝より常縁(別項)に至つて所謂「古今傳授」(歌道傳授參照)なるもの始まり、宗祇・實隆等を經て幽齋に傳ふる二條家當流、宗祇より牡丹花肖柏に傳ふる「堺傳授」、肖柏より林宗二(以上人物各別項)に傳ふる「奈良傳授」等に分れ、その流れは近世前期頃まで歌壇の主潮をなした。(歌道傳授參照)【參考】日本歌學史 佐佐木信綱 ○鎌倉室町時代文學史 藤岡作太郎　（中島）

二條家俳諧

にでうけはいかい　俳諧【解説】俳諧興行の一特例。寛政二年、五攝家の一たる二條左大臣家に於て、義圃良基が連歌の權威で、筑波の道に干與した先蹤に則り、その九月十七日に、曉臺(別項)などを銅駝御殿に招いて百韻の連句を興行した。その日參殿した連衆は曉臺・月居・士朗(各別項)・桃睡・嵐月・麟路・湖奐・子當・晁明・之楓・蟲山・吳井・蜆楓・不木・素外・羅城・萬岱・蓬州・陶阿・蘇六・蓬洋・仙兒・毛條・桃里・辨二等で、執筆は五周・百池　臥央・明梟、香元は怡泉であつた。御所樣御名代として泰古、若御所樣御名代として廣明が着座して、重々しい光景の下に俳諧が興行された。次いで同年の十月十七日には高桑闌更(別項)を宗匠とする俳席があつた。連衆は闌更・車蓋・鏡翁・青牛・葵・月峰・古塘・宇遣・桃之・李昇・樂圃・松風・湖山・湖夕・蟠水・可計・乙路・幽明・月居・其成等であつた。同時に松岡青蘿(別項)も召されたのであつたが、翌三年の三月十四日、再び青蘿のための俳席が設けられ、青蘿は國府・布水・五栗・季南・瓜涼その他の人々と參殿した。同五年四月十二日には、二條東巖公の發句で、芭蕉百回忌追福の俳諧が行はれ、重厚(別項)・闌更・玉屑・臥央・士朗・羅城・車蓋・月峰・月居・百池等が句を繼いで滿尾した。二條家がかゝる特例を開いた可否は別問題として、當時の俳人は深くこれを榮譽とした。この俳諧興行に伴つて起つたのが、直德等が勅許と稱し、一世に誇耀した「花の本」(別項)なる稱號の復活である。卽ち約百年にして再びこの稱號を冠する俳人の出現を見たのである。併し二條家俳諧に宗匠であつた者が必ず「花の本」の稱號を允許さるゝとも限らないので、青蘿の如きはこれを得なかつた一人である。闌後の俳席を一括して表示すると、

文化六年成田蒼虬(別項)・文政七年淺呂何丸・同九年森郡樹・同年十丈・天保元年鳳巢・同十四年田川鳳朗(別項)・嘉永四年櫻井梅室(別項)・安政三年比良城林曹・同四年內海淡節・文久二年鳥鴬道・元治元年八木芹舍

の如くになり、芹舍以後は廢絶した。　（笠川）

二上峯

にじやうほう　隨筆　一卷　寫【著者】多賀常政(傳未詳。天明前後の國學者)【名稱】開卷第一に日向國臼杵郡高千穗の峯一名二上峯の記事を掲げたに據る。【解説】主として有職故實に係る考說の外、雅俗の風習、言語の原委、神道・和歌・史話等、凡て廣義の國學に關する雜話を集めたもの。所々に挿圖がある。卷末に、「右此二上峯一冊天明四甲辰年十一月十九日起筆、翌年乙巳三月十日書寫之功既成　多賀中原常政行年七十九歳雨誌之者也、昇樹情之一端也可秘藏賦」とある。本書は傳寫の少いものである。　（和田）

耳塵集

にぢんしふ　演劇書　二卷　續編一卷【名稱】「つたなき耳につもる塵の言葉」なりとの著者の言による。【成立】正德年中か。【諸本】古く「役者論語」(別項)中に收められた。新群書類從第三・國筆文學選集卷四・歌舞伎叢書所收【解説】「耳塵集」は金子吉左衛門(別項)の著で、主として坂田藤十郎(別項)の言行を中心に、當時の俳優達の逸事を雜纂的に述べたもの。「續耳塵集」(新群書類從第三所收)は民屋四郎五郎の著で、同じく坂田藤十郎を中心とした俳優言行錄で、中に金子吉左衛門に關する記述もある。坂田藤十郎の技藝上の意見・逸事等を知るのに「賢外集」(別項)と共に隨一の資料であり、而も又歌舞伎劇の本質檢討にも暗示に富む。「耳塵集」中の金子吉左衛門に就いての記述は、狂言作者史上の彼の地位を知るに有益な資料である。　（河田）

似繪

にせゑ　繪畫【解説】平安朝には傳神術なるものがあつて、唐風の影響で寫貌寫眞ともいふ。これが似繪であつて、肖像畫を書くのである。支那では古くより行はれたが、我が國にも藤原時代には著しく發達した。紫宸殿の障子に聖賢の像を畫いた如きで、初めは支那の聖賢を畫いたが、次第に我が朝の人物をも畫くに至つた。「牛馬にせゑ」といつて牛馬をも傳神の法を以て畫いた。卽ち牛馬の似繪である。「吉槐記」乾元二年正月二十六日、日吉社御幸餘下に「任經法眼、被召御前、書牛馬似繪一璜能事」と出てゐる。百濟河成は殿中で從者を探すために、その肖像を紙に畫いたといはれる。その他、隆能・隆信・信實などの名手が出て次第に發達し、當時の上流社會の晴好に適した。後世の似顏繪であるが、今日の肖像畫とは幾分か多少異なり、必ずしも細密に實物を摸寫することなく、人物の特徵となる顏面の輪廓を略畫的に畫いたのが多い。これにはなほ實在描寫と想像描寫とあり得べく、「中殿御會圖卷」(別項)は前者であり、「三十六歌仙繪卷」は後者に屬する。その後、鎌倉時代に至つて後白河天皇・後堀河天皇がこれを賞美せられた。「著聞集」に、「後堀河院御時似繪を御好ありけるに、北面下﨟御隨身などの影を左京權大夫尉永親その樣をもしらでなへらかなる白襖著て北面に侍ひけるがめしいだされける時、太刀を取てはきて參りたりける、いみじうなん見え侍ける云々」と見えてゐる。主なる作品は、「不貳鏡像」「源賴朝像」「三十六歌仙繪」「隨身庭騎繪卷」(別項)「大臣影」「後白河法皇御像」等である。足利時代には、「後醍醐天皇御像」「聖一國師像」の如きものがある。この時代には、從來の如く天皇・公卿にとどまらず、僧侶の肖像を多く畫いた。これを頂相といつた。師の像に讃を書いて拜するものが、甚だ多かつたのである。五山名僧の詩文集などでは、自己の肖像に讃を書いたことが見えてゐる。繫馬の屏風及び鷹の繪の生じたのも似繪流行の餘波と考へられる。足利末期から織豐時代にかけて益々盛んとなつた。藤原信實は似繪の上手とせられ、子の爲繼も亦、父業をついで似繪をよくし、その「紫式部日記繪卷」(別項)にも人物の面貌に、似繪の手法が現はれてゐる。寫生畫でも理想畫でもなくて、作繪の一種と見るべきであらう。「東鑑」に「關東射手似繪。仁和二年十一月二十七日、當將軍家御時、關東射手似繪可被圖之由、有其沙汰、今日以評定之次、先註其人數、自京都就被仰下、爲被進覽也」と出てゐる。江戸中期以後、芝居の隆盛と共に、文藝が一時に活況を呈した。繪畫では、役者に對する諸人の關心を巧みにとらへた似顏繪が大に流行したが、似繪からの趣向上の展開を見ることが出來よう。併し傍に市川團十郎などと書いてあるが故に、僅かに首肯される位のものに過ぎなかつた。然るに鳥山石燕は、淺草觀音堂に似顏繪を奉納したところが、よく似てゐるといふので好評を博し、勝川春章は版畫に多數の役者の似顏繪を作つた。又東洲齋寫樂は、俳優の渴仰する美なるものから醜なるものを摘發して痛快に罵倒した。これは所謂役者繪であつて、その個性を誇張したものである。これ等は似顏繪と呼んで似繪の流である。　（藤懸）

修紫田舍源氏

にせむらさきゐなかげんじ　合卷　三十八編百七十二册(合七十六册、未刊二編)【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【名稱】「修紫」は通俗物、擬ひ物の「源氏物語」の意である。この命名は、都の錦作「風流源氏物語」(別項)の序文の一節「田舍生立の振袖に似せ紫の下染をしらせ」に暗示を得たのであらう。【刊行】鶴屋板、文化十二年、初編。爾來累年出版。天保十三年、三十八編を以て終り、三十九編及び四十編は未刊行。【諸本】續帝國文庫・日本名著全集所收。日本名著全集所收本は原畫をそのまゝに飜刻、未刊の第三十九・四十編をも附載。【題材】「源氏物語」を室町時代の世界に移して翻案したものである。

桐壺の卷、初、二編。帚木、三編。空蟬、四編。夕顏、四・五編。若紫、二・六・七・八・九編。末摘花、八・十・十一編。紅葉賀、九・十・十一・十二編。花宴、二・十一・十二編。葵、二・十二・十三・十四・二十五編。賢木、十四・十五・十六編。花散里、十六編。須磨、十六・十七・十八・十九編。明石、十九・二十・二十一・二十二編。澪標、二十三・二十四・二十五編。蓬生、二十二・二十三・二十四編。關屋、二十四編。繪合、二十五・二十六編。松風、二十六・二十七・二十八編。薄雲、二十八・二十九編。槿、二十四・二十九編。少女、三十・三十一・三十二編。玉鬘、三十二・三十三編。初音、三十四編。胡蝶、三十四・三十五編。螢、三十五編。